

聖闘士 D x D

挫柳道

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原典とは全く別の人物（アノオトコ）が、『赤き龍』を身に宿した世界の物語。

現在（2019.7.1）、文章大幅修正中。

目次

 オカルト研究部へ ようこそ	
神崎孜劉	1
少女の悲鳴!	14
赤龍帝の籠手(ブーステッド・ギア)	23
アテナの聖闘士(セイント)	32
墮天使	46
はぐれ悪魔祓い	63
解き放て! 龍(ドラゴン)の波動!!	76
ドラゴン波です	97
シスター、拾いました!	111
三日月が紡ぐ縁	129
 学園壊滅のフェニックス	
メイドさん、やって来ました!	144
喧嘩、売買します!	154
眷属、募集します!	178
使い魔、ゲットだぜ!	193
ソーナの秘密!!	207
使い魔の森の魔獣!	231
汝が御銘は...	242
開戦! シリユーvsライザー!!	262
魔法少女☆ミルたん!	280

赤龍帝の鎧！	300		
決着！ドラゴンvsフェニックス!!			
315			
赤龍帝の逆鱗!!	338		
 一刀両断のエクスカリバー			
行け！駒王学園オカルト研究部!!			
359			
教会からの使者	376		
唸る聖剣！エクスカリバー!!	390		
唸る聖剣！エクスカリバー!!②(仮)			
404			
聖剣計画	419		
狂気のはぐれ悪魔祓い、再び！			
!!			
天使長ミカエルの受難	555		
	541		
!!			
白き龍！バニシングドラゴン・白龍皇	525		
決戦！コカビエル!!	511		
衝撃の真実!!	496		
!!			
皆殺しの大司教！バルパー・ガリレイ			
479			
コカビエル！戦を望む墮天使!!	464		
頑張れ天界勢	454		
黄金の誘(いざな)い!!	442		
Bello・Cancro			
428			

Extra Episode

①

停止空間のヴァンパイア 572

停止空間のヴァンパイア② 585

校庭崩壊の白龍皇

はぐれ悪魔討伐任務(但しシリュウ抜

き) 594

躊躇いと覚悟 606

墮天使総督!アザゼル!! 620

白と黒の猫姉妹 633

嵐の前の ほのぼの? 643

魔王降臨!(笑) 651

和平を結ぼうぜ 668

テロリスト襲来! 678

禍の団(カオス・ブリゲード)

694

2人のレヴィアタン!魔王vs魔王少

女!! 707

赤と白 723

この宿命の対決に決着を! 736

無限の龍神(ウロボロス・ドラゴン)

オフィス! 756

駒王協定 772

Extra Episode

②

first contact 782

戦慄の巨人!!	1275
怪獣大激戦!!	1261
開戦! ラグナロク!!	1244
悪神、再び!!	1226
オカ研の聖女さん	1207
覚悟と決意	1191
Combo	1180
Dangerous Supp	1163
!!	
女王(クイーン) vs 女王(クイーン)	1144
衝突! 聖剣 vs 聖魔剣!!	1129
CAT FIGHT	1113
GとDの悲劇	

戦う少女達!	1287
燃えろ小宇宙(コスモ)! 最強の必殺技!!	1311
駒王学園は、アナタを歓迎します!	1334
 Bonus Episod	
e)	
新学期です!	1349
赤と白、再び!	1372

オカルト研究部へ ようこそ

神崎孜劉

「は、放しやがれ、神崎！」

テメー、何時から生徒会や風紀委員と手を組んだんだよ!?」

「喧しい！この変態3人衆が!!」

私立駒王学園高校。

以前から、所謂セクハラ的行動で、全校生徒から不評を得ていた2年生の男子3人組、通称『変態3人衆』。

この日の放課後、生徒会と風紀委員、そして何処の部活や委員会にも所属はしてないが、その実力から、クラスメートである生徒会役員からの協力要請を受けた、2年生の男子生徒により、この3人が、女子剣道部の更衣室を覗いた現行犯として取り押さえられた。



「いや、神崎君、今回の協力、本当にありがとう。」

「どうしても、現行犯逮捕する必要があったのですが、この3人は なかなか素速っこい

ので…」

「いや、この手の輩は、俺も同じ男として、許せませんから。」

神崎と呼ばれた少年が、同級生からのブーイングを一蹴し、風紀委員と生徒会の役員から感謝の言葉を言われるも、それを当然の事と、全く意に介さない様に言う。

「まあ、本音言えば、困った顔した従姉妹に相談されて、自ら どうにかしようと思つた時に、俺が話を持ってきたからだよな（ゴン！）ouchi！」

「匙よ…貴様は一度、殴らんと解らん様だな？」

「殴つてから言ーな！」

拳骨を喰らい、脳天を両手で抑えて蹲りながら、匙と呼ばれた少年がツツコミを入れる。

「全く、お前が何を期待してるかは察しは付くが、ユキコは只の従姉妹だ。

それ以上でも以下でもない。

そもそも お前、俺に彼女いるのは知ってるだろうが？」

「それは知ってるが、お前がイトコンである事には、変わりg（ガン！）痛い!!」
追撃の手刀を脳天に貫う匙。

「はあ…大体、ユキコにはユキコで、他校に彼氏いるぞ？」

「な、何い？」

神崎君、それは本当なのかい？」

「先輩？」

この『カレシイルシ』発言に、今回の捕り物に参加していた、風紀委員の3年の男子生徒が、神崎に詰め寄る。

「どうやら彼の従姉妹とやらは、学園内でも それなりに評判が良いらしい。」

「…それで、ソイツは一体、どんな男なんだ？」

「匙、お前もか!？」

更には匙も便乗して、一緒に聞いてきた。

「やれやれ…まあ俺も、直接に会った事はないけど、聞いた話だと、中学の時のクラスメートらしい。」

野球やってて、何でも1年にして既に、1軍の控えピッチャーだとか…

会う度に惚気られてるよ。」

少しだけ呆れた様な顔で、話す神崎。

「…てゆうか匙よ、お前、お前ん所の会長さんが好き

「わーっ!!? テメーっ! この場で言ーなー!!

「んがが??」

学園内で、「生徒会役員」である匙元士郎と云う人物を知っている生徒ならば、当事者

の生徒会長を除けば、誰でも知っている事実。

その真実を言おうとした神崎の口を、顔を真っ赤にした匙が、慌てて止めに入った。「元ちゃん、もう良いでしょ?」

早く戻って、会長に報告しないと。」

「お、応…」

同行していた生徒会の女子生徒に嗜められる匙。

ついでに言えば、匙と一緒に従姉妹の事を聞いていた風紀委員も、同僚に抑えられ、この場は解散となった。

因みに件の3人組は、この後、生徒指導室に連行された後に、停学3週間の処罰が下された。

》》》

次の日。

「へえ?そんな事があつたんだ?」

「ああ、だから今日は、静かだったろ?」

昼休み時間の校舎屋上、フェンスに凭れ掛け、パンを食べながら話をしている3人の男子生徒。

神崎と匙、そして もう一人、端正な顔立ちをした、金髪の少年である。

「…それで、神崎君、前の話だけど？」

「木場、前にも言ったが、俺は『人間』を辞めるつもりは無いんだ。」

神崎に木場と呼ばれた、金髪の生徒が、話を続ける。

「ん、その件はね…」

リアス部長も言ってたよ。

残念だけど、今の部長の力量じゃ、現在 残った『駒』を全て消費したとしても、キミを『眷属』には出来ないらしい。

部長曰わく、キミを眷属にするには少なくとも、『魔王』様クラスの實力がないと無理だそうだ。」

「かぁーっ！おい、『赤龍帝』、お前、どんだけなんだよ？」

「知るかよ…。」

匙から赤龍帝と呼ばれた神崎が苦笑する。

「それにしても、『悪魔』ねえ…」

俺はグレモリー先輩や お前達に会う迄、全身真っ黒で、頭に角、背中に蝙蝠みたいな羽根を生やしてて、巨大フォークを持っているのを想像していたよ。」

「いや、それは偏見だから！」

神崎が、自分のイメージしていた悪魔像を話すと、彼に『悪魔』呼ばわりされた2人

が、声をハモらせて突っ込んだ。

「…それで、話を戻すけど、その辺りを踏まえて、もう一度、正式に話をしたいらしいんだ。

神崎君、今日の今日で悪いけど、放課後、部室に来て貰えるかな？」

「…OK、分かったよ。」

◇神崎 side◇

生まれた時から、この町に根を下ろす『人に非ず者』の存在は確認出来ていた。

ただ、その者達が、『人に仇なす邪悪な存在』かと聞かれたら、それは『否』と答える事になる。

生前…所謂『前世』と謂われる物の、当時の記憶と能力チカラを喪わないだけでなく、本当の『龍』までも この身に宿し、今の世に生まれ落ちた。

そして使われる漢字は違えど、生前と『同じ読み方』の名前を、今の両親より授かった。

更には、『悪魔』と呼ばれる者達との邂逅…

これは偶然なのか…

それとも、何者かの意図なのか…

……サン、もしかして これは全て、貴女の仕業なのですか？



「…それで、何故 お前も一緒に着いて着てるのかな？」

「会長が来いってさ。」

隣を歩くクラスメートの質問に、「メールが着た」と言わんばかりに、制服の上着ポケットからスマホを取り出して答える匙。

神崎と匙、2人が向かっているのは駒王学園旧校舎。

学園の正校門を背に学園全体を見据えた場合、西側角に位置している、木造2階建ての、白く塗られた外壁に赤い屋根。

正面中心の赤く小さな三角屋根の下には、今は使われてはいないが、嘗ては予鈴を鳴らしていたであろう鐘が、未だ吊られている建物だ。

この建物は現在には既に授業等には使われておらず、只1つの部活動の部室として、1部屋だけ活用されている状態だった。

その部員達が普段からマメに掃除しているのだろう、綺麗に磨かれた廊下を進み、『オカルト研究部』と書かれた札が掛けられている部屋の前で立ち止まると、

ガラ：

「失礼しまーす。」

その扉を開き、中に入っていった。

「やあ、神崎君、匙君。」

「……………」

部屋に入ると木場が、そしてソファーに座って羊羹を食べていた小柄な少女が、無言で会釈した。

「さあ、こっちだよ。」

木場に案内され、2人は部屋の奥に入っていく。

》》》

「来てくれたのね、ありがとう。」

「…神崎君、報告は聞いています。」

昨日は協力、ありがとうございました。」そこに居たのは紅色の長い髪の美少女…学園 No. 1 アイドルであり、オカルト研究部…通称『オカ研』部長のリアス・グレモリー。リアスと並び、『学園2大お姉様』の双壁を成す、黒髪をポニーテールで結った、正しく大和撫子の形容がが相応しい、同じくオカ研副部長の姫島朱乃。

そして、駒王学園生徒会長の支取蒼那と生徒副会長の新羅椿姫だった。

》》》

「あの…姫島先輩も新羅先輩も、こっち座ったら どうですか？」

あ、匙は、そこで立ってて良いから。」

「をゐっ!？」

今、オカ研部室の奥にある応接室では、2つ並んだ1人掛けのソファーに、リアスと蒼那がそれぞれ座り、対面にある3人掛けソファーに神崎1人が座っている。

そして朱乃、椿姫、匙の3人は、リアス達の後ろに立っている形である。

神崎には、別に美少女2人を両隣に侍らせよう等の下心は無く、単に座るスペースが空いてるのに、女性を立たせておくのは…という所からくる発言だったのだが、

「いえ、お気遣い無く。」

自分達の位置は、この場とばかりに、その申し出をやりわりと受け流す。

「それじゃ、そろそろ、話しても良いかしら?」

そう言うと、リアスは神崎が自分達の『正体』を知っていると云う前提で、話し始めた。

◇神崎 side ◇

「…そんな訳で、私達はアナタを敵に回したくない、アナタが私達の敵になつて欲しくないの。

これは、私達、駒王学園在籍でなく、冥界の…魔王様達の考えよ。」

「監視、拘束、或いは有事の際に、利用しようとしていると受け止められても構いません。

それでも、それを承知で神崎君に…赤龍帝に、私達の側に居て欲しいというのが本音

です。」

話の内容は要約すれば、「赤龍帝」である俺に、悪魔の側に着いて欲しいという要請だった。

グレモリー先輩も支取先輩も、その目は真剣そのもの。

敢えて此方の都合や悪魔側に着いた時のメリットやデメリットには一切触れず、自分達の要望だけをストレートに、ハッキリと言ってきた。

だから…

「俺の中にある『龍』の力が、様々な陣営を呼び寄せ、結果的に何処かの所属になってしまっただけは決まりならね…

最終決定の前に、互いに色々条件等を出して話し合う事になるでしょうが、基本的には『転生』無しが絶対条件なら、俺は別に先輩達の居る、悪魔サイドでも構いませんよ。」

…これが、『今の世を生きる』、俺が出した答えだ。

ガタツ

「ほ、本当に？」

俺の応えに、グレモリー先輩と支取先輩が揃って立ち上がり、身を乗り出してきた。

「ちよつと待って、神崎君？」

「朱乃？」

しかし、ここで姫島先輩が口を挟んだ。

「貴方の その言い方ですと、既に他の勢力からのコンタクトも有った様に見受けられますが、違いますか?？」

姫島先輩の この読み、実は正解だ。

1 週間前位から、本当に日を置いての入れ替わり立ち替わりで、他校の女子高生に始まり、大学生か社会人風な大人の雰囲気むんむんな女性、更には中学生…下手したら、小学生かも知れない様なロリッ娘に声を掛けられていたのだ。

》》》

「…でも、『人間』ではないのが、気配でバレバレでしたからね。

如何にも怪しいから、無難に言葉を濁してスルーしてたんです。

…いや、1回だけ、かなり泥沼展開になりましたが…」

そう言いながら、黒歴史を思い出したかの様に、遠い目をする神崎。

「「「「??」」」」

「あ、勿論バレてるのをバラしたりはしていませんよ?」

…だから、そういう事もあって、一番最初に正直に正体を明かした上で、接触してきてくれた先輩達の所かな…:てね。

そういう意味では、先輩達は信用出来ずからね。」

「あ、ああ…」

「…先輩？」

「ありがと~~~~~~~~つ!!!」

がばっ！

「ぶふあ?!ぎゆ、ぎゆれみよいーふえんふあい、にゆれ、にゆれ~~~~~!!」
「り、リアス!!」

更に続いた神崎の言葉に、感激したりアスが飛び付き抱き付き、その場で窒息死させるかの様な、公開顔面圧迫を展開させたのだった。

「クソ、神崎のヤロー！何て羨まけしからん事を…後で絶対に殴r

「匙?」

「…いえ、何でも無いです…。」

》》》》

3日後。

「改めて自己紹介させて貰う。

この度、オカルト研究部に入部させて貰う事になった、2年C組の、神崎孜劉だ。今後ともヨロシク。」

「あらあらあらあら、これは御丁寧に。

副部長の3年、姫島朱乃ですわ。

宜しく願いますわ。」

「じゃ、僕も。

2年A組の木場祐斗だよ。ヨロシクね。」

「…1年の塔城子猫です。

よろしく願います。」

オカ研新入部員の神崎の挨拶に、他のメンバーも応えていった。

そして、

「部長のリアス・グレモリーよ。

神崎君…いえ、これからはシリューと呼ばせて貰うわ。

ようこそシリュー。

オカルト研究部は、貴方を歓迎するわ!!」

少女の悲鳴!

「暇だな…」

私立駒王学園高校のオカルト研究部。

その実態は駒王町を陰ながら管理している悪魔の1柱(家)、グレモリー家の次期当主と、その眷属が活動する為の拠点である。

その部に、悪魔としてではなく、只の人間として?入部したシリユーは悪魔としての活動…本格的な望みを叶えるに応じた対価の取得は勿論、例えばシェア拡大の為のピラ配り等も免除、一応は形だけでもと、ある程度の時間帯迄は、部室に待機という事になっていた。

尤も最初の1週間は、部長のリアスや副部長の朱乃から、悪魔…冥界や他の勢力等の情報情勢事情を学んではいたが。

部室内の応接テーブルに、ノートや参考書を広げて宿題を片付けた後は、何をするでなく、アームチェアに体を沈め、スマホを弄っている毎日だった。

「…隣の空き部屋に、トレーニング機材でも持ち込むか?」

部長が戻ってきたら、聞いてみるか…」

1時間後、その部屋の掃除等を責任持つてこなすのを条件に、シリューはリアスから機材持ち込みの許可を受ける。

《《《

3日後。

「あら？シリューは？」

放課後、部室の応接兼ミーティング室に部員全員が集まり、御茶でもと思っていたら、約1名程不在。

「また隣の部屋じゃないですか？」

部室の隣、最早シリューの専用トレーニングルームと化した部屋。

リアスに機材持ち込みの許可を得たシリューは、様々な器具をテレポーションを使って持ち込み、その部屋は翌日には、ちよつとしたジムの様な完備になっていた。

「仕方無いわね？祐斗、悪いけど…」

「…あ、わたしが呼んできます。」

リアスが隣の部屋に居るであろう、シリューを木場に呼びに行かせようとした所、後輩である塔城小猫が自分ごと、先に茶菓子を食べていたのを止めて、立ち上がった。

「じゃ、小猫、お願いね。」

《《《

ガラ…

「シリユー先輩、居ますk…」

「ん？小猫か、何かあったのか？」

「……」

扉を子猫が開けると、其処には床に敷いたマットの上で、腹筋を鍛える如くな上体反らしをしているシリユー。

彼からすれば、突然の訪問者。

腹筋運動を一端止めて、何事かと起き上がって聞いてみるが、小猫は そんなシリユーを見ると、無言で固まってしまう。

ガラガラ…

「…？」

そして、やはり無言で扉を閉める小猫。

その後 彼女は、虚ろな目をしてフラフラと、まるで酔っ払いの様な覚束ない足取りで部室に戻ると、

「あら？小猫ちゃん？シリユー君は居なかったの？」

「は、はだ、はだ、はだ…い、いやああああああああああああっ!!」

「!!!」
「!!!」

絹を引き裂いたかの様な乙女の悲鳴を、旧校舎に響かせたのだった。
ガラっ!!

「な…何だ、今の叫び声は？」

小猫、一体何があった!?!敵か?」

そして その叫び声を聞き、シリユーも部室に駆け付けた。

…が、

「ひえっ!?!」

「あらあらあらあら…?」

「う…わ…」

「Ω—♂xox?。(。▽。(Ψ?と∩x∩??!」

パタン…

「ここ、小猫ちゃん?!」「小猫お!」

《《《

「…で、部長に滅つ茶苦茶説教された。」

「くくく…そりゃ、お前が悪いよ。」

翌日の朝、教室で昨日のあらましをシリユーが話すと、それを聞いた匙は、腹を抑え、必死に大笑いするのを堪える顔をする。

「お前なあ…耐性の無い女の子の前、上半身真っパって、普通にアウトだろ?」

昨日、小猫が呼びに行った時、上半身には何も身に着けず、トレーニングしていたシリュー。

その際に、結果的に二度に渡って見せられた、その上半身にわじこのはだか、免疫の無かった子猫はフリーズして倒れてしまう。

ついでに その時に巻き添えな感じで、小猫程ではないが、地味にダメージを受けたリアスからも、散々とOHANASHIされたのだった。

「いや、しかしだな、下はキチンとジャージを履いていたのだが?」

そもそも、全く身に覚えの無い、露出狂とか、露出癖を もう少し自重しろだとか、失礼な話だとは思わんか?」

「いや、お前、ギルテイ有罪。」

…ってか、お前、自覚無いかよ?」

「解せん。姫島先輩は、どうって事も無かったのだぞ?」

てゆうか寧ろ、目を輝かせてガン見してたぞ、あの人?」

「まあ、あの方は…な…」

…で、グレモリー先輩は顔真っ赤にしてドン引き、塔城さんに至っては、オーバーキルって訳か…」

「初^{ウツ}な悪魔^{ウツ}って…」

「だから、そーゆーのは偏見だつて…」



ガラ…

「ちやつす…」

「あ、シリユー先輩…」

「よつ、小猫、今から依^{クライアント}頼人の所に行くのか？」

放課後、シリユーが部室の扉を開けると、転移魔法陣を転開していた小猫が居た。

「…はい。」

シリユーの顔を見た途端、何かを思い出したかの様に、顔を真っ赤にして返事をする

小猫。

「大丈夫か？ 何だか顔が赤いけど、熱でもあるんじゃないのか？」

「え、？ だだだだだ…大丈夫です！」

「そつか…じゃ、頑張つて来いよ！」

「はい…行つて来ます…。」

良い笑顔でサムズアップするシリユーに小猫は頷くと、魔法陣が放つ光に溶け込む様

に、姿を消して行つた。

「…大丈夫か? アイツ?」

子猫が姿を消した後、改めて心配そうな顔をするシリユーだが、直後に「お前が大丈夫か」と、部室の奥側から2人の やり取りを見ていたりアスと朱乃から、盛大に突っ込まれる。

「アナタ、それなりに頭良いって聞いてたけど、もしかしたら1周回ってバカってゆるヤツ?」

「あらあら…シリユー君って、意外と天然なのですね。」

それとも、単純に鈍どんなのかしら?」

「…解せん。」

》》》

「ふう、思った以上に遅くなってしまったな…」

日も落ちて、電柱の街灯に光が灯る住宅街、シリユーは1人、家路を歩いていた。

この日は小猫が『仕事』から帰った後(何故か他校?の制服を着用)に、少しばかり長いミーティングが行われた。

『部活動』の報告だけなら、シリユーは別に参加する必要性は無く、直ぐに帰宅出来たのだが、今回は少し前に赤龍帝であるシリユーに接触してきたと思われる、他勢力についての話だった為、一番の当事者が参加しない訳には いかなかった。

墮天使…ね…

シリューがオカルト研究部に入部した時点で、他勢力と思われる者との接触があつた事は、リアスが冥界の上層部…魔王に報告していた。

そして今日の昼過ぎに冥界から、駒王町に墮天使の一派が潜伏している可能性の連絡があつたのだ。

シリューに正体を隠して言い寄ってきたのも、その墮天使達である可能性が高いとの事。

尚、組織ぐるみでの行動か、一部の者の独断での動きかは、現在確認中との事。

「おい、やつぱり戦いになるのかな？」

『ん？臆したのか？相棒？』

「いや、そうじゃないが…」

「どうやら」神は、余程俺を、戦いの場に引き込みたいらしいな。」

『フツ…【神】…か…』

「…？」

歩きながら、何やら小声で、左手に向けて話し掛けるシリュー。

それに対し、その左手の中に存在している様な『何か』が、直接、彼の精神の内に応える。

その声はシリユー以外には聞こえない為、端から見たら、左手相手に独り言、或いは妄想な会話をしている怪しい人、又はぼつちに見えなくもないが、幸いにも、この場面を目撃している者は居なかつた。

「その小僧…貴様、神崎孜劉だな？」

「!？」

そう、まるで待ち伏せしていたかの様に、電柱の陰から姿を現した、1人のスーツ姿の男以外は…

赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）

『いいや違う。俺は神崎孜劉じゃない。』

その息子の、神崎龍鋒だ。』

いきなり目の前に現れたかと思えば、如何にも自分に何か用が有ると言いた気な、シルクハットを被り、ロングコートを着込んだ中年男。

間っ違い無く碌な事じゃない、絶っ対に面倒事に巻き込まれるに決まってる!!

…そう直感したシリユーは、遠い昔の時代の、実の息子の名前を拝借して誤魔化そうとするが、

「巫山戯ているのか？貴様っ!!」

その返答にコートの男は怒りの表情を浮かべて襲い掛かってきた。

「ちいっ…やはり、息子は無理が有り過ぎたか!!」

せめて、『双子の弟』位にしておくべきだったか?」

決して『巫山戯ける』訳でなければ、ボケてる訳でもなく、『真剣』と書いて『ガチ』

と読む…本当に　そう考えながらも、男の繰り出す攻撃を悉く躲すシリユー。

そして、

「でえい!!」

ドスツ!!

「ぐはっ!?!」

自分の顔を狙った拳を捌くと同時に、男の鳩尾に、強烈な回し蹴りを突き刺した。

「ア、小僧お…」

予想以上…いや、予想外のダメージに、思わず膝を着くコートの男だが、そこにシリユーが追撃。

相手の立てた片膝を踏み台の様に駆け上がると、

「廬山龍戟閃!!」

ドゴツ!

「ぐわあっ!」

その歪んだ顔を目掛け、更に強力な膝蹴りを打ち込み、吹っ飛ばす。

「どうした、もう終わりか?…墮天使?」「!!」

面識無しにも拘わらず、自分の名前を知っており、問答無用で襲い掛かってきた男。

先程迄、部室でリアス達と話していた事に加え、最初に声を掛けられた時から感じて

いた、この男の内側から溢れる『人に非ざる者』の気配。

半ば、正体を確信していたシリユーが鎌を掛けてみると、男は何とも判りやすい、明から様に肯を唱えている様な顔で驚く。

「くっ…気付いていたか…！」

馬鹿め！何も考えずに、大人しく付いて来ておれば、苦しむ事も無かつたのにな！」
そう言つて男は立ち上がると、その儘 斜め後方に大きく跳躍…いや、飛翔すると、空中で静止し、

バサツ…

背中から、一対の巨大な漆黒の翼をこれ見よがしと、左右に大きく展開させた。

「チョっろ…！」

しかしシリユーは取り立て慌て驚く事も無く、あつさりとして正体を現した。その姿に呆れ顔で、溜め息混じりに目の前のドヤ顔な男に聞こえない様に小さく呟く。

「心配するな、まだ、殺したりはせんよ…」

今は まだな!!」

そのシリユーの呟きが、まるで聞こえてない男…墮天使は そう言うのと、何時の間にか手に握っていた光輝く槍…と云うよりは、槍の形をした光のエネルギー体を、上空から地上のシリユー目掛けて投げつけた。

バシユ…

「な…!?!」

「遅い!!」

しかし当然の如く、それを躲すシリユウ。

「ふっ…光の槍と言っても、それを放つ速度は、光速ではないみたいだな!!」

まるで「俺を倒したいなら、光速で撃つてこい」と言わんばかりな顔を見せたシリユウは、

「ならば此方も、本気を出させて貰うぞ！」

逝くぞ、ドライグ!!」

『応よ、相棒!!』

左腕を前に出した状態での、戦闘の姿勢を取り、

「赤龍帝の籠手!!」
ブーステッド・ギア

『Boost!!』

自身の『内に宿る者』との掛け声と共に、その左腕に、真紅の籠手を纏わせた。

それは無数の鋭利なパーツを鱗の様に、幾重にも組み合わせた様なデザイン。

その鉄甲の部分に埋め込まれているのは、碧色に光る宝玉。

それは全体的に重々しく禍々しく、所々に派手な装飾が施されている、肘から下、指の先まで腕半分を隈無く覆う真紅の籠手。

ブーステッド・ギア
赤龍帝の籠手…

嘗て”神”が造り出した、セイクリッド・ギア神器と呼ばれる奇跡の神具。

その中でも、遙か昔から最強最恐最凶と謂わしめた二天竜と呼ばれるドラゴンの一角である、赤き龍、『ウエルシユ・ドラゴン』の魂を宿し、セイクリッド・ギア神器の中でも『神滅具』と詠われる、文字通り、『神』です『滅』する事が出来ると謂われる力を秘めた、数少ない逸品。

「な…ば、馬鹿な!？」

只の神器持ちだと思っていたら、ロンギヌス神滅具…しかも、赤龍帝だとお!!？」

その赤い籠手を見た途端、堕天使は慌てふためいた顔を見せ、

「ちい、小僧、今日の所は見逃してやる！次は、逃げられると思うな!!」

堕天使の世界では分からないが、人間界では大方、三下が逃げる時に言う様な捨て台詞を吐き、空の彼方に飛び去って行った。

「さあ、いざバトル!」…と、意気込んだと思つたら見事にスカされ、その堕天使が三日月の向こう、夜空に消え往く様を、あつけらかんとした顔で眺めるシリユー。

その後、墮天使の気配が完全に消えたのを確認したシリューは、ズボンのポケットからスマホを取り出し、

「あ、もしもし部長？」

今 電話、大丈夫ですか？」

》

翌日の放課後、駒王学園生徒会室には、生徒会役員、そして、オカルト研究部の部員が集結した。

「この場に要る、皆が悪魔なのか……」

そう、生徒会役員とオカルト研究部……

シリューを除けば、そのメンバー全員が、純血、或いは『イヴイル・ピース悪魔の駒』による転生悪魔だった。

「皆さん、お疲れ様です。」

今回の生徒会とオカルト研究部との合同会議ですが、その……出席予定の方が、もう一人……来られて……ないので、もう少し待って貰えますか？」

駒王学園生徒会長であり、リアス、朱乃、そして一年生の とある一般生徒と共に、校内の男子生徒から、『学園きよぬー四天王』と云う、何とも有り難いのか傍迷惑なのか、そんな微妙な俗称を授かった4人の一角を担っている支取蒼那。

議長に相当するテーブルに座っている彼女が、慎重な面持ちで話すが、その口調はたどたどしく、落ち着きが無い。

明らかに何かに緊張、或いは動揺してるのが、丸分かりだった。

「生徒会とオカ研、全員揃っているが…

冥界から、誰か来るのか？

しかも、かなり偉い人？」

「ん。事が事だから、それは有り得るね。

だいたい ほら、前の机。

部長と生徒会長、如何にも間に もう一人、誰かが座る様な感じに1席空けて座ってるし。」

「会長の、あの緊張具合…まさかね…」

そんな風に端側の席に着き、ヒソヒソと話すシリユ、木場、匙。

「「!?」」

その時、一瞬にして、その場の『空気』が変わった。

常人なら気付く事の無い程度の違和だが、この場の『常人でない者達』なら全員、普通に感じ取れる空気の変化。

「結界…?」

それは『人払いの結界』。

生徒会室とその外の廊下の通りは、『気付いている者』以外は無意識に足を遠ざける様になり、そして気付いている者にしろ、その領域に足を踏み入れようとしても、強力な魔力障壁が、行く手を阻む。

単純な話、結界を張った術者よりも、『より強い力を持つ者』以外は、何人をも拒む空間となった。

ざわざわざわざわざわざわざわざわざわざわ……

僅かに　ざわつく生徒会室。

しかし、リアス、朱乃、そして生徒会副会長の新羅椿姫は冷静さを崩さず、

「はああ~~~~~」

蒼那は何か、諦めの表情で大きく深く、そして長い溜め息を零す。

そんな中、部屋を中心に、直径約5メートルの魔法陣が薄青い光を放ちながら浮かび上がり、その中から、

「ソーた〜ん！会いたかったよ〜！！☆」

ぱしーん！！

「きゃわん!?ソーたん、いきなり何をするのに〜?」

黒髪をツインテールに結び、まるでアニメの世界から飛び出してきたみたいなの……所謂

魔法少女の様な、水色を基調とした衣装に身を包んだ女性が飛び出て来たかと思えば、いきなり蒼那に抱き付かんとばかりに飛びつき、カウんターの…何処から取り出したのか、ハリセンのフルスイングを顔面に貰うのだった。

「…お姉様こそ、何、いきなり人に襲い掛かろうとしているのですか？」

「え〜？あたしがソーたんを襲う訳が無いじゃないの〜？」

あ、でも、別の意味じゃ、襲つちやうかも？☆（ぺしっ！）痛い!？」

ジト目&呆れ顔で「いきなり何をする」という蒼那の質問に対し、更に呆れさせる様な応えで返そうとする、彼女の姉らしき女性の脳天に、再びハリセンの唐竹割りが炸裂した。

「……………。

な、なあ匙、支取先輩 今、「お姉様」って言ってたけど…」

「応…あの御方が支取会長、いや、ソーナ・シトリー様の姉君であり、冥界四大魔王が一人、セラフォル・レヴィアタン様だ。」

「まさかとは思ったけど、本当に魔王様が直々に来られるとはね…」

アテナの聖闘士（セイント）

◇シリユースィデ◇

魔王降臨。

生徒会室に現れた魔王セラフオル・レヴィアタン。

：魔王という存在は以前、リアス部長から聞かされていたが、その1人が支取先輩のお姉さんなんて、聞いていなかったが？

そういう事は、かなり大事な事柄であると思うのだが…

兎に角、その魔王は現れる早々に、妹である生徒会長の支取先輩…ソーナ・シトリーとの『姉妹漫才』という名のじゃれ合いを暫くの間 披露すると、漸く満足したのか席に着き、

「それじゃ早速会議、始めよっか！☆」

何事も無かった様に言つてのけた。

「……………」

その場の誰もが、「既に早速ぢやねーよー」と、目の前の魔王少女にツツコミたい顔をしているが、相手が相手なだけに、何も言えないという顔をしている。

仕方あるまい。

一応、形式の上で、俺は現在オカ研所属、リアス部長の仮眷属という事にはなっているが、基本的に悪魔とは『主従関係』等は無いかからと、皆の代わりに声を大にして言ううとしたら、それを敏感に察知した、木場と匙に取り押さえられた。

「それじゃ、赤龍帝ちゃん、昨日の事を、改めて皆に説明して貰えるかな？☆」

せ…赤龍帝ちゃん…だと!?

一言、文句言つてやろうと思つたが、隣の男2人が「頼むから堪えてくれ!こーゆー人なんだ、察してくれ!」と目で必死に訴えかけてきた。

……………。

『こーゆー人』とやらは、さっきの漫才で、実は そんな気がしてたのだが…

うむ、支取先輩も大変だなあ…。

「それじゃ…初対面の人も居るので、改めて名乗らせて貰う。

赤龍帝…『人間』、神崎孜劉だ。

悪魔とは縁あつて現在、同盟…とも少し違うが、互いに有事には協力しあう関係に位置させて貰っている。」

「……………。」

あ、生徒会の女子、何人かの顔付きが、少し変わった。

…と、いうか、睨まれた。

俺が実は、転生悪魔でない、初めて知ったのだろうか？

その上での「人間」に対する種族差別か？

それとも、いきなり下僕とか、従属や隷属を否定し、悪魔と…例え魔王相手だろうと、『横』の繋がりをアピールしたのが気に入らなかつたのか？

支取先輩…こういう大事な事は、きちんとおかないと。

報連相は、大切ですよ？

因みに事情をきちんと理解しているオカ研の皆や匙は普通に…いや、木場と匙は苦笑いしている。



「皆、既に報せは聞いており、御存知なのを前提で話を進めさせて貰うが、昨夜…下校途中で墮天使に襲われ、結果、少しの時間だが戦闘となった。」

「「「「「……………」」」」」

昨夜の墮天使との経緯を説明し始めるシリユー。

「紳士風な身成りをした、人間で云えば、40歳代くらいの男の墮天使だった。」

恐らく最初は、俺を何処かに…アジトにでも拉致ろうとしたのだろうが、最終的にはその場で戦闘。

だが、俺が発動させた神セイクリッド・ギア 器を見た途端に、尻尾を巻いて逃げて行った。」

「ちよ…逃げたって神崎君、追う事は出来なかったの?」

此処で、生徒会の2年生の女子、巡巴柄が、まるで逃したのを咎めるかの様に質問して来た。

「ああ、追うと言うか、その場で仕留める事も出来た。」

「…だったら、何故?!」

「解らないのか?」

確かに今の俺は『人間』ではあるが、立ち位置的には一応、『悪魔』サイドに属しているんだ。

その俺が、いくら正当防衛成立しているからと言っても、他勢力の者を軽々しく始末するのは、芳しくないだろう?」

三竦みの事は、リアス部長達から聞かされて知っている。

だからこそ、敢えて深追いはしなかったんだが…これじゃ納得、出来ないかい?」

~~~~~!!」

三竦み云々故と言うシリユウの発言に、巡は それ以上、何も言い返せなくなる。

「…続けさせて貰う。」

巡を黙らせた後、シリユウは その やり取りが最初から無かったかの様に、話し続

けた。

「奴等は俺の事を、赤龍帝だとは思っていなかった様だ。

俺の神セイクリッド・ギア 器を見て、驚いた位だからな。

だが逆に言えば、今回の件で向こう側に、俺という存在がバレた事になる。」

「ん？赤龍帝ちゃん？キミは今、『奴等』と言ったけど、以前から声を掛けて来たって云う女の子達も、同じ堕天使だと睨んでいる訳？」

「ええ。この短期間に、そこまで複数の集団が一度に接触してくるなんて、有り得ないでしょう。」

何よりも、内側の人外の気配は、同一でしたからね。」

「成る程☆成る程…☆」

「それと、奴等は俺を、自分達の組織に引き入れようとする気は無かったみたいだ。

何しろ、いきなり殺しに来たくらいだからね。

どうやって知ったかは知らないが…恐らくは、俺が奴等や、この場にいる皆を、人間でないと見抜いた感覚と同じだろうが、兎に角、神器持ちである俺を危険視して消そうとしたのだろう。」

「いえ、多分、それだけではないわ。」

「部長？」

「ここでリアスが口を開く。

「シリユー…セイクリッド・ギア神 器というのは、基本的には人間だけに宿る、先天的な物だけど、後から別の者が それを奪い、自身に取り込む事は出来るの。」

別の人間だろうと、墮天使だろうと…悪魔でもね。」

「それは、初めて聞いたな。」

「そして、セイクリッド・ギア神 器を奪われた人間は…例外無く死ぬわ。」

「成る程ね…」

リアスの説明を聞き、今迄の墮天使の接触到、改めて納得するシリユー。

「だが、俺が赤龍帝だと知った今、この先どう動いて来るかは予測不可能だな。」

少なくとも昨日の奴は、俺の正体を知った途端に、怖れて逃げ出す様な雑魚だったからね。

もつと強い新手を送り込んで来るか、それとも不干渉を決め込むか…」

「お姉様、今後、赤龍帝と知っての上で、墮天使が神崎君に攻撃を仕掛けてくると思いますか？」

このシリユーの見解に、ソーナがセラフォルに意見を聞いてみると、

「あゝ☆それは流石に無いと思うよ〜？」

でも、墮天使総督なら、興味を持って、自らコンタクトしてくるかもね？」

「それは勘弁して貰いたいな…」

シリューからすれば、大迷惑な予測をしてくるセラフオルー。

「まあ、赤龍帝ちゃんの報告は、こんなもんかな？ じゃ、そろそろ本題☆」

「！！！！！！！！」

セラフオルーの言葉に、その部屋の学生達の顔が、一気に引き締まる。

「サーゼクスちゃんが、今回の墮天使の件、墮天使の総督…アザゼルちゃんに確認して貰ったんだけど、アザゼルちゃんと言うには『俺は知らん。下の奴等が勝手に動いてるのだろう。』…らしいよ☆」

「な…？ たった、それだけなのか!?!」

四大魔王の一人、サーゼクス・ルシファーが得たという情報量に、シリューは不満を露わにする。

「ん、さつきも言ったけど、アザゼルちゃんにキミ…赤龍帝ちゃんの話をしたら、間違い無く人間界こっちに来て、それこそ話がややこしくなるのは確かだからね☆

詳しくは話せないし、何しろ基本的には、種族レベルで殺し合う程仲が悪いからね、込み入って聞き出せなかつたらしいの♪」

「やれやれだな…」

「ん☆でも、裏を返せば、これは『そっちで勝手に始末しろ』って事だから…」

「次は殺つても、問題無いのだな？」

「そうなるね♪」

「……だったら！」

「リアスちゃん？」

「部長？」

「ここでリアスが立ち上がる。

「私達が管理している、この駒王町に勝手に入り込んでいるだけでなく、シリユーが…大切な仲間が攻撃を受けたのよ！」

これは もう、万死に値するわ…

居場所が判っているなら、迷わずに討つて出るべきよ！

レヴィアタン様、この地を管理する、グレモリーの名に置いて、此処に宣言させていただきます。

この町に潜む不埒な堕天使共を、私達が速やかに排除します!!」

「ん☆ん♪リアスちゃんなら、そー言ってくれと思うていたよ☆」

リアスの発言に、満足気な笑みを浮かべるセラフォル。

「ソータん、そんな訳で、今回はリアスちゃん達に任せても良いかな？」

「はい、今回の被害者は、一応はグレモリー家に所属な形の神崎君ですし、何より、その

神崎君が殺る気満々みたいですので…

…それと、お姉様？ソーたんは止めて下さい。」

「うゝゝ、ソーたんの いけずゝ☆！」

「ああ、殺る気に否定はしない。」

ソーナの言葉に、シリューは肯を示し、セラフオルーは項垂れる。

「それなら、先ずは墮天使の潜伏先を…」

「町外れの廃教会だよ。」

「「「「「ええっ?!」」」」」

シリューの その、答えを初めから知っていたかのような、リアスの言葉を待っていたかの様な発言に、その場の全員が驚きの声を上げた。

「アナタ、何で知ってるの?」

「…何時から…ですか?」

「確認したのは、昨日の夜さ。」

小宇宙<sup>コスモ</sup>を高め、集中力を研ぎ澄ませば、奴等の気配を探る程度は容易い。」

「こすも…前にシリュー君が言ってた、独特の魔力と闘気みたいな物でしたわね…」

「ねえシリュー?その気配とやら、具体的な人数とかは判らないのかしら?」

「ああ、それも昨日の内に、確認していますよ。」



先ずは、墮天使が4人。

昨日の男と、以前から入れ替わりで声を掛けてきた、女が3人。

それと、信者みたいな奴でしようか、普通の人間の気配が10人。

ただ、内1人の『気』は、かなり高い。」

「…本当に便利な能力チカラだな、おい?!」

「あはは…神崎君が味方で、本当に良かったよ。」

シリューの高性能サーチ能力に、匙は呆れると同時に驚き、木場は その頼もしさに、ほっと胸を撫で下ろす。

会議は その後も続き、少し前に駒王町で起きた、少しばかり異質な殺人事件と、墮天使との関連の可能性を話し合ったり…

そして墮天使が潜むという、教会への立ち入りは、今夜、深夜0時と決定。

この時点で、会議は一先ず終了した。

…が、

「それにしても、赤龍帝ちゃん…シリューちゃんって、本当に凄いわね☆！

ねえ、あたしの眷属にならない?」

「はい?」

ソーナの会議終了の挨拶と同時に、何を思ったか、セラフオルーがシリューをスカウ

トの声を掛ける。

「な……？れれれ、レヴィアタン様、何を、いきなり……？」

「ちよっ……？お姉様？」

「あたしの駒なら、シリユーちゃんでも転生出来ると思うんだ☆！

そうだなあ……戦車ルックと騎士ナイト、どっちが向いてるかなあ？♪」

テンパるリアスを後目に、勝手に話を進めようとするセラフォルー。

しかし、シリユーは、

「すまないが魔王レヴィアタンよ、以前、リアス部長達にも言った事だが、俺は人間を辞めるつもりは無い。

悪魔とは基本的には上下が無い、ファイファイ・ファイファイ50：50を条件に、協調路線を組んだんだ。」

セラフォルーの申し出を、あっさりとし蹴する。

そして、

「そもそも俺は、赤龍帝である前に、アテナ女神のセイント聖闘士。

俺が仕えるのは、アテナだけだ。」

「えっ!」「はい?」「え、えっ!?!」

次のシリユーの言葉に、会議室内の、3人の純血悪魔が目丸くし、

「し……シリユーちゃんて、口……○リコンだったの?」

「はあああああああああああああ〜っ!」

◇シリユースide◇

「シリユース先輩、サイテーです。

トーカーちゃんと お付き合いしてたのは、ロリオンを誤魔化す為の、カムフラージュ  
だったのですね?」

待て待て待て待て!!

違う! 誤解だ!!

おい、匙と木場、お前達も、さり気に距離を空けて遠ざかろうとするな!!  
レヴィアタンの誘いを断るのに、アテナの名前を出したのが失敗だった。

世界が変われば、理も変わるか…

リアス部長から説明して貰ったのだが、この世界に於けるアテナが まさか、『白いブ  
ラウスの上にクリーム色のベスト、紺色スカートな制服に、猫耳を模した様な青いニツ  
ト帽を被った銀髪の、見た目が小猫より背が少しだけ高い程度なロリ女神』だったとは  
…

おかげで突如として沸いた、ロリ疑惑。

「……………」

皆の視線が冷たい。

理論上、絶対零度以下の温度は存在しないと云われているが、それは嘘だ。

特に子猫と、先程、何やら言い掛かりを突けてきた巡を筆頭に、支取先輩と新羅先輩を除く、生徒会女子の視線が凄く痛い。

友よ：俺は今、正にお前以上の：絶対零度以下の凍気を体感しているぞ。

幸いにも この世界のアテナは、聖闘士や、それに似たような眷属を持つてはいなかった為、アテナはアテナでも、件のロリ神とは別の神だと、何とか無理矢理に納得して貰ったが：



「さあ、皆、準備は良いわね？」

「「はい!!」」

そして深夜0時、オカルト研究部の部室に転開された転移魔法陣の前に部員が集結。  
その転移先は、墮天使が潜伏しているとされる、町外れの廃教会…。

## 墮天使

深夜0時過ぎ、駒王町の町外れにある、廃れた教会。

オカルト研究部部室より、転移魔法陣を用いて、その正面門に推参したオカ研メンバー。

「う、おおお…」

「か、神崎君、本当に大丈夫かい？」

「あらあらあら、シリユー君が悪魔でないからか、それとも、シリユー君自身の体質なのかしら？」

門の前で地面に蹲り、項垂れるシリユーの背中を、木場がさすっている。

「うくん、まさかの転移酔いとはね…」

◇シリユーside◇

「ちちリユー先輩、大丈夫ですか？」

目がクラクラですか？

頭がグラグラですか？orzですか？

「うう…小猫、貴様、後で覚えてろ…!」

クツ！あの『アテナの聖闘士<sup>セイント</sup>発言で降って沸いたロリコン疑惑を、何とか払拭出来た代償に俺は、現在付き合っている彼女の容姿とも相成り、今度は少なくとも、オ力研と生徒会では、『きよぬー属性』と認定されてしまった。

いや、此方は あながち否定出来ないと言えれば出来ないが、これだけは言っておく。

俺はトーカとは別に、胸が大きいからと言う理由だけで、付き合っている訳では、断じてない！！

▼▼▼  
ま、まあ、要因の1つである事は、間違いないが…

▼▼▼  
シリユーにとっては初めての魔法陣転移。

悪魔ではないせいにか：転移空間の中、如何に聖闘士<sup>セイント</sup>と云っても、その肉体自体は生身の人間と変わらないシリユーは思う様に身動きが取れず、木場に肩を借りる形で移動し

ていた。

そして、視覚的にも体感的にも、上下左右の認識が出来ない歪んだ空間を進む中、その空間を抜け、現世に出た瞬間に、まるで乗り物酔いでも起こした様に、体調を崩してしまったのだった。

シリユー自身、正直に言って、少しばかり舐めていたのは否めない。

嘗て『嘆きの壁』から『エリシオン』を目指した時と同じ様な感覚だと思っていたシリユー。

しかし、その実は全くの別物だった。

「…さあ、皆、改めて行くわよー」

少しの時間が経ち、漸く快復。

このロスにより、オカルト研究部メンバーは、予定より約10分の遅れで、教会に入する事になる。

》》》

「…で、部長、どうやって中に入るつもりですか?」

「そうねえ…とりあえず、ドアには鍵が掛かっているから…」

「正面突破!!」

ばきいっ!!



「「「!!?」」」

朱乃の「どうやって入る?」…の間に、リアスが思案している中、シリユーは惑う事無く施錠されている玄関の扉を蹴破り、突入。

「「「ななな…!?」」」

「あらあらあらあら?」

呆気にとられながらも、リアス達が それに続いた。

「し…シリユーの お馬鹿ーっ!!」

あんなに派手に入ったりしたら、皆、起きちやうじやないの!!」

「…夜襲の意味が、ありません。」

「何を言っている!」

不意打ちなど、卑怯者のする事だ!!」

「お願いだから、卑怯者になつて!」

墮天使の部屋を探し走りながら、シリユーに文句たらつたらりのリアス達。

バキッ

「…っ!?!」

そんな廊下を走っている中、あの派手な侵入の際の大音に、何事だと驚き起きてきた、

寝間着を着た儘の男に対して、小猫が左ストレートを顎にお見舞いし、その場で再び眠らせる。

「なかなかのパワーだな…」

小柄な彼女からは、想像し難い場面を見せられ、思わず感心するシリユウ。

「小猫に使った駒は戦車<sup>ルック</sup>。」

その駒の特性で、あの娘は驚異的なパワーと防御力を得てるの。」

「へえ…?」

どたどたどたどた…

そして、この騒ぎを聞きつけ、

「部長、新手です!」

廃教会に、人知れず身を潜めていた、墮天使に従う信徒達が集団で押し寄せ、

「せえい!」

シユタ…

「かはっ…っ!」

侵入者に対し、銀の棍鎚で殴り掛かってきた1人の男に、木場が一步前に歩み寄ると、次の瞬間、脇に携えていた剣で一閃、床に平伏させる。

「木場、殺ったのか?」

「いや、峰打ちさ。」

「成る程、戦車ルックの小猫がパワーなら、騎士ナイトのお前はスピード特化という訳だ。」

「はは…よく言うよ、視えていた癖に。」

この攻防が引き金となり、教会の狭い廊下での、墮天使眷属とオカルト研究部との、戦闘が始まった。

…が、

「でやっ!」

「…えいっ!!」

「せい!」

それはシリュー、子猫、木場により、瞬時に収束。

「あらあらあら? 私の出番は、無かったみたいですね?」

バチ…

右手に帯びていた雷を消した朱乃が、少しだけ残念そうに呟いた。

「いや先輩、怖えーよ?!」

《《《

「この先かしら…」

恐らくは教会の責任者…神父の部屋と思われる。

その異様に天井が高い部屋で、地下へと降りる、隠し階段を見つけたリアス。

「さあ、行きましょう。」

リアスを先頭に、その階段を降りようとした。その時、

「死ねっ!!」

「「「「?!?!」」」」

天井から、黒い翼を広げた1人の男が、光る槍を構えて襲い掛かってきた。

「危ない、部長! ブーステッド・ギア!!」

『Boost!!』

ガキッ!

急降下しながら振りかざす、墮天使の光の槍を、シリユーが自身のセイクリッド・ギア神器、ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手を発動させて受け止める。

「くっ…貴様、神崎孜劉?」

「また遭ったな…!」

その男は前日、シリユーを襲った墮天使。

「くくく…この寂れた教会に殴り込みを掛けた輩が来たかと思えば、まさか貴様だったとはな…!」

そして、その貴様が悪魔…しかも、グレモリーの者と、共に行動しているとは!

くつくく…面白い！」

「ふ…今日は逃げないのか？」

殺気を込めた不気味な…自信に溢れた笑い顔で語る堕天使に対し、シリユーは不敵な顔で話し掛け、

ほん…

「この おチビちゃんは、かなり強いぜ？」

「むう…？」

小猫の頭に手を置いて、シリユーは更に言葉が続ける。

「昨夜は俺の正体を知った途端、ビビって逃げ出した奴が、今日は余裕だな？」

” おチビちゃん” 呼ばわりで少し頬を膨らませている子猫をスルーして、挑発じみた発言をするシリユーに対し、堕天使の男は

「え〜い、黙れ黙れ！昨日は少しだけ、驚いただけだ!!」

その不気味な笑顔を怒りの表情に一変、手に持った槍で襲い掛かってきた。

ガシッ！

その攻撃を受け止めたのは木場。

その両手で持っているのは、先程の日本刀ではなく、黒い刀身から妖しい黒き光を放つ西洋剣。

シユウウ…

「な…これは…!？」

互いの武器が交わった瞬間、墮天使の光の槍は、木場の持つ剣の黒い闇に喰われる様に、小さくなる。

「…光喰劍」  
ホーリー・イレイザー

僕の剣は、光を喰らう！」

「ちいっ！転生悪魔が！」

貴様も神器遣セイクリッド・ギア・ホルダーいか!!」

怒りを露わにする墮天使の槍を受け止めながら木場は、

「部長、皆、この墮天使は、僕が引き受ける！」

皆は先に、下に降りて！」

この場は任せると、他のメンバーは先に進む様に促す。

「…分かったわ、祐斗。」

「お任せしますわ。」

「信じています…。」

「じゃ、後でな。」

木場に、それぞれが声を掛けると、リアス達は、階段を駆け降りていった。



「まさか、大人しく皆を進ませてくれるとは、思ってもみなかったよ。」

「フーン！ 貴様を殺した後、挟み撃ちにした方が、効率的だと思つた迄よ!!」

ブウン…

そう言うのと墮天使は、光の槍を もう一本作り出し、木場に斬り掛かる。

タツ…

それをバックステップで躲し、改めて構えを取る木場。

「成る程、やっぱり あの下に、他の仲間が居る訳だ。」

「な…!?!」

「神崎君も言つてたけど、君って かなりチヨロい墮天使ひとみたいだね?」

「ななな…!?!」

恥ずかしさからか、一気に顔を赤くする墮天使。

「名乗らせて貰うよ。」

リアス・グレモリーが騎士ナイト、木場祐斗！

いざ、参る!!」

「ふっ、面白い、グレモリーの騎士ナイトよ！

ならば俺も名乗ろう！

我が名はドーナシーク!

至高の墮天使にして、貴様を殺し、貴様の仲間を屠る者だ!!」

先程の気恥ずかしさを誤魔化す為か、木場の名乗りに便乗し、普段では絶対に張らない様な大見栄を張った墮天使：ドーナシークが、両手に光の槍を携え、目の前の敵に向かい、飛び掛かった。

》》》

タツタツタツタツ：

リアス達が階段を降りた先は、建物の正面玄関を開けた先にある礼拝堂よりは小振りだが、それでも、それなりの広さを持った地下礼拝堂だった。

「ようこそ……グレモリーの皆さん。

そして……赤龍帝!」

そこに待ち構えていたのは4つの人影。

ボデイコンスーツを身に着けた蒼い髪の女。

ゴスロリファツションの金髪の女。

ボンテージ姿の黒髪の女。

皆、隠す事無く、墮天使の証である、黒い翼を曝し出している。

そして もう一人、白い礼服の上に黒い法衣を纏った、白髪の若い男。



「どうやら この男は、人間の様だ。」

「あらあらあらあら、皆さん、真夜中の訪問ですのに、揃って出迎え御苦労様。」

皮肉を込めた朱乃の言葉に、

「馬つ鹿か！馬鹿なのか？」

「つーか馬鹿だろ、オマエラ！」

真夜中だつつののに、あれだけ派手な音を立てて侵入された日にや、誰だつて気付くつての！

俺ちゃんの安眠、返しやがれ!!」

神父の格好をした、白髪の男が噛み付いてきた。

「大体、こんな時間帯に攻めてくるつてオマエラ、いくら糞悪魔だからつて、その辺りの常識も無いのかよ？」

特に、その2人！

その無駄に成長した、おおくつぶあくあーい!…ばつかりに栄養が行つちやつて往つちやつて逝つちやつて、肝心な脳味噌の方は すつからかくん…ですかあ？

あ、そつちの おチビちゃんは…ん、何かゴメンね…つて、おわつとお!？」

ガシャァン！

神父らしからぬ、下品な言葉を投げる白髪の男に、子猫がベンチを投げつける。

「あ…アツブねーなあ、いきなり何しやがるんだ、このチビ！」

テメーも一応 学生なら『人の話は最後まで聞け』って習ってるだろーがあ!？」

ベンチを躲した神父が、子猫に怒鳴りつけた時、

「フリード、少し、黙れ。」

「へ…へい、カラ姐さん。」

ボデイコンの墮天使が、これを諫めた。

「…どうでも良いが、互いに殺る気は満々なんだ。」

御託は良いから、さっさと始めようぜ？」

そして口煩い神父に呆れ顔のシリユーが、話を前に進めようと、切り出した。

「うふ…そうね、赤龍帝。」

せつかく、此処まで来たんだから、もてなてあげないとね？」

ザツ…

以前 会った時は、他校の女学生の姿をしていた、今はボンテージを着込んでいる墮天使。

立ち位置からリーダー格と思われる、その女の墮天使が それに応え、その場の全員が、それぞれ戦闘の姿勢を構える。

「…あのウザイ男は、俺が戦ります。」

リアス部長は あのボンテージ、姫島先輩はボデイコン、そして小猫は、あの ちんちくりんを「ちよつと待て！ちんちくりんって何っすか！

ひよつとして、ウチの事っすか!?!」

このシリューの台詞に、金髪の墮天使が、顔を真っ赤にして怒り出す。

しかしシリューは、

「喧しい！貴様の他に、一体 誰が居ると…言う…のだ!!」

「…シリュー先輩、何故、言い躊躇ったんですか？誰か、想像しましたか？」

これを逆に怒鳴り散らす。

…小猫にジト目で睨まれながら。

「大体、レイナーレ姉様がボンテージでカラワーナがボデイコンなら、ウチはゴスロリつて表現するのが流れじゃないッスか！

ウチが嫌いなんスか!?!」

「あー、そうだよ！」

「なっ…!?!何スか、それ？」

ウチがアンタに、何かしたっスか!?!」

「しただろ！」

「はあっ!?!」

2人の言い争いは続く。

「そっちの2人は兎も角、貴様は によりによってデートしてる最中に、『好きッス。ウチと付き合つて欲しいッス。』とか言つてきやがって！」

その後、凄く修羅場たいへんだったんだからな!!」

「「「「「……………」」」」」」

このシリユウの言葉に、空間が まるで時が止まったかの様に、静寂に包まれた。

「あぁー、無いわー、ミッテルトちん。

流石に、そ・れ・わ・無いわー。」

コクコクコクコク…

白髪の神父、フリードの台詞に、リアス、朱乃、小猫、そして残る墮天使の2人も、無言で何度も首を縦に振る。

「な、何スカ、皆の その反応わ!?

3人共、どっちの味方ッスか?」

「いや、敵味方関係無く、正しい・正しくないのケジメは付けておくべきだ。」

「か…カラワーナ〜?!」

四面楚歌に陥り、半泣き顔となった ちんちくr…小柄なゴスロリ墮天使ミッテルトを論そうとしてるのは、リアスや朱乃にも決して劣らない体躯をボディコンに身を包ん

だ墮天使、カラワーナ。

「赤龍帝よ……その件に対してだけは、何か部下の者が何と言うか、その……すまなかつた。」  
「レイナーレ姉様まで〜?!」

カラワーナには劣るが、それでも世の健全な男を墮とすには、十分な肉体をボンテージで纏ったレイナーレも、この事だけとは謝罪する。

「おい、そのイカレ神父、貴様さつき、深夜の襲撃に対して常識云々といっていたが、そういう発言は、身内の常識を正してから謂うべきではないのか?」

「うう……しいまちえくん……」

「フリ〜ドオ〜?!」

そしてシリユーの指摘に、敵ながらそれは正論だと、フリードも素直に頭を下げる。  
「そもそも俺は、お前みたいな女は好みじゃないから、あの時のアレは、無駄に修羅場つただけな行動だったかな。」

ピク……

「な、何スカ それは?胸ツスカ?

あの時の女みたいに、ぼいーんぼいんじやないと駄目とでも言いたいんスカ?

アンタはアレツスカ?

おっばい星人ツスカ!」

シリユートの台詞に、孤立化で凹んでいる、涙目なミツテルトが　また顔を紅潮させて怒り出した。

「いえ、違います。」

シリユート先輩は、おっぱいドラゴンです。」

「…小猫、後で話がある。」

…どうやら小猫のフォローは、シリユートの　お気には召さなかつた様だ。

# はぐれ悪魔祓い



ガキイン!!

「ひゃっはーっ!! 流っ石は赤龍帝〜!

強いザンスね〜(ガン!) うわらばっ!!」

祝福を受けた、聖火と聖水で鍛えられた、聖銀の短剣。

その刀身を媒介にした光の長剣を、フリードが振り翳すが、その一撃は赤い籠手に弾かれ、逆に今度は、シリユウのカウンターの拳を顔面に受けて、吹っ飛ばされてしまう。

先程の金髪墮天使を中心とした、コントさながらなやり取りが終わった後、一応は集団戦ではあるが、実質的には1vs1の戦いが4組、繰り広げられていた。

「約1名程、不安な人が居るのでな、早々に決めさせて貰うぞー!」

チラツと、墮天使と戦っている、他の仲間達の様子を見て、シリユウは宣言する。



「何時まで逃げられるのかしらね?!

お前は『もう許して下さい、お姉様!!』って泣きながら許しを乞う迄、痛めつけてや

るよ！

尤も その後、赦さずに殺すけどな！」

「くっ…!!」

カラワーナが仕掛ける、光の槍の鋭い突きの連打を紙一重で、朱乃は躲していく。ずばあっ!!

「きやあっ!?!」

しかし その槍が、遂に朱乃を捕らえた。

光の刃は、肌こそ届きはしなかったが、制服の左半分を斬り裂き、文字通りの半裸状態となる朱乃。

「ぬっほほ〜〜〜いっ!!」

見ろよ見ろよ見て見ろよ、赤龍帝え〜い!!

あのポニテな糞悪魔の お姉さん、左半分すっぽんぽくん♪だぜえ〜!

いやいやいや、後ろ振り向いた瞬間にい、ズツバアツ!…みたいな卑怯な真似は、しにやいから㍈(バキツ)どんきほーてっ!!」

紅い籠手と光の剣との鏝迫り合いをしていたフリードが、位置的にシリューを挟み、正面に立っている朱乃の霞も無い姿を見ると鼻息を荒らげ、眼福とばかりに目を煌めかせる。



そして他意は無く、純粹に男として、目の前の自分に拳を向けている男にも、『あの素晴らしい艶姿に祝福を』とばかりに誘いを掛けてみるが、その応えは渾身の右フックだった。

「またもや吹っ飛ばされてしまうフリード。」

「姫島先輩！」

此処でシリユーが振り返ると、そこには朱乃の姿はない。

「……姫島……先……輩？」

「あらあら、シリユー君？」

「私は此方ですわ♪」

「え？」

声が聞こえたのは、部屋の上の方。

そこには、悪魔の翼を広げた朱乃が宙に浮いていた。

「……………」

制服半分を斬り裂かれた半裸状態ではなく、白衣に緋袴、所謂巫女服を着用して。

「……チツ！」

誰にも聞かれない位の、小さな舌打ちをするシリユー。

「何々、何ツスカ〜！」

ウチに対抗して、コスプレッスかく?!」

「コスプレ? あらあら、とくんでもない。」

これが私の、戦いの装束ですわ。」

そして その姿に、金髪のコスロリ堕天使が何故か怒った顔で、指を差して叫ぶが、戦いの最中、余所見するのは良くないと思う…えいっ!!」

「きゃんっ!!」

相手をしてしていた小猫の前蹴りを、まともに浴びてしまう。

…スタツ

翼を閉じ、床に降りると、再びカラワーナと対峙する朱乃。

そんな朱乃にカラワーナは

「ふん! 喚装がどうした!」

そんなの、珍しくも何ともないわ!」

そう言いながら、またも、光の槍の連続突きを繰り出した。

《《《

「どうした、リアス・グレモリー!」

どうやら接近戦は、苦手みたいね?

だったら この儘、大人しく殺られてしまいなさい!!」

「……のっ！」

「あは♪危ない危ない♪」

レイナーレの光の槍の猛攻を、辛うじて避けているリアス。

この墮天使の言う通り、リアスは接近戦：格闘戦が実は得意ではなかった。

遠距離から中距離の間合いで放つ、魔弾の攻撃：それが彼女の得意とする戦法。

それを承知しているレイナーレは、距離を空ける事無く、執拗に詰め寄つての攻撃を繰り返していく。

リアスも魔力を込めた、徒手での攻撃を仕掛けはするが、その付け焼き刃の拳は、目の前の墮天使には、決して当たる事は無かった。

《《《

BANG!!

突如、地下礼拝堂に木霊する発砲音。

「き、貴様……」

「こやつははははははははははは……」

やつぱし素手にゃ、飛び道具つしよ〜？

教会（裏）の祝福を受けた、聖銀の弾丸！

糞悪魔だけでなく、糞悪魔に味方したり、糞悪魔に頼み事したりする、糞人間だって、普通に殺せやすくない！」

何時の間にか、フリードの左手には、金と銀の装飾が施された、シルバーメタルの拳銃が握られていた。

ぼた：

シリユウの頭部から、血が流れ落ちる。

フリードが至近距離から不意に放った銃弾を、シリユウは辛うじて直撃は避ける事が出来るも、顛を掠めてしまう。

「銀の弾丸だと…貴様、まさか!？」

そしてシリユウの顔が、怒りの表情に変わる。

別に、いきなりの銃の使用に対して、卑怯者呼ばわりするつもりも、それによるダメージで、キレた訳でもない。

前日の生徒会との会議の中で話上がった、数日前に駒王町で起きた殺人事件。

被害者は、アパートで1人暮らしをしていた、23歳のフリーターの男。

それは玄関や外側の窓等は鍵が掛けられた中の、密室状態での犯行。

両手を大きく広げた、まるで十字架を象る様に、天井ギリギリの高さで壁に張り突けにされた死体には、無数の刃物による刺し傷や斬り傷。

そして、直接の死因と思われるのは、眉間への銃撃。

ニユース曰わく、死体からは、その眉間だけでなく、合計5発の『純銀製の弾丸』が体から摘出されたと言う。

「あゝ、アレですか〜？」

そつおでーつす！アレは俺ちんが、犯人どえ〜つす!!」

悪びれる事も無く、あつさりと自分の犯行だと、フリードは認める。

「だってだって、だあつ〜てよ、仕つ方無えじゃんよ？」

ありや、糞悪魔に お願いする糞人間なんだからよ〜お！

…殺されて、当然じゃね?…つてか、糞悪魔ぶつ殺すだけでなく、そーゆー輩に お仕置きしちゃうつてのも、俺ちんの仕事ですからーっ!!」

「ああ、その人が、悪魔と契約していたのは、俺も知っているよ。」

元々、近所との人付き合い等も良く、その周辺からも、明るい好青年と云うイメージを持たれていた被害者。

ちよつとした見栄を張つた事により、近所に住む中学生の家庭教師を務める事になった被害者だが、高校卒業の学歴、しかも決して当時も優等生であつた訳ではない彼がこなすのは、少し無理があつた。

そんな彼が喚んだのは、ソーナの眷属の1人の大学生。

この人狼悪魔から、家庭教師に足りうる学力を持つべく、彼は毎晩の様に、先に勉強を教わっていたのだった。

「ん〜な事情なんか、知らねっつーの！」

どっちみち、糞悪魔に頼ってる時点で、アウトだろーがよ！ばきゅーん!!」

B A N G ! B A N G !

イカレ神父…その形容がピッタリな、舌をだしての歪んだ嗤い顔で、引き金を引くフリード。

しかしシリューは、今度は完璧に銀の弾丸を躲すと、

「でえやあ!!」

ぶうん…

左手…ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手による拳の一撃を繰り出すが、

「いや〜ん、怖い〜!!♪」

それを巫山戯た口調ながら、ギリギリでフリードは躲す。

「あ、ーっ！もう、まっぢ、意味不明なヤツだな！」

糞悪魔と契約する様な糞人間殺って、何が悪いんですかあ〜?…だっつの！

納得出来る様、3行で説明しやがれ!!」

余りにも真面目過ぎ、自分とは対極の存在と感じられるシリューに対し、フリードが

鬱陶しそうに吠える。

「黙れ！俺には分かるぞ！」

貴様は それを口実に、単に殺しを愉しんでいるだけだろうが!!」

「にやつは♪バレてた? (≡▽≡)」

悪魔祓い：『神』の名の下に、教会（表）から悪魔や、それに与する者を断罪するのが

本来の役割。

だが、その断罪、即ち殺害行為そのものを好み遂行する異常性危険性により、教会を追放された者も少なくはない。

そして その者達の多くは このフリードの様に、墮天使サイドに身を寄せてはぐれ悪魔祓い”として、正義と称して殺戮を愉しんでいた。

「をいおる、先に言っとくがな、俺っちは こー見えて、一般<sup>バンペー</sup>人にや、手エ出しちやいね  
くぞ?」

で、もー一回聞くがよ? 糞人間殺つて、何が悪いんだ?

結果的に世の為人の為、ついでに俺ちんの為になつちやつてるだろうがよ!」

「黙れ! 結果的には どうであれ、仮に それが悪人だとしても、己の欲求と快樂の為人の命を奪う等、それは決して許される事ではない!!」

バサア…

シリユールの咆哮が地下礼拝堂に響くと共に、駒王学園の制服のブレザー、ワイシャツが宙を舞った。

「な…」

「ひいつ?」

「あらあらあらあら…」

「へえ?」

「…ハア、またですか。」

「ぶはあつ! 眼福眼福!

脳内保存、脳内保存ツス!!」

その様を見て、様々な反応を表す、悪魔と堕天使の少女達。  
そして、

「な…? おおお、オメー、何いきなり脱いじやってんの?

無いわーってか、引くわー。

もしかして露出狂の気でも あるんじゃねーのk (ドカツ) あじやつぶわーツ!!」  
シリユール怒りのハイキックが、フリードの側頭部にヒットした。

◇シリユールside◇

「フリードフリードオーオっ!!」



バキツ!!

「ぎゃわん!!」

ダウンしたフリードに、俺は追い討ちを仕掛ける。

別に、あの『露出狂』という言葉にキレた訳では、断じてないぞ!

「部長! 皆!!」

「木場?」

そこに、木場が駆けつけて来た。

「木場、あの墮天使は?」

「……………」

俺の質問に、木場は全身ボロボロになった制服の右脇腹部分を抑えながら、流血した跡があり、ボコボコになっている…最早「学園2大イケメン」の一角が形無しな良い顔で微笑みかけ、親指を上に向けてのサムズアップで返してきた。

かなり、苦戦したみたいだな。

スチャ…

「神崎君、助太刀するよ!」

黒い剣を構える木場だが、

「俺は大丈夫だ! 少し休んでろ!!…と、言いたいが、お前は部長のサポートを頼む!

正直、部長が相性的に、一番キツい！」  
ガァイン！

光の剣と赤い籠手を交える俺が木場に指示を出すと、

「…分かった。また、後で！」

「ああ、後でな！」

木場は、堕天使と交戦しているリアス部長の許に向かって行った。



「…それにしても、神崎君は何故、上半身裸だったのかな？」

# 解き放て！ 龍（ドラゴン）の波動！！

「…えい！」

ボタン！

「きゃああつ!!」

ゴスロリの金髪墮天使、ミツテルトの光の槍の投擲を躲した小猫。

直後、その低い身を、更に低くした姿勢で一気に距離を詰めると、片足タツクルでダウンを奪い、マウントポジションを取る。

そして、制服のポケットから取り出したオープンフィンガーグローブを両手に嵌めると、

「…私は！アナタが死ぬまで！殴るのを止めません！」

冷たく言い放った。

「……………」

その静かな迫力に、顔を引き攣つらせるミツテルト。

「ええ〜とお、ギ、ギブは無しっスかあ？」

って、ゆーかあ！ギブギブ！ 降参ッス！

ギブするツス!!」

「…だが、断ります。」

「い、いやあああああ~~~~!!…ツス!」

》》》》

「雷よおっ!!」

バリイッ!

朱乃が天高く右手を掲げると、その右手に雷が墮ち、その雷は その儘、まるで帯の様に朱乃の右手に纏わりついた。

朱乃は その手を、自分の目の前で跪いている墮天使、カラワーナに向ける。

「うふふ…さあ、覚悟は宜しいかしら?」

「あわわわわ…ひいっ!」

身を包んでいたボディコンスーツは既にズタズタに引き裂かれ、見方を変えたら全裸以上に官能を誘う様な体軀を、恐怖に脅え、まるで自らを庇うかの様に抱き締め、ガタガタと震わせるカラワーナ。

「も、もう お許し下さい、お姉様!!」

既にプライドも何も無く、只単に、眼前の敵に惨めにも泣きながら命乞いをする、只の雌と成り下がった墮天使に、背中に悪魔の羽を生やした巫女装束の少女は、

「あらあらあらあら?」

もう お仕舞いなの?

もう少し、抗って欲しい物ですわあ?

そ・れ・に・同・じ・事・を・言・わ・れ・た・時・、・ア・ナ・タ・は・赦・し・た・り・:・す・る・の・か・し・:・ら・?」

「ひいひいひいひいっ!!」

バチバチバチ:

迸る雷を帯びた右手は前に差し出した儘、悦に浸った妖艶な顔をし、何か物足りなさ

そうな顔で、左手の人差し指と中指を舌嘗め摺りするのだった。

》》》

ガアン!

「おいおい、あの糞悪魔の姉ちゃん、少し怖過ぎやしねーか?」

いくらグレモリーの女王クイーンだからってよお、キャラまで弩Sな女王様く!である必要性

は無えだろうがよ、おい!」

シリューの左拳を白銀色の拳銃でガードしたフリードが、まるで自分が、女王の責め苦を受けているのをイメージしたかの様な、今にも泣き出しそうな顔をして話す。

真剣に怖がっているのか、通常の巫山戯過ぎた口調と比べたら、かなりマトモな喋り方だ。

それに対してシリューは、

「ああ、姫島先輩だけは、絶対に怒らせない様にしよう…」

やはり真剣に、そう言う他になかった。

》》》

「死になさい、リアス・グレモリー!!」

「…!!」

ガキイン!!

「…お待たせしました、部長!」

「ゆ、祐斗!?!」

レイナーレがリアスの脳天目掛け、光の槍を振り下ろした瞬間、突如として現れた木場が、2人の間に分け入り、ホーリー・レイザー光喰剣で光の槍を受け止めた。

「ええ、助かったわ、祐斗…って、何、アナタ、傷だらけじゃないの、大丈夫?」

「すいません、あの墮天使、予想以上に手強った物ですから…」

「あ、あの墮天使って、まさか!?!」

貴様、ドーナシークを殺つたとしても言うのか?!」

既に全身ポロポロの体を押して、己の主の前に駆けつけた木場と、それを心底心配そうに気遣うリアス。

その2人の会話を聞いたレイナーレが、驚きの声を上げる。

「彼のシルクハットでも、持ってくれば良かったのかな？」

「ぎい…貴様…!!」

信じられないという顔のレイナーレに、微笑みながら木場が応えると、レイナーレは今度は顔を歪ませ、金髪の少年を睨み付ける。

「部長、僕が前衛に立ちます。」

部長は隙を突いて、『滅びの魔力』を!!」

「え、ええ、分かったわ!」

リアスが数歩、バックステップで後退すると同時に、木場がレイナーレにダツシユからの、闇を纏う剣での斬撃を仕掛ける。

例えば女だとしても、堕天使…敵に対して微塵の容赦の無い、鬼気迫る顔での猛追に、レイナーレは一瞬だが怯んでしまい、光の槍でのガード一辺倒となってしまう。

しかし、木場の持つ剣は光ホーリー・レイザー喰イザイ剣。

互いの武器を交える度に、レイナーレの槍の光は木場の剣の闇に喰われ、徐々に小さくなっていく。

「ちいー!」

たまらず黒い翼を展開し、空中に回避するレイナーレ。



小さくなった槍を木場に向かって投げつけると、己が魔力を集中させ、先程より強大な光の槍を生成、反撃の構えを見せる。

…が、

チエツクステ

「…王手よ。」

「な…!?!」

そのレイナーレに、リアスが右掌の前に作った、巨大な深紅の魔法陣を掲げていた。「く、くそーあと数日後には、あの女が この町に着いていたのに!」

そうすれば、そうすれば、私は至高の堕天使になれたと云うのに…! アザゼル様…シエムハザ様あああーっ!!

》》》

「まあくじえくっ?!?!姉さん達、全滅う?」

ドーナシークの旦那も、上で殺られてるみたいだし?!!」  
シリユーと攻撃を交わしながら、思わず絶叫するフリード。

○子猫 v s ミツテルト ●

(マウントパンチ)

○朱乃 v s カラワーナ ●

（雷撃）

○リアス（&木場） vs レイナーレ ●

（滅びの魔弾）

○木場 vs ドーナシック ●

（??）

既に一緒に戦っていた、3人の墮天使の姿は無く、只、地下礼拝堂の床には、無数の黒い羽根が散乱しているだけだった。

「おーい、赤龍帝？」

ボスも殺られちゃったみたいだし、もう俺ちん達が殺り合う理由なんt

「この攷劉、貴様の様な外道を この儘放っておくつもりは無い！」

「でっすよねっつ？」

そーゆーと、思っていましたっ!!」

後ろ盾を失った今、自分からすれば、これ以上の戦闘：殺し合いは無意味だと、休戦を持ち掛けるフリード。

だがシリューは どうあっても、この快樂殺人者を赦す心算は無く、これ以上の犠牲者を出さない為に、この場で確実に斃し、決着させる気にいる。

事情が事情なだけに、普通に殺人犯として、警察に突き出したりする訳にはいく筈がないのだ。

「ちつくしよー、この糞露出魔があー！」

テメーが その気なら、俺ちんだって!!」

B A N G B A N G !

「きやつ!?!」

「「「ぶ、部長!」」」

フリードの放った2発の弾丸は、礼拝堂奥中央の、キリスト像の心臓部、そしてリアスの足下に着弾する。

それぞれが請け負った相手を倒し、残るはフリード1人。

これを全員で一気に攻撃し、終わらせようとしていたリアス、オカ研メンバーだったが、シリューが基本的に1vs1を重んじる聖闘士セイントの性さがからか、それを拒否。

それに従い、その勝負の行く末を見守っていたリアスが不意に狙われ、その場の…シリューを含む全員の注意が、リアスに向けられた瞬間に、

「これ以上、やってられっかつのー!」

フリードは懐から、ソフトボール程の大きさの球体を取り出し、

B O M B !!

「ケホツ…何なのですか、この煙は？」

その場で床に叩き付けると、小さな爆発音と共に、瞬く間に辺り一辺、濃い煙に覆われた。

タツタツタツタツ：

「じゃあな、赤龍帝…い！」

あばよ、ばいびー、しゃいなら〜!!」

何者かが階段を駆け上る音が、出口の奥から聞こえたと思えば、既に、不意ながら聞き慣れてしまった、巫山戯た口調の声が聞こえてきた。

実はシリユーと交戦中も、いざとなれば直ぐに逃げられる様、部屋の出口近くで戦っていたフリード。

この男からすれば、それが功を奏した形となった。

「くっ…逃がさん!!」

煙が立ち込める中、シリユーも階段に向かおうとした時、

ぼと…ころころ…

階段の上側から、直径約3センチ、長さ約30センチの筒棒が転がり落ちてきた。

その先端に付いている線は、パチパチと小さな火花を散らし、

「い、い、い、い、い!!」

DOGGOOHN!!

派手な爆音と共に、大爆発を起こした。それは周囲を破壊し、階段へ繋がる出口を完全に塞いでしまう。

「クソ、逃げられたか…まさか、ダイナマイト迄持っていたとは…」

未だ晴れぬ煙の中、シリューは悔しさと怒りを顔に隠す事無く、呟くのだった。

◇シリュー side ◇

「…シリュー先輩、1人だけ誰も倒せなかったからって、凹まないで下さい。

誰も、そんなの気にしてませんから。」

「犯○ぞ?」

「トーカちゃんにチクリます。

あと、カンちゃんにm

「すまん。」

小猫よ…彼女や従姉妹の名前を出すのは反則だぞ…

「はいはい、その2人、兄妹喧嘩は後にしなさい。

それからシリュー?

どうでも良いから、早く服を着なさい!

正直、目の やり場に困るのよ!!」

いや部長、別に兄妹じゃないです。

服については…すいません。

…尚、俺が戦闘中に脱ぎ捨てた制服を拾って袖を通して時、姫島先輩だけは名残惜しそうな顔でコツチを見ていたのは、気のせいだという事にしておく。

いや、俺は何も見えていないし、何にも気づいていない。

そういう事しておく。

「…あの はぐれ悪魔祓いを逃したのは残念だけど、一応当初の目的であった、町に巢喰う堕天使の殲滅は果たせた事だし、今日は もう、帰りましょ。

皆、今夜は お疲れ様。」

俺が制服を着終えると、リアス部長は そう言つて皆を労いながら、帰り支度とばかりに転移魔法陣を転開し始めた。

でも、俺は、

「…部長、俺はテレポーションで戻りますよ。」

「シリユー?」

もう転移酔いは、こりこりなんだよ。

「この魔法陣は元々、グレモリー家の者と、その眷属悪魔しかジャンプ出来ない仕様だから、その辺りで、きつと無理があつたのね。」

部長：…それ分かっていて、最初は同行させたんですか…？

「それじゃシリューは もう、直接自宅に飛んでも良いけど、どうする？」

「そうですね、それなら御言葉に甘えて、直帰させて頂き m (バギアツ!!) …!!?」

「わ…キリスト像が…!!」

「な、何なのですか？」



一段落着き、この廃協会を去ろうとしていたオカ研メンバー。

しかし その時、礼拝堂のキリスト像が いきなり大音を立てて崩れ落ち、その中から、黒に近い紫色の流動体が、ドロドロと流れ出てきた。

その流動体は赤紫に発光し、ブクブクと泡立たせると、そこから黒い靄の様な物を吐き出しながら、まるで意志を持っているかの様に、リアス達の方に流れ動く。

…いや、明らかに意思を持ち、オカ研メンバーを狙い、突如として動くスピードを上げ、常人と変わらぬ大きさのキリスト像の中に埋め込まれていたとは思えない、質量保存の法則無視な巨体が襲い掛かってきた。

ビチイツ

「…スライム…ですか？」

「ちい、あのイカレ神父の置き土産か!!」

フリードが逃げる直前の発砲の内の1つは、確かにキリスト像に命中していた。

単にリアス：或いは他のメンバーを狙った弾が外れたと思われた一撃は、実はキリスト像の中に潜んでいた、コレを突き付けたのだと理解するシリユー達。

「……のっ!!」

液状の身体の一部を弾く様に飛ばしながらの攻撃を避けながら、木場が反撃とばかりに己の剣の間合いに飛び込むが、

しゅわわ…

「うつく…!?!」

このスライムの体から出ている靄に触れた途端、その場で膝を着き、蹲ってしまふ。

「木場!」

この直後、木場は慌てて駆けつけたシリユーによって、回収される。

「皆、気を付けろ!あの靄は、猛毒だ!!」

「接近戦は危険ね。」

小猫、シリユー、あなた達は下がってて!

朱乃、2人掛かりで吹き飛ばすわよ!!」



「はあい部長！…つて、シリユー君？」

シリユーの言葉に、遠距離からの飛び道具…即ち魔法による攻撃がベストと判断したリアスが、朱乃とのコンビネーションで撃破を狙おうとした時、それよりも速く、シリユーが飛び出した。

コスモ小宇宙で身体全身にバリアを張り、猛毒の靄を物ともしないシリユーは

「でえい！」

ズバア！

「ちい、駄目かー」

ブラステッド・ギア赤龍帝の籠手による、一撃を放つが このスライムの液状ボディには、全くと言って良い程 手応えを感じられない。

どうやら、普通の物理攻撃は、殆ど無意味な様だ。

寧ろ、このシリユーの場合、籠手にも小宇宙コスモを纏わせていたから平気だったが、普通の生身での攻撃は、恐らくは酸性の物質で形成されているボディの前に、逆にダメージを受けてしまうだろう。

》》》

「…絶対に あり得ません。

スライムが こんなに強い訳ないです!!」

「ああ…全くだ!」

「2人共、ゲームの やり過ぎよ!」

言った当人達は至って大真面目な心算なのだが、端から聞いていると どう見てもボケていると思えない様な発言に、リアスが思わずツッコむ。

「そ、それにしても、私の滅びの力が効かないなんて!」

「私の雷撃も、効果がありませんわ!」

このスライムの特性なのか、恐らくは体全体から発してる赤紫の光が魔法の類の攻撃を緩和してららしく、下級とは云え、堕天使を一瞬にして消す程の力を秘めた、滅びの魔力が殆ど効果を成していない。

全くのダメージ無効という訳ではないが、大幅に その威力を削られており、朱乃の雷撃は、既に問題外の域である。

「部長、祐斗先輩も心配です。

この場合は撤退すべきでは?」

この小猫の意見も、

「駄目よ、今 私達が逃げたりしたら、コイツは外に出て、町が滅茶苦茶になるわ!

コイツの体なら、あの瓦礫の間も簡単に通り抜けられる!」

リアスがフリードのダイナマイトで破壊された、出口を指差しながら言う。

スライムの攻撃。

スライムは、体の一部を千切るかの様に周囲に撒き散らし、オカ研メンバー全員にダメージを与えると同時に、

しゅわわああ…

「きやあ!？」

「あらあらあらあら?！」

「む…?！」

「なあ!？」

そのスライムの欠片は何故か、女子部員だけの服を溶かしてゆく。

バサアツ

「と、とりあえず、部長達は下がって!」

「え、ええ…」

「了解ですわ。」

「…はい。」

つい先程、着直したばかりのブレザーとワイシャツを脱ぎ捨てながら、少しだけ顔を赤くしたシリユーが目を逸らしながら、リアス達の前に立つ。

因みに木場は、まだ毒のダメージが抜けておらず、後方で待機状態の戦力外だ。

「スライムの分際で生意気です…」

下着姿の小柄な白髪の少女が、自身の慎ましい胸を両手で隠しながらボソツと呟く中、実質、動けるのが唯一自分のみとなったシリユーが、再び攻撃を仕掛けた。

「廬山龍飛翔！！」

龍を象る鬨気となった小宇宙<sup>コスモ</sup>を身体全身に纏い、まさしく龍そのものとなったシリユーが特攻。

ズサアツ！

この攻撃はスライムの巨体に自らの身体を埋めたかと思えば、次の瞬間、文字通りにスライム本体を突き抜ける。

グロロロロ…

！！

この攻撃で、今迄、リアス達の魔法攻撃を含めて、如何なる攻撃に対してもアクションの無かったスライムの体から、唸り声の様な音が立つ。

否、それは紛れもなく唸り声。

原生生物その儘な姿。

前後左右の概念が無い筈の体の中に、目の様な光が2つ灯り、無数の巨大な牙に口、そ

してブラックパープルの半透明な体の中に、様々な臓器の様な器官が形成されていく。そしてそれは、シリューを敵、或いは捕食対象と認識したのか、その巨体をまるで津波の様な形に変えて、覆い被さるかの様に襲い掛かった。

その大波に浚われ、包まれるシリュー。

「シリューー！」

「シリュー君！」

「シリュー先輩！」

リアス達が叫ぶ中、スライムの体内でシリューは、

「パワーアップな心算だったのだろうけどー！」

普通の人間なら、摂り込まれた瞬間に消化されるのだろうが、小宇宙で身体をガードしている為、その身を溶かされる事はない。

そして その体の内から、目についた臓器の1つに、小宇宙による闘気弾を放つ。

『グロロロロロロロロ〜っ!!?』

内部からの攻撃だからなのか、魔力でなく小宇宙による攻撃なのか、明らかに苦しむかの様な、蠢き声を上げるスライム。

生物的には新たに臓器等を生成すると云うのは、確かに進化、パワーアップなのかも知れない。

だが、シリューからすれば、それは弱点を公開した事と同義に、他ならなかった。

「フィニッシュだ!行くぞ、ドライグ!」

『おおつ、相棒!“アレ”をやる気か!』

「ああ、ぶちかますぜ!!」

スライムの体内から抜け出したシリューがフィニッシュ宣言と共に、自身の中に宿るドラゴン…赤龍帝ドライグに呼び掛ける。

『Boost!!』

それに対しドライグも、赤龍帝の籠手の能力の1つである、『倍化』を発動させて応えた。

シリューが構えを取る。

両足を やや広く開き、右足を一步、前に踏み出し、左脇を引き締め、肘を曲げて前に向けた左拳に右掌を重ねた。

そして…

『Boost!!』

「ドゥ…」

その姿勢から、小宇宙<sup>コスモ</sup>と魔力を高め、集中させながら呟きだした。

「ラ…」

カッ：

高めた小宇宙<sup>コスモ</sup>と魔力に反応し、左手の籠手に嵌め込まれた碧の宝玉が輝きだす。

「ゴ〜：」

更には木場のブレザーを勝手に拝借した小猫が隣に立ち、同様なポーズを見せて声を重ねていく。

これには思わず、吹き出しそうになってしまうシリユー。

「??？」

因みにリアス達は、何が起きたのか、何が起こるのか解らない様な、啞然とした表情で、この2人を見ている。

「ン〜：」

そして最大級に溜まった小宇宙<sup>コスモ</sup>と魔力の全てを左手の赤い籠手に集中、左拳を被せていた右手で左手首を掴み、

『Boooooostおっ!!』

「波あっ!!」

左拳を思いつきり、前に突き出した。

カアッ!!

その瞬間、シリユーの拳から放たれる、聖闘士としての小宇宙<sup>コスモ</sup>と赤龍帝としての魔力

が融合された、破壊のエネルギー波。

その光る波動が、目の前の巨大な異形の怪物に直撃すると、怪物は断末魔を揚げる間さえ無く、跡形も無く、その場から消えて無くなったのだった。



## ドラゴン波です

「な…何なのよ、今の？」

私の滅びの力とも、違うみたいだけど？」

シリューが放ったエネルギー波は、リアス達が斃した墮天使同様に、スライムを死骸すら残らずに消し去った。

その技の事を問い質すリアスに対し、

「ドラゴン波です。」

「え？今、何？」

「ドラゴン波です。」

シリューと小猫が、声を揃えて答える。

今から約30年前、少年漫画誌で連載され、アニメ化にもなった『ドラグ・ソボール』というコミック作品がある。

その迫力あるバトル描写とドラマ性に、連載が終了しても、未だに人気が衰える様子は無く、数多くのスピンオフ作品が描かれ、アニメも幾度となく、再放送やリメイク版が放映されていた。

シリューや子猫は、所謂この再放送世代ではあるが、かなりこの作品を気に入っていた。

そしてドラゴン波とは、この作品の代名詞とも云える、主人公の必殺技である。

作中にて、主人公・空孫悟が体内の精神エネルギーを放ち、敵を倒していたのをシリューは模倣、小宇宙<sup>コスモ</sup>や魔力を用いて自己流にアレンジ、自身の技としていたのだった。

「…因みに私は、ツルリンとブッコロが大好きです。」

「いえ、そんなのは聞いてないから…」

シリューを差し置いて、技の説明と共に、作品について少しばかり熱く語る小猫に、少しばかり呆れるリアス。

「とりあえず部長、此処を出しましょう。」

祐斗君も心配ですし…」

そんなリアスに、朱乃が話し掛ける。

「そうね…シリュー、さっきは直接、家へ帰っても良いって言ったけど、やっぱり悪いけど…」

「了解。その制服、返して貰わないといけませんね。」

「そ、そうね、そうよね…」

スライムの粘液によって服を溶かされ、ショーツ1枚だけの姿になったリアスはシリューのブレザーを、そして巫女服の下には何も身に着けていなかった朱乃は、ワイシャツを羽織っているだけの状態だった。

「よこしよ……」

毒に侵され、未だ倒れている木場を小猫がお姫様抱っこし、リアス達は魔法陣で部屋に向かつて転移する。

そしてシリューも1人、テレポートで部屋へと向かつて行った。

》》》

「部長、一先ず祐斗君は大丈夫ですわ。」

「ありがとう朱乃、御苦労様。」

「……………」

部屋のソファーに横になり、静かに寝息を立てる木場。

戦闘の後、部屋に戻ったオカ研メンバー。

女子部員は部屋に常備してある、リアスの予備の制服に着替えた後、朱乃はソファーに寝かせていた木場の手を取り、指先に唇を添えると、直接に体内に侵されている毒を吸い出していた。

朱乃の言葉に、一安心という表情を見せるリアス。

「シリユー先輩、羨ましいとか思っていないませんか？」

「馬鹿者、別に何とも思っていない。」

朱乃が木場に施していた『治療』を、初めの一瞬、やや引いた感じで見ただ後は、それから視線を逸らしていたシリユー。

そんなシリユーに、リアスの：全然サイズが合っていない、ダボダボ感全開な制服を着た子猫が話し掛ける。

「あ、トーカちゃんに何時もして貰ってるんですよ、シリユー先輩、不潔です。」

「大馬鹿者！トーカとは まだ、そこまでな関係には なってない!!」

この小猫の台詞に、顔を赤くして、必死に否定するシリユー。

「へ〜？ そうなんだ〜？ へ〜？」

「あらあらあらあら？」

此処に木場の容態の無事を確認し、余裕が出てきたリアスと朱乃が、会話に混ざってくるのだった。

…凄く悪い顔よをして。

「じゃ、ドコまで進んでるのかしら？」

「興味ありますわ〜。」

「絶対に〇。ふばふ位は、させて貰っている筈です。」

何しろ ちちリユー先輩は、おっぱいドラゴンですから。」

「ま、っ!？」

「し、シリユー君、そうなんですの?」

「い…いい加減にしろ、貴様等ーっ!!」

《《《

「原子を破壊する?」

「ああ、それが聖闘士セイントの闘法の基本だ。」

一通り、シリユーの弄りを終えたリアス達は、先のスライムとの闘いについて話していた。

リアスの滅びの魔力でさえ、殆どダメージを受けなかったスライムに対して、有効打を与えていたシリユー。

あくまでも仮説だと前置きして、シリユーが説明する。

「部長の滅びの力というのを、俺は完全に理解している訳ではないが、所詮は強烈な破壊力を外からぶつけ、削っていくだけの物なのだろう。」

「「んんん。」」

「しかし、聖闘士の技は、そんな表面的な物でなく、その物質を形成している原子を破壊する所にある。その違いだな。」

「…よく解りません。」

「実際、一番最初に放った普通の一撃は、俺も殆ど手応えを感じなかった。」

シリユー曰わく、只単に拳を撃つのではなく、小宇宙<sup>コスモ</sup>を高める事で放つ一撃により、表面破壊でなく、その奥側、敵の身体を形成している原子その物を砕く…

その概念に基づくと一撃が、今回の様な、半液状な肉体を持つスライムに対しても、物理的ダメージを与え、倒す事も可能である…と。

尤も、今回の決まり手は、魔力込みのエネルギー系の攻撃だったが。

「小宇宙<sup>コスモ</sup>を燃やした聖闘士<sup>セイント</sup>の拳は、空を撃てば空を引き裂き、大地に放てば大地を崩す。敵の身体が、個体な場合は勿論、液体だろうが気体だろうが関係ないんだ。」

原子その物を破壊するんだからね。」

「つまり、シリユーって、例えば霧<sup>ミスト</sup>系の魔物も、拳で倒せるって事なの？」

「ああ、所謂『小宇宙<sup>コスモ</sup>を燃やして物理で殴れ』ってヤツだ。」

「……………」

びゅ~~~~~

部室内に、絶対零度の寒風が吹き荒んだ…様な錯覚に陥るリアス、朱乃、小猫。

「…先輩、滑りましたね。」

「喧しい!!」



「ちよつと小猫ちゃん、起きなさいよ、もう直ぐ先生来るよ?」

「塔城さん、起きて?」

「ふみや…トーカーちゃん、カンちゃん、あと30時間…」

「…ダメだ、こりゃ。」

結局は殆ど夜が明ける迄、部室で話していたオカ研メンバー。

リアスは木場の様子を見るという事で、その儘部室に残り、残る3人は、一時帰宅して、殆どその直後に改めて学校へ…と云った形になった。

教室に入り、自分の席に着いた途端にボタンキユー、眠りこける小猫。

ホームルームが始まる前、前後の席のクラスメートが起こそうとするも、子猫に起きる気配はない。

「むにゃ…しりゅーせんぱいわ、ろしつきよー!…」

「はい!?!」

そんな中、何気に とんでもない事を寝言で言い出す小猫。





「すいません…ってか先生、近い近い近いです…」

顚に血管を浮かべ、全然笑ってない目で嗤いながら顔を近付ける、20代半ばの担任女性教師（独身）の迫力の前に、圧されるシリユー。

「お前、後で職員室に來い。」

「は…はひ…」

顔を引き攣らせ、項垂れるシリユー。

「くくく…腹筋割らせるなし…」

その2つ後ろの席で、腹を抱えて笑うのを我慢しているのは匙である。



コンコン…

「シリユー、入って良い？」

放課後、オカルト研究部の部室の隣、既にシリユーのトレーニングルームと化している部屋の扉を、リアスがノックする。

「部長？大丈夫ですけど？」

シリユーは特に入室を拒否する理由もなく、リアスを入れようとするが、  
「…シリユー？アナタ、きちんと上に、シャツが何か着てるでしょうね？」

「着ています!!」

やはり『前科持ち』は、信用が無い様だ。

》》》》

「アシスタント…ですか？」

「ええ。小猫の お得意様なんですけど、貴方の事を話したら、貴方とも一度、話してみたいと言われたって今、メールが届いたの。」

「この住所なんだけど、今すぐに飛べないかしら？」

「そう言いながら、リアスが差し出すメモ紙を受け取るシリユー。」

「この住所は…分かりますね。」

「大丈夫、飛べますよ。」

「そう言うシリユーは、部屋の窓を開けると、体を一筋の光に変えて、外に飛び出して行った。」

》》》》

「駒王町内にある、とある2階立てアパートの駐車場に張られた、認識阻害の結界の中に立つ、3つの人影。」

「ドゥラ〜ゴ〜ン〜…波あつ!!」

ど〜おっ!

「掛け声と共に、赤い籠手を纏った少年の左拳から放たれた光弾が、夜空に浮かぶ三日

月に吸い込まれた。

パチパチパチパチ…

「おお…ブラボー…っ!!」

それを見て、髪の高い細身の男が、感動しながら拍手をする。

「凄いよ、神崎君!」

小猫ちゃんから話は聞いていたけど、期待以上だったよ!」

◇シリユースィデ◇

「いや、本当に素晴らしい物を見せて貰ったよ!」

流石は、小猫ちゃんの先輩だ!」

「ははは…」

…この人は森沢さんと云って、子猫の契約者の1人である公務員だ。

この前は、ナントカってアニメキャラの制服を子猫に着せて、お姫様抱っこをして貰ったらしい。

小猫が昨夜、廃教会から転移する際の、木場を抱きかかえた時の手慣れた感は、コレだったのか…。

そして今回、召喚に応じた子猫が、彼と今夜の依頼…格闘ゲーム「ドラグ・ソボールV」覚醒の超「ソイヤ人」の対戦プレイをしている時に、俺がドラゴン波を放てるみた

いな事を話したら、「一度、見てみたい!」：な流れになり、俺の臨時出張と相成った訳だ。

俺や子猫みたいな再放送組と違い、リアル世代ド真ん中の森沢さん。

俺の、”生”ドラゴン波を見て、凄く感動していたよ。

因みに俺の事は、赤龍帝とか聖闘士とか言えば ややくしくなりそうなので、『諸事情で個人契約が所得出来ない悪魔』と云う風に、子猫が説明していた。

森沢さんも、「悪魔の社会も、大変なんだねえ」と、それで深くは聞く事無く、納得してくれた。

》》》

「皇帝様、マジにカツコ良過ぎだよね。」

「うで先生、マジ神ですよね。」

「神崎君、キミは あの『神殺の処刑台』とかは出来ないのかい?」

「あれはリアルじゃ、無理過ぎですよ。」

その後は俺も、対戦ゲームの相手をしたり、ドラグ・ソボールを始め、『コン蕪マン』等、様々なゲームやコミック談議で盛り上がった。

因みに コレ等は全て、小猫の評価に繋がるらしい。

▼▼▼

「シリユー先輩、今日はいきなりで、すいませんでした。」  
「いや、俺も楽しめたから。」

依頼人の森沢と別れた後、小猫はシリユーに対して、突然の呼び掛けを謝るが、シリユーはそれを全く気にしてない様子。

ㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿ

「!!」

そんな時、小猫のガラケーが鳴る。

P i …

「しもし…あ、部長……………」

……………はい、先輩も、一緒にいます。

……………はい、分かりました。」

「…何かあったのか?」

どうやらリアスからの連絡らしく、何かとシリユーが聞いてみると、

「隣の倉庫街に、はぐれ悪魔が逃げ込んだらしく、朱乃先輩と祐斗先輩も、現場に向かうそうです。」

「…で、俺達も出向くと云う事か!」

「…はい。」

…と、云う事らしい。

「よし、それなら、一気に飛ぶぞ！」

がば…

「きやう?!」

そう言うと、いきなり子猫を お姫様抱っこするシリユー。

「……急時なのは理解しますが、凄く慣れてる感じがするのですが？」

何時も誰かサンに、やっているとしか思えませんが。」

「…敢えて否定はしない!!」

そう言うとシリユーは、ジト目の小猫を抱えた儘、隣町を目指し飛び立った。

《《

それから約1時間後、全長約3呎の紫色がベースの斑模様をした、五芒星を象った様な本体に、老人の顔を張り付けた様な異形の悪魔に、シリユーのドラゴン波が炸裂するのだった。

## シスター、拾いました！

あの墮天使との戦いから、4日が過ぎた。

しかし、オカルト研究部、そして生徒会の面々は、未だ緊張を解いていない。

墮天使レイナーレが、リアルに滅される際に、発した言葉…

くそ！あと数日後には、あの女が この町に着いていたのに！

そうすれば、そうすれば、私は至高の墮天使になれたと云うのに…！

あの台詞からするに、そろそろ『あの女』と呼ばれた者が この駒王町に来るかも知れないのだ。

もしかしたら既に、町に潜んでいる可能性もある。

尤も、レイナーレ達の敗北により、町に来る事自体を取り止めたと云う線も、考えられるのだが。



「…只今、冥界の諜報部にも探って頂いておりますが、墮天使と繋がりがあると思われる

者が、駒王町に入ったという報告は有りません。」

生徒会室にて、生徒会執行部とオカルト研究部が集まっている中、生徒会副会長の真羅椿姫が、現状を話す。

「積極的に見回りを…とは言いませんが、日常で もし、怪しいと思われる人物を見つけたら、私か椿姫、またはリアスに報せて下さい。

では、今日は、解散とします。

皆さん、お疲れ様でした。」

生徒会長の支取蒼那：ソーナ・シトリーの締め言葉により、周囲に張り巡らせていた、人払いの結界が解かれ、この日の会議は終了した。

この後、生徒会役員は それぞれの業務に就き、オカ研の面々も旧校舎の部室へと足を進めた。

》》》

「さて…と…」

部室隣のトレーニング室で、制服からジャージに着替え、軽く上体をストレッチするシリユー。

「部長、ちよつと町内一周してきます。」

「あー、はいはい。何時でも連絡だけは、取れる様にしてね。」



「了く解。」

リアスに一言告げると、シリユーはダツシユで校外へ飛び出して行った。

「金メダル、狙えるわね…」

2階の窓から その様子を見たりアスが、ボソツと呟く。



「ふう…少し飛ばし過ぎた…」

宇宙<sup>コスモ</sup>無しじゃ、こんな物か…

俺も、まだまだ未熟だな。」

数分後、学園から数<sup>キ</sup>離れた公園のベンチに腰掛け、汗を拭きながら、スポーツドリ  
ンクを飲むシリユー。

自身を未熟と言つてはいるが、陸上短距離選手並み…いや、それ以上のスピードを、何  
<sup>キ</sup>も保つて走れる時点で、常人からは「人間か!」…と、ツツコミが飛び交うレベルで  
はある。

「よし、そろそろ行きますか…と。」

立ち上がり、シリユーが再び走り始めようとした その時、

「きゃああつ!?!」

背後から若い女の叫び声。

「!?」

何事か?…とが振り向いたシリユウの目にに写ったのは、

「な、な、な…」

捲れ上がったローブの下に隠されていた、純白のシヨーツ…

「うう…うん…な、何で転んでしまうのでしょうか…?」

…ではなく、

「お…おい、大丈夫か?」

「あ、ありがとうございますう…。」

修道衣に身を包んだ、金髪の少女だった。



「はあ…シリユウ?」

ここは、ペットシヨップでも保健所でもないのよ?」

「いや、この娘は犬猫ですか?」

「はわわわ…あ、悪魔さん…ですか?」

…と、いう事は、神崎さんも悪魔さん?

ええ?もしかして私、悪魔さんの巣窟に連れ込まれ

「落ち着け!」

パシツ

「痛い?!」

部屋の机に肘を突き、溜め息を零すリアスの前で、修道衣を着た金髪の美少女：アールシア・アルジェントと名乗る少女の頭上に、ハリセンが落ちた。

「…で、シリユー？アナタ、一体どういう心算で、このシスターを お持ち帰りした訳なん（バシィツ！）あ痛あつ!?」

「もう少し、言葉を選んで下さいよー」

そして、リアスのド頭にもハリセンを落とす、意外にも女性に対しても、割かし容赦の無いシリユー。

まあ、このオカルト研究部の部室は、リアス・グレモリーとその眷属の、悪魔としての活動の拠点であるから、その様な場所に神の遣いであるシスターを、『お持ち帰り』という表現は兎も角、連れて来た事に対してのリアスの対応や、連れて来られたシスター：アールシアのテンパリ具合も理解に難しくはないのだが。

「うう…ソーナにしても そうだけど、何時も何処から取り出して何処に仕舞い込んでるのよ？そのハリセン!？」

涙目で頭を両手で抑えながら、ボヤくりアス。

…ツツコミ属性の者ならば、何時でも何処でも持ち出し収納可能な不思議武器…それ

が、ハリセンである!!

「いえ、走ってる最中に、迷子のシスターに逢いましてね、…で、赴任先の住所が書かれたメモを見てみたら…」

そう言つて、アーシアが持っていた、メモをシリユーはリアスに渡す。

「こ、これはっ…!?!」

その紙には、先日、リアス達が墮天使と戦闘を繰り広げた廃教会の住所が、手書きの周辺地図込みで、記されていた。

《《《

「…そういう訳で、あの墮天使が口走っていた『あの女』と言うのは、彼女で間違い無いでしょう。」

「…あ、あの人達が、墮天使…?」

「ん、成る程ね。」

…でも、あの墮天使達は何故、その娘を呼んだのか

セイクリッド・ギア  
「神器。」

「…!!」

セイクリッド・ギア  
「神器…」

その単語を聞き、リアスの表情が変わる。

「本当に…?」

「ええ……本当ですよ。」

リアスの問いに、何かを思い出したのか、急に不機嫌そうな顔になったシリユーが答えた。

《《《

あの公園で、小石も何も無い所でスツ転んでしまい、下着丸出しな尻餅状態のアーシアに手を差し伸べて起き上がらせた時、そのシスター然な格好に、『あの教会』との何かしらの関係を予感したシリユー。

どう見ても、日本に不慣れな外国人にしか見えない彼女に、然り気無く、その辺りを聞いてみると見事に予感的中。

明日付けで、あの廃教会にイタリアより赴任する事になった、シスターだと云う。

既に表向きは、運営放棄されている教会に派遣されたと云う時点で、墮天使と呼ばれている『あの女』というのが彼女であるのは、恐らくは間違い無い。

問題は、このアーシアが、どの位迄、その辺りの事情を知っているかと云う事。

本人にすれば無礼な話だが、とても、あの墮天使と共に、他の勢力と喧嘩が出来る様な戦鬪力を持っているとは思えない。

レイナーレが言っていた、『至高の墮天使』という言葉と繋がる要素が皆無だった。

「何も知らずに呼び出され、何事かに利用されていたと云う可能性もあるか…

それとも、この娘とは また別に、『あの女』という人物が居るのか…?」

「あの…神崎さん?」

「あ、すまない、少し考え事していた。」

…と、シリユーが その場で あれこれ思案していた時、2人の目の前を、元氣そう  
な小学校低学年位の少年が走り抜け、  
バタンツ

「う…うわわあああ〜ん!」

派手に転んだかと思えば、その場に座り込み、大声で泣きだした。

「!」

タツ…

アーシアは それを見ると、その少年の前に駆けつけ、

「ほら、大丈夫。」

男の子なんだから、泣いたりしないの。」

そう言いながら、擦り剥いて血が出ている膝に両手を翳した。

「え?」

その光景を見て驚いたのは、アーシアより一步遅れて駆け寄ったシリユー。

アーシアの両手が薄い青の光を発すると、少年の傷口が、見る見る内に塞がれ、全くの無傷となった。

「ありがとく、お姉ちゃ〜ん！」

「??？」

「あrryがとう  
Gra z i e、だつてさ。」

「ああ…」

「…で、今のは？」

少年が手を振りながら走り去って行った後に、シリユーが その不可思議な能力について問うと、

「神様がくださった…素敵な力…です。」

アーシアは両手を合わせて祈る仕草を取り、本の一瞬だが表情を暗くすると、また微笑みながら、答えた。

「セイクリッド・ギア  
神 器か…」

「!!？」

しかし直後、シリユーの言葉に驚きの表情を隠せないアーシア。

「俺のは少しばかり派手でね、この場で見せる訳にはいかないが、実は俺も、

セイクリッド・ギア・ホルダー  
神器持ちなんだ。

あの、『誰も居ない、廃教会』へと赴任になった経緯、聞かせて貰えるかな?」

「え……ええ?! ……は、はい……」

シリューも神セイクリッド・ギア器を持つっていると云う事、そして、自分の赴任先が無人の教会だと言う事……アーシアは二重の驚きを受けながらも、如何なる経緯で、あの教会へと出向く事になったかという事を話し出した。

《《》》

元々アーシアは、生来からの孤児で、教会に拾われ、シスターとして生きていた。

5歳の時、万能の癒やしの能力を持つ神セイクリッド・ギア器トワイライト・ヒーリング【聖母の微笑】を目覚めさせ、それ以降は教会で、深い信仰心と、その神器を以て、怪我人や病人を癒やし『聖女』と呼ばれ敬われていた。

しかし、ある日、重傷を負い、倒れていた悪魔をその場から正体―知らずに癒やした事により、『悪魔すら癒やす異端の魔女』として、教会より神器毎、存在の全てを否定、追放されてしまう。

生来の孤児だった故に行き場が無く、路頭に迷っていた所に、日本に在るとされる件の教会……つまりは墮天使からのオフアーがあり、藁をも縋る思いで、それを受け、来日したのだと言う。

《《》》



「ちつ…今迄 散々と聖女だと持ち上げていて、悪魔を治したら異端？ 魔女だ？ 巫山戯るなっ!!」

ガンツ！

「し、シリユー！落ち着いて！」

表情に隠す事無く、教会に対する怒りを顕わにし、座っていたソファアの前に置いてある、応接テーブルを叩きながら、怒鳴り散らすシリユー。

「ならば、そんな魔女とやらを祭り上げていた自分達は どうなんだ!？」

まさか、『異端とは知りませんでした』とか抜かして逃げる心算か?!」

バキイツ!!

「ひいいつ!？」

そう言いながら、再びテーブルを思い切り叩き付けるシリユー。

それなりに手加減はしていただろうが、それでもテーブルは、真つ二つに割れ、砕けてしまう。

「シリユー！本当に少し落ち着きなさい！」

その娘も、怖がっているから!!」

余りに熱くなり過ぎてているシリユーに、リアスも厳しい顔で戒める。

本当は決して安くはない、壊されたテーブルについても追求したいのだが、それ処で

はなかつた。

「す…すいません、部長…。」

「アーシアも、すまなかつた…。」

「いい、いえ…。」

「気持ちには、解らなくもないけどね…。」

リアスの一喝でクールダウン出来たのか、シリューは目の前の2人に頭を下げる。

「兎に角、この娘にとつても私達にとつても、色んな意味で幸いだったみたいね。」

「ああ、アーシアが来るのが、もう少し早かつたら…:或いは、俺達が行動を起こさなかつたら…:いや、そもそも、あの墮天使の男が、俺に攻撃を仕掛けて来なかつたら…:多分、アーシアは死んでいた。」

「ええっ?!」

シリューの「死んでいた」発言に、目を大きく見開いて驚くアーシア。

墮天使がアーシアを日本に呼ぼうとした理由…:それは、彼女の神セイクリッド・ギア器トワイライト・ヒーリングの微笑が狙いであつたのは、最早明らか。

アーシアの身体から、その神セイクリッド・ギア器トワイライト・ヒーリングを抜き盗り、恐らくはレイナーレが自身の力として、振り込もうとしていたのだろう。

そして、それが、消える間際に言つていた、『至高の墮天使』の意味であつたのも、既

に疑う余地が無かった。

「あははは…私に声を掛けてくださった、あの方達が墮天使だったなんて…

しかも、それも私の神器いのちが目当てだったなんて…

私、私、もう…何を信じたら…」

レイナーレ達が既に この世に居らず確認は出来ない為、推定混じりではあるが、厳しい現実を知らされ、自暴自棄に陥りそうになるアーシアだが、

「大丈夫、その為に、この部室に連れて来たんだ。」

「神崎さん？」

シリユーが優しく声を掛ける。

「リアス部長、いやリアス・グレモリー。」

『赤龍帝』として提案させて貰う。

この聖母トワイライト・ヒーリングの微笑の所持者である、アーシア・アルジェントを、保護の名目で、悪魔側に招き入れる事は出来ないだろうか？

「え？」

《《》》

「し、シリユーさん、似合いますか？」

「ああ、似合う似合う。」

「うー、もっと感情込めて下さいよー!」

数日後：：駒王学園の制服を纏ったアーシアが、くるりと回転しながらシリユーに感想を求めるが、その素っ気無い返事に、頬を膨らませる。

結局、アーシアはグレモリー家預かり：：ではなく、赤龍帝であるシリユーが保護：：シリユーの部下という形で、『人間』として、悪魔側に席を置く事となった。

一応、リアスが悪魔イヴァルベイスの駒を使った転生の話も持ち掛けてはみたが、アーシアは「今の所は：：」と、今後は未定とした上で、これを拒否。

シリユーも本人の意志だと、それを尊重。

リアスの遠縁という『設定』で、1年間はホームステイの枠を使って、2年生として駒王学園に編入。

3年生になったら、駒王町内にある、グレモリー家所有のマンションに移り住む事になった。



「アーシア・アルジェントさん：：

ようこそ、駒王学園、そして、オカルト研究部へ!

私達は、貴女を歓迎するわ!」

正式な編入の前日、オカ研部室で、アジアを歓迎する、囁かなパーティーが開かれた。

参加者は、シリユーを含むオカ研メンバー全員、そして生徒会からソーナ、椿姫、匙が やつてきた。

「神崎君、魔王様から言伝です。」

『彼女の事は、君に一任するから、我々の事情等を、よく教え込んで置いてくれ賜え。』……だ、そうです。」

「了解。あれだけ我が儘言ったんだ、それ位は やりますよ。」

それにしても……はあ……」

ソーナと話し終えたシリユーが、オレンジジュースの入った紙コップを片手に、大きく溜め息を零す。

「アジア先輩のホームステイ先が、まさかのトーカーちゃん家で、今後起こり得る、修羅場の心配をしてr（パシッ）痛いっ!？」

「違うっ!？」

シリユーのハリセンが、小猫に炸裂した。

「まさか、編入先のクラスが、寄りによってD組とは……」

「おう、あのクラスには、兵藤達だけでなく、桐生も居るから……」

学園内でも『変態3人衆』と呼ばれている3人に加え、その『女版』とも云える、1人の女生徒が在席する2年D組。

親バカか兄バカか、無垢な聖女アーシアが魔女を通り越して痴女になったりしないか、本気で心配しているシリユーに、匙も同調する。

「奴等が停学中の内に、クラスの女子に お願いして、包囲網を固めなければ…」

木場、お前も協力してくれ!」

「ははは…別に良いけど…」

更に言えば、シリユーは知らない。

件の3人組が明日、停学が解けて、久々に登校して来る事を。

「部長、此処は、俺と同じクラスな流れじゃないのですか?」

「仕方無いでしょ?」

私も本当は そうしたかったんだけど、そのクラスだけ、学年全体で人数が1人、少なかったんだから!」

シリユーの訴えを、正論?で躲すリアス。

そんな中、歓迎パーティーも闌となり、朱乃に促されて、アーシアが改めて挨拶。

「え…と、み、皆さん、今回は私の為に、こんな立派な歓迎会を開いてくれて、ありがとうございます!」

行き場を失った私に、居場所を与えてくれたシリューさんや皆さん、そして、この縁を授けてくださった、主に感謝を：

「「きやあつ!!」「うわっ?!」

「うげっ!!」「痛いっ!!」

「え????」

アーシアが そこまで喋り、手を合わせて祈る仕草を見せた途端、シリューを除いた全員が、頭痛でも起きたかの様に、頭を抑えだした。

「あ…アーシア…お願いだから、悪魔達わたしの前で、神への祈りは止めて…」

「あ…ご、ごめんなさい…!!」

涙目なりアスの訴えに、事を理解したアーシアが慌てて謝る。

そんな中、悪魔の様な笑みを浮かべる男が約1名。

「はは、なんだか孫悟空みたいだな。

どれ、南無南無南無南無…」

「「「「「ヤメロー!!」「「「「「」

ガンツ x7!!

「うおおっ!!」

「し、シリューさん?!」

シリューに、無数のハリセンが直撃するのだった。



## 三日月が紡ぐ縁

アーシアの初登校の日がやってきた。

「おおっ！」「あら…」

「うわ…」「誰かしら？」

「へえ…」「まあ…」

「う…何だか、凄く注目されてますう…」

「うふ…最初だけですよ。」

「ああ、直ぐに慣れるさ。」

校門を潜り、学園敷地内に入った途端、生徒達からすれば、リアスである程度は慣れている筈な、外国人のアーシアに注目が集まってしまう。

恐縮畏縮なアーシアに、隣で一緒に歩いているシリユーと、アーシアのホームステイ先の娘で、シリユーの彼女でもあるトーカが、大丈夫だと元氣付ける。

「いや、寧ろ…何だか俺に対する殺意みたいなのが半端ないのだが…」

そう呟くシリユーだが、『学園きよぬー四天王』の1人と、今日が登校初日な為、生徒達には認識されていない、『謎の金髪美少女』を両隣に意図せずとも侍らせての登校なら

ば、それは当然と謂えば当然である。

「クツソ、神崎のヤロ〜!」

「トーカちゃんだけでなく、あんな可愛い娘と仲良く一緒に歩きやがって〜!!」

「何で、アイツばつかし…」

「<sup>ギルティ</sup>有罪!!」

…そう云った、嫉妬の炎に身を焦がし、血涙を流す一部の男子生徒から迸る殺気をスルーしながら、アーシアを職員室まで送り届けると、シリユーとトーカは それぞれの教室へと向かうのだった。

》》》

「やあ、神崎君。」

「よう。遅れてスマン。」

2-Cの教室の前で、シリユーを待っていたのは木場。

「じゃあ、行こうか。」

「ああ。」

2人は、アーシアが編入されるD組へと向かった。

目的は…このクラス在籍の変態3人衆と呼ばれている男子生徒から、アーシアを護る為の根回しだった。



ガラ：

「失礼するよ。」

「「「きゃあーあーあー!!」」」

神崎君と木場きゅん!!「」

シリユーと木場がD組の扉を開けて、顔を出した瞬間に、教室内の女生徒達が騒ぎ出した。

そしてシリユーも挨拶しながら教室内に入ろうとするが、

「失礼…って…げっ！お前等!」

「な…人の顔を見た瞬間、何なんだよ、お前、そのリアクションは？」

「全く、本当に失礼なヤツだな!」

「…って、おい、神崎？」

「か、神崎君!」

「「「い、いやあーっ!!」」」

か、神崎君がorzってるう?!「」

「「「ちよつとアンタ達!!神崎君に、一体何したのよ!」」」

「「「な、何も、してねーし!」」」

松田才蔵、元浜幹親、そして兵藤一誠。

学園にて、『変態3人衆』の悪名を持つ3人組。

その3人の顔を見た途端、両膝両掌を床に着き、ガクツと項垂れてしまうシリユー。端から見たら、3人がシリユーに何かしら やらかした様にしか見え、教室内の女子から集中放火を浴びてしまう兵藤達。

「お前等…：停学中じゃなかったのか…？」

「「おう、昨日で解けて、今日、久し振りの登校だよ!!」」

ガクツ…

「「「いやあーっ?!?!神崎君が、またorzった〜?!?!」」」

シリユーからすれば、アジア登校初日と、変態3人衆の停学明けが重なったのは、正に大誤算。

当初の予定は、停学中の内に、外堀を固める心算だった。

それでも担任からアジアが紹介されるであろう、ホームルームが始まる前に、木場と共に、D組の女生徒に きゃーきゃー言われながらも、事情を説明。

兎に角、変態3人衆+ $\alpha$ から、色んな意味合いで、何も知らないアジアを守って欲しいと お願ひする2人。

『学園2大イケメン』からの直々の、頼み事に、D組女子達は快諾。

更には男子からは勿論、女生徒からの支持も高いリアスの遠縁という『設定』も幸いしたのか、「変態から汚さすまじ」と、団結の構えを見せる。

特に件の3人を、普段から蛇蝎の如く嫌っている剣道部所属の2人組が、異様にやる気を出していた。

途中、横で 此等の事を聞いていた兵藤達が、「どういう意味だ？ 俺達を何だと思ってるんだ!?」…と、文句を言ってきたが、

「あ、!?」

「「( )。O。L) !!?」」

シリユーが、結構本気な殺気を込めた一睨みで、それを黙らせる。

「ちよつと、神崎君？ 兵藤達は兎も角、私まで危険視は酷くないかしら?」

「桐生…?」

そこに声を掛けてきたのは、長い髪を三つ編みにした、眼鏡の少女。

桐生藍華。

女生徒からの評判や仲は決して悪くはないのだが、隙あらば下ネタ満載のオヤジ系エロトークを乱発する事から、『女版兵藤』の異名を持ち、その眼鏡は男子生徒の『下腹部の戦闘力(通常時)MAXのサイズ、及び持続力』を測る事が可能なスカウ〇ーとして、

男子からは恐れられている。

因みにシリユーとは1年の時に同じクラスであり、当時、彼女がシリユーの『戦闘力』を測ろうとした際、そのス○ウターにヒビが入り、粉々に破壊、『計測不能』と云わしめた出来事があった。

「ある意味、お前が一番心配なんだよ。」

先述した変態3人衆 +  $\alpha$  : その『+ $\alpha$ 』の申し立てを軽く躲したシリユー。

「桐生、本当に頼むから、アーシアに変な事、吹き込んだりするなよ?」

「へーい、へい。」

そこまで言うと、シリユーと木場は、各々の教室に戻っていった。

結果から言えば、事前にリアスが担任教師にも少し頼んでいたのも手伝い、席の配置も3人とは離れた場所に設け、休み時間に至っては、女子生徒の鉄壁のバリアの前に、兵藤達はアーシアに近づく事が出来なかった。

そして桐生は、余りのアーシアの『そっち系の専門知識』の無さに会話が成立せず、ドン引かれるのを恐れてか、その手の話をするのを断念したと云う。



ざわざわざわざわざわ……

アーシアが駒王学園に編入してから、1週間と数日が経った。

この日、土曜日の夜、アーシアのホームステイ先の矢田家にて、彼女の歓迎を兼ねた、本の少しだけ豪華なパーティーが開かれていた。

しかしながら、パーティーのメインの主旨は別の事柄。

以前から病弱で入院中だった、今年で小学5年生になる　この家の長男が、この度完全に快復、退院したのだ。

彼の友人や、彼と面識のある、高校1年の姉の友人を招いての事だった。

そんな中、

「う……凄いプレッシャーなのだが……」

シリユウの姿も、其処にあった。

「孜劉先輩？」

「シリユウさん？」

「トーカあ……さつきから　お前の親父さんが、滅つ茶苦茶こつち睨んでるのだが……」

シリユウの　ぎこちなさ、居心地の悪さを察したのか、この家の長女であり、シリユウの恋人でもある矢田桃花とアーシアが、駆け寄ってきた。

「もう……父さんも仕方無いわねえ。」

分かった、私から言っとくよ。」

「頼む……」

それは彼女の家に、のこのこと やってきた男への、父親からの洗礼である。

》》》

「おお、本当に長身のイケメンだ！」

「矢田さん、優良物件捕まえた！」

「しかも、神崎さんの従兄弟！」

「あー、どうも……」

改めてトーカーから「彼氏」だと、彼女の中学時代のクラスメイトに紹介されたシリユー。

『学園2大イケメン』の二つ名は伊達でなく、あつという間に その場の殆どの女子に、取り囲まれてしまう。

「やっぱり矢田つちの胸に、釣られたんですか？」

「いや、違うから。」

「それだけじゃないから。」

「あ、要因の1つでは、あるんだ！」



「う、しまった…!!」

何気に弄られしまうシリユー。

「…大丈夫なの？」

「信じてるもん♪」

「ふふ…余裕ですな♪」

「自分の彼氏が多くの女に囲われてるのを見て、何も感じないのか？」…と、トーカに聞いてきたのは、シリユーの従兄弟で、トーカのクラスメートでもある、神崎有希子。

トーカとは、中学時代からの友人であり、やはり彼女の弟とも面識があった。

彼女の問い掛けに対して、トーカはシリユーへの信頼と、自分に自信があるのか、余裕の表情を見せながら、その光景を温かく見守るのだった。



「アーシアさんて、本当に日本語、上手ですな〜？」

「は、はい！トーカさんやシリユーさんに、教えて貰っています！」

シリユーに続いては、イタリア人のアーシアに群がる女子達。

外国人の知り合いが全く居ない訳ではないのだが、それでも同年代のそれは居なく、積極的に会話に興じていた。

「やっぱしリアル金髪は凄い！」

キャラの描き分けとか、ベタ塗るのが面倒くさいとかの黄色い髪とは、一味違う!!」

「え? ええ…っ?」

「…悪かったわね!!」

…多少、メタな会話込みで。

因みに今更ではあるが、シリユーが一番最初にアーシアを部屋に連れて来た時は、リ  
アスを含め、全員がイタリア語で会話していた。

》》》

「アーシア、ちよつと?」

「シリユーさん?」

トーカとユキコも混じつての女子トーク展開中の中、シリユーがアーシアを手招き。

庭先に出て、会話する2人。

「この前から、パーティーばかりな気がするな…」

「はい…でも、とても楽しいです!」

「まあ、今日のコレは、アーシアのお手柄だから。」

「いえ…そんな…」

病弱で入院していたトーカの弟。

アーシア編入初日の帰り、シリユーとトーカの3人で、トーカとしては弟に『新しい家族』を紹介する意味で、病院に見舞いに行っていた。

そして実は、その日から、シリユーとアーシアは、夜な夜な、この病室に人払いの境界を張って忍び込んで、【聖母の微笑】トウライアイトヒヒリンクによる治療をしていた。

いきなり全快復し…にしたたら怪しまれる可能性を考慮しての1週間、じつくり時間を掛けての治療だった。

「シリユーさん…」

「ん？」

「…私の能力<sup>チカラ</sup>って、決して異端なんかじゃありませんですよn（パチン！）い…痛いですう…?!」

「次に、そんな台詞言ったら、マジに叩くからな？」

「う…は、はい。シリユーさん、ありがとうございます。」

ハリセンで掌をパチパチと叩きながら話すシリユーに、ハリセンが痛かったのか、その言葉が嬉しかったのか…アーシアは若干涙目になりながら、そう応えるのだった。

《《》

「あら？トーカ、彼氏さんは？」

「今は弟達と一緒に、ゲームしてるよ。」

先程迄シリユーとアーシアが話していた庭先で、今度はアーシアを含む、トーカ達女子が話していた。

「全く…あんなイイオトコ、どうやって知り合ったのよ?」

「えくと、それは…」

「ほらトーカ、正直に吐きなさい!」

「え…?ちよ…!?!」

ゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさ…

「ひよえええつ?!」

1人の女子が、トーカの背後に回り込み、鷲掴みからの揺さぶりを仕掛ける。

「あわわわわ…」

その様を見たアーシアが顔を赤くし、

「分かった!言う、言うから!!」

この揺さぶりに屈し、トーカは観念して話し出す。

「別に、大した事じゃないよお…」

学校で、従姉妹の神崎さんに「よっ!」って感じで挨拶してきて、その時に…

「え?何々?もしかして、一目惚れ一目惚れ一目惚れ?」

「!!」

カアア…

凶星だったのか、一瞬にして顔を赤くし、黙り込んでしまうトーカ。

「…ちいつ！ これ以上の追求は無理か…」

《《《

「ねえ、所で…」

「ん？」

「あの人って、アイツに似てくない？」

「あー、それ、私も思っていた。」

「私も。神崎さんも、そう思うよね？」

「ん、私的には、あの人、劉兄さんに似てるのかな…って。」

「…まあね、確かに雰囲気とか、似てなくは…ないよね。」

彼女達の頭に浮かんだのは、中学3年の時のクラスメート。

当時のクラス内でも、頭一つ飛び抜けた行動力で、クラスのムードメーカーの一人となっていた男子生徒だった。

どうやら顔は兎も角、身に纏う雰囲気等はシリユーと似ているらしい。

「(…ん。露出癖まで、そっくりなのは、黙っておこう。)」

凶らずも、同じ事を考えてしまう、トーカとユキコ。

「あくウチの学校にも、あれ位のイイオトコって居ないもんかねえ？」

「あんた、女子高でしょ？」

「そう言えば、メール届いてたでしょ？」

勿論 来週、皆 学校に行くんだよね？」

「まーねー。卒業してから、初めての『手入れ』だし。」

「????」

この時点で既に、アーシアは半分、空気になっていた。

「あのクラス……」

「……トーカーちゃん？」

「あの『クラス』だったから私、駒王にも受ける事が出来たんだよね。」

「あー、確かに。」

あの『クラス』でなかったら、私等今頃、皆揃って、バカ学校に行っていたわー。」

夜空を見上げながら、話すトーカー達。

「だから、孜劉先輩にも逢えたし……。」

「「……………」」

「はあ!? 結局は惚気かい? コノヤロー!!」

「リア充、爆裂しろおっ!!」

ゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさ……

「ひええええっ!？」

「はわわわわわ……?？」

再び背後からの驚掴みから、揺さぶりを受けるトーカー。

《《

「……………。

何をやっているのだ？あのコ達は？」

その様子を2階の部屋の窓から見ていたシリユーが、呆れ顔で呟く。

シリユーが見下ろす庭先、その上の夜空には、彼女達を微笑み見守るように優しく光

る、三日月が浮かんでいた。

# <br>学園壊滅のフェニックス メイドさん、やって来ました!

## ◇シリューSIDE◇

ある日の放課後の部室。

「だから、この場合は、先にコッチを代入した上でだな…」

「ふむふむ…成る程…」

俺は今、子猫の宿題の手伝いをしてやっている。

「はあ…」

「……………」

「え?そんなに美味しいんですかあ?」

「ええ、私の一押しですわ。」

今度、一緒に行ってますか?」

「はい!是非!!」

アーシアと姫島先輩は、何やらスイーツの店?に繰り出す相談をしている様だ。



そう言えばアーシアはこの前も、トーカと そっち系の店に行っていたとか話してたな。

まあ、アーシアって、少し前迄は教会勤めで かなり禁欲的な生活を送ってきたらしいし、ああいった女の子らしい？ 日常を過ごせる様になったのは、良い事だ。

それから小猫？

あの会話に参加したいのは解るが、とりあえずは目の前の宿題、片付けてからな？

「はああ……」

「「……………」」

因みに木場は現在、部活（しごと）で外に出ている。

「はあああ……………」

「「……………」」

「はああ〜」

「リアス部長？」

「はい？」

「…えっと、『部長、何か あったんですか？』って聞いて欲しいんですか？」

それなら そうだと言って下さい。」

「な、ななな…!?!」

そんな中、職員室の教師でさえ使わない様な、見るからに役員御用達な高級デスクに着き、如何にも「私 今、凄く悩んでいます」…な感じで さつきから何度となく溜め息を零しているリアス部長。

最初は皆、敢えてスルーしていたのだが、余りにもウザ過ぎ…失礼、気になり過ぎて、女子3人が、部室内現状唯一の男子の俺に対して「何とかしなさい!」…の様な、半ば脅す様な視線を浴びせかける。

仕方無く声を掛けみたら、リアス部長、顔真っ赤で動揺しまくり。

「……………」

そして、ジト目で俺を見るアーシア達。

「あらあらあらあら?」

「し、シリユーさん、もう少し、ソフトに言ってあげても…ストレート過ぎますう…」

「…流石に今のアレは、有り得ません。」

「デリカシー無すぎです。」

…何故だ、解せん。

「はあ……よ、よし!!ねえ、シリユー?」

この不条理な集中放火を浴びせられてる中、リアス部長が何やら意を決した様な顔で、俺に話し掛けてきた。

「お、お願いシリュー！私の恋人になつて

嫌です。」

「はあ?」

》》》

「お、お願いシリュー~~~~っ!!」

「ええい！脚を放せ、脚を!!」

半泣き顔で己の脚にしがみつくリアスを、何とか振り解こうとする、顰めっ面なシリュー。

そこには既に、オカ研の部長と部員の間、の礼等は存在しない。

「其方の御家事情に、俺を巻き込もうとするな!」

「な、何故、判つたのよお?」

「解らいでか!!」

御家事情……その言葉で、まるで全てを見透かしている様なシリューに、驚愕するリアス。

「あゝらあゝらあゝら?」

「はわわわわわわ…」

「…ふむ。」

その様子に、三者三様な反応を見せる、残りの女子部員達。

「どうせ、親同士が勝手に決めた、縁談を破棄したいから、俺に恋人役を演じて欲しい…そんな所でしようが?」

「えー、そーよ! 全くその通りよっ!!」

完全な凶星に、泣き顔な逆ギレでリアスは応えるのだった。

《《《

「全く…:そういう事なら、俺よりも木場の方が…」

「で、でも、祐斗は既に私の眷属として、それなりに顔が知れてるし、今更感が…」

「いやいや、『人間』であり、『赤龍帝』である俺の方が、もっと ややくしくなるでしょうが…」

それに、それで俺と悪魔側の関係がギクシャクするのは…違いますか?

グレモリー家の次期当主候補筆頭殿?

大体 俺には、可愛い可愛い彼女が居るの、知ってるでしょ?」

部屋の3人掛けソファアの真ん中に、悪人顔でハリセンを片手に、”でん!”と ふんぞり返って座り込むシリユウ。

「あらあらあら？」

「最後のが、本音ですね。」

「…てゆーか、然気に惚気ています。」

「う、う…ゴメン、ナザイ…」

そして、その前に置いてある応接テーブルの上で、まるでギャグマンガの補正が掛かったかの様な、大きな たんこぶを頭に作り、うるうると涙を流しながら正座しているリアス。

先程も触れたが、既に、そこに、部長と部員の上下関係は無いに等しかった。

「…最初は私も、『好きな人が、付き合ってる人が居るから、結婚は無理!』…で、済ませようと思ったの。」

でも、『それなら、どんな男か?』って、家の遣いの者が、私の『相手』を見に来るって話になってしまっ…」

「はあ…そんなの、普通に想定出来る展開じゃないですか？」

…で、部長? 見に来るって…それって、何時の話なんですか？」

「……………」

諦め顔なシリユーの質問に、リアスは壁に掛かっている時計を見ながら、

「きよ…今日の4時…」

恐る恐るな表情をしながらのリアスの応えに、シリューが その時計を見てみると、時刻は既に3時58分を指していた。

「……………」

視線を時計からリアスに戻したシリューは

「部長、知っていますか？」

達人は、只の布の鉢巻きに己の『氣』を通す事により、鋼の刃の如く扱うと言う…  
そう言つて、右手に持った張り扇を、天高々と掲げる。

「…いい、いや…ゴメンナサイ、シリュー、は、ハリセンは嫌あつ!!」  
すばかーん!!

直後、部室内に澄み乾いた音が響き渡るのだった。

そして更に その直後、部室に銀色の魔法陣が浮かび上がる。

「失礼します、リアスお嬢様。」

「グレイフィア…」

そこから姿を現したのは、見た目は20代前半の、メイド服を着た銀髪の美女。

カタツ…

リアスがシリューに説教されているのを茶請けにしながら、紅茶を啜りながら見ていた女子部員。

「??」

しかし、朱乃と子猫が、このリアスにグレイファイアと言われた女性を見ると、突然立ち上がり、一礼する。

アーシアだけは、何が起きたのかは判らず、単に その様子を見ているだけだった。

◇シリユースide◇

「始めまして、赤龍帝様。

…と、その御付きの方。

私、グレモリー家のメイド長を仰せつかっております、グレイファイア・ルキフグスと申します。以後、お見知り置きを。」

「赤龍帝…神崎孜劉だ。」

「ア、アーシア・アリちえっはう!？」

「す、すいません、アーシア・アルジェントですう。」

リアス部長からの紹介で、初対面な俺達に、丁寧な挨拶をしてきたグレイファイアと名乗る女性。

それに対して、俺と、一応は俺の部下として、悪魔側にポジショニングしているアーシアも、簡潔ではあるが名乗り応えた。

アーシア 啖みっ 啖みで。

「それで、リアスお嬢様?

貴女と懇意な殿方とは、どちらに?

見た所、この部屋に男性は、赤龍帝…神崎様しか居られません…!!まさか?」

「……………」

このメイドさん…グレイフィアさんが、此方に目を向ける。

…が、俺は敢えて、肯も否もしない。

余計な事は、何も喋らない。

この場を如何に上手く誤魔化し納めるか、リアス部長?アナタの王としての資質、<sup>キング</sup>拝見させて貰いますよ?

「そ、そうなのよ、グレイフィア…」

じ、実は私、そのシリユーとt

「はあく…神崎様…この度はリアスお嬢様が、大変御迷惑をお掛けしました。

グレモリー家の者として、お詫び申し上げます。」

「ちよ…グレイフィア!?!」

…一瞬でバレた。

俺に対して、グレイフィアさんが深々と頭を下げる。

「…御付きのアーシア様にも、本当に申し訳ない事を致しました。」



神崎様には、貴女の様な素敵な方が傍らに居られるにも拘わらず、この様な茶番に巻き込んでしまひまして……」

「え、……？ いえ、わわ私はシリユーさんとは、べ別に、しよんな関係ではなくて、しよの、急とIOS☆？エ%o(Ψ3Ψ)∞るΘ三†・ヰφφ……」

「アーシア、落ち着け！」

更にはアーシアにも謝罪するが……と、同時に、何か物凄い勘違いをしてしまったみたいだ。

その辺りの誤解だけは、絶対に解いておかないと……

そう思いながら俺は、とりあえず目の前でテンパってる この金髪娘と、この一連のやり取りを茶請けに、ニヤニヤと ほくそ笑みながら紅茶を飲んでいる白髪のチビツ娘の頭に、一発ずつ御見舞いする事にした。

## 喧嘩、売買します!

◇シリユースサイド◇

「シリユー君、紅茶の お代わり、要りますか?」

「すいません姫島先輩、お願いします。」

今 俺は、姫島先輩の注いでくれた紅茶を飲みながら、

「お嬢様、いい加減に我が儘は…」

「グレイフィア…別に私は、グレモリー家を潰すつもりは無いわ。

婿養子だつて迎え入れるつもりよ。」

リアス部長とグレイフィアさん、この2人の やり取りを、黙つて見ている。

何しろ、俺が一言も喋らない内に(尤も、リアス部長に全部丸投げで、最初から黙りの心算だつたが)いきなりグレイフィアさんに似非恋人を看破されたから、既に出る幕が無いのだ。

「…でも、私は、私が良いと思つた男ひとと結婚する。

そして それは、あの男なんかじゃ、断じてないわ!」

へえ?…リアス部長、言い切つた。

「…だ、そうだ。正直、余り覗かれたりするの、好きじゃないんだ。覗いているんだろ？」

「サツサと出て来たらどうだ？」

「「「!?」「」「」「!!」」



『自分の相手は自分で決める』…そこ迄リアスが言った所で、シリユーが部室の窓の外に顔を向けて話し出すと、先程グレイファイアが現れた場所に、今度は赤い…グレモリー家の夕闇を朱に染める様な紅ではなく、燃え盛る炎の如くな…否、炎そのものを巻き上げる赤い魔法陣が浮かび上がる。

「「「!?」「」「」」

そして其処から、ダークワインレッドのスーツを着崩した、木場やシリユーとはまた別ベクトル側なイケメンの…ホストの様な風貌の、金髪の男が姿を現した。

「ふうふう…久し振りの人間界だ。」

…ふん、流石は赤龍帝殿…と云う所か。

因みに、何時から気付いていた？」

「グレイファイアさんが、この部室に姿を現したのと、同じ位さ。」

窓の外、あの木に止まっていた、赤い鳥からの視線を感じたのはな。」

「参ったな。最初からじゃないか…。」

まさか、俺のサザンジュールの気配に気付くとはね…。」

金髪男の問いにシリューが外を指差して答えると、やれやれと謂った表情で、男は掌の上に小さな魔法陣を作り、其処から赤と金の羽を持つ、まるでオウムと猛禽類を掛け合わせた様な鳥を召喚し、己の右肩に飛び乗らせた。

「使い魔…。」

それを見た、リアスが眩く。

「赤龍帝…神崎孜劉殿…だったかな。」

名乗らせて貰うぜ、俺の名はライザー・フェニックス。

其処のリアス・グレモリーの婚約者だ。

ヨロシクな。

それから、先程グレイフィア様も仰られたが、今回は俺とリアスの件で、アンタを下らん茶番に巻き込んでしまつて点に付いては、マジに申し訳なかつたな。」

「フェニックス…?。」

「はい、神崎様、ライザー様は純血の上級悪魔である、フェニックス家の御三男。」

そして、この方が、グレモリー家の次期当主で在らせられる、リアスお嬢様の婿殿に御座います。」

「成る程、フェニックス『家』…ね。」

『フェニックス』と云う言葉に やや過敏に反応したシリューに、グレイファイアがこのライザー・フェニックスについて、詳しく紹介する。

「…何の用なの、ライザー？」

私はアナタを、呼んだ覚えは無いわ。」

「つれないなあ、愛しのりいゝアスウ？」

お前に逢いに来たに決まってるだろ？」

明から様に招かざる客という対応のリアスに、ライザーは何処吹く風な態度を取る。

2人の会話は続く。

「私はアナタになんか、遭いたくもなかったわ。」

ライザー、前にも言った筈よ、私はアナタとは、結婚なんてしない。」

「だがリアス？」

君の御家事情は、そんな我が儘が通用しない程、切羽詰まっていると思うのだが？」

「さっきのグレイファイアとの会話、聞いてたのでしょ？」

家を潰すつもりは無い。

婿養子だって受け入れる。

「でも、アナタだけは、御免蒙るわ。」

「これは また、エライ嫌われ様だなあ？」

おいリアス、一体、俺の何処が気に入らない t

「女誑しな所よ。」

「……………」

そしてリアスの この一言に、一瞬ライザーは黙り込む。

◇シリユー side ◇

「(ボソ…) 小猫、あのライザーとやら、そんなになのか？」

「(ボソ…) はい、面識は有りませんが、ライザー様の眷属は15人全て、女性で構成されていると聞いています。」

そして その女性達とライザー様は、所謂その…つまり…アレでして…」

「(ボソ…) あー、分かった分かった。」

無理して言わなくても良いから。

俺が悪かったよ。」

顔を赤らめ、言葉を詰まらせている小猫に、とりあえず俺は謝った。

それからアーシア？

何を妄想したかは察するが、一瞬に赤くならなくて良いから。



「…大体アナタは眷属だけでなく、昔から、少し可愛い女の子を見ると…」

(中略)

…他にも小学s

「り、りくアス！ちよくつと落ち着こうか!？」

リアス部長の、このライターとやらが如何に女誑しか、本人にぶちまける文句と云うよりか、半ば俺達に対する暴露と言つて良い様なマシンガントークに対し、最初は武勇伝とばかりに余裕な涼しい顔で流していた金髪男だが、その途中、部長が余程、本能的にヤバいネタを言いそうになつたのか、慌ててその言葉を遮つた。

因みに、今までの暴露内容で、

「あくらあらあらあら？」

ほんのり赤くした頬に両手を当て、嬉しそうな顔をしてる人が1人、  
「…サイテーですね。」

ジト目でドン引きしてる人が1人、

「はわわわわわわ…」

そして、はわはわしてる人が1人。

「ど、何処に電話をしようとしている?!

そして俺がスマホを取り出すと同時に、突とつ込めみに入る男が1人。

恐らく今の俺は、小猫に近い表情を浮かべているであろうと思われる。その内容は、  
D組：アーシアのクラスメートの『あの3人』：特に兵藤の奴が聞けば、血涙を流しながら羨ましがれる様な内容だった。



「…てゆるかりアス!

何故お前が、その話を知ってるのだ?」

「ルヴアル様から聞いたのよ。」

「ルブ兄い~~~~~~~~~~~~っ!」

ライザーの質問に、スマホを取り出し、にこやかな顔で答えるリアス。

そして、その情報源であるフェニックス家長兄を、普段の呼び名で絶叫するライ



ザー。

「大体 今回の縁談も、アナタでなくルヴアル様なら、もつと前向きに考えられたのですね。」

「馬鹿な事を！」

ルブ兄はウチを継ぐのが決まってるし、既に許嫁も居る！」

「ええ、親が勝手に決めたのではなく、相思相愛のね。」

「うくっ…!!」

「…御2人共、其処迄にして下さい。」

余りに会話が前に進まない2人の間に、グレイフィアが割って入った。

「グレイフィア…」

「…リアスお嬢様、最終確認です。」

お嬢様は どうあつても、ライザー様と御結婚する気は無いと、仰られるのですね？」

「ええ、何度でも言うわ。」

私は、ライザーとは結婚しない。」

「…判りました。」

お嬢様、ライザー様、旦那方も こうなるのは予想されておられました。

よって、決裂した場合の最終手段を仰せつかっております。」

「ほお……?」

「最終手段……どういう事、グレイファイア?」

「お嬢様が それ程迄に御意志を貫き通したいならば……ライザー様と、『レーティングゲーム』にて決着を……と。」

「!!?」

「??」

「……ふん!」

レーティングゲーム……グレイファイアの口から その単語が出た瞬間、リアス、朱乃、子猫の顔付きが変わる。

シリューとアーシアは、聞き覚えの無い言葉に多少の途惑いを見せ、  
「くつくつく……」

あーっはっはっはっ! コイツは傑作だ!!」

ライザーは その言葉を聞いて、声高らかに笑い上げる。

「聞いたかリアス!

結局の所、君の御両親も魔王様も、今回の縁談には乗り気なんだよ!!」

「……………!!」

◇シリュー side ◇

「あの…シリユーさん？」

レーティングゲームって…？」

「ああ…姫島先輩、解説お願いします。」

「うふふ…了解ですわ。」

アーシアの質問…俺も知らないし、尚且つ、俺も知りたかった事柄なので、その儘姫島先輩に振ってみたが、

「レーティングゲームの事なら、その女王クイーンより、俺の方が詳しいぜ。

俺が説明してやるよ、赤龍帝殿。」

ライザーが横から、説明役を名乗り出た。

「レーティングゲームてのはな、簡単に言えば、我々悪魔社会の娯楽の1つだ。

爵位持ちの悪魔が、自身と自分の下僕を含めた、1チーム最大16名同士が広大な疑似戦闘空間で戦い合う、極めて戦争に近い…まあ、スポーツみたいなもんだな。」

「16名…成る程、下僕をチェスの駒に見立ててるのは、そういう事か。」

「本当に流石だな、その通りだ。」

機動力の騎士、破壊力の戦車、それ等を兼ね揃えた女王…

その特性を完全に把握し、王キングが如何に上手く、その空間内で使役して勝つか…

そして、その勝利が、王のステータスに繋がるって訳さ。」

「成る程ね…」



シリューに、ゲームの簡単な説明をした後、ライザーはリアスに顔を向け、

「お前は色々な意味合いで、本来は まだ、ゲームに参加する資格は無い。

人数的にも、全然な。

確か お前の眷属は、そこに居る女王と戦車、それで今は外に出張ってる騎士に、僧侶が もう一人…だったな？」

パチインツ

そう言ううとライザーは指を弾き、部屋にカン高い音を響かせる。

すると先程、ライザーが姿を現した時と同じ、燃え盛る魔法陣と共に、総勢15人…何れ劣らぬ美女美少女達が姿を見せた。

「見ての通り、俺のチームはフルメンバーだ。

そして このチームで、それなりの勝利実績もある。

解るか、リアス…お前達にとって、元から これは、無理ゲーなんだよ。

何ならハンデに、その赤龍帝殿と聖女さんも、メンバーとして認めてやろうか？」

「な…!?!」「はあ?」「ええっ?」

ライザーの発言に、3様の驚きの声を上げる、グレイフィア、シリュー、リアス。

「ちよつと、本気なの、ライザー!？」

「ライザー様、そんな勝手は……」

「……………」。

「ああ、本気も本気さ。」

「言つたら？それくらいの手が、丁度良いってね。」

シリユーが黙りとなる中、リアスとグレイフィアがライザーに詰め寄るが、ライザーは自信と余裕を崩そうとはしない。

「わ、分かりました。」

但し、この場で私人の判断では決めかねますので、両家の旦那様方と魔王様に了承を得た上で、正式に神崎様とアルジエント様をリアス御嬢様のチームメンバーと決まった時点で、改めてゲームの日取り等を報告致します。」

「ちよつと待った。」

「シリユー?」

グレイフィアが 此処迄言つた時点で、シリユーが口を開いた。

「俺の意見は無視か？」

俺もアーシアも、リアス部長のメンバーに入るなんて、一言も言っていないのだが？」

「シリユーさん！」

それじゃ、部長さんが…」

「黙ってる、アーシア!」

ここで、シリユーがリアスのアシストに否定的な発言。

「おおっとつとつとつ…」

そいつは残念だねえ、折角あの悪名高き、伝説の赤龍帝を宿す者と、手合わせが出来  
ると思っていたのだが…」

この発言にライザーは薄ら笑いを浮かべたかと思えば、

「今代の赤龍帝は、とんだ腑抜たヘタレの様だな!!」

何故、魔王様達が あんなにも、一目置いているのかが解らん!」

この部屋に顔を出して依頼、初めての鋭い眼光で、シリユーを睨みつける。

「勘違いするな。」

単に俺が、リアス部長のチームに入る理由が無いだけだ。

俺もアーシアも、オカ研に所属はしているが、別にリアス部長の下僕にもグレモリー  
の眷属にも、なった訳ではない。

『客』の立場から、悪魔社会の御家事情に不介入の姿勢を通してただけだ。」

「シリユー…」

「正直に言ったらどうだ?」

如何に赤龍帝と云えど、『人間』である俺の存在が、気に入らないんだろ？」  
「……!!」

凶星を射抜かれ、黙り込むライザー。

「それも そうだ……」

赤龍帝だと云うだけで、悪魔側に受け入れられただけなら　　まだしも、ある程度は魔王と同等な立場を得られているのだからな。

面白く思っていない者が居ても、不思議は無いさ……。

それは支取先輩や真羅先輩、匙以外の生徒会を見たつて判る事だ。」

「シリユー君……」「シリユー先輩……」

このシリユーの言葉に、「自分達は違う」と云う顔をする、朱乃と小猫。

「……だから、このゲームを出汁にして、気に入らない俺を、多少なり痛めつけてやろうとか、そう考えているのだろうか？」

だが、俺は　やはり、リアス部長のチームに入る心算は無い。」

「シリユー……」

はつきり言つて、シリユーの言い分は正しいとリアスが思い、僅かな勝利の可能性を諦めた　その時、

「……だが、ハッキリさせるべき事は、ハッキリさせるべきだ。」

先程からの腑抜けだとかへタレだとかの、その安い挑発、敢えて買ってやる。

リアス部長と その眷属の代理として、このシリュー…

この赤龍帝がライザー・フェニックス!

貴様のチームとのレーティングゲームとやら、挑ませて貰おう!!」

不参加からの一転、リアスの助っ人眷属でなく、あくまでも『赤龍帝』個人として、宣戦布告を言い放つのだった。

「はい?」「」「え?」「」「へ?」



『『『『』はああっ?!』『』』』』』』

この時、シリユーを除く、その部屋に居る者全員が、大きく声をハモらせた。

『』』』』』

「ああああ、アナタ、一体何を考えているのよ?!」

「ちょ…部長、近い近い近い…」

余りの発言に、シリユーの両肩をガシツと掴むと、ガクガク振るわせながら、問い詰めるリアス。

「シリユー君、やつぱり ここは、私達と一緒に…」

「シリユー先輩…」

「シリユーさん…」

朱乃達も、不安気にシリユーに訴えかける様な目をするが、

「勘違いされても困るが、別に、先輩達が邪魔と思っている訳じゃない。」

単に一度、悪魔全体に、俺の：『赤龍帝』の力を示しておくべきだと考えただけさ。

だから、リアス部長と愉快的仲間達ではなく、俺個人での参戦なんだ。」

「誰が、愉快的仲間達なのですか?」

「先程の あの男の台詞ではないが、その程度のハンデは必要だろうか？」  
「無視?!」

シリューは全く、気にしていない。

「おいおい、赤龍帝…いくら何でも、そりゃ少し、舐め過ぎじゃないか？  
さつきも言ったが、俺はゲームを何度も経験してるし、勝ち星も多い。

素人の お前が、単独で どうにかなるってモンじゃないぞ？

おい、イル！ネル！」

「は〜い、ライザー様あ♪」

ライザーに呼ばれて前に出てきたのは、見た目は小猫と そう大して変わらない年頃の、双子の少女。

「赤龍帝…この2人の攻撃を捌けたら、お前個人の代理参戦、認めてやるよー」

何時の間にか、シリューを赤龍帝と呼び捨て且つ、お前呼ばわりのライザーが、

「イル、ネル、殺れ！」

「はあ〜〜い!!」

双子の少女を嚇けた。

ギューーン!! ドツドツドツド…

「ば〜らばら!ば〜らばら!!」

イルとネル：Tシャツにスパッツという出で立ちの双子の少女の持つチェーンソーが、けたたましく唸りを上げ、シリユーに襲い掛かる。

ズバアッ！

「…えいつ!!」

バキイツ!!

「きやあつ!!?」

しかし、何の前触れも無く、シリユーの前に立ち塞がった子猫が、双子の鳩尾に強力な掌打を放ち、2人を吹き飛ばした。

「子猫ちゃん!」

「…どうも。」

その際、制服の上着とブラウスを少し切り裂かれ、その裂け口から、ペールイエローのシルクの布地が露わになるが、即座にアーシアが、自分の制服を羽織らせる。

「すいません、シリユー先輩、つい…」

「いや、サンキュな。」

ほん…

そう言つて、シリユーは子猫の頭に手を乗せて軽く叩く。

「…~~~~~!!?」

一瞬にして、顔を赤くする子猫。

…と、何故か一緒に赤くなるアーシア。

「な…ふ、巫山戯るな!!」

今のは、そのチビが勝手に　しゃしゃり出たのでノーカンだ!」

「む…ちび?」

かなり気にしているのか、その単語に過剰な反応を示す小猫。

「ライザー様、勘違いしないで下さい。」

私が出なかつたら、その2人は再起不能になつていたかも知れません。

シリユー先輩は、私の1.5倍は強いです。」

「微妙な数値だな、おいつ!」

「ちい!ユーベルーナ!!」

「…はい、ライザー様。」

ライザーの声に従い、今度は部屋に姿を見せた時から、己の主の傍らに付き添つていた、大きく胸元が開いた紫のドレスに、白いローブマントを羽織る、ウェーブの入った長い黒髪の美女が前に立つ。

「受けてみなさい!!」

ユーベルーナが右手を翳すと、その掌から、テニスボールサイズの黒い魔力弾が、シ

リユーに向かつて放たれた。

「な……!? こんな部室で!!」

それに対してシリユーは、小宇宙<sup>コスモ</sup>で生成したオーラで、その魔力弾を包み込む。

BOMB!!

そして、そのオーラの中で、爆発を起こす魔力弾。

それはオーラで包んでいなければ、部室を吹き飛ばしかねない程の火力だった。

パンツパンツパンツ…

「ひゅ~~~~~~~~っ♪ 見事だ、赤龍帝!」

両手を叩きながら、ライザーがシリユーに話し掛ける。

「まさか、威力は抑えていたにせよ、ユーベルーナの爆裂魔法を、あの様な形で防ぐとはな!! 実に面白い!」

良いだろう! 貴様のリアスの『代理』としての参戦、この俺が認めてやるよ!!」

そう言うライザーは、グレイフィアに顔を向け、

「…と、いう訳です、グレイフィア様。

両家と魔王への御報告、宜しく御願いますよ。」

「…宜しいのですね?」

「……………(ニイツ)」

グレイファイアの言葉に、無言で不敵な笑みで返すと、

「おい、帰るぞ!!」

自分の眷属と共に、燃える魔法陣の中に、姿を消して行くのだった。

◇シリユースide◇

「…では、失礼致します、リアスお嬢様。

神崎様、レーティングゲームの日程や詳細な取り決めが決まりましたら、また お嬢様を通じて連絡すると思いますので、宜しく御願致します。」

ライザー・フェニックスが部屋を去った少し後、グレイファイアさんも魔法陣を転開して冥界の、リアス部長の実家であろう屋敷に帰っていった。

「シリユース…その、ごめんなさい…。」

結局、私の為に、アナタを…」

「リアス部長? また、頭に大きな たんこぶ作りたいのですか?」

「ご…ごめんなさい、マジ、すいませんした。」

結果的に俺をグレモリー家の問題に巻き込んでしまったと思ひ込み、謝罪しようとしたリアス部長。

しかし、俺がハリセンを取り出した瞬間、涙目になって首を何度も横に振り、別の意味合いでの「ごめんなさい」に切り替えてきた。

俺自らが飛び込んだのだから、そこ迄気にする必要は無いのだが…

正直な話、リアス部長の縁談を利用する形になるが、本当に良い機会だ。

未だ俺の事を芳しく思っていない悪魔：特に上層部の者に、赤龍帝：いや、このシリューの力を示すのにな。

特に、ライザー・フェニックス：お前には、ハンデ扱いた俺の力、存分に見せてやるよ。

「兎に角、申し訳ないとか思っているなら、当日は応援して下さいよ。

それだけで良いですから。」

「ん！当日は、皆でチアガールの衣装で応援する！」

「あらあら？ 私もですか？」

まあ、別に構いませんけど？」

「ははは…期待してますよ。」

「シリュー先輩、心配しなくても、トーカちゃんにはチクってあげます。」

「いや、違うだろ!!？」

「わ、私もチアガール、頑張ります！」

「いや、アーシアは建て前上、俺の…『赤龍帝』の下僕というか、部下という立場だから、

俺とゲーム参戦だよ。」

「えっ!?…はい、頑張ります!!」

いきなり告げた、参戦という言葉にも物怖じせず、良い返事なアーシア。

まあ、彼女の参戦は本当に形だけで、出番は殆ど無い予定だが。

そんな風に暗い雰囲気を払拭する如くな感じで話していたら、また部室内に、転移魔法陣が浮かび上がった。

「部長、今、戻りました。…って、何かあったんですか?」

「……………」

あ、木場の事、完全に忘れてた。





## 眷属、募集します!

グレイファイア・ルキフグスとライザー・フェニックスが訪れてから、2日後の放課後。「くつ、ライザー……あの男、分かつてはいたつもりだったけど、とことん下種ね……」

「シリューさん……私……」

「いや、『俺』を相手にと考えた場合、ある意味、正当な要求さ。」

何しろ向こうは、自分の縁談取り消しをチップに……それ程のデメリットを背負うんだ、このレベルは想定内だ。」

リアスの縁談破棄を賭けた、『赤龍帝vsライザー・フェニックス』のレーティングゲームの実施が、正式に悪魔サイドにて認められた。

そして、その詳細が、昨日の夜、リアスの下に封書として届けられていた。

オカ研部室で その封書を開き、中に入っていた書面を見て憤慨するリアス。

「……でも、シリュー!!」

「大丈夫だ、勝てば関係ない。」

奴等は不死鳥フェニックスなだけに、死亡フラグという概念が無いだけさ。

……まあ、立っただけだな!!」

「シリユーさん……」  
「シリユー君……」

「シリユー先輩……」  
「神崎君……」

※※※

赤龍帝vsライザー・フェニックス  
レーティングゲーム詳細（一部抜粋）

◎開始日時

5月■日（日） PM10:00

▼赤龍帝は人間界駒王学園オカルト研究部部室、ライザー・フェニックスは冥界フェニックス邸自室にて、他参加者と待機

◎参加者

▼赤龍帝側に限り、チーム定員16名に達する迄、自身の下僕の他、リアス・グレモリーの下僕の同伴を認める。

◎勝者報酬及び権利

▼賞金・2,000,000

▼赤龍帝が勝利した場合、グレモリー家とフェニックス家との間で取り決めていた縁談の破棄を認める事とする。

▼ライザー・フェニックスが勝利した場合、赤龍帝は自身の下僕、部下全てをライ

ザー・フェニックスに差し出す事とする。

※※※

「確かに、自分の結婚を賭けた勝負に、他の女を寄越せと言うのは、男として どうかと  
思う所は在るが…」

「まさかとは思っていたけど、アイツ、最初からアシアを狙っていたのよ!

だから自分からハンデとか言って、シリユーを引きずり出そうとしたのよ!!」

「…シリユー君、やはり、私達もゲームには同行しますわ。」

「そうだよ神崎君、既にキミと部長だけの問題ではなくなってるんだ。」

「シリユー先輩、私達は役立たず

「ん?何か言ってるか?」

フルフルフルフル…

小猫がシリユーに自分達の戦力の価値を問おうとするが、それを言い終わる前に、逆  
に質問で返される。

そして そのシリユーが何処からか取り出した凶器(笑)を見た途端、小猫はトラウ  
マでも有るのか、頭を庇うかの様に抑え、無言&涙目で首を横に振るのだった。

「部長も皆も、言いたい事は解るが、今回だけは俺だけで やらせて欲しいんだ。

これは、俺の意地だけじゃない。」

「シリユー?」

「魔王達が俺を悪魔サイドに招いた件…」

今、冥界では その辺りで魔王に不信感を持つ者も、決して多くはないが、居るのだろうか?

だから、魔王達の判断が正しかった事を、俺の力を以て証明したい。

少なくとも それで、俺への不満は兎も角、魔王に対する文句は消えるだろう?

赤龍帝を悪魔サイドに取り込んだ判断は、戦力的に間違つてはいなかった…と。」

◇シリユーside◇

「…新しい眷属ですか?」

「ええ、そうよ。」

ライザーとのレーティングゲームの詳細云々で話した後、今日は偶々、誰も夜迄

部活しごとでの出張が無かった為、その儘リアス部長指示の下、ミーティングが執り行われた。

御題は『新しい眷属』。

「今回はシリユーに丸投げな形になったけど、また、不意に非公式なレーティングゲームを戦る機会が無いとも限らないわ。」

それにしても、私には下僕が少な過ぎる。

公式戦に参加出来る年齢になる迄、じっくりと人材を探し出し、焦る必要は無いと

思っていたけど、この前のアレで、その気持ちは吹き飛んだの。」

…だ、そうだ。

あながち、間違つてはいないと思う。

部長と同年代である支取先輩も、手持ちの悪魔の駒を既に殆ど消費して、それなりのメンバーを集めている。

「新メンバーは駒王の生徒でなくても良いし、年齢や種族にも拘らないわ。

さしあたっては、コレよ!」

バツ!!

部長が自信満々で差し出したのは、部活しごとで使う、悪魔召喚用の魔法陣が描かれている

ビラ。

手にして読んでみると、

『アナタも悪魔に生まれ変わって、新しい人生を謳歌してみませんか？

相談、承ります。』

…の文章が、一番下に書き加えてある。

「「「「「……………」」」」」

俺だけでない、アーシア含む、皆が言葉を失い、固まっているよ。

「さあ皆、使い魔を喚んで、このピラを町中に配って来て頂戴！」

……………。

駄目だ、この悪魔ひと…

早く、何とかしないと…

》》》

あれから3日経った。

「進展あった？」

「いや、全然だよ。」

「大変ですわね。」

放課後、オカ研2年生の3人で旧校舎の部室に向かう途中、木場に誰か『悪魔になりたい』と云う人が見つかったか？…と聞いてみたが、返ってきたのは やりな答え。当然な話だ。

余程、特殊で重い事情が無い限りは、悪魔に転生しようなんて考える人間は そう居る筈がない。

俺も昨日の夜、アーシアを連れて森沢さん宅で話してたのだが、

「悪魔に転生？」

神崎君、馬鹿な事を言うなよ。

ひ弱な人間である僕が、アーシアちゃんや子猫ちゃんみたいな悪魔の女の子を喚ぶ事に、意義があるんじゃないか!

…な感じに力説された。

》》》

ガラ:

「失礼します。」

「こんにちは〜」

シリユー、アーシア、木場が部室の扉を開けて挨拶する。

「いらつしやいによ♪」

「Noooooooooh!!? (。O。L)」

「あら、お客様?」

3人を出迎えたのは、身の丈推定6尺6寸、強靱な体躯をゴスロリに包んだ、某世紀末霸王な面構えの漢:否、乙漢おとめだった。

未知との遭遇に、『あちら方面』の2人のファンが見たら、泣いて喜ぶ光景な如く、思わず身を抱き合つて悲鳴を上げるシリユーと木場。

そんな中、アーシアだけは、平常運転な受け応え。



「初めまして、アーシア・アルジエントと申しますう。」

「ミルたんだによ！♪」



「…魔法少女になれるなら、この際ついでに悪魔になるのも、構わないそうです。」

Orz

居た…『real』と書いて、『ガチ』に居た。

このミルたん（本名不詳）、聞いてみたら、子猫の昨日の部活しごとの依頼主で、魔法少女に憧れる漢の娘だそうだ。

昨日の夜、訪ねた時の依頼内容が、『ミルたんを、魔法少女にしてほしいによ！』だったらしく、それで子猫が試しに『悪魔になったら、魔法が使えます。』と言ってみたら、凄く乗り気になったそうだ。

そんな訳で今日、リアス部長を訪ねてきたとの事だそうだ。

因みに彼…女は旧校舎へ足を運ぶ前、律儀に学校の事務室を最初に訪れたらしく、来賓プレートを首からぶら下げていた。

事務室の人達も、ビックリしただろうな。

「オカ研に頼る前に、異世界に行くのを薦めるが…」

「もう異世界へは行ってみたけど、ダメだったそうです。」

「行ったのかよっ!？」

部室隣のトレーニンング室、ペンチプレスしながら、バイクマシンに跨がる小猫と会話している最中で発覚した事実。

…と言うよりか、異世界転移が出来たりする時点で、既に十分に魔法少女?である気もするのだが…

「…シリユー先輩。その辺りは、考えたら負けです。」

…うん。小猫も同じ事を思っていたか。

》》》

コンコン…

「シリユーさん、小猫ちゃん、部長さんが部室に来て下さいと。」

「はい。」「ああ、分かった。」

暫くすると、アーシアが呼びに来た。

子猫はトレーニンング室の更に隣の空き教室で、俺はこの場で汗を拭いて、制服に着替え、部室に向かった。

》》》

「さて…皆揃ったわね。」

ミルたんに対して、自分の下僕として人間を辞めて悪魔になる覚悟や、悪魔になった

場合の制約：メリット以上にデメリットの是非を確認していたリアス。

そしてシリユーと子猫が部室に入った時、リアスの隣にはミルたんが立っていた。

それは、即ち：

「皆、今日最初に部室に入ってきた時に、一度挨拶は済ませているだろうけど、改めて紹介するわ。」

今日から私達の新しい仲間、兵士ポインのミルたんよ!!」

リアスに、新しい下僕が誕生した事を意味していた。

「ミルたんだによ。」

先輩方、悪魔になったばかりで、分からない事が沢山ありますけど、よろしくお願ひするによ!」

リアスの紹介で、部員達に新人として、以前、魔王少女がやっていた様なポーズを決めながら、挨拶するミルたん。

「ぼ…兵士ポインって、部長、戦車でなくてですか?」

「ん、それがね…」

リアスが その件について話し出した。

要約すると、リアスも最初はミルたんを戦車にするつもりだったのだが、その戦車の駒を入れ込もうとしても、直ぐに弾き返してしまう…との事。

「残念だけど、今の私の力じゃ、このコを戦車の駒1ヶで悪魔に転生させる事が出来なかったの。」

逆に言えば、戦車の駒1ヶでは、悪魔に転生出来ない程の潜在能力を秘めた人間。

：ならばとリアスは、複数の兵士の駒を取り出し、

「6ヶ…ですか…?」

結果、ミルたんを転生させる為に、兵士の駒6ヶを消費したのだった。

「匙君が確か、駒4つ消費したって言ってたよね。」

「ミルたんの勝ちか…(笑)」

《《》》

「それじゃ早速、彼女のチカラの御披露目と行こうかしら。ミルたん?」

「分かったによ。」

皆、外に出るから、付いて来るによ。」

ひゅん!!

「き、消えた!?!」

そう言うミルたんは、瞬時に その場から姿を消した。

「おっ、早くによ〜!」

「!?!」

そう思えば、外から部室に向かって呼び掛けている。

「今のは、瞬間移動……ですか？」

「いや、只の超スピードだ。」

「只のつて……僕が、全然反応出来なかったんだけど……」

「凄いですわね……本の数分前までは、只の？人間でしたのに……」

「ええ……あのコ、魔力の使い方を理解しているわ。」

「成る程！今のは駒の特性でなく、悪魔イブイルビースの駒によって得た魔力を利用した、加速魔法か

!!

「その通りよ。」

そういつた会話をしながら、オカ研メンバーも階段を降り、外に出て行った。

》》》

「「「「「……………」」」」」

部長に連れられて外に出た俺達は、その儘、旧校舎脇の森の入り口に集まった。

そこにある一本の巨木の前で、既にミルたんがスタンバイしていた。

「じゃ、行へこよ。」

俺達が注目する中、巨木を見据えたミルたんは、空手の様な構えを取って、魔力を集ませせていく。

「！！！！」

そうすると、背中から魔力が溢れ出し、それはミルたんよりも　もう2回り位大きな彼?彼女?の姿を象る様に具現化。

そして次の瞬間、

「これが、魔法少女ミルたんの必殺魔法!

マジカル・ドリーミング・エクスプロージョン!によーっ!!」

雄叫びと共に、2人のミルたんが、巨木に拳を打ち込んだ。

どっどっどっどっどっどっどっどっどっどっど!!

「直接殴るんかいっ!?」：と、ツッコミを入れる前に、その巨木は拳での一撃二撃によって　へし折られると同時に起こった爆発と共に、消し飛んでしまう。

「す…凄まじい破壊力ですわ…」

「あの打撃に、爆裂系の魔法効果を付加したと云うのか…」

「み、ミルたんさん、凄いですう!」

「…強い!!」

「予想以上だわ…」

その破壊力に、オカ研の皆が　驚きの顔と一緒に感想を述べる。

当然　俺も、驚いた。

「ありがとう、グレモリーさん…いや、リアス様！」

ミルたん、おかげさまで、本当に魔法少女になれたによ!!

「

ぶんぶんぶん…

そしてミルたんは感激の涙を零しながら、リアス部長の右手を両手で握り締め、振り回している。

「い、いえ…どういたしまして…

これから宜しくね…。」

「あれ、魔法って言っても良いのか?」

「…本人が喜んでいるんだから、問題無いと思います。」

》》》

その後、部室でミルたんを加えての、軽いミーティングが行われた。

駒王学園の生徒ではないミルたんは、当然ながら『オカルト研究部』には所属せず、あくまでもリアスの下僕として、放課後の時間帯になると、直接部室に魔法陣転移する事になった。

なお、当面のミルたんの新人教育は、姫島先輩と木場が受け持つ事に決まる。

そして…

「ねえシリユー? 今度のゲーム、アナタはアーシアと2人で大丈夫と言っていたけど、やっぱりミルたんも、アナタのチームに加えて貰えないかしら?」

リアスがシリユーに、来週の日曜日に執り行われるレーティングゲームに、ミルたんの参戦を提案してきた。



# 使い魔、ゲツトだぜ！

◇シリユースサイド◇

ミルたんがリアス部長の眷属になった翌日の夜。

「『使い魔？』によ？」

「そう、使い魔ですわ。」

「使い魔は、悪魔とっては基本的。」

「主の手伝いから情報伝達、追跡調査にも使えるんだ。」

「そんな訳で、いきなりで悪いけど、今から皆で冥界の『使い魔の森』へ行くわよ！」

俺とアーシア、ミルたんの「使い魔？」の台詞に、軽く姫島先輩達が教えてくれたのだが…

本当に、いきなりだ。

参考迄に、現時刻、21:23。

俺、アーシア、ミルたんは たった今し方、森沢さん宅で『ケンツロウ』と『田縄ぶりえ』は、どちらが強いか？を熱く、熱く語り終えて帰って来たばかりである。

「…リアス部長、そう云うのは、せめて前日、事前に報せるべきじゃないですか？

報連相つて言葉、知ってます?」

オカ研としての仕事を終え、帰る気満々だった俺が、ハリセンを高く掲げる。

「ひえっ!? ストーツプ!」

シリユー、ハリセン ストオーツプ!!」

そんな俺に、必死な顔で待ったを求めるリアス部長。

「だ、だって、満月の夜でないと、使い魔は入手出来ないのよ〜!」

…らしい。

聞けば、人間界と冥界の月の満ち欠けは殆ど同じ周期らしいが、人間界（こちら）の月は現在、去年の3月に原因不明の一部分爆発を起こし、常に三日月になっている。

それから約1年後の今年の3月になって、何の脈絡も無く、『実は宇宙人の仕業でした』とか『その宇宙人が、今度は地球を爆破すると言っている』とか『その宇宙人が現在、都内の中学校にて生徒を人質に立て籠もり中』だとかニュースになったり。

しかも その人質の中学生というのが、当時中学卒業前のユキコやトーカのクラス全員でしたっていう、胡散臭さ満載な報道が乱れ飛んでいた。

結果、それからは何事も起きておらず、今に至っているのだが。

4月になって、当事者となつている本人達に人質等の件について聞いてみたら、「そんな訳ないじゃない! (笑)」と笑いながら言われてしまった。

話を戻すと、兎に角そんな訳で人間界では既に本来の満月のタイミングを掴む事は普通には出来ず、思い出した様に確認してみれば、実は今夜でしたってオチだそうだ。

「お願い！今夜をハズすと、また来月まで待たないといけないの!!」

ミルさんの為にも…ねっ?」

…やれやれだぜ。

《《》》

「おお、う…」

「か、神崎君!」

「シリユーたん、大丈夫によ?」

「くつく…だから、腹筋割らせるなし…」

リアスの転移魔法陣を使って、冥界の使い魔の森にジャンプしたオカ研メンバー。

…と、駒王学園生徒会長の支取蒼那…否、ソーナ・シトリーに、彼女の眷属である兵士<sup>ポーン</sup>

の匙元士郎。

匙も この度、使い魔を得る事をソーナから許され、オカ研と同行する事となった。

そして現在、シリユーが大絶賛転移酔い。

木場とミルたんが、蹲っている彼の背中をさすっており、そんな様を見ている匙が、

蹲って腹を抑えて笑っている。

「アーシアちゃんは、大丈夫なの？」

「は、はい、私は特に…」

尚、今回のコレで、アーシアの聖母トワイライト・ヒーリングの微笑には、酔い覚ましの特性は無いのが判明した。



「この木の下、約束だったんだけど…」

一行が今居るのは、森を少し入った先にある、周りの木々に比べて一際高い、杉の様な木の下。

この場で、今回の使い魔入手に伴う、森のガイドとの落ち合う予定だったが、待ち合わせの時刻が近づいてきたにも拘わらず、一向に姿が見えない。

「…それにしても塔城さんは、凄い荷物だねえ？」

「備え在れば、憂い無しです。」

まるで某『迷宮探索での劇的な出逢いには是非を問う物語』に登場するキャラクターの1人である少女が背負う様な、巨大なりユックについて匙と子猫が話していたり…そうしている内に、遂に約束の時刻になった。

その時…

「ゲットだぜ!!」

「『『『『『?!』』』』』」

突然、木の上から聞こえる男の声に、シリユー以外の面々が驚きの顔を見せる。皆が上を見上げると、木の天辺付近の枝の上に立つ人影が、満月の明かりに照らされていた。

「とうっ！」

…シユタツ

掛け声と共に、木から飛び降り、途中で一回転半捻りを加えつつ、男は地面に着地。

「俺の名はザトウージ！」

使い魔マスターを目指してるんだぜい!!」

キャップを後ろ向きに被った半ズボンの悪魔は、自信に満ちた顔で名乗る。

「彼が、この森のガイドよ。」

ザトウージ、今回は宜しくね。」

「宜しくお願ひします。」

「おう！この俺様に掛ければ、強いのも硬いのも速いの、どんな使い魔だって楽々ゲットだぜ

！」

リアスとソーナの挨拶に、ザトウージはサムズアップで応える。

「どうでも良いが、こっちは少し前に揃っていたのに、時間ピッタリまで枝の茂みに隠れ

てなくても良かったのではないか?」

「うぐ…気づいていたのか…」

なかなかやるんだぜい…」

しかし、シリユートの言葉にタジタジになってしまおうザトウージ。

《《《

「で、今回、使い魔をゲットしたいってのは、んぐ…そっちのデカイのと こっちの冴えない奴か。」

「凄いな…一見で見分けられるのか…」

「…冴えてなくて、悪かったな。」

一見で、使い魔を所持していない悪魔…ミルたんと匙を判別出来る、ザトウージの眼利きを賞賛するシリユート。

そのシリユートが、ザトウージに質問を投げかけた。

「なあ、ザトウージ、使い魔というのは、人間はゲットする事は出来ないのか?」

「んぐ、今迄、そう云う事例は無いが…」

使い魔ゲットするのに最終的に必要なのは、契約時の魔力だ。

如何に信用信頼を得ようが、或いは実力で屈伏させようが、最後の魔法陣を使つての契約には、本人の魔力が必要なんだぜ。

だから理屈の上じゃ、魔力を持つてさえいれば、種族関係無く、使い魔をゲットするのは可能なんだぜい！」

「…成る程。それなら俺やアーシアが、使い魔を得る事も不可能では無い訳だ。」

「え？」「はい？」

シリユウの台詞に、アーシアとザトウージが声を出す。

「神器持ちなら、魔力は持っている。」

アーシア、俺達も使い魔とやらを得られるならば、入手するぞ。」

「は、はい！」

「へく、何で人間が、リアス嬢さんと一緒に居るのかと思っていいたら、兄ちゃん達、神器持ちだったのかい？」

それなら確かに、使い魔をゲット出来るかも知れないな。」

顎に手を置き、品定めする様な目で、ザトウージは呟く。

「俺としては、戦闘サポートしてくれる…そうだな、パワーよりスピード特化したタイプが欲しいな。」

「ほう…そうだな、自分の特性に合わせて、自分と似たタイプ、または自分に足りない部分を補ってくれるタイプ…」

そういう点を考えて、使い魔を選ぶというのは基本なんだぜい！

お前さん、人間にしては、なかなか分かっているんだぜい!!」

シリユートの発言に、ザトウージは思わず種族を問わずに感心する。

そして

「俺は妖精とか、可愛い女の子系かな?」

この匙の発言にザトウージが、

「はあく…、分かかってないんだぜい、コレだから素人は…」

…と、苦虫を噛み締めた表情で、溜め息混じりに不満を零すが、

「わ、私も、可愛い使い魔さんが欲しいですう…。駄目…なんですか?」

「ミルたんもによ!!」

「いや、やつぱり そうだよね〜!」

どうせゲットするなら、可愛い使い魔のが良いよね〜!!♪」

「は…はい…」

このアーシア（…とミルたん）の発言に、態度が一変。

アーシアの右手を両手で握手しながら、鼻の下を延ばしての会心の笑みで応えるのだった。

「…殴って良いか? 殴って良いよな?」

…ってか、4〜50発、殴らせろ!!」



「さ、匙君、落ち着いて！」

「さあ、もう良いでしょ？」

「そろそろ行きましょ？」

「か、会長〜？」

《《《

「頼むぞ、リバプール。」

「何か居たら教えてくれよ。」

『ぐるぐる…』

使い魔を求めて森の中に踏み込んだリアス一行。

リアス達の前を歩く、ランタンを持ったザトウシの更に前、先頭を進むのは、顎には2本の鋭い剣歯、眉間と顎に計3本の角、身体は赤と白の毛に覆われ金の鬘を持った、見た目は猫科の猛獣を想わせる、雷獅虎と呼ばれる魔獣…木場の使い魔である。

『…!!ぐるぐるろろーっ!』

「リバプール？」

突然、その木場の使い魔リバプールが、目の前の木の上側に顔を向けて雄叫びを上げた。

その先には、

「あれは……」

「ド、ドラゴン……」

「……の子供？」

木の上方の枝に止まっていたのは、紛れもなく、蒼と白の鱗を持った、小型のドラゴンだった。

「おう！あれは正しく、スプライト・ドラゴン蒼雷龍の幼生なんだぜい！

ドラゴンてのは成龍になると、他人の言う事なんざあ、まずは聞きやしないから、使い魔にするなら今の内なんだぜい！」

このザトゥージの説明に、

「シリユー、アナタ赤龍帝なんだから、相性良いんじゃないの？」

使い魔、あのコにしなさいよ！」

「いえ、それなら匙だつて、ザリトラ黒邪龍を身に宿す者よ。

匙、なんとしてでも、あのドラゴンを使い魔にしなさい！」

「なぬ？赤龍帝と黒邪龍だとお？」

リアスとソーナが、本人そつちのけで、蒼雷龍ゲットに乗り気になり、その際にザトゥージがシリユーと匙の持つ神器を知り、驚いたり。

「ふう……だ、そうだが？」

どうする、匙？

お前が その気なら、譲るぜ？」

「お、おう…」

シリユートの言葉に、一瞬だけ迷う匙だが、「よし、蒼スライト・ドラゴン雷龍！

キミに、決めた!!」

そう言つて、木の上の龍族の幼生を指差し、連続ジャンプを駆使して枝を飛び移り、蒼雷龍が止まっている枝まで辿り着く。

しかし、

『キシヤーツ!!』

バリバチイツ!!

「アガガ…ケカキツツサンアヨハ!？」

ゲットしようとして手を差し伸べた瞬間に、強力な雷撃を浴びせられてしまい、ひゅー~~~~~~~~~~~~…

ドンツ!!

悪魔の羽を展開する前に、地面まで真っ逆様、勢い良く落下してしまう。

「さ、匙ーっ!?!」

「匙君!?!」

「アーシアさん、回復をお願いします!」

「は、はい!!」

慌てて駆け寄るシリユー達。

『…フン!!』

そして蒼雷スプライト・ドラゴンの幼生は、暫くの間その様を見てみると、興味を失ったのか、背中の羽を広げ、何処かに飛び去って行った。



「あく、大変な目に遭ったぜ…」

「おう、蒼雷スプライト・ドラゴン龍てのは、綺麗な心の持ち主にしか、心を許さないって云うからな、兄

ちゃんじゃ無理だったみたいだな!」

「早く言えよ!それ、早く言えよ!!」

…そんな会話を交えながら、更に森の奥を進む一行。

びた…

「ん…?リバプール?」

先頭を歩いていたリバプールが、急に歩みを止める。

「…!!この気配、何かが居る!」

「がるるるる…!!」

先に潜む何かに、威嚇するように唸り声を上げるリバプール。

バシヤアツ!!

茂みの中から現れたのは、幾本もの黄色い触手。

胴体…本体は確認出来ないが、その触手はまるで此方の様子を窺っている様に、うねうねと不気味にくねらせている。

「ま、不味いぜ、アレは まだ、正体がハッキリしてないんだぜ!

只、判っているのは、胸の大きな女の子を選び好んで襲うって事だけなんだぜ!」

「「はい?」「「え?」」

「「ほえ?」「「へ?」」

『はああっ?!?』

ザトウウージの台詞に、その場の全員がハモった。

「お、おい、それって、ヤバくないか?」

「応…今この場には、『学園きよぬー四天王』の内、3人が居るんだぞ!!」

「「その呼び方は止めて!!」」

この匙とシリューのやり取りに、リアス、朱乃、ソーナの3人が声を揃えてクレームを付ける。

しかし、それが引き金になったのか、

シュツ…!!

「「き、きやああああああつ?!」」

遂に触手の群が、リアス達に襲い掛かってきたのだった。

## ソーナの秘密!!

シユルル!!

「ひええっ!!」

「あらあらあらあら?」

「いやあっ!!」

「会長おっ!!」「部長!!」

突如、現れた幾本もの黄色い触手は、その身をピンク色へと変化させ、リアス、朱乃、ソーナに襲い掛かる。

触手の群は、先ずは彼女達の手足を拘束すると、その儘 空高く、その身体を持ち上げた。

「む…?」「きゃああああああっ!!」

同時に、ザトウージが言う処の、触手が好むと云う『きよぬー』以外の女子、子猫やアーシアは無論、残りの者達に対しても、

「な…!!」「しまっ…!!」「うわっ!!」

「うおっ?」「によ!」

邪魔立て無用とばかりに手足に巻き付き絡まり、身動き取れない様にする。

「しまった、油断した!

コイツ、想像以上に…速い!!」

「き、騎士である僕が…!」?

油断があつたからとは云え、スピード特化の木場だけでなく、本気になれば、光速で動けるシリユーでさえも驚愕のスピードで捕まえた触手。

「ふ、振り解けないによ!」

「…同じく。」

「ふみい、気持ち悪いですう〜!」

更にはオカ研入部後、シリユーやリアスに鍛えられ、漸く『人間』の平均女子高生並みの運動能力に達しつつあるアーシアは論外の事、戦車である小猫や『素』で戦車同等以上のパワーを持つミルたんできえも、触手に完全に動きを封じられる。

「ぬおっ、身動き取れないんだぜい!」?

「会長おおっ!!」

そして偶然か悪意か、或いは茶目つ気なのか、匙とザトウジは、手足と謂わず、手足諸共、身体全体をぐるぐる巻きに縛り付けての逆さ吊りの状態で、天高く持ち上げら



れた。



姫島朱乃、支取蒼那、リアス・グレモリー。

駒王学園男子生徒公式制定である『学園きよぬー四天王』と呼ばれる4人の女生徒の、その内でもトップ3とされている、現在拘束されている3人に対し、無数の触手は、これから本番とばかりに胸元から或いは裾から制服の内側に侵入、

「ちよ……っ!？」

「あらあらあら?！」

「い、嫌あつ!!」

その身体……その ふくよかな胸をまさぐり始めた。

ヌルフフフフフフフフフフ…

触手の根元、恐らくは『本体』が隠れていると思われる茂みから、不気味な嗤い声が響く。

「ちよ……だ、駄目……」

『ニユル……!?!』

びた…

そんな中、ソーナの胸元を弄くっていた触手が、その卑猥な動きを止める。

『……………』

スウ…

「…へ？」

制服の中の触手を抜き出すと、まるでソーナはお気に召さなかつたかの様に、手足の拘束は解かない儘、ソーナを地上に静かに降ろす。

「な・なな…!!」

わなわなと、顔を赤くして震えるソーナ。

「うおおおおっ!!」

『Boost!!』

ブチィッ

!

それと ほぼ同じタイミングで、縛られたと同時に赤龍帝の籠手を発動させ、小宇宙<sup>コスモ</sup>と魔力を、数度の倍化で増幅させていたシリユウが

「ふう、やっとフリーになれたぜ！」

漸く自身の体の動きを封じていた、黄色の触手を千切る様に粉碎すると、



「「「「「……………」」」」」

俺と木場の何気ない呟きに、黙り込む女子達…と、匙。

「と、兎に角、皆 無事だったんだし？先を急ぎましょー!!」

そんな微妙な空気を誤魔化す様に、リアス部長がわざとらしく声を張り上げ、その場を締めめた。

「その前に、この服って どうかにならないかしら？」

服の中、あの触手の粘液がベトベトで、気持ち悪いですわ…」

「うう…確かに…」

そして改めて出発…しようとした時の姫島先輩の言葉に、リアス部長と支取先輩も、それに同調した。

アーシアも、同じ様な顔をしている。

まあ俺も、縛られた手足がベトついてるから、気持ちは解るが。

「はい先輩、替えの制服です。」

「小猫？」

「塔城さん？」

「小猫ちゃん？」

すると小猫が、背負っていたリュックから、駒王の制服を取り出して部長達に渡す。

「「あ…ありがとう…」」

予想外の準備の良さに、複雑な表情でリアス部長達は着替えを受け取った。

「何を沢山詰め込んでると思っただら…」

小猫、やるなあ！」

「…備え有れば憂い無しです。

こんな事も在ろうかと、用意していて正解でした。」

…どんな事を想定していた？

「はい、シリユー先輩達も。

手足が気持ち悪いでしょう？」

そう言いながら子猫は、残った皆にも一枚ずつタオルを配っていった。

いや、凄いや小猫、正直 見直した。

その巨大リュック、俺は てつきり、お菓子しか入ってないかと思っただけ。

「当然、おやつも用意しています。

はむ…

シリユー先輩、クツキー食べますか？」

…持って来てるんかい…。



「おお、皆、この泉には水の精霊、ウンディーネが住んでいるんだぜい！」

一行が森を掻き分けながら進んで行った先、其処にあったのは透明感溢れる水面の泉だった。

「なぬ!? ウンディーネですと!」

ザトウジの言葉に、匙が鼻息を荒く立てて反応。

「あーひよつとして、アレですか?」

「え?」

皆がアーシアが指差した泉の中央を見ると、水面には大きな波紋が広がっており、その中心が柱を作るかの様に、次第に隆起。

やがて それは、徐々に人の形を成していった。

そして完全に人の形を整えた、正に水の化身と形容するに相応しい、澄んだ水の如きな透明度の高い その容姿は、

「「み、ミルたん…?」」

髪型がストレートロングな点と羽織っている衣コスチュームを除いては、面構えから身体付きま

で、ミルたん其の物だった。

「ち…違…う!! アレは断じて、ウンディーネなんかじゃあなあくいい!!」

orz…そのウンディーネを目にして、何をイメージして何を期待していたのか、両

膝両掌を地に着け、まるで　この世の終わりが来たかの様に項垂れる匙。

『……………』

どんっ！

「うわあっ!?!」

「匙!!」

そんな匙に、ウンディーネの振りかざした拳から圧縮された水の塊…水の魔力弾が放たれ直撃、匙は吹っ飛ばされてしまう。

そしてウンディーネはリアス達を凝視、泉を荒らす輩と判断したのか、連続して魔力弾を撃ち放ってきた。

「によっ!」

この攻撃を、ミルたんが　その場の誰よりも素早く前に立ち出ると、炎を纏わせた拳で　その全てを弾き飛ばす。

バシヤバシヤ

「ミルたん?」

そして感ずる何かの有ったのか、ミルたんが泉に足を踏み入れる。

魔力を使う事により、水面上を　まるで地面の様に普通に歩き、泉中央のウンディー

ネに歩み寄っていくミルたん。

『……………。』

そんなミルたんに気付いたウンディーネも、その場で動じる事無く、自身に向かってくる漢乙を刮目。

『……………。』

そして約2分の間合いで、無言で対峙するミルたんとウンディーネ。

ガシイツ!!

「「ええっ!?!」」

「「な…?」」

「「おお!!」」

「数秒間の沈黙の後、両者は同じタイミングで動き出したかと思えば互いに組み合い、ロツクアップの体勢を取る。」

「このコはミルたんが、何とかしてみせるによ。皆は先に行くによ!」

筋骨隆々な水の精霊と力比べをしながら、仲間に先に進む様に薦めるミルたん。

「…でもっ!」

リアスが戸惑う中、2人は互いの腕を振り切り、数歩後退して距離を空ける。

ドガシヤ!



その後、先に仕掛けたのはウンディーネ。

水面に豪快に己の その剛拳を撃ち付けると、その衝撃で泉の水面は まるで間欠泉が吹き上げたかのように突起、それは その儘、無数の水の柱となってミルタンに襲い迫る。

「マジカル・ドリーミング・エクスプロージョン！によー!!」

どっどおおっ!!

しかしミルタンは それを、背中に具現化させたもう一人のミルタンと共に、爆砕相殺させ、間髪入れずにスピードアップの魔法で一気に間合いを詰め、更には魔力で腕力強化した、渾身の右ストレートを撃ち放った。

バッキィ!! x2

「!!!?」

しかしウンディーネも、同時に右ストレートで応戦、互いの右腕が交わり、互いの左頬に、互いの右拳が突き刺さった。

ガクツ…

体をよろめかせ、片膝を着く両者。

「さあ、早く行くによー」

決して少くないダメージの中、ミルタンは立ち上がり、再度、リアス達に先に進め

と促すが、

「でも、アナタを置いては…」

仲間を置き去りにするのに、やはり躊躇するリアス。

「この場合は、あのコ?に任せて、先に行くんだぜ。」

既に何人足りとも、あの2人の間には割って入れないんだぜ。」

「……………分かったわ。」

朱乃、アナタは此処に残って。

ミルたんを、お願い。」

「はい、部長。」

それをザトウジが諭し、その台詞に納得したリアスが朱乃に この場での待機を指

示、朱乃は それに頷いた。

「…さあ皆、先に進むわよ。」

そして如何にも不安を無理矢理に隠していると云うのが丸分かりな表情で、リアスは

仲間に声を掛けるのだった。

しかし…

「部長、俺も最後まで見届けますよ。」

「ああ、こんな極上カード、ドームのメインでも簡単には御目に掛かれないぜ!」

「はい、シリュー先輩　匙先輩、ポップコーンとコーラです。」

「ありがとう。」

その場から動くのを渋るのが約3名。

「アンタ達、一体何しに　この森に来てると思ってるのよ!!?」

スパカーン!! x3

「この○ばあつ!?!」

そんな3人のド頭に、リアスとソーナのハリセンが炸裂するのだった。

》》》

「きゃあああああ〜〜つ!?!」

「ま、不味いぜ! このスライムは、女の子の衣類だけを溶かすという、森の厄介者なんだぜ!

…てゆーか、目を塞がれて、何も見えないんだぜい!?!」

それは突然な事だった。

ミルたんとうんディーネのバトルの行く末を朱乃に任せて、使い魔を求めて森を進むリアス一行の前に突如立ちはだかった…いや、頭上の木から降ってきたのは、緑色の流動体、スライム。

「な…?」

「い、嫌あああ〜!」

「…えっちいです。」

「は、破廉恥なっ!?!」

リアス、アーシア、子猫、ソーナの女子に狙いを定めて、その身に纏わり憑くと、徐々に着込んでいた衣類だけをドロドロと溶かしていくのだった。

「ちい!まさか、このシリユーに気配を感じさせないとは!!」

「…と、取れない!?!」

その個なのか、はたまた群なのか：恐らくは個であり群なのであろう、判別に迷う程の大容量の、それは、リアス達（の服）を襲うと同時に巨体の一部を分離、瞬く間にシリユー、木場、匙、ザトウジの目を塞ぐ様に、へばりつく。

『ぐろろろ…!?!』

そして木場の使い魔である、雷獅虎リバプールも、身体全体を流動体に包まれ、動きを完全に封じ込められていた。

「まあ、コイツは、着ている物を溶かすだけで命を取られるとかの心配は無いので、問題は無いと言えは無いのだが…」

「「「大有りよっ!!」」」



「こ、小猫、予備の制服って、まだ有るのかしら？」

「制服ではありませんが、予備の服なら用意しています。」

「…安心したわ!!」

シリユー達男衆の目が塞がれているのを改めて確認したりアスが、駒王の制服を溶かされ、深紫のショーツ一枚の姿で物怖じする事無く魔力を練り上げ、滅びの力が込められた魔力弾でスライムを駆逐していく。

「うう…リアス部長、頑張って下さい〜」

既に全てを溶かされ 木陰に隠れてしゃがみ込んだアシアが、完全な泣き顔でリアスを応援。

「…えい!」

ズバア…

更には辛うじて、水色の上下の下着だけは死守している子猫が拳を振るうが、  
「…やっぱり物理は効果が無いです。」

スライムにはダメージを与える事が出来ない。

「もう、量数が在り過ぎると言うか、キリが無いわ!

ソーナ!アナタも手伝って!」

リアスが やはり、魔法で撃退出来る筈なソーナに援護を求めるが、  
「う…む、無理です…」

リアス同様に、ショーツ（白）1枚のみな姿となっていたソーナは、涙目で両手で胸を包み隠し、その場に しゃがんで動けないでいた。



「うおおおおおっ!!」

『Boost!!』

「も、もう少しだ、もう少しで このスライムを引き剥がせr（ガン!!）痛い?!

」と、取らなくて良ーから!

てゆーか、今は まだ、取るなー!!」

シリユーが小宇宙<sup>コスモ</sup>を燃やし、顔に憑いたスライムを引き剥がそうとした時、それに気付いたリアスがハリセンを投げつけ、これを止める。

「な、何故?」

「ちちリユー先輩、今、そのスライムを取ったら、私達の裸を見たって、トーカちゃんにチクリます。」

「そうだ神崎テメー、会長の裸見たらブツ殺すぞ!」

「お…応、わ、解った…」

最初は手助けを止められる意味が分からなかったが、小猫と匙の言葉で漸く理解するシリユー。

「…ならば!!」

『Boost!!』

「この儘で参戦すれば、問題無い!」

そう言いながら、目を塞がれた儘、シリユーは小宇宙<sup>コスモ</sup>を纏わせた拳でスライムを撃破していく。

「…シリユー先輩、まさか、実は見えてるなんて事は、無いですよね?」

「し、視覚を失い、それでも戦う事には慣れてる!!ほ、本当だ!信じろ!!」

このジト目な子猫の発言を、シリユーは必死になって否定した。

◇シリユーside◇

ふう、目が見えないのは問題無い。

しかし、このスライム、数が多いのか本体がデカいのか、本当にキリが無いぞ?

何だか知らんが、支取先輩は動けないみたいだし、子猫の攻撃は効かない…

俺と部長だけでは、正直、少しキツイな。

アーシアは元より非戦闘員。

ザトウージも問題外として、匙と木場も、目隠し状態でスライムの気配を探りながら戦うのは難しいか…。

せめて もう1人：姫島先輩かミルたんが居れば…

バチイツ!!

え？今の感覚は雷撃？

もしかして、姫島先輩が来たのか？



シリユーとリアスがスライムと戦っている中、前触れ無しに雷撃が迸った。

それはシリユー達をアシストするが如く、スライムを攻撃。

「あれは…?」

『……………』

リアスが その雷撃の出先…木の上に目を向けると、其処には森に入つて最初に出逢った、ドラゴンの子供…蒼<sup>スライム・ドラゴン</sup>雷 龍の幼生が居た。

バチバチイツ!!

蒼雷龍は、続け様にスライムに向けて雷撃を放つ。

ぽと…



「あ、取れた…」

雷撃を苦手としているのか、種族的にドラゴン種を苦手としているのか、残ったスライムは、男衆の目を塞いでいた。それを含めて、森の奥深くへ逃げて行った。

「部長、とりあえずは一安心ですね！」

「こつち見んなーっ!!」

「このエロ龍帝えー…」

ガン!

「うわらばっ!!」

◇シリユースィde◇

「…ねえ、小猫? 用意して貰っておいてアレだけど、もつと その…マトモな服って なかったのかしら?」

「うう…: 何で私が、こんな格好を…」

「似合ってますよ? ♪」

「解ってるわよねアナタ達!!」

「コツチ見たりしたら、殺すわよ!」

「…い、いえっさー…」

スライム撃退後、子猫が巨大リュックから、また予備の服装（下着込み）を取り出し

て部長達に渡すのだが、何故か その服装と言うのが…

リアス部長…バニーガール

アーシア…他校女子制服

小猫…体操服

ああ、アーシアのアレは、前に森沢さんから貰ったアニメのヤツだな。

そしてリアス部長…似合ってるな（笑）。

小猫も…ん…。

最後に

支取先輩…レヴィアたん☆

この前の会議の時、魔王少女が着てたヤツと同じコスプレじゃないか！（爆）

…にしても子猫、本当に一体、どんな事態を想定して、そんな服装をチョイスして用意した訳？

》》》

「…わ、我、アーシア・アルジェントの名に於いて命ず…

汝、我が使い魔となり、生涯を掛けて、我に仕えよ…汝が御銘は…ラツシー！」

…あのドラゴンの子供は どういう訳か、アーシアに慣ついてしまい、その儘、使い魔契約の運びとなった。

そもそも あのスライム撃退も、アーシアを助ける為に、この場に現れたと考えるべきなのかな？

「ドラゴンてのは、清らかな心の持ち主にしか、心を許さないと云うぜ。

教会を追放された聖女の噂は聞いていた。…が、まさかそれが、そつちの お嬢ちゃんだったとは、驚いたんだぜい！」

…とは、ザトウジの弁。

自らの魔力で魔法陣を展開させて、使い魔契約を無事に終了させたアーシア。

…って、ラツシー？

「はい！雷撃を操るといふのと、それと…シリユースさんの名前の一部を使わせて戴きました！」

…ま、別に良いけどね。

》》》

「皆、一度、さつきの泉に戻らない？」

ミルたんが どうなったか、心配だわ？」

「…そうですね。」

リアス部長の言葉に、皆が頷き、引き返す事になった時、

むに…

「ん？」

踵を返しての一步、俺は何柔らかい何かを踏んだ。

「何だコレって…え、…?!」

何かと思いい、摘み拾った、少しばかりスライムの粘液で溶かされているそれは、女性  
が胸を覆う下着に附着させる、所謂『詰め物』というヤツだった。

しかも、凄まじい迄のサイズな…

「だ、駄目えー！神崎君、返してー!!」

涙目で顔を真っ赤した、必死の形相な支取先輩が、まるで引つたくる様に『それ』を  
奪う。

あ、よく見たら、今の先輩の胸、え…？

えー…

》》》

トールカを含む、駒王学園きよぬー四天王。

姫島先輩に次いで、学園ランキング2位とされている支取先輩が、まさか実は、下か  
ら2番目だったとは…

『きよぬー』は『きよぬー』でも、支取先輩に限り、漢字で書くと『虚乳』の方だったと  
わ…

「…!!」

ふと匙に目をやると、俺に顔を向けた匙は、最初から全てを知っていたと言いたいが如く、目を瞑って首を降った。

この男、別に会長さんの胸に釣られて惚れた訳じゃないのか…

「あちゃ〜、バレちゃったか〜」

リアス部長が小さく呟いた。

部長曰わく、実は男子生徒は知らない事だったが、少なくとも3年生中心に、女子生徒は殆どが周知だったとか。

因みに この事は木場も知らなかったらしく、驚いた顔をしている。

変態3人衆の兵藤達を筆頭に、男子生徒が「四天王」と持て囃す中、女子が何も言わなかったのは武士の情けだったのか…

「ソーナ様、忘れ物です。」

「けけけ、結構です!!」

ここで小猫が、これ見よがしに特注サイズなブラのパッドを両手に持つて、渡そうとするが、顔を赤くして それを断と受け入れようとしない支取先輩。

そして先輩は、潤んだ瞳に尋常ではない殺気を込めると、俺と木場を睨み付け、

「こ、この事は、内緒ですよ?」

「は、はい……」

その迫力に俺達は、肯で返すしか選択肢が無いのだった。

この時、俺は誓った。

流石に大っぴらにする事は出来ないが……

とりあえず今日、家に帰ったら、自室に音声遮断の結界を張って、大声で　こう叫んでやるんだ……と。

「ソーナの胸は！パッド入り!!」

# 使い魔の森の魔獣！

◇シリユースィde◇

「良いですかソーナ様、無表情の棒読みで言っても反応しません。

可愛い顔で可愛い声で、可愛くポーズを決めないと、解呪されませんから。」

「うう……」

小猫が用意していた着替えの服。

支取先輩が着用していた、魔王セラフォルー・レヴィアタンの正装コスチューム（笑）

は やはり耐えられない物が有ったらしく、結局は また別の服に着替える事に。

しかし、このレヴィアたんコスが曲者。

特殊な呪いで、『特定キーワード』を発しないと脱げない仕様らしい。

何故、そんな服を先輩に？…って、小猫に聞いてみると、少し前に…

《《《

「ねえ小猫ちゃん、これ、絶くつ対にソーたんに似合うと思うんだ☆

何かの機会が在れば、ソーたんに着させてみてくれないかな？☆」

…な やり取りが甘処であり、その店自慢の餡蜜杏仁豆腐と一緒に、コスチュームを差し出され、

「任せて下さい、レヴィアタン様。」

》》》

…つまり、スイーツに釣られた、と。

人、其れを買収と言う。

「あ、ソーナ様、その服、パスコードが認識されると、直ぐに文字通り ぼろって脱げ落ちますから、気をつけて下さい。」

「はいい?」

「…!! ほら、アンタ達! アッチ向いてなさい!」

「は、はい!」 「了々解。」

その会話を聞いていたウサ耳バニーのリアス部長が、俺達男衆に、反対側に顔を向けるように促した。

因みに部長は このバニーのコスチューム、何気に気に入ったらしい。

駄目だ…痴女だ、この人…。

「…それでソーナ様?」



新しい着替えはナースとゴスロリ、それと他校の制服、どれが良いですか？」

「せ、制服でー！」

そして この やり取りの後、

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

♪みるるん　みるみる　すばいらるう〜♪

眩い魔法で凶悪魔神を、たあつくさん消滅させちやうんだ〜☆もんっ♪！

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

背中越に支取先輩の、あの、支取先輩の、ノリノリで軽やかな声が夜の森に響いたのだった。

その数分後、リアス部長の許可を得て振り返ると、そこには黒い髪の○バサ…ではなく、今日一番の涙目で、トリス○イン魔法学院の制服を着た、支取先輩が居た。

先輩の眼が語っている。

「この事は、内緒ですよ!!」…と。

「なあ神崎、会長って…」

「ああ、アレがアニメって、分かってないよな…」

「知ったら、更に泣きが入るな…」



シャババババ…

ニヤガガー!

グロロロ…

「囲まれちまったんだぜい…」

「あんた、冷静だな!」

あの”変態スライム(支取先輩命名)”を退けた俺達は、ウンディーネと交戦しているであろう、ミルタンと合流すべく、使い魔の森の中、先程の泉に向かっていた。

その途中、使い魔の候補とでも云うべきか、夥しい程の魔獣の群に襲われ囲まれてしまった。

種類は様々、狼の様なヤツ、犀の様なヤツ、巨大な蛙に空中浮遊している深海魚?

木場の使い魔とは、また違う猫科な、黒いサーベルタイガー。

ゴリラに猪、漆黒の孔雀に恐竜タイプ。

本当に様々だ。

ザトウジが言うには、体のサイズからして、全てが子供、或いは幼生らしい。

因みに、子供と幼生の違いは曰く、「子供ってのは、普通に成長と共に、体が大きくなり大人になる個体、幼生は脱皮、または繭や蛹からの孵化、或いは文字通り、いきなり変化して成獣になる個体の事を云うんだぜい!」…だとか。

『ぎゃんっ!?!』

その中の一匹、狼タイプの魔獣が襲い掛かっていたが、匙がこれを蹴りで撃退。

『『がるるる…』『』』

その後は向こうも此方の様子を窺っているのか、威嚇するが如く、低い唸り声を鳴らしているが、飛び掛かろうとはしない。

「匙も神崎君も、今が使い魔を得るチャンスです!」

「シリユー、力でねじ伏せなさい!!」

己の力を魔獣に示すのよ!」

リアス部長と支取先輩が、如何にも「この場で使い魔ゲットしろ」とばかりに叫ぶ。

うゝむ、この中で使い魔にするなら、如何にもスピードタイプな、あの黒い孔雀みたいなヤツか…?」

「ずずず…」

「ひいい!!」「ぬ?」「きゃあ!!」

そう考えていると、そんな魔獣の中にスライムが、さっきのヤツとは違うタイプ…恐らくはこの前、墮天使と廃教会で戦った時と同種のスライムが姿を現した。

黒紫の体から毒の靄を吐き出し、目や口に牙、臓器を持っているヤツだ。

「い、嫌ああっ!?!」

スライムは、スライムは嫌なのお!!」

「…えっちいのは、嫌いです。」

先程のアレで、スライムに対して拒否感が半端無い女子達。

特に部長と支取先輩は、前の教会での戦闘や さっきのアレで、完全にトラウマになつてゐるみたいだ。

「リアス、塔城さん、アルジェントさん、こっちに来て!」

「ここで支取先輩が、即座に女子を集め、

「アイシクル・ディフェンダー!」

さながらクリスタルウォールとフリージングコフィンを掛け合わせたかの様な、氷の障壁を自分達の四方に創り出した。

「おお!アレは正しく『デッドリーポイズンスライム』!!

見た目はアレだが、戦闘力的に、一押しの一っただぜ!!」

「匙、分かってますよね!

そんなの使い魔にしたら、眷属も生徒会もクビですよ!はぐれ認定ですよ!!」

「…いえ、しませんから!」

「シリユーもよ!ソイツと契約したりしたら、後で説教よ!!」

「トーカーちゃんに、チクリます。」

「シリユーさん、信じてますから！」

ザトウジは推すのだが、やはり部長達女子には評判が悪い。

…てゆうか、何で俺が このスライムを使い魔にしようとしてるの、前提な訳？



「あゝ、もう！行くぜ、ドライグ！！」

『応よ相棒！Boost！』

「ドラゴン波あ（溜め無し）！！」

リアス達から勝手言われてっただけ呆れ顔なシリユーが、ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手を発動させ、

ドラゴン波で この黒いスライムを吹き飛ばした。

『『『『『キシャー！！』』』』』

それが戦闘開始の合図になったのか、残った魔獣の群も、一齐にシリユー達に襲い掛かる。

「木場、匙、行くぜ！」

「応！」「うん！！」

それに対し、シリユー達も迎撃の構えを取る。

そして、

「ラッシー君、お願い!」

『ぴきー!』

氷の障壁の中で手が出せない女子達、その中で唯一、戦闘型の使い魔を持つアーシアが、先程使い魔の契約をしたばかりの蒼雷龍を召喚、戦いに参加させる。

「行くんだぜい、光宙!!」

『ぴっかー!』

そしてザトウジも、自分は戦えない代わりに、自身の使い魔の1体である、全身に雷を纏った、小型のネズミの様な魔獣を召喚。

シリユー、木場、匙、ラッシー、リバプール、光宙と、魔獣の群との集団バトルが始まった。

『ぴー!』『ぐおーん!!』『ぴっかー!』

どっどーん!!

アーシア、木場、ザトウジの使い魔は偶然にも3匹共に、雷撃系の攻撃を得意としていた。

3匹の繰り出す雷が合わさる事で、その威力は単純な2倍3倍以上の破壊力となり、一度に複数匹の魔獣を消し飛ばす。

「でやあ!」「オラアッ!」「それっ!」

シリユー達も体術や剣術、魔力弾での攻撃で、迫りくる魔獣達を各個撃破。

「ちい、会長は この場で力を示して使い魔契約しろって言うけどー」

「ああ、そんな暇、無いな!!」

そう話しながらも戦闘を進めて行き、漸く残った魔獣も僅かとなって戦いに終わりが見えてきた時、

「新手か…? また数匹、来る!!」

シリユーは遠方から、猛スピードで近付いてくる、強力な気配を感じ取る。

そして 其れ等は直後、シリユー達が戦っている場に辿り着いた。

いや、正確には、シリユー達や その場の魔獣の群は無視するかの様に、通り過ぎて行った。

「…! 皆、この場は任せた!!」

「おい、神崎?」「か、神崎君?」

その疾風の如くな一群を見たシリユーは、何かを感じたかの様に、森の奥深くに追いつけて行くのだった。

》》》

シリユーは見逃してはいなかった。

自分達が魔獣の群と戦っている中を、通り抜けていった一群。

ハッキリと姿を確認する事は出来なかったが、その者達もまた、争いを繰り広げながら移動していたのを。

「あれは…!!?」

そしてシリユーが其れ等に追いついたのは森の最深部、木々が生え茂らず、少し開けた場所。

其処には4体の魔獣が、距離を置いて対峙していた。

巨大な熊の様な魔獣、螻蛄と蜘蛛と蠍が合わさったかの様な異形の蟲、そして翼を持った双頭の蛇。

この3体は体の大きさからして、間違い無く成獣であろう。

そして もう1体…此等3体に囲われていたのは、鹿の様な身体は白い体毛と金銀の鱗に覆われ、頭は龍な如し。

恐らくは今迄の戦闘が原因で全身が傷だらけの、小型の魔獣だった。

「……………」

シリユーが様子を窺う1対3の状況の中、小型の魔獣が双頭の蛇に突撃を仕掛ける。

カッ…

身体全身から一瞬、目が眩む程の光を発したかと思えば、頭部の角から赤、青、黄、白、



黒の5色の光弾を作り放ち、

ボアツ!

『グギャーッ?!』

その光で2本首の蛇を、瞬く間に燃やし尽くしたのだった。

汝が御銘は…

『クジャーツ！』『プロロオ!!』

『……………』

仲間？を斃された、巨熊と異形の蟲が、鹿の様な、馬の様な、龍の様な…小さな魔獣に凶悪な爪と鎌を振りかざし、2体掛かりで襲い掛かる。

その様…鹿の胴に龍の頭と鱗…それを見て、シリユーは呟いた。

「あの姿は正しく…」

その小さき獣の姿は正しく、伝説にある聖獣、麒麟、其の物だった。

「……………」

シリユーは迷っていた。

先程、自分達が魔獣の群と戦っている中を通り過ぎていった時 既に、此等の獣が1対3の様相だったのは判っていた。

そして今も、その内の1体は撃破するも、1対2の不利な戦いを強いられている、麒麟？の幼生。

あの麒麟に助太刀するのは容易い。

しかし、それが本場に正しい行いかと、迷っている。

数の上でも、体躯の上でも不利な側に手を差し伸べる…

それは、問題無くに見えるが、実は違う。

この場は人間社会ではなく、使い魔の森。

この一見、不平等な争いも、この場の其れは、自然の摂理の中の一端、弱肉強食の理の1つに過ぎないのだ。

自身の自称・正々堂々主義の下に、不利な側に加勢して この場を収めたとしても、それは自然という大きな枠組みからすれば、只の自己満足に他ならない。

易々と介入して善くない事柄なのを、シリユーは理解していた。

「くっ…：こういうのは解つてる心算だが、やはり、見ていて歯痒い！」

例え、初見の際に その戦況を見抜き、考える前に体が動き、つい、この獣の群を追いかけてしまっていたとしても…だ。



鋭い爪に鎌、針による攻撃を同時に受け、傷を負う劣勢の中、それでも要所で反撃をする白い麒麟。

先程、双頭の蛇を倒した五色の光は魔力が尽きたのか、それとも『溜め』が必要な

か、放とうとする気配が無い。

『……………』

額から生えている、細長い円錐状の角を、まるで日本刀の様に變形させ、体当たりと同時に熊に斬り掛かる麒麟。

『ゴバアアアアーツ!!?』

『キシャー!』

『!!?』

凶熊に強烈な一撃を浴びせるも、同時に異形の蠅螂が、第2脚に位置する左右の鋏でガツシリと麒麟を捕らえると、腹の先から粘着質の糸を吹き出し巻き付け、その身を雁字搦めにする。

『……………!!』

『ゴラアアアーツ!』 『シャーツ!!』

地に藻掻き、動きが取れない麒麟を、その爪と鎌で斬り裂き貫かんと、腕を、第1脚を大きく高く掲げ、一気に振り降ろす2体の巨獣。

ガキイイツ!!

『シャツ?』 『ゴアツ?』 『……………!?!?』

しかし その凶器は、麒麟の身体に届く事はなく、

「ちい、思わず飛び出してしまった…

体が、勝手に動いてしまった…」

その場に飛び込んだ、シリユートの赤い籠手を纏った左腕に止められるのだった。

『キシヤー!!』

「でえいやあつ!!」

ドゴツ!

その後、招かれざる『乱入者』に対して、異形の蠍が針が付いた様な尾を振り回しながら、突き出し仕向けるが、シリユートはそれを躲すと、逆に前蹴りを一閃、攻撃者を吹き飛ばす。

それに追撃を試みるシリユートだが、蠍も吹き飛ばされる途中で体勢を立て直し、攻撃の構えを見せた。

それによりシリユートも、蠍の攻撃の間合い手前で一時立ち止まり、改めて戦闘体勢で対峙する。

バシユツ!

『グオツ!!』

同じタイミングで、麒麟が身体全身から魔力を解放する事で、自らを拘束していた糸を粉碎。

いや、それは魔力ではなく、

「今のは…小宇宙…だと?」

そう、聖闘士であるシリユーだからこそ、解つたのだが、麒麟が身体から放ち、そして今尚 身体中から発ち込めているのは、紛れもなく小宇宙であった。

バスウツ!!

『グワツ!!』

自由に動ける様になつた麒麟は、シリユーの乱入で、動きが止まっていた熊型の魔獣に、再度 頭部の角で斬りつける。

此によつて、一時的に2組の、1対1の構図が出来上がった。

◇シリユーside◇

『シャツシャーツ!』

この蠅螂? 蠍? が、腕と云うか前脚と云うか、兎に角 巨大な鎌と鋏を振り翳しながら襲つて来た。

それを俺は、紙一重で避ける…つもりだったが、鎌の振り降ろしを横移動で躲した後、次に来た鋏の刺突をバックステップで去なしたと思つたら、いきなり その腕の関節部が鋭い速度で延び、その伸びた分だけ避けきれずに

ズシャアツ!

制服のブレザーとワイシャツを引き裂かれ、極々浅くではあるが、右肩口から左脇腹  
辺りまで、斬りつけられた！

…つて、ななな…何と云う事を…

この制服、どうしてくれる訳？

これ帰った後、母親に何て言い訳すれば良い訳!?

仮に「刀を持った893と戦り合った」とか言ったら、母さん倒れるぜ？

身に負った傷は、薄皮一枚切られただけで、致命傷でも何でもない。

アーシアに頼めば、傷痕も残らず治して貰える。

でも こっちの制服は再起不能だろ？

きっと高レベルな裁縫スキル持ちの姫島先輩でも、お手上げのレベルだぜ？…これ。

こうなったら小猫が、男物の制服の予備も、用意してくれているのに期待するしかな

いのだが、とりあえず…

バサアツ!!

「邪魔!」

俺はズタボロの制服を、脱ぎ捨てた。



「廬山龍戟閃!」

巨大な蠚螂に、全身が浅くではあるが、斬り傷だらけになっている、シリユーの小宇宙<sup>コスモ</sup>を込めた膝蹴りが炸裂。

『!!?』

その小宇宙<sup>コスモ</sup>に、巨熊と交戦中の麒麟が反応、

一瞬だけ、少し驚きの顔を浮かばせ、シリユーを刮目するが、直ぐに目の前の敵に意識を集中させる。

今迄の戦闘ダメージの蓄積に加え、この膝蹴りが予想以上に効いたのか、蠚螂の動きが明らかに鈍くなった。

それを確認したシリユーが、小宇宙<sup>コスモ</sup>と魔力を、左腕の赤龍帝の籠手に集中させていく。

「ド・ラ・ゴ・ン…(Boost!!)…波あつ!!」

そして左拳から放たれた、エネルギー波が蠚螂の頭を消し飛ばし、その頭部を喪った巨体は、その場に崩れ落ち、その後は動く事は無かった。

◇シリユーside◇

予想外に手子摺った蠚螂を下した後、俺は熊と戦っている麒麟に目を向けると、

『……………!!』

殺気こそ込めてはいないが、明らかに、「これ以上、余計な真似はするな」と言いた気な目で睨まれた。



「良いだろう！この先は1対1の、只の喧嘩だ！手出しはしないで見届けてやる!!」

俺が そう言うと、麒麟は一瞬だが口元を緩め、ニヤリと笑った：様な気がした。

そして小さな獣は巨獣に攻撃を仕掛けていくのだった。

麒麟も熊も、双方が爪や角や牙による攻撃で、俺以上に全身傷だらけになっている。

出血具合から見て、決して浅くない傷も両者にある。

『BOWAAAAAAAAAH!!』

『!!』!?!』

その後の幾度かの攻防の後、距離を空けた熊が、大音量の雄叫びを上げる。

質量を持った音の衝撃波が、麒麟と 其の後方、直線上に位置していた俺を襲った。

：例えば：ゲーム風に例えるなら、ダメージにプラスして、その大声で竦み上がらせ

ての『1ターン休み』な効果を与えそうな その攻撃を、俺は身体全身に小宇宙コスモを張り

巡らせてのクロスガードで凌ぐ。

そして麒麟は：やはり大音量の叫びに臆する事無く、そして体に受けるダメージも

お構い無しに特攻、体当たりからの角での斬撃を浴びせると、あの2つ首の蛇に放った、

魔力を練った：否、小宇宙コスモを燃やす事で作り出した、5色の光の弾を撃ち放つのだった。



横になって動かなくなった熊の傍、ダメージが大きいのか、その場で しゃがむ様に

伏せる麒麟の幼生。

シリユーも麒麟の目の前まで歩み立つと、その場で腰を落とし、胡座を掻いて座る。「余計な真似をして、済まなかったな…」

『……………』  
麒麟は逃げるでもなく、そんなシリユーを只単に、『自分に関わるな』と言わんばかりに睨み付ける。

「派手にやられたな…傷は大丈夫か？」

『……………』  
麒麟の表情を察した上でか、それとも気付いていないのか、尚もシリユーは麒麟に話しかける。

「俺の仲間に、治癒のスペシャリストが居る。今も、この森に一緒に来ているんだ。

俺もホレ、見ての通り、全身傷だらけだしな、一緒に治して貰うか？」

『……………』  
麒麟が やや、困惑の顔を浮かべる。

『先程から この人間は魔獣の自分に対して一体、何を言っているのだ？』…そんな表情である。

『俺と一緒に来い…』

俺の使い魔に、ならないか？」

『……………!!』

リアス達が自分にした様に、誤魔化す事無く、敢えてストレートに自分の要求だけを言うシリューに、麒麟の目の色が変わり、決してダメージの少ない体を、無理に震わせながら起き上がると、身体全身から小宇宙<sup>コスモ</sup>を発散して、威嚇するが如くシリューを睨み付けた。

その顔は、正しく『自分を使い魔としたいなら、実力を示せ』と語っているかの様だった。

「ふっ…逃げないっていう事は、少しは脈アリと思っても良いのかな？」

それに対して、地面に胡座を掻いて座っていたシリューも立ち上がると、小宇宙<sup>コスモ</sup>を燃焼させての臨戦態勢を取るのだった。



一方その頃、最初に魔獣の群に囲まれ、襲撃を受けていたりアス達も、匙や木場、使い魔達でそれを撃退、再びミルたんとうンディーネが戦っている筈の、森の泉を目指して進んでいた。

「結局は戻って来なかったけど、神崎のヤロー、一体、どうしたんだ？」

「まあまあ匙君、神崎君にも、何か考えがあったんだよ…多分。」

「…あの凄いスピードで通り抜けて行った獣の群に、何か感じる物があつたのでしよう…多分。」

「し、シリューさんは、理由も無く、その場を無責任に放棄する様な人ではないですから！……多分。」

「多分多分…つて、アナタ達、そこは もう少し、信用してやりなさいよ！」

まあ、何となく気持ちは分かるけど…。」

「リアス…それ、フォローになつていませんよ?」

「さて…と、あのド迫力バトル、決着は付いているのかねい?」

》》》

そんな会話が進む中、ランタンを片手に、森を掻き分けて進むザトウジを先頭に、一行が泉に辿り着いて目にしたのは、

「アンタも なかなか、やるによ!」

『……………♪』

「……………。」

互いに顔面ゴコゴコな状態で、互いに肩を組み合い笑い合っている、ミルたんとうンディーネだった。

「あ、部長、戻ってきたのですね…つて、ぶぶつ…な、何ですの、貴女達の格好!?!」

「う、ドーでも良ーでしょ！そんなの!？」

泣きながら笑いを堪えている朱乃の言葉に、ミニスカートな婦警スタイルのリアスが、目に涙を浮かべながら叫ぶ。

実は あの後、この泉に着く前に、また『あのスライム』と同種の魔獣に襲われていたりアス達。

それは木場と匙が辛くも撃退した物の、その代償として、

リアス：婦警さん（ミニスカート）

アーシア：ナース服（やはりミニスカート）

小猫：モリオン（…とゆーより、○リス）

ソーナ：空琉○遊亭○京

…な、出で立ちとなっていた。

尚、木場、匙、ザトウウジの3人の両頬に、何故か真っ赤な紅葉が刻まれているのは、別の話である。

「そ、それで姫島さん、アレは一体…？」

「それが…」

ソーナがミルたん達を指差して、朱乃に説明を求めるが、

「拳で語り合つて、そして解り合つた…て所でしよう？」

「た、多分、それで合つています…。」

現状を解析した匙が、代わりに答えた。

この後、ウンディーネは魔法陣契約により、『アクア』の名前と共に、正式にミルたんの使い魔となる。

「くっそ〜！ やっぱし この2人のバトル、見たかったぜ…」

「気持ちは分かりますが、次はシリユー先輩を探しましょう。」

《《》》

「うっわ…」

「あらあらあら？」

「はわわわ…」

「むう…」

「ひえっ!？」

リアス達がシリユーの気配を辿って着いた先には、全身を血塗れにして倒れているシリユーと、それを護っているかの様に、やはり身体全身を傷で被われて血塗れとなっている、小さな魔獣が居た。

「炎駒？」

その姿に、思わず自分の兄の下僕：眷属の名を口にするリアス。

シリユーが大ダメージで：血塗れでダウンしているという、予想外の光景を目の当たりにして、驚愕するリアス達。

自分達が居ない間に一体何があったのか、普段からあれだけ説教してるのに、またしても懲りずに上半身真っパになっているシリユーに対して色々と言うリアスだが、その負傷具合に今回は それ所ではなかった。

「あ……部長達……？」

アーシア、来た早々で悪いが、回復、頼めるか？」

『……………』

「は、はい…!!」

リアス達に気付いたシリユーがアーシアに呼び掛け、それに応えて慌て駆け寄り、自身セイリッド・ギアの神トワイライト・ヒーリング器・聖母の微笑を展開するアーシア。

「俺は後で良い…先に、麒麟こいつの治療をやってくれ…」

『……………』

「これは正しく麒麟…しかも幼生ってのは、俺も、初めて見たんだぜ…」

ザトウージも驚きながら呟く。

ザトウウージが言うには、麒麟は その独特な魔力コスモを基とした戦闘力の高さから、森の魔獣にも危険視されて、幼生の内に潰される事が多く、それが『幻』と云われる程に、生存数が少ない由縁らしい。

「それが、多くの魔獣に追われていた理由か…」

その説明に納得するシリユー。

そんな時、

「シリユーさん、この子の治療、終わりました…でも…」

麒麟の傷を癒やしていた、アーシアがシリユーに話し掛ける。

「その…ごめんなさい…この子の古い傷は、治せませんでした。」

そう言って、謝るアーシア。

今回の戦闘で負った傷は痕も残さずに治療できたが、過去の戦いで出来た古傷は治せなかったとの事。

過去の戦いを物語る身体中の傷痕。

特に額の…角の下にある、大きな斜めの十字傷が痛々しい。

「別にアーシアが悪い訳じゃないさ…」

それよりか、俺の治療もして貰えたら、嬉しいのだが…?」

「は…はいー!」





「…我、神崎孜劉の名に於いて命ずる。

汝、我が使い魔となり、我が剣、我が盾、我が目、我が耳、我が脚となり、我と共に生きよ！

汝が御銘なは…エックス!!」

契約用の魔法陣を転開すると、シリユーはその名を額に残った傷痕の形に因んでXエックスとし、麒麟の幼生との使い魔契約を交わす。

カアツ…

「な…!?」

その契約が終わったと同時に突然、エックスの身体全身が眩く煌めき、辺りは強烈な光に包まれた。

その場に居る者全てが、その眩しさに目を手で覆い隠す。

そして やがて光が収まった時、その場に立っていたのは、ラブラドールの成犬程度な体の大きさ…ではなく、競走馬並みの体躯な、白い毛並みと金と銀の鱗を持った麒麟だった。

「…、コイツは更に驚いた…

まさか、リアルに成獣に進化する直前の個体だったとはな…

麒麟の変化に立ち会えるなんて…俺達は運が良いんだぜい…!!」

「す、凄い…」

「綺麗…」

◇シリユースィデ◇

「…さて、これで皆、使い魔を得た事だし、そろそろ帰りましょー!」

エックスとの契約の際の、予想外なイベントに、俺を含む皆が一通り驚いた後、リアス部長が撤収を呼び掛けてきた。

…つて、え? 匙は?

「ああ、俺なら…」

そう言つて匙は、角を含めて全長約40センチの…ヘラクレスとアトラスと深山鋤形を足した様な、カブトムシ型の使い魔を喚び出してみせた。

何それ? 凄くカッコいいんですけど?

「ゴイツが俺の使い魔、ジョースターだ。」

お前が途中で抜けた、魔獣の群とのバトルの後で、ミルたんと合流する途中で契約したんだよ。

お前が抜・け・た・バトルの後で…な!」

「いや、それは悪かったから!」

う…もう少し、ソフトに言ってくれると有り難いのだが…  
しかし、それにしても…

「なあ、ザトウジ、あのカブトムシ? って、まだ森に居るか分かるかい?」

俺は何気無しに、ザトウジに匙の使い魔のカブトムシについて聞いてみた。

「あん? あのギルガメッシュ・ビートルは、確かに珍しい個体ではあるが、探せば、それなりに見つかると思うが…

まさか お前さん、アレも自分の使い魔にするって言うのかい?」

「いや、捕まえて、ヤ○オクに出展する。」

あのカブトムシなら間違い無く高額買い取りで、ウハウハ間違い無しだ。」

「ウハウハ…そんな素晴らしい響きの日本語があったとわ…!」

「はい、シリユー先輩匙先輩。」

虫取り網です。」

「ありがとう。」

俺の台詞に、匙と小猫が賛同してくれた。

「だ・か・ら! アンタ達は何をしに、この森に来たと思っているのよ!!?」

すはかーん!! x3

「「「きゃびりーん?」」」

同時に、リアス部長と支取先輩のハリセンも炸裂した。

「全く…お馬鹿な事 言つてないで、きつさと帰るわよ!!」

「ええ。夜も明けてきましたし…」

う…残念…。夜が明けたなら、仕方無い。

学校に行かないと、いけないからな。

ん?夜が明けた?今から学校…だと?

全然、寝てないんですけど…っ!?



ゴン! x 2

「ギヤーツス?!」

「ん?神崎に匙?」

私の読む、枕草子は子守歌だったか?

その日の1時間目の授業、爆睡していたシリユーと匙の頭上に、担任教師の持つ出席簿の『角』が落ちてきた。

そして、

「オマエラフタリ、アトデ、シヨクインシツニ コイ…ナ?」

「は…はひ…」

全く目が笑ってない担任教師の笑顔での誘いに、2人は声を震わせ、泣きながら首を縦に振るのだった。

# 開戦! シリユー vs ライザー!!

5月■日(日)。

ついに、ライザー・フェニックスとシリユーとの間で行われる、レーティングゲームの日が やって来た。

ガラ…

「やあ。」

「シリユー、遅いわよ!」

「な…!? まだ、30分前ではないか?」

時刻はAM9:30。

シリユーがオカ研部室に顔を出した時、既にアジアを含む部員が勢揃い、

「シリユーたん、遅いによ。」

駒王の生徒ではないので部員ではないが、数日前にリアスの眷属となったミルたんも、きつちりと部室に来ている。

そして、

「お待ちしておりました、神崎様。」

「グレイファイアさん…」

今日のゲームの進行責任を、魔王から任されている、グレイファイア・ルキフグスの他にも、

「よっ、応援に来てやったぜ！」

「神崎君、今日は赤龍帝の お手並み、拝見させて貰いますね。」

駒王学園高等部生徒会長の支取蒼那：ソーナ・シトリーが、自身の女王クイーンである真羅椿姫や兵士ボーンの匙元士郎等、生徒会役員を中心とした眷属全員を引き連れ、部屋に来ていた。

◇シリユースィდე◇

「…では、私達は、これで失礼します。」

時間が来たら、転移魔法陣が現れますので、それに入って下さい。

ゲームのスタート地点：赤龍帝チームの本陣にジャンプしますので。」

オカ研の皆や匙、支取先輩に新羅先輩と、色々と話していると、やがてグレイファイアさんが それを締める様に話し掛けてきた。

…ていうか、また魔法陣で転移か…

「安心して下さい、転移酔いはしない仕様に調整しています。」

おお、俺の不安を見事に払拭してくれる。

この辺りは流石はメイドさん、至れり尽くせりとは、この事を云うのだろうか。

「…多分。」

…をゐっ!? 俺の感心、返せ!

「それじゃ、シリユー、頑張つてね。」

ミルたんとアーシアも。

…てゆーか、絶対に勝ちなさいよ!

信用してるからね!!」

「任せろ!」

リアス部長が退室前に激励。

彼女からしたら自分の縁談破談が賭かっているだけあり、多少なり目が血走っている物の、凄く顔が、真面目になっている。

あんな真面目な顔の部長、初めて見たかもしれないな。

「相手は不死身のフェニックス。」

油断は禁物だよ。」

「大丈夫。シリユー君達なら、きっと勝てますわ。」

木場や姫島先輩も、笑顔で声を掛けてくれる。

「シリユー先輩、勝てたら御褒美に、トーカちゃんには内緒でスイーツ食べ歩きデートしてあげます（すばーん!）あ痛あっ!?!」



「ははは……ありがとな。」

でも悪い、俺、トーカ一筋なんだ。」

まあ、気持ちだけは有り難く受け取っておくよ。

そう思いながら俺は、場を和ませようとボケてくれた　このチビツ娘に、笑いながら感謝の気持ちを込め、軽く張扇ツギミをくれてやった。

……って、そのスイーツとやらの代金は、誰の財布から出る予定だったのだ？

「神崎君、今回のゲーム、椿姫や匙は兎も角、他の生徒会の皆に、貴方の実力を示すチャンスです。」

見事な戦いを、期待しています。」

そして支取先輩の、この言葉。

確かに俺は、先輩方や匙を除く、生徒会の面々からは信用されていないと云うか、認められてないと云うか、嫌われてると云うか……

先輩曰わく、連中は、如何に赤龍帝と言っても、所詮は悪魔ではなく『人間』と思っ  
ているらしい。

全く……自分達も少し前迄は、その『人間』だっただろうに、人を棄て、力を得た途端、  
優越感からの種族差別か……

尤も　それは、以前の会議の時から感じてはいた事だが、

「……………」

何か言いた気な顔で残りの連中……先輩の眷属で、大学生である人狼サン以外の奴等が、俺の顔を見てると云うか、睨んでいると云うか……

まあ、俺としては、派手に暴れさせて貰うとするさ。

精々、ドン引かない様に、注意しとくんだね。

「最後に神崎様……いえ、赤龍帝殿。

此の度のゲーム、グレモリーとフェニックス。

両家の家族の皆様は勿論、魔王様や元老院の皆様も、観戦される予定になっております。

皆様方、伝説の赤龍帝の名に相応しい戦いを、期待している……との事です。

それでは……御武運を……」

グレイフィアさんの この言葉と共に、リアス部長達も部屋を出て行き、部室には俺、アーシア、ミルたんの3人だけとなった。

》》》》

「来たみたいによ……」

それから少しして、部室に転移用の魔法陣が、効果音も無く現れた。

「よし、行くぞ……!」

「は、はい!」「によ!」

俺達は、その魔法陣の上に立ち、戦場へと転移するのだった。

》》》

「(ハハ)は…」

「部室…によ?」

「もしかして、転移に失敗したのでしょうか?」

転移した…と思えば、その先は また部室だった。

「いや2人共、窓の外、空を見ろよ。」

「…によ!」「ハ、これは…?」

俺達が見た窓の外の景色、それは何時もの旧校舎から見る、何時もの学園の風景。

しかし 空だけが、今日の朝からの快晴の空でなく、何も無い…雲も、星も、太陽も

無い真つ白な空…

何の ざわめきも聞こえない、まるで時が止まったかのような静寂の空間だった。

『…ライザー・フェニックス様、神崎孜劉様、聞こえていますね?』

「!!?」

この時、グレイフィアさんのアオウンス声が、学園内?に響き渡った。



『本日のレーティング・ゲームの舞台は、リアスお嬢様の学び舎である、駒王学園を模した空間で行われます。』

ライザー様の本陣は本校舎の生徒会役員室、神崎様の本陣は旧校舎、オカルト研究部部室とします。

此より約1時間、戦略の打ち合わせや自陣にトラップを仕掛ける準備時間とします。各部屋のテーブルに、学園の地図が置かれている筈ですが、ゲームスタート迄は、その地図内でライン分けされている、相手陣営の侵入は禁じます。

AM11:00に、ゲームスタートとします。

尚、その開始時刻前には、両チームはそれぞれの本陣で待機して置いて下さい。

ゲームスタート時に、本陣にフルメンバーでない場合、即座に失格となりますので、注意して下さい。』

グレイフィアのアナウンスが終わった後のオカ研部室（仮）では、

「…だ、そうだ。」

「はあ…」

「それじゃ早速、作戦タイムによ。」

「いや、この人数で向こうのフルメンバー相手に今更、作戦も何も無いだろ?」

「はあ?」「によ!」

アーシアとミルたんが やや驚きの声を上げた先には、明ら様に何やら企んでますと言わんばかりな、凄く悪い顔しているシリユーがいた。



一方その頃、旧校舎を発ったオカ研と生徒会の面々は、ゲーム進行と審判の役目のあるグレイフィアと分かれた後、ゲームの観戦用モニターが設置されている、生徒会役員室へと足を運んでいた。

カチャ…

役員室の扉を開くと、

「やあ、リアス。久し振りだね。

ソーナさんも、久し振り。」

部屋には先客。

紅色の髪を長くした優男が居た。

「おおお、お兄様?!」

「さ、サーゼクス様?」

「魔王様が、何故?」

その男を見た途端、慌てながらも一礼する、オカ研と生徒会の一同。

魔王サーゼクス・ルシファー。

冥界悪魔陣営、四大魔王の1人。

そして、リアスの実兄である。

因みにグレイフィアの旦那さんでもある。

ついでにシスコン。

「…それで、お兄様? 一体どうして?」

何をしに、此処迄来られたのですか?」

「はっはっはー…連れないぁリアスは。」

今日のゲーム、可愛い妹と一緒に観ようと思ったに決まってるじゃないか。」

「…ま、魔王様方は、冥界で元老院の皆様と御一緒に観戦すると伺いましたが…?」

「ああ、御老人の相手なら、アジユカとファビウムの2人に、押し付k…コホン、任せて来たよ。」

「お義姉さま…グレイフィアは、この事を知ってるのですか?」

「ああ、既にバレてるよ。」

先程、『後で、お仕置き』ってメールが届いたよ。ああ、怖い怖い♪」

「お兄様…」

はあ~~~~~」

このサーゼクスの、余りにも魔王らしからぬ無責任さに呆れ返り、ガツクリと肩を落とし、深い溜め息を吐くりアス。

「ははは…」「あらあら?」「クス…」

その やり取りに、サーゼクスの『リーアたん大好きっぷり』を よく知っているオカ研メンバーが、思わず笑みを零す。

事情を詳しく知らない、生徒会メンバーも、この兄妹の微笑ましい やり取りに顔を綻ばしている。

そう、1人を除いて。

ソーナ・シトリー。

この和やかな雰囲気の中、彼女だけが1人、緊張感漂う表情を崩そうとしない。



先程、サーゼクス様は、何と仰られた?

確かに 此の御方は謂われた。

『御老人の相手なら、アジュカとファビウムの2人に、押し付けた』…と。

そう、アジュカ様とファビウム様の、2人…と!!

そもそも、このシस्क…いえいえ、この妹思いなサーゼクス様が此の場に来られていて、あの人が大人しく、あの老害共…コホン、元老院の方々の御相手をしているなんて、絶くつ対に有り得ません!!…ならば!!



そう思考を張り巡らせ、眼鏡をキツラーン☆と妖しく光らせながら、天井を見据えるソーナの頭上に、

「ソくたくん☆! 会いたかったよ☆!!」

「…や、やっぱり!?!」

アニメの魔法少女のコスチュームを着込んだ、黒髪ツインテールの女性がダイヴしてきた。

すつかばーん!!

「あああうっ!?!」

しかし、それは、何処から取り出したのか、ハリセンを手にしたソーナの、カウンターでのフルスイングで迎撃される。



「痛ひ…(T|T)」

「自業自得です!! いきなり何をしてきてるんですか、お姉様わ!?!」



真つ赤になった鼻を押さえ、うるうると涙を流す魔王の一人、セラフオル・レヴィアタンに、ハリセンを持ったソーナが、先程のリアス同様に呆れながら話す。

「…で、一応聞いてみますが、何故、此方に？魔王様？」

眼鏡の下の目を、じと〜つとした目つきで問い質すソーナ。

「う〜、だって、ソータンに会いたかつたんだもん…それに…」

「…それに？」

「どうせ観戦するなら、シリユーちゃんの事を、よく知っているリアスちゃん達の解説を聞きながらの方が、より深く観戦出来るかな〜？つて☆

あ、お爺ちゃん達の お守りなら、アジュカちゃん達に押し付けて来たから大丈夫、問題無いよ！☆

(((((いよいよいよいよ、有り過ぎるだろ!!))))))

その場のサーゼクスを除く全員が、心の中で、この魔法少女にツッコむのだった。

◇シリユー side ◇

「さて、とりあえずは、ゲームのルールや流れの お温習いだ。」

作戦不要…と言ったら、涙目なアジアと怒氣を孕んだ眼のミルタンに、思いつきり睨まれた。

仕方無く、俺が考えている、粗方の説明をする事に。

皆でソファアに座ると、テーブルの上の学園地図を指差しながら、

「普通、このフィールドなら…ミルたん、どういう戦略を取と思う?」

「にゅ…? 先ずは旧校舎を囲む森に、罨<sup>トラップ</sup>を仕掛けて防御を固めた上で、運動場を…いや、

先に体育館を占拠して、新校舎へのルートを確保するによ。」

「ん。正解だ。…普通ならな。」

「え? シリユーさん、駄目なんですか?」

「確かに互いにフルメンバーなら、この体育館を拠点というのが、戦況の要になるのは間違いない。」

しかし俺達は、その戦略を実行するには、余りにも人数が少な過ぎる。

3対16…ミルたんの『駒』の価値で修正しても、8対16だ。」

「……………」

「それに相手は既に、何度もゲームを経験しているチームだ。」

公式の記録は8勝2敗。

だが、リアス部長曰わく、その2敗と云うのは所謂接待プレイだったらしい。」

「……………」

「ゲームの記録映像は見たよな?」

各駒の特性を充分に活かし、理詰めた戦術を執るかと思えば、敢えて戦車を囿にして、

兵士で討つと云う、トリッキ変則な方法も仕出かす。」

「いきなり、あのライザーさんが飛び出して、無双してたゲームも ありました。」

「ああ、そうだ。」

不死身のフェニックスだからこそ、実行出来る戦法だ。

そんな、様々な戦り方を執るチームに、この人数で執れる作戦なんて、限られてる。

だからこそ、考えるんだ。

相手は、どんな作戦で来るかってね…

そして俺達は、その上に行く!!」

≡≡≡

「…なんて事を、今頃は考えているんだろうねえ、あの赤龍帝君は。」

本校舎のフェニックス本陣で、不敵に笑うライザー。

「それで、ライザー様あ?」

「今回、私達は どう動くんですかあ?」

そんなライザーに、丈の短いスカートなセーラー服を着た、2人の猫耳少女が尋ねた。

「待って、いけば良いのさ。」

この人数差だ、セオリー通りなら、あの森に小賢しいトラップを仕掛けて、攻めてき

た此方の数を削る、少なくとも消耗させた上で仕留めようとするか…」

「…3人揃って本校舎こちからの裏口から突撃、或いは正面と裏との二手に別れての奇襲くらいしか、思い浮かびませんわ。」

ライザーの台詞に、女王クイーンのユーベルーナが言葉を添える。

「その通りだ。」

わざわざ此方から出向いて、トラップの相手をしてやる義理も無い。

あのゴツイ新米の兵士ボーンを仕留めたら、回復役の聖女を赤龍帝と引き離す。

後は…俺がサシで勝負してやるよ。

如何に赤龍帝と云えども、所詮は転生もしていない人間だ。

不死身フエニックスの俺が、負ける要素は何一つ無い。

魔王様達に…そしてリアスに、俺の実力を示してやるさ。

そうすれば、リアスも納得するだろ?」

≡≡≡

「…くって、考えているのだろうな、あのライザー・フエニックスは。」

自分の読みを、アーシアとミルたんに話すシリユー。

「だったら、どうする心算によ?」

「そうだな、とりあえずは…」

パタ…

そう言うとシリユーは部室の窓を開け、遠くに見える、ライザー側の本陣のある本校舎を見据えるのだった。



AM10:50

『ゲーム開始10分前となりました。』

双方、そろそろ準備を終え、各本陣での待機をお願いします。』

レプリカの学園空間に、グレイファイアのアナウンスが渡り響き、そして…

AM11:00

キーンコーンカーンコーン…

『ライザー・フェニックス対赤龍帝、レーティング・ゲーム、スタートします!』

ゲーム開始の予鈴ゴングが鳴り響いた。



「さて、赤龍帝は、どう動く?」

今回は貴様が学生だからと云う理由で、制限時間が明日の朝、7時迄なんだぜ?」

今回のゲーム、制限時間内に決着が着かなかつた場合、判定等は無く、引き分けに終わる。

つまりそれは、リアスとライザーの婚約は破棄されない事を意味している。

「ふ……」

余裕と自信を隠す気が無い顔で、携帯式の双眼鏡を手にするライザーが旧校舎オカ研の部室の様子を伺おうと、その双眼鏡を覗き込む。

そして、その眼に写ったのは……

「……な!？」

右手を左手首に添え、赤い籠手に覆われた左拳を自分達に向けて立っている、シリューの姿だった。

「ま、マズい!お前等、この部屋……いや、この建物から出るぞ!」

「……………えっ!?!……………」

「……………はい?……………」

しかし、このライザーの指示は少し遅く……

「ドラゴン波!改め……(Boost!!)」

……廬山漆星龍珠!!」

旧校舎、オカルト研究部の部室の窓から放たれた、魔力と小宇宙<sup>コスモ</sup>が融合された破壊のエネルギー波が本校舎目指して一直線、森を、体育館を吹き飛ばしながら直撃、その儘校舎を完全に崩壊させたのだった。

『ら、ライザー・フェニックス様の…  
兵士<sup>ボーン</sup>8名、騎士<sup>ナイト</sup>、戦車<sup>ルック</sup>各1名、戦闘不能《リタイア》です…』

# 魔法少女☆ミルたん!

「…な…?」

「…はあ!」

「くつくく…派手過ぎるっつの!」

「これが…赤龍帝…」

「…強い!!」

「あらあらあら?」

「あははは…」

「…ふむ。」

「よ…良っし…!!」

「おおおっつ!!」

「へえ…」

現実世界の生徒会役員室、ゲーム開始早々のシリュウの繰り出した一撃を見た、オカルト研究部の面々、生徒会メンバー、そして2人の魔王が様々な反応を示す。





「な、何という凄まじい破壊力だ…」

「まさか、此程迄とは…」

「これが、今代の赤龍帝…」

「ふあ…目が覚めたし…」

「……………!!?」

「これは魔王様達が、あれ程迄に必死に悪魔陣営に引き込もうとしたのも…」

「ふむ、納得…ですな…」

それは冥界でゲームを観ていた、残る2人の魔王や元老院に属する上級悪魔貴族、そしてグレモリー家とフェニックス家の現当主達…即ち今回、リアスとライザーの婚約を決めた、2人の家族達も同様。

赤龍帝の力に ある者は驚きの声を上げ、ある者は、驚きに言葉を失う。

》》》》

「…馬鹿な…?」

「あ、有り得ませんわ…!!」

「く…まさか、いきなり本陣から本陣へ、直接仕掛けてくるとは…!?!」

そして これを一番驚いているのは当然、直接に この攻撃を受けた、ライザー・フェニックスと 辛くも難を逃れた眷属達である。

本陣のある本校舎が壊滅。

ライザーは此方が動かなければ、何れ敵は痺れを切らし、フルメンバーで本校舎に突撃を仕掛けて来ると予測。

そうしないと今回のレーティング・ゲーム、例えば自分達は最後迄 不動による引き分けても構わないが、『絶対勝利』を課せられているリアスの『代理チーム』は そういう訳にもいかない。

それを踏まえて校舎内の至る所に…それは もう、刻○館も吃驚なレベルな程にトランプを仕込んでいた。

ベタな落とし穴から虎鋏、槍を仕組んだ床に圧迫する壁、墮ちてくる天井…階段を転がり落ちる鉄球に鉄砲水、更には金タライに三角○馬…突撃してきたシリユー達が、ありとあらゆるトランプの連続コンボに引つ掛かり苦悶する様を、その為にだけ本陣に設置したモニターで、下僕達と乳繰り合いながら腹を抱えて嗤い観る予定が、一瞬にして瓦解してしまつた形である。

「クソが…」

「ライザー様…?」

あくまでも怒りの感情は、内面に留めておく心算なライザーだったが、結局は それ

を隠しきる事は出来ず、その余りの…今迄 下僕の誰一人、見たことも無かった鬼気溢れる形相に、十二単を着た黒髪の少女が、そして女王クイーンのユーベルーナが心配そうな表情を浮かべながら、ライザーに声を掛け、

「ちい…なかなか面白い事、やってくれるじゃねえか！あ・の・赤龍帝がああつ！！」

ぶおおおおおつ！！

「落ち着いて下さい、ライザー様！」

顔の半分を仮面で隠した少女が、軽装鎧のバンダナ少女が、やや冷静さを欠き、身体全身から憤怒の炎を噴き出している自分の『王』を宥める。

《《《

「お兄様、落ち着きまして？」

「ああ、済まなかつたな…。」

少し、熱くなり過ぎたみたいだ。」

少しの時間が経ち、漸くクールダウンしたライザー。

この男を『兄』と呼んだ、ピンクと白を基調としたドレスに身を包んだ、金髪ドリルヘアの少女は、体育館や森等の遮蔽物が無くなり更地となり、丸見えとなった相手側本陣の旧校舎に目を向けながら、

「…どうやら、少しばかり、悔り過ぎていたみたいですね。」

如何に『人間』と云えども、流石は伝説にある『赤龍帝』と言った所…ですか。」  
興味深げに呟いた。

》》》

「はわわわわ…」

「す、凄いによ…!!」

一方、旧校舎では、やはりゲーム開始早々にシリユーが放った一撃を間近で見た、アシアとミルたんが また、それぞれ驚きのリアクション。

「半分も残したか…」

あの、ライザーとやらと女王以外は、全て片付けたかったのだが…」

「いえいえいえいえいえ！」

何処までオーバーキルする心算だったんですか、あなたわ?！」

「十分だによ!ミルたんの魅せ場が無くなるによ!!」

しかし、それに、シリユー自身は納得のいかない顔を見せると、それは贅沢だと、チームメイト2人にツツコまれる。

特にミルたんは、リアスが自分の新しい眷属として、冥界から観戦しているであろう、身内に対しての御披露目な意味を込めて、半ば無理矢理に頼んでの助っ人参戦だけあり、多少は戦わないと立場が無い。

「分かった、分かったから!!」

ボスト、あのクイーン以外は、ミルトんに任せるから!だから、近い近い近い!!」

使い魔である水精ウシデインネのアクアと共に、弩アツプで迫るミルトんに、たじろぎながら約束するシリユー。

「それに、シリユーさん一人で終わらせたりしたら、後で部長さんに、また お説教されますよ?」

「ああ…分かってる…。」

このアーシアの言葉に、精神的に げっそりと疲れきった顔なシリユーが頷いた。

「赤龍帝!」

そして、その配下の者達よ!!」

「「!?!」」

その時、外から部室内のシリユー達を何者かが大声で呼ぶ。

「あの人達は…?」

「ん?」「によ?」

アーシア達が窓から外を見ると、其処には4人の少女が旧校舎玄関前で立っている。

「表に出ろ!!」

「小細工拔きの勝負を所望する!!」

2階の窓から様子を窺うシリュー達に、軽装鎧の少女が剣を向けて、勝負を要請。  
「…計画通り…かな?」

それを見たシリューの口から、笑みが零れ落ちた。

シリューの計画…

先程も少し説明したが、仮に、両者共に動きが無く、決着が着かなかった場合、ゲームは引き分けでも、婚約云々を賭けた勝負に於いてはライザーの勝ちと言つても過言ではない。

…と、なると、シリュー達には攻めの一択しか無いのも事実。

そうだからこそ、敵本陣の新校舎は、トラップ罠だらけになっている事は、容易に想像出来た。

故にシリューが最初に執った策は、『先ずは自陣から不動で攻める』だった。

それで決着が着けば、それで善し、そうでなくとも、罠を取り除き、見通しを良くした上で敵の数を削り減らせば、後は互いに正面からぶつかるのみ…。

「しかし、まさか、彼方から出向いて来てくれるとは、思わなかったけどね。」

「…でも、真正面過ぎなのは、ゲームの特性上、どうかと思うによ?」

「まあ、言うなよ。あーゆー真っ直ぐなヤツは、俺は嫌いじゃないぜ?」

そう言いながら3人は、外に出るべく、階段を降りていった。

◇シリュー side ◇

「はっはっはっは！

堂々と真正面から出てくるとはな！

お前達のような戦士が居てくれて、嬉しく思うぞ!!

私は そういうバカが、大好きだ！」

……………。

お前が言うなよ…。

前言撤回。

俺は こんな頭の痛い娘、苦手だ。

「改めて名乗らせて貰おう！」

私はライダー様に使える騎士<sup>ナイト</sup>、カーラマイン！

…で、コツチの陰が薄くて暗<sup>モブ</sup>そうなのが僧侶<sup>ビショップ</sup>の美南風、こつちの脳筋っぽいのが、戦車<sup>ルーク</sup>

のイザベラだ！」

「モ…モブって何ですか!？」

「だ…誰が脳筋だ、誰が!？」

お前にだけは、言われたくはないぞ!!」

モブ扱いされた十二単と脳筋呼ばわりされた仮面サンが、カーラマインという女に非

難轟々を浴びせるが、この騎士<sup>ナイト</sup>は それをスルーし、

「そして、此方の御方が、レイヴェル・フェニックス様に在らせられるー!」

残った……1人だけ別格の雰囲気醸し出しているドリルロールの金髪を紹介した。

……つて、フェニックス?

「ふっ……気が付いたか……」

察しの通り、この御方は、ライザー様の実の妹君だ。」

「……………」

「はあ? 実の妹だと?」

俺が思った疑問に、脳k……イザベラと紹介された女が答えてくれた。

「ああ、ライザー様曰わく……」

ほれ、世間では妹萌え……だったか?

居るだろ? そーゆーのに憧れたり、羨ましがったりする奴等?

まあ、俺は別に妹萌えじゃないが、下僕ハイレムに各属性を揃えたいっていう拘りは持つてい

るからな。

そう云う意味では、レイヴェルはツンデレ属性も兼ね揃えているからな、正しくプレ

ミアム!

1粒で2度オイシイってヤツさ!!



…だ、そうだ。」

あ、阿呆かーっ!!

あの男は一体、何を考えて眷属を集めているのだ?!

そう思いながらも、

「…ならば、此方も名乗らせて貰う!

赤龍帝…神崎孜劉だ!!」

「リアス様の兵士<sup>ボーン</sup>、魔法少女・ミルたんだによ!!」

俺に続き、ネコ耳カチューシャに何時かのセラフォル・レヴィアタンと お揃い(色

違い)な装備のミルたんが、何処から取り出したのか、マジカル・プリンセス・ロット魔導 姫 棍を豪快に ぶんぶ

んと振り回した後、横チエキポーズを決め、最後に

「わ、我が名は あーしあ・あるじえんと!

お、堕ちた聖女にして、赤龍帝様の傍らに寄り添い、毎晩、ゴゴゴ、御奉仕プレイする者な r (すぱーん!) 痛あい!」

何やら お馬鹿な口上を…恐らくは白髪の ちんちくりんに要らぬ事を拭き込まれたのであろう、多少テンパリながらポーズを取るシスター服を着た金髪少女の後頭部に、思いっきりハリセンをくれてやった。

「な…あ、貴方は自分の下僕に、何を仕込んでおられますの?」

「あー、今のは流石に ないわー…。」

「さ…最低で最悪だな…」

キミ、イケメンが台無しだぞ?」

「…きも。」

「ちよつと待て!」

今のは断じて、俺ではない!!

それとアーシアは体面上、俺の部下となつてゐるが、別に下僕とかでもない!」

しかし、これで向こうの4人が何を勘違いしたのか、俺をまるで汚物を見る様な目で

見始めた。

大体、それを言うなら、ライザーのハーレム至上な趣味は、どうなのだ!?

…因みにミルたん的には、これは『アリ』だった様で、特にツツコミも引きも しま

かったが…とりあえず小猫、後でOHANASHIだ!。

》》》》

「コホン…ま、まあ、赤龍帝は代々、変わり者が多かったと聞き存じております。

…ですので、貴方の様な趣味も、赤龍帝ならば仕方が有ります

「いや、だから、違ふと言つてゐる!」

一連の やり取りの後、何やら納得したかの様に話すレイヴェル・フェニックスの言葉、全力でシリユーが否定。

「ふっ…まあ、レイヴェル様？」

こんな お喋りは此処迄にしましょう。

おい、その兵士ポイン！

貴様 先程、自らを魔法少女と名乗ったな？

ならば、此方は美南風！

お前の魔術で相手をしてやれ！」

「…何故、貴女が仕切っているのですか？」

まあ、良いでしょう…。」

スツ…

カーラメインをジト目で見つめながら、十二単を纏った黒髪の僧侶ビシヨツ、美南風が一步、前に歩み出た。

「指名によ。行ってくるによ。」

そしてミルたんも、前に出る。

「…分かつてますわね、神崎様？」

手出しは無用ですわよ？」

「ふっ…其処迄、無粋じゃないさ。」



「覇あああ…っ!!」

先制を掛けたのは美南風。

魔力を練り上げ、火球、氷塊、石塊、鎌鼬を同時に作り出し、其れ等を一度にミルたん目掛けて撃ち放つ。

「によおっ!」

バシイッ!

しかしミルたんは、魔力を纏わせた拳で、それ等を悉く撃ち弾いた。

「な?バカナ?」

「次は、ミルたんのターンによ!」

有り得ないと言いた気な顔の美南風に、加速魔法を駆使して、一気に距離を詰めるミルたん。

「ひいっ!」

バツ…

その迫力に、思わず顔を引き攣らせ、思わず羽をげて後方に回避しようとした美南風だが、

ガシィッ…

!!?

「捕まえたによー！」

それは少し遅かった様で、右の足首を掴まれ、捕まってしまおう。

そしてミルたんは尚も空中に逃げようと、もがく相手を、自分の両肩に担ぎ、仰向けの姿勢で固定、腿と顎を掴むと

「ミルたん・アルゼンチン・バックブリーカー!!によー！」

ボキィッ!!

「きゃああああああああああつ!!」

強力過ぎる背骨折りを披露するのだった。

『ライザー・フェニックス様の僧侶1名、戦線離脱です。』

そして場内に渡り響く、グレイフィアのアナウンスと共に、美南風はその姿を消す。

「な・なな…何なのだ、貴様は？」

「いきなりプロレス技を出して、一体その何処が、魔法少女と言うのだ!？」

ミルたんは剣を向け、クレームを物申すカーラマイン。…と、イザベラ。

「…」

しかし、そんな彼女達にミルたんは、何処が、何が違うと云うのか、本気で解らずに

首を傾げ、きよとんとした顔をしつつも、

「肉体言語は、魔法少女の嗜みによ☆」

「はああ!?!」

その後は事も無げに、只単に普通に…当然な事とばかりに言い放つのだった。

》》》

「ううう…☆ す、凄い、凄過ぎる!!★」

「お、お姉様?」

そして その様を、現実世界（リアル）の生徒会役員室から観戦していた、魔王の  
人が戦慄。

「ら、ライブル認定してあげるわ…!」

どうやら魔王少女的にも、サブミツション肉体言語は『アリ』だった様だ。

「…良っし!」

「あくらあらあら?」

「ミルたん、やるなあ!」

「クス…叙情的に露製拳銃で、皆・殺・し★…ですね?」

「いや、塔城さん、怖いから!!」

「あれがリアス様の、新しい兵士…ポーン…ですか…。」

「あつははははは！リアスも　なかなか、面白い人材を見つけ出した物だね！」  
そして同室でゲームを観ていた、他の面々も、それぞれが感想を零す。

《《《

「…ならばー！」

ダツ…

美南風が戦闘不能による強制転移。

「次は、このカーラメインが!!」

その仇を撃つべく、カーラメインが騎士ナイトの特性を活かしたスピードでミルたんを攻め寄り、己の間合いに入ると同時に

「せええいやああつ!!」

ボウ…

手にしていた鋼の刃に炎を纏わせての斬撃を繰り出すが、

「んによっ！」

ギシ…

「な…?」

それをミルたんは拳で受け止めると

「によーっ!!」

ガンッ!

「くはあっ!?!」

カーラマインの顔面…鼻っ柱目掛け、頭突きをヒットさせた。

「ちいつ…」

痛々しく鼻を押さえ、たまらず距離を開けようとするカーラマインだが、

「…遅いによ…ふんっ!!」

ミルたんは それを逃す事無く距離を詰め、追撃からの掌底突きを繰り出す。

「くっ!!」

これを辛うじて躲すカーラマイン。

》》

「な…何なのですか?」

神崎様、あの方は、兵士<sup>ポーン</sup>ではなかったのですか?」

「あのカーラマインのスピードを、全く問題としていないぞ?!」

レイヴェルとイザベラが、シリユーに説明を求むが如く、詰め寄る。

「簡単な話さ。」

騎士<sup>ナイト</sup>の駒の特性より、ミルたんの加速魔法の効果が上だった。

…只、それだけだよ。」



「はい?」「な…何だと?」

それに対して、自分が知っている範疇で、応えるシリユー。

「フィニッシュによ!」

このタイミングでミルたんが魔力を集中、自身の背後に、『もう一人』のミルたんを具現化させる。

「…さっきの僧侶ベシヨツみたいのに、飛び道具が如く魔力を弾にして放つだけが、魔法じゃない。

ミルたんは自分自身に魔法を掛けて己を強化、接近戦で戦うスタイルなんだ。

だから…」

「マジカル・ドリーミング・エクスプロージョン!!によーっ!!」

どっぞおとおおん!!

「い、いやあああつ!!」

そして その『もう一人のミルたん』の、爆裂系魔法を附加させた剛拳の一撃が、カーラインを直撃。

『ライザー・フェニックス様の騎士ナイト1名、戦線離脱リタイアです。』

「だからミルたんは、紛れもなく、魔法…少…女…なのさ。」

少しだけ自信無さ気に、シリユーは呟くのだった。

》》



私は戦ったりは、しませんわ。」

「は？」「によ？」「はい？」

この場に残る一人となったレイヴエル・フェニックスに向けて、ミルたんが構えを取るも、戦闘意志を示さないレイヴエル。

「私の役目は、戦えるのが赤龍帝様一人になるか、万が一にも…結果からすれば、それが起きた訳ですが、美南風、カーラマイン、イザベラの3人が敗れた時に、貴方方をお兄様の下に案内する事ですわ。」

この左右のツインテールをドリル状に巻いた金髪の少女は、話す最中に一度、自分の兄が陣取っている新校舎…の跡地に目をやると再びシリユーに目を向けて、

「…まだ兄に、勝てる気でいらっしやるなら、御案内いたしますわ。」

不敵に微笑むのだった。

## 赤龍帝の鎧!

「とりあえずアーシアは、ミルたんの回復を頼む。」

「は、はい!」

「レイヴェル・フェニックスだったか…」

ライザーの居場所迄、案内して貰おう。」

「…承知しましたわ。」

それから赤龍帝様、フルネームで呼ばれるのは余り好きではありません。

私の事は、レイヴェルで構いませんわ。」

「神崎…仔劉だ。」

「分かりました、神崎様。」



イザベラとの戦いで、派手な殴り合いを繰り広げ、勝てはした物の顔と云わず、全身がボコボコになっているミルたん。

シリユー達はレイヴェルにライザーの居る場所迄案内して貰うと同時に、歩きながらアーシアがミルたんを回復。

そして…

「よう、待っていたぜ、赤龍帝。」

フェニックス側本陣、瓦礫と化した本校舎跡…でなく、学園の正面校門側の前庭、水が抜かれた噴水の石段枠に腰掛けいる、ライザー・フェニックスと対峙。

当然、その隣には、女王のユーベルーナクイーンが控えている。

「貴様には色々と言いたい事があるが、今更それを言った所で、どうこうなるって訳でもない。」

面倒な口上は抜きだ。

さあ、さっさと始めようぜ。」

「「……………」」

自分の妹が傍らに走り寄ったと同時に立ち上がり、戦闘の姿勢を取った金髪男の言葉に、シスター服の少女、魔法少女衣装の乙漢おとめ、そして薄紫の功夫服の少年が身構える。

》》》

「きゃっ!」

「アーシア!」「アーシアたん?!」

最初にアクシオンを起こしたのは、ユーベルーナだった。

アーシアを指差し、その指先を一瞬 光らせると、アーシアの足元に魔法陣が展開、外周を覆う様に光る障壁が立ち上がり、その動きを封じ込める。

「悪いな、回復能力が脅威なのは、フェニックスである俺が、よく知っている。

其方の聖女さんの回復は厄介だからな、真っ先に封じさせて貰ったぜ。」

「心配なさらずに、赤龍帝様。

その封印の内からは動けない故、それ以上の攻撃をする心算は有りませんわ。

ライザー様から、その方は極力、傷付けない様に云われておりますし。」

「更に付け加えるなら神埼様、このゲーム、私も元から非戦闘要員ですから、人数的には未だ五分ですわ。」

余裕からか、不敵な笑みを零す、フェニックス陣営の3人。

「シリューさん……」

「大丈夫だ、アーシア。

そこで じつとしてろ。

ミルたん、ライザーは俺が戦る!

あの女王クイーンは任せたぞ!」

「任されたによ!!」

ダツ…

シリユートの指示で、ユーベルーナに突撃を仕掛けるミルたんだが、

「…クスツ」

「によ…っ!?!」

直後、アーシア同様に魔法陣に捕らわれてしまう。

「こんな もによ!」

ガイン!!

「……!!」

内側から、魔力を帯びた拳を障壁に撃ち放ち、脱出を試みるも、その赤い光の壁は、びくともしない。

「無駄な抵抗は、お勧めしませんわ、新米兵士ポインさん?」

左の掌をミルたんに向けた、ユーベルーナが冷たい笑みを浮かべながら話す。

「その魔法陣の障壁は、内側からの破壊や脱出…あらゆる干渉を拒絶するのですよ。

そう、内側からは…」

そう言うとき彼女は、差し出した掌から、黒く光る魔力の弾を撃つ。

それは以前、オカ研部室にて、シリユートに向けて放った。それと同質、但し威力は比べ物にならない程の、強力な魔力弾。

「によ?」

それは光の障壁外側に衝突するかと思えば すり抜け、魔法陣の内側、ミルたんの顔前で停滞する。

「撃破!」

BOMB!!

そして、障壁内で起こる大爆発。

狭い密閉された空間で起きた それは、魔法陣の軌跡を象る様に、天高く、炎と爆煙を立ち上げる。

その爆発の直撃を受けたミルたんは、ダメージから完全に意識を失ってしまい、

『赤龍帝チームの兵士<sup>ポーン</sup>1名、戦線<sup>リタイア</sup>離脱です。』

グレイファイアのアナウンスと共に、その場から姿を消した。

「いやあっ?!ミルたんさん?」

顔を青くして叫ぶ少女に、

「大丈夫だ、事前に説明は受けただろ?」

ゲームで戦闘不能になった者は、即座に医療施設に強制転移される…と。」

心配は無用と話すシリユー。

そして その次の瞬間、



Boooohwa!!

「…!!」

真紅の業火が襲ってきた。

それをギリギリでシリューは躲す。

「ふっ…これで、其方は実質アンター人だな、赤龍帝！

たった一人で、この俺とユーベルーナを相手に出来るかな？」

炎を放ったライザーが挑発混じりに言い放つ。

「大丈夫だ、問題無い。

ルール上、王を倒せば、それで終わりなのだから!!」

その台詞に対して、ユーベルーナは眼中無しとばかり、ライザーに向けて特攻するシリュー。

「でえいやあ!!」

左の拳から魔力弾を連発で放つが、ライザーはそれを悉く躲していく。

それでも尚、魔力の弾を撃ちながら、シリューは距離を詰めていく。

「でえい！」

バキイツ!!

「うが…っ!?!」

そう、連発した魔力弾はフエイク囷。

そしてライザーの右脇腹に、本命である、赤龍帝の籠手を装った拳をヒットさせる。その一撃に、確かな手応えを感じ取るシリュー。

「…痛たタ…成る程な、確かに少しばかり、油断し過ぎていたみたいだな…!」

Boww…

「な…それは…?!」

だが脇腹を抑え、苦悶の顔を浮かべるライザーは、その抑えている左手から繰り出す炎で一瞬、脇腹を燃やしたかと思えば、直ぐに余裕の表情でニヤリと笑みを零す。

「それが、フェニックスの再生能力か…」

確実に肋を砕いた筈だったのだが…

「ふははははは!!その通りだ!」

この能力が有る限り、俺は、フェニックスは無敵なのだ!!」

声高らかに笑うライザー。

「成る程…俺の方も、フェニックスの特性を少し、舐め過ぎていたみたいだ…」

そして、予想の上を行っていた能力に、シリューは改めて顔を引き締める。

BOMB!!

「うわっ?!」

「私の存在を忘れては困りますよ、赤龍帝様？」

「ナイスだ、ユーベルーナ！」

更に、そこに、ライザーの女王が、爆裂魔法で己の王のサポートに入る。

「この私をモブ扱いした代償、決して安くはなくてよ!!」

BOMB!! BOMB!! BOMB!! BOMB!! BOMB!!

「うおおっ!!」

自分を無視してライザーに攻撃を仕掛けたのが余程、頭にキていたのか、執拗に爆裂系の魔力が込められた黒い魔弾を連続で撃ち放つユーベルーナだが、シリューは、さの全てを冷静に見切っていく。

「ちい、ちよこまかと…:…ならばっ!!」

BOMB!!

飛び交う無数の魔弾から、空中にジャンプで逃げたシリューが、再び着地した時、

von…

「な…!!?」

足元に赤い魔法陣が浮かび上がる。

「ええーつと、こーゆー時はアレだ、確か、『足下が 留守に なってますよ?』…:…だつたかな?」

「くっ……!」

それは未だアーシアを足止めしており、ミルたんを撃破する時にも用いられた『拘束の魔法陣』。

とあるコミックにて使われていた名台詞をドヤ顔で言うライザーに対し、そのコミックの、結構なファンであるシリユーが顔を歪める。

「ふっ……どちらにしても、そうなったら『詰チエツクみ』だ。」

…が、赤龍帝、どうせアンタは投リザイン了する心算は無いのだろうか？

…殺れ、ユーベルーナ。」

「はい…ライザー様。」

ライザーの言葉に、ユーベルーナが己の掌を、魔法陣に捕らわれているシリユーに向けてる。

そして放たれるのは、数多くの黒く光る、魔力の弾。

ミルたんの時は1つだけだった爆裂魔法の弾が、今度は無数に魔法陣の障壁の中に入り込む。

「撃破テイク!!」

DOGGOoooooHN!!

凄まじい爆発音と共に、魔法陣障壁の内側で、爆炎と爆煙と爆風が、天に向かって立

ち上る。

「シリュー…さん…」

「はぁーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ!!」

これで終わりだ!

リアスも、そして あの聖女も、この俺のモンだ!!」

その光景をみて、へなへなと膝を落とすアーシアを後目に、己の勝利を確信し、高笑いするライザー。

しかし…

「ん? グレイファイア様のアナウンスは まだか?」

何時迄経つても、赤龍帝の戦闘<sup>リタイア</sup>不能と、それに伴うライザーの勝利を告げる、グレイファイアのアナウンスは鳴り響かない。

「まさか!?!」

そんな馬鹿な事が…そう思いながらも、改めて魔法陣に捕らわれているシリューの方に目を向ける、ライザーとユーベルナ。

『Boost!!』

「!!?」

その時に聞こえた、明らかにシリューの声ではない、電子音の様な声。

障壁の内側は、未だ爆煙が立ち籠もり、中の様子はハッキリとは窺えないが、僅かに…煙の中から、幾つかの赤と緑の小さな光が、そして人の形が確認出来る様になる。

そして、内部の煙が全て消えた時、2人の目に映ったのは、

『Welsh Dragon Balance breaker!!』

正しく龍を象つたかの様な、真紅の全身鎧に身を固めた…シリユウの姿だった。

「鎧…ですって?」

「まさか、赤龍帝の力を、鎧に具現化させたとも言うのか!」

その姿に、驚きを隠せない2人だが、

「だ、大丈夫ですわ、ライザー様!」

如何に赤龍帝と云えども、あの障壁は破る事等、出来たりはしない筈!」

動揺しながらも、自分の術式は完璧だと、己に自信付けようと言いつける様に、ユーベルーナが言つてのける。

「パリン…」

「!!」

しかしながら、そんな淡い望みは、障壁内から打たれた、シリユウの拳で障壁諸共、ガラスの様に粉々に砕かれた。

『…コレも数年振りだなあ、相棒!』

「懐かしむのは後だ、ドライブグ！」

『フツ、違くない!! さあ、見せてやろう!』

この目の前の奴等に、そして この茶番を観ているであろう悪魔共に……この俺達の、赤龍帝の”チカラ”を!!』

魔法陣の跡から抜け出し、一步一步、前に歩きながら、左手甲の碧の宝玉と会話しているシリユー。

「よし、飛ばすぞ、ドライブグ！」

『応よ、相棒!Boost!!』

そして その会話が一段落着くと、一気に加速し、ライザー達に突撃する。

「ひいひい……来るな!!」

その迫力に、怯み後退しながら、ユーベルーナが爆裂魔弾を連続で放つが、

BOMB!! BOMB!! BOMB!! BOMB!! BOMB!!

生身の時は、確かに躲していた魔弾。

「そんな薄っぺらな弾幕で、何をやっている心算だ!!」

しかし今は大爆発が起きている中、何事も無いかの如く その爆炎の中を突き進み、シリユーは追撃の勢いを緩める事は無い。

そして魔力弾を潜り抜け、ユーベルーナの前に立ったシリユーは、至近距離からの、

「廬山漆星龍珠!!」

ドツゴオオオオ!

「きやああああああ!!」

ゲーム開始早々に放った、魔力と小宇宙コスモが融合された破壊のエネルギー弾を撃ち放つのだった。

『ライザー・フェニックス様の女王クイーン、戦闘不能です。』

》》》

「ちい、逃げるか、ライザー!」

「貴様の様な化け物相手、バカ正直に正面から挑むヤツが居るか!」

実質、1対1の様相となったゲーム。

「お兄様…」

「シリユーさん…」

ユーベルーナが倒れた事で、魔法陣の拘束が解けたアーシアが、レイヴェルと並んで、最後の戦いの行く末を見守っていた。

「でやあ!!」

「がふっ…!」

展開は一見、シリユーが有利。



しかし、その実、如何にシリユーが有効打を放つも、即座にライザーは回復してしま  
う。

そして、

「おらあつ！死ねやあつ!!」

ピシイ…

「!!?」

ライザーの背から具現化した炎の翼が、シリユーの赤い兜を掠めると、その部分にヒ  
ビが入った。

『氣を付けろ、相棒！フェニックスの炎はドラゴンの鱗にもダメージを与える！』

この禁バランス・ブレイカー手化の鎧でも、マトモに喰らうのは危険だ!!』

「了解だ、ドライグ。…ならば!!」

このドライグの助言に、シリユーは

「この鎧など不要の長物！赤き龍帝の力、防御を棄て、それを攻撃に換えるまで！」  
『いや、待て相棒！それは少し違うぞ!!?』

内に宿る龍の想定とは違う闘法、結論に至ったらしく、

「アーマー・ブレイク龍鎧解装!!」

バサアツ！

「え……?ええええーっ!?」

「はわわわわわわ……」

「……へ?」

『ハア……』

掛け声と共に、赤龍帝の鎧、兜を含む上半身のパーツを左腕の部位だけ残して全て、身体から外して周囲に飛散させる。

そして飛び散ったパーツは粒子状となり、左手甲の碧の宝玉に吸収されていった。

「さあ、ライザー・フェニックス!

このシリユー、今より改めて、本気を出させて貰うぞ!!」

「ああ……うん、はい……」

2人の金髪少女が顔を真っ赤にしている中、下半身は紅い装甲を纏った儘だが、上半身は左腕の赤い籠手以外は真っ裸まっばとなった少年が、やはり予想外の出来事に啞然とした顔の金髪男に対して、戦闘の姿勢を見せるのだった。

## 決着！ドラゴンVSフェニックス！！

「な・ななな…!!」

「あわわわ…」

「…!!」

「ひえっ!!」

「……………」

「あくらあらあら？」

「あははは…」

「はあ…また やりやがりました…。」

「くつく…だから、腹筋割らせるなし…」

「はあ~~~~~…」

「へえ？」

「おおおおお~~~~~☆☆!!」

現実世界の生徒会室、レーティングゲームを観戦していたオカ研部員、生徒会役員、そして2人の魔王は、いきなり龍の鎧を脱ぎ捨てたシリューに対して、それぞれが様々な

反応を示していた。

「凄いい!凄いい凄いい凄いい☆!!」

シリユーちゃん、凄いい身体してるよ!

ソーたんも そう思うよね?!

「の、ノーコメントです!!」

瞳を輝かせてモニターをガン見する者に、顔を赤らめ、モニターから目を逸らす者。

「……………!!?」

パタン…

「つ、翼沙あ?!」

男の裸体に免疫が無く、オーバキルで倒れる者に、その介抱に回る者。

「はわわわわわわ…!」

「あ…ああああ…!!」

やはり男の裸体に耐性が無く、はわわ状態になる者、顔を赤くしながらも、モニターを刮目する者。

「……………」

ノーリアクションな者。

「……………!!」

きつらーん!!と掛け直した眼鏡を怪しく光らせ、改めてモニターを凝視する者。

「くくくくくくくくくくくく…」

「あつはつははは!!」

シリユー君、やるなあ!」

床に蹲り、腹を抑えて必死に笑いを堪える者に、椅子に座った儘 腹を抱え、周りを気にせずには大笑いする者。

「くす…シリユー君ですから。」

「神崎君だからね。」

「…まあ、シリユー先輩ですから、今日も つか脱やるとは思っていましたけど。」  
慣れた光景、想定内と受け流す者。

…そして、

「後で、説教…!!」

ゲームの勝敗関係無く、部長として先輩として、部員…後輩の悪癖を戒める決意をする者。



「あああ、アーシアさん?もしかして神崎様は、何時も あんな感じなのですか!?!」

「はうう、何だかスイマセン…」

金髪ドリルヘアの少女が真つ赤な顔を両手で覆いながらも、その指の隙間からちやつかりと半裸の男をマジマジとガン見しつつ、自分の隣に立っている、やはりはわはわしている金髪ストレートの少女に、あの慣れてる感全開な遠慮無い脱ぎっぷりについて問い質す。

すると少女は、決して自身が悪い訳ではないのに、まるで自分の事の様に謝罪。



「な、何なのだ貴様わ!」

戦いの最中、いきなり鎧を脱ぎ捨てるとは、何の心算だ?!」

多少なり動揺しながらも、触れたらなら それだけで その身が消し炭になりかねない程の、強烈な炎を放つライザー。

それに対してシリューは

「この攷劉、過去の戦いに置いても『鎧』を着ているという安心感から油断が生じ、隙が出来てしまう事が多々あった。

ならば、そんな甘えを拭い去る事で自身を追い込み、己を高める…それが俺の流儀!

この攷劉からすれば鎧等、無用の長物!!」  
 そう、言つてのけた。

遙か昔の神話の時代、戦いの女神アテナは自分の眷属である聖闘士セイナイトと呼ばれる少年達少年達が、生身で戦い傷付くのを憂い、海皇ポセイドンの眷属が身に纏っていた鱗衣スケイルを参考に、聖衣クロスと呼ばれる鎧を創つたと云われている。

そんなアテナの想いを全否定、嘗ては聖闘士、しかも その最高峰に迄上り詰めた男の発言とは思えない言葉を口に出す、上半身真マツつ裸男バ。

『甘えつて…相棒よ、俺の鎧を枷扱いするのは止めてくれないか?!』

「いや、ドライグ、決して そんな訳では…」

》》》》

「でえいやあつ!」

SHU!

「うはっ?!怖え怖え!♪」

「ちいっ!!」

ゲームは泥仕合の展開となる。

ライザーが放つ炎を躲しつつ、シリユーも拳を放ち、直撃ヒットさせるが、不死身フェニックスを名乗る男は、その通常ならば致命傷となっているであろう負傷箇所を燃え上がらせると、即座

に回復。

「諦めろ赤龍帝!

貴様がドラゴンの力を…そして その身に それ以外の能力チカラを持つているとしても、不死身の俺には通じないんだよ!

「生憎と『不死身』を名乗る者との戦いは、初めてではないのでね!

お前の不死身が、何処迄本物か、試してやるさ!!」

「抜かせ!その前に、俺の炎で焼き尽くして終わらせてやる!!」

》》》

ドツゴオオオオツ!!!

「きゃああっ!」

2人の攻防の余波は既に、学園を模した戦闘空間全域を更地に…ゲーム開始早々に瓦解した本校舎は無論、シリユー側の拠点であった旧校舎も、完全に影も形も無くなっている。

2人の戦いの巻き添えを避ける為、レイヴェルがアーシアを招き入れ防御結界を張っていたが、その防壁も限界に迫っていた。

「これは もう…仕方ありませんわね…」

そう呟くとレイヴェルは、真っ白な上空を見上げると、



「グレイファイア様！聞こえてますよね？」

私と、此方のアーシア・アルジェントさんは、戦線離脱致しますわ！

てゆーか早く！この場から避難させて下さいまし！」

「お、お願いします〜！」

アーシアと共に、グレイファイアに助けを求めろ。

『…ライザー・フェニックス様の僧侶1名、及びに赤龍帝様のメンバー1名、戦線離脱です。』

その『泣き』を受け入れたのか、本来なら戦闘不能になった時に、自動で発動するリタイア機能が、ダメージを負ってないにも拘わらず、恐らくは今回のゲームマスターであるグレイファイアの手動による行使か、2人の金髪少女は戦場ら姿を消した。



「ハッ！レイヴェル、よい判断だ!!」

2人が戦場から離脱したのを確認したライザーが、背中から羽…通常の悪魔の様な、蝙蝠型ではなく、フェニックス独特の、炎の翼を展開、その翼が更に左右に大きく広がり、シリユーを2方向から襲う。

「…!?」

…事は無く、ライザーの背中から分離した、長く延びた炎の帯は、シリユウの遙か背後で繋がり、2人を包むかの様な巨大な輪を作る。

そして今度は上方にも広がりを見せ、それは炎の壁となり、やがて上空をも覆い、最終的には巨大な焰のドームを作り出した。

「これは…?」

「はっはっは…どうだ!赤龍帝!!」

もう、逃げられは せんぞ!!

この炎の結界の中、人間の貴様が、何時迄保つかな?」

…戦闘空間に残った2人を、その灼熱の中に、閉じ込める様に。



ガン!バシユツ!!

「シリユウとライザーが、あの中に…」

「あれでは外からじゃ、どうなってるか分かりませんわ…。」

炎のドームに包まれ、その内部で戦っているであろう2人の様子が分からなくなり、それでも互いに技を繰り出している様な音がする映像を見て、リアスと朱乃が呟く。

「ねえ、サーゼクスちゃん?

あの中に、カメラは入れないのかしら?」

「ん、カメラの耐久性よりも、ライザー君の炎のが、強いだろうからね。」

あのドームの壁に当たって燃え尽きるか、仮にあの壁を突き抜けたとしても、恐らくは内部の熱には耐えられないさ。」

「お姉様、そもそも先程から、何度か映像が乱れています。」

恐らくは、グレイフィア様がカメラを操作して、あの中に入り込ませようとしているのでしょが…」

「おいおい、グレイフィア?」

カメラだって、安くは無いんだよ?」

「む~~~~~☆☆」

そしてサーゼクスが、内部の映像を撮るのは難しいと説明。

「しかし、これって、神崎の方が、不利ですよね?」

「うん、確かに、そうかも知れないね。」

如何に、神崎君が赤き龍の宿主と云っても、所詮は生身の人間。

しかも赤龍帝の鎧は、さつき自ら脱ぎ捨てている。

そして、あのドーム内部は、灼熱地獄と化しているだろうからねえ…。

生身では、かなりキツいと思うよ?」

「だ・か・ら・普段から、無闇矢鱈に脱ぐなって言ってるのに!

あ・の・:露出狂があ~~~~~っ!!」

「全く:ドラゴンの耳に念仏です。」

「部長?小猫ちゃん?

今回は、少し違うと思いますが?」

シリユウの悪癖に、怒おとなったりアス、ジト目諦め顔の小猫に、木場が苦笑気味の顔で指摘。

「兎に角、あの炎熱のドームの中、何処迄耐えられるか:ですね。」

「シリユウ:」



ドツドツドツド:

ドーム内、天井からまるで流星の如く、炎の雨が降り注ぐ。

「どうだ、赤龍帝!!」

このフレイム・レイン、何時迄避けていられるかな?」

「ちい!!」

その悉くを辛くも、ギリギリで躲していくシリユウ。

この炎の雨は無差別、ライザーにも直撃はしているのだが、不死鳥フェニックスを名乗るのは伊達

では無く、その体に躲す事無く、炎を受け入れるライザー。

そして その燃え盛る炎は、ライザーの身を焦がす事無く、体内に吸収されるが如く、消えていく。

「ひゃあっほーっいい!!」

そして その度、心なしか、元気になって往くライザー。

それは所謂RPG的な、『炎属性の敵キャラには、炎系の攻撃は利かない』を、そのまま表現しているかの様。

「何だか それ、卑怯じゃないか!?!おい!!」

「ふはははははは!!」

これが、種族特性と云う物だ!人間!!」

そう言いながらライザーは、シリューとの距離を詰めると、自らの掌を燃え上がらせてからの手刀を横薙ぎに放つが、シリューは其れをも躲す。

「か……は……!?!」

しかし それと同時に、シリューの背後から炎の槍が襲い掛かる。

天井からでなく、壁の部分から延びた、一筋の炎。

これもシリューは その存在に気付き、前方から迫る炎の手刀と同時に捌こうとする

が、槍は一直線の動きから、蛇が地を這うかの様に身をくねらせ、変則的な動きにチェンジ。

それでも其の動きにすら反応するシリユーだが、完璧に避けきる事は出来ず、遂に炎の刃を身に掠めたのだった。

「今が、チャアツーーーッーンス!!」

如何に聖闘士、そして赤龍帝だとしても、転生悪魔でもない。その体は、かなり鍛え上げられているだけで、生身の人間と変わらないシリユー。

掠めただけとは云え、魔力で創り上げた炎の一撃を喰らって只で済む訳がない。

背中への一撃を喰い、膝を着いたシリユーを見て、ライザーは、この機を逃さず一気に勝負を決めようと、天井から壁から全方位から放たれる無数の炎の雨と槍を、自身共々にシリユーに浴びせる。

しかし当然、炎の化身たるライザーは、ノーダメージ。

そして、

「うおおおおお!?」

シリユーの全身に、回避不可の攻撃が直撃、その身を業火が包み込んだ。

「はあ…ハア…」

「多少は防衛、出来た様だな…。」

流石に消し炭には、ならない、か…」

全身を炎で包まれるも、小宇宙<sup>コスモ</sup>と魔力のシールドで、ダメージを最小限に抑えるが、それでもライザーとは違い、ノーダメージとは往かず、身体の所々、大小の火傷を負ってしまうシリユウ。

息を荒げ、それでも倒れる事は無く、活きた眼で、目の前の敵を見据える。

「ふん…その眼は知っているぞ？」

この俺が、最も厄介と思っている、”しぶとい”類の奴が持っている眼だ。

しかし、何やら息苦しそうだな？

まあ、当然な話だ。

この密閉されて、燃烧し続けている空間、何時迄も、酸素が在る訳がない！」

「くっ…」

「ついでに…赤龍帝、気付いてるか？」

この空間の壁と天井が、徐々に狭り、ひくくなっている事に！」

「……………!!？」

完全に自分のホームグラウンドな空間の中、所謂、油断とは別の次元の、余裕を持った表情で話し続けるライザー。

「お前が窒息みたいな、間抜けな負け方をする訳ないのは、既に理解出来ている心算だ。

だから、一気に決めさせて貰うぞ!

この、「デスドーム」を使った、最大技でな!」

ボオウウ!!

そう言うライザーは、その身を、正しく不死鳥が如く、全身を鳥を象った焔に変え、真上に飛び上がると、其の儘ドーム天井の炎と同化。

「ふははははは!解るか?赤龍帝えい!!

今 俺は、このドームと一体化となった!

このドーム自体が、俺自身だ!!」

「…くっ!!」

炎の結界内部に、声が響くと同時、天井が壁が、シリューを潰さんと落ち迫る。

それは ゆっくりと迫り、標的に絶望と恐怖を味わわせる様な物ではない。

直径20呎は有ったドームは一瞬にして、直径2呎程に圧縮収縮。

その代わり、このゲームの為に擬似的に創った空間、その天に迄届かんとばかり、巨大な火柱が高く聳え建った。



「ドームが…」

「火の柱…に…?」



「何が あったのよ!？」

「あの火柱は多分、ライザー君が変化した物だね？」

「え?じゃあ、神崎は…?」

「まさか…!？」

「恐らく…あの火柱の中でしよう…」

「シリュー先輩…!!」

ドームが炎の柱に…

漸く外から見ても分かる変化が起き、モニターを覗ながら、現状の分析をする、魔王、生徒会、そしてオカルト研究部。

業々と燃える炎は次第に収束して、人一人の大きさ、人の形となる。

「ライザー…シリュー…!!」

それを見て、思わず眩くりアス。

炎が消え、その場に残ったのは、

「何故だ…?!」

目の前に居る男を見て、それが信じられない光景とでも言いたげな、緊張感の中にも驚きの表情を隠しきれないと云った表情のライザーと、

「ふっ…何とか凌いでみせたぞ!」

辛くも その攻撃に耐えきり、限界ギリギリの中、それが虚勢なのはバレているのを前提で、挑発じみた余裕な笑みを浮かばせるシリユーだった。

》》》

「馬鹿な？」

今のは俺の、超必殺の1つだぞ?!

それなのに、何で生きてんだ、テメー!」

ライザーが炎を纏った拳で殴り掛かるが、

「簡単な事だ!

このシリユー、今の炎より、強力な炎を知っている…

過去の戦いで、より強力な炎を受けた事がある…只、それだけの事だ!!」

ドスツ!

「ぐわはあつ?!」

それを躲したシリユーが、ドラゴンの魔力を込めた左ストレートを、ライザーの鳩尾に撃ち込む。

「ふ、巫山戯るな!!

俺はライザー・フェニックス!

風と炎を司る、フェニックスだぞ!!

ううっ…があああああああ〜っ!!」  
ぶおわっ!!

再び背中から、巨大な炎の翼を広げたライザーが、両手に魔力を集中させる。

そして、その魔力は焰となり、焰はライザーの腕の上で、巨大な猛禽の形となる。

「不死鳥の羽撃き、受けてみる赤龍帝！」

行くぜ! 『T o r m e n t a d e P h o e n i X!!』

ビュオオオン…

掛け声と共に、ライザーの腕から放たれた炎熱の巨鳥が暴風と共に一直線、シリユーを直撃するが、

「貴様の最大は、その程度か!」

「な…!?!」

暴風に体を吹き飛ばされる事無く、そして炎に身を焼き焦がされる事も無く、  
ブーステッド・ギア  
赤龍帝の籠手に纏われた左拳を前面に突き出すと、

「廬山漆星龍珠!!」

ドゴオン!

「ぐはあっ!」

そこから小宇宙<sup>コスモ</sup>と魔力が融合されたエネルギー波を放出、これがライザーに直撃、逆

に吹き飛ばす。

ライザーの その奥義であろう技を正面から受け切る為、小宇宙<sup>コスモ</sup>を最大限に迄高めていたシリュー。

左腕の籠手と、未だ下半身には装着された儘の紅い龍の甲冑が黄金の光を放ち、背中には天を翔ける龍が、くつきりと浮かび上がっていた。

「な……ななな……?!?!」

「今のが、フェニックスの羽撃きだと?」

巫山戯るな!まるで、微風だ!!」

漆星龍珠を受けてダウンした儘、信じられない光景を見ている様な顔をしているライザーに、険しい顔のシリューが吼えた。

「嘗て、俺の前世<sup>むかし</sup>の友に、鳳凰<sup>フェニックス</sup>星座を名乗る男が居た!

その男の繰り出す炎や風の方が、ライザー・フェニックス!

貴様の それよりも、遥かに熱く、そして強かった!!」

遥か前世<sup>むかし</sup>、共に戦いの時代を生き抜いた友の顔を思い浮かべながら、シリューは語る。

「でえええい!」

そして、体勢を立て直して構えたライザーに詰め寄ると、右の拳を繰り出す。

「ちいっ!」

ボウツ：

その攻撃を嫌がったライザーは、ダメージを回避しようと、再び身体を炎に変化。

しかしシリューは迷わず、籠手を纏っていない方の、生身である方の右拳を、このライザーである、炎の中に突き刺した。

バシィッ！

「ぐぎやああああっ!!」

そして、響く呻き声。

人型に戻ったライザーが、胸を抑えて顔を歪め、シリューを睨む。

「貴様…今のは何だ？」

一体、何をした?!

答えろ!! 炎と化した俺の体に何故、単なるパンチが、物理ダメージが通る?!

この日、この戦い、何度目となるか分からない、納得不能理解不能だと云う表情のライザーがシリューに問い詰める。

「良いだろう、教えてやる!」

そしてシリューが、戦闘の構えをした儘、それに応じた。

「先ず俺は、そもそも赤龍帝で有る前に、聖闘士<sup>セイント</sup>だ!」

「聖闘士…だと?」

初めて耳にする単語に、やや困惑気味になるライザー。

それをお構い無しに、シリューは話し続ける。

「そうだ…そして聖闘士セイントの拳は、天を撃てば天を裂き、地に放てば地を砕く!

そして その真髄は、単に万物の表面破壊を目的にするに非ず。

聖闘士の拳は、あらゆる物の、原子を破壊するのを前提としている。

故に、破壊対象が原子で構成されている限り、例えばそれが固体ならば無論、液体だろうが気体であろうが、ダメージが通るのは、至極当然の事!!」

「馬鹿な…そんな真似が、本当に…」

炎状態である体でも、聖闘士セイントの拳はダメージを与えると云うシリューの解説に、動揺

の顔を見せるライザー。

》》》

「廬山龍戟閃!」

バキッ!

「ぐ…ッ?」

「さあ、決着の時だ、決めさせて貰うぞ!

ライザー・フェニックス!!」

その後も、激しい攻防が繰り広げられる中、強烈な膝蹴りを顔面にクリーンヒットさ

せたシリューが勝負所と判断するが、

「ふん、抜かせ！貴様とて、何だかんだで一杯一杯だろうに！

簡単には終わらさん！

そして最後に立つのは、この俺だ!!」

ライザーも抗戦の姿勢を取る。

互いにバックステップで距離を開け、それぞれが魔力を、コスモ小宇宙を集中させて高める  
両者。

「はあああああああああああああ……」

「クオオオオオオオオオオオオオオオオ……」

炎の翼と共に、両手を左右に大きく広げた、仁王立ちの様な構えのライザー。

そして、己の守護星座を両手で描き象るかの様な、独特の構えを見せるシリュー。

「俺の勝ちだ！赤龍帝！」

先に魔力の集中を済ませ、仕掛けたのはライザーだった。

ゴオオオオオ……!!

再び身体を焔の塊とすると、高く、そして広範囲な、巨大な竜巻の様な形に姿を変え、シリューを その中に巻き込み呑み込まんとばかりに襲い迫る。

しかし、

「いや、勝のは俺だ!!」

燃え上がれ!そして轟け!!

我が、小宇宙よ!!」

シリューはその瞬間に目を見開き、目の前の、自身を覆い呑み込もうとしている炎の竜巻を刮目すると、

「廬山昇龍覇——————!!」

DOGGOHHHHHHN!!!!

「ぐわあああああ——っ?!」

自身の代名詞と言っても良い、小宇宙を最大限に宿したアツパーカットを、ライザーの化身である炎の塊に向けて、天高く撃ち上げたのだった。

ドシヤツ!!

「がはあっ!!」

昇龍覇の衝撃で吹き飛ばされたライザーの体は、空中で炎の状態から人の形に戻り、頭から垂直に落下し、地面に激突。

「ク……ツソがあ……まだだ!」

まだ、終わらせ……ねえ…



お、俺は…不死…身…の、フェニツ…クスだ…ぞ…！」  
ガタツ…

それでも最後の気力を振り絞り、尚も立ち上がろうとするライザーだが、その途中で  
体勢を崩して前のめりに倒れ込み、

「っ……………」

そして遂に、気を失ってしまう。

『ライザー・フェニツクス様、戦闘続行不能確認。』

王であるライザー様が倒れた為、この度の変則レーティングゲーム、赤龍帝…神崎孜劉  
様の勝利と致します!!』

そして その直後、ゲーム終了を告げるグレイファイアのアナウンスが、激闘の末に完  
全に更地となった、駒王学園を模していた空間に鳴り響いた。

## 赤龍帝の逆鱗!!

「な、何と云う事だ…?」

「あの、フェニックスの三男が…!？」

「ふあ…」

「流石は赤龍帝ですか…」

「「「……………」」」「素晴らしい…!!」

「赤龍帝…か…」

冥界。

シリューとライザーの戦いを観ていた、2人の魔王と悪魔陣営上層部の面々が、その結果に あるいは感嘆し、あるいは予想外だと驚き、あるいは無感情に単に結果の1つとして、そして あるいは、興味津々に受け止めていた。

「…ふむ、グレモリー卿、この度の勝負、あの赤龍帝…強いては、リアス嬢の勝利…ですかな？」

そんな中、長い金髪をオールバックに固め、カイゼル髭、そしてモノクルを掛けた貴族とした男が、紅の長い髪と顎髭な、やはり貴族な出で立ちの男に話し掛ける。

「今回の件…私の愚息の暴走が招いた結果だが…」

「…仕方有りませんな、フェニックス卿。」

今回のゲーム、その意義も公表されている故に…この度の縁談は、破談…ですな。」

「赤龍帝…ライザーからすれば、転生もしていない、高が人間が冥界にて、魔王様から同等の立場を与えられ事に不満…そのメツキを剥がそうとしたらしいが…」

「時が移り、依り代が変わっても、忌まわしい存在に変わりなかつたのを、逆に証明してしまった。」

いや、今代の赤龍帝は、史上最強かも知れませんな。

魔王様…いや、サーゼクスがアレを我々の側に迎え入れたのは、ファインプレイとか言い様が有るまい。」

「全く…彼が、天界や堕天使と手を組んだと思うと、恐ろしさに身が震える…」

リアスとライザー、両者の父親は、互いに今回の婚約話を正式に白紙にする事を確認すると同時に、大昔の戦争で目の当たりにした赤い龍の恐ろしさを改めて思い出す。

…今代の赤龍帝が、自分達の側に就いてくれた事に、幸運を感じながら。

◇シリユースィde◇

「ふう…」

ゲーム終了後、今回のゲームマスターであるグレイファイアさんの転移魔法で、「現実世

界」のオカ研部室に戻り、ゲームの最中に上半身裸となった身形を整えるべく、鞆から着替えの服を取り出し出している最中、

♪♪♪♪♪♪♯♪♪

スマホから、メールの着音が鳴った。

「ん?」

それは部長からの、『生徒会室で待っている』というメッセージ。

》》》》

ガラ…

「シリユーちゃん!おめでとーっ!!」

スパカーン!

「きやいいん!」

「……………」。

いきなり何をしてくるんだ?貴女は?

「しょ…勝利を祝う はぐをほう…(ガクッ)」

「お、お姉様あ!」

「セラフオルー様?!」

生徒会室の扉を開けた瞬間、魔王少女が抱きつこうと飛びついてきたので、ハリセン

で迎撃して、改めて入室。

ギリギリ迄、気配を感じさせなかった不意打ちだったので、反射的に多少、小宇宙<sup>コスモ</sup>を込めての一撃。

リアス部長と支取先輩が慌てて このダウンした魔王少女に駆け寄るが、まあ、一応は魔王の一角だ、死にはしないだろう。

…というか、来ていたのか、この人。

「やあ、シリユー君、とりあえずは おめでとう。」

「どうも。でも、それはリアス部長に言うべきでしょう？サーゼクスさん。」

…ですよね？この度は婚約破談、おめでとう御座います、部長。」

「うふふ…ありがとうね、シリユー♪」

…あの魔王少女<sup>シスコン</sup>が人間界<sup>こちら</sup>に来ていたと云う事は…と思っていたら、やはりアンタも来ていたか…な、もう1人のシスコンと一言二言な会話の後、部長に話し掛けると、本当に嬉しかったのか、凄く優しい笑顔で礼を言われた。

聞けば、本当に数分前に、冥界から正式に婚約白紙の報告があったとか。

「やりましたね、シリユーさん！」

「シリユーたん、お疲れによ。」

俺より一足先に、ゲーム運営サイドの医療施設から直接転移してきたのであろう、

アーシアとミルたんが、

「流石でしたわね、シリユー君。」

「まあ、負ける心配はしていませんでしたが。」

「やったね、神崎君！」

更にはオカ研の皆が、

「神崎君、赤龍帝の実力、確と拝見させて頂きました。」

「見事でした。」

「神崎、やったな!!」

そして支取先輩に新羅先輩、匙も劳いや祝いの声を掛けてきてくれた。

「「「いっえーい!!」」」

ぱちっ!」

「「「「……………」」」」」

…で、男子3人でハイタッチする中、残りの支取先輩の眷属は…無視ですか、ああ、そうですね。

「……………」

あの戦車である、大学生の人狼サンは、それほど面識無いから絡み辛いつてもあるだろうが、残りの生徒会モブ達、幾ら「高が人間如き」な俺を嫌ってるからって、其処

迄露骨に目を逸らさなくても…ねえ？

「いや…ありや、お前が悪いから…」

え…？



その後、オカ研部員一同とミルたん、ソーナ、椿姫、匙、そして2人の魔王は、旧校舎のオカ研部室へ。

「…えくと、部長？」

せつかく部長の為に、必死に戦い抜いた俺に、こんな仕打ちは…」

「それは、それ、これは、これよー」

ハリセンを持った腕を組んでの仁王立ちなりアスの前、ギャグ補正が利いた大きなたんこぶを頭部に作り、床に正座しているシリユウ。

「率直に聞くわ？ライザーとの戦いの途中、あの鎧を脱ぎ捨てる行為、あれは絶対に必要な事だったのかしら？」

「え…と、それは…」

「全くアナタわ！

何で何時も何時も何時も！

何の意味も無く、直ぐに真つ裸はになりたがる訳?!

今回のゲーム、冥界の上層部の方々も御覧になつていたのよ!!

少しは自重しなさい!」

「ひいつ!」

そう、OHANASHIの始まりである。

「ソーナちゃんと椿姫ちゃんも、眼鏡☆きつらん☆で、輝かせてガン見してたんだよ  
!☆」

「な…!?れ、レヴィアタン様?!」

「お、お姉様!、私はガン見なんて、していません!あれは椿姫だけです!!」

「会長~~~~っ!!」

「医務室でも、あのライザー様の下僕の女の子達、モニターを見ながら阿鼻叫喚な大歓声  
を上げてたによ。」

「悲鳴でなくて歓声?!」

「はい。皆さん…特に この前、小猫ちゃんに吹っ飛ばされた双子さんと、お団子頭の女  
の子が、目をキラキラうるうるしていました。」

「…何だか評判、良いじゃないですか?」

俺、何か悪い事、してます?」

何か皆、喜んでないですか?」



「お黙りなさい!!」

すばかーん!

「あじゃぱーっ?!」

…この後、紅髪の魔王と、クラスメートの生徒会役員が腹を抑えて嗤ってる中、延々と部長による、後輩部員の悪癖を戒めんとする説教は続いた。

但し、それで其の悪癖が正せるのか?…は、全く別の話である。



翌日。

「…で、報酬みたいのは?」

「ゲームのファイトマネーとやらを、運営サイドからの正規な形で払いたいから、人間界こちらで振り込み用の口座、作ってくれて言われたよ。」

「口座って、まちかよ?!

もしかして、かなりな額かよ?」

「まあ…な…一応は、アーシアとミルたんで分ける形な。」

尤もミルたんは兎も角、アーシアは、今はトーカん家に世話になってる身だから、不用意に口座とか作れないから、とりあえずは部長に管理をお願いする心算だよ。」

…そんな他愛の無い会話が教室で交わされる中、時は放課後となる。

》》》

ガラ：

「うう〜つす…」

「こんにちわ〜」

シリユーとアーシアが、旧校舎の部室に顔を出した時、それを待ち受けていたのは、

「あ、シリユー…？これは一体、どーゆー事なのかしら？」

「え？」

何やら、少し戸惑い気味に怒っている感じなりアス。

「うぐわおをうも〜っ!!」

…そして、魔力の、否、小宇宙<sup>コスモ</sup>で生成された枷で手足を拘束され、やはり小宇宙<sup>コスモ</sup>で創られた猿轡で、口の自由を奪われ、床に伏せている男…の悪魔だった。

「シリユー？これ、アナタの仕業よね？」

この枷、アナタの『こすも』ってヤツで作られているわよね？」

「…その質問の前に、どうして、こういう事態になったのか、本人に聞くのが先じゃないですか？」

「この悪魔<sup>ひと</sup>、喋れないでしょ!？」

小宇宙<sup>コスモ</sup>製猿轡を指差し、突っ込むリアス。

「…そりや、御尤もで。」

仕方無い、纏めて説明したいから、サーゼクスさんでもセラフオルーでも…1人で良  
いから、誰か、魔王をこの部屋に呼んで貰えますか？」

「え？何言ってるのよ？」

そ、そんな、急に出来る訳が…」

「魔王を喚べと言っているのだ！リアス・グレモリー!!」

「…!!」

「ふんがもまつ!!」

それは普段の先輩後輩、部長部員の会話でなく、魔王と ほぼ同格の地位を与えられ  
ている悪魔陣営の『客』と、単なる上級悪魔貴族の時期当主候補との会話。

それを察したリアスは、慌てて魔王の1人である、兄・サーゼクス・ルシファーに、自  
分以上に慌てふためいている、縛られた悪魔の男を尻目に連絡を入れる。

ブワアツ!!

「むぐうぐぬぬゆ〜っ!!」

「!!!?」

直後、部屋の床に魔法陣が展開し、やはり小宇宙<sup>コスモ</sup>の枷で身体の自由を封じられた悪魔  
…の、今度は女が、転移してきた。

「…やれやれだぜ。」



「…彼は確か、カミジン家の、そして こっちの彼女は、アバドン家に仕える転生悪魔だね。」

拘束された2人を見て、慎重な面持ちで話すのは、リアスからの呼び出しに、ほいほいと業務すつぽかしてやってきた、シスコン魔王・サーゼクス・ルシファー。

「…で、シリユー君、どうして2人は？」

まじまじと2人を見た後、シリユーに顔を向けると、

「それは本人に、話して貰いましょう。」

パチン…

シリユーは指を弾き、2人の口を封じていた猿轡を消す。

「さて…貴様等、どういう過程を経て こうなったのか、この場で正直に話して貰おうか

!!

「!!」

そして、シリユーの怒声が部室に鳴り響いた。



「はあ~~~~~」

全く、何て事をしてくれたんだよ……」

蒼い縦線が数本、スウーッと顔に入り、頭痛が凄く痛そうな表情で頭を抱え込む紅髪の魔王。

「も、申し訳ありません、魔王様！」

そんなサーゼクスに、未だ縛られた状態の儘、只管に謝る2人の転生悪魔。

「あ、主に命じられて、仕方無く……」

「わ、私もです!!」

要約すると この2人、それぞれの主に命じられて、シリユウの家族を、そしてシリユウの恋人である矢田桃花を拉致ろうとして、それぞれの家に侵入。

しかし、シリユウが両家に予め仕掛けておいた罠トラップに見事に引っ掛かり、捕縛&強制転移を喰らったのだった。

何故、シリユウの家族や親しい者を捉えようとしたのか……

それは、レーティングゲームでのシリユウの実力を見て、人質を以てして己が眷属としようとしたか、或いは それでも『人間如き』が自陣での今の待遇を快く思わず、威圧しようとした他には考えられなかった。

「これは どういう事だ、サーゼクス・ルシファー……」

「これは悪魔とは、同盟決裂と判断して良いのか?!

「ちよ…シリユー君、落ち着いて!」

「自らの欲望の為に、何の落ち度<sup>レ</sup>の無い者を巻き込むが悪魔と云うならば このシリユー、地上の平和を護る 聖闘士<sup>セイント</sup>として、その悪魔という種を人に害為す邪悪と見なして滅する迄!!」

「ご、ごめん、ケジメは着けるから!

マジに落ち着こ?ね?ね?」

ボツワア!!

完全にキレて、小宇宙<sup>コスモ</sup>全開なシリユーを、必死に魔王が宥める。

》》》》

「不味い…本当に不味いわ…

シリユー、マジにキレてるし…。

下手すりや本当に私達悪魔、純血転生関係無しに、皆殺しにされるかも…」

因みに この時、リアスとアーシアは既に旧校舎から退避、朱乃や小猫、木場にミルさんと、遅れてやってきた関係者に現状を説明、外で待機していた。

「全く、何処の御方ですの?」

そんな傍迷惑な死亡フラグ、立ててくださったのわ?!」

「はわわわわ…シリユーさん、凄く怖かったですう…」

「気のせいか、校舎が揺れてるによ？」

「ん、確かに揺れてるね。」

「倒壊するかも…」

「…って、それ、凄く拙いじゃない!？」

祐斗、小猫!直ぐにギヤスパーを無理矢理にでも、外こうちに引つ張り出してきて!

「は、はい!」「…はい。」



「幸い…と言うのは少し違う気もするけど、両家とも現当主でなく、その三男、及びに次男の孫…殆ど当主を継ぐ可能性が皆無な2人だ。」

今回は当主や家に関係無く、その2人が自分の欲で、勝手に暴走してやった事。

家を取り壊すでなく、当人を肅清するだけ、それで済むなら、それが最良だと、僕個人は思っている。」

冥界に戻ったサーゼクスは急遽、残る3人の魔王や それに次ぐ権力を持つ元老院の面々を無理矢理に自分の城に召集させ、その一室で今回の騒動について話していた。

「しかし、サーゼクス様？」

いくらなんでも、極刑と言うのは……」

「只でさえ、純血悪魔は、その数が少ないのですぞ?」

「高が人間如きとの約定の為に……」

当人の命を以て償わせ、シリユーに……赤龍帝に誠意を見せると云うサーゼクスの場合に、難色を示す老人達。

「あのね、そんなに『高が人間如き』とか言ってるならさ、おじーちゃん達自らが、シリユーちゃん処に行つて、お話してみなよ? ☆

別に止めたりは、しないよ? ☆

じゃ☆行つてらっしや☆い☆! ☆

「「「……!!?」」」

しかし、セラフオール・レヴィアタンの一言で黙り込む。

「悪魔にとつて、契約と信用は絶対。

今回の騒ぎは、それを破らんとした行為に他ならない。

厳罰は当然な事です。

何よりも、彼等は我々、魔王の決定した事に背き、我々魔王の『友人』、そして彼の大事な存在に手を掛けようとした……。

その面からしても、万死に値します。」



「ふわあく…もう、死刑で良いじゃん？」

だつて面倒だし…」

「「「「……………」」」」

更には残る2人の魔王も、サーゼクスの考えを推す姿勢を見せる。

「仮にシリユー君と…赤龍帝と事を構えらるとなつたとする…。

確かに今なら、数の暴力で彼を討ち取るのは可能かも知れない。

しかし その時は、我々悪魔も、純血悪魔2人が命を落とす程度では済まないよ？

赤龍帝の力…あの戦争を忘れたのかい？」

「更には その騒ぎに乗じて、ミカエルやアザゼルが彼に着いたりでもしたら、尚の事…

本当に我々は滅んでしまうやも知れませんか。」

「「「「……………」」」」

2人の魔王の言葉に、完全に老害は黙り込んだ。

》》》

そして この後 直ぐ、2人の純血悪魔の公開処刑が執行され、冥界…悪魔領全土が

震えるのだった。

「それから…シリユー君は敢えて今迄の事は目を瞑ると言ってくれたけど、今後は眷属

を作る際に、直接に脅すとか、身内を人質に捕って無理矢理にとか、そういうのは魔王の名の下、完全に禁止にするから。

これ、死亡処か、本当に冗談抜き、滅亡のフラグだからね。」



「…そんな訳で、この度、リアス・グレモリー様の『僧侶』となりました、レイヴェル・フェニックスですわ。

皆様、宜しく御願いたします。」

数日後の放課後、オカルト研究部部室にて、グレモリー眷属+αに丁寧に頭を下げる金髪ドリルな少女が1人。

「…どんな訳です? 部・長?」

『そんな訳で…』…この言葉から場面が始まった場合、既に其の経緯は説明されていると云う様式美を完全破壊しての質問をするシリユー。

「ええ〜つと…私とライザーの婚約話は流れたけど、それでも両方の家おやが、グレモリーとフェニックスのパイプは欲しいと言う理由でね、『駒』のトレードってヤツをね…」

「シクシク…所謂、人身御供と呼ばれるヤツですわ。シクシクシクシク…」

「トレード…ですか…」

よく、あのライザーが了承したなあ…」

「す、するー?」

レイヴェルなりの、渾身の嘘泣ホケを無視して、頭に浮かんだ疑問をストレートに口にするシリユー。

「そ、それはですネシリユー様、先に私のお母様と兄様が、(無理矢理に)駒の等価交換をして、その後、お母様とリアス様が更に交換…と言う流れですわ。」

内心、突っ込み待ちだったが、直ぐに気を持ち直し、事情を説明するレイヴェル。困みに、小猫と同じクラスに編入したらしい。

「成る程…ね…」

「あら?何か御不満が?」

「いや、俺は気にしてないけど、君は正直な処、どうなんだい?」

俺は、君の兄の縁談を破壊した、張本人なんだぜ?

俺は別に、グレモリー眷属じゃないけど、同じオカ研部員として共に行動するのに、抵抗とかは無いのかい?」

「あ、そつち…、いえ、全然…ですわ♪」

ついでに言えば、両親も、『あの不死身ひゃつはー!…な、アホ天狗の鼻を、よくぞ完璧に折ってくれた! (原文其の儘)』と、シリユー様には怨みは愚か、感謝していましたわ。」

「ああ…そうですか…」

自身としては、かなり真剣だった疑問に、あっけらかんと、しかも家族の見解の補足付きで答えられ、若干 拍子抜けするシリユー。

「それから、塔城さんの仲介で、トーカさんとユキコさんとも、早速お友達になれましたわ。

今後あの2人は、冥界では…自分で言うのもアレですが、フェニックス家令嬢の友人と云う位置付けになります。

それだけで、魔王様の御達し以上に、不躰な輩から狙われる心配は、更に減ると思いませんが。」

ガシィ!

「レイヴェルさん、今後ともアイツ等と、仲良くしてやって下さい!」

よろしくお願いします!」

その台詞を聞いたシリユー、透かさずレイヴェルの右手を取り、両手で握手。

「レイヴェル…で、構いませんわ、シリユー…先…輩♪」



時は、少し巻き戻る。

『ライザー・フェニックス様、戦闘続行不能確認。』

王であるライザー様が倒れた為、この度の変則レーティングゲーム、赤龍帝…神崎孜劉様の勝利と致します!!』

其処は単に白…単に果てしなく、白いだけの空間。

そんな空間の中、シリューvsライザーのレーティングゲーム決着の映像を映すのは、霧の鏡。

「…どうですか?」

アレが、俺が話していた、シリユーと云う男です。」

「…うん。強いね。」

それを観ているのは、白髪が混じった金髪の初老の男と、銀髪の少女。

本来ならば このゲーム、運営サイドが用意したカメラでの中継で、関係者しか観戦出来ない筈。

だが この2人は、明らかに それ以外の『眼』で、このゲームを観ていた。

「彼は…仲間になってくれる?」

「正直、難しいですね。」

仮に今、貴女がヤツの前に姿を見せて誘ったとしても、簡単に鞍替えする男では有り

ません。

「何しろ、あの男、昔から硬物に手足が生えている様な男ですから。」  
「ん、逆に安心した。」

「簡単に移り変わる者は、信用出来ない。」

「ならば…妾の方が、彼の仲間になるなら？」

「それならば、多少の可能性は…」

「だったら、そちらの方向で…方法は貴方に任せる。」

「…御意に。」

少女の前で膝を着いて一礼した男は、その儘、その場から姿を消した。

「ん…頼むぞ、ベッコ・カンクロ…」

<br>一刀両断のエクスカリバー

行け！駒王学園オカルト研究部！！

タツタツタツタツ…

「ハア…ハア…」

夜の駒王町。

三日月の光が僅かに差し込む路地裏に、息を切らしながら走る男が居た。

所々が斬りつけられたかの様に破れ、何度か地を這った様に白汚れた黒い法衣に胸元には金のロザリオ。

見るからに聖職者な服装の、側頭部辺りからも血を流している。この中年男は、何かから逃げているかの様に時折、後方を振り向きながらひた走る。

ドスツ…

「……!!?」

しかし、次に後ろを振り向いた。その時、身体の正面、脇腹に銀色に光る刃が突き刺さった。

「カッハ…!?!」

何が起きたのか理解出来ない表情で、口から血を吐いた男は、地面に両膝を着き、その儘 崩れ倒れ、

「……………」

身体に刺さった剣を抜いた人物は、目の前の男が、息をしていないのを確認すると、その場から立ち去る様、路地裏の奥、闇の彼方に消えて行った。

「くつくつく…」

くけけけけけけけけけ…

ひゃあゝはっはっはあゝゝいっ!!!」

不気味な嗤い声を響かせながら。

▼▼▼

「悪羅悪羅悪羅悪羅悪羅悪羅悪羅あ!!」

キーン…

「ひいえええっ!?!」

翌日、放課後の駒王学園。

旧校舎前のグラウンドでは、まるで893その儘な口調で、ミルたんからトスされたボールを、金属バットで『撃』っているのはシリユ―。



オカ研一同は この日、シリューの この、鬼畜ノックを受けていた。

「コラー！ノックでボールから逃げるヤツが居るか?!」

「ひええっ?!だ、だって、怖いですう!」

そして、その金属バットの向けられた先、鬼の様なボールを受け止めている…でなく逃げているのは、白金髪プラチナブロンドのポブカットの小柄な少女…でなくて少年。

ギヤスパー・ヴラディ。

小猫とクラスメートだが、数日前迄 旧校舎に絶賛引き籠もり中、休学中だったハーフヴァンパイア。

そして、リアス・グレモリーの「僧侶」である。

引き籠もりと言っても、リアス眷属としての活動は、旧校舎からパソコンのネット回線を活用して、実績トップを誇る、謂わば稼ぎ頭でもあった。

先日の神崎家及び、矢田桃花誘拐未遂事件に伴う、旧校舎倒壊未遂騒動の際、その瓦礫の下に埋もれる前に数ヶ月振り、外の世界に引つ張り出した後、サーゼクスの「ついでだから…」の一言で、其の儘 外で生活させる事に。

今迄は生来の、同族からすら危険視された能力、そして本人自身のコミュ症故に、封印イコール引き籠もりと云う、本人と『保護者』であるサーゼクスの利害の一致だったのだが、建物か壊れる程の地震（犯人はシリュー）の中、木場と小猫が無理矢理に、そ

れこそ拉致するが如く外に引き摺り出し、其の儘復学させる形で、今に至る。

》》》

コオン……!

「ひゃああつ?!」

「だ・か・ら!」

逃げんなつってんだろが、ゴラ、アツ!!」

「神崎君、スパルタだなあ……」

「ギヤスパー! キッチンとボールの正面に立って、身を屈めて捕るの!」

「だ、だって、怖いですう!」

「……へたれヴァンパイア。」

「うわああああん!」

小猫ちゃんが、いじめるう!!」

尚、何故に此奴は、野球部の真似事をしてるかと言うと……

《《《

「部活對抗球技大会……?」

「……ですか?」

「ええ、そーよ!」

部活対抗球技大会。

それは、近日に行われる学園イベント。

文系運動系問わず、各クラブ、そして各委員会に同好会、果てには生徒会迄もがチームとして参加する、スポーツイベントである。

因みに競技種目は公平を来す意味で、当日まで秘密とされている。

知っているのは、イベントを取り仕切る教諭陣だけであった。

「リアス部長と朱乃先輩、それと木場が先生に色仕掛けで、何の競技が聞き出せたら、かなり練習面で有r……いえ、何でもありません……何でもありませんから そのハリセン、仕舞ってくd（スパーン！）ぐはあっ!？」

》》》》

…そんな訳でオカ研一同は週間前から その日毎に、違う種目の練習をしていた。

因みに この日は練習メニューはソフトボールであり、シリユウの鬼のノックが続いていた。

「そら!!」

キーン……!

「……つとー!」

パシ……

「よし、良いぞ、レイヴェル!」

「ども…ですわ♪」

「じゃ、次はアーシア、行くぞ〜!」

「ははは…はい!」

「…と、思わせといて、木場あ!!」

「オン!」

「わあ…た…た…たあ!?!」

「パス…」

「ちい、捕りやがったか…」

「ちよ…シリユー?」

「アナタ、何で悔しがってんのよ!?!」

「>>>>」

そして数日後、球技大会の当日が やってきた!!

◆◆

「…ドツチボール…ですか…」

「練習、していませんわ。」

トーナメント表を見ながら呟くオカルト研究部。

種目はドツチボール。

それは、オカ研が練習していなかった競技だった。

「練習してないのを、悔やんでも仕方が無いわ！さあ皆、勝つわよ！」

「……はいつ!!!!」

「…シリユー先輩、間違っても、手を抜いたりしたら、駄目ですからね。」

「大丈夫だ、信用しろ！」

オカ研の初戦の相手はバレーボール部。

「孜劉先輩♪…信じていますからね？」

「うう…」

但し男女混合チーム、シリユーの彼女であり、【学園きよぬー四天王】の一角を成している、矢田桃花が所属しているチームだった。

「シリユー？」「神崎君？」

「シリユー君？」「シリユーさん…？」

「「シリユー先輩…？」」

「分かってるから！少しは信用しろ!!」



「…えいつ」

ドゴオツ!

「ぐええっ!?!」

試合はオカ研ペースで進む。

特に小猫、シリユウの男子部員への情け容赦無い投球が、猛威を振るっていた。

「ええ〜い!」

「きやんっ!」

ぶるん…

ギヤスパアの投げたボールがトーカに迫るが、推定Fな胸を大きく揺らしながら、それを避けるトーカ。

「!!!!!!」  
「うおおおおおおおおおおおおっ!!!」  
「!!!!!!」

そして、それを見て湧き上がる、見学席の男子生徒達。

ぷち…

「か…神崎…君?」「シリユウ…先輩?」

「木場、小猫。次 ボール来たら、俺に寄越せ…な?」

「ら…らじゃ…」

しかしながら その盛り上がりは、赤き龍帝の逆鱗に他ならなかった。

》》》

「でえいやあああつ!!!」

びゅん!!

「おわっ!?!」「きゃあつ?!」

物凄い勢いで男子バレー部員の真横をすり抜けた、シリユウの投げたボールは、外野で受け取る構えだったリアスも本能的に避ける程な、殺人的な物。

そして その、受け手が不在となったボールは…

ズガアンツ!!!

「あじゃぱーっ!?!」

「ひ、兵藤おっ!?!」

トーカの胸の揺れを、眼福とばかりに鼻の下を延ばし、スケベ面丸出しで見学していた1人の男子生徒の顔面に直撃、この生徒は負傷退場となり、

「うぎゃあつ!?!」「ぬわああつ?!」

更に直後、男子生徒2人が同様に退場。

その後はシリユウの身体から迸る殺気を観衆も感じ取ったのか、水を打った様な静かな盛り上がりとなり、

「うう…：攷劉先輩の…：鬼畜…：」

「誤解を招くような発言は止めろ!!」

オカルト研究部がバレーボール部を下し、2回戦に駒を進めた。

◇シリユースide◇

俺達オカ研の快進撃は止まらない。

順調に勝ちを重ねた俺達は、準決勝で

「う…劉兄さんの、鬼畜…」

「だ・か・ら!その表現は止めろおつ!!」

従姉のユキコの所属する、サバイバルゲーム同好会を下し、決勝へ。

そして決勝で待ち受けていたのは…

「やはり勝ち上がってきたわね、リアス!

それでこそ、この私のライバル!!

今日こそは長年の決着、この場で着けてあげるわ!」

「ええ!望む所よ、ソーナ!

さあ、掛かってきなさい!!」

「神崎い!木場あ!!お前達は、この俺が、倒—————つす!!」

「上等だぜ!匙い!!」

「その言葉、着払いで返してあげるよ。」



支取先輩率いる、生徒会の皆さんだった。

…つて、木場。

お前も言う時は言うんだなw

》》》

「あら？ソーナ？貴女、あれだけ啖呵切っておいて、いきなり外野なの？

何か、派手に動けない理由でも あるのかしら？ w w」

「う…うるさいわねえ！」

ゲーム開始直後、ボールを持ったリアス部長が支取先輩を挑発。

駒王学園高校男子生徒制定

【学園きよぬー四天王】

・ 姫島朱乃

・ 支取蒼那

・ リアス・グレモリー

・ 矢田桃花

(生徒間で、”大きい”とされている順)

しかしながら、支取先輩に限っては、きよぬーはきよぬーでも、実は”虚乳”。

そう、一見、完熟なメロンに見えるアレ、実は”詰め物”なのだ。

そして その事実、3年生を中心とした女子の大半、そして2年生男子3人が知っているだけ。

それが広まらないのは、女子は『武士の情け』的なヤツ、男子に至っては、内1人は先輩と主従関係にあるだけでなく、それを気にしない程の特別な感情を持っており、口外する気が無いから。

そして残り2人については、OHANASHIの末に硬く口止めされている故だ。

…あの時の支取先輩の顔、凄く怖かったよなあ、木場。

兎も角、朱乃先輩に次ぐ、学園No.2とされているが、実は学園内で下から2番m  
…ちよ…、小猫?ガチな膝かつくんは止める。閑話休題。



「うおらっ!!」「だりやつ!」

オカ研vs生徒会のぶつかり合い。

気が付けば、互いに内野に1人残すのみにまで、ゲームは進んでいた。

「や…やるぢやねーか、神崎!」

「お…お前もな、匙!」

シリユーと匙。

互いに外野にボールを廻すと云う発想は無く、飛んできたボールを受け止めると、そ

の儘に投げ返す…端からみれば、結構ガチなキャッチボールをしている様に見えるかもしれない…そんな展開となっていた。

「しぶといヤローだな…さっさと諦めて、試合終了しやがれ!!」  
バシィッ!

「テメーこそ、俺が諦めるのを諦めろ!」

ビシィッ!

「シリユー…」 「匙…」

「シリユーさん…」 「元ちゃん…」

互いの仲間が見守る中、半ば意地な如くにボールをぶつけ合う2人。

同じ展開が20ターン近く続いた時に、遂に流れは変わった。

「…(チラッ)」 「…(コクン)」

匙に向かってボールを投げたシリユーが、アジアにアイコンタクト。

そして、それに頷くアジア。

しかし、それは匙にも気付かれる。

受けたボールをシリユーに投げ返す匙。

神崎：気付かれない心算だったか？

次に お前は、フェイントでアルジエントさんにパスするんだろ？

そー言えばアルジエントさん、このゲームだけでなく、今迄見たゲームの中でも、投げるは愚か、全然ボールに触ってなかったよな？

まさか、この展開を想定しての秘密兵器だったか？

残念だったな！

アルジエントさんからのボールを取ったら、今度は俺が、フェイントで会長にパスして、それで終わらせてやるよ!!

頭の中での高速思考。

匙は身体はシリユーを正面にしながら、目線を僅かに自身の向かって右側に流すと、外野位置で、如何にも「ボール、受け取ります！」な、気合いが入った顔で立ち構えているアーシアを注視。

だからアルジエントさん、そんな顔じゃ、バレバレなんだって！

キイーン…!!

「んぐべいつ?!」

しかし、ボールが飛んできたのは、自身から向かって左側。

シリユーが かなり本気で投げたボールを、小猫が正拳突きでダイレクトに撃ち返し、そのボールは殺人的スピードで匙の下腹部に直撃。

…テンテンテン

「あが・が…」

パタン…

「さささ、匙いゝ?!」「げ、元ちゃん?!」

ボールが小さく数バウンドした後、匙は顔を青くし、前のめりにダウンしてしまう。

ざわざわざわざわざわ…

この時、見学席では、その光景を見た男子生徒は皆 青冷めた顔で、まるで自身があのだ直撃を喰らったかの様に、その部位を庇う様に両手で抑えて屈み込み、女生徒達は 何故だか嬉しそうに、顔を赤らめ、両の頬を抑えていた。

◇シリユーside◇

「(ハハハ)、小猫、お、お前は何てゆう事を…」

「ふいっ…作戦通り!! (どやあ!)」

「こやこや、」ふい「でわない!!」

確かに、アーシアへのアイコンタクトは、お前へのパスのサインだったし、結果、匙は見事に引つ掛かってくれた訳だが!?

「匙さん…でしたかしら?」

あの方、随分と派手に倒れましたけど、大丈夫でしょうか?」

「当たり所が悪かったんですかねえ?」

悪かった処じゃないし、大丈夫でもない!

「あらあらあら………」

はい、その朱乃先輩、嬉しそうな顔をしない!!

…こうして、ドン引きと大湧きが入り乱れるカオスな空気の中、部活対抗球技大会は、

我等がオカルト研究部の優勝で、幕を閉じたのだった。

部活対抗球技大会

種目：ドツヂボール

優勝：オカルト研究部

準優勝：生徒会執行部

3位：アニソン研究会

MVP：塔城小猫（オカルト研究部）

敢闘賞：神崎有希子（サバゲー同好会）

特別賞：矢田桃花（バレーボール部）  
御愁賞：匙元士郎（生徒会執行部）

## 教会からの使者

ざわざわざわざわ…

この日の放課後、駒王学園の校門を、2人の少女が通り抜けた。

1人は、前髪に一筋の緑のメツシユが入った、蒼い髪のショートカット。

そして もう1人は、茶色の髪をツインテールに結っている。

宗教関係者であろう、首から金のロザリオを下げ、白い法衣を纏った この2人、蒼い髪の少女は布で包んだ：外から確認出来る形状からして巨大な十字架であろうか、その身の丈より長い荷物を抱き抱えている。

ざわざわざわざわ…

「うぎい…斬るか？」

「お止めなさい！」

前庭の噴水の前で、誰かを待つかの様に立っている、明らかに学園の生徒ではない格好な外様の美少女2人、その口から小さく発せられる物騒な発言を余所に、学生達の注目が集まっていた。

》  
》  
》



「わあくあおう！」

「その美少女さん達、ウチの学校に何か用ですか？」

「職員室か事務室の場所が分からないなら、案内しますよ？」

「…で、用事が済んだら、俺達とデート…いやいや、お茶でも どうですか？」

「へ？」「は？」

そんな2人に遠慮する事無く臆する事無く、3人の男子生徒が声を掛ける…という  
か、ナンパしてきた。

「ささ、職員室は、正面の校舎の…」

「ちよ…ちよつと待ってよ、…ってゆーか、キミつて…？」

ナンパ男の1人がツインテ少女の手を取った その時、

「何をやっているか!？」

「この、変態3人衆が!!」

ガンツ x 3!

「あべし!」「たわば!」「ひでぶ!」

その後ろから怒声と共に、3人の頭頂に拳骨が落ちた。

「痛ててて…ツメー、神崎!」

「お前、いきなり何をするんだ!？」

「この前のドッチボールと言い、お前、俺達に何か怨みでも有るのかよ?!」  
「喧しいわっ!!」

この2人は、ウチの客だから迎えに来てみたら、貴様等が阿呆な真似をしでかしていたのだろうか!

「「きや…客う!?!」」

「アンタ等2人、………の関係者だな?

リアス・グレモリーの使いで来た。」

「あ…うん…」………。

そこに現れたのは、何故だか仏頂面な神崎孜劉。

どうやら この2人は、リアスに何やら用事があり、学園を訪れた様だった。

「…案内する。」

オカ研の部室は、アッチ側だ。」

》》》》

「ねえキミ? さっきの男の子ってさ…」

「気にしないでくれ…」

ありや、学園の恥部だ…。」

2人を案内しながら、旧校舎へと続く森を進むシリユ―。

「(ボソ…) ねえねえゼノヴィア、あの人って、…:…:だけど、結構イケメンだよね?」  
「…興味無い。」

「はあ…:アンタつき、何でも『興味無い』だけど、一体、何に興味有るのよ?」  
「…剣?」

「…ダメだ こりや。」

そのシリユーに聞かれない様、2人の少女は小声で会話しながら、3人は

コンコン…

「部室、連れて参りました。」

「ご苦勞様、シリユー。」

オカルト研究部部室へと到着した。



コト…

「どうぞ、お紅茶ですわ。」

「…毒は入ってないだろうな?」

「ちよ…:ゼノヴィア!?!」

部室の応接室に通された2人に、朱乃が紅茶を差し出すも、蒼髪の…:相方のツインテ茶髪の少女から、ゼノヴィアと呼ばれた少女が、それこそ毒を巻くが如くな言葉を吐き

散らす。

「うふふ……まさか そんな、主の顔に泥を塗る様な真似は、いたしませんわ……」  
ぷつくう……

そう にこやかに答えながらも、朱乃の顛には、ず太い血管が浮かんでいる。

「(ボソ…) 朱乃先輩、かーなーり、キレていますわね……」

「(ボソ…) 私なら、とつくに あの面に、グーパン喰らわせてる自信があります。」

「(ボソ…) うう……朱乃先輩、凄く優しい笑顔ですけど、瞳が笑ってないですう……」

その様子を見て、部屋の角で小声で話すのは、オカ研1年3人組。

「……で、何の用事なの？」

昨日、お兄様まおとうから、教会の使いが訪ねてくるというのは聞いていたけど、もしかして、天界は悪魔側に、ケンカを売りに来たのかしら？」

そして やはり、先程の『毒』発言を快く思っていない、アームチェアに座っているリアスが口を開く。

その後ろ、王と女王を護る様に立っているのは、未だに仏頂面を崩していないシリューと、それを更に酷くした、ファンが それを見たらショックで気絶するかの様な、輩の如くな表情の木場祐斗。

教会に思う所があるアーシアは、やはり小猫達と共に部屋の角で様子を見ている、ミ

ルたんの背後に身を隠していた。

そして朱乃がリアスの隣の席に座ると、ツインテールの少女が、ティーカップに一口付けた後、話し始める。

「先日、教会が保管 管理していた、3本の聖 エクスカリバー 剣が奪われました。」

「え!?!」「なっ?」「:!!」「:~?」

ツインテールの少女:紫藤イリナが言うには、正教会、カトリック、プロテスタントが各2本ずつ保有していた聖剣が、各宗派から1本ずつ奪われ、駒王町に持ち込まれたらしい。

「エクスカリバーって、そんなにも有るによ?」

「オன்றリーだと思ってたかい?」

俺も、魔王からの又聞きだけど、大昔の戦争時にだn

「おい お前、聖剣の蘊蓄は、後にして貰えるか?」

「:~それもそうだな、失礼した。」

…で、教会のザル警備を潜り抜け、見事に聖剣強奪成功したのは誰だか、分かっているのかい?」

「ぎ、ザル警備だとおっ!?!」

お前は教会に、喧嘩を売っているのか?!

「ゼノヴィア!」

「シリユーも!」

「ふん!」

「失礼…で、その賊は誰なんだい?」

「聖剣強奪の首謀者は墮天使…【神の子を見張る者】の幹部…コカビエルです。」

「?」「か?」「び?」「え…?」

……………。

「「「「「つるーっ!?」「」」」」」

その名を聞き、盛大にハモる、オカ研の皆さん。

「馬鹿な? コカビエルと云えば、聖書にも名を記している、あの、コカビエルか?」

「ええ、そう思ってた間違いは無いわね。」

「ハア…てゆうか、また墮天使ですか?」

まさかなVIPな名前の登場に、驚きを隠せないシリユー。

そして、またもや墮天使の起こした騒動と知り、呆れ顔な小猫。

「…話を進めるぞ？」

私達が こんな所に迄、わざわざ足を運んだ理由…

それは お前達に忠告しに来たのだ。

この度 墮天使が起こした この事件は、我々教会側だけで片付ける。

故に、『お前達 悪魔は今回の騒動に関わるな』…これを言いに来た。」

冷めた目で、きつぱりと言うゼノヴィア。

かちん…

「そ…それは随分な物言いね？」

私達が墮天使と手を組む…とでも？」

その発言に口元を上方に引き揚げながらも、あくまでもソフトな口調で応対するリア

スだが、

「何だ？ 違っていたのかwww？」

「なな…何ですって！」

私は墮天使等とは手を組まないわ！

グレモリーの名に賭けて!!」

「なあアンタ…さつきから本当に、もしかして俺達に喧嘩売ってるのかい？」

だったら、部長の代わり、俺が買ってやっても良いぜ？」

「ちよ……ゼノヴィアは もう喋らないで！

キミも！頼むから、少し落ち着いてよ!!」

その相手の余りにも不遜な言葉使いに、遂には後ろに控えていた仏頂面1号と一緒にキレてしまい、慌ててイリナが両者を宥めに入った。

「と、兎に角、貴方達 悪魔は今回の件、不介入を主に誓って下さい！」

「私達、神に祈りを捧げたりしたら、ダメージ受けるんだけど?」

「もく、あー言えば こー言う！」

それなら魔王……は流石に立場上 勧められないから、閻魔様にでも誓って頂戴!

話は お終いです!

さあ、帰るわよ、ゼノヴィア!!

紅茶、ご馳走様でした!」

「あらあら? もう帰られますの?」

せつかく紅茶、入れ直しましたのに……」

「う……け、結構です……。」

差し出された紅茶が、実は かなりの味だった為、正直、お代わりしたい気は有ったイリナだが、隣に座っているパートナーが、一切口を付けていないのも有り、気不味く、名残惜しそうに席を立ち、



「…ゼノヴィア、帰るよ?」

改めてゼノヴィアに声を掛け、部室を去ろうとする。

あゝ、やれやれ、何とか平和に?話を終わらせる事が出来たわ。

後は もう、要らないトラブルに巻き込まれる前に、この学校から立ち去るだけよ!

イリナが そう思いながら、安堵の息を吐き、部屋の扉を開こうとした時、

「…さつきから 気になっていたのだが、お前もしかして、『魔女』アーシア・アルジェントか?」

「え…?」「はああくあつ?!?!」

ゼノヴィアが部屋の角で目立たぬ様に振る舞っていた、アーシアに声を掛ける。

それは彼女からすれば、どう考えても要らないトラブルへのフラグにしか見えなかった。

…が、

「あ…貴女が一時期、内部で噂になっていた、『元・聖女』さん?」

追放されて、何処かに流れたとは聞いていたけど、まさか、悪魔になってるとは思わなかったわ。

「…あの…私は…」

フラグな筈が、アーシアを認識した途端、無自覚なのか、自ら それを、強固な方向に持って行ってしまう。

ぷち…

「し…シリユー…？」

仏頂面の男の顛に、先程の朱乃以上の、太い血管が浮かび上がっているのにも、気付かずに。

「大丈夫、この事は、上には報告しないでおくわ。

『聖女』アーシアの周囲に居た人達に、今の貴女の状況を伝えたら、それこそシヨックで倒れてしまうでしょうから…。」

「……………」

イリナとしては、善意で、決して悪意は無く、他言の意志は無い様に言っている心算だが、その発言に、アーシアは俯き、黙り込んでしまう。

「ふん…しかし悪魔…か。

嘗ては人々に『聖女』とまで呼ばれ崇められた人間が、墮ちる処迄 墮ちた物だ。」  
更に其処に、ゼノヴィアが言葉を続ける。

.....。

「…（わ、分かってるわね、貴方達！

いざという時は全員で、シリユーを取り抑えるわよ！）」

「「「「…（ら、らじゃー！）」」」」

その やり取りに完全にキレかかっているのが丸分かりなシリユーを見て、リアスが  
部員達にアイコンタクトで指示。

「ふん…お前、それでも まだ我等の神を、信じているのか？」

「ちよつと…悪魔になった彼女が、主を信仰していて？」

それに…リアス達の警戒も、そしてシリユーの心理状態も気付かずに、会話を続ける  
教会2人組。

「…いや、背信行為をする輩でも、偶に その罪の意識を感じながら、信仰心を忘れない  
者が居るんだ。

それを、今のコイツからは感じ取れる。」

「…捨て切れて、ないだけです。

ずつと、信じていたのですから…」

冷たい視線から、顔を逸らす様に答えるアーシア。

「そうか…ならば、今直ぐに、私達に斬られるが善いだらう。」

そう言つて、ゼノヴィアは手にしていた長い荷物の包みを解く。

その聖刻が刺繍された布に包まれていた荷物…

それは、手に持つ柄以外、鐔の部分さえも刃の造りになっている、巨大な剣だった。

「今、神の名の下、断罪してやろう。」

如何に罪深い異端の魔女であれ、我等の神は、救いの手を差し伸べてくださる筈だからな。」

そう言つて、その刃の先をアーシアに向けた時、

「…ストップだ。」

その間に、シリユーが割つて入る。

その顔は決して、怒りの形相ではないが、鋭く厳しい物。

「アーシアは今、あくまでも形上だが、この俺の部下に位置している。

その彼女に刃を向けた以上、それは、教会…いや、天界は、この俺に刃を向けた…

即ち、この孜劉に喧嘩を売つた…

そう判断して善いのだな？

尤も…今更撤回は認めないがな！」

…此処に、イリナが言う処の、要らぬ筈なトラブルのフラグが今、完全に成立した。



## 唸る聖剣!エクスカリバー!!

「そもそもアーシアの能力を見て、それで貴様達で勝手に『聖女』とやらに仕立てておきながら、それが悪魔ですら癒やすとなると、異端扱いの掌返しか?」

巫山戯るな!!」

怒りの形相となり、シリユーが吼える。

「悪魔ですら癒やす能力を、我々 教会が異端と見なして、何が悪い!」

当然だろうな話ではないか?」

これにゼノヴィアも言い返すが、

「:..ならば!そのアーシアの能力を異端と見抜けず、10年近く聖女として祭り上げた者も当然、何らかの責任を取らされているのだろうな?」

まさか、彼女を追放しただけで、終わりでは在るまい?」

「ん、言われてみれば、その通りだし、そー言えば、責任とか処罰とかって、そーゆー話って、聞いてないわよね?」

「お、お前も余計な事は言うなあ!!?」

シリユーの言葉に対して肯を示す相方に、罰が悪そうに顔を顔を赤くして、ゼノヴィ

アが声を張り上げる。

「ふっ……所詮、宗教とは そんなもんさ。」

都合の悪い存在は、蜥蜴の尻尾の如く、正しくアーシアの様に切り捨て、都合の悪い  
事実は闇に隠蔽で事無きに行き。

その上で、常に世間に対しては、自分達が絶対的に正しい存在だと、綺麗事だけを並  
べてアピールだ。

そして それを傲りと自覚せず、自分達だけが正義と勘違いして増長する……それが、  
教会の本性だ！」

「(ボソ…) あ…不味った…」

「(ボソ…) 部長？」

「(ボソ…) シリユー、アーシアの件で教会とかが大嫌いなもの、すっかり忘れてた…」

「(ボソ…) え、…？それでシリユー君、今日は ずっと ご機嫌斜めな顔だったのね？  
祐斗君は解るにしても…」

「(ボソ…) 何故、部長は よりによって、シリユー先輩を、あの2人の迎えに遣わせた  
のですの？」

「(ボソ…) だ・か・ら…忘れてたって言ってるでしょ!!」

留まる事を知らないシリユーの教会非難を見て、思い出したかの様に頭を抱え込むり

アス。

失敗した…シリユー（…とアーシアと祐斗）は、席を外させるべきだった…と悔やむが、それは既に遅かった。

「ちよつとキミ！」

そんな言い方は、ないんじゃない？

神と悪魔よ？どー考えてても、正義は私達に在るのは、明白じゃない?！」

シリユーの発言に、イリナが反論するが、

「神が正義…？笑わせるな!!」

少なくとも『この世界』に於ける神と悪魔など、単なる種族違いでしかない筈だ！

今の一般的な価値観は、偶々、貴様達の遙か昔の先達による刷り込みが浸透しているだけに過ぎない!!」

「なあっ!？」

其れをシリユーは更に反論。

「そもそも貴様等、何様の心算だ？

此処へは、教会からの意向を伝令しに来ただけではないのか？

悪魔側に位置している者を、斬り棄てようとした その軽はずみな態度、本当に天界は悪魔側に布告、貴様等は さしあたっての刺客と解釈されても、文句は言えんぞ!!



例え、この場で この俺に、返り討ちにされたとしてもな！」  
「ちよつとシリユー！」

貴男が更に、場を掻き乱して どーする心算なのよ？」

「黙っているろ！リアス・グレモリー!!」

!!」

場を鎮めようと、リアスはシリユーを窘めようとするが、その普段とは違う名の呼ばれ方にハツとする。

既にシリユーはオカルト研究部の部員でなく、冥界の、魔王の『客』である、赤龍帝として、教会の寄越した使者と応対している事に気付く。

「(ボソ…) 止めないによ？」

「(ボソ…) 自殺願望があるなら、敢えて止めるの止めたりしないわ…」

「(ボソ…) 止めるの止めとくによ…」

「(ボソ…) 放任ですの？」

「(ボソ…) た、だって、仕方無いじゃないのよ!! (T | T)」

先程の、「いざとなったら全員で…」のアイコンタクトは何処へやら。

徐々に殺伐としていく空気の中、リアス達は少なくともシリユーに対しては もう、

何も出来ず、黙って見守るしかない中、

「シリユーさん、私なら、平気ですから!気にしていませんから!…だから!!」

アーシアが勇気を出して、声を掛けるも

「…本当にアーシアは優しいな。」

だが既に、アーシアだけの問題では無い!

この孜劉、当人の心情がどうであれ、自分の下の者に刃を向けられ、それで黙ってられる程、腑抜けてはいない!!」

シリユーには通じない。

「ふん…部下思いなのも結構だがな、返り討ちは大きく出過ぎじゃないか?」

気付いてないのか?この劍は、其処等辺の数打ちとは訳が違うぞ!

先の大戦にて砕かれた、エクスカリバーの破片を錬金術を以ってして鍛え直された7本の聖劍の1つ、【破壊の聖劍(エクスカリバー・デストラクション)】だぞ!

下級な転生悪魔如きで、どうにか出来る代物では無いぞ!」

「え…う…転s…ひいつ!」

改めてシリユーに、聖劍の切っ先を向けるゼノヴィアの発した『転生悪魔』という単語にギヤスパーが反応、何かを呟こうとした時、893の眼光で睨まれ、その呟きは途中で止まってしまう。

「成る程…そんな玩具（オモチャ）を与えられたから、それを自分の力と勘違いして、そんな自分だけが絶対正義の如くな、大きな態度に出られていた訳だ。まるで子供だな。」

尤も、そんな玩具が俺に通用するとは、思えないけどな。」

先程からの言葉の売買で、完全に頭に血が登っているであろうゼノヴィアの発言に対し、逆にガチギレ直前な状態からクールダウンに努めながらも、その内容自体は常に挑発的だったシリユートの言葉に、

「き…貴様あ！人が大人しくしていれば、よくもヌケヌケと!!」

良いだろう、其処迄言うなら、表に出ろ！

貴様も、その魔女と一緒に断罪してやる！

この【破壊の聖剣（エクスカリバー・デストラクション）】でなあっ!!!」

「はあ…この脳筋（バカ）…」

脳筋（バカ）が1匹釣れた。

そして、

ボワアツ!!

「!!!!!!?!?」

「ねえ、神崎君?」

その喧嘩、僕に譲ってくれないかな?」

「木…場…?」

「今迄、ずっと教会からの2人を睨み付けているだけだった…その教会の者に対する感情から成る表情は隠せないも、殺気だけは必死に押し留め、沈黙を貫いていた木場が、その殺気を一気に解放、口を開く。

「いきなり横から…何なのだ?お前は?」

「君達の先輩だよ…」

尤も僕は…失敗作らしいけどね…」



「はあ…何で、私迄…」

「うるさい!あの先輩とやらが、どうしても言うのだから、仕方無いだろ!」

旧校舎外のグラウンドで対峙する、教会の2人とシリユー…と木場。

入り込んでいる顔のゼノヴィアの隣で、とほほ…な面持ちで溜め息を吐くイリナ。

衝突已む無しな空間に割って入ってきた、先輩を名乗る木場を見て、それならばと(ゼノヴィアの勝手な仕切りで)、2vs2の勝負の運びとなる。

「も、仕方無いわね!」

そう言つて、イリナが左腕に結んでいた紐を解くと、それは日本刀を思わせる剣へと

形を変えた。

「じゃ〜ん！これが私の、【擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）よ！】」

そう言つて、先程のやる気の無さが嘘な如く、ノリ気な表情を見せ、聖剣を構えるイリナ。

どうやら彼女は、武器を手にすると、スイッチが入るタイプな様だった。

「おい、リアス・グレモリー。」

コレは私的な決闘で、教会も悪魔側も関知しない。

我々は事を大きくする心算は無いし、お前達も同じ認識という事で良いな…」

「あ〜、はいはい…」

自分から喧嘩売つておいて、よく言うわ…

その台詞を我慢し、もう勝手にしろ…とばかりな、呆れ顔でリアスは応える。

寧ろ心配なのは、

「え…と、シリユー…さん？」

あんまり、怪我させないように…ね？

それから祐斗も、無茶しては駄目よ！」

「了解ですよ、リアス部長。」

「…努力はしてみます。」



シリユートの振りによるリアスの掛け声で、4人が一時的に散り、

「どうした？お前、武器は持っていないのか？」

「必要と判断するか、気が向いたなら、その時に出してやるよ。」

「お…お前え！舐めるのも大概にしろ!!」

【魔劍創造（ソードバース）!!】

「へえ…？炎の剣かあ…」

キミ、魔劍使いなの？」

最初は必然的に、シリユートvsゼノヴィア、木場vsイリナの図式となった。



「せえいやあ!!」

ボウ!!

「きやつ!!」

刀身から炎が吹き出る剣を木場が振るうが、それは冷静さを失っている大振り故か、イリナはバックステップで簡単に回避。

そして それと同時に、

「シュッ！」

距離の空いた位置から、自身の聖剣を大きく振るう。

S H A A A A !!

「何っ!?!」

すると その刀身が長く延び、鞭の如く蛇の如く、或いは新体操のリボンの如く、撓りながら木場に迫ってきた。

バシィツ!

「っ…!!」

この攻撃を炎の剣で受け止めるが、その衝撃で剣を手放してしまう木場。

「どう?これが私の聖劍、【擬態の聖劍（エクスカリバー・ミミック）】よ!

どんな形にでも、ある程度は自由自在!

どうする?降参する…って、その顔、そんな気は無いみたいね?

それなら、イケメン悪魔2号君?

神の名の下、この聖劍に滅されなさい!

アーーーメン!!」

S H A A A A !!

イリナの口上と祈りの前、丸腰となった木場に再び、【擬態の聖劍（エクスカリバー・ミミック）】の刃が波を描く様に襲い掛かってきた。



ガシイッ

「へ？」

それは木場の手の中で新たに作られた、氷の剣に受け止められる。

「炎の次は氷の剣い!？」

キミって、複数の神器持ちだった訳？」

驚きの表情なイリナに、木場が答える。

「違うな…創ったんだよ。」

ドガアッ！

地面から、木場の周りを囲む様に、幾本もの巨大な刃が生え現れる。

「僕の神器は「魔剣創造（ソードバース）」。

任意で数多の魔剣を創造する…これが、僕の神器だ！」



「貴いっ様あ!!舐めているのか?!」

「そう見えるのなら、そうなのだろう。」

ブウンぶうん…

ゼノヴィアの、縦横斜めな怒涛の大振りな斬撃を、ズボンのポケットに両手を入れた

儘、悉く躲すシリユー。

その余裕な態度が、尚更にゼノヴィアから冷静さを奪っていく。

「クソがあああああああつ!!」

大きく跳躍し、目の前の、余裕綽々な顔の男の脳天を、叩き潰すかのような縦一文字の一刀を放つゼノヴィア。

DOGGOOOOHN!!

しかしシリューは、それさえも躲すが、その攻撃によって、打ち突けられたグラウンドには、直径約3メートル程のクレーターが出来上がる。

「ひいつ!?地面に大穴が空きました?!」

「あれが…聖剣の力ですの!?!」

「…強い!!」

「あく、もう!誰が あの大穴、直すと思ってるのよ!!」

「見たか!これが、【破壊の聖剣(エクスカリバー・デストラクション)】の威力だ!!」

その攻撃力にオカ研部員が驚く中、得意気満足気に吠えるゼノヴィアだが、

「当たらなければ、意味は無いぞ?」

「き、ききききき…」

それでも汗流す事も無く、シリューは余裕な姿勢を崩さない。

ぶち…

その台詞、その態度に、遂にゼノヴィアが完全にキレル。

「きいっつ貴様あつ!!巫山戯るのも大概にしろおおっ!!」

聖剣を横向きに構え、怒りの形相からのダッシュで間合いを詰めるゼノヴィアに、

「巫山戯ているのは どっちだ!？」

そんな、鈍（なまくら）な玩具がエクスカリバーだと？

貴様こそ、巫山戯るのは大概にしろ!!」

ポケットから両手を出し、この決闘、初めて戦闘の構えを見せたシリユーが吼える。

「死いねえええええっ!!」

斬!!

ドサアッ!

ゼノヴィアの、気合いの入った掛け声と共に、破壊の刃がシリユー目掛け、勢い良く

振り降ろされるが、

「な…うば、馬鹿な…?!」

その次の瞬間、【破壊の聖剣（エクスカリバー・デストラクション）】の刀身は根元から、シリユーの繰り出した右の手刀によって断ち斬られ、重い音と共に地面に落ちるのだった。

# 唸る聖剣!エクスカリバー!!②(仮)

「ばばば…バカな?!

聖剣だぞ?エクスカリバーだぞ?!

下級の転生悪魔如きが、生身で どうこう出来る代物では無いんだぞ?」

刃を徒手で斬り落とされ、柄だけとなった「破壊の聖剣(エクスカリバー・デストラクシオン)」を握り締め、それをわなわなと見ながら、狼狽えるゼノヴィアに、

「余所見をしてる暇が有るのか?」

ドガアツ!

「うぐがっ!!」

シリユートの追撃の右の拳が、鳩尾に炸裂する。

「かほっ…かほかほ…」

膝を着き、咳き込むゼノヴィアに対し、

「立て!教会の、聖剣の使い手様とやらは、その程度か?!」

女相手にも一切、攻撃の手を緩めない(一応、手加減は している)シリユートの猛追は終わらない。



そして、聖母マリアよ!

我が声に耳を傾けよ!!

ゼノヴィアが発する言霊に反応するかの様に、右掌の先の空間が罅割れ、黒い『穴』が現れた。

そして、その『穴』の中から、

「この刃に宿りし、聖者の御名に於いて、我は解放する!」

葵い刀身の大剣が出現、ゼノヴィアはその聖剣・デュランダルを取り出し、再びシリューに斬り掛かるが、

「遅い!!」

斬!!

ドサツ

「はあ!」

しかし、その一撃さえも、シリューは当然の如く躲し、先程の【破壊の聖剣（エクスカリバー・デストラクション）】と同じく、刀身の根元から、素手の…右の手刀で両断。

切り札の筈のデュランダル迄も失い、呆然とするゼノヴィア。

「なあ…!?!何なんだ!?!」

お前の その力は一体?!」

「嘗て、この孜劉の遙か前世（むかし）の盟友に、誇り高き黄金の魂を持つ男が居た！

その者の繰り出し放つ、何物をも断つ拳は、〔聖劍（エクスカリバー）〕と呼ばれていた…

そして今、この孜劉の右腕には、その偉大な男から譲り受けたエクスカリバーが宿っているのだ!!

そう…お前が振りかざして満足している玩具とは違う、真のエクスカリバーがな!!」  
ゼノヴィアの疑問にシリューは、嘗て互いの信じる正義の下に敵として戦い、そして共通の正義の下に共に戦った男の事を少しだけ語ると、

「お喋りは お終いだー!」

今度は此方の番とばかり、ダツシユからの回し蹴りで、先程、〔破壊の聖劍（エクスカリバー・デストラクション）〕で穿かれたクレーターの中心部にゼノヴィアを吹き飛ばし、追撃とばかりに更なるダツシユ。

それに対してゼノヴィアは、素手の…ボクサー系の構えで迎撃姿勢を取る。

…が、

「今迄、聖劍という玩具を与えられ、それに頼っていた者が今更、俺に素手で太刀打ち出

来るとでも思っているのか!

そして この孜劉、あの様な玩具に頼らずとも…でええいやあああつ!!!」

DOGGOOOOOOOOHN!!

シリューは相手の身体…ではなく、その足下に拳を放つ。

「うわあああつ?!」

その一撃は地を砕き、先のクレーターを消してしまう程の、巨大なクレーターを上書きする様に作り上げた。

「な…何ですの?!」

「前にシリュー君が言っていた、『せいんとの拳は地を砕く』って、あれは比喻なんかで

は なかったのね…」

「す…凄いですう!!」

「…によ!」

その破壊力には、身内も驚愕。

「逃がさん!」

そしてシリューは、その衝撃で上空に打ち飛ばされたゼノヴィアを追う様に跳躍。

背後を捕り、相手の両脇の下に足の爪先を引っ掛けると、その場、空中でのバク転の動きから繰り出される投げ技を放った。



どん!!

「きゃああっ?!」「うわっ!!」

そしてゼノヴィアは、木場と鏢迫り合いをしていたイリナと激突。

「あ痛たた…な、何やってんのよ!」

「う、うるさい!」

【擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）の糸状の刀身を、蛇の様に動かして木場を牽制しながら、ゼノヴィアに詰め寄るイリナ。

しかし、目の前の敵から視線を逸らしたのは、結果から言えば失敗だった。

「覇ああっ!!」

「しまっ…!?!」

パリン…

騎士（ナイト）の加速を最大限に活かした、木場の速攻。

不規則に蠢く聖剣の刃を交い潜り、手にした黒い刃が、聖剣の柄に埋め込まれている緋色の水晶の様な宝玉を破壊。

それによって、空中で生物の様に動いていた刃は、ダラリと地面に落ち、動かなくなる。

「木い場あっ!!」

一気に決めるぞー!ぶちかましてやれ!!」

(Boost!!)

「神崎くん?ん…分かった!」

其処に、何時の間にか、左腕に赤い籠手を纏わせたシリユも飛び込む。

「はあ!?あ、あれは、まさか…」

「赤龍帝の籠手?…つて、赤龍帝!!!」

その籠手を見て、完全に動きと思考が止まる、教会の戦士達。

「【赤龍帝からの贈り物(ブーステッドギア・ギフト)】!」

(Transfere!)

「【魔劍創造(ソードバース)】!」

2人並び、それぞれが地面に籠手を当て、魔劍を突き刺し、魔力を解放。

赤龍帝の籠手の特性の1つである『譲渡』の作用が働き、これにより強化された木場の神器は、グラランド一面に剣山の如く、無数の魔劍の刃を創り出す。

「ぎゃあああああつ?!」

そして武器を失い、守る術も逃げ場も喪ったゼノヴィアとイリナは、その身を巨大な漆黒の刃に貫かれた。

「す…ストツプ!」

其処迄よ、勝負在った!!」



「うう…」「くっ…」

「大袈裟だなあ…急所は外してあげたのに…」

「伝言も終え、オマケの茶番も終わったんだ、さっさと帰ったらどうだ?」

血塗れになって蹲る2人に、騎士と赤龍帝が冷たく言葉を浴びせる。

タツ…

そんな2人にアーシアが駆け寄るが、

「待てアーシア!何をやる心算だ?」

「!?!」

シリユーが それを制止。

「え…と…2人の…治療を…」

「駄目だ。」「えっ!?!」「…?!?!」

自分の神器、【聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）】による治療すると言うアー

シアだが、シリユーが止めた。

ザツ…

そしてシリユーが代わりに、教会の2人の目の前に立ち、

「…さて、この赤龍帝の部下であるアーシアが、君達の傷を癒やすと言っているが、どうする?」

君達は受け入れるかい?

正義な教会様(笑)が追放レベルに異端視した、アクマノキズサエモカイフクサセル、マジヨノホドコシヲ?」

最大限の皮肉を込めて尋ねてみた。

「ふっ巫山戯るな!誰が、魔女からの情けを…つつ…!!」

「…だ、そうだ、アーシア。」

「……………」

それに対して痛みを我慢しているのが丸分かりな表情で、ゼノヴィアが怒鳴り散らす。そして無理矢理に体を起こすと、

「か…帰るぞ…イリナ…」

「う…ん…」

やはり、ボロボロとなった体を無理に起こしたイリナと、その場を去ろうとするが、戻ったら忘れずに、トップに伝えておけよ?

悪魔とは関係無く、教会…天界は、この赤龍帝の敵となった…とな!

「な…?!」

其処にシリユーが、更なる追い打ちな言葉を投げかける。

「ど…どうして…?」

「自分達で原因を作っておいて、忘れたとも言えるのか?」

アーシアに刃を向けた…それは、この赤龍帝に刃を向けたに等しい行為だろ?」

「そ、それは…キミ…貴方が赤龍帝だったって知らなかったし、貴方だって名乗らなかつたから…」

「名乗る必要も無ければ、知らなかったで済む問題でも無い!」

在るのは教会の者である貴様達が、この赤龍帝の目の前で、俺の部下であるアーシアに刃を向け、貶めた事実だけだ!!」

元々、アーシアが教会を追放された経緯を知った時から、教会…天界に良い印象を持つていなかったシリユー。

今回の2人の態度で、それが矯正不可となってしまったシリユーは、このイリナの言い訳じめた言葉を、完全に遮断する。

「俺が赤龍帝を名乗っていれば、アーシアが赤龍帝の部下と知っていれば、あんな非礼は働かなかつたとも言いたいのか?」

それが通用すると思うのか?」

「そ…それは…」

「おい、ゼノヴィア…だったか？」

「貴様は先程、自慢の玩具を見せた時に、それが聖剣だと見抜けないのか云々と言っていたが、貴様も俺を、部長の下僕の転生悪魔だと勝手に思い込み、その内面を見抜けなかった…」

残念だが俺は…アールシアもだが、常人の持たぬ能力を持つてはいるが、一応は まだ『人間』なんだよ。

自分は偉いと勘違いしたか、自分は強いと勘違いしたかは興味は無いが、目の前の相手の正体や力量を測り損ない見抜けなかった、お前達の自業自得だ。」

「~~~~~!!」



パシン…!」

「……………」

イリナとゼノヴィアが学園から去った直後、怒りに奮える涙顔なアールシアの右手が、シリユウの左頬を打ち抜き、それを敢えて避ける事無く、シリユウは受け入れた。

「シリユウさん、いくら何でも、あの態度は酷すぎです!!」

「……………」

あの後の、2人揃って土下座しての許しの懇願も、「下っ端の謝罪は話にならない」と

ばかりに、冷たく撥ね退けたシリユー。

「アーシアちゃん……シリユー君は、アーシアちゃんの事を思つて……」

「……それでも！」

「「「……………」」」

朱乃のフォローも、アーシアは聞き入れられない。

自分の為……それは、充分過ぎる位に理解出来ているのだが、それでも それを納得出来ない程に、この聖女は優し過ぎた。

「……あの儘、アーシアの『異端』とされている癒やしを受けていたら、彼女等も異端視される可能性があった。」

「……!!」

「アーシア……シリユーの言う通りよ。」

その可能性は、貴女が一番良く知っているでしょ……」

「……………」(コクン)。」

リアスの言葉に、小さく頷くアーシア。

そして、

「シリユーさん……その……ごめんなさい！」

シリユーに対して大きく頭を下げる。

ポン…

「いや…酷過ぎたのも事実だし、悪いと思っっているなら この紅葉、早く消してくれると嬉しいんだが?」

お辞儀しているアーシアの頭に軽く手を乗せて、頬の手形の処理を頼むシリューに「は…はい!」

アーシアは赤くなっている顔を上げると笑顔を見せ、自身の神器を発動させるのだつた。

「あれが世間で云う、『撫でポ』ってヤツですよ?」

「そうですね。」

よし、トーカちゃんにチクリしましょう。」

「違うだろーが!」

箱入りに、嘘を教えるな!!」

すばーん!

「きゃーう!!? (〽〽)」



「部長、今回の件は、俺が魔王に伝えておきますよ。」

事が大きくなり過ぎたから、報告し辛いでしょ?」



「ありがとう、シリユー。」

でも、大丈夫よ。私が責任を持って、魔王様には報告するから。」

「…そうですか。」

それなら、お任せします。

それと、今後の指示も、直ぐに請うべきですね。

あの2人が、教会に、まともに報告しない可能性もありますし、仮に報告を受けたとしても、その後に教会が、適切な対応をするとは思えない。

そもそも、聖書に名が記されている程の墮天使の対処に、あの程度なレベルの者しか寄越さない組織ですからね。」

「何気に教会、デイスってるわね…」

一通りの お話とOHANASHIの後、部室内で改めて、リアス達と今回の件について話していたシリユー。

「そう言えば、木場が あの2人に先輩って名乗っていたけど…」

「あ…それは…」

シリユーの振りに、リアスは若干困り顔で、木場に目を向けると、

コクン…

木場は無言で頷く。

「ん、まあ、本人の許可も降りたなら言うけど…」

シリユー? 貴方、教会の聖剣計画については…わ…分かった…知ってるのは分かったから、思い出したかの様に、不機嫌全開な怖い顔するのは止めて…」

「僕は…その計画の、生き残りなんだ…」

「「「「「」」」」」」

この木場の言葉に、リアスと朱乃以外の、計画そのものを知っている者が、驚きの顔を見せる。

「しかし、あの計画の被験者は、全員処分されたって…?」

「私も、その様に伺っていましたわ。」

「ん…それなんだけどね…」

「部長、この先は僕の口から、話させて下さい。」

「祐斗、良いの?」

「ええ、良い機会だし、やっぱり皆には…ちゃんと知っておいて欲しいんだ…」

## 聖劍計画

聖劍計画…

それは天界陣営が秘密裏に行っていた、聖劍に適応した者を、人工的に輩出しようとした計画。

大昔、悪魔、天使、墮天使の3大勢力の衝突で起きた戦争の時に折れてしまった、聖劍エクスカリバーの破片を集め、錬金術により新たに造られた、7本の聖劍を扱える能力者を作り出す計画。

「…結局は、当時集められた者は皆、処分されたよ。

『失敗作』と云う烙印を押されてね。」

「木場…」

「被験者は、剣に通ずる才能や、僕みたいな〔剣〕系の神器を持った子供達だった。

特別な存在になれると言う言葉を信じて、毎日の辛く非人道的な、過酷な訓練や実験にも、皆、耐えていたんだ。

皆で励まし合い、訓練が終わった後の事を、皆で夢見ながら話していたんだ。

(中略)

…その結果が、処分だよ？

皆…皆、死んだ。

当時の僕よりも、幼い子も居た。

女の子だつて居たんだ。

それが皆、神に仕える者に、神の名を語る者に殺された…。

ははは…『聖劍に適応出来ない失敗作』。

たつた、それだけの理由でね！

「木場きゆん？」「祐斗先輩？」

「僕だけが、他の被験者に守られ…皆から、『自分達は駄目だから、君（ぼく）だけでも生きて』つて助けられて、研究機関から逃げ延びて…それでも既に瀕死だった僕を拾つて…救ってくれたのが、リアス部長なんだ。

皮肉な話だよ…救ってくれたのは、神様なんかじゃなくて、悪魔つてさ…

凄いやね、本当に偉いやね神様つてさ！

たつた それだけの為に、あんな大量殺人を容認してしまうんだからさ！！

あつはつはつは…笑えるよね？

あれが、世の、多くの人達が崇める神様なんだかさらあ！！？

ねえ？皆も、そう思うだろ？ねえっ!？」

「ゆ、祐斗、落ち着いて！」

「シリユーたんも！」

「一緒になつて、キレたりしないで下さい！」

話している内に、徐々に『ハイ』なろうとしている木場をリアスが鎮める様に抱き締め、話を聴いている内に、徐々にキレだし、家具破壊寸前だったシリユーを、小猫とミルたんが、物理で取り押さえた。



「ハア…ハア…すいません部長…もう大丈夫です。」

リアスの抱擁（顔面圧迫窒息刑に非ず）で、漸く落ち着きを取り戻した木場。

そして、

「重い重い重い重い！分かったから！」

もうキレてないから、退いてくれ！」

「はあ、!？」

「重い…によ?!」

「女子に向かって、絶対に言つては いけない言葉（ワード）を普通に言いやがりましたね？この、おっぱいドラゴンわ…」

しかも、4回も…

少し、OHANASHIする必要が有りますね。」

「によ!!」

やはり落ち着きを取り戻しはしたが、追加オプションを頂戴してしまうシリユウ。

「ちよつと待て? お前達がキレて、どうするんだ? 少し、話し合おう!」

「だから、OHANASHI:です。」

「ミルたん・セントエルモスファイヤー! によ!!」

「あつー——————!!?」



「そんな…信じられません…」

教会が まさか、そんな酷い事をしていたなんて…」

木場の聖剣計画に関する話を聞き、一番驚いているのは、やはりアーシアだった。

「仕方無いですわ…察するに、アーシア先輩は、追放される迄、教会の綺麗な部分しか見ていない、いえ、見せられてなかったんですから。」

「うう…僕達悪魔よりも、悪魔な所業ですう…」

前から計画の事は知っていたレイヴェル、そして、アーシア同様に初めて計画の存在を知らされたギャスパーも、顔を歪める。



「とりあえず聖剣やコカビエルの件は、シリユーが教会とトラブルった件も含めて、お兄：魔王様に報告したから。」

「さしあたっては指示待ちね。」

「「「「「はい。」」」」」」

「それじゃ、今日は もう、解散にしましょ。皆、お疲れ様。」

「リアスの一言で、今日の部活は お開きになったが、

「……………」

「シリユー先輩？まだキレてますの？」

「肉体言語によるOHANASHIから、漸く復帰したシリユーが、再び仏頂面になっていた。」

「ん、キレてるって言うか、思い出し笑いの怒り版みたいな…」

「…つまり、キレてるんですのね？」

「あ、く、スツキリしねー！」

「バッテリーセンターにでも寄って、憂さ晴らすか？」

「シリユー先輩、お供します。」

「実は私も、ぶっ放したい気分なんです。」

「それ、僕も御一緒しても、良いかな？」

「ばってんぐせんたー？」

何だか面白そうですね。」

シリユウの眩きに、実は…或いは未だ晴れていなかった、木場と小猫が、そしてレイヴェルが、好奇心から同調。

「それじゃ、皆で行ってみる？」

代金は、部費から出してあげるわよ！」

「……おーっ!!」

最終的にはミルたんを含む、オカ研全員で、町内のバッティングセンターに繰り出す事に。

この際、アーシアとギヤスパーを除く全員が、悉く猛打賞やホームラン賞を大量ゲットした為、オカルト研究部一同は、その店から B o u n t y H u n t e r s の悪名と共にブラックリストに登録され、出入り禁止となってしまうのだが、それはまた別の話。



「いや、結構、スッキリしたな。」

「あはは…そうだね。」



「面白かったですわ♪」

「楽しかったですね。」

出禁となったのは、予想外でしたが。」

「あれは、仕方無いによ。」

帰り道、すっかりスッキリした顔になって、明るく話すシリユー達。

特に、商品であるお菓子を大量にゲットした小猫の顔は、普段の無表情とは対極なそれだった。

「ねえ、皆……」

「ん?」

そんな和気藹々な雰囲気の中、木場が改まって、真面目な顔で話し始めた。

「今回、僕が話した事は、部の……グレモリーの皆だけの、秘密にしておいて欲しいんだ。」

頼むよ、特に……」

「……了解です、祐斗先輩。」

「ああ、分かったよ。」

「は……はい!特に、喋ってる途中で、興奮した余りに口が滑ってしまい、被験者の中に初恋の女の子が居た話とか、絶対に誰にも言ったりしませんから!!」

「あ……うん……アーシアさん、本当にお願ひするね……ははは……」





この後、オカ研部室に、

ガラツ…!!

「か、神崎君っ!!

それと、小猫ちゃんは居るかいっ!!?」

「ゆ、祐斗?」 「あゝらあらあら?」

「あわわわ…シリユー先輩と小猫ちゃんなら、アーシア先輩と一緒に、森沢さん家に仕事(あそび)に行きましたあ…。」

「きょ、今日は3人共、部室には戻らず、其の儘直帰するって言ってましたわ…」

両の手には勿論、背中にも無数の魔剣を携え、先日 教会の使いが訪ねてきた時以上の修羅な形相を真つ赤にさせた木場が、姿を見せたと云う。





追伸。祐斗、怒ってたわよく？  
WWW

明日は、朝の10:00に、部室に集合!

※:6/XX 20:53  
Fr:りあすぶちよー  
sb:明日の部活の件





ガラ…

「くっす。……………!?!」

翌日、シリューが部室の扉を開けた時、真っ先に眼に映ったのは

「ふみや…(〽〽〽)〽〽〽」

ギャグマンガみたいな大きな たんこぶを頭に作り、うるうるな半泣き顔で床に正座している小猫と、

「やあ、おはよー、神崎君。

とりあえず君も、正座しようか?」

ハリセンを片手に、闇を孕んだ、優しく爽やかな笑顔で話し掛けてきた木場だった。

「……………(。〇。L)……………!?!」

助けを乞うように、既に来ている部員達に目を向けてみるが、

「「……………( ? ? )」」

その全員…アーシア迄もが、我関せず、或いは、自分を巻き込むなとばかり、視線を逸らす。

そして その数秒後、





「よーし、神崎く? 落っ着けく?」

「はい先輩、ちくわパンあげますから、機嫌直して下さい。」

ふちキレ気味な男を宥めながら、町内を見回っているのは、匙、アーシア、小猫、そしてシリユーのグループ。

「そりや、『赤龍帝に喧嘩売って、天界毎敵に回してしまい、ついでに聖剣も、再生不能レベルに破壊されました』…なんて、言えないわな…」

「…と、なると、教会にも戻らず、雲隠れしか無いだろうが…」

「…少なくとも、この町からは もう、出て行ってるでしょう。」

「…ですよねー。」「……………」

まだ、町に居ようものなら、敵として捕まえ、知っている情報を搾り出すのも有りだが、もう自分は兎も角、アーシアに あの2人を遭わせたくないとも考えていたシリユー。

この町から消えてくれたのなら、それは それで、好都合だったのだが…

「「あ」「え…」「ん?」「へ?」

「……………」

「よ…よお、アーシアに小猫ちゃんに…神崎と匙?」

あ、こっちのイリナはさ、実は俺の幼馴染みで…」

昼食でも取ろうかと、偶々 目の前に在ったファミレスに入ってみると、アーシアのクラスメートの男子が、件の2人と同じテーブルに着いていたのだった。

「……………」

「さつき、ばったりと会ってさ、飯でもって誘つて…神崎…?」

「……………」

罰の悪そうな顔の2人を見て、苦虫1000匹噛み締めた様な顔になるシリユー。

「ほれ、神崎、行くぞ。」

あ、店員さん、アツチの奥のテーブル、4人座りますね。」

「さ、さあ、シリユーさん!」

「こつちですよ。」

「お…応…」

この場は気不味い雰囲気を感じた匙達が、シリユーの背中を押す様に、店の奥に連れ出して事無きを得る。



「神崎い…お前、ホントに機嫌直せよ?」

ほれ、唐揚げ一ヶ、やるからよ?」

「シリユー先輩、私もオムライス、分けてあげますから。はい、あくん?」

食事しながら、不機嫌モード全開なシリユーを何とか宥めようとする、匙と小猫。

「いや…別に、もうキレてないから。」

そんな2人に対し、大丈夫だと切り返すシリユー。

「あ…あの…」

「「!?」」

この やり取りの中、紫藤イリナがやってきて、声を掛けてきた。

「…私達に、何か用ですか？」

私達には事に介入するとか言って於きながら、そっちらから声を掛けてくるなんて、とんだブーマランですね。」

「う…」

それに応じたのは小猫。

恐らくはシリユーに対応させると、尚更に場が拗れるだろうから、その前に自分との判断だろうが、その話し口は痛烈其の物。

「その…謝り…に…」

「何に…ですか？」

「…そちらの赤龍帝さんに、非礼な真似をした事に、ついて…」

ぶち…

その台詞に、小猫が弾ける。

「何ですか、それは?!」

先に、アーシア先輩に対しての無礼を謝罪すべきではないのですか?!

それとも そつちの方は、未だに謝る必要性が無いとでも言いたいのですか?!」

「そ…それは…その…」

小猫の迫力有る問い詰めに、たじろぎ、何も言えなくなるイリナ。

「こ、小猫ちゃん、もう良いから!」

「いえ、言わせて下さい、アーシア先輩。」

この前は、シリユー先輩と祐斗先輩が暴走したので敢えて黙っていました、私だつて大切な仲間を、大好きな先輩を貶められて、凄く悔しかったんですから!」

「こ…小猫ちゃん…」

このアーシアの制止も跳ね返し、小猫の口撃は止まらない。

「大体 何故、アナタ達は、こんな所で昔の お友達とやらと、呑気に食事なんかしてるんですか?」

アナタ達に与えられた指令は、そんなに緩い物なんですか?

そもそも、あれから2日も経っているのに何故、まだ この町に居るんですか?

自慢のエクスカリバー(笑)を喪った今、アナタ達は戦力的に役立たずな筈。



「お前達も…かよ…」

「うん。元は墮天使が活動拠点にしていた場所だからね。」

何か手掛かりが…と思つてね。」

~~~~~

ギィィ…

重い音を発て、魔教会正面の大扉が開く。

そして その奥に、合流したシリユーと木場のグループは入り込んで行った。

「まさか、また此処に入り込むとはね…」

「賊が潜むには、打って付けですね。」

「灯りは無いのでしょうか？」

窓も無く、照明の無い建物の奥、その中を突き進む7人の少年少女。

「うう…何だか怖いですう…」

「…へたれヴァンパイア。」

ギャー君、怖いなら帰つても良いですよ？…此処から1人で。」

「うわあああん！小猫ちゃん、いぢめるう!!」

地上階を一通り見回り、隠し階段からの地下フロアへと足を運び、進んで行く中、小猫とギヤスパアの普段のやり取りが行われる最中で突如、異変は起きた。

「…ひゃっは—————!!」

糞悪魔御一行様、発つ見ん~~~~~!!!!」

「「「「「?!」」」」」

ぶうん!

暗闇の中、響く奇声と共に、先頭を歩いていた木場に、銀色に光る刃が襲い掛かってきたのだった。

ガキイツ!

「く…っ!!」

「ほっおう、よく受け止めたあ〜!」

咄嗟に魔剣を創り出し、それをガードする木場。

「お…お前は確か…?!」

「お…つとつとつとお〜い!

俺つちの事、覚えていてくれた?

嬉っしい〜ねえ〜!!」

「確か、フリード…だったかな…?」

「そ…のっ、通お〜っり!!」

こ…の・俺が・フリード・ゼルデン様よ〜!

余りにも嬉しいから、お礼に
ぶっ…殺してやるよ!!
なあ？赤龍帝ええい!!」

Bello・Cancro

「その剣…まさか…聖剣か？」

「いいぐざくとうりいゝい！」

「そうでえゝす！」

ボスと一緒に教会からパクっちゃった、聖剣・エえつくスクわありブワゝあ！様にて御座いまゝすでつすう!!」

フリードの持つ、白銀の剣から発する「氣」に、本能的に不快を感じた木場が質問すると、それに勿体振る事無く、且つ、人を虚仮にしているとしか思えない口調で、聖剣だと答えるフリード。

「あひやひやひやひやひや！」

廃教会（ここ）に居りや、その内に糞教会の奴等か糞悪魔が釣れるとは思って張つたが、まっさかさソレが、この前のテーマ等…しつかーも！糞赤龍帝も一緒とわなあ！

俺っちツイてるう!!

一部、知らないヤツも、混ざってまっすけつどお？」

「っ…!!」

キーン…

絶叫しながらのフリードの白銀の刃と木場の漆黒の刃が、再び交差する。

「木場、気を付けろ！」

その聖剣、悪魔（オマエ）達は掠っただけで、大ダメージだぞ!!」

「木場!」「木場さん!」

「木場君!!」「祐斗先輩!」

「皆、手助けは無用!下がっていて!」

加勢しようとする一同に、それは不要だと制する木場。

尤も、加勢をしようにも、場は狭い通路。

多人数での太刀回りが出来る広さは無い。

「ライン!」

…故に、助太刀の方法は、限られていた。

匙が左手に発動、具現化させた黒い蜥蜴を象るかの様な手甲型の神器の先端から、やはり蜥蜴の舌を連想させるパーツが鞭の様に伸び、

シユル…

「な、何ですかあ?これわああ!?!」

それがフリードの、剣を持っていた右手に巻き付き、動きを封じる。

直ぐ様に剣を左手に持ち替え、この『舌』を切断しようとするフリードだが、カシッ

「…って、斬れないし？」

「残念！ソイツは ちよつとやそつとじゃ斬れないぜ！

木場！お前も正々堂々とか拘ってんな！

良ーから早く、殺つちまえ!!」

「仕方無い…そして、有り難い！」

予想以上に硬かったのか、それは適わず、苦笑する木場に絶好の隙を与えてしまう。しかし、

「遅つせえ!!」

キーン…

「な…？」

木場の、【騎士（ナイト）】の駒の特性を活かした高速の斬撃を、フリードは容易く受け止める。

「くきやきやきや！『速さ』で勝てるでも思ってたてか？糞悪魔あつ!!」

この【天閃の聖剣（エクスカリバー・ラピッドレイ）】になあ!!」

斬！

「うつく…!!」

「木場あつ!!」「祐斗先輩！」

遂に その聖なる刃が、木場の胸元を横一文字に掠め、膝を着かせ、

「邪あ魔つ!!」

スパッ…

「あつ?!」

匙の左手から伸びていた、神器の舌も、精神を集中させ、剣に宿る【聖氣】を解放する事により斬り裂いた。

「トっドメ〜えいえい!!」

「…!!」

そして聖剣を両手持ちで頭上高く構えたフリードは、目の前に倒れている木場の脳天目掛け、一気に振り降ろすが、

ガン!

「…でつすよね〜?」

そうじゃないかと、思っていましたあ〜!

「そりゃ…どーも!!」

(Boost!!)

シユッ！

「おわつとおう?!？」

間髪入れずに両者の間に入り込んだシリユーが、左腕の赤い籠手で、その刃をブロック、続け様にサイドキックを放つが、これはバックステップで躲されてしまう。

「しやつああおう!!」

ダッ！

だが、その次の瞬間には、狂気に歪んだ嗤い顔で、フリードはシリユーを新たな獲物と認識したかの様に、突撃を仕掛ける。

「ひやはは〜い！

速！俺つちの劍の才能と、この【天閃の聖劍（エクスカリバー・ラピッドリイ）】による加

それ即ち！M・U・T・E・K・I・なんだよ!!

おうら赤龍帝えい！腸ぶち蒔けて、死ねさらせやあ!!」

そう言いながらフリードはシリユーに対し、右からの斬り上げを狙う。

斬!! カラーン…

「な…何ですとお〜つ?!」

「あ…うん…だ、よね…」

「…はい。」

「そんな風になる予感ほ、してました。」「僕もですう。」

「おおぅ!!」（パチパチパチパチ）

「す…凄い！」

…が、【天閃の聖剣（エクスカリバー・ラピッドリイ）】の一撃は、カウンター気味に放たれた、シリューの右の手刀で、呆気無く斬り落とされた。

残された柄を見ながら、信じられない顔のフリード。

それを驚く事無く、想定内として平然なオカ研部員。

そして、事前に予備知識として聞いてはいた為、改めて それをリアルに見て、感嘆と喝采な生徒会メンバー。

「おっ前え、オカシクねーか？」

お前っ今、聖剣を叩き折ったでなくて、斬っただろ？

左手の籠手でつてなら まだ納得出来るが、普通ーの生身の素手チョップでコレつて、ちよつと有り得ねーぞ?!」

ビシィッ!

柄だけとなった聖剣を向けながら、シリューに問い詰めるフリードだが、

「単に その玩具の斬れ味よりも、俺の手刀が勝っていた。只、それだけだ!!」
バキッ!

「ぐへへー!!」

ダツシユで間合いを詰められたシリユースに、その返答と共に右の拳を顔面に浴び、その場にダウンしてしまう。

それに追い打ちを仕掛けるシリユースだが、

プツシユワーっ!!

「うお?!」

「えっ!?!」

「汚っ!!」

「おおっ?!」

「な…?」

どうやらフリードは、先程の右拳で口の中を切っていたらしく、立ち上がり様に、口内に溜まった血をシリユース目掛けて毒霧の如く噴射、その予想外の攻撃により、怯んだ一瞬の隙に距離を取り、

「…ならば お次は、この【夢幻の聖剣（エクスカリバー・ナイトメア）】で、今度つこそ首ちょんばしてやつからよ!!」

リユー先輩との やり取りの報告もせず、任務放棄している感が有りました。」

「ん、お兄…魔王様からも、その件について、天界サイドからは何も言つてこないつて言つてるし…どうする気かしら？」

もしかして、本当にシリユー…赤龍帝を敵として見る心算なのかしら？」

「まあ、報されてないなら仕方無い。」

教会の…特に戦闘要員は知らない儘に、敵として死んで貰うとするかな？」

「ちよ…シリユー？」

「…冗談ですよ。」

「本当に…？（？―？）」

何ですか？その目は？信用して下さいよ。

…理由、経緯をきちんと説明した上で再起不能手前迄に痛めつけて、改めて あの2人の代わりに、『天界は赤龍帝の敵になった』とメツセンジャーに なつて貰うさ。

一番最初の奴だけはね。

…と云うのは、部長に言うと、また話が ややくしくなるから、黙っておく。

…その後の話し合いで、あの廃教会も放置するのは芳しくないとして、グレモリー家が不動産業者を介して買い取り、建物の外から地下から、一度、全てを完全に取り壊す事に決定。

ろう。

「ベッコ・カンクロ…何者だ？」

手紙本文の最後に記されてあった、差出人の名前：Bello・Cancroという名前には、まるで心当たりが無い。

しかし、間違い無く自分を知っている人物という確信だけは有る。

何故なら この手紙の文章は、ギリシア語で書かれていたからだ。

「俺を、聖闘士だと知っているとしか思えん…一体、何者なのだ？」

ギイ…

扉を開けてみると、それなりに小綺麗な店の作り、場所的にも時間帯からも、それなりに客で賑わっていてもおかしくないのだが、店内には扉正面のカウンター席に一人、背の高い、白髪混じりの金髪の男が座っているだけだった。

「ふう…漸く来たか…」

「……………」

扉を開ける前から、店内には誰も居ないのは、実は予測出来ていたシリユウ。

常人ならば、無意識に足を遠ざける、人払いの結界が張られていたから。

最初から店内に居たのであろう、カウンターの内側の店員は、まるで催眠状態の様な虚ろな眼をしている。

クイ…

そしてカウンター席の男は、手にしていたグラスの酒を飲み干すと、椅子をクルリと回転させ、シリユーに顔を向ける。

この、鋭い目をした初老の男は、シリユーの顔を見るとニヤリと笑い、話し掛ける。

「久しぶりだな紫龍…いや、今は、孜劉…だったかな？」

「な…お前は…まさか…?!」

黄金の誘（いざな）い!!



「ぶつくつくつく…」

それにしても おま、何ちゅー格好だ？

その帽子は兎も角、サングラスとマスクって、不審者100割だぞ？ w w w」

「やかましいわっ!!」

誰のせいだと思っている?!

そもそも俺は まだ、高校生だぞ!

こんな店に呼ぶな! 学校にバレたら退学(クビ)だぞ!?!クビ!!」

…久し振りに会った早々に、人の格好を見て笑う この男…今は、ベツロ・カンクロと名乗る男に、怒鳴りながら突っ込む俺は、絶対に間違っていないと思う。

「…何年振りだ？」

俺からすれば まだ、55年振りだが?」

「…俺は、ン100年になるな。」

「マジか?! 永く生きたんだな、お前?」

「教皇にでもなったか？」

「それとも老師みたく、心臓を……？」

「一応、教皇の地位に就かせて貰った……」

「おお、出世したんだな、お前！」

よし、とりあえず再会を祝って乾杯だ！

おいマスター、ウイスキー2杯、ロックでくれ！」

「だから俺は、高校生だと言っているだろうが!!」

すばかーん!!

「あじゃばーっ!!」

……(戸籍上) 未成年の俺に、いきなり酒を勧めようとする、この不良老人にハリセンかましたとしても、俺は悪くないと思う。

「あ痛たた……相変わらず、容赦無えな、お前。」

もう俺も、労わり敬うべき歳だぞ？ 甚振ってどうする？」

「やかましいわ！ 言いたい事、聞きたい事は沢山有るが、とりあえずは率直に聞く

ぞ？ この俺に一体、何の用だ？」

「いや、一緒に酒を……って、冗談だ！」

冗談だから、そのハリセン仕舞えって!!」



「アテナ……?」

「ああ、俺が彼女の眷属になったのは、5年前だがな。

いきなり目の前に現れて、『貴方から、妾の気配を感じた……何故?』って感じですよ。」

「小宇宙（コスモ）の事か……」

「結論から言えば、それだな。」

俺の前世（すじょう）を知る この男が、自身の近況を語り始めた。

この世界に、俺と同じく、前世の記憶と小宇宙を身に宿した儘、あの世界線から転生してきた人間が居たのに、先ずは驚いた。

しかも、それが、まさか この男だったとは……

「直感的に、彼女をこの世界のアテナと確信したからな。

俺は前世（むかし）はアレだったからな、その清算の意味も込めて、直ぐにこちらのアテナとは、主従の契約を交わし、今度こそはとばかり、忠誠を誓ったぜ。」

「アテナ、か……」

「紫龍よ……」

「ん?」

此処迄話すと、目の前の男は、急に真剣な面持ちとなり、話し続けてきた。

「お前も聖闘士なら、俺達の、アテナの処に来い。」

「ん、ごめん、無理。」

「即答つ?!」

そして、今回 俺を呼び出したメインの用件であろう、アテナの眷属の誘いをしてきたが、迷う事無く、断った。

「確かに、悪魔陣営と契約する前の誘いなら、前向きに考えてもいたかも知れん。

…が、その後とならば、例えアテナからの誘いとは云え、ほいほいと節操無く鞍替えする訳には いかん。

俺も聖闘士として、アテナへの忠誠を棄てる心算は無いが、俺の言うアテナとは、あくまでも 彼方のアテナ…沙織お嬢さんであり、この世界のアテナではない。」

「……………」

俺が誘いを蹴る理由を、アテナの眷属である初老の男は、手に持っていたグラスをカウンターテーブルの上に置き、黙って聞いている。

「アンタの言う、清算というヤツも理解は出来るから、アンタの今の選択を否定する心算も無いが、俺は、今の俺の立ち位置を貫かせて貰う。

先に言っておくが、悪魔云々の文句は言わせんぞ?」

少なくとも この世界では、神も悪魔も、そして人間も含めて、其れ等は単なる種族

…だから、我々の方が、お前の味方になってやる。

縦の主従関係ではなく、あくまでも対等な横の繋がりが…同盟ってヤツだ。

それを言う為に、お前を呼んだんだ。」

「この俺に、悪魔側と二又をしろと言っているのか？」

「いざとなれば、悪魔側最優先で構わないと、アテナは仰っているが？」

「それでも、信用の問題は変わらんだろうに…」

ハア…分かった…一応は魔王に、こういう誘いが有った事を報告しておく…

まあ、少し前に『アテナ』とい名の女神に仕えていた事は話した事もあるし、オリンポス勢なら、天界や墮天使勢力とは違い、頑なに駄目…とは言わんかも知れんが…どつちみち返事は、その後だ。」

「お前さんも、立場が有るだろうからな、とりあえずは、それで構わんよ。」

クイ…

その台詞と共に俺達は、それぞれグラスの中のウーロン茶とウイスキーを、一気に飲み干した。



「…でもな、俺は今も、あの時の行動は間違っていたとは、思っていないんだぜ…？」

「…おい、飲み過ぎだろ？」

…一通り、話が終わった後、ついでだからと、色々と話していく内に、かなり酒が回ってきたのか、敵として戦った時の事を語り出してきたベツロ・カンクロ。

「生まれたばかりの、赤ん坊なアテナよりも、教皇…による力の統治の方が、最終的にはポセイドンもハーデスも退け、地上の平和を維持出来ると判断したんだ…

俺も、あの2人も、な……。」

「……………」

「だから、やがて訪れる平和の為ならと、汚れた仕事も、自ら進んで やっていったんだ…俺達自身が信じた、正義の為に…

まさか、サガが教皇を殺害して、成り代わっていたとは思わなかった。

ましてやサガに裏の人格が有り、ソイツが地上支配を目論んでいたなんてな。

…それが分かっていたら、お前達が聖域（サンクチュアリ）に乗り込む前に、黄金聖闘士全員で、アイツをぶっ殺していたさ。

それだけは、信じて欲しい…うつぶ…!!」

「わ、分かった、信じる、信じるから！」

今夜は もう止めとけ、なっ?」

リバーズしそうな酔っ払いの背中をさすりながら、宥め賺す俺。

正直な話、この男に関しては、確かに初めて会った時から暫くは、色々良くない感

情を持っていたのも事実だが、あの時の、『嘆きの壁での一件』以後は、少なくとも俺の方からは確執は無い心算でいる。

「本当に大丈夫かよ？ 家族には、見せられん姿になってるぞ？」
ピク…

「…!! 家… 族… ?」

この『家族』という言葉に反応したかの様に、ほんの数秒前迄、「うーうー」言いながら蹲っていた酔っ払いの動きが止まった。

やば… 『家族』は地雷だったか？

「紫い龍う~~~~~~~~つ!!」

「は、はいっ?!」

凄い迫力な顔で此方を見る、黄金聖闘士の先輩。

しまった…

考えてみたら、俺同様に、小宇宙（コスモ）や記憶を其の儘に、転生してきたのだ。

幸いにも俺は、少なくとも数ヶ月前迄は、極々普通な、平和な世界の住人として生きてきたが、この男も そうだとは限らなかつた。

その能力故、平和な日常とは かけ離れた世界で、家族とは無縁な世界で生きてきたとしても疑問は無い。

「ん、天使や墮天使の勢力でないなら、大丈夫だよ。」

シリユー君の知り合いなんだろう？

悪魔（ぼくたち）の方が優先だったら、問題無いから。」

.....

そして漸く店を出る前、結界を取り払うと同時に『人払いによる営業妨害の詫び代込み』だと、カウンターに大勢の諭吉さんを置いていった男と別れた後、早速 魔王ルシファーに事の経緯を報告すると、あっさりと個別の同盟契約OKの返事をくれた。

即答は有り難いのだが、そんなに簡単にOKして良いのか？それで良いのか？魔王？

頑張れ天界勢

『…いや、僕だってね、本当は如何に電話越しとは云え、君の声なんか、聞きたくも無いんだよ？』

別に君達が滅びようが、知った事ではないけどね、それで僕の友達が、不要な怪我をしたりするのは避けたい…それだけの話だよ。』

『僕から教える心算は無いね。』

てゆうか、本当に君達、内部の伝達とか、きちんと出来てないでしょ？

報連相つて言葉、知らないの？

他にも、幾ら敵対勢力相手だからって、外交の際は、其れなりの、上辺だけでもな作法つて在るよね？

そういうの、全然伝えてないでしょ？

僕からすれば、君が下の者に、常日頃から他勢力に対しては、「天界様EEEEEEEE」…な姿勢で接しろって指示してるとしか思えないんだけど？』

『さあ？僕は知らないよ？』

君達と、彼…：そしてオリンポス（…の1部勢力）と喧嘩になっても。』

『だ〜か〜ら、其処迄話す義務も義理も、僕には無いね。』

そつちの心当たりある人物に、直接聞いてみたら？

これは僕の予想だけど、そつちに約2名程、音信不通になっている人物がいるんじゃないの？』

『いや、僕等は そんな真似は しないさ。』

そつちが勝手に任務放棄、してるだけでしょ？』

『さあね？ただ、一言だけ…：彼は今、「本当」と書いて「ガチ」に激怒（おこ）な状態だから。じゃ、そういう事で。』 p i …

それは冥界の、とある巨大な城の一室、その城の主と、ある人物との、スマホを通じた会話であった。



ガラ：

「おはようございまあ…うわあああ!!？」

現在 AM 9 : 4 5

部室に顔を出した早々に、挨拶の途中でいきなり悲鳴を上げたのはギャー君です。

まあ、無理も無いですけどね。

何しろ今の部室には、893屋さんが2人も居るのですから。

「……………」

「……………」

学園にて、2大イケメンと呼ばれている先輩方が揃って輩みたいな顔で、部室の3人掛けの応接ソファーに座ってる、1人の男性に、睨み付けて凄んでいます。

男の人、余りの迫力に縮細ってます。

その顔、学内に拡散させたら、フアンの子達、本当にショックで寝込んでいますよ？

「「う、うくん…木場きゆんが、木場きゆんが893になったあ…」」

事実、生徒会副会長の新羅先輩他、数人の生徒会役員の方は、既に倒れて斃されています。

「はわわわわわ…」 「…によ〜」

アーシア先輩やミルたんも、どうリアクションすれば良いのか分からない様な、困った顔をしています。

「皆、揃ってるわね？」

シリユーと朱乃以外は、別室で打合せをするから、こつちに来て頂戴。…祐斗も！」

「…はい。」

「ほら、椿姫も、何時までも現実逃避してないで！」

「あははははは…木場きゅんは やっぱり、笑顔が1番〜…」

「副会長お!」

そんな中、リアス部長の一言で、集合していたオカ研と生徒会の皆は、隣の部屋へ。

今から この部屋で、シリユー先輩と あの、如何にも教会の使いで来ました…という、聖職者な服装な男の人とで、OHANASHIが始まるんでしょうね。

それ、凄く見てみたいのですが？

恐らく朱乃先輩は、シリユー先輩が暴走した際のストッパー役なのでしょう。

出来れば その役、変わって欲しいです。

「小猫、アナタも早く！」

「は、はい…！」

.....チツ

「...で、朝から教会の下っ端が、俺に何の用だ？」

教会の使い:...これだけで、893mode全開なシリューが、見た目は30後半〜40前半な、牧師に話掛ける。

「...此の度は、赤龍帝殿に、先日、我々の送った使いが無礼を働いた事についての、謝罪にk「巫山戯るな！」ひえっ!？」

シリューの問い掛けに答える途中で、その発言を怒声で遮られ、驚きの声を上げる教会の使い。

「この前の使いとやら同様に、敢えて増長した上で言わせて貰おう...」

貴様達は悪魔陣営に於いて魔王と同格である、この赤龍帝に無礼を働いたのだぞ? それに対して、貴様の様な雑魚が謝罪に出向いただと?

それも、今頃に なって!!

天界は この俺を舐めているのか?」

「い...いえ...決して、そんな訳では...」

何分、事情を確認出来たのが、昨日...いや、今日の深夜でしたので...」

「そんなのが理由になるとでも思っているのか!?!」

「ひいひいつつ?」

この牧師としても、真夜中に突然、上の位置に立つ者から寝ている処を叩き起こされ事情を聞かされ、慌てて駒王町に出向いた訳だが、時刻的にも当然、才力研関係者にはアポ無し。

それも手伝い、正しく893:いや、893が天使マジ天使に見える程な、教会天界に対する嫌悪感が天元突破しているシリユートの、悪魔の様な怒涛な応対に牧師は怖れ慄き、同席している、悪魔である朱乃に対し、まるで助けを求めるかの様な顔を向けるが、

「……………(ニコニコ)。」

その朱乃は無言で　ただ、微笑むだけ。

寧ろ頬をやや赤くした　その顔は、「もっとやれ」と言っている様。

「冥界のトップと同格な俺に謝罪する意思が有るなら、其方は天界のトップである、『神』が出張るのが筋ではないのか？」

『ネ・申』がな!!」

「…!!」

止まる気配の無い、シリユートの怒号。

そんな中、シリユートの発した、何か含みを持たせたかの様な『神』と云う言葉に、牧師は一瞬だが顔を強張らせるが、直ぐに怒れる赤き龍帝の迫力に屈してしまう。

(Boost!!)

「今直ぐに貴様の首を撥ね飛ばし、それを改めて布告かわりに、教会陣営に着払いで送り届けても構わんのだぞ?！」

「そ…それは…」

「本当に貴様等は天才だな…」

「この赤龍帝の逆鱗に、触れる事に関してだけはなあ!!」

【赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）を展開させると眼前ギリギリまで龍の爪を突き付け、単なる警告でなく、本気で殺りかねない殺気を放出させるシリユー。】

「…其処迄よ、シリユー君?」

「このタイミングで漸く、朱乃が止めに入った。」

「赤龍帝様の仰る通り、貴方では全く話になりませんわ。」

「この部室を、貴方如きの血で汚したくは ありません。」

今日の処は早々に消え失せ、それでも まだ抗争を避け、話し合いたいのであれば、事前連絡をした上で、天界トップである『神』を この部屋に寄越すべきです。

シリユー君も…この部室をこの様な者の血で汚した日には、部長から後でOHANA SHIでは、済まなくてよ?」

「う…」

「さあ、知っている事、全て話すによ。」

「…ですわ。」

「近い！近い近い近い近いから!」

昼中の路地裏で、神父とシスターの2人組を尋問しているのは、巡、由良、レイヴェル、そしてミルたんのチーム。

街中を歩いていた神父達を見て、今回の騒動に関連して駒王町にやってきたと睨んだレイヴェル達は、気配を消して尾行、タイミングを見計らい、攫う様に2人を路地裏に引き摺り込む。

既に この時には、何時の間にか悪魔陣営と手を結んでいた赤龍帝（シリユー）が、今回の騒動が発端で、教会を敵と認識し懸けているのが伝わっているのも手伝い、教会の2人はミルたんの弩アツプでの尋問の前に、あっさりと屈してしまう。

【得た情報】

・自分達は教会本部からの派遣

「だから何？興味無いし。」

・既に秘密裏に送り出していた教会本部の聖戦士や戦闘神父が何人も返り討ちに遭っている

「ふくん、それで？」

・騒動の黒幕は墮天使コカビエル

「知っていますわ。」

・他の主だったメンバーは、はぐれ悪魔祓いのフリード・ゼルデン

「それも知ってるによ。」

・あと、聖剣計画創設者の、パルパー・ガリレイ元司教（追放済）

「へへ、他には？」

・教会本部に残っていた、もう一本の聖剣も昨日、いきなり襲ってきたコカビエルに奪われた

「「「ざまあw」ですわ。」によ。」

・コカビエル一派の狙いは、エクスカリバーの統合・再生

「え!」「そんな事したら…」

「でもエクスカリバーなら既に、シリユー先輩が何本も再生不能レベルに破壊していますわよね?」

「実質、昨日奪われたと言うのを含めて、今残っているのは、後2本な筈によ?」

「ああ、そう言えば そうよね。」

「せ…聖剣を、破壊したくっつ?!?!?!」

ガクツ…

神父とシスターはorzった!



「全く…お前達は何をやっているのだ…」

イリナも…ゼノヴィア君も…」

場所は変わって、とあるデパート屋上のラウンジカフェ。

シリユーに怒鳴り散らされてた あの牧師が、紫藤イリナとゼノヴィア・クアルタに
対して説教の真っ最中だった。

「…面目も在りません。」

「うう…ごめんなさい、いゝ、パパ〜!」

シリユーからは雑魚呼ばわりされたが、2人の聖剣使いを一方的に叱りつける…イリ
ナから父親呼ばわりされた この男、一応は それなりの地位と実力を持っている様
だった。

「そもそも お前達は教会を発つ前に、この町の悪魔関係者に対して、一切の攻撃を加え
ないと、神に誓ったのではないのか?

それが よりによって、知らなかったとは云え、赤龍帝の部下に刃を向けるとは…

お前達は主の顔に、泥を塗ったという自覚は有るのか?」

「……………」

「この儘では本当に、悪魔本隊は介入しないとしても、天界と赤龍帝との間で戦争が起ころぞ…」

「……!!」

自分自身も、シリューには雑魚扱いで全く取り次いで貰えなかった事は罰が悪いのか、伏せて喋る牧師だが、2人はそれ程迄に事が大きくなっている事を知り、改めて絶句する。

「…しかし、いくらなんでも…赤龍帝でも、単身で教会…天界と喧嘩するなんて…」

「明らかな負け戦では…」

「馬鹿者！それはあくまでも、赤龍帝単身だった時の話だ!!」

上が言うには、その時に冥界の魔王が大人しく傍観するなんて事は、まず有り得ないぞうだ!!

更に言えば、あの赤龍帝はオリンポスの、少なくとも1柱とも、同盟を結んでいるらしいぞ!!」

「なっ?!」「オリン…ポス…だと?!」

「…ぞうだ。一度、事が起きたら両者共に只では済まないだろう。」

それだけでは無い。

その争いの匂いに惹かれ、2天龍の片割れも姿を見せる可能性も有る。

そうなれば、墮天使側も静観は出来ないであろうし、結果、全ての陣営が、只では済まぬ事になる。」

「そもそも、そんな…」

「どど…どうすれば…話し合いとか、出来ないの？」

「赤龍帝曰わく、自分は冥界のトップと同格なのだから、天界のトップ以外とは、話すに値しないと云っている。」

「そんな?!」「何様の心算だ!？」

「それも曰わく、お前達の私様な増長つ振りに、敢えて合わせているとの事だが?」「うう…」

自業自得、身から出た錆、そして詰み。

少なくとも自分達が原因で引き起こした災厄事が、自分達では既に どうする事も出来ないのを悟り、完全に無言となる悪魔祓いの少女達。

「兎に角、お前達2人には既に、帰還命令が降りている。」

今から主の下に戻り、改めて処罰が下される事になるだろう。」

「そ…そんな…」

「パパ、お願い!」

もう一度だけ、チャンスを頂戴!

きちんと赤龍帝に謝つてみせるから！」

「大馬鹿者!!お前達如きでは、今更それが通用しないレベルになっている事も、理解出来ていないのか!!!」

足掻く2人に大声で怒鳴りつける牧師。

…とは云え、事前に人払いの結界を張っていたので周囲には誰も居らず、今迄の会話等が漏れる心配を含め、周りをする必要は無い。

「全く、その通り…だな。」

「!!!」

…そう、一般人に対しては。

「ななな…」 「せ、赤龍帝…さん？」

「何故、此処が…?」

その場に現れたのは、シリユ、そしてリアス、朱乃、ソーナの4人。

「何故つて言つても…ねえ?」

「あんなにハッキリと、結界を張っていたりしたら…」

「普通は怪しみます。」

…らしい。

「ち…てつきり昨日の腐れ神父でも居るのかと思えば…」

「「……………」」

苦虫を嘔み締めた様な顔で皮肉るシリユーに対して、目線を逸らして黙り込む教会の3人。

更にシリユーが悪態を吐こうとした時、

「くつくつく…コレは、面白い場面に遭遇したモノだな。」

「「「「!!?」」」」

突如、頭上 遙か上空から掛けられた声に、その場の全員が上を向く。

「初めまして…かな？」

サーゼクスとセラフォルの妹に赤龍帝、そして、バラキエルの娘よ…」

其処に居たのは、長いウエーブの入った黒髪の子。

背中から生やした5対10枚の黒い翼を、大きく広げた墮天使。

「コカビエル…か…?」

コカビエル！戦を望む墮天使！！

バツサアツ！

10枚の黒い翼を、誇示する様に大きく広げるてみせる男。

コカビエル。

聖書にも、その名が記されている程の、上級墮天使。

「「「「……!!」」」」

いきなりの大物人物の登場に、その場に居る者達の顔に緊張が走る。

「な、何故、此処に？」

「ん？脆弱な結界は張られているので、何事かと思つてな？」

牧師の質問に、コカビエルは そう答える。

この場に姿を見せたのは、どうやらシリユー達と同じ理由らしい。

説教の為に張った結界が、悪魔とドラゴン、そして墮天使を この場に呼び寄せた事になる。

「コカビエル！盗んだ聖剣を今直ぐ返せ！」

そもそも、聖剣を盗んだりして、何をする心算だ!？」

イリナの父親でもある牧師・紫藤トウジが、声を荒げるが、

カッ… ドシユツ!!

「ぐわあっ!!」

その答え代わりなのか、コカビエルは指先を光らせると、小さな光の槍を作り出して投擲、牧師の左脚を貫いた。

「いやあっ?!ば、パパあっ?!」

「黙っている、教会の犬が。」

「……!!」

教会の3人を睨み付けた後、リアス達に顔を向けたコカビエルは

「この町の とある場所を中心に、大暴れさそて貰おうと思っている。

そうなれば、この町を管理して入れる貴様達の兄と姉…魔王共も黙ってはいないだろう?」

「ば、馬鹿な真似を…!」

「アナタは3勢力の戦争を、再び勃発させる心算なのですか?」

「ふははは!!正しく その通りだ、バラキエルの娘よ!」

「その名前で、私を呼ぶな!!」

嗤いながら、自身の目的を語り出した。

「先ずは手始めにと、教会からエクスカリバーでも盗めば、ミカエルが戦争を仕掛けてくれると思うっていたのだが、何を血迷ったか、寄越すのは其処に居る様な雑魚ばかりだ!!」

「雑魚…だと?!」

シユ…

「止めておけ、雑魚なのは事実だ。」

「なあっ?!」

「貴方、どちらの味方なのよ?」

「少なくとも、貴様等の味方ではないのだけは、確かだ。」

「う…」

怒り顔で、聖剣ではなく、祝福を受けただけの銀の短剣を抜こうとするゼノヴィアを、シリユーが制す。

「…つまらん! 実に、つまらん!!」

だからこそ、ミカエルが駄目ならば、次は冥界の魔王なのだよ!

魔王の妹が管理している土地で、事を起こすとなれば、今度こそ…」

「チィ…戦争狂が…」

戦争を望むと言うコカビエルに対するシリユーの舌打ちに、墮天使は皮肉る様に喋り続ける。

「戦争狂…ああ、その通りだ！」

俺は戦争が大好きだ!!

電撃戦が好きだ 殲滅戦が好きだ 打撃戦が好きだ 防e 「「そ、それ以上は言う

な—————っ!!」

その演説の途中、色々な意味でヤバいと思った、シリユ、リアス、イリナが思わず止めに入る。

「ふん…」

最後迄言いたかった…そんな不満な顔なコカピエルは、尚も話し続ける。

「兎に角 俺は、三つ巴の戦争が終わってからは退屈で退屈で仕方が無かった！」

アザゼルもシエムハザも、戦争には消極的でな！

しかもアザゼルに至っては、神器等と云う 下らん研究に没頭する始末だ!!

だからこそ…あの腑抜け共の目を覚まさせる為に、俺が動いたのだよ。

…ならば、戦争だ!…とな。」

「狂っているわ…」

「それは誉め言葉と受け取るぞ？」

サーゼクスの妹よ。

どちらにしる、俺は この貴様等の縄張りで、事を起こさせて貰うぞ。

ルシファーとレヴィアタンの妹が管理している土地だ、さぞかし魔力の波動が犇めいていて、渾沌が楽しめそうだ！

エクスカリバーの解放にも最適だ。

戦場には丁度良い！」

「エクスカリバーの解放？

それは どういう意味なのですか？ コカビエル！」

スウ：

「くくく…知りたくば、止めに來るが良い、レヴィアタンの妹よ。

さあ、戦争だ、戦争をしよう！

魔王の妹達、そして赤龍帝よ！」

「ま、待ちなさい！」

戦争をしよう…この言葉と共に、コカビエルはその姿を消していった。

「『止めに來るが良い』…って、町の何処なのか、場所くらい言いなさいよ…」

コカビエルが居なくなつた後、その口調を真似ながらボヤくりアスだが、

「部長、考える迄も無いさ。」

俺達を待ち受けるのに、そして派手に暴れ回るのに、皮肉込みで最も最適な場所…と

云えば、一つしか無いでしょ?」

シリューは今居るデパートの屋上から、日が殆ど落ちている、西の方向を指し示す。「まさか、学校…駒王学園ですか?」

「ええ。コカビエルはエクスカリバーの解放と言った。

恐らくは何らかの儀式を行うと、考えて良いでしょう。

…だとすれば この町で、最も其れに適した魔力に溢れている場所と言えば、俺達のホームと言つても良い、あの場所以外は考えられない。」

「…朱乃、ソーナも直ぐに、皆に大至急、学園に集まる様に連絡して!」

シリューも、分かっているわよね?

私達の学園は、絶対に私達で守るわよ!!」

「ええ!」「はい!」「承知!」

リアスの呼び掛けに、応える3人。

「わ、我々も協力するぞ!」「うん!」

「あ!?!」

其処にゼノヴィアとイリナが、共闘を申し出るが、

「いえ、結構よ。」

「遠慮しておきます。」

「邪魔、しないで下さるかしら?」

「戦場で一番厄介なのは、手強い敵でなく、無能な味方だ。」

身代わりにも捨て駒にも成らない様な雑魚は、本当に不要だ。」

それを心底 嫌そうな顔で、「要らね」とばかりに断るリアス達。

「な、何だと?!」

この物言いに、顔を真っ赤にして言い返そうとするゼノヴィアだが、
「気付いてないのか?」

コカビエルは既に、貴様等を眼中に入れてなかったのを。

そもそも貴様等、自慢の玩具（笑）も無い状態で、どうやって あの堕天使と渡り合
う心算なのだ?

自分が雑魚だと云うのを自覚出来ない雑魚は、本当に下の下だ。」

「う…」

シリユーに完全に言い包められてしまう。

「先日、アナタ達は、堕天使が起こした騒動に、一切の介入をするなど言ってきたわよね
?」

ならば、私もグレモリーとして今、アナタ達に告げるわ。

今から始まるコカビエルとの戦争に、天界勢は一切介入するな…と。」

「…ついでに俺も言わせて貰おう。」

俺が介入行為と判断した時、この赤龍帝は、天界を完全に敵と見なす…とな!

それを望まぬなら、さっさと この町から消え失せる!!

それとも今直ぐ、この場で、この世から消え失せるか?」

「!?!?!」

更に続くリアスとシリユーからの要請…半ば脅しに近い命令に、この教会からの3人は、駒王町を去る以外に、選択肢が残されていなかった。

「神崎君…本当に良かったのですか?」

「はい?」

ガツクリと甲垂れて立ち去る、イリナ達の後ろ姿を見ながら、ソーナは尋ねる。

「彼女等との共闘拒否に、異存は有りませんが、彼処迄な対応をしなくとも…」

「あの類の者は、あれくらいししないと、引っ込んでくれませんか。」

…俺が暴虐なイメージを背負うだけで、それで無駄な巻き添えが無くなるなら、安いモノですよ。

まあ、俺が連中を良く思っていないのも、それに邪魔だったのも、事実でしょ?」

「神崎君…」

あと1時間で、加勢が到着する予定だ。」

「ええっ?!」

突入前の役割確認の最中のシリユートの発言に、リアスとソーナが驚きの声を上げ、

「ししし、シリユート…」

「かかか、神崎君…」

「何で、そんな勝手な事を!?!」

「俺には墮天使の幹部とやらが、如何程な力量かは、まだ理解出来ていない。」

しかし、生半可なレベルではないのは確かな筈だ。

身内に迷惑を掛けたくないのも解るが、既に つまらない意地を張る場面では無いの

も、解っているのでは?」

「うつ…」

この男は何て余計な真似を…と詰め寄るが、シリユートの この台詞に、生徒会長とオカ研部長は、何も言い返せなくなる。

「ハア…分かったわよお…」

「…止むを得ませんね。」

結局は、溜め息と同時に折れるリアス達。

「ならば その間、私達生徒会はシトリートの名に賭けて、結界を維持してみせます。」

シリユーとリアスが それを抑える。

バルパー・ガリレイ

嘗て、教会本部で聖剣計画を立案、実行するも、当時の被験者達全員、『失敗作』として『処分』した事により、異端として追放された、通称『皆殺しの大司教』。

「ほほう…小僧、もしかしたら あの時の生き残り…が、居たのか？」

悪魔となつて、生き長らえたか？」

「くっ…！」

木場の、自分に向ける憎悪の顔で、その素姓を察したバルパーが、ますます挑発じみた啖い顔を見せる。

「ふん…あの生き残りならば、丁度良い！」

再び死ぬ前に、見届けるが良いわ！」

貴様等による実験の最終成果！」

この、2本のエクスカリバーが1つになる瞬間をな!!」

「な…!？」

下卑た笑顔から発せられた言葉に、驚きを隠せない木場。

「くっくっく…本来ならば、もう数本のエクスカリバーも統合する予定だったのだが、完全破壊されてしまったのでは、仕方無い…のう？フリードよ。」

スツ

「ケケケ…あゝいとういまでえ〜ん!♪」

皆殺しの大司教が壁際に植えてある雑木に目を向けると、その陰から狂神父が姿を見せ、何時もの巫山戯た口調で、全く反省の欠片も無い、上辺だけの謝罪を口にする。

「バルパーよ、あと、どの位だ?」

そして校庭の魔法陣の上空、宙に展開された別の魔法陣、その中央に詠えられた、玉座の様な椅子に腰掛けるコカビエルの問いに、

「5分も要らんよ。」

自信に満ちた にやけ顔で、バルパーは応える。

「ふ…そうか…」

…で、グレモリーの娘、サーゼクスは来るのか?それとも、セラフオルーか?」

コカビエルはバルパーからの答えに満足な笑みを見せると、今度はリアスに顔を向けて問い質す。

それにリアスが

「お兄様とレヴィアタン様の代わりに、私達がアナタを…」

ゴッゴーンツ!!

「!!!?」

…其処迄口にしたと同時に、墮天使の幹部は、夕暮れにイリナの父親に放ったのとは桁違い…という表現も生温い程な、巨大な光の槍を体育館目掛けて投げつけ、一瞬に破壊する。

「つまらぬ…」

ふん…どうせ、此奴等が全滅すれば、イヤでも重い腰を上げるだろう…」

パチン…

額に無数の青筋を浮かべたコカビエルが、そう言つて指を弾くと、校庭に新たな魔法陣が現れ、その中から

『『『ぐるぐる…』』』

巨大な三ツ首の犬…地獄の番犬・ケルベロスを喚び寄せた。

「くっ…あんな化け物を、人間界に持ち込むなんて?!」

「それも3匹も?」

アーシアとギヤスパ、それとレイヴエルは下がっていて!

「は、はい!」

リアスの指示でアーシア達を後方に下がらせると、

「さあ、皆、行くわよ!」

「は、はい!」 「は、はい!」

残りのメンバーで、この地獄の番犬の迎撃に打って出る。



「廬山龍戟閃!!」

「…えい!」

「雷よオっ!!」

「てえいやあっ!」

「マジカル・ドリーミング・エクスプロージョン!によっ!!」

「滅べえ!!」

G G O O O H N !!

それぞれが体術に剣術、魔力、そして小宇宙（コスモ）を駆使した技でケルベロスに攻撃を仕掛けるが、巨体に比例した生命力は、簡単にその全てを削り落とす事は出来ず、

「うわわああっ?!?!」

「こつちに1匹、来ましたあ!?!」

「ちい、新手か?」

その隙を突くかのように、新たに魔法陣から召喚された魔獣が、ギヤスパー達に襲い掛かる。

「燃え尽きなさい!」

B o w !

「レイヴェルさん!」

これを、リアスの指示で、ギヤスパ、アーシアと共に後方に控えていたレイヴェルが、フェニックスを象徴する炎の翼を展開させると、その翼から無数の炎の羽根を飛ばしての攻撃。

しかし、

『『ぐろろろーっん!!』』

「な…効いていない!」

紅蓮の炎に全身を包まれながらも、このケルベロスは その儘、突撃を止めずにレイヴェルに対し、鋭い前脚の爪を突き付けてきた。

「……………っ!!」

フェニックス故に死ぬ事は無いが、それでも自分の後ろに控えるアーシアとギヤスパの壁になるが如く動かず、ダメージを覚悟するレイヴェル。

『『ぎゅわおおーん!!』』

「え…?」「え?」「ええっ?!」

しかし その凶爪は、レイヴェルには届く事は無く、魔獣を包んでいた炎は その色

が突然、赤から蒼に変わる。

そして その次の瞬間には、ケルベロスは骨すら残らず燃え尽き、地面に黒い焼け跡と、プスプスと肉が焦げた様な匂いが残るだけだった。

「大丈夫だったかい？お嬢ちゃん？」

「は、はい…：貴方が助けてくださったのですね？あ…：ありがとうございます…：」

レイヴェルの前に現れたのは、鋭い目つきな白髪混じりの金髪の、長身の初老の男。

「お、お前、何故、この場に…：」

「フツ…：大変そうだな、紫龍？」

押し掛けで、助っ人に来てやったぜ？」

皆殺しの大司教!バルパー・ガリレイ!!

「ほほう?あれは、人間…:か?」

その場に現れたのは、この世界に於ける、ギリシヤはオリンポスが1柱、戦いの女神アテナの眷属、ベツロ・カンクロ。

またの名を、シリユー…:いや、紫龍の前世にて、12人の黄金聖闘士の1人であった

…:

「デスマスク!お前、何故?!」

「何故って そりゃ お前、あれだけ派手に小宇宙(コスモ)やら魔力やら、ガンガンぶつ放されてた日にゃ、普通 気になるだろ?」

蟹座(キャンサー)のデスマスクだった。

「と、とりあえず礼は言っておく。」

「ついでに済まないが、其の儘その3人の護衛を頼めるか?」

「ああ、任された。」

~~~~~

「シリユー?もしかして、あの男(ひと)がアナタが言っていた…:」



「後で説明します！」

兎に角 今は、ケルベロス共を!!」

魔力驛を放ちながらのリアスの問い掛けに、やはり三ツ首の猛犬に攻撃を仕掛けながら話すシリユー。

「それも…そうよね！」

Bow!

このリアスが撃った魔力驛が遂に、目の前のケルベロスを斃し、

「やっと片付いたによ…」

「…だね。」

ミルたんの木場が、

「漸く終わりましたわ。」

「…やっぱり猫のが可愛いです。」

朱乃と小猫が、殆ど同じタイミングで、それぞれが請け負っていた魔獣を斃す。

だが、やはり それと同じタイミングで

「…完成だ。」

バルパー・ガリレイが、狂気な笑みを浮かべて呟く。

「2本のエクスカリバーは統合され、1本となり、術式は完成した。」

ふん…聖剣たった2本での統合だが、それでも力を解放すれば、あと20分程で、この町は崩壊するだろう。

くくく…術式を解除したくば、コカビエルを倒す他無いぞ?」

「「な…!?」」

「20分!?そんな…お兄様の加勢を待つ時間も、無いじゃないの!」

魔法陣の中心に浮かぶ、1本の聖剣を満足気に見つめながら話すバルパーの言葉に、リアス達は驚愕。

「フリード。」

「はいよ〜♪」

それを見たコカビエルが、フリードに話し掛ける。

「そのエクスカリバーで、其奴等を殺してみせろ。」

「いえっさ〜!」

全一つく、ボスは人使い荒くね?

そーゆーの、ブラックって言うんですぜ? ブラック!」

やれやれだぜ…そんな顔を浮かべながら、魔法陣内に入ったフリードは統合されたエクスカリバーを手に取ると

「でもでもでも、ちよ〜素敵仕様になったエクスカリバーちゃんを使えるなんて、光栄

の極み？」

満更でも無い表情となり、

「うひっ！」

んじや ちよつくら、其処の糞悪魔その他数名、首ちよんぱつてみますかね〜！」

ぶうん！

その聖剣の切っ先を、リアス達に向けた。

「バルパー・ガリレイ！」

木場が、『来るんなら来いや』とばかりに剣を構えるフリードの横に立っている、バルパーに向かって叫ぶ。

「僕は、アナタの察した通り、あの『聖剣計画』の生き残り…いや、正確にはアナタに殺され、悪魔に転生した事で、今を生きている。」

「……………」

「貴方に問う。」

何故、あんな真似をした？」

「ほ〜う？やはり、あの計画の生き残りだったか…」

良いだろう…ならば、教えてやる。」

木場の問い掛けに、薄ら笑いを浮かべた元・大司教が語り始めた。

曰わく、バルパー・ガリレイは、幼い頃から聖剣に憧れていた。

教会に所属したのも、何時かは自分も聖剣の使い手とならんと思った為。

だからこそ、自身に聖剣使いの適性が無いと判明した時、絶望に打ち拉がれた。

…そして その後は、自分では使えないからこそ、使える者に憧れる様になる。

その想いは高まり、聖剣の使い手を人工的に創り出す研究に没頭する事となった。

「…そして、完成したのだよ。

君達の御陰様でな。」

「完成? 馬鹿な?!

僕達を失敗作と断じて、処分したじゃないか!!?」

完成という言葉に、怒りと驚きの顔を隠さない木場が、更に問い詰めると、バルパー

は また、得意気に語り出した。

…バルパーが言うには、聖剣を扱う為には、その者が内に持ち宿す『聖なる因子』が

必要。

その事に気付いたバルパーは、その因子を数値化する事で、適性を調べた。

ただ、木場を含む当時の被験者達は、因子自体は持ち合わせていたが、聖剣を扱える数値には至っていなかったと言う。

「…そして私は、1つの結論に達した。

体内から聖なる因子のみを抽出し、集める事は出来ないか?…とな?」

「…まさか…完成したと言うのは?」

「その通りだ!聖なる因子を抜き取り、結晶化するのに成功したのだよ!

ほれ、こんな風にな!!」

カサ…

そう言つてバルパーは、懐から掌サイズの青紫の水晶体を取り出し、木場に見せつける。

「ふはははは!コレを祝福と称して、教会の戦士の体内に入れ込めば、それだけで聖劍使いの完成だ!」

「馬鹿な?!」「そんなに…簡単に…?」

この発言に、木場、そしてシリユーが疑問の声を上げるが、

「にやはは♪それが、出来てしまつちやうんだよな〜!」

この、俺つちの様にい〜…つとお!!」

ドガアツ!

「!!?」

その疑問に答えたのは、エクスカリバーを振り翳しながら襲ってきたフリード。

シリュー達に向け、不意打ちの聖なる刃を振り下ろすが、それは躲され、地面を打ち付ける。

「クツソ!避けんぢやねーよ、テメー等!

今度こそ、その首ちよんばねってやつからよお、赤龍帝いー!」

「ちいー!」

体勢を整え直し、再度シリューに斬り掛かるが、

バカアツ!

「おわっとう?!」

それは逆に、瞬時に その合間に入り込んだ男のカウンターの拳を喰らい、吹き飛ばされてしまう。

「痛てて…いっきなり何しやがるんでい!」

「このオツサンわよう?!」

「余計な真似を…」

「デスマスク、これは礼は言わんぞ?」

「ふん…抜かせ!時に紫龍よ、コイツは俺に、譲ってくれるか?」

「はあ?!」

そして、シリューとフリードがハモった。



よくぞ、自分達の詰まらぬ小っぼけな命を、儂の為に役立ててくれた…とな。

御陰で、儂の研究は本物だったと証明されたのだからな。

…くつくつくつわっはっはっは!!」

それは正しく狂気…。

皆殺しの大司教は、自身の所業を悪びれもせぬ処か、誇らし気に嗤い声を夜空に響き渡らせた。

「「巫山戯るなあ!!」」

しかし直後、その卑しい嗤い声を掻き消す様な、怒声が鳴り響く。

その声の主は木場。

そしてシリューと…

「何を言っているんだ…テメーわよう…」

先程まで、フリードと戦っていた…

恐らくは、その最中に天高く吹き飛ばされた後に、其の儘 垂直に頭部から地面に激突、上半身が地中に埋まりピクリとも動かない…所謂『犬神家』な状態のフリードの隣に立っている、デスマスクだった。

「テメーに教えてやる!」

どんなに小さくたってなあ、世の中に死んで良い命なんて、有りやしないんだよ!」



怒りのデスマスクが、バルパーに掛かろうとするが、

「待て…」

クイ…

「くびいっ!?!」

すぐ隣に立っていたシリユーが、Yシャツの襟首を後ろから掴んで引き寄せ、それを止める。

「いきなり何しやがるんだ、テメーわ!?!」

「ヤツは、木場の仇、木場の敵だ。」

「…ちい、それを言われたら仕方無え。」

今回は、あの小僧に譲ってやるよ!」

その行為に対して、シリユーに喰って掛かるデスマスクだが、簡潔な説明を受けるとそれにしぶしぶと納得、矛を納める。

「憎いか?この儂が憎いか?」

しかし小僧、この儂だけを憎むのは、お門違いだぞ?」

「何だと?」

「気付いてないのか?」

教会の奴等は、儂を異端として排除しておきながら、研究結果だけは『使える』とば

かりに隠蔽処か活用し、恐らくは儂の後任に研究を引き継がせているのだぞ?

今の教会に属する聖剣使い共の存在が、その証拠よ!

神め…儂だけを断罪しておいてな…

「流石は教会…だな…チイ」

「おい、紫龍、お前…?」

バルパーの口上途中で、何となく其れを察していたシリユーが、改めて事実を聞かされ、舌打ち混じりに呟く。

「…だからこそ、儂を断罪した愚かな神に天使、信徒共に、儂の真の研究成果を見せ付けてやるのだよ!」

「そんな事で…そんな事が、コカビエルに加担した理由だと言うのかあ!?!」

「そんな事?」

研究者にとっては、研究と その結果が何より大事な事柄だ。

それを否定する者より、受け入れる者の下に就くのは当然だろう?」

木場が叫ぶが、片や命、片や成果を優先させる者の会話は、交差する事は無く、

「ふん…そんなに仲間が大事だったか?」

ならば、これは貴様に くれてやろう。

貴様の同志とやらの、成れの果てだ。」

ポイ……

そう言つて、バルパーは因子の結晶を、木場の足下に投げ捨てた。

「……………」

跪き、それを無言で拾う木場。

「皆……ごめん……」

そして、掌の中の結晶を見つめ、大粒の涙を流しながら、嘗ての同志達に謝罪の言葉を発した時、

バアツ……

その結晶は、光強く輝いた。

「これは……」

次の瞬間、木場は確かに見る。

何も無い……只、白いだけの空間の中で、嘗ての同志、聖剣計画の同期被験者達が、自分の周りに立っているのを。

「皆……！僕は……僕は……！」

その彼等、彼女等に、木場は今にも泣き出しそうな顔で話し出す。

「ずっと……ずっと思っていたんだ……」

僕が……僕だけが、生き残つて……生きていて良いのか……つて……うう……」

そして喋る途中、何時しか涙を流してしまおうが、それでも木場は話し続ける。

「僕より夢を持っていた子がいた。」

僕よりも生きたがっていた子がいた…。

僕だけが、平和に過ごして良いのかって、何時も、何時も……え?!

しかし、その途中、木場の正面に立っていた、髪の毛の長い少女が…当時の木場より年上で、まるで実の姉弟のように一番仲の良かった、そして今の木場と同年代に見える少女…その彼女が、木場を優しく抱き締め、偽りの無い優しい笑顔で話し掛ける。

《私達の事は、もう良いから…生きて…》

「え…」

そして、この少女だけでなく、他の少年少女達も木場に話す。

《確かに俺達は一人では駄目だった…》

《でも…》

《皆が集まれば、きっと大丈夫…》

《大丈夫…怖くなんてないよ…》

《そう、大丈夫…》

《聖剣を受け入れるんだ…》

《警え神が、見ていなくても…》

《僕達の…》

《私達の心は何時だって…》

…1つだ。

…その言葉により、迷いの色が木場の顔から消えた時、奇跡は起こる。

パアアアツ!!

手の中の結晶が再び輝き、粒子となって木場の体内に入り込んだと思うと、その身体から溢れるばかりの強大な魔力を放出させる木場。

「な…何が起きたのよ!?!」

「祐斗君?」

リアス達からすれば、バルパーの投げた結晶を木場が拾ってからの、僅か数秒にも満たぬ時間…

見ただけで感じられる、パワーアップに、味方であるリアス達も驚く。

「ドライブグ…これは…」

(応、相棒…あの【騎士(ナイト)】は至った。)

「は?シリユー?」

貴方、アレが何なのか、知ってるの?」

「え…は、はい…」

「『説明、お願いします。』」

「は…はあ…」

そんな中、冷静なシリユーに、リアス達は説明を要求。

「…【神器(セイクリッドギア)】は、所有者の想いを糧にして、進化…強くなっていく。

でも、それとは別次元の領域があるんだ。

「…【神器(セイクリッドギア)】は、所有者の想いを糧にして、進化…強くなっていく。『流れ』に逆らう程の、劇的な転じ方をした時に、【神器(セイクリッドギア)】は至る。」

「それこそが…禁手(バランス・ブレイカー)と呼ばれる進化だ!」



その人は、哀しみを秘めた瞳で、僕に　そう尋ねてきた。

綺麗な紅の長い髪を靡かせた　その人は、天使を思わせる様だった。

嗚呼…遂に僕にも迎えが来たんだ…

…でも、その人の背中から見えた翼は、天使の其れじゃなくて…

「あ…くま…」

当たり前の話だよね？

仲間を…同志を見捨てた僕なんかには、神の使いである天使が迎えに来て、祝福を与えてくれるなんて、有る筈が無い。

「貴方の望みは何？」

目の前の悪魔（おんなのひと）が、再び僕に尋ねる。

…だから僕は、体に残った最後の力を振り絞り、彼女に言ったんだ。

この際、目の前に立っている人物が何者かなんて、どうでもよかった。

「…たす…けて…」

僕の命を　僕の仲間を　僕の人生を

僕の願いを　僕の才能を…

「僕は…生きたい…」





それを見たバルパーが信じられない光景を見る様な顔をする中、木場は更に魔力と聖氣を集中させ、

「さあ同志達よ、共に越えよう！」

あの時 果たせなかった、想いを！願いを！

僕は剣に、仲間達の剣となる！

今こそ僕の想いに応えてくれ：

：【魔劍創造（ソード・バアアース）】っ!!」

ヴォウンツ！

神器を発動させた木場の両手に、刀身に漆黒の闇を纏うと同時に、輝かしい光を放つ、一振りの大剣が握られ、

「禁手（バランス・ブレイカー）【双覇の聖魔劍（ソード・オブ・ビトレイヤー）】!!

魔と聖を有する剣の力、その身で受け止める!!」

その刃の切っ先が、皆殺しの大司教に向けられた。

「ううぐ…ふ、フリード！」

貴様、何時まで埋まっている心算だ!?

さっさと起き上がり、この小僧を始末せんか!!」

木場の聖魔劍に脅威を感じたのか、バルパーは慌ててフリードを喚けるが、

.....

フリードからは返事が無く、

「…返事が無い…只の屍の様だ。」

「あゝ、無理無理。」

コイツ、既に体から魂が抜けてる…つまり、死んでるから。」

「何い!?!」

す〇きよなフリードの横に立っている小猫とデスマスクが、それは無理だと説明。

「ば…馬鹿な…」

へな…

絶望的な顔で、その場に両膝を着き、へたり込むバルパー。

しかし、ならばと空を見上げ、上空の魔法陣に座しているコカビエルに向け、何やら

助けを求めるように、眼で訴えかけるが、

「…知らん。」

貴様も俺と行動を共にしたいならば、その程度、自力で何とかしてみせろ。」

今回の聖剣騒動の元凶である墮天使の幹部は、それを冷たく突き放す。

「そ…そんな…」

「もう、良いかい？」

さあ、覚悟を決めろ、バルパー。」

再び、この世の終わりが来た様な顔をするバルパーの前に、聖魔剣を携えた騎士が歩み詰める。

「ま、待ってくれ！儂は只の研究者であり、戦う力は持っていないんだ！

お前は丸腰の人間を、手に搔けるのか？」

「言った筈だ。これ以上、僕たちの様な犠牲者は生ませない」と！

それに残念だが僕は、お前を斬るのに、何の躊躇いも罪悪感も無い！」

その必死の命乞いも、木場には通用せず、

「受け入れろバルパー・ガリレイ！」

これは決して、怨みの刃では無い！

これは、お前の犯した罪に対する、裁きの刃だ!!」

「や、止めてくれええっ!!」

斬！

「ぐわやああああっ?!」

バタ…

「皆、見ていてくれたかい…？」

これで、不条理な犠牲者は、出る事が無いだろう…」

聖魔劍がバルパーの体を、左脇腹から斜め上に、右の胸元迄斬り裂き、バルパーは木場の足下に、うつ伏せに倒れる。

「う……助け……其処の魔女なら、この傷も、治せる筈だ……」

ドスウツ！

その斬撃は致命傷となり、それでも尚、這いながら助命を求めるバルパーの背中、心臓の真上に、聖魔劍が突き刺さった。

「……………」

完全に動かなくなったバルパーを見て、木場はボツリと呟く。

「訂正する。さっきの斬撃は、ほんの僅かだが、怨みが籠もっていた。それでも……」

其処迄言うくと、気持ちを切り替え引き締める様に、残る1人の敵……未だ上空で座するコカビエルを見据えるのだった。

「……って、ちよつと待てよ おい？」

おかしくないか？」

「デスマスク？」

この時、木場の聖魔劍を見たデスマスクが、不意に疑問を浮かべた。

「聖魔劍……」

聖と魔…反発しあう、2つの属性が混じり合うなんて、まず有り得ねー…」

「……………」

「まさか…紫龍、お前、もしかして、知っているのか？」

これは仮に、聖と魔、其れ等を司る存在のバランスが、大きく崩れているってなら、辻褄は合う！

つまり、先の大戦とやらで死んだのは、魔王だけでなく、かm（バスツ）…うわつとお!!」

自身の立てた仮説を話す途中、デスマスクに、光の槍が空から襲ってきた。

それは間一髪で躲し、

「てっめえ…!!」

デスマスクは、その槍を投げつけた墮天使を睨み付ける。

「ふっ…何者かは知らんが、なかなかのキレ者な様だな。」

それに対し、何時の間にか、上空で座していた魔法陣を消し、自らの10枚の翼で宙に浮いているコカビエルが、また巨大な光の槍を形成しながら話し出した。

「正解だ人間！教えてやるよ！」

次の瞬間、不適に笑うコカビエルの口から、驚愕の真実が語られた。

神は、死んだ。

「！！？」

それを聞き、その場のリアスをはじめ、シリユー以外の全員が、驚きの顔と共に、言葉を失う。

「フハハハハハ！」

その顔、赤龍帝以外は知らなかったか？

流石に貴様等 下々に迄は、真相は語られていなかったみたいだな！  
もう一度 言つてやろう、神は死んだ！

先の三つ巴の大戦で死んだのは、悪魔陣営の4大魔王だけじゃなかったんだよ！  
悪魔陣営と盟約を交わしたしてから少し経った後、サーゼクスから あくまでも機密事項として教えられていたシリユー。

しかし その事實は、リアスでさえ、知らされていない事だった。

茫然としたリアス達の反応を楽しむかの様に、コカビエルは話し続ける。

「人間共の信仰心や対価に依存しなければならぬ程に疲弊したる大勢力だ。

故に、その事を人間に知られるのは、都合が悪い。だから、隠蔽した。

この事實を知っているのは、各勢力のトップ…更に その一部だけだったのだが、どうやら その男は気付いたみたいだな。

大した人間だ。」

「へっ…そりゃ、どーも。」

墮天使からの褒め言葉に、デスマスクは苦笑する。

「…神が…居ない…だと?」

「主は…主は死んで…いる?」

「だったら僕達は、何を信じて あの施設で過ごしていたと云うんだよ…?」

「そ、それでは、私達に与えられていた愛は…?」

そして嘗ては教会に所属していた、木場とアーシアは、更に動揺。

「くはははは!」

その様な物が、在る訳が無いぞ、小娘!

神は既に存在しないのだからな!



尤も、神が残したシステムが機能していれば、祝福も悪魔祓いの力も、ある程度は働くのだろう。

だか、神が生きていた頃に比べると、その加護を受けられる者は格段に減ったがな。

小僧、お前が その聖魔剣を創り出せたのも、神と魔王が居なくなり、聖と魔のパワーバランスが崩れているせいだ。」

「嗚…呼あ…」

ガクツ…

「アーシアたん？」「アーシア先輩!？」

次から次と、コカビエルの口から放たれる真実に、アーシアはショックで倒れ崩れてしまう。

それは物心着いた幼い頃から ほんの1ヶ月前迄、その人生を『神』に捧げていた事を考えれば、無理も無い事だった。

「さあ、お喋りの時間は お終いだ！

お前を血祭りに上げ、その首を手土産に、我々堕天使が最強だと、ルシファーやミカエル…そしてアザゼルにも教えてやる!!」

ブウン!

そう言って、遂にコカビエルが、先程から手にしていた光の槍を、再び地上のシリユ-

達目掛けて投擲。

「ちい…… 部長！デスマスク！」

「ええー！」「応よー！」

グラウンドに直撃すれば、巨大なクレーターを作ると同時に、その場に居る者が全滅必至な槍を、シリユー、リアス、デスマスクが魔力と小宇宙（コスモ）から成るシールドで防御。

それでも構わず、コカビエルは上空からの連続攻撃を仕掛ける。

「あのヤロー、地上（ごうち）に降りず、空（うえ）からガンガン喰らわす心算だぜ！」  
「仕方無い……部長とデスマスクは、この儘、シールドを維持していてくれ！」

朱乃先輩、木場、レイヴェル、ミルたん！

ガンガンぶっ放すぞ!!

小猫とギヤスパーは、アーシアを頼む！

「「はい！」ですわ！」

「「ええー！」「了解！」によー！」

シリユーの指示に、それぞれが応える。

バサッ

悪魔の羽を広げ、上空のコカビエルに向かって飛び立つ朱乃達。

「…で、お前は どーすんだ？」

「当然、討って出る！」

ボウン…

デスマスクの問い掛けに答えると、シリユーは地面に掌を着けて魔法陣を展開、  
「神崎孜劉の名に於いて命ずる！」

出よ、エックス!!」

カアッ！

その喚び声に魔法陣が反応して光り、その中から姿を現したのは、競走馬の様な体軀に金銀の鱗と純白の体毛と鬣、額に1本の角が生えているその顔立ちが龍の如し。

それはシリユーの使い魔である、麒麟・エックス。

「よし、行くぞエックス！」

…そして、ドライグ！」

(応よ、相棒！)

「禁手(バランス・ブレイク)!!」

(Welsh Dragon over booster!!)

Balance breaker…

Boosted gear・Scale Mail!!)

真紅の龍を象った全身鎧を纏ったシリキューがエックスに跨がり、そして主を乗せた麒麟は空に居る堕天使を敵として認識、コカビエルに向かい、天を翔け、突き進んでいった。

# 決戦！コカビエル！！

上空から地上のリアス達目掛けて、次々と光の槍を投げ落とすコカビエル。

バสบバสบバสบ！！

「おいおい、何時間迄も　こりや、保つモンじゃないぞ?！」

「うつく…！」

それをリアスとデスマスクが　それぞれ魔力と小宇宙（コスモ）の防御シールドを張り、直撃を免れているが、それも何時　破壊されても、おかしくはない状況。

「雷よおっ!!！」

「燃え墜ちなさあい!！」

「によ!!！」

「ていやあ!！」

そのコカビエルに、悪魔の羽を展開して飛翔した、朱乃、レイヴエル、ミルたんが、雷撃と火炎、爆裂弾の攻撃を繰り出し、木場も聖魔剣から、無数の刃を飛ばす。

「でえええい!!！」

更には天翔ける麒麟・エックスに騎乗したシリユーが、小宇宙（コスモ）と魔力が融



地上では小猫がキヤスパーを蔑む中、遠距離攻撃の出来ない自分をもどかしむ。遠距離攻撃の術を持たない、持とうとしない、今の自分を。

「シリユー先輩…」

~~~~~

(相棒、飛び道具でなく、もつと近付いてからの直接の一撃を浴びせないと、突破口は開けんぞ?)

「…だな。」

木場、至近距離で喰らわせるぞ!

朱乃先輩、レイヴェル、ミルたんは後衛でサポートを!」

「うん!」「ええ!」「はい!」「によ!」

ドライブグのアドバイスで、シリユーと木場が、コカビエルに特攻を仕掛け、

「雷よお!!」

「燃えて果てなさい!」

「フレイムフェザー!」

朱乃が雷撃を落とし、レイヴェルが炎の羽根を飛ばす。

更には、

「初公開、シリユーたん考案!」

ミルたんが魔力を練り上げ、背中から『もう一人のミルたん』を具現化。

そして自身が頭上で組み合わせた両拳を勢い良く一気に振り下ろすと同時に、『背後のミルたん』が、肩に担いだ巨大な水瓶から凍気の魔法を放出させる、

「マジカル・オーロラ・エクスキューション!! によー!」

新必殺魔法を披露。

「くつくつ…紫龍のヤツ、あのコ?に何を仕込んでんだ?

ありや、カミュの技じゃねーか! w w w」

それを地上から見たデスマスクが、威力は兎も角、その見た目は どう見ても、嘗ての同胞の必殺技にしか見えない それを見て、懐かしそうに苦笑する。

「フハハハハハ!面白い!面白いぞ!!」

雷・炎・氷の3属性同時攻撃。

しかし その攻撃も、コカビエルは臆する事無く、炎と氷を翼でガード、そして落雷を掌で受け止め、その儘 上方に弾き返す。

「でええいやあ!!」

直後、シリユーと木場が、拳と剣での連携を繰り出すが、コカビエルは これも巧みに腕と翼でブロック。

更には瞬時に創った光の短剣で、シリユーを乗せているエックスに斬り掛かるが、

『……………!』

ガキイツ!

これをエックスは、頭の角で跳ね返す。

ドゴオン……!

そして其処に、再び雷撃が落ちるが、やはり先程のリプレイの如く、コカビエルはそれを掌で受け止めると、

バシイツ!

「きやあっ!?!」

地上で防御シールドを展開しているリアスに向けて、弾き落とした。

「どうした、バラキエルの娘よ?」

こんな『只の』雷撃で、この俺が斃せるとでも思っているのか?」

「…!!」

この挑発に、朱乃が顔を顰める中、

「…油断大敵だね。」

コカビエルが顔を朱乃に向けた隙を突いての、木場の攻撃。

「甘いわ!!」

ドスッ…

「う…っ!?」

しかし、これを墮天使の幹部は、難無く短剣で受け止めると、新たに創り出した光の槍を、木場の右脇腹に突き刺し、

「うあわわあ?!」

ドシャアツ!!

「ゆ、祐斗?!」「祐斗先輩!!」

それにより、木場は墜落、地面に激突。

「うう…」

「アーシア!」

「は、はいっ!」

これをリアスが、少し前に目を覚ましたアーシアに、回復を指示。

「うう…すいません、部長…」

「良いから休んでなさい!」

地面激突よりも、人体に於ける急所に、悪魔の弱点である光での一撃によるダメージは決して軽くは無く、木場は実質、戦線離脱（リタイア）となる。



「なあ、ドライグ?

このドラゴンの鎧は、成層圏を抜けても耐えきれるか？」

(…俺自身、宇宙空間は平気だったから、大丈夫だとは思うが…

相棒、何を考えているのか、大方の予想は付くが、コカビエルも宇宙空間でも、普通に動けるぞ。)

「くっ…ならばっ！」

(…脱ぐなよ?)

「む、むむむ…無意味に脱いだりは、しないし！」

自身の、聖闘士としての禁じ手を手段として考じてみるが、ドライブにそれは無意味だと止められ、更には普段の悪癖も、先に釘刺されるシリユー。

(……………)

「ぶ、部長のOHANASHIは、もう懲り懲りなんだよ!!」

(…それが本音かw)

…しかし真面目な話、空中戦は不利だな。

どうにかして、地上戦に持ち込まないと…

「エックス、どうにかして、ヤツの背後に回り込めないか？」

『…………』

シリユールの言葉にエックスが反応、一度 距離を空けてコカビエルの正面に立つと、猛スピードで一直線に特攻。

「おおい、ちよ…待…?」

少し慌てるシリユールに お構い無く、直進するエックスは、コカビエルの攻撃の間合
いギリギリで急ブレーキ、同時に後ろ半身を大きく跳ね上げ、

「おわわ〜!!」

その反動でシリユールは、自分の使い魔の背中から、更には上空に吹き飛ばされる。

「ん?何なの…(bomb) だっ!!」

その様を、今イチ理解不能な呆れ顔で見っていたコカビエルに、隙アリとばかり、爆裂
魔法が放たれるが、それも やはり掌でガードされ、

ブオン!

「によ…っ?!」

お返しとばかり、術者の魔法少女?に光の槍の一撃。

どすんっ!

「み、ミルたん?!」

右の肩口と一緒に羽を貫かれ、そのショックで頭から落下したミルたん。

「によ~~~~?」

t w i n k l e t w i n k l e : p i y o p i y o p i y o p i y o :

先程の木場とは逆に、地面にマトモに頭部を痛打したダメーヅで、頭の周りにクルクルと星をヒヨコを巡らせながら、目を回してダウンしてしまふ。

「捕ったあ!」

「な…?!」

しかし この直後、エックスに飛ばされた筈のシリユーが、コカビエルの背後を捕り、羽交い締め の 体勢で、

「でえええいや!!」

その儘 猛スピードの錐揉みで落下。

…嘗て、シリユーの前世（むかし）の友に、数々の闘いを経て、後々に『神殺し』の二つ名を得た少年が居た。

その少年の得意技の1つに、相手を羽交い締め に 捉えて飛翔、旋回急降下から、敵の頭部を大地に叩き付ける技が有った。

…今、シリユーが繰り出したのは、その技を自己流にアレンジした…

「廬山龍旋爆!!」

ドツゴオオツン!!

羽交い締めにつえた時点で、小宇宙（コスモ）の枷で自身の身体毎拘束、より強力な小宇宙（コスモ）を用いて枷を壊す以外は、脱出不可能の技を受け、コカビエルは脳天を地面に激突。

「貴…様…薄汚いドラゴン風情があ…!」

譬え墮天使と云えども、『ヒト』の外観であるコカビエルは、明らかに苦悶の表情を浮かべて痛打した頭頂部を抑え、シリユーを睨み付ける。

「嘗めるな!小僧があっ!!」

Shultun Shultun!

「なっ?!」

「きや!?!」

「うっ!?!」

「ひい!?!」

「うげ!!」

そして、それでも戦意は衰えず、光の槍を、そして体を回転させながら背に生えた10枚の翼の羽根を刃の様に飛ばし、全方位、その場の者全員へ攻撃するコカビエル。

「まだ終わらんで!」

俺を斃してみろ殺してみろ滅ぼしてみろ！

赤龍帝！魔王の妹！」

「わ…解らないわ！」

そもそも何故アナタは そんなに迄、戦争に固執するの？

さつき自分でも言っていた筈よ？

前の大戦で3大勢力は、人間の信仰心に依存しなければいけない位に疲弊したと?!

今更 戦争を始めて、何の意味が有るの？」

ここでリアスが、改めて戦争狂に問い掛ける。

「ふん！決まっておる！」

それに対して墮天使の幹部は、自己の考えを語り始める。

「…確かに、どの勢力も先の戦争で泣きを見た。

アザゼルもシエムハザもビビったのか、『2度目の戦争は無い』と宣言する始末だ！

耐え難い！実に耐え難い!!

確かに、もう大きな戦争等、故意に企てない限り、起きないだろう！

だから、この俺が起こしてやるんだよ!!

信仰心？対価？それが、どうした？

我等墮天使が勝利さえすれば、人間等に頼る必要も無いだろうに!!」

「ちい…狂ってやがるぜ…」

その歪んだ信念に、デスマスクが舌打ちしながら呟く。

「戦争狂が…」

「赤龍帝!その言葉は、褒め言葉と言った筈だぞ!」

そして続くシリユウの呟きに、コカビエルは嗤いながら、
「出して攻撃を仕掛けてきた。またも両手に光の剣を創り」

（相棒、油断するなよ?）

ヤツは既に捨て身だ。

（ああいうヤツが、一番厄介だ。）

「ああ、解っているさ、ドライブグ。」

…ならば、一気に片をつけてやる!

アレをやるぞ!ドライブグ!

（え?!? 相棒、『アレ』って まさか?

ちよ…おま…）

それを見て、ドライブグがシリユウに注意を呼び掛けると、シリユウも勝負所と判断したか、それを承諾。

但し、ドライブグが求め期待した闘法と、シリユウの選択した戦法は、少し違っていたらしく…

「龍鎧解装（アーマーブレイク）!!」

バサアツ!

「ぬ?!」

（ハア…）

ドライブグの溜め息の中、赤い龍の鎧は、兜を含む上半身のパーツを左腕の部位だけ残して全て、身体から外れて上空に飛散。

そして飛び散ったパーツは、それぞれが変形していき、最終的には剣、槍、トンファー、双节棍、三節棍、円盾が2つつづつ、12の武器へと形を変える。

「はわわわ…」

「…やっぱりですか?」

「あらあらあら?」

「うううつわあ…」

「こよ…」

「はあ…」

「はははは…」

「ぎゃーっはっはっはっ!!」

左腕の籠手を残し、上半身真っ裸（マツパ）になったシリユーを見て、各々が様々な反応を示す中、12の武具は天高く舞い上がると煌めきを残し、夜空に吸い込まれ…

「…【最後の正義（テロス・ディケオスイニ）!!」

Hyun!! Vyun!! Dyun!! Jyin!! Gyonm!!:

「ぐわおおおお〜っ?!!」

次の瞬間には、其れ等が流星雨の如く降り注ぎ、コカビエルに集中被弾で直撃した。

「せ…赤龍帝いゝゝゝ…!!」

グラランドの中心、巨大なクレーターの中、全身血塗れとなるが、それでも倒れず、元から血走っていた赤い眼を、更に赤く光らせた墮天使は、闘争本能の儘に突進、シリユーに光の剣で斬り掛かるが、

ガシン…

「これで終わりだコカビエル!

轟き燃え上がれ!そして研ぎ澄ませ!

我が、小宇宙（コスモ）よ!!」

それを左腕の籠手でガードしたシリユーは一気に小宇宙（コスモ）を燃焼、
「今こそ唸れ!エクスカリバーよ!!」

喧嘩の理由は定かでは無いが、それは些細な事柄だとも云われている。

この2匹は戦争等知った事では無いと、場所を選ばず、3勢力の戦場の中でも、神、墮天使、悪魔の軍勢を蹴散らしながら、激しくぶつかり合っていた。

それを、善しとしなかったのは3大勢力。

この2匹の喧嘩は、自分達の戦争からすれば、邪魔者以外の何者でも無い。

『この儘では、戦争処では ありません。』

『…だな。先に、殺つちまうか?』

『貴様等と手を組むのは不本意だが、仕方有るまい。』

こうして争いの真っ只中であつた3大勢力は、やはり喧嘩の真っ只中である、2匹のドラゴンを協力して始末するべく、一時休戦、手を取り合つた。

やがて この2匹のドラゴンは、体を幾重にも切り刻まれ、その魂を【神器（セイクリッドギア）】として、人間の身体に封印される事となつた。

しかし、それで2匹の争いは終わる事は無く、神器に封印された2匹は その宿主である人間を媒介とし、互いに何度も出会い、戦う様になつたと云う。

「如何にも。」

そしてシリユーと白い鎧の男も、会話を始めた。

「この場に、何の用事だ?」

「キミが悪魔側に付いた様に、俺は今、墮天使の側に身を寄せていてね。」

総督様(笑)のアザゼルに、そのココビエルを無理矢理でも連れて帰るように言われたんだが…

だから、トドメを刺すのは出来れば止めて欲しいんだけどね?」

「あ…アザゼルだと?」

白龍皇、貴様?!何時から?」

「…結構…な、前からだが?」

ココビエル、アンタは少しばかり、勝手が過ぎた様だ。」

「アザゼルウーッ!!」

白龍皇が墮天使に付いていた…「神の子を見張る者(グリゴリ)」の幹部である自分が知らなかった事実。

白龍皇を自分の回収役として寄越して来た事以上に、その白龍皇の存在を自分に教えなかった事に、ココビエルは、この場に居ない墮天使総督の名を、怒りながら叫ぶ。

しかしながら、身体を斬り裂かれたココビエルの叫びは、虚しく夜空に吸い込まれる

だけ。

「それと…」

そんなコカビエルを無視した白龍皇は、

「そこに埋まつてる、フリードの回収も命じられていたのだが…そつちは遅かったみたいだな。」

臍の位置から上、上半身が綺麗に地中に埋まっているフリードの死体に目を向けて、白龍皇は呟くが、

「あゝ、コイツなら まだ、何とかなるぜ〜？」

「何？」

ずぼ…

そう言つて脚を掴み、土の中からフリードを引つ張り出したデスマスクが、

パチン…

…右の親指で中指を弾くと、

「ん〜？へ…？」

まるで寝起きの様なリアクションで、フリードは息を吹き返し、

「う…うわああああ!!？」

じ…爺い！お前、一体俺つちに何を…？

ひ、ヒイイイイっ?!」

…かと思えば、まるで つい先程迄、黄泉の国で死者の葬列にでも加わっていたかの様に、顔を恐怖の表情で歪め引き攣らせて怯えだす。

「あゝ、うざっ!」

ピシッ

「~~~~~!?!?」

そんなフリードの首筋目掛け、デスマスクは光速の手刀一閃、フリードは気を失ってしまう。

ぼゝい…

「おっと…」

意識を失い、倒れ込むフリードを受け止め、コカビエル（上半身のみ）を肩に担いでいる白龍皇に投げ渡したデスマスクは、

「ついでに あちらの紅髪のお嬢さんが、アッチも一緒に帰ってくれたら嬉し
いって顔をしているが?」

「……………」

バルパーの死体を指差し、リアスの心境を伝えるが、

「いや、そのバルパー・ガリレイについては、特に指示を受けてないのでね。」

空に消えた白龍皇を見届けた後、シリユーがバルパーの死体を指差しながら、リアスに尋ねるが、彼女も処理の仕様に悩んでいるようだ。

「山中に埋めるによ?」

「普通にゴミ捨て場に棄てれば…」

「クール便着払いで、適当な教会に送り付けましょう。」

「俺達が関わった痕跡(あしあと)を完全に消した上で、手近な派出所にでも、投げ入れよう。」

後は、教会関係者に丸投げだ。」

「お前も大概に なったな!w」

「ところで…始めから ずっと気になっていたんですが…」

「小猫?」

バルパーの死体の処理について、どうするか話してる中、小猫が話題を変えるかの様に話し出した。

デスマスクに顔を向け、

「貴方は誰なんですか?」

とりあえず、シリユー先輩の知り合いだと云うのは分かるのですが?」

コクコクコクコク…

ゴオン…

「「「「?!」」」」

その時、リアス達の前に、真紅の魔法陣が展開された。

「リアス様、シリユー様、遅ればせながら、援軍に参じました。」

「……………」

そして、その中からはメイド服を着た、銀髪的美女と武装された悪魔の兵士達、そして…

「リアス、シリユー君、眷属の皆、無事だったんだね！」

僕が来たからには、もう大丈夫！

コカビエルは何処だい？……って、2人共、そのハリセンは、何なのかな…？」
紅髪の優男が、姿を見せた。



翌日の放課後の部室。

「…結局は、教会が引き取りましたか。」

「ん、てつきり『知らない』で通して、身元不明になると思ってたんだけどね。」

「また赤龍帝（オレ）に、責任逃れ云々とか糾弾されるのを恐れたのでしよう。」

テレビのニュースを観ながら、話すシリユー達。

結局、バルパーの死体は、シリユー考案の「最寄りの派出所に死体を投棄」を実行。結果、『神父惨殺死体、交番に投棄事件』として、全国に報じられる形となり、バルパーの着ていた法衣故、(一般の)教会関係が真っ先に怪しまれ、警察に呼びつけられた(事情を知ってる)牧師がバルパーの身元を確認、身受け人となり、事情聴取されるが、当然ながら一連の聖剣騒動等は公に話せる筈も無く。

「まあ、単なる猟奇殺人事件として捜査されるだろうが、真相は手掛かりに掠りもせず、闇の中に消える事になるだろうね。」

なお、深夜の派出所に、いきなり斬殺死体が投げ入れられ、それを見た当直警官が慌てふためいたりしたのは、また別の話。

♪ㄥㄥㄥㄥㄥㄥㄥ

「あら?ソーナからだわ?」

そう話している中、リアスのスマホに着信が入った。

「…ん、分かった。」

p i …

「皆、今から生徒会室に向かうわよ。」

ス)』で永久冷凍の刑を執行。

…等々、等々。

「……………」

「神崎く? 『それだけか?!ゴラア?!』な顔は、止めとけく?」

「別に…」

墮天使側は兎も角、天界側の対応に、やや不満足だ…明らかに そう謂った表情をしているシリユーを匙が窘める中、ソーナの説明は続いて往く。

「コホン…それで、最初に言った、『連絡を取り合いたい』ですが、近い内に…期末試験の前後の時期になると思いますが、3勢力の代表が、会議を開くらしいです。

その場で墮天使側から、何か提言があるそうですが…

我々も、その場に召集されます。

そこで改めて、事件の報告をしなければなりません。

それから、神崎君…」

「え? まだ、何か有るんですか?」

「教会側のトップである、天使長のミカエルが、3勢力が集まる前迄に、改めて今回の件で謝罪したいとの事です。

場所や日時は、其方に一任すると…」

そしてシリュー君は、能面の様な無表情。

本当は苦虫噛み潰した863屋さんみたいな顔をしたいのを、一生懸命我慢しているのが、ヒシヒシと伝わって来ていますわ。

そして、この2人に話し掛けているのは、天界に於けるトップ中のトップ、天使長のミカエル…チツ…殿。

一連の騒ぎの際、学園を訪れた2人の聖剣使いによつて、赤龍帝（しりゅーくん）を怒らせ、赤龍帝と天界が敵対関係と成りかねない事態になった件で、天界のトップが謝罪に来たと、云う訳です。

それが何故、私の家かと言いますと、その辺りが話された報告会の時点で、時と場所についてはシリュー君は「明日の放課後、部室で良いですよ」と言ったのですが、それにはアス、そしてソーナ様が難色。

近い内に会議を開く為、3大勢力が集まる際は、魔王様公認だから、しぶしぶと了承してましたが、それでも、その他の事で他勢力、しかもトップを学園、それも部室に呼ぶのは…と、種族感情丸出しな、凄く嫌そうな顔。

…かと言つて まさか、其処等辺の喫茶店やファミレスなんかを対談させる訳にも往かず、仕方無いので、私の神社（いえ）を、対談場所として提供したのです。

当然、対価は戴きましたわ。

曰わく、

※ 紫藤イリナとゼノヴィア・クアルタは、戦闘能力を完全封印した上で、それぞれ、日本の東北地方と四国の寺院へ尼僧として派遣済み。

もう死ぬまで一生、寺院の外に、足を踏み出す事は無い。

※ バルパー以降、聖剣計画に携わった研究者や指導者は、その計画内の立ち位置、実績に関係無く、全員が その地位を最降格、今後、昇格は一切無い。

※ 『計画によって生まれた聖剣使い』は、それによって得た能力を完全封印。

※ 更にはアーシアを『魔女』と見抜けず、長年、聖女として祭り上げていた教会関係者も、降格処分済み。

※ 尚、今回の処分者で出奔者がでた場合、理由、経緯を問わず、『はぐれ』として、迅速に処分とする。

等々等々…

「それと、これは お詫びの印として…」

「…!!」

そう言つて、ミカエルが煌びやかな造りの長剣をシリユーに差し出した瞬間、能面男の眼付きが鋭くなり、そして その眼に光が宿ったかと思えば、

斬！

でシリユー君も、一応は納得…は、しないでしようが、とりあえず矛は納めたかもしれない…

最後のアレは、流石にアウトでしたわ。

このミカエル殿（笑）、流石は天界トップらしく、先日の2人以上にシリユー君を怒らせる事に関しては、本当に天才的ですね。

これって、天界勢の固有スキルですか？

「そもそも処分と言つても、結局それは計画に係わった『人間』だけで、貴様等『上』は、何の責任も取らない心算か!？」

「いえ…それは…」

焼け木杭にガソリン投入な、シリユー君の怒号は終わりません。

…でもシリユー君？

アーシアちゃんが、また、はわわわな困り顔になっているから、ほどほどに、しておきましょうね？

私個人としては、鬼怒の顔で、ミカエル（もう、こんなので、呼び捨てで、おけーですよね？）を責め立てるシリユー君を、もつと見ていたのですが♪

「ふん……所詮は貴様等、その程度の存在だろう？」

何しろバルパー追放後も、計画その物は『使える』として、研究続行を、犠牲者の因子の使用を容認しているのだからな!!

表は聖人ぶっていて、その裏では、悪魔と変わらん!……いや、その悪魔でさえも、『悪魔以上の所業』と謂わしめる行為を平然と行っている!」

「う……そr……」

シリユー君の言葉に対して、何か言おうとして、慌てた様に、途中で その言葉を飲み込んだミカエル。

恐らくは『それも人間達が勝手に……』みたいな、何処かの政治家の様な発言をしようとしたのでしょうが、それは尚更、赤龍帝の逆鱗と直ぐに気付いたのでしよう。

チイツ、惜しかったですわ。

それでもシリユー君の言っている事は、かなり正論と云うか事実ですので、ミカエルは何も言い返せません。

「アーシアにしても、そうだ!!」

「?」「!?」

そして話は、アーシアちゃんの事に迄 及んでいきます。

いいぞ、もっと やれですわ。



「アーシアの神器の〔聖母の微笑み（トワイライト・ヒーリング）〕。

それも貴様なら最初から、悪魔すら癒せる…貴様等天界の基準から云えば、異端の神器だと判っていた筈！

ならば何故、直ぐに異端と断し、追放なりの処理をしなかった？

結局は聖剣計画同様に、『使える』として、異端発覚迄は、利用するだけ利用する心算だったのだろうか？」

「……………」

「……………」

何も…下手に言い訳すると、更なる追及をされると判断したか、何も言い返さず、黙り込むミカエルと、事前にシリユーから、余程間違つた事では無い限り、多少言い過ぎであろうと、口出し無用と言われており、黙っているアーシア。

ミカエルからしたら、異端の神器云々の打算でなく、純粹にアーシアの信心深き故に、天界…教会から追放させる心算は無く、まさか、本当に悪魔を癒してしまうと云う、その様なシチュエーションに目撃者付きで居合わす事になるのは想定外。

彼女自身、その者が悪魔だったと知らなかったのも有るが…いや、アーシアなら、傷付いている者なら、それが例え悪魔だろうが、普通に癒しかねないだろう。

仮に、教会が神器を持っているのを確認した時点で、ある程度の『戦士』としての教育を施し、ゼノヴィアの様な…いや、あそこ迄 私様でなくとも、少し位は「天界ER EEEEE!!」な意識を植え付けていけば…全ては既に「たられば」である。

「…神器に関係無く、アーシアの様な信仰心ある献身な信徒は、出来る事なら手放したくはなかった…と、云うのだけでも、信じては貰えないでしょうか？」

「…ならば！」

ミカエルの、止むを得ず…と言う主張も、シリユーには通用しない。

「ならば何故、追放した後 直ぐに、教会とは関係無く、救いの手を差し伸べようと、しなかった？」

「貴様なら、教会の人間には知られない様、住む場所や生活費用の援助等、容易かったろうに！」

結果、アーシアは路頭に迷い、墮天使に利用されて命を落とす事になっていたかも知れなかったのだぞ？

偶々 俺達が そうなる前に、その墮天使を始末したから！

偶々 俺が、迷子のシスターを拾ったから！

…だから今、アーシア・アルジエントは、この場所に居るんだ！」

「……。」

「……。」

成す事言う事が、悉く赤龍帝の逆鱗に触れる行為となり、完全に手詰まりとなる。

天使長が、魔王でも墮天使総督でもない、只の…偶々 神器を持っており、偶々 過酷な鍛錬の末に、超人的な能力を持っているだけの、『人間』に、話術で屈してしまおう。

では仮に その『人間』に、この場で『力』を行使、『力』で無理矢理に解決しようとしたら、どうなるか？

…この話し合いの場を設ける際、ミカエルはサーゼクスから、このシリユーこそ、墮天使幹部のコカビエルを圧倒的実力で打倒したのは知らされていた。

そして これはサーゼクスも知らぬ事、即ちミカエルも知る筈の無い事だが、紫龍は前世にて、主神の加護を授かり、そして数人掛かりとは云え、ギリシア系列の3大神の1柱、冥王の側近の『眠りの神』を打倒している。

如何に『長』の肩書きを持つとは云え、『神』の僕である『天使』如きが、敵と成る筈が無い。

…尤も これは、前世と今生の、『神』の実力が同等であるなら、話ではあるが…更に言えば、今この場で赤龍帝を討てたとしても、それは多少、言葉は荒いが、赤龍

「おや、アーシアさんや、そんなに頬を膨らませて、涙顔で睨み付けるのは、止めてくれんかね？」

「ちよつと可愛いよ？」

「そうだな…：トーカの78割くらい。」

「うゝ！何で こんな顔してるか、理解出来てないんですか!!？」

「…ついでに然気に惚気るの、止めましょうか。」

「はいはい！解っています！」

「本の少しだけ、キツク言い過ぎた感は、自覚しています！」

「少しだけ？」

「あー！兎に角もう、あーゆー奴には、あれ位 言わないと、分からないんだから！」
「何だか必死な俺。」

「うううううううう！」

「それでも、理解は出来ているが、納得は往かないと言いた気な顔のアーシア。」

「あらあらあらあら…」

「そして そんな やり取りを、凄く楽しそうに見ている朱乃先輩が、

「チヨイチヨイ…」

「アーシアちゃん？ちよつとちよつと♪」

しかも、この初対面の：何だか小猫と似たような身長と体型なトリーカの友達が、遠慮無く、コッチのテーブルと同じ、G I G Aプリンパフェを注文しやがった!!

そんな傍迷惑な死亡フラグ、立ててくださったのわ?!

「はわわわわ…シリュウさん、凄く怖かったですう…」

「気のせいかな、校舎が揺れてるによ?」

「ん、確かに揺れてるね。」

「倒壊するかも…」

「…って、それ、凄く拙いじゃない?!

祐斗、小猫!直ぐにギヤスパーを無理矢理にでも、外(コッチ)に引つ張り出してきてー!」

「は、はい!」「…はい。」



リアスに命じられ、木場、小猫、そしてミルたんが、地震の様に揺れる旧校舎内を走り、1F最奥の教室の前で立ち止まる。

「…扉を開けます。」

下がって下さい。」

バキイツ!!

『keep out』のテープが貼られ、更には魔法施錠の封印が施されていた扉を、小猫が物理で破壊。

暗幕のカーテンで外の光が遮断されている、暗い教室内に3人が入ると、其処には5人分の生徒用デスクが室内中央に、繋げて並ばれていた。

そして その上には、パソコン等の機材が天板狭しと載っている。

他に、教室内には何も無い。

ガタガタガタガタガタガタ：

「どうよ？」

：いや、もう一つ：教室角に、約60センチ角の、ダンボール箱が、小刻みに震えていた。
パサッ

「ギヤスパー君、大丈夫かい？」

「ふえっふえ…ゆ、祐斗先輩い…？？」

木場が箱の蓋を開けると、その中には駒王の女子制服を着た、小柄なプラチナブロンドのボブカットの少女…否、少年が、ガタガタと、涙を流しながら脅え震えていた。

ギヤスパー・ヴラディ。

リアス眷属の「僧侶（ビショップ）」で、元・ハーフヴァンパイアの転生悪魔である。
「ここは危険だから、外に避難するよ！」

「へ？嫌あ！お外、怖いっつ！！」

「…へたれヴァンパイア。」

「斯々然々！」

「「「はあああ!?」」」

そしてリアスの説明を聞き、驚きの声を上げる生徒会一同。

「な…何て云う事を…」

「全つく、何やってんだ！連中は馬鹿か？馬鹿なのか？…ってゆーか、馬鹿だろ!!」

「…って、これって、神崎君一人の魔力…な訳？」

呆れ、怒り、慄き…事情を知り、様々な反応を見せる中、次第に この強烈な魔力と殺気（と小宇宙（コスモ））は納まつて行き、

「!!…ルシファー様！」

「神崎！」

校舎の中から、サーゼクスとシリユーが姿を現した。

「ん？支取先輩？匙？」

「や、やあ、ソーナさん。」

「「「……………」」」

完全に顔から角が取れているシリユーと、まだ少し、顔に青い縦線が残っているサーゼクス。

どうやら一応は、シリユーの納得逝く形で、OHANASHIは終わった様だ。



「…で、誰？この少…年んん?!」

「え、?!」

初めて見る顔…ギヤスパーを初見で、男の娘と見抜いたシリューが、リアスに尋ね、

「あ…この子はね…」

リアスが、とりあえず簡単に、何故、この場に居るのかの説明を含めて紹介。

「え？そんなに揺れていたんですか？」

「本当に、校舎が壊滅するんじゃないかって思ったわよ!!」

ガク…

「嗚呼…諸行は、無常だあ…」

「お前は何を、やってるのだ？」

そしてギヤスパーを『男』だと知り、何故かorzっている、生徒会唯一の男子生徒。

「成る程ね、引き籠もりの（元）ハーフ・ヴァンパイアか…」

「うう…」

シリューが目を向けると、リアスの背後に隠れ込むギヤスパー。

「ついでに見ての通り、極度の人見知り…と云うか、対人恐怖症なの。」

「…みたいですわね。」

「う、うう〜」

決して、不機嫌時の分かり易い893顔をしている訳でもないにも拘わらず、初対面のシリユーに対して、真つ直ぐと顔を合わせる事の出来ないギヤスパー。

シリユーだけでなく、アーシア、ミルたん、レイヴェル、ソーナを除く生徒会役員と、知らない顔が勢揃いな中、先程の大地震のショックと併せて完全にパニック、リアスを盾にして、前に出ようとしなない。

「やあ、ギヤスパー君、久し振りだね。」

「さ、サーゼクス様あ…」

サーゼクスが声を掛けるも、ギヤスパーはリアスの影から出ようとしなない。

それでもサーゼクスは微笑みながら、

「どうだい？そろそろ君も、外で活動してみたら…？」

…と、提案。

「勿論の君の、ネットを介しての実績は理解している心算だが、何時迄も教室に引き纏る訳には、いかないだろう？」

リアスも来年の春には卒業だし、その再来年は、君も卒業予定だ。

そうなるよ。どの道、学園からは、今の教室からは出る事になるんだ。

今の内に、外に慣れて行った方が良い。

リアスの下僕としての君自身の為にも、君と云う個人の為にも……」

「ううう……」

相手が悪魔にとつて絶対的存在の魔王である故に逆らえない以上に、サーゼクスの言う事は理解出来ているので、反対は出来ないが、それでもこの引き籠もり少年にとつて、外に出るのはかなりの覚悟が必要な様で、「はい、分かりました」とはなかなか言い出せない。

「いやいや、今直ぐに、どうにかしようと言っている訳じゃないんだ。

少しずつ少しずつ……な、リアス？」

きつかけはアレだったけど、折角、外に出て来たんだし……」

「そーねえ……ギヤスパー？」

貴方も、何時迄も そんなじゃ駄目だって、それは解ってるわよね？」

「ううう……は、はいい……」

自分の主と、その主の兄である魔王に言われ、漸く了解の返事をするギヤスパー。

「それと……シリユー君、今のタイミングで、君に頼み事をするのも、アレなんだが、君も、ギヤスパー君の立ち直りに協力してくれないかな？」

勿論、対価は払うよ。」

「いや、俺は別に、構いませんよ。

オカ研の後輩を調教（つよく）するのは、先輩の役目ですから。

但し…俺は、厳しいですよ？」

サーゼクスのこの頼みに、シリューは嫌な顔をせずに、普通に二つ返事で応える。

「お、お兄さんて、オカ研の先輩さんなんですか？」

でも、悪魔でなくて、普通の人間みたいなんですけど…？」

「ん…、確かにシリューは、人間だけだね、」

「ギャー君、シリュー先輩は、今代の赤龍帝です。」

「え？せせせ…赤龍帝い…!?」

う…う…ん…（パタン）」

「ぎゃ、ギヤスパあ…?!」

…いきなり目の前に居た初対面の男が、実は赤龍帝でした…な事實は、彼にとつては
オーバークルだった様だ。



「悪羅悪羅悪羅悪羅…っ!!」

バシイっ!!

「ひ、ひえ…っ!!」

翌日から、シリューはギヤスパーを徹底的に鍛える、コーチ的役割に就いていた。

この日は体育館にて、バレーボール部の練習終了後、撤収前のネットの後片付けと体育館床のモップ掻きを条件に、その儘、バレー部さながらの特訓を施していた。

「こら、ギヤスパー！」

ボールから逃げるなあ!!」

「ひいつ!?だ、だって、怖いですう!」

「神崎君、スパルタだなあ…」

「厳し過ぎなんじゃ、ないでしようか?」

「…でも、あれ位やらないと、ギヤー君のへたれは治りません。」

同行している木場にアーシア、小猫が吠く中、シリューの撃つ殺人的スパイクをレシーブする特訓だが、そのボールを体操着姿(ブルマ着用)のギヤスパーは、まるでドツチボールの様に逃げ回る。

「ふう…少し休憩するぞ。」



「あ…あの、シリューさん?」

「ん?」

「ギヤスパー君に対して、ちよつと鬼畜過ぎなんじゃ、ないですか?」

スポーツドリンクを飲んでゐるシリユーに、特訓中、ずっとボールをトスしていたアーシアが心配そうに話し掛けるが、

「馬鹿者、鬼畜と云うのは、あーゆーのを謂うのだ。」

そう言つて、シリユーは、ギヤスパーと小猫を指差す。

そして、その指の先では、

「はい、ギヤー君。」

これ食べて、スタミナ付けましょう。

シリユー先輩特製餃子です。

はむ…凄く、美味しいですよ?」

「い、嫌あああゝゝゝっ!」

餃子（ニンニク）、嫌いゝゝゝゝゝゝゝっ!!」

休憩中のギヤスパーに、小猫がワザとなのか天然なのか、ヴァンパイアの弱点としては、十字架と並んで世界一な、ニンニクたっぷりな餃子を差し出して、追い掛け回していた。

「ははは…でも、餃子（コレ）を作ったのも、神崎君だよな?」

はむ…ん、確かに美味しいけど…

神崎君、この餃子ってチヨイス、ワザとだよね？」

その様子を、やはり餃子を掴みながらの木場が苦笑。

「そう云えば、神崎君？」

「ん？」

「今回のギヤスパ―君の指導って、結局は魔王様から赤龍帝への、正式依頼ってなったと聞いたけど？」

「ああ、後輩の指導ってのは、部活の一環だからって依頼でなくても実行するし、対価も不要と言ったんだが、サーゼクスさんも真面目と云うか、律儀と云うか……」

「……と、言う事は、やはり対価と云うか報酬を貰ったのですね？」

何か、奢って下さい。

餡蜜とかケーキとかパフェとかアイスクリーム（すぱーん！）あ痛あつ!!」

「……、小猫ちゃん!」

ギヤスパ―弄りを終え、会話に参加してきた小猫のド頭に、ハリセンが炸裂。

「大馬鹿者、今回の対価は金じゃない。」

此の度の誘拐拉致未遂騒動の賠償で、高校生としては勿論、普通の日本に生活する者として、3世代位迄なら、余程の豪遊をしない限りは、ニートでも死ぬ迄生活出来る程の金額を悪魔サイドから受け取っているシリユ―。

ぶっちゃけた話、今更 現金は…だった。

「じゃ、じゃあ、今回の対価って、何なのですか？」

「あの悪魔（ひと）ってさ、学園の校長や理事なんかにも、色々と強権発言が出来る立場
だろ？」

あわよくば、自分も便乗してスイーツを御馳走して貰おうとか考えつつ、「自分は言わ
なくて良かった」と、内心安堵なアーシアの質問に、シリユーは自分の後ろ髪に手を当
てながら、答えるのだった。

「…だから、校則、『男子のロン毛もアリ』にしてもらったよ。」

が全く知らない顔が欲しかったので、普段から教室で、匙と一緒に よく話す2人に声を掛けてみたら、二つ返事でOKの返事。

ついでに言えば、匙やトーカー、ユキコも誘ってみたのだが、

《《《《

「生徒会（ウチ）はボーリングとかカラオケとかゲーセンとか…そーゆーの、全面禁止なんだよ。（T—T）」

「いや、バレなきや大丈夫だろ？」

それにバレても、ギヤスパアの訓練の協力って言えば…」

「バツカヤロ、通用しないって！」

お前ん所の部長さんは、厳しいながらも優しいだろうがな、ウチの会長は厳しい上に、厳しくて厳しくて厳しいんだぞ!!

バレたりした日にゃ、お尻100叩き（魔力込み）確定だぞー！」

「…それって、お前からすれば、GOHOUBIなんじゃ…問題無くね？」

「大バカヤローっ!!」

《《《《

…らしく、更にはトーカーは部活、ユキコは彼氏クンとデートらしく、NGだと言われた。

彼氏クン…ね。

野球少年らしく、会う度に、しょっちゅう惚気てくれてるけど、最終的には実際に会った上で、人と形を見極めない限りは、この劉お兄さん、認めませんよ。

俺は、伯父さん以上に厳しいよ。

閑話休題！

「ねえ、ギヤスパーちゃん、次は俺と一緒に歌わね？」

「いや、俺と一緒に！」

「はう…はわわわ…」

何気にギヤスパー大人気。

…因みに コイツ等には当然、ギヤスパーが『♂』というのは黙っている（笑）。

「ギヤスパー君、大人気ですね。」

「何気に、負けた感が半端無いのは、気のせいでしょうか？」

「気にするな。」

したら、それこそ負けだぞww」



「凄く、楽しかったですわ♪」

オカ研部室隣の教室。

何時の頃からか、『シリュージム』と呼ばれる様になった部屋で、気合い十分な顔を見せ、身構えるギヤスパー。

そんなギヤスパーの前で、シリューは手に持った小さな箱から、3つの小さなボールを取り出して、床に叩き付けた。

カンツ x 3

勢い良く弾むボール。

「えやああつ!!」

ギヤスパーは その3つの卓球（ピンポン）球を刮目（ガン見）する。

ピタ…

「…!!」

すると、3つの内の2つ…確かに2つのピンポン球が、1秒に満たぬ時間ではあるが、確かに空中で静止した。

「ハアハア…出来…ました…?」

ギヤスパーの神器、【停止世界の邪眼（フォービドウン・バロール・ビュー）】。

その能力は、『視界に写る空間を、一定時間停止させる』事。

その能力を発動させ、床を弾む球を停めてみたのだが…

「まだまだだな。とりあえず、3つのボール、全てを一度に、誰の目でも判る様にも、最低でも数秒間は停めないと、合格には…次のステップには進めんぞ。」

「う〜…」

ギヤスパーとしては会心の結果な心算だったが、教官役のシリユーは辛口採点。

「俺は、同様な技能は持ち合わせてないので、具体的なコツ等を教える事は出来ん。」

お前自身が訓練繰り返しで、それを掴むしか方法が無いし、俺達は そのサポートしか出来ない。」

「は、はい！頑張ります！」

「…ふ〜ん？」

「??」

その遣り取りを見て、リアスは感心したかの様に呟く。

「部長？」

「いえ、ごめんなさい。」

シリユーって、鬼畜教官みたいな真似しか出来ないと思っていたら、案外マトモにコーチしてr…ごめんなさい！失言でした！

だから、ハリセンは止めてえっ!!」

パシパシ…

「全く…次、何か下らん事を言ったら、学食にてファンの前で、カレーうどんをホースで吸って食べて貰いますよ？」

「そ、それも嫌あああつ!!」

凶器（ハリセン）に怯え震える、泣き顔リアスの余りに心外な発言に、少しだけ89 mode を発動させるシリユー。

一応 前世では、実子や養子を基、数多くの聖闘士を育て上げてきた実績が有り、後陣の育成には定評が有ったのだ。

「とりあえずは動いてる標的を全て、ある程度迄は止められる様に しないとな。」

「は、はいー!」

因みに今回、シリユーの頭の中に描いた とりあえずの最終的な理想は5色以上、合計30ヶ以上のピンポン球を一度に弾ませ、指定した色のボール（2く3色）だけを全て、一定時間止められる様にする事。

それが出来たらオカ研メンバーや生徒会メンバーに協力してもらい、標的を悪魔（にんげん）にして、同様な特訓にシフトアップする心算でいた。

無論、オカ研メンバーは兎も角、生徒会には協力を伴う対価を払う必要が生じるだろうが…

「まあ、その時は彼女達に…さしあたっては新羅先輩に木場を差し出したら、喜んで皆に

協力するように、働きかけてくれるだろう。」

…戦い尽くしだった前世の１００年は兎も角、俗世に馴染んだ新たな１７年の歳月は、堅物の代名詞だった。この男の腹を、少なからず黒く染めていた。

「…で、日中 街中での、対人恐怖症克服の方は、成果が有ったの？」

「……………」

「おい、何故２人して目を逸らす？」



ギヤスパーク・ヴラデイは、純血のヴァンパイアと人間との間で生まれたハーフ・ヴァンパイアである。

悪魔以上の純血至上主義のヴァンパイア、しかも、ヴァンパイア社会では名家の出身となるギヤスパークは、半端者として、そして人間の血筋故に宿っていた神器から危険視され、極々一部を除く一族…家族からも迫害虐待され、遂には命の危険を感じたか、故郷を逃げる様に飛び出してしまふ。

しかし、命の危険から逃げ出した先で、彼を待っていたのは、吸血鬼狩を生業としている者だった。

何処かで出奔の情報をリークしたかの様に、待ち構えていた吸血鬼狩（ハンター）。

その執拗な追撃から辛くも逃れるも、致命傷を負い、最後には力尽きてしまふ。

しかし、その時に偶々リアス・グレモリーと邂逅、結果から云えば、彼女の【僧侶（ピシヨツプ）】として、新たな生を得た。

…が、過去に受けた虐待に加え、自身の持つ神器の危険性を理解していたギヤスパーは対人恐怖症を拗らせ、引き籠もりに。

学園も、小猫と同じクラスとなるが、入学早々に休学扱いと なっていた。

…そして今回の騒動で外に出たついでに、サーゼクスから脱・引き籠もり及び、神器のコントロールを課せられたギヤスパーだが、神器の制御は牛歩ながらの進展は見受けられるが、対人恐怖症克服の方は、まだまだ前途多難な様だ。

＜br＞校庭崩壊の白龍皇

はぐれ悪魔討伐任務（但しシリユー抜き）

「この廃屋…ね…」

…ぶつちやけ、リアスは かなり、焦り苛立っていた。

この最近の、彼女の周りに起きた、大きなイベント。

ライザーとのレーティングゲーム。

コカビエルの聖剣騒動。

コカビエル襲来は、相手が伝説（レジェンド）級なので仕方無いとしても、その前の、自分の婚約破棄を賭けたレーティングゲーム、その経緯は兎も角、その結果は悪魔社会（よのなか）の目からは、赤龍帝（シリユー）に負んぶに抱っこな風に見られていた。

一応、自分の眷属である兵士（ミルたん）が、駒の価値からすれば格上である、僧侶、騎士、戦車を撃破しているから、多少のフォローは出来るが、もしも あのゲームにシリユーが参戦せず、リアスを「王」とした、純眷属だけで戦ったとしたら？

そして、今のリアス・グレモリーに、ライザー・フェニックスが下せたか？…となる
と、疑問符しか浮かばない。

故に、実績が欲しい。

別に、大金星でなくても良い、兎に角、悪魔社会の風評を吹き飛ばす程の実績が。

コカビエル襲来の後、『本来なら脳味噌に行くべき栄養が全て胸（バスト）に逝つてしまった、紅髪の駄肉姫』だのと、褒め言葉な…否、不名誉な二つ名が冥界に徐々に浸透しつつある事実が、彼女の焦りに拍車を駆けていた。

「絶っ対に見つけ出し、OHANASHIしてやるんだから!!」

怒り浸透のリアスが、最初に この銘を附けた張本人を、自身の下僕だけでなく、グレモリー家の使用人さえも動員して捜し出そうとするも、手懸かりさえも掴めず。

「もしかすると、これは冥界の外の者の仕業かも知れませぬな」…とは、グレモリー家執事長の弁。

「だ…駄肉姫www…!!」

「(怒)(怒)…」

また、その二つ名を聞いたシリユーが本人の目の前で大笑い、リアスにべられたのは、また別の話である。

閑話休題。

冥界から、グレモリー管轄の地に逃げ込んだ はぐれ悪魔討伐の指令が舞い降りたのは、そんな時だった。

「はぐれ悪魔ドラムロ！」

グレモリーの名に於いて、貴方を消滅しに来たわ!!」

「けっ！何が貴族様だ！」

雑魚い分際で、生まれだけで偉そうにしてるんじゃねーよ！」

グレモリーの名を聞いても、はぐれ悪魔：ドラムロは臆する事は無い。

「消し飛びなさい!!」

そんな態度にカチンと来たのか、リアスが前に踏み出し、問答無用で巨大な魔力弾を撃ち放つが、ドラムロは見た目からは想像出来ない様な素早さで、これを回避。

ボゴツ！

標的に躲された滅びの力は壁に着弾、綺麗な真円の大穴を作る。

そしてドラムロは、その回避のスピードを攻撃に転換、両手の爪を鋭く延ばし、リアスに向けて一直線に襲い掛かるが、

「…えい」

どん！ズバアッ！

【王（キング）を護るべく、前に立った小猫が、カウンターの一撃を浴びせる。

「ヤツは【騎士（ナイト）】なのか？」

「いや、報告では、アイツは【戦車（ルーク）】だった筈だよ！」

「それじゃ、あの素早さは『素』なのか？」

……ってアーシア？」

「シリューさんは、見ちゃ駄目です！」

しかし、小猫が拳を繰り出したと同時に、ドラム口も鍵爪の斬撃を放っており、それはリアスの盾となっていた小猫の制服を斬り裂いた。

それにより右側の小さな丘が露わとなると、透かさずアーシアがシリューの背後に回り込み、背伸びして、両手でシリューの両目を覆い隠すのだった。

「痛ってーだろうが、この弩チビ！」

「む……どちび……」

パサ…

台詞の割には効いた素振りの見せないドラム口は、背中から悪魔の羽、そして薄い透明の、昆虫の様な羽を広げると低空滑空し、再度、リアス達に突撃を仕掛ける。

「させないよー！」「によー！」

その前に立って迎え撃つのは、木場とミルたん。

更には、

「雷よおっ！」

カッ！

朱乃が その後方から雷撃での援護射撃。

「せいやあつ！」

斬！

間髪入れず、木場が魔剣を創り出して斬り付けるが、

「今、何か、したのか？」

ドガツ！

「うわあつ?!」

ドラム口は その剣を右腕で受け止めると、その勢いの儘、強烈な裏拳を騎士の顔面に叩き込み、吹き飛ばした。

どん！

「きやあつ？」

そして木場は その儘、朱乃に激突。

「終わりかあ？この雑魚があ!!」

雄叫びと共に、ドラム口の浅黒かった肌が、更にドス黒く変色。

同時に身体も二回り近く大きくなり、着ていた衣服が引き千切れると、その下からはまるで甲虫をイメージしたかの様な、鎧の様な地肌が剥き出しとなり、額からも、1本の硬そうな角が生える。

「ベースは昆虫系の妖魔か…」

「はっ！その通りよ！人間！」

シリューの呟きに、はぐれ悪魔は肯で応える。

「俺は元々ガタイには自信があつたがな、更なるパワーを得られるってゆーから、悪魔に転生してやってみたら、やれ上級悪魔に対する礼儀だの、やれ眷属としての嗜みだの、雁字搦めぢやねーか！」

俺は そんな、お行儀を学ぶ為に、悪魔になつた訳じやねー!!」

「力を欲して力に呑まれた、典型的なタイプですね…。」

「力！力！力!! その、何が悪いのだ?!

力が無い雑魚の分際で、偉つそうに下僕なんざ拵えて、偉つそうに指図するから、その下僕に殺されるんだろーがよ！」

レイヴェルの言葉にも、その何が悪いとばかりなドラムロが、次の獲物とばかりに目を向けたのは、当然レイヴェル。

「やれやれだな…」

この時のドラムロの台詞に、シリューの目が冷めた物となる。

はぐれ悪魔…その殆どは、与えられた力に溺れ、場合によつては主を殺害しての出奔だ。

しかし、主人の横暴な振る舞いに耐えきれず、やはり時には主に手を掛けての逃亡な場合もある。

その場合、身内や恋人等を人質に捕られ、無理矢理に転生させられた者も、少なくともと云う。

少し前、シリユー自身が　そういうパターンに陥りかけた際にサーゼクスにOHANASHIして、今後、そういう者は出奔時の主殺しは不問とした上で、それ以外の罪を犯していない者は保護、或いは悪魔側の敵対勢力に就いたり、人間界で悪さをしないと約束するならば解放するという仕組みを作り上げていた。

因みに保護された者は、シリユーが悪魔側と同盟を結んだ際に受け渡された、グレモリー領とシトリー領の一部、両領地の境部分に新たに制定された、シリユーの領地に住むようになる。

また、現在の上級悪魔の眷属となっている転生悪魔に対しても、無理矢理に転生させられた者は、はぐれ認定とせずの出奔を認めさせると、決して少なくない人数が、シリユーの領地に移住したり、冥界を去ったりしていた。閑話休題。

シリユーからすれば、無理矢理に転生させられ者ならば、頃合いを見て戦闘途中に横から入り込み、話し合う事も有ったが（断じてOHANASHIに非ず）、力に溺れた者ならば、話は別。

今回……今は最初にリアスに言われて、手を出す心算は無いが、既に途中で「待った」を掛ける考えは失せていた。

「燃えなさいー！」

ぼわあっ!!

そしてドラムロにターゲットにされたレイヴェルも、大人しく攻撃を受ける心算は無く、翳した掌から、炎の球を投げ飛ばす。

「熱ちち!？」

先程の朱乃の雷撃は、大した効果を得られなかったが、この炎の攻撃は有効だったのか、嫌がる様にガードするドラムロ。

「隙あり！」

斬！

「うげや!？」

このタイムミングで、木場が背後に回り込み、生来の虫の羽と転生で得た悪魔の羽、4枚の羽を炎の魔剣で斬り落とす。

「体は固くても、羽の付け根は　そうでもないんだね？」

「が……ガキイ……!!」

ドラムロが木場を怨めしそうに睨み付ける中、リアス眷属のターンは終わらない。

「アクアたん、出番によ！」

バシヤアツ！

ミルたんが床に魔法陣を展開させると、其処の中心から彼女？の使い魔である、水精（ウンディーネ）のアクアが姿を現し、

「せーによっ!!」

ドガアツ x 2!!

そして2人揃って、魔力を込めた拳を床に打ち衝けると、

「[[[[[[「きやああっ!!」[[[[[[

「うわわっ!!」

「うをゐっ?!」

「ぬわおっ?!」

その衝撃から立つのも儘ならぬ程の震動が生まれ、ドラムロだけでなく、シリューを含むオカ研メンバーも、体勢を崩してしまい、アーシアとギヤスパーに至っては、その場にへたり込んでしまう。

ドボン…

そしてアクアは、まるで水の中に潜り込む様に、床下に姿を消すと、

バキィツ！

「ぐへっー！」

やはり水面から飛び跳ねるが如く、ドラム口の足下から姿を現し、その勢いの儘、強烈なジャンピングアッパー…ドルフィンブローを放ち、はぐれ悪魔を天井まで吹き飛ばした。

「によっー！」

そして それを追う様に、ミルたんとアクアがジャンプ。

空中で2人掛かり、ドラム口の両手両足、首を完全ロックした儘 落下からの、

「ミルたん・NIKU⇒LAP、によー!!」

DOGAH!!

本人曰わく、魔法少女の嗜みらしい、ツープラトンでの肉体言語を炸裂させた。

「ぐ…ぐ…びぶ…べぼ…ほわ…」

打撃や斬撃、雷撃には耐性が有っても、肉体言語には耐性が無かったのか、それともこの攻撃自体が、防御耐性を上回っていたのか、意識朦朧、虚ろな表情で それでも覚束無い足取りで、フラフラと起ち上がるドラム口。

「ガ…キイ…」

戦意こそ喪つてはいない様だが、其れ等の佇まいは『効いたフリ』な演技でない限り、既に勝敗は決しており、

「コホン…改めて、消し飛びなさい!!」
ドシユツ!!

最後はリアスの滅びの一撃で、ドラム口の肉体は跡形もなく、此の世から消滅したのだった。

「ふう…皆、お疲れ様。」

前髪を掻き上げながら、リアスが自分の下僕に労いの言葉を懸ける。

その笑顔はシリュー抜きでの討伐任務達成、その戦果に充分満足している様だった。

「さあ、部屋に戻って、お茶でも飲みましょ。」

「ええ、部長。」

でも、その前に…反省会ですね。」

「え、??」

ピシイ…

しかし、そんな御機嫌顔も、僅かながらに怒っている感じな赤龍帝（シリュー）の顔と言葉に、まるで石化したかの様に、硬直してしまうのだった。

…ちよ、いきなり褒め言葉？

『反省会』とか言っておきながら、先に　そーゆー風な発言されるって、尚更　何を言われるのか、凄く怖いんですけど？

「「「「「……………」」」」」

ほら、他の下僕達（みんな）も、表情（かお）が引く攣（こ）いてるわよ？

ついでに何故か、反省会には関係無い筈の、アジアも！

「…だが、先ずは、リアス部長！」

「ひゃ、ひゃいい!!?」

はい、いきなり私、キターーーーーー!!

「部長は一応は〔王（キング）〕でしょうに？」

いきなり一番前に出て、ぶっ放してんじゃないですよ！

バカですか？バカなんですか？

しかも　その一撃も、見事に外してるし！

王なら王らしく、最初は後方で控えて前衛に指示を出していたら　どうですか?!

まさか本当に、脳味噌に届くべき養分が、無駄に胸に集中してるんじゃないでしょ

うね？

リアルに駄肉ですか?!

「かはあつ?!?!」

「「ぶ、部長お?!?!」」

止くめて! 私のMP (メンタル) は、もう0よ!!

後、駄肉言ーなあ!

「次は木場!」

「は、はい!」

…で、次は祐斗ね。



「何故、聖魔剣を使わない?」

つい この前、禁手 (バランス・ブレイカー) に至ってばかりなのに早速、切り札温存を気取っている心算か?

そういう考えは、聖魔剣を十全に使いこなせる様になってからだ!

兎に角 今は、訓練や実戦でガンガン使用して、感覚を掴むのが最優先だ。

それを踏まえれば今回の敵は、最適な練習相手だった筈だぞ?」

「うん…そんな風に言われると、何も言い返せないよ…」

「そして次は、ミルたん!」

「によによつ?!」

シリューのマシガンガントークな駄目出しは終わらない。

「最後のプロレス技？は特に問題無いが、最初に使い魔と一緒に放った、地震攻撃擬きは、完全にアウトだぞ！」

あんな味方も巻き込む様な無差別な攻撃は、封印すべきだ。」

「うゝ、面目無いによ…（・ω・）」

しよぼーんとなるミルたん。

「レイヴェルは、まあ…可も無く不可も無くだったが、ギヤスパー？」

「(ホツ…)」「は、はいい!！」

レイヴェルが、自分には特に駄目出しが無いと、安堵の溜息を小さく零す中、次に名前を呼ばれたギヤスパーが、泣きそうな顔で返事をする。

「…今回、お前は自分自身を、どんな風に思った？」

「え…？ど、どう思うも何も、僕は何も出来ずに、シリュー先輩の後ろに ずっと隠れてたから…役立たずでしたあ…。」

「そうだな、完全に空気だったな。」

「ううう…。」

「何時迄も、そんな風で居るのか？」

「…いい、いえ！早く神器を完全にコントロール出来る様になって、皆さんの足手纏いに

シリユー自身も正直、出来る事なら この話題には触れたくはないと云う表情をしなから口を開く。

「実は前々から、何時か言おうと思っていた事だが……2人とも、強くなるうという心算はあるのか？」

「……!!」

余りにもストレートな問い掛けに、言葉を飲み込む2人。

「小猫は最初、部長を護る為に前に立った時の一撃、駒の特性を活かしただけの、只の馬鹿力なパンチだったな？」

「……!!」

「そして、朱乃先輩の放った雷撃は、本当に只の『雷』だけの攻撃だった。」

「……………」

この言葉で、シリユーが何を言いたいのか察した2人は、俯くと、ますます無口になってしまふ。

「小猫が あの時、繰り出す拳に仙術で練った『氣』を纏わせて放っていたら、もつとダメージが通っていたかも知れない。」

「……………」

「朱乃先輩も そう。」

あの雷撃が、『光』を織り込んだ『雷光』だったら、今回の戦いはもっと有利に進められていたかも知れない。」

「……っ!？」

確かに、最初にシリューは言った。

『リアス部長から、ある程度は聞いています』…と。

2人が、この『ある程度』が、どの程度まで聞いており、逆に自分達の事を何処迄知っているのかを、更にはリアスが何処迄話したのかを問い質したくなるが、シリューの厳しい顔は、それを赦そうとしない。

「小猫、昔は どうだったかは知らないが、ギヤスパーは今、自分の神器を怖れず、制御して使いこなそうと努力している。」

普段、アイツを『へたれ』扱っているお前は、自分の中の仙術（チカラ）を畏れて、逃げた儘で終わらせるのか？」

「そ、それは…」

シリューの言葉で、更に黙り込む小猫。

「朱乃先輩も、自分の中に流れる『血筋』故の力を忌みてるのは解る。」

…でも、それも結局は小さく下らない、個人の我が侷に過ぎない。」

「な…し、シリュー君に、私の何が解っていると云うの?!？」

そして小猫とは逆に、自分にとって それは余程禁忌な事だったのか、朱乃は大声で反発する。

「解るさ……。少なくとも、自分の持っている能力（チカラ）を、単に自分の好き嫌いだけで使わないって事位はね……。」

「なっ……？」

「正直、こういうのは言いたくは無かったが、自分の中に流れる血を怨むのは御門違いですよ。」

強いて言うなら、怨みをぶつけるべきは、母方の血族じゃないのですか？

その対象が一切存在しなくなったからって、残った父親に筋違いな怨みを当てて、その血の繋がり故の力を否定して、それで無理矢理に自分を納得させて、終わらせる心算ですか？」

「そ、それは……！」

しかし本音を……核心を突かれ、小猫同様に、朱乃は何も言い返せなくなってしまう。「し、シリユー？」

もう少し、ソフトに言っても……」

実際にはシリユーの言っている事そのまんま其の通りなのだが、余りにも遠慮も容赦も無い口っ振りに、今迄ずっと静観していたリアスがフオローしようとするが、

「何を言っているんですか！

そもそも部長？？こういうのは本来、俺が言うのではなく、部長が主として、諭して往くべき事でしょう？」

「う……」

「グレモリーは慈悲深いので評判らしいですが、如何にデリケートな問題だからって、部長の様に全く触れずにいるのは、慈悲なんかじゃない、只、過保護で無責任なだけです。」
「うう……!?!」

それに対して待っていたのは、痛烈なカウンターの口撃だった。

「…聖闘士には、主神であるアテナが、その使用を禁じた技がある。」

「シリュー君？」

そして不意に、シリューは聖闘士の事を話し出す。

いきなりの話題の切り替えに、戸惑う朱乃達。

「それは、破壊力も然る事ながら、その技の行使自体が、聖闘士として有るまじき行為に他ならないからだ。

一度使用するだけで、その者達は聖闘士の称号を剥奪されると共に、未来永劫、外道の烙印を押され、蔑まれる事となる。」

「「……………?」」

「…しかし、死して尚、アテナの為、そして地上の正義と平和の為、敢えて その汚名を被るのを承知で、その技を断行した男達を、俺は知っている。

彼等の覚悟に比べたら、朱乃先輩や小猫の躊躇いなんて、本当に只の我が俣以外の何物でも無いですよ、俺からすればね。」

「……………」

シリューは其処迄話すと、

「…俺が言えるのは、此処迄ですよ。」

後は、自分自身が一步前に踏み出すかどうか…そして そのフォロー、背中を押すのは、部長の仕事ですよ。」

ソファーから立ち上がり、部屋の扉の前迄歩くと、

「折角の勝利ムードを、ぶち壊したという自覚は有ります。」

…でも、今日の皆の戦い方を見て、どうしても言っておきたかったのも、理解してほしい。

今日は もう、お茶って空気じゃないでしょうかから、解散で良いでしょうか？」

パタン…

「ちよ…シリュー？」

それだけ言うと、応接室を出て行った。



『ああ、確かに、そんな出来事も有ったよな。』

…あの後は結局、シリューの言う通り解散となり、部室に1人残ったりリアスは、スマホを取り出し、シリューの話していた事柄を知っているとされる人物に連絡を取っていた。

「…ベツロさん、本当の事だったのね？」

「あの堅物が、そんな嘘を言う様に見えるかい？リアス嬢ちゃん？」

「じよ…?!」

その電話の遣り取りの途中、相手の自分の呼び方に、リアスは言葉を詰まらせた。

ベツロ・カンクロ。

この世界線に於ける、ギリシア・オリンポスの1柱である女神アテナの眷属であり、嘗てはシリューと同じ前世にて、最強と謳われた12人の黄金聖闘士（ゴールドセイント）の1人、蟹座（キャンサー）のデスマスクである。

「…そつちで何が有ったかは、俺が立ち入るべきじゃないから、詳しく聴く心算は無いが…あの紫龍が、そういう話をするって事は、余程な事じゃないのかい？」

…察するに、あの猫っ娘のおチビちゃんや、ポニーテールのお嬢ちゃんが自分の

内側（なか）の力を使う事の躊躇に対する、覚悟不足の指摘でも したのかい？」
「なあ!? あ、貴方もしかして、こっちの現場、覗いてたんじゃあないでしょうね？」

余りにもピンポイント過ぎる予測分析に、リアスは顔を赤くして、デスマスクを問い質す。

「いやいや、その辺りは、俺も この前の墮天使との戦闘で感じていたからね。

何故、自分の持ち得る能力（チカラ）を活用しない? ……つてね。

アイツも、同じ考えなんだろうよ。」

「はあ…分かったわ。

ありがとう、ベッロさん。

こんな夜に、電話して ごめんなさい。

それじゃ…」

そう言つて、電話を切ろうとするリアス。

「ああ〜つと、リアス嬢ちゃん、物の序でだ、最後に1つだけ…」

「はい?」

しかし、デスマスクが それを止めて、話し始めた。

「紫龍が話していたって人物な、3人居るんだが…」

「ええ、具体的には どんな技かは話さなかつたけど、その話し方から、複数人で繰り出

す技と云うのは、何となくだけど分かっていたわ。

それでも『死して尚』とか、訳解んなくて、聴きたい事は、他にも沢山有るけど…

それと、私の事は呼び捨てで構わないから、嬢ちゃんは止めて。」

「その内の一人は、アイツの右腕にエクスカリバーを託した人物だ。」

「え…?」

「アイツ等の覚悟を知っているから、そつちに どんな事情が有るかは知らないが、力を出し惜しみが許せなかったんだろう。」

それが、道ずれ系の自爆技とかなら、また話は違ってくるだろうがな…」

「ん、分かったわ。」

シリユーにも言われたけど、後は私が何とかするから。」

「ああ。じゃあな、リアスちゃん。」

pi…ツーツーツ…

「…結局『ちゃん』付けかい!!?」



翌日の放課後。

ガラ…

「…ちわつす。」

『Lezaza Judea』：此処：か：っ!?』

小猫達2人が仕事として赴いた、依頼人(クライアント)が住んでいると云うマンションに、魔方陣転移：は転移酔いしてしまうので、聖闘士の能力である、テレポートを用以て辿り着いた。

レザザ・ユダヤ。

つい最近、日本に引越して来たという、自称・日本のサブカルチャー大好きな外国人で、小猫やギヤスパーを呼び出しては、ゲームの対戦をしたり：その仕事内容としては不釣り合いな、高級な絵画や壺等を対価として払っていた、良く言えば御得意様、悪く言えばカモな人物。

そして、シリユーが その男の住まいの玄関に立った瞬間に、僅かだが、『人に非ずな気配』を感じ取り、

ガチャツ!

「小猫!ギヤスパー!無事か!!?」

慌てて扉を開け、部屋に踏み入れると、

「あ、シリユー先輩。」

「ん?彼が、君達自慢の助っ人君かい?」

「へ?」

「…つて、はむ…シリユウ先輩、この部屋、土足じゃないですよ？」

…はむ…靴は脱ぎましょう。」

「そーですよお。」

「え?ええつ?」

其処に居たのは、ゲームのコントローラーを握っているギヤスパーと、高級そうなスイーツをはむはむと食べている小猫。

そして、ギヤスパーと同じくゲームに興じている、黒の浴衣を着た外国人?の男だった。



「うう…痛ひ…(T|T)」

「…全く、死にそうな声で『助けてくれ』とか言うから、何かかと思えば…」

あの『助けて』コールが、まさかのゲームの助っ人要請でした…なオチに、少しだけ、ほんの少しだけ、キレたシリユウ。

脳天に大きな たんこぶを作り、うるうると涙を流しながら正座している小猫とギヤスパーを一喝した後、シリユウは改めて、レザザ・ユダヤと名乗る男に顔を向けると、

ぼわあっ!!

「貴様……一体 何者だ!？」

思い出したかのように小宇宙（コスモ）を全開、威嚇する様に、質問を投げ掛けた。「おいをゐ、ちったあ落ち着けよ。」

別に俺は、お前達と事を荒げる心算は無いぜ? ん? 赤龍帝?」

「な!?!」「え?」

初対面な筈のシリユーに対して、『赤龍帝』と呼んだ男に、シリユーだけでなく、小猫とギヤスパーも、驚きの顔を見せる。

バサ…

そして男は、背中から6対12枚の漆黒の翼を広げて、名乗るのだった。

「初めまして……だな。」

赤龍帝と、サーゼクスの妹の眷属達よ。

俺の名はアザゼル。

【神の子を見張る者（グリゴリ）】の総督をやっている者だ。」

「……………」

その名前を聞いた瞬間、シリユー達の思考は一瞬停まり、ぼつくぼつくぼつくぼつく ちーん…

そして脳内フリーズが解除された時、

「え、ええー………っ!?」

小猫とギヤスパーは先程以上に驚き、

「【赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）】！」

（Boost!!）

シリユーは自らの神器を発動させ、戦闘の構えを見せる。

「だーから、待ってっ？」

別に、お前等とバトる心算は無いって言ってるだろ？」

そんなシリユーに対して、両手を上げ、戦意無しのポーズを見せるアザゼルは、呆れ

顔で溜め息を吐く。

「……………」

…で、それなら、どういう心算だ？」

赤龍帝の籠手を解除したシリユーが、墮天使総督に聞くと、

「近い内、この町に3勢力の代表が集まって、色々と話すのは知っているな？」

俺は唯単に、それに先立って、この町に やってきたに過ぎんよ。

まあ、正体隠して悪魔（おまえ）達を喚んだりしたのは、軽いジョークだ。あんまり深く考えるな。くつくつく…」

正しくワルメンな黒い笑みを零しながら、アザゼルは話す。

「…で赤龍帝？折角 来たんだ。

予想していた展開とは違っていたが、一応は可愛い後輩の助っ人で来たんだろ？」

そう言つて、ゲーム機のコントローラーを差し出す堕天使の総督。

「そ、そうでしたあ！

シリユー先輩、助けて下さいい〜！」

「確かにレザザさんが まさか、堕天使総督なのは吃驚しましたが、とりあえず それはアツチに置いておいて…」

「置いとくのかよ?!」

「兎に角、この男に勝てるのは、森沢さんをして、『世界一の卑怯者』のシリユー先輩しか居ません。」

「その呼び方は止めろ!!」

「くつく…どうでも良いさ。」

…で、どうするんだ、赤龍帝？やるのか？

それとも、負けるのが怖いか? w w w

「あ、あ!?!」

…そして、冒頭の対戦に至るのだった。

~~~~~

「ふっふっふ…これで俺の5連勝だな。」

「ちい…ハメ技ばかり使いやがって!」

「で、でも何時も、先にハメ技仕掛けてるのは、シリュー先輩…ひいひい!!?」

「…役立たずドラゴン。」

何時の間にか、ゲームにマジになってるシリューのボヤキに突っ込もうとしたポブカットの少…基、少年が893の形相で睨まれる中、画面では、黒いワンピースを着た緑色の髪の少女が、全裸な筋肉達磨をK.Oしたりしていた。

実はシリューは、この類の格闘対戦ゲームでは、攻撃力よりも体力及び、耐久力のあるキャラクターを好んで使用する傾向があり、それ故に一度嵌められると、

「5分もハメてんじゃねーっ!」

そのキャラの体力を全て削られる迄、数分間、延々とサンドバックとなるパターンも珍しくは無かった。

「…シリュー先輩以上の卑怯者が居た。」

「小猫ちゃん、喜んでない？」

そして普段から この手のゲームにて、シリユウの鬼畜なハメ技の餌食になっているのか、嬉しそうに呟きながらアイスクリームをパクつき、幸せそうな顔をしているのは小猫である。

その後も4人は、格ゲーだけでなく、

「あー?! 其処で甲羅 使うか、テメー?!」

配管工な髭のオッサンがモチーフのレーシングゲームや、

「ぎゃー!! キング○ンビー、キターっ?!」

有名日本昔話の主人公が進行役となつて、日本全国を電車移動、各地の様々な物件を買っていくゲームを、夜遅く迄プレイするのだった。



「冗談じゃないわ!」

コレは、由々しき問題よ!!」

ばんっ!

部屋に戻つた3人から、「あの新規な御得意様、実は墮天使の総督でした」…な報告を受けたリアスは、机を叩きながら大声で ぶち撒けた。

「まあまあ、今迄、結構儲けさせて貰つた訳だし…」

「それでも……!」

「さつき報告してみたら、サーゼクスさんも言ってたじゃないですか?

アザゼルは、昔から あーゆうー男だから、気にしたら負けだって。」

激怒(おこ)状態なりアスを、笑いながら宥めるのはシリユウ。

「あわわわ……」

その後ろでは、今回の対価である、パウロだかヨハネだかな聖人が描かれた……一見は素人の落書きにししか見えない絵画を持って、あわあわしているギャスパーと、

「……早く、お話、終わらせて、お茶……」

対価その2……というか、お土産として貰った、ケーキの詰め合わせな箱を両手で持っている小猫が、2人の遣り取りを見守っている。

「コカビエルや白龍皇については、何も話さなかったの?」

「一応、話は振ってみただけど、曰わく『今度の会談で、纏めて話す』……と。」

「……に、しても、正体明かした後も、楽しくゲームしてるなんて……」

「いや、負けっぱは悔しくて……でなく、一応は依頼人だし、本人も戦る気0でしたし、あの場で下手にバトったりして、周辺壊滅させる訳にも逝かないでしょう?」

「……あの儘、普通に接してるのがベターだと思います。」

…この後、オカ研メンバー全員のミーティングにて、レザザ・ユダヤ…墮天使総督アザゼルは、グレモリー眷属顧客のブラックリストに登録されたのであった。



「…で、小猫？」

付いて来て欲しいって、一体 何事だ？」

「……………」

後で、話します。」

ミーティングも終わり、部活解散後、帰宅しようとしたシリユーを小猫が「用事がある」と捕まえ、2人が足を運んだ先は、学園から少し外れた場所にある公園。

シリユーとアジアが初めて逢った、その公園内は既に時間帯が時間帯なので、内部には人1人居ないであろう。

「……………!!」

「……………」

そして、その敷地内に足を踏み入れた瞬間に、シリユーは違和を感じる。

既に過去、何度も感じた事のある違和感、それは『人払いの結界』。

「…先輩、こっちはです。」

「お……………お……………」

最初から結界の存在が分かっていた様な顔の小猫が、その儘 公園奥にシリユーを連れ出すと、遊歩道の脇に設置されたベンチには1人の人影が。

「……………」

そのベンチに座っていた人物もシリユー達の存在に気付くと立ち上がり、凄まじい勢いで駆け寄って来ると、

がはっ!!

「しゝろねえ!

『会って話したい事がある』って連絡してくるなんて、お姉ちゃん嬉しいにやゝ!!」  
ジャンピングダイブで、小猫に抱き付くのだった。

「お、お姉ちゃん?!

「……………」

「ん?お前、誰にや?」







但し、その体内（うち）に溢れる仙術の力に自我を奪われ溺れ、主である上級悪魔を殺害した後に逃亡。

悪魔サイドは、その戦闘能力から、SS級はぐれ悪魔と認定して行方を追っていたが、冥界出奔からの消息は、終ぞ掴めていなかった。

「はあ!?にや…何にやの、それ?!」

捏造だにや〜っ!!」

シリユーから冥界に於ける、自身の立ち位置を聞かされ、心外だとばかりに絶叫する黒歌。

今は真夜中。結界内でなかったら、とんだ近所迷惑である。

そして、自身の潔白を訴える様に、弁明し始める黒歌。

曰わく、主である悪魔（妻子持ち）が、自分を手籠めにしようとした処、正当防衛の名の下に成敗、返り討ちにしたは良いが、確かに殺り過ぎた感も否めず。

何れにせよ、主殺しは大罪故に、冥界には自分の居場所は既に無い…そう判断した黒歌は、気懸かりながらも、まだ幼い妹の白音…つまり小猫を連れ出す暇も無く、単身で冥界を去った…と云う。

「あの時は女王（クイーン）以下、他の眷属悪魔達も一緒だった筈にや!

何でアタシが、仙術の力に溺れて暴走してないとイケないにや!!」





「そのグループから抜けないと、保護は難しいかも知れないな。」

それと、そのグループの情報というのは、今此の場で話せるか？」

「基本的、『去る者追わず』だし、妹の事は話した事あるから、その当たりを話せば問題無い筈にや。」

後、この先、敵対するならまだしも、簡単に仲間は売れないにや。」

御尤もな意見で。

そういう会話をしていると、

♪牙牙牙♪牙牙♪牙♪

スマホに着信。

相手は…サーゼクスさんだ。

「…了解。」

彼女には、俺から伝えとくから、そっちの処理は、ヨロシク。」

p.i.:

俺はスマホをポケットに仕舞い、

「魔王ルシファーからの報告が届いた。」

たった今、リアス・グレモリーが眷属、塔城小猫の姉にして、SS級はぐれ悪魔・黒

歌の潔白が認められ、正式にはぐれ認定が解除された。」

「!!」

「身柄は暫定的に、赤龍帝である、俺の預かりとなるが、どうする？」

冥界に戻り、俺の管轄する地に住むも好し、悪魔陣営に敵対しないを条件に、現状に落ち着くも好しだが？」

「それなら、白音と一緒に暮らすにゃ！」

「え？」

とりあえずの処遇報告をして、今後の身の振り方を聞いてみると、何となく想定通り（小猫からすれば、まさか）な応え。

「これからは、ずっと一緒にや〜♪」

がばっ!!

「え、？ちよ…：姉…：様…：？」

再び小猫に抱き付くと頬を擦り寄せ、幸せそうな顔をする黒歌と、少しだけ困った様な顔を見せる小猫。

結局は、小猫の部屋（マンション）に、一緒に住む事に。

しかし、確認の答えが返ってくるの、速かつたなあ：

まあ、相手側の『家』の格が如何程かは知らないけど、魔王様直々に質問された日に

は（しかもバックには赤龍帝w）、正直に即答するしか無いか…。

「…で、小猫？」

そろそろ、俺をお前の姉と、対面させた理由を知りたいのだが？

ついでに、どうやって はぐれ悪魔との連絡を取り次いだかもな？」

「あ…」「にや？」

~~~~~

「…成る程ね。」

まあ、これは皆には、俺から上手く言ってやるよ。」

「…すいません。」

小猫が言うには、過去に一度だけ、断りはしたが黒歌から「会いたい」と携帯（ガラケー）に連絡があり、その時の着信履歴を、保存していたとの事。

そして今回、黒歌とコンタクトを取ったのは…

「実は、姉様から、仙術を習おうと思っていました。」

以前の会話で、私は既に、姉様が別に力に囚われたりしている訳では無いと、確信していましたから。

それで、シリユー先輩なら事情を理解してくれると思って、立ち会いをお願いしたのです。」

「ねえくえ？御主人様？」

「御主人様は止める。シリユウで良い。」

「もしも容認してたら、トーカちゃんにチクる処でした。」

「じゃ、シリユウ？」

白音に仙術を教えるに至って、悪魔的に対価って訳じゃないけど、お願いしたい事が有るにや〜？」

「ん？何だ？余程な無理難題じゃなければ、考えてやるが…」

「ん〜♪じゃねじゃね〜♪」

「アタシと子作り、してみない？」

「はあ!？」

「赤龍帝との子供なら、絶対に強い子供が産まれるにや♪」

それとアタシ、まだ未経験だから、出来たら優しくしてくれたら嬉しいにy…」

すばかーん!! x2

「ふに、やーっつ?!」

目をキラキラと輝かせて迫るバカ猫の顔面に、小猫の下から撃ち上げるアツパースイ
ング式と、俺の上からの撃ち墮とし式のWハリセンが、同時炸裂したのだった。

嵐の前の ほんのぼの？

トントントントントン…

「神崎君、野菜、切ったよ。」

ジャツジャヤー…

「応。それじゃ、次は…」

7月初めの週末。

とあるマンションのキッチンにて、駒王の制服の上にエプロンという出で立ちの男が2人、台所で調理中。

シリユーは この日、木場の助っ人として、木場の顧客の1人である、外資系OLの下に馳せ参じていた。

仕事内容は夜食調理。

何時も週末は、帰宅が遅くなる彼女に変わり、食事の準備をするのが仕事だ。

普段は特にメニューを指定しないのだが、この日は「兎に角、がつつり食べたい！食材は冷蔵庫に沢山ある！」と言うので、木場がシリユーに援軍を依頼したのだった。

因みに この日のメニューは『孜劉特製焼き餃子』、別名『ギヤスパークラー』と『肉

と野菜たっぷりな中華風・餡掛け硬揚げ蕎麦（擬き）』。

「ん〜♪美味しい〜！」

それは、依頼人（クライアント）からも大絶賛の2品だった。



「只今、戻りました。」

「同じく。」

「はい、祐斗にシリユー、お疲れ様。」

部室に戻った2人に、部長のリアスが劳いの声を掛ける。

「部長、小猫は？」

「黒歌と一緒に、仙術修行してるわよ。」

小猫の実姉、黒歌は学園編と同時に、オカルト研究部に入部していた。

「ギヤスパーは？」

「隣の部屋。」

今はアーシアとレイヴェルが特訓の手伝いしてるから、早く行ってあげなさい。」

「了〜解。」

ピシヤ…

そう言うとしリユーは、部室の隣、半ばシリユーの私的トレーニング室と化している

教室に向かう。

ガラ：

「あ、シリユー先輩。」

「シリユーさん！」

部屋の床には無数のピン球が転がり散乱している中で、時間操作系の神器【停止世界の邪眼（フォービドウン・バロール・ビユー）】の制御特訓をしているギヤスパート、そのアシストをしていたアーシアとレイヴエルが。

「どんな感じだ？」

「ボール10ケ中、8〜9ケは確実に数秒間、止められる様にはなりましたが……」

「うう、まだ完璧には……」

「で、でも、時々は10ケ全部、止める事も有りましたし！」

「よし、明日は次のステップに進める様、今日中に、今の段階は完璧にこなせる様に仕上げるぞ。」

「「は、い、い！」」

部活の先輩として、後輩の育成は当然な話なのだが、このギヤスパートの強化に関して、魔王（サーゼクス）から『依頼』として、既に対価も約束されているので、尚の事、手を休める訳には行かなかった。



「それじゃ皆、お疲れ様。」

明日は休み…そして日曜日はAM11:00に、プールの前に集合ね。」

「「プール？」」

オカ研メンバーが全員、部活（しごと）や特訓を終え、解散の前に、土日の予定を話すリアス。

「部長、日曜日にプールで何か有るんですか？」

「実は、生徒会（ソーナ）から、プールの清掃を頼まれてね？」

「ふわあつつ？そんなの、美化委員か水泳部の仕事でしょうが？」

何故にオカ研（おれたち）が!？」

「実はね、掃除が終わったら、一足先にプールを好きに使って良いって、ソーナ様に言われたんですの。」

What's? なシリユーに朱乃が解説。

「安い対価だな…」

「べ、別に良いでしょ？」

私達美少女の水着姿、堪能出来るし、シリユーだって、プールなら上半身真っぱになっ

ても、誰も文句言ったりしないわよ？」

「どういう意味ですか？」

…多分、リアスからすれば、そのまんまな意味である。

「それから、自分で美少女（笑）、とか言うなし。」

「う、うっさいわね！」

兎に角、日曜日はジャージとかの汚れても大丈夫な服装と、勝負水着持参の事！

それじゃあ解散！」

「何なんだ？ 『勝負水着』 って…？」

因みにミルたんは、リアス眷属ではあるが、オカ研部員以前に、駒王の生徒ではないので、普通に お休みとなった。

「バイトのシフト、入れてたによ。」



翌日の土曜日の昼過ぎ。

「……………」

朱乃は自宅神社の庭で、自ら張った、『人払いの結界』の中、精神と魔力を集中、研ぎ澄ませていた。

「…雷よお!!」

座に彼女（トリーカ）に報告という脅しに屈したシリューは、翌月曜日から1週間、オカ研女子部員に、学食にてデザートを御馳走する羽目になったと云う。

「敢えて心当たりを挙げるとしたら…な。

他には浮かばん。」

「エクスカリバーの呪いwww…

…つて、いやいや、高が夢だろ?

考え過ぎなんじゃね?」

「そう思いたいのだが、なまじハッキリ覚えてる分、不気味でな…

例えば…大戦時に破壊された後に再生された、7本の最後の1本の遣い手が近い内に現れるとかのフラグとしか思えん。」

「メタい!」

「仮に、本当に あの生き物がエクスカリバーだとしたら木場、お前んトコにも今夜辺り、現れるやも知れんぞ?」

何しろ お前も1本、再生不可能レベルに破壊してるからな。」

「ははは…御遠慮願いたいね。」

「しかも何だか声が、子Y…ライザー・フェニックスだった…」

「そ、それは嫌だなあ…」

「匙君?少し、失礼だよ?」

…そんな風に話してる中、彼等は学園に到着する。



「後日この学校で行われる、3大勢力の対談にて、俺はアザゼルの護衛役となったんだな。」

今日は単に、挨拶がてらに其れを伝えに来ただけだ。

別に赤白の決着を着けに来た訳じゃない。

だから黒龍君と聖魔剣遣い、その殺気は仕舞いたまえ。」

「……………！」



…そう言っていたが、俺は見たぞ？

その手に、『全国拉麺MAP』なる雑誌を丸めて持っていたのを！

さては今日の昼時、駅前オープンするラーメン屋に行くのが、本命の目的だな？

白龍皇、以外と庶民的だな!?(笑)

ぶっちゃけ初見は、ムカつくイケメン野郎だと思っていたが、機会が有るなら、神崎や木場同様に、存外に仲良く接する事も出来そうだ。

それから、そのヴァーリと話してる中、それを見ていた女子達の一部が『木場きゅん×神崎君×謎のイケメン様』とか、腐った妄想をキヤーキヤー言ってたみたいだが、残念だが、それは無いぞ！

えい)の名の下に、皆で協力して撃退してたとか。

「だから別に、悪魔サイドと敵対勢力に所属していた訳じゃ無いにや！」

シリユーが悪魔側に所属してる一方で、アテナとも仲良くしてる様なモンにや!!」

「…成る程、それなら まあ、ギリギリでセーフだろ、シリユー君？」

うゝむ、俺と冥界、そしてアテナとの繋がりを例に挙げられたら、俺的には もう、何も言えない。

「アザゼルは昔から いい加減な男だったからね。

それに同行している白龍皇とやらも、似た様な感じ、アバウトな部分を持ち合わせているんじゃないかな？」

白龍皇は知らんが、確かに この前に会った墮天使総督は、かなり巫山戯た…いい加減に手足と羽が生えた様な性格だったが…

「そうだろ？ほら、類友ってヤツだよ。」

いや、サーゼクスさん、あんなのと類友って、それは流石に白龍皇に失礼だよ……？
「…って、アンタ！何時から居んだ？」

「「「「「「あーっ?!?!?!?!?!」」」」」」

皆、吃驚。

気が付けば、何時の間にか魔王1人とメイドさんが1人、部室に居て然り気無く会話

に混ざっていた。

「ほ、本当に何時の間に…」

…ってゆーか、お兄様、何故 此処に？」

「総大将（ぬらりひよん）並みの、然り気無さだにや…」

「はっはっは！」

そんなの決まっているじゃないか！

リーアさんの驚く顔が見たいからだよ。」

「ハア…」

平常魔王に溜め息を零すリーアさんとメイドさん。

「…で、本当の理由は何なのですか？」

魔王ルシファー？」

話す気力が喪われた部長に代わり、俺が この、グレイフィアさんにシバかれている
シスコンに聞いてみると、

「いやいや、嘘偽り無く、リアスに会いに来たんだよ。

ついでに、既に街に住み着いてるアザゼルや、今、話に上がっていた白龍皇じゃない
けど、今度 対談が行われる、この学校の下見にもね。」

いや、下見を本命にしるよ。

ほれ見ろ？

グレイフィアさん、またジト目で溜め息吐いてるぞ？

「ああ、それと更に ついでだけど、明日の授業参観、僕も出席するから。」

「はあああ!?!」

「大丈夫、父上も きちんと来るから。」

「そーじゃなくて!!」

部長、うるさいです。

静かにしましょう。



そして翌日の、授業参観当日。

「あゝ、精神的に疲れた。」

「お疲々wwww…つと?」

来校した母親のプレッシャーに押し潰されながら、尚且つ睡魔と戦いながら、辛うじて この日の2時限に渡る公開授業を乗り越えたシリユウ。

それを、身内が来ていない匙が、笑いながら、メール着信したスマホを見る。

「…やれやれだな。」

「どうした?」

「会長からだよ。」

体育館で、男子生徒(ヤロー)共が何やら騒いでるから、収めて来いってさ。」

「ん?」

その会話に入ってきたのは、シリユウの隣の席の、水沢香純。

「水沢、アレって何だ?」

「え?生徒会には知らされてなかったの?」

少し前から、今日、授業の後に、魔法少女の撮影会があるって話。」

「ま…魔法少女?!」

『魔法少女』という単語に反応して、見事なハモリを見せる匙とシリユウ。

「え?もしかしてアンタ達2人も、そう云うのに興味有るとか?」

うつわあ…

神崎、ファンが知ったら引くわよ?」

「違う!!」

再びハモリ、必死に否定する2人。

「神崎…悪いが、この騒ぎの收拾、お前も手伝って貰えるか?」

「お…応…」

来校している父兄方に醜態晒して どーするんだ?

下らん騒ぎを作るな!

とりあえず、騒いでるバカ共に怒鳴りつけて、解散を促す。

「ふ、巫山戯るなよ匙!...と神崎!」

「そうだそうだ!」

「いくら生徒会だからって、横暴だぞ!!」「あ、あん!?

「!!.....()。O。L).....!!?」

それでも食い下がる...やっぱり居やがったか、コイツ等...な、約3名を筆頭とした数名にも、神崎大先生に本職の御方でも土下座して逃げる様な睨みを利かせて貰い、強制(自主)退場して貰った。

そして屯ってたヤロー共を散らした後、撮影会の主役である、魔法少女...に話し掛ける。...んだが、はあく...

「ふう~~~~~☆☆!」

ちよつとお☆、匙君もシリユーちゃんも、非道くない?

せつかくの撮影会だったのにい〜! ☆

はあ...だ・か・ら・言つたる?

俺の勘...

にやはははははは!!

今 部室では、レヴィアタンが隠し撮りしてた、ソーナの授業風景の公開（処刑w）の真っ最中だにや！

映像自体は余り面白く無やいけど、それを観てるソーナが慌てふためく姿は、凄く面白いにや！

「大体お姉様、何故 今日の参観日の事を？」

「こっちは黙っていたのに…」

「ん？それはね、サーゼクスちゃんとグレイフィアちゃんから聞いたんだよ☆？」

「ルシフアー様…」

「あははは…何だかゴメンね。」

涙目ジト目のソーナにサーゼクスが笑いながら謝ってるけど あの顔は、絶対に全然悪いつて思つてにやい顔だにや。

「それでね、ソータんを後で びっくりさせようと思つて、授業中は気配を完全に消していたのだ〜！☆（どやあ☆）」

「ぜ…全然、気が付かなかつた…（ガクツ）」

あ、ソーナがorzつたにや。

「困みに私は、セラフォルが来てるのは、気付いてたにや。」

「嘘っ☆!?!」

「くくく、黒歌さん?! どうして教えてくれなかったのですか!?!」

カツクンガツクン…

「あわわ…揺らすにや揺らすにや!」

何となくだけど、黙ってたのが面白そうだったに決まってるにや!」

「あ…貴女は…」

ソーナが両肩をガシツと掴んでガクガクと揺すりながら、涙目ジト目でコツチを睨んできたけどスルーだにや。

「ならば次は、私の撮影した…?」

「い嫌あああああああつ!!!」

ソーナの映像の次は、リアス! パパが撮影した、リアスが授業受けてる映像を観てるけど、リアスもソーナと同じ様なリアクションしてるにや!

…つて、ゆーか、お腹が痛い!

アーシアとミルたんは、純粹に微笑ましく観てるって感じだけど、

「くつくつくつく…wwww」

リシューは腹を抱えて蹲って、大笑いするの我慢してるし、白音、ゆーと、朱乃ん、レイヴェル、ギャー子、椿姫、げんしろーも、必死に笑うのを耐えてるのが見え見えだにや

和平を結ぼうぜ

『別にバトる訳じゃないだろ？』

話し合いするだけなら、別に俺は要らねーだろ？

報告とやらは、全部 お前に任せるぜ。

じゃーな紫龍。俺は今から、娘と孫娘、ついで娘のダンナと食事に出掛けるんだ。』

「おい、デスマス」 Pi……ツーツーツ……

……………。

あつの孫バカ！

「……すいません部長、デスマ……ベツロ・カンクロは今日は、どうしても外せない用事があるとかで……」

「……そう……それなら仕方無いわね。」

会谈開始時刻の1時間前、サーゼクスさんからいきなり、今回のコカビエルとの戦闘報告に際して、やはりあの時の戦闘に参加していたデスマスクにも同席出来ないかと頼まれたので連絡してみたが、あのヤロー、会谈よりも孫を優先させやがった。

まあ、3棘みの会谈に、他勢力（アテナ）の眷属が混ざったりするのも違う気がする

ので、在る意味 良かったのかも知れない。

「~~~~~」 「ごめんなさい、お待たせによ。」

「皆、揃ったわね。」

会谈開始の30分前、ミルたんが転移魔法で部室に入ってきた。

それなりに急いでいたのか、バイト先から直接に来たみたいだ。 :滅威弩服で。

「それじゃ、行くわよ。」

「~~~~~はい。」

「皆さん、行ってらっしゃい。」

「ええ、ギヤスパー。」

ミルたん、ギヤスパーを頼むわね。」

「任されたによ。」

ギヤスパーは自身の神器である「停止世界の邪眼（フォービドゥン・バロール・ビュー）」を、まだ完全に使いこなせてないので、万が一、力が暴走して :まあ、それでも魔王や堕天使総督、天使長の動きを止められるとは思えないが :を想定の為、留守番。

1人じゃ寂しいだろうからと、ミルたんにも『護衛（おもりw）』を兼ねて、一緒に部屋に残って貰う事になった。

最初は小猫か黒歌に任せようと思ったのだが、何だかコイツ等はギヤスパーを放つ

ほつといて、お菓子ばかり食べてる画が浮かんだので、ミルたんに頼んだのだ。

その点ミルたんなら大丈夫、2人でアニメ談議に花を咲かせる事だろう。

そして残るメンバーで、本校舎へと向かった。

》》》カチャリ…

「失礼します。」

会議室へ入ると、其処にはサーゼクスさんにグレイファイアさん、セラフオルーに生徒会の皆さん、墮天使総督アザゼルに白龍皇、天使長ミカエルと…秘書天使つぽいのが既に待機していた。

「どうやら俺達オカ研が、最後の様だ。」

「よくお、あの日以来だな、少しはゲームの腕、上達したか?ん?赤龍帝?」

「……………」

そして入室早々、軽い口調で声を掛けてきた墮天使総督。

…分かってる。解っているのだ、この男は、こーゆー性格で、悪気は微塵程度にか持つてない事は。

この程度の言葉で、ムツとしていたら、キリが無い。

最初にデスマスクは所用で同席出来ない事を魔王達に報告して、俺達も用意された席に着いた。

サーゼクス様の言葉に、部長とソーナ様、神崎君が起立して、コカビエルが起こした聖剣事件の件を話し出した。

「…幸いにも結果、一般人には何ら被害は無かった様だが——」

アザゼルは兎も角、ミカエルは神崎君の報告、その天界側の対応の内容に、凄く罰の悪そうな顔をしている。

良いよ、もっ言つてやつて！

「…最終的には、其方の白龍皇殿が、コカビエルとはぐれ悪魔祓いを回収…」

(中略)

…その後コカビエルは「神の子を見張る者(グリゴリ)」によって、処罰されたと伺っています。…以上です。」

「御苦労、座つてくれたまえ。」

…さて、この件について、堕天使総督の意見を聞きたいのだが？」

部長達の一通りの報告も終わり、サーゼクス様は今度は、堕天使総督に今回の事件に

同時に回収した神父、フリード・ゼルデンは、聖剣の因子抜き取りをはじめとした、あらゆる戦闘能力の封印、ついでに両腕の腱を断った上で、組織の地下に幽閉だ。

これから先、外に出られるかは、……まあ、アイツ次第だろ。

その辺の説明は、事が済んだ時に提出した資料に全て記してたる？

アレが全部だよ。」

……ほれ、サーゼクス、これで良いか？

「はあ……報告説明としては最低なランクですが、アザゼル？

アナタ個人が我々と事を構えたくないと言う お話に関しては？」

ふん、最低で悪かったな、堅物天使。

ま、自覚は してるがね。

「ああ、俺もシエムハザも、戦争にや興味無いし、もう一人の戦馬鹿も、自分から喧嘩を売る心算は無いだよ。

戦争なんかより、俺は神器の研究してたり、女と乳繰り合ってたりのが良いんでね。」

『『『『『………』』』』』』

おおう、急にセラフォルにグレイファイア、そして その他小娘達が集団で、『地獄の最下層（コキュートス）』も真つ青な、絶対零度のジト目で睨み付けてきたぜ。

…って、ミカエルにサーゼクスに赤龍帝、お前達もかよ!?

「…アザゼル、君が女と乳繰り合うのは、この際どうでも良いよ。

だが、1つ、訊いて良いかい?

この数十年…神器の所有者をかき集めているのは…何故だい?」

「……………」

…サーゼクスよ、それこそ どうでも良い話だが、前半の台詞を真顔で謂うな。

後ろの嫁（グレイフィア）が、更にジト目に なったぞ?

「それは、私も問おうと思っていました。

最初は神器所有者を集めて戦力増強を図り、我々か冥界に戦争を仕掛けるのではないかと危惧していました。

ましてや今回の騒動で、墮天使サイドに白龍皇が居たと知った時は…

同時に悪魔側にも、赤龍帝が与みしていると分かった時も、驚かされましたが…」

「…さつきも言ったが、別に戦力集めて喧嘩吹っ掛ける心算なんざ、無えよ。

今更お前達に、俺の研究者氣質を説明する必要性は無いだろ?

単なる趣味で納得しろよ。

何だったら、お前等ん処に研究資料（レポート）、送ってやろうか?」

…着払いでな w w w

「兎に角 俺は今の世界には、十分満足してるんだ。

特に日本のサブカルチャーは最高だぜ？」「あ☆、それは解るう☆！」

よし、セラフオール、握手だ。

「…下の奴等にも『人間界の政治や宗教には介入するな』って、普段からキツク言ってるし、悪魔の業界（シェア）にも邪魔する心算は無い。

いや寧ろ、つい この間迄は大いに貢献していた筈だが？」

「……………」

くつくつく…

そうだろ？リアス・グレモリー。

「もう！そんなんだから、キミの言う事だけは信用出来ないのよ！」

「おいおい、俺の信用は3竦みの中でも最低みたいな言い方は止めろよ？」

「その通りだが？」

「そうですよ？」

「え？知らなかったの☆？」

非っ道え！あんまりだー！

「…まったく、神や先代魔王共よりかは幾分マシだと思ってたが、お前等はお前等で充分に

面倒い奴等だぜ。」

「自業自得だよ☆」

(怒) 喧 (怒) し (怒) い (怒) わ!! (怒)

「ちい…分あつたよ。」

神器についても、コレ以上こそこそ研究すんのも性に合わねえし限界だとも思ってたし…」

この会合…今回、お前等を喚んだ、一番の目的に切り出すか…

尤も、お前達も大方の予想はしてただろうが…

——— 和平を結ぼうぜ。

テロリスト襲来!



和平——

堕天使総督の発した この言葉に、2人の魔王と天使長が、驚きの顔を見せる。

「私も悪魔側とグリゴリに和平を呼び掛ける予定でした。」

しかし、それも僅かな時。

アザゼルに同調する様に、ミカエルも和平と云う言葉を口にした。

「…同じく。」

「でも まさか、一番最初にアザゼルちゃんの口から その言葉が飛び出すなんて、びつ

くりだよ☆」

「をゐ?!」

そして更には悪魔側も、その心算だったとか。

これには俺も驚いた。

聞けば、「殺し合う位に仲が悪い」らしい3棘みの代表が、揃って和平を結ぶと言って

るのだから。

「これ以上 3 棘みの関係が続けていても、世界の害にしかならない。天使長である、私が謂うのも何ですが…

…戦争の大本である神と魔王は既に消滅しているのですから…。
…失った物は、確かに大きい。

しかし、在不在者を何時までも求め続けても、仕方が有りません。」

「おいおい、大丈夫かよ？」

その発言は『堕ち』やしねーか？

…って、『システム』は お前が受け継いだんだったよな。

良い世界に なったもんだな？

俺が『堕ちた』頃とは全然違うぜ。」

そして平和の意義をミカエルが真面目に話し始めるのだが…この男は、何時も真面目に話せないのか？

「な…う…何を言っているのですか!？」

貴方が『堕ちた』理由は、人間の女人と乳繰り合ったからでしょうに！

現行の『システム』でも それをすれば、普通に『堕ち』ますよ！

この、【閃光と暗黒の龍絶剣（ブレイザー・シャイニング・オア・ダークネス・ブレイ

ド）】！！」

「そ、その呼び名は止めろおっ?!?」

ミカエルが顔を赤くして大声で呼ぶ名前に、それ以上の赤い顔で、慌てふためくアザゼル。

…つて、何なの? その厨二全開な名前?

「くつく…ｗｗｗｗ」

「……………プツ!」

「きゃははははは☆!!」

そして やはり、その名前を聞き、何やら思い出したかの様に笑う魔王達。

あのグレイフィアさんですら、完全に笑うのを抑えられてない。

よし、どういう経緯でアザゼルが「閃光と暗黒の龍絶剣(ブレイザー・シャイニング・オア・ダークネス・ブレード)」になったのか、後でセラフオールに聞いてみよう。

「…コホン、と、兎に角!」

そして再び、話し始めるミカエル。

「…神の子を見守り、先導していくのが、我等の使命なのだ、私達 熾天使(セラフ)の意見も一致しています。」

「我等も同じです。」

種を存続させる為、悪魔も先に進まねばならない。」

ミカエルの言葉に続き、魔王少女：否、今はトップ会談の場に相応しい、ダークブルーのレディースフォーマルを着こなした、魔王セラフオル・レヴィアタンが、普段の：今迄のイメージを打ち消す様な真面目な面持ちと口調で語り、

「戦争は我等も望むべき事柄では無い。」

また戦争をすれば、悪魔は滅ぶ。」

サーゼクスさんが更に言葉が続けた。

「そうだ、悪魔だけじゃねえ。」

そして、アザゼル。

本人にすれば失礼な話だろうが、やはり初対面時から先程迄の対談のイメージが強いからか、とてもじゃないが想像出来ない様な、真摯な顔で話し始めた。

「次、戦争を起こせば、3 疎みは間違い無く共倒れだ。

それは人間界にも影響を大きく与え、イコール、世界は終わる。

俺達は戦争をもう起こせない。

起こしては いけないんだ。」

「……………」

この随天使総督の言葉に、天使長と魔王2人は無言で頷いた。

「シリユー君…いや、赤龍帝殿?」

「?」

そして此の場で、サーゼクスさんが不意に、俺に話を振った。

「君自身は…この和平については、どう思っているかな?」

「どうとは…どういう意味かな?」

「……………」

質問に質問で返すと、魔王は無言で一瞬、天使長の顔を窺う様に見ると、また俺の方に顔を向けた。

あ、そういう意味か。

「どうも何も、今の俺に、冥界トップの組織レベルの決定に、反対出来る権利は持っていない。ない。」

馴れ合う心算は無いが、不必要に進んで敵対する事も無いだろう。」

「そうか…ありがとう。」

いや、サーゼクスさん、考え過ぎです。

とりあえずミカエルとは、この前きつちりとOHANASHIした上で、一応は終わらせているから。

流石に此の場で、それを蒸し返し、公開処刑する趣味は持っていない心算でいる。

尤も、和平した後も、天界勢と仲良くする気は微塵も無いけど。

「赤龍帝は、あー言ってるが、ヴァーリ、お前は どーなんだ？」

赤龍帝（オレ）の考えを聞いた後、今度はアザゼルが、白龍皇ヴァーリに同様な問いを掛けた。

「勝手にすれば良いさ。」

俺は、強い奴と戦う事にしか興味が無い。

和平成立後も、その時は墮天使所属でなく、俺個人として勝手に動かさせて貰うさ。

例えば：仮に、互いに同盟勢力に席を置いていたとしても、宿命の対決だけは別枠で決着を着けないと駄目だろう。

なあ？ 赤龍帝？」

：最悪だな、この男！ 戦る気満々かよ!?

ドライグには悪いのだが、俺自身は んな宿命なんて、興味無いのだぞ！

コカビエルが戦争狂なら、コイツは戦闘狂だな！

放つて置いたらコイツ、魔王にも喧嘩売りかねんぞ!?

「…お前達二天龍、自覚してるかは知らんが、お前達は世界を揺るがすだけの力を秘めた者の一人なんだ。」

お前達の選択一つで、俺をはじめ、各勢力が動きづらくなるんだよ。

…和平に異存は無いのだな?

白龍皇? 赤龍帝?」

「……………(コクン)……………!?!」

「「「な…?!」」」

「これは…?!?!」

俺とヴァーリが頷いた。その時、会議室が異様な違和感に包まれた。

人払いの結界とも違う、今迄感じた事も無い違和感…

「し、白音! 白音!?!」

「アーシア先輩? 朱乃先輩?」

「っ、椿姫!?!」

「おい、草下? 花戒? ルガールさん?」

「皆、落ち着いて!」

そして騒ぐ黒歌達。

見れば、小猫、アーシア、木場、朱乃先輩、更には支取先輩と匙を除く、シトリー眷属、そしてミカエルの御付きだった、秘書天使が硬直している。

まるで当人だけ、その時間の流れを止められた様に…?!

…っつて、まさか!?!

「部長！これは！」

「…ええ。これは間違い無く、ギヤスパアの力ね。」

「何者かが、あのハーフヴァンパイアを捉えて、ヤツの神器を強制的に禁手（バランスブレイカー）状態にさせているんだろう。」

「アザゼル！何者かがって…（ピカッ）…？」

ズドン！

「な…!？」

言っている最中に、外が激しく光ったと思えば、校庭から魔力の弾が、会議室に向かって飛んできた。

しかし その魔弾は、校舎に直撃はしたが、壁も窓も破壊する事無く霧散した。



「テロだよ。」

「アザゼル？」

「何時の時代もな、そんなに平和が嫌いなのか、こんな風に特定の勢力同士が和平を結ぼうとした時には、邪魔してくる輩が居るんモンだよ。」

外、見てみ？」

「……………？」

アザゼルの言う儘に、シリユーが窓から外を窺うと、校庭に約100人程の、フード付きの黒いローブを纏った人影が。

「奴等は……?」

「所謂『魔法使い』ってヤツだ。」

「幸い、彼等の火力では、僕達が張った防御結界を破る事は、不可能だけど……」

「おかげで私達も、此の場からは動けないね。」

天使長、墮天使総督、魔王2人の4人掛かりでの結界は確かに強固だが、それは4人の動きを封じた事に繋がっていた。

「ならば、残りの者で、討って出るしか無いでしょう!」

「待て待て黒龍?」

間違つては無いが、闇雲にやりや、良いって訳じゃないぞ?

先に、旧校舎のハーフヴァンパイアをどうにかするのが先だつての。」

「う……」

会議室を飛び出そうとした匙を、アザゼルが呼び止め、

「それにしても、本当に厄介な能力だぜ。」

その気になれば、視界に映した内側に居る者に迄、効果を及ぼしちまうとはな……大した潜在能力だ。

尤も、俺達を停めるには、出力不足だったみたいだが。」
ギヤスパアの能力の高さを、改めて評価。

「ギヤスパア君の力を無理矢理に利用しているなんて…?!」

「この場で力を暴走させない様に、アッチで留守番させたのが裏目に出たにや!」
「上空で待機していた、各軍勢も停まっているみたいだな。」

「…ギヤスパアをテロリストの武器にされている…これ程の屈辱は無いわ!」
リアスが声を荒げる。

「部長、落ち着いて!」

とりあえず俺が、旧校舎迄強行突破して、ギヤスパアを救い出す。

反撃は、その後だ。」

「…だったら、私が行く!」

私の下僕は、私が責任を持って救い出してみせる!」

「はあ!」

シリユーが諭すが、それはリアスに取っては逆効果。

「何を言ってるんだ、この駄肉姫!」

【王（キング）】は無闇に動くなつて、この前に言つたばかりでしょうが!」

「駄肉ゆうなあー!!」

あんたこそ強行突破なんて、脳筋思考しか無い訳？」

「の…脳筋ん!？」

「おいバカツプル、痴話喧嘩なら終わってからにしろ。」

「違う!!」

何やら言い合い始めた2人に対する、アザゼルの仲裁の台詞に、駄肉姫と脳筋が息を揃えて言い返す。

「旧校舎（むこう）には、未使用の戦車（ルーク）の駒が有るから、それを使うのよ！」
「成る程、キャスリングか。」

「……??」

キャスリング…本来はチェスに於いて、盤上の「王（キング）」と「城兵（ルーク）」の駒の位置を、一手で瞬時に入れ替える技法。

…それに習い、主にはレーティングゲームにて活用されるが、「王（キング）」である悪魔と、その下僕である「悪魔の駒（イーヴィル・ピース）」で転生した「戦車（ルーク）」は、幾つかの条件も在るが、瞬時にその居場所を入れ替わる事も出来ていた。

そしてそれは、まだ転生に使われていない、『駒』の儘でも適用される。

…つまり、リアスは旧校舎に保管されていると云う〔戦車（ルーク）〕の駒との入れ替わりにより、瞬時にギヤスパーの本に飛ぶのが可能だったのだ。

「確かに、それならば、敵の虚を突けるが、それでも1人では危険だ。

グレイフィア、君の魔力方式で、一度に複数名を、『キヤスリング』で飛ばせる事が、出来るかい？」

「お嬢様と もう1人ならば…」

「ならば、俺が行こう。」

「ん、シリユー君…頼んだ。」

「それでは…」

グレイフィアが両掌に小さな魔法陣を浮かべると、それはシリユーの足下に移行、

「シリユー、行くわよ！」

「了解！」

リアスの呼び掛けと共に、2人は姿を消し、床には入れ替わる様に現れた、『戦車（ルーク）』の駒が転がっていた。

「よし、ヴァーリ。

お前は外で、討って出ろ。

白龍皇である お前が現れたとならば、敵の親玉も動くかも知れん。」

「…構わんが、白龍皇（オレ）が居るのは、向こうも最初から承知じゃないのか？」

「それでも、リアス・グレモリーと赤龍帝が、まさか『キャスリング』みたいな裏技で、いきなり旧校舎（アッチ）に乗り込んで来るのは想定外だろう。」

陽動の効果は、十分に有るさ。」

「承知した。」

黒歌…と黒龍君、手伝ってくれるか？」

「お、応!」「了解だにゃ!!」

アザゼルの要請でヴァーリが、そして黒歌、匙の3人が、3階の窓から、外の校庭目掛け飛び出した。



「う惡つ羅あ!」

バキッ!

神器【黒い龍脈（アブソープション・ライン）】を発動させた匙が、

「にゃっ!!」

ズサアツ!

猫の耳と尻尾を曝け出し、駒王の制服から、着崩した和服に換装した黒歌が、

「【白龍皇の光翼（デイバイン・デイバイディング）…禁手（バランス・ブレイク）!」

(Vanishing Dragon Balance Breaker!!!!)
ドゴオツ!

そして白龍皇の鎧を纏ったヴァーリが、校庭内の魔法使いの集団を一掃。
しかし、

「うげ?!また出てきやがったぜ!」

「キリが無やいにゃ!」

「……………」

屍が転がる校庭に、無数の魔方陣が浮かび上がると、其処からまた新たに転移してきた魔法使いの一団が、攻撃を仕掛けてくるのだった。



ガシヤァン!

「ギヤスパァ!!」「無事か!？」

「はあ?リアス・グレモリーと…赤龍帝…だとお!?」

「馬鹿な?!転移は出来ない筈?!」

キャスリングにより、旧校舎オカ研部室へと転移したりアスとシリユーは、間違い無くギヤスパァが捕らわれているであろう、新校舎を窓越しにはつきりと見渡せる部屋…即ち、3F廊下中央の教室へ、扉を蹴破って突入した。

「ぶ、部長！シリユー先輩！」

「リアス様！シリユーたん！」

読み通り：

その部屋には、椅子にロープで縛られ、新校舎を正面に見据える様に座らされているギヤスパーと、やはり身動き出来ぬ様に拘束され、床に転がらされているミルたん、そして数人の黒ロープの魔法使いと覚しき人間達。

他にも、恐らくはミルたんが倒したのだろう、数人の魔法使いが蹲っていた。

「ギヤスパー！ミルたんも！」

良かった、無事だったのね！」

「ごめんなさいによ…ギヤーたんを守りきれなかったによ…」

とりあえずギヤスパー達が無事なのを確認出来たリアスが、安堵の笑みを浮かべる中、ミルたんは申し訳無さそうに謝罪。

「気にするな、テロリストの襲来自体が予想外だったんだ。」

それに対しては、シリユーがフオロー。

「ごめんなさい部長…ごめんなさい…。」

僕は皆に迷惑ばかり掛けて…」

「ギヤスパー？」

「部長…先輩…お願いです…」

しかし、続けてギヤスパークが涙を流しながら、リアス達に発した言葉は

僕を、殺して下さい。

禍の団（カオス・ブリゲード）

「何を言ってるのよ、ギヤスパー！」

——殺して下さい——

ギヤスパーの訴えに、リアスは馬鹿な考えは止めろと諫めるが、

「嫌だ！僕は死んだ方が良いんです…」

この目のせいで、今だって皆さんに迷惑ばかりで…誰とも仲良くなんて、出来ないんです…」

ギヤスパーの覚悟、決意は変わらない。

「…嫌よ、ギヤスパー。」

私は あなたを絶対に見捨てたりは、しないわよ？

覚えてる？あなたが眷属に転生させた時、私は言ったわよね？

——私の為に生きなさい。

そして自分が満足出来る生き方を見つけなさい——と。」

しかし、リアスも退く事は無く、ギヤスパーを諭し続ける。

「…でも、結局は まだ、見つかってないし、迷惑掛けてまで、生きる価値なんて、僕には…」

「ギヤスパー！誰も お前を迷惑なんて思っていないぞ！」

「シリュー先輩？」

「誰とも仲良く出来ない？」

そんな事はないだろう！

この前のボーリングやカラオケ、確かに最初は戸惑い気味だったが、初対面の草薙や反町とも、最後辺りは仲良く話せてたじゃないか！」

それでも全てを諦めている様なギヤスパーに対して、シリューも口を開いた。

「自分を諦めるな！自信を持って！」

それでも まだ、お前を邪魔だとか迷惑だとか言うヤツが居るなら、ソイツは俺がぶっ飛ばしてやる！」

「せ…先輩い…」

「ふん…愚かな…」

「何?！」

このシリューの口上の途中、ギヤスパーの傍らで、彼の首筋にナイフを向けて立っていた、年配の魔法使いの男が口を挟む。

「早々に洗脳でもして、道具として扱っておれば疾うの昔に、もつと有効活用出来ていたものを…」

「きやはは！確かに〜！」

馬つ鹿じゃないの〜？ w w w

そして その隣の魔法使い：此方は若い女も、便乗して煽る様に罵った。

「御生憎様ね、私は自分の下僕を大切にするのよ。」

「はあ？ちよつとちよつとお、仲良しこよしで、下僕を扱う気なの？」

「ふん…アイツ等の言つた通りだな。」

グレモリーは情愛が深く、力が溢れている割には、頭が悪い様だ。」

「きやははは！噂通り、本当に脳味噌に行くべき養分が、みくんな その おっぱいに往き届いてるのかしら？」

……滅つ茶苦茶ムカつくんですけど!？」

「はああ?!何んつですつてえ!!」

互いに皮肉り嫌み合いながら、言葉の売買を交わしてる途中、身の丈はリアスと変わらないが、纏つたローブの上からでも、明らかに慎ましいと判る女魔法使いが、不意にややベクトルがズレた怒りをリアスにぶちまける。

その事柄は、普段のリアスならば、「羨ましいかw」とばかりに冷静に且つ、誇らし気

に切り返す処だが、ここ最近の彼女にとつて それは、最大禁句で有つたらしく、負けじと大炎上する駄肉姫。

「ギヤスパー！」

それでも直ぐに、平静さを取り戻し、再度ギヤスパーに話し掛ける。

「私に もつと迷惑を掛けて頂戴！」

何度でも叱つてあげる、慰めてあげる。

私は決してアナタを離したりは しない！」

「そうだ、ギヤスパー。」

全てが片付いたら、今の弱気な発言について、早速 説教だ！」

「部長お……先輩い……僕は、僕は……っ」

2人の言葉を聞き、またも大粒の涙を流すギヤスパー。

しかし それは、先程迄の自分自身の不甲斐無さからの涙でなく、自分の事を、真剣に思っている存在を知つた事による、喜びの涙。

そんなギヤスパーに、シリユーは続けて言い放つ。

「ギヤスパーアッ！」

何時迄 縛られている気だ？

そんなローブ、さっさと抜けてしまえ！」

「え？ シリユー先輩？」

そう言いながらシリユーは、左手のドラゴンの爪で、右掌を引つ掻き、一筋の傷を付ける。

ヒュツ…

「な？」「うわ?!」「あ…」

そして、その傷から滴り流れる血を、周りの魔法使い共々、ギヤスパーに浴びせ掛け、「お前自身、本当に変わりたいと思ってるなら、自分から動いてみる！」

そうでないと、何も始まらないぞ！

お前が心底に、そう思っているなら、俺が背中を押してやる！

俺の中に流れるドラゴンの血、それを飲むんだ!!」

自らの血を飲むよう、ギヤスパーに呼び掛けた。

「シリユー…先輩…でも、僕は血は…」

それでも、吸血鬼でありながら、生の血液を取り込むのに躊躇うギヤスパーに、「逃げるな！ 恐れるな、ギヤスパー！」

お前だって立派な【びーー!!】、持ってるだろうがあっ!!」

「…!」

2人に突撃。

「ちい！」

これに対して、2人も迎撃せんと、魔力の弾を放とうとするが、

【停止世界の邪眼（フォービドゥン・バロール・ビュー）！】

びた…

このタイミングで天井で浮遊しているギヤスパークが、その瞳に宿している時間停止の神器を発動させ、僅か1秒足らずの時間に過ぎなかったが、この部屋に居る、全ての魔法使いの動きを封じ込める。

しかし その僅かの時も、シリユーとミルたんからすれば、十分過ぎる足止めで、

「廬山龍戟閃！」

バキイツ！

「うぐべっ?!」

老魔法使いの男に、赤龍帝の小宇宙（コスモ）を込めた膝蹴りが炸裂し、

「ちい！死ねっ!!」

bon!

「こよっ！」

パァン！

「な……？」

女魔法使いが放った魔弾は、ミルたんの魔力を纏わせた拳で砕散された後、

「ミルたん・無欠雁字搦め!!によーっ!!」

ベきいっ!!

「いきやああああああああっ!!?」

魔法少女?の肉体言語…エグ過ぎる変形の変形がガツチリと極まった。

「ぼ、僕だって…僕だってえっ!!」

ぼんっ!!

更には この2人の戦闘姿勢に触発されたのか、再び無数の蝙蝠に変化したギヤス

パーが、天井付近を飛び回る。

それによつて床に映る無数の影から、漆黒の闇の手が生え出で、

「な…これは、血を吸っているのか？」

「ち、血だけじゃ無い!魔力…も…!?!」

それはハーフとは云えヴァンパイアの真骨頂か、それ等は残る魔法使い達に纏わり憑

き、身体に貼り付いた掌から、血と魔力を吸い取っていき、

「でえい!!」「によっ!」

ドガアッ!

バチイッ!

「おびゃー」「ぎゃぴりーん!!」

それにより身動きの取れなくなった者達は、各々が小宇宙（コスモ）、または魔力の込められたら拳で葬られて逝ったのだった。

「さ・て…」

「覚悟は、出来ているか？」

「…によっ!!」

「ひっ!?こ、降伏する！助けてくれ!!」

そして、残る最後の1人となった魔法使い達を睨み付けるリアス達。

ギヤスパーという人質も失い、リーダー格の男を筆頭に、仲間を全て斃され、狼狽する魔法使いの男は、リアスに対して降伏の意を示す。

「…単に私達に攻撃を仕掛けてきただけで無く、私の大事な下僕を散々な目に遭わせて於いて、今更赦されるとでも思っているのかしら？」

「ひ…ひいい…っ!!」

しかし、身内に対する慈愛の溢れ具合は冥界一とされている、リグレモリー家の長女は、敵に対しては文字通り、悪魔の如く冷た過ぎ、既に彼女の掌には、黒く輝く魔力の弾が生成されていた。

《

…時は、リアスとシリユーが、旧校舎へキャスリングした直後に遡る。

「…アザゼル、2と3、聞いて良いか？」

「あん？」

リアスのキャスリングに抛り、床に転がっていた【戦車（ルーク）】の駒を拾いながら、サーゼクスがアザゼルに尋ねた。

「先程の話の続きになるが、白龍皇のみならず、神滅具（ロンギヌス）の所有者を何名か集めてたそうだな？」

「…まあな。」

「神器の研究とは言っていたが、その先に、お前は何を見ていた？」

神も在らないのに、神殺しでもする心算だったのかな？」

「…備えていたのさ。」

「備えていた？」

つい今し方、戦争を否定して和平を持ち掛けたばかりなのに、不安を煽る物言いをするね。」

アザゼルの返答に、ミカエルも追う様に質問する。

「はああ〜…頼むから、少し位は信用してくれよお…。」

言っただろ？お前等相手に戦争はしない。

それでも、自衛の手段は必要だ。」

「自衛って…私達でなければ、それじゃ、何に對しての自衛ってゆーの？」

「……………」

そしてセラフォルーの問い掛け、数秒の沈黙の後、墮天使総督は応えた。

「——『禍の団（カオス・ブリゲード）』。」

…と。

「カオス…ブリゲード？」

「…何それ？」

「組織名やら何やらが、はっきり判ったのは、本当に つい最近の事だ。

奴等は3大勢力にとっての危険分子を集めている。

中には禁手（バランス・ブレイカー）に至った神器持ちや、『神滅具（ロンギヌス）』の遣い手も数人確認出来てるぜ。」

「…目的は？」

「破壊と混乱…。」

「この世界の平和が気に入らないんだとき。」

…まったく、性質（たち）の悪い、テロリストだよ。

しかし一番厄介なのは、奴等の頭だ。」

「それって一体…？」

「パアアアアアア…」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

アザゼルが話すテロ組織の説明、そのトップの話となり、セラフオルーが「それは誰だ」と聞こうとした瞬間、突如として部屋の床に転移の魔法陣が浮かび上がり、

ふふふ…我等の頭目…

それは『無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）』…

オフィス！

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

その魔法陣から、女の声が響いた。

「この紋様…」

そうか、今回のテロの黒幕は…！」

「ふふ…その通り。」

御機嫌よう、現ルシファー殿？」

そして魔法陣の中からは、褐色の肌に暗い金髪の、眼鏡を掛けた女が姿を現す。

「やはり、君だったのか…」

「カテレア…ちゃん？」

2人のレヴィアタン！魔王VS魔王少女！！

カテレア・レヴィアタン。

魔法陣から現れた女は、今では旧魔王と呼ばれるが1人、先代レヴィアタンの血を引き継ぐ者だった。

先の永きに渡った大戦…

天使、墮天使と同様、その儘 戦争を続ければ、種の存続も危うい程に、悪魔達は疲弊しきつっていた。

しかし旧魔王の一族は最後迄 徹底抗戦の姿勢を貫いた為、サーゼクスを基とする親魔王…新政権の者達により、冥界の最果てに追いやられていた。

「カテレア…」

君が…このテロの首謀者なのかい？」

「まさか、旧魔王の1人が、テロリストになつてゐるなんてな…」

「カテレアちゃん…」

「ふ…私だけでは無い。

旧魔王：いえ！正統なる、真の魔王派の者達は、殆どが『禍の団（カオス・ブリゲード）』に加入しました。

今日は、その報告に伺ったのですよ。」

「!!?」

和平協定の場に襲撃した中心人物が、袂を別った者達とは云え、まさかの同族（あくま）だった事に、驚きを隠せないサーゼクス。

何かの間違いだど、現実逃避に近い問い掛けをするが、カテレアの口から出たのは、更に上に行く、最悪とも言って良い言葉。

カテレアだけでなく、旧魔王派の殆どが、テロ組織に加入した：

サーゼクスだけでなく、それを聞いたセラフォルーやグレイフィアも驚愕し、言葉を失ってしまふ。

「ふん…：テメー等の親玉が無限の龍神だったって聞いたのは、本当に つい先日の話なのだが…：解せねえな。

お前等がテロに入るのは兎も角、オフィスがテロ組織を起ち上げるなんて、想像付かないんだが？」

その代わりに、皮肉を込めた にやけ顔で、アザゼルが尋ねる。

「オフィスは単に、力の象徴として祀っているだけですよ。」

世界中の、まだ見ぬ同志達が集結する　きっかけの…ね。
そして集った力で、一度この世界を滅ぼし、もう一度創世します。

死んだ『神』に変わり、私達が新世界の神となるのです!」

「カッ!オーフィスは　なんちゃってボスかよ?」

「…尤もオーフィスも元々は、ある『目的』の為に人員を集めていたのですけどね。

私達がオーフィスの目的に協力する代わりに、オーフィスは私達に力を貸し与える。
解りますか?」

「これは等価交換（ギブ&テイク）なのですよ。」

「カトレアちゃん!…どうして?!」

「お願い!馬鹿な真似は止めて!!」

酔いしれた様に構想を語るカトレアに、セラフォルが諫めようとするが、

「黙れセラフォル!」

「この私から『レヴィアタン』の座を奪った分際で、よくも　ぬけぬけと謂う!!」

「カトレアちゃん…そんな…私、は…」

カトレアは　それを聞く耳は持たず、

「今日、この場で貴女を殺し、私が魔王レヴィアタンを名乗ります!」

そしてオーフィスを旗頭として、私達が新たな世界の秩序を構築する…

サーゼクス!セラフォル!貴方達の時代は、終えて貰います!!」
改めての抹殺宣言。

「くっ…くっくっく…」

「…?」

「キっヒっヒヒヒ…」

ギヤワーハッハッハッハッハッハッハあい!」「な、何が可笑しい?!」

「そ、そりゃあ お前え…」

だが、これを聞いたアザゼルが大爆笑。

カテレアの怒声に、薄ら涙を浮かべたアザゼルが応える。

「世界の改革?御託並べてんなよ?」

お前等、唯単に『お前等キライ!自分達が一番偉くなきゃ嫌だあく!』ってゆー、御

子ちやま思想なだけだろ? w w w

…何っ処の野党だよ?」

「き、貴様!我々を愚弄する気か?」

嗤いながら話すアザゼル。

それを半分以上は凶星、核心を突かれたのか、顔を赤くしたカテレアが、凡そ女性が絶対にしては いけない表情を浮かべて、堕天使の総督に、魔力で召喚した鋭角的な造

形の杖の先を突き付けた。

「ケツ…上等だ。やってやるよ。」

おい お前等？ 絶対に手え出すなよ？」

それに対してアザゼルも、光の剣を創り出して構えるが、

クイ…

「…嫌だよ☆」

「くびいっ!」

それをセラフオールが後ろから、アザゼルの着ていた上着、その大きな縦の襟首を後ろから引つ張り後方に下げると、自らが前に出た。

「カテレアちゃん…どうしても退く心算は無いんだね？」

「当然です。セラフオール、確かに貴女は良い魔王だったかも知れませんが、最高の魔王では無かった。」

それはサーゼクス、貴男方も然り。

だからこそ、私達が新しい、最高の魔王として、世界を統べるのです。」

「そう…だったなら、私が相手、する…。」

ソーたん、レイヴェルちゃん、私の代わりに結界の維持、お願いね？」

「は…はい…」

この言葉と共に、やはり愛用の杖を召喚して戦闘の構えを見せるセラフオルー。
パリン……!

会議室の窓を破り、羽を広げて外に飛び立った、新旧の女性魔王2人が激突した。

~~~~~

「むっ……!」

「あれは……?」

「セラフオルーと……誰にや?」

飛び出した魔王達に、既に外で戦闘を繰り広げていた者達も、当然の様に反応。

「あれは……旧魔王の末裔、カテレア・レヴィアタン。」

「はあ?旧魔王う?」

「それが、このテロのボスにや?」

「…その辺は、後でアザゼル辺りが詳しく話してくれるだろう。」

チィ:…どうやらカテレアの相手は、セラフオルー・レヴィアタンがするみたいだな。

ならば俺達は今は、この雑魚共を片付けるのに集中するぞ。」

「お…:応!」「了解にや!!」

~~~~~

ビリィッ!

「きゃあああつ?!」

2人のレヴィアタンの攻防の最中、カテレアの刃の如く研ぎ澄まされた杖が、セラフォルーのスーツを引き裂いた。

それにより、『虚』な妹の それと違い、撓わに実った果実の様な『巨』の房が、その先端の桃色さえも露わになり、

『『『『うおおお!! (TVTT)』』』』』そして それを見た、戦闘を繰り返していた校庭内の殆どの者が、敵味方問わず、歓喜の雄叫びを上げる。

「ふん…戦闘中に余所見をして、戦いを忘れるとは大した余裕だな?」

グシヤア!

「うぎゃ!?!」

そんな中、我興味示さずとばかり、その隙だらけの敵に対し、只の好機としか解釈せずに攻撃を仕掛ける者、

「げんしろー! お前はバトル中に、何処をを見てるにや?!」

「あわわ? 黒歌さん?」

分かったから! 集中するから!」

条件反射的に、セラフォルーの艶姿をのんびりガン見してしまい、背後から身内に目隠しされる者、目隠しする者。



「う☆やつぱり慣れてない服じゃ、思う様に動けないよお…」

「ふん!負け惜しみか!!」

バシユン!

右腕で両胸を庇う様に隠すセラフォルーに、カテレアが追撃の魔力弾を放つが、それを現レヴィアタンも、透かさず魔力を用いたシールドを展開しての防御。

そして、

「もう☆本気、出すからね!!」

ミルキースパイラル7オルタナティブ!…レヴィアたん☆version☆!」

左手に持っていた杖を天高く翳すと、その杖の先から、その先端の造形と同じ、星を象った大小の鮮やかな光の結晶が浮かび上がり、それがセラフォルーの身体を護る様に包み込むと、あつと云う間に、彼女の普段着?である、

「魔法少女レヴィアたん降臨!

眩い魔法で、悪いカテレアちゃんを、懲らしめてあげる☆!!」

魔法少女のコスプレに換装、びしっと決めポーズを極めるのだった。

「なあ?セラフォルー、貴様、何なのだ、その格好は?巫山戯ているのか?」

「ふうー☆!これが私の正装だもん!

それにカテレアちゃん、知らないの☆？

この国では今、これが一番の流行（はやり）なんだよ☆

「嘘を憑くなぁー………っ!!」

セラフオルーの台詞に怒り顔のカテレアが杖の先から、無数の黒い”蛇”を生み出すと、それを目の前の魔法少女…否、魔王少女に撃ち放つが、

「……!? えいつ☆!」

その攻撃に一瞬、驚いた顔のセラフオルーも、杖から氷の魔弾を放ち、迎撃相殺。

「カテレアちゃん…その…力は…?」

「あはははは! その通りよ!!」

この”蛇”こそが、オフィスから与えられた、新しい私の力!

消えなさい! セラフオルー・シトリー!」

オフィスの”蛇”。

それを見たセラフオルーが、改めて顔に動揺を見せる。

それに対してカテレアは、そのテロ組織加入により、新たに得た力を誇らし気に披露、先程以上の数の”蛇”を、セラフオルーにぶつけるが、

「えい…☆!」

セラフオルーも巨大な氷の盾を造り出し、それを防御。

ピシイイイン…

「「「「「…:…?」」」」」

そして、この時、この校庭に居合わせていた者達全てが、この戦闘空間に漂う違和を感じとった。

いや、それは正確に云えば、今迄 学園を被っていた違和感が払拭された感覚。

「レヴィアタン様、御無事で！」

「セラフオルー様!!」

「黒歌姉様！」

「匙君！」「元ちゃん!!」

「白音？」「お、お前等？」「……………」

そして校舎からは、自身の時の流れを止められていた筈の、小猫達リアスの眷属が、そしてソーナの眷属達が外に出て来た。

「白音！もう大丈夫にや？」

「…心配、お掛けしました。」

「遅えんだよ、このイケメンが！」

「ははは…ゴメン。【魔劍創造（ソード・バース）】…禁手化（バランス・ブレイク）！

【双覇の聖魔劍（ソード・オブ・ビトレイヤー）】！！」

「さっさと終わらせるわよ！」

「「はい！」」

小猫が、木場が、椿姫を筆頭とする生徒会の面々が、戦闘に参加する。

それは、リアス達がギヤスパ―救出に成功した事を表していた。

「ふん！雑魚共がゾロゾロと！」

それを上空から見たカテレアは、更に上方へ飛翔し、セラフォル―を含む、視界に入る校庭全体に居る者達全てに向けて、

「死いねえっ！！」

オーフィスから借り受けたと云う、無数の”蛇”を投下する。

ドツドツドツドツ…

「「「うぎやあつ！！」」」

「「「ぐはあつ!?!」」」

それは無差別に、味方である筈の魔法使い達にも襲い掛かる。

「…やれやれだな。」

「副会長！」「匙君？」

「つつ…イツテエ…!」

「わ…私は、何とか大丈夫…」

「白音、白音え…!?!」

「うう…辛うじて、急所は外しました…」

「こ…これはアーシアさん、後で大忙し…だね…」

その攻撃は、ヴァーリ以外の殆どの者達が、大小のダメージを受け、少なくとも、悪魔等に転生した訳でもない、身体自体は普通の人間と それ程変わらぬ魔法使い達は、”蛇”の直撃を受けた者は悉く即死、運良く被弾しなかつた僅かな者を残し、全滅状態となる。

「ちい…肝心の奴等は、皆 生きているか…」

流石に転生悪魔とは云え、『G』の様に しぶとい…」

その様子を見て舌打ちし、吐き捨てる様に呟くカテレア。

「カテレアちゃん…どうして?」

「んあ?」

そして そんな彼女に対し、信じられない物を見る様な目をして話し掛けるセラフルー。

「どうして?」

敵である私達だけを狙うなら解るけど！

あの魔法使い達は、仲間なんでしょ？

どうして一緒に攻撃を受ける様な、仲間迄殺してしまう様な、そんな手段を？」

「…仲間？アイツ等がか？」

くつくつく…

あつーはっはっはっはっはっは!!」

魔王少女の問い掛け、その真剣な顔に、旧魔王の女は嗤いながら、言葉を繋げる。

「知れた事よ！

私は最初から、奴等を仲間とは思っていないだけの事！

人間なんて、替えは幾らでも居る！

使い捨ての『駒』扱いで十分であろう！」

「カテレアちゃん…」

その単なる種族の違いで無く、正しく一般の人間がイメージするであろう、悪魔らしい発言に、セラフォルーは哀しみの表情を浮かべ、

「カテレアちゃん…それは違う…」

キミは、間違っているよ…」

「な…？周りの空気が…この魔力は?!」今迄、殆ど防御の為にしか使わなかった魔力を一

気に解放、校庭上空、2人のレヴィアタン周辺の気温を、一気に押し下げる。

「…本当に、出来れば本当にさ、『普通』の話し合いで、済ませたかったんだよ?」

「…………!!」

バサツ!

その魔力と、普段のセラフォルから想像の付かない様な、殺気を含んだ顔で睨まれ、危険と判断したカテレアが、距離を空けようと飛び立とうとするが、

カピイン…

「…!コレは?!!」

「逃がさないよ…」

凹み気味の顔を見られたくないのか、顔を俯けてセラフォルが喋る中、魔力によって、マイナスに迄下がった周辺の大気が渦を巻き、まるで水中に居ると錯覚させる様に、質量を持って纏わり憑く。

「…あのね、私だって、伊達なんかで魔王の名を…レヴィアタンを受け継いだ訳じゃ、無いんだよ?」

「うう?!」

それは浮遊効果迄奪われ、地上に落下する事は無いが、完全に空中で動きを封じられた状態。

「敵を斃す為とは言え、仲間迄巻き添えに、しかも諸共殺してしまうのを前提な真似は、絶対に やつちやいけなない…。」

もう一度言うよカテレアちゃん…

キミは、間違っている。…だから、

「うう…だ、黙れえ…!?!」

未だ止まらず周辺気温が下がる中、顔を起こすと、暗く、光が消えた瞳をカテレアに向け、哀しそうな顔で魔王少女は呟く。

「…少し…頭冷やそうか…?」

キイイイイン…

「セ、セラフオルウウウウツツ!!」

その台詞と共に、カテレア周囲の気が一瞬で氷結、カテレアは氷の匣に閉じ込められ、それは その儘、静かに ゆっくりと、校庭の真ん中に降り立った。

「大丈夫…ちゃんと手加減してあげてるから、死んだりは しないよ…。」



「お〜い!」

「あ、部長!」

「ギャー君…シリユール先輩!」

リアスとシリユール、ギャスパールとミルたんが、この場に戻って来たのは、この直後だった。

そう、当人は　そーゆー表現は好まないだろうが、仮にも只の『人間』が、悪魔や天使と喧嘩したいなら、せめてアイツ位の實力は身に着けないとな。

それにしても神崎の　あの戦い方…

如何にアイツが赤龍帝と言つても、転生した俺とは違い、同族…同じな筈の『人間』に對して、迷いも何も無いというか…

今は悪魔である俺でさえ、マジな『殺し』は、多少の戸惑いは有るつてのに…

勿論、相手は確実に殺りにキテる訳だし、そんなの考えている暇なんて無いから、こつちも容赦無く、殺りに往くんだけどな…

けど、俺と同じ年な筈のアイツの戦い方は、単に殺し合いの喧嘩なんかでなく、本当に大量の生き死が渦巻く『戦』を経験しているとしか思えないんだ。

「てえいやあつー！」

斬！

そして、木場。

アイツも元は、俺同様に元・人間なのに、いくら敵とは云え、躊躇い無く斬り棄ててるんだよなあ…

クツソが！分かつてるよ！

俺が甘いだけなんだろう！

魔法使いの増援も漸く途絶え、攻めてきた賊の殲滅掃討を終えた後、3勢力の兵達が再び空中で待機している中、サーゼクスやミカエルをはじめ、校舎内に留まっていた者達も、グランドの中央に集まった。

「カテレアちゃん…」

其処に居るのは、セラフォルーとの戦いにより、未だ氷の匣に閉じ込められる、旧魔王の末裔、カテレア・レヴィアタン。

「殺つてないんだろ？」

「ん…手加減は、したから…」

このセラフォルーの本来、『相手は死ぬ』な攻撃を受けていても、手加減により死んでないらしいカテレア。

「とりあえずは【禍の団（カオス・ブリゲード）】だったっけ？

その集団について、色々教えて貰わないとね。」

「…だな。おいセラフォルー、解凍だ。」

「ん…分かった…」

パチン…

魔王少女が指を小さく弾くと、旧魔王を閉じ込めていた氷が見る見る内に蒸発して消えて往く。

「カハアッ！…セ、セラフオルウー!!」

「カテレアちゃん…」

そして、その中に居たカテレアが、ダメージと疲労からか、膝を着きながらも、現・レヴィアタンを怨めしく睨みつける。

「カテレア・レヴィアタン…色々と言いたい事は分かるが、それは後で聞くよ。

君が属している、テロ集団の情報と一緒に…ね…」

「既に他のテロ連中は片付けたし、もう、この場には、お前しか居ねー。

大人しく捕まっちゃうのが、ベストだと思っぜ？」

「グレイフィア、頼む。」

「はい。」

サーゼクスとアザゼルが、一歩前に歩み寄り、カテレアに話し掛けた後、その傍らに居たグレイフィアが魔力の枷を精製、今回のテロ集団の首謀者を拘束。

「くつくつくつく…」

「んあ？」

しかし、手足を封じられた状態でも、カテレアは、まだ余裕が有るのか、嗤いを零す。

「オメー、何が、おかしんだ？」

「…忘れたのですか？」

明らかに不利な状況の中、まだ自分達には『札』は有るとばかりに勝ち誇った様話すカテレアに、魔力弾を浴びせたのは、彼女からすれば、その『札』で在る筈のヴァーリ。

「……………」

その無表情からの躊躇無い一撃で、カテレアは事切れてしまった。

「これは…」

「アザゼル、一体…」

「あつー！俺が聞きてーよ!？」

おい、ヴァーリ！一体、どーゆー心算だ？

オメー、テロ集団の誘いは蹴ったって言ってたじゃねーか？」

一番最初に和平を持ち掛けていながら、まさか その自分の下に位置する者が、それを邪魔立てしてきたテロ組織に通じていたという事実。

サーゼクスやミカエルに疑惑の表情を向けられて、罰の悪そうな顔で、アザゼルはヴァーリを問い詰める。

「…確かに、旧魔王達からの誘いには興味が沸かなかったから断つたさ。

しかし先日、オーフィス直々に、改めて依頼を受けてね。

それで旧魔王共は勝手に、俺達が自分達の仲間になったと思ひ込んだみたいだが…」

「違うってのか？」

「オーフィスが言うには、『コイツ等は蛇（チカラ）を求めるだけで、一向に私の願いを叶えてくれない』…だそうで、その役立たずの処理を、俺達に依頼してきたんだ。」

「フン…内部の始末屋か。」

事も無げに話すヴァーリに、アザゼルは呆れた顔を見せる。

「…と、言いますか、アザゼルがテロ組織の名前等を知っていたのは、彼からの情報だったのですね…。」

「ああ、まあな…。」

…それにしても、だ。

お前は俺が今日、コイツ等と和平を結ぼうとしたのを知っていて、それを象徴で…」
「さつきも言ったろ？アザゼル。」

俺は強いヤツと戦えれば、それで良いと。

誰と誰が仲良く手を組もうが、或いは敵対しようが、俺には関係無い事なんだ。
だから、あの時に断りも入れていたぞ。

3 棘みが手を結ぼうが、赤と白の対決は、別枠だと…。なあ、赤龍帝？」

「……………!!」

アザゼルと話す中、シリユーに視線を向けるヴァーリ。

「丁度良い具合に、この場は結界も張られている。

君にとつても、それは好都合なんだろう？

良い頃合いじゃないか。

さあ、赤と白の宿命…今、この場で決着させようぜ？赤龍帝…神崎孜劉！」

チョイチョイと挑発する様に手招きするヴァーリに対してシリユーは、

「…正直な話、ドライブには悪いが、俺は2天龍の対決なんて、興味は無かった。

しかしながら、其方が戦える気満々で避けられない戦いならば…ドライブ！」

(応よ！相棒!!)

Welsh Dragon over booster!

Balanced breaker…

Boosted gear・Scale Mail!!)

シリユーの呼び掛けに、赤龍帝の籠手に宿る赤き龍が応え、籠手から電子音的な雄叫びが発せられると同時に、シリユーの身体は赤い全身鎧に包まれる。

「皆、手出しは無用だ！」

白龍皇は、俺が倒す!!」

「ふっ…当然だ！」

俺達の勝負に、何人たりとも割って入る真似は許さん!!」

この言葉と同時に、2人はダッシュして互いに間合いを詰め、
「皆、本当に危険だから後ろに下がって！」

グレイファイア、セラフォルー！

…他の皆も、防護結界の術式が使える人は、結界を！」

「「「「「は…はい！」「「「「「

サーゼクスの呼び掛けで、その場の者達が皆一歩退き、

ゴッ！

周囲に被害が及ばぬ様に張られた結界の中、赤と白の腕が、拳が交差した。

この宿命の対決に決着を！

バキィッ！

シリユーとヴァーリが幾度となく拳を放ち合い、互いのマスクを破壊、両者の素顔が露わになる。

「流石だな、神崎孜劉！」

それでこそ、俺の宿命のライバルだ!!」

「生憎だが俺は別に、そんな風には思っていない！」

シュ…ドゴツ！

そして即座に互いにマスクを再生、そのマスクの裏で、片や嬉しそうな、片や心底嫌そうな顔をして、再び拳をぶつけ合う。



「ねえ、アザゼルちゃん？」

「ああ？」

二天龍が激突している中、セラフォルがアザゼルに話し掛けた。

「キミは、知っていたの？」

あの白龍皇……ヴァーリつて子が、先代ルシファアの血を引いているのを……
「まあな……」

アザゼルは その場に居る者達に、ヴァーリの事を話し出す。

「アイツは……さつきカテレアも言っていたが、先代ルシファアの孫と、人間の女との間に生まれた子供だ。」

其処のハーフヴァンパイア同様に、人間の血を半分持っていた故に神器を……しかも神滅器である「白龍皇の光翼（『デイバイン・デイバイディング』）を宿した、今代の白龍皇として生まれたんだよ。」

「彼は、先代ルシファアの曾孫ですか……」

「でも、どうして そんな子を、アザゼルちゃんが？」

「簡単に言えば、身内がヤツの力を恐れて虐待の果てに消そうとしてな、それで逃げ出したアイツを、俺が保護したのさ。」

「悪魔の……魔王の血を引くものを保護……ですか……」

「ぶっちゃけ、最初はヤツの神器に興味があったのが大きかったのも、確かに事実だ
がな。」

……兎に角アイツは、ルシファアの血族でありながら、同時に持っていた人間の血から、
神器も得ていた。

それも白龍皇って云う、謂わば奇跡を通り越した、ギャグみたいな存在だ。

歴代の、そして この先の未来を見越しても、最強の白龍皇だよ。

神崎孜劉…今代の赤龍帝も、あの戦争狂（コカビエル）を圧倒したらしいが…

さて…どつちが上かな？」

「シリユーちゃん…」



「神崎孜劉、君の事は、少し調べさせて貰ったよ。」

「何？」

激しい攻防の中、ヴァーリがシリユーに話し掛ける。

「極々普通の家庭に生まれ、極々普通に育ってきた…」

この春、グレモリーと接触するまでは、本当に所謂『裏』との関わりは、確認出来な

かった。」

「ストーカーか、貴様は!？」

「…それなのに、キミの尋常では無い その強さは何だ？」

幼い頃、身に宿す赤い龍の存在を認識して、人が見ない所で鍛錬していたとしても、そ

の強さは異常過ぎる。

例え、天武の才が在ったとしても、普段日常は平凡な、平和な生活を過ごしてきた人

間が得られる強さじゃあないんだよ。

教えてくれよ…キミの その強さの秘密は、一体何なのだい？」

「通常の1秒間が、1年の速度で流れる不思議空間で修行していたんだよ！」

「俺は、真面目に聞いているのだが…」

ヴァーリの質問に対して、まさか生まれた時から前世の記憶と小宇宙（チカラ）を其の儘継承している…等と、正直に言える筈も無く、自身が お気に入りなコミック『ドラグ・ソボール』のエピソードの1つを持ち出しながら、惚けて答えるシリユー。

しかしヴァーリは当然、納得はしない。

『(Divide!)』

ガッ

「…う…、これは…?!」

白龍皇の鎧から発せられる電子音と共に繰り出されるヴァーリの拳が、シリユーに胸元にヒット。

それと同時に、身体に原因不明の脱力感、そんな違和を感じるシリユー。

『(Boost!!) 気をつけろ、相棒！』

それが白龍皇の…アルビオンの最たる特徴、半減の能力だ!!』

「半減…だと?」

『そうだ、ヤツは俺の能力（チカラ）とは真逆、敵の能力を半減させる事が出来る!』
「そういうのは一番最初に教える!」

暢気に? 解説するドライグに、少し本気でシリューは突っ込む。

『半減された力は、俺の倍加の力で元に戻せるので問題無い。』

だが厄介なのは、ヤツは その減った分の力を、自分の力として取り込む事が出来る事だ!』

「…成る程な、ならば!!」

『待て、話は終わってないぞ相棒!』

ヤツを よく見てみる…』

「……? あれは……?」

ドライグの言う通り、改めてヴァーリに目を向けると、鎧の背部に附いている光翼から、光の粒子が零れ出ている。

『解るか? ああやってヤツは、最大容量以上の力は放出しているのだ…。』

ワザと力を吸わせた上の、暴飲暴食による自爆は狙えんぞ。』

「ちい…つまりヤツは常に、MAX状態で居られるって事か…!」

ドツドツドツド…

『!!?』

そんなシリューとドライグの遣り取りの中、ヴァーリは左手を右手首に添えた構えで、右の掌から蒼白い魔力弾を、逃げ場を作らせないかの様に、広範囲に連続で撃ち放つ。

「ガイイン!!」

「「きゃああつ!!」」

その魔力の弾の一部は、邪魔にならない様に退がって2人の戦いを黙って見ていた、リアス達が展開していた防御結界に着弾、結界の一部を破壊、

「はああつ!!」「てやつ!☆」

これを透かさず、最強メイドと魔王少女が修復する。

「ヴァアーリイイイツ!!」

そして 関係無い者を巻き込む攻撃に憤ったのか、怒声と同時に、ヴァーリとは左右逆の構えを見せるシリュー。

その左の拳から放たれるのは、

『(Boost!!)』「廬山漆星龍珠!」

倍加され強化された、魔力と小宇宙(コスモ)が融合した、碧色の破壊のエネルギー弾。

ジギユウウウウウウ…

「む…」

それに対してヴァーリは、右掌から放つ無数の魔力弾での迎撃相殺を試みるが、その破壊力はシリューの撃ったエネルギー波の方が遥かに上だった模様。

「ちいっ…!」

自身が放った魔力の弾を蹴散らしながら迫る破壊のエネルギー波に対し、迎撃する心算だった故に、既に回避は不可能と分析したヴァーリは、

「Half Dimension!」

ガン!

「何いっ!?!」

襲い掛かってきた漆黒龍珠を、パワーだけでなく、そのエネルギー波の大きさ其の物を『半分』にして、アツパー気味に拳で打ち上げる様に、上空へと弾き飛ばした。

これにはシリューも、驚いてしまう。

「な…何なのよ、今のは?」

「シリュー先輩のドラゴン波が、半分になりました…?」

そして驚いているのは、シリューだけではなかった。

何度となく目の当たりにして、その威力は充分に知っている心算である、シリューの

決め技を弾く事ではなく、その前の それを『半分』にした能力に驚くりアス達。
 「あのヤロー、アレを使うとはな…」

「あれは、どういう技なんだい?」

これを冷静に観ているアザゼルに、サーゼクスが訪ねる。

「アイツの能力は『力』を半分にするだけじゃあ無いんだよ。

極限に迄高まった力は次元を歪め、周囲の ありとあらゆる物を、物理的に半分に
 てしまおうんだよ。」

「周囲を半分…?」

「つまり、それって…」

「よく分かんないによ…?」

「アザゼルの説明が いまいち理解出来ず、頭の上に疑問符を浮かべるリアスとソー
 ナ、そして その眷属達。

「つまり、ヴァーリが本気（マジ）になったら、リアス・グレモリー…」

「いや、リアス嬢だけでない、お前等の乳（バスト）が皆、半分になるって事だ。」

「「「「「「「はあ?」」」」」」」」

この、真剣な顔での巫山戯ているとしか思えない発言に、殆どの女性陣が どん引き

顔となり、

「な…何て恐ろしい能力なのでしょう…」

小猫が わなわなと戦慄し、

「ば、バツカヤロー、巫山戯んなよ!

半分になったりしたら、まるつきり無くなっちゃうのと同じじゃねーか!」

誰の胸(バスト)を想像(イメージ)したのか、匙が怒りを ぶちまける。

「い、嫌だー!」

グレイフィアが咲○さんに なつちやうなんて…そんなの絶対に嫌だーあつ!!」

…更には紅髪の魔王が、血涙を流しながら、慟哭の悲鳴を上げるのだった。

ドコオツ!!

「くっ…!!」

そんな外野の場違いな騒ぎには気にも留めず…いや、全く気付かずに ぶつかり合う

二天龍の2人。

シリユートの蹴りで、ヴァーリのマスクが飛ばされ、ヴァーリの肘打ちで、シリユートの

鎧、ボディパーツの前面が碎かれる。

「まっ!?!」

「な、っ…!!?」

「「ひえっ?!」」

「あらあらあら?」

「ハア〜…」

「……………!!」

「「「キヤーーーーっ!!?」」

「「「きやあーーーーっあ!!♪」」

「「「おおおおおっ!!☆」」

その露わになった、鍛え上げられた胸元と腹筋を見た女性陣が、悲鳴や歓声を上げ、或いは溜め息を吐き、そしてある者は、無言で刮目する。

「さ、サーゼクス様?」

「グレイフィア、君は見ては駄目だ!」

そんな中、サーゼクスは御付きのメイドに背後から目隠しをして、

「みみみ、ミカエル様!?!」

「キミも、ガン見したりしない!

堕ち掛けるから!!」

そしてミカエルも、同行していた女性秘書天使の翼が白黒に点滅しているのを見て、

慌てて彼女に目隠し。

ヒュン…

この攻防で接近戦は分が悪いと思ったか、再度マスクを復元させたヴァーリが光翼を広げ、空中へ移動。

「逃がさん!」

「「「チイ…ツ!」」」

それに対してシリユーも、鎧を再生した事による、一部女子の舌打ちをスルーしながら、鎧の背部から龍翼を展開して飛翔、ヴァーリを追尾する。

だが、空中戦での直線移動…それは敵からすれば、絶好の的でもあり、

「滅べ!バースト・ストリーム!!」

ボワアツ!

「ぐっわ…!!」

両手を重ね、龍の顎を象ったかの様な構えから、その両掌の中で錬られ圧縮された、高密度の魔力弾の直撃を浴びてしまう。

ドシャア!

小宇宙(コスモ)の有無を除けば、恐らくはシリユーの漆星龍珠と同質な技をまともを受け、地面に激突してしまうシリユー。

「う……くっ……」

「まだだ!!」

ぶん……!

跪くシリューに向けて、ヴァーリは背中に附いていた龍尾型のパーツを手に取り振り翳し、それを鞭の様に空中から打ち放つ。

グリップの付け根からパーツが追加される様に延びながら迫る鞭。

ガキイツ!

それをシリューは左腕でブロックして巻き付け、

「でえいー!」

ぐい……

ヴァーリを地上に引きずり落とし、巻き付いていた鞭を千切る様に外すと、追撃するが如くダツシユ。

「舐めるな!!」

ドツドツドツド……

それを無数の魔力弾を飛ばして応戦するヴァーリだが、

「そんな薄い弾幕で、このシリューを止められると思っただか!」

シリューは それを直撃するも お構い無しに止まる事無く距離を詰め、

ガアン!

「うがつ…!?!」

強力な頭突きを炸裂させ、これにより両者のマスクが またも砕け散る。

「ちいつ…!?!バースト・ストリーム!!」

ボワアッ!

顔を歪め、苦し紛れに再び、ヴァーリは構えた両手から超圧縮の魔力弾を放つが、

「聖闘士に同じ技は、通じない!」

ガチッ…

その先程は直撃した魔力の弾は、今度は前方に突き付けられたシリユウの両手で受け

止められ、

「覇アああああつ!」『(Boost!!)』

ザシャアッ!

「何いつ!?!」

先程の漆星龍珠の意趣返しなのか、夜空に高く、放り出される。

「隙有り!」

「しまつ…!?!」

ガシッ!

絶対の自信を持つ己の技を、捌かれた動揺…その一瞬の隙を突かれ、間合いを詰められたヴァーリは、其の儘シリューに背後を許してしまい、羽交い締め体勢に捕らわれた。

「くっ…解けん…だと?！」

ヴァーリが力任せに、そして魔力を押し当てての脱出を試みるが、シリューは体はビクともしない。

小宇宙（コスモ）で精製した枷での拘束。

このシリューが自らの体諸共縛り付けた。それは、力技は勿論、魔力を使つての脱出は不可能。

より強力な小宇宙（コスモ）をぶつけての破壊以外、抗う術は無い。

「さあ、宇宙旅行だ！」

「な…!?!」

「廬山亢龍覇—————っ!!」

そしてシリューは更に小宇宙（コスモ）を燃焼させ、天高く飛び上がる。

パリン…

「シリュー…!!」

「「シリユー先輩……」」

「シリユー君……?」

その時、グラウンドに居た者達は、硝子が割れる様な音を確かに聞いた。

上空に張られていた結界を破り突き抜け、二天龍は夜空の彼方に姿を消して行った。



廬山亢龍覇。

本来は己の全小宇宙（コスモ）を爆発させて超高速で飛び上がり、上昇時の摩擦熱によつて相手を自分諸共消滅させる大技。

しかしシリユーは、宇宙空間でも普通に活動が出来る、赤き龍ドライブの概念を持つ鎧を纏う事により、敵のみを必殺する技に昇華させていた。

「神崎孜劉、何時迄　上昇する心算だ?」

只　上に昇るだけでは、俺は倒せんぞ?」

しかし　それは、同様に宇宙空間でも行動出来る、白い龍アルビオンを宿すヴァーリには通用しない。

成層圏を抜け出そうとする時点で、ヴァーリが無駄な事だとシリユーに話し掛けた。

「ああ、それは解っているさ。だから……」

クル……

「「き、来たー………!!」」

そして その赤い光の正体とは、当然…

「廬山龍旋爆………!!!」

ドツゴオオオ………ッン!!

旋回急降下で、頭から墜ちて来たヴァーリとシリユー。

その激突の衝撃は、グラウンド全体を穿つ程の巨大で深いクレーターを作り上げ、その中央には、ボロボロに砕けた赤と白の鎧を着込む、2人の人影。

「ふっ……まさか、此程迄とはな……」

アルビオンよ……この神崎孜劉ならば、白龍皇の「覇龍（ジャガーノートドライブ）」を見せてやる価値が在るよな？」

技のダメージにより跪きながらも不敵な笑みを零すヴァーリが、鎧を再生しながら、自身に宿る白き龍に話し掛ける。

『ヴァーリ……今の状況での それは、良い選択とは言えぬぞ？』

無闇に「覇龍（ジャガーノートドライブ）」となれば、それに呼応して、ドライブグの呪縛が解けるやも知れぬぞ！」

「それは、願ったりだよ……」

………我 目覚めるは、覇の理に……」

『止せ、ヴァーリイツ!!』

我が力に吞まれるが、お前の望みか!？」

立ち上がると、アルビオンが自制を求めるも、それを無視して魔力を集中、術式を唱えるヴァーリ。

「ドライブ、あれは…?」

『そうだ相棒、あれこそが【覇龍（ジャガーノートドライブ）】を発動させる言霊だ。

アレを完成させられると、今のお前でも、勝てるかは判らなくなるぞ!』

「了解だドライブ!

ならば今一度、燃え轟け!

我が小宇宙（コスモ）よ!!」

ドライブの言葉に、シリユーも小宇宙（コスモ）を燃烧させ、

「うおおお~~~~~おっ!!」

【紅珠黄金龍（ルビーゴールドドライブ）!!」

この雄叫びと共に、再生された鎧の色が、通常の『赤』よりより煌めく『紅』に変化し、全身から眩い黄金の光を輝き放つ。

【紅珠黄金龍（ルビーゴールドドライブ）】：それは以前、ドライブから【覇龍（ジャガーノートドライブ）】の事を聞かされたシリユーが、それとは別の…自我を保った儘の進化

を模作した末に得た、今代の赤龍帝だけの、オリジナルの戦闘形態。

籠手の宝珠に、自らの『黄金の血』を与えた事により、小宇宙（コスモ）の燃焼を鍵とする事で、更に一段進化、強化された赤龍帝の鎧。

外観的には通常の鎧に、額の部分に龍の頭を、両肩に龍の爪を象ったかのような造形が、そして左腕に円盾が追加装備された以外は、大した変化は無い。

「何いつ…?!あれは…?」

そして その進化に驚き、思わず覇の言霊の詠唱を止めてしまうヴァーリ。

そして先に次なる攻撃姿勢を完了させたシリユーが、一気に近接距離に詰め寄ると

「これで終わりだ、ヴァーリ！」

今こそ受けよ！このシリユー最大の拳!!」

この台詞と共に、最大限に小宇宙（コスモ）が宿った右拳を、ヴァーリに向けて撃ち放つ。

「廬山昇龍覇—————っ!!!」

DoKooooooooooooHN!!

「ぐはああっ!!」

このアッパーカットの一撃で、ヴァーリの体は天高く舞い上がり、

無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）オーフィス！

「派手にヤラレちまつてるなあ？ w w w」

「だ、大丈夫ですか？」

「……ヴァーリ・ルシファー……」。

眼鏡を掻けたスーツ姿の青年。

古代中国の武人な出で立ちの青年。

縁の広い三角帽子を被った金髪の少女。

そして黒髪のごスロリ少女。

シリユーとヴァーリの戦いを止めに入った眼鏡の青年に続き、魔法陣から姿を見せた者達が、ボロボロの状態で腰を着いているヴァーリに次々と話し掛ける。

「あ、アーサー？美猴？ルフェイ？」

……と、誰にや？」

「あ、黒歌さ〜ん、久し振りですう〜。」

その顔ぶれに、黒歌も驚く。

どうやら一人を除いては、知っている人物の様だった。

「…で、貴方は何故…其方の方は赤龍帝ですね？…と、こんなにも派手に やらかしているのですか？」

「(? 3?) …………… (フー…フー…)」

眼鏡男の質問に、ヴァーリは気不味そうな顔を明後日の方向に逸らし、鳴らない口笛を吹きながら、黙秘権を行使するかの様に黙り込む。

「はあ…」

駄目だコイツ…とばかりに、深い溜め息を一つ吐いた青年は、シリユーに顔を向けると

「貴方が今代の赤龍帝ですね？」

私は、アーサー・ペンドラゴンと申します。

何故、この様な事態に陥ってしまったか、出来れば説明して頂きたいのですが？」

「……………」

このアーサーと名乗る男の、敵意の無い、あくまでも状況を把握したい素振りに、少し戸惑いながらも、シリユーは口を開く。

「…赤龍帝、神崎孜劉だ。

説明の前に、一つ確認しておきたい。

あんた達は以前、黒歌が所属していたという、このヴァーリをリーダーとしたグルー

「プの者だな？」

「はい、そうですが。」

自分からの質問に肯で答えたアーサー。

それに対し、シリューも

「単純に言えば、赤と白の対決が為されたとしか、言い様が無いのだが：

…それで貴様等は どうする？

ヴァーリを回収して退くのか？

それとも この場で続けるか？

「禍の団（カオス・ブリゲード）！！」

「はい？」「へ？」「え？」「……。」

最初のアーサーの質問に有りの俣に答え、その後その儘、戦闘の構えを見せる。

それに対して…自分達を「禍の団（カオス・ブリゲード）」と呼んだ事に対して、やや

困惑気味な表情を浮かべるアーサー達。

「神崎孜劉殿…何やら少し、勘違いと言いますか、誤解が有る様ですが：

…ヴァーリ？」

「（? 3 ?） ……………（フー！フー！）」

ジト目なアーサーの問いに、先程以上に鳴らない口笛を吹こうと努力しながら、明明

後日の方向を向くヴァーリ。

「おいおい赤龍帝？俺達は、テロリストなんかじゃあ、無いんだぜい？」

「はいですう！」

「…コイツが、赤龍帝……。」

シリューに対して、古代中国風な青年・美猴と、先程襲撃してきた魔法使いと似た様な格好…と言うよりか、魔女っ娘という表現の方が似合いそうな三角帽子の少女・ルフェイが、自分達がテロである事を否定。

無表情なゴスロリ少女は、ややバクトル違いな反応を見せる。

「確かに我々は此方のオーフィスから、〔禍の団（カオス・ブリゲード）〕の殲滅アシストの依頼を受けましたが、決してテロ集団に加入した訳では、無いのですが？」

「「お・お…オーフィスうう?!?!」」

「ま…まさか…」

「そ…その娘☆…が…?」

「ん…。我、オーフィス。」

続くアーサーの説明に、そのテロリスト否定の内容でなく、然り気に紹介されたゴスロリ少女が、この騒動の元凶のテロリスト集団〔禍の団（カオス・ブリゲード）〕の頭目とされている、〔無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）〕で有る事の方に驚く、3勢力トツ

プ達。

「おい、ヴァーリい…コイツは一体どーゆー訳なのか、マジに きつちりと、話して貰うぜ?」

「う…アザゼル…」



「クツソ! 神崎のヤロー、派手に やらかしやがって!!」

「この前の体育館と云い…やっぱり あの人は、好きになれません!」

「神崎きゅんの胸板と腹筋…ハアハア…」

「ふ、副会長?」

「そこ、喋ってないで! 夜が明ける前に、どうにか直すわよ!」

ソーナ指揮の下、生徒会の面々は、何やら色々と ぶつぶつ言いながら、シリユウの廬山龍旋爆…別名『大気圏突入式・旋回型飛龍原爆固め』により、巨大クレーターと化した校庭の修復に勤しんでいた。

尚 前回、体育館を破壊したのはシリユウではなく、コカビエルである。

そして その頃、サーゼクスをはじめとする各勢力のトップに、リアス達、更にはヴァーリチームの面々は…

「…さて、全て話して貰おうか?」

た、確かに、テロリスト入りしたとは、言っていない？

「でもオマー、内部の始末屋って……」

「それはアザゼル、アンタが勝手に解釈したんだ。」

「じゃ、じゃあ どうして！」

どうして あの時シリューにバトル、噴つ掛けたのよ!？」

「ふっ……それも会談の最中にも言ったが、例えば3棘みが和平を結んだとしても、二天龍の戦いは別枠だ。」

だが、仮に正式に和平が結ばれた後に戦ろうとも、一応は所属先になる墮天使や悪魔サイドも面倒臭がるだろう。

それに赤龍帝……神崎孜劉にしても、只でさえ宿命の対決には消極的なのに、そんな状況では尚更、本気でぶつかり合っては来ないだろう？

それでは、余りにも面白く無さ過ぎる。

だから、俺をテロリストの一員と勘違いしてくれている あの時が、本気で戦れる最後のチャンスと思つたのさ。」

……………。

そ、それじゃあ今、正座させられているにも拘わらず したり顔な この男は、本気のシリューと戦いたいって理由だけで、裏切った振りをしたとでも ゆー訳なの？

「「「「????」」」」」

4人でマリ○カートをプレイしている最中、彼女は突然、現れました。

「あ、あなた、誰？何処から来たの？」

……って言うか、どうやって この場所に やって来たの？」

いきなり姿を見せたのは、其方に居る、黒歌の妹さんよりも小柄な少女。

私の妹のルフエイが、不思議そうな顔をしながら、応じます。

当然な話です。

私達の拠点（アジト）は、普通に歩いて、偶々迷子になって辿り着いてしまう様な場所では無いのですから。

しかも、わざわざ白龍皇（ヴァーリ）を訪ねて、アジトに やって来たのですから、この少女が単なる迷い子では無い以上に、只者で無い訳が有りません。

「我、オーフィス。

白龍皇に お願いに来た。」

「「「「!!?!」」」」」

オーフィスと名乗った彼女に、私、美猴、ヴァーリの顔が瞬時に変わります。

何しろ先日、ヴァーリが加入の誘いを蹴ったと云うテロリスト集団、「禍の団（カオス・ブリゲード）」の頭目とされている人物の登場ですから。

ルフェイには まだ、無限の龍神の事は教えていなかったもので、『??』な顔をしていま
す。

甲羅やバナナの投げ合い仕掛け合いで、ガチギレしている場合では無くなりました。

「おいヴァーリ、このガキ…」

「ああ、間違い無い。

この内側から感じる、龍の氣…

どうやら、本物の様だ。」

同じく伝説のドラゴンをその身に宿す者だからこそ、解るのでしょうか。

美猴も私も、とりあえずは只の人間では無いと直感は していたのですが、本当に目

の前の少女は、無限の龍神だった様です。

「…それで、俺に何の用だ？」

アンタの作ったテロ集団には興味が無いと、この前 声を掛けてきた悪魔（ヤツ）に、

そう伝えろと言ったと思うが？」

「フルボッコにしてなwwww」

「…違う。アレはアイツ等が、勝手に名乗っているだけ。

我も せかいせいふくには興味が無い。」

瞳に全く光の灯っていない、無表情な少女は語り出しました。

曰わく、偶々同じく時期に、旧魔王の派閥の者や、人間界にて異形異端として認識されている者達、或いは3竦みやその他の勢力から出奔した者達が皆こぞって、今の世界を自分達の都合の好い風に魔改革したいと、オーフィスに助力を求めて集まって来たとか。

そして その者達が結託して出来上がったのが、オーフィスを勝手に旗頭とした件のテロリスト集団・『禍の団（カオス・ブリゲード）』だとか。

当然ながら、オーフィスも只で彼等に自分の力を貸したりする事は有りません。彼女の生まれ故郷である、次元の狭間。

其処で静かに暮らして往くに辺り、非常に邪魔な存在である、『真なる赤龍神帝・グレートレッド』の打倒を条件に、自らの蛇（チカラ）を分け与えていた様ですが、「…アイツ等は我に蛇（チカラ）を求めるだけで、一向に願いを叶えてくれない。何時迄経つても、グレートレッドを斃しに行かない。」

…らしいです。

まあ、それは当然な話でしょう。

何しろ相手は、あの『真なる赤龍神帝』ですよ？

あんな最狂ドラゴンに、自ら喧嘩を売ろうと考える人物なんて、私は1人しか思い浮かびません。

駄目です。

一向に効果が有りません。

「美猴！貴方が余計な事を言うから！」

「俺え？俺つちのせいなのかい?!」

「貴様の他に、誰が居ると云うのだ!?!」

「ですう！」

皆で美猴を責め立てますが、正直、そんな場合では有りません。

「オーフィス？とりあえず、落つ着くんだけい！」

「そ、そうだ、ラーメン食べるか？」

「プリンも有りますよ！」

必死に食べ物で、御機嫌獲りに伺っていますが、そんな簡単に往く訳が…

「…ん、食べる。」

…有りましたあっ!!

ずずずずずずずずずず…

「ん、おいしい…」

「「「「……………」」」」

「お前、とりあえず来月の小遣いは、無しだからな!!」

「ドイヒー!? (。 ㇿ。 Ⅲ)」

「ちよつと待つてよ?」

それじゃもしかして、【禍の団(カオス・ブリゲード)】って…?」

「ええ。実質、壊滅ですな。」

この親子漫才をスルーして、リアスがアーサーを訪ねると、あつさり壊滅と言つてのけるアーサー。

「旧魔王派閥…レヴィアタンはヴァーリが、残るベルゼブブとアスモデウスや、その他の人間が中心となつてゐる派閥は、オーフィスと私達が…少なくとも各幹部クラスは皆、討ち取りましたね。」

「下つ端の雑魚は少し逃がしちまつたが、既に後ろ盾も無いし、もう今回みたいな派手な行動は、出来ないと思ふぜい?」

完全な殲滅掃討とは往かなかつたが、とりあえずの脅威は無くなつたと断言するアーサーと美猴。

「ははは…マジかよ…」

それを聞き、【禍の団(カオス・ブリゲード)】の危険性を話した上で、和平交渉に切り出す心算だつたアザセルは、苦笑いするしかなかつた。

駒王協定

「彼等が言うには、逃げ出した残党達も、オフィスの恩恵も無ければ、纏め指揮を執る者は全て、片付けたらしいけど……」

「そーだな、……だが、オフィスが率先して組織を仕切っていた訳じゃあ無いみてーだし、コイツ等の知らない派閥？……ってのが、まだ在るかも知れねえ。」

「油断は禁物……ですか。」

ヴァーリ達から「禍の団（カオス・ブリゲード）」は ほぼ壊滅したと聞くが、それでも残党が何らかの行動を仕掛ける可能性は有ると判断したサーゼクス達。

「今回の襲撃、カテレアの件は悪魔側に問題が有った……この件に関しては……」

「止める止める。」

あのアーサー達も言ってたろ？

奴等の拠点には、墮天使や はぐれ悪魔祓いも居たって。

此処に悪魔（カテレア）が攻めて来たのは、偶々向こうが そーゆー人選しただけだろ？」

「その墮天使……そして神父も、もしかしたら天界を出奔した後、グリゴリに所属せず、直

ると、あちら側も改めて自己紹介していき、全員名乗り終えた後は、ギクシヤクしながらも、色々と自分達の事とかを話し始めました。

姉様が元々、向こうのチームに入っていたのが、上手い具合に橋渡しになった感じですよ。

因みにルフェイちゃんとオーフィス：オーちゃんとは、アジア先輩やレイヴェルさん、ギャー君共に、仲良くなれました。

スイーツ好きの子に、悪い人は居ません。

今度 皆で、スイーツ巡りに繰り出す約束もしちゃいました。

勿論シリユー先輩にも、財布：コホン、女子だけでは不安なので（ギャー君は女子枠です）、ボディーガードとして…ボディーガードとして、同行して貰う予定です。

そんな徐々に和気藹々になつてきた中、簡単に平和に収まってくれないのが この世界の常。

あの頭に金色の輪っかを填めている、美猴つて男の人。

この人、あの空孫悟…でなくて、あの孫悟空の お孫さんらしいのですが、何気に色々とお話している途中で、どうやら この人が、少し前から冥界で話題になつていたりアス部長の二つ名、”駄肉姫”の名付け親である事が判り、部長、激（怒）です。

部屋の中で、滅びの魔力、放つてます。

「あらあらあらあら?」

「ちよ…部長、落ち着いて! w w w」

朱乃先輩やシリユー先輩が止めに入ってますが、シリユー先輩?…真剣じゃないですよね?

顔が笑ってますよ?

「ど、どうりで冥界中を探しても、犯人が見つからなかった筈だわ…!!」

チツ…大体、駄肉姫の何が嫌なんですか?

私からすれば、誉め言葉にしか聞こえないのですが?

そんなに嫌なら、その無駄な肉とやら、少し私に分けてください。

ぼん…

………?

そんな風に考えていたらオーちゃんや、私の肩に手を置き、僅かに微笑みかけ、右手に両手で握手してきました。

「…解る。」

ガシッ!

おお、同志!心の親友(とも)よっ!!



「『『『『『はい。』』』』』」

リアス部長の声に頷き、席を立ち、退室する俺達。

「ちよ…ちよつと待て神崎孜劉！」

俺を、この儘にしておく心算か!!？」

「お…俺つちも、足が…」

あー、正座させてる2人、忘れてた。

パチイン…

仕方無いので、小宇宙（コスモ）の枷を解除してやるが、

「あ…足が…」

完全に足が痺れているらしく、立ち上がれないヴァーリ。

情けないな…高々、あの戦闘の後、会議室にて事情聴取から今迄の、ほんの2時間程

度の正座で、その様とは。

俺は2ヶ月程度なら、余裕で平気だぞ？

「ちよつとキミ☆、大丈夫？」

これを見かねたセラフオールが、ヴァーリの手を取り、立ち上がるのを手伝ってやろ

うとするが、その時、

ずるっ…

「あ……」お♪」

「……………」。

バランスを崩したヴァーリが、セラフォールのスカートをずり降ろし、薄い水色のシヨーツが丸見えになり、

「きゃああああああああああつ!!」

数秒のフリーズ後、再起動と共に乙女な悲鳴を上げるセラフォー…って、アーシア?

「シリューさんは、見ちゃ駄目ですう!」

「あらあらあら? はい、祐斗君も、向こうを向きましようね♪」

「ルフエイ? 眼鏡を返してくれないか?」

…兎に角、俺、木場、そしてアーサーの視覚が封じられた。

ガインツ! ドガアツ! バキイっ!!

「めだりおすっ!!」

……………。

その数秒後、数回に渡る派手な撲殺音と独特な断末魔が聞こえた後、再び視界が開かれる。

そんな2人に対し、サーゼクスが小さな咳払いの後、3竦みが正式に和平を誓う調印を終えた事を、リアス達に伝える。

この件について、他の神話系態：北欧アスガルドや中国の須弥山にはミカエルが、ギリシア・オリンポスには、シリューが（デスマスクを介して）アテナ経由で説明する事が決まった。

「それと俺は暫くは、この儘、この街に滞在する事にしたからな。

それで…だ、聖魔剣使いとハーフヴァンパイア、それと今、校庭で作業している黒龍は、俺が神器の遣い方をきっちりと仕込んでやる。

先に言っとくが コレは、サーゼクスから正式に要請を受けているからな、お前等に拒否権は無いぞ？」

「「えええええっ?!」「」

このアザゼルのいきなりの発言に、大声で驚く木場とギヤスパー…と、リアス。

「…でだ、そつちの聖女も、一緒に神器の遣い方を教えようと思ってるのだが…

赤龍帝、こつちは お前さんの許可が要ると思うが？」

「ああ、よろしく頼む。

アーシア、良いな？」

「は…は…はい！」

「決まりだな。対価…授業料は、サーゼクスさんに請求してくれ。」
「し、シリユー君？」

「ま、まあ良いけど……。」

こうして…

西暦20XX年7月2X日―

・天界代表：天使長ミカエル

・墮天使中枢組織『神の子を見張る者（グリゴリ）』：総督アザゼル

・冥界代表：魔王サーゼクス・ルシファー

以上、3大勢力各代表の下、和平協定が調印された。

それに伴い、3大勢力の争いは禁止事項とされ、協調体制へ。

この和平協定は、その舞台となった学園に由来して、『駒王協定』と称される事になった。

名乗ってきた相手に対して無視する訳にも…少なくとも、これから1年間は同じ教室で過ごすであろうクラスメートに、それは無いだろうと、俺も名乗る事に。

「神崎…だ。……………!?!」

「ん?何か?」

「あ…すまん、何でも無い…」

この男…?!

常人は気付かないだろうが、体の内側に秘めている魔力…

『(気付いたか、相棒?)』

そうだ…その小僧は以前話していた、人間達が「悪魔」と呼んでいる種族だ。』

…俺の脳内に直接語りかける声。

幼い時、物心付いたと共に蘇った前世の記憶。

俺が何者であったか、それを思い出すと同時に認識出来た、己の内側に宿る存在。

ウエルシュ・ドラゴン、ドライグ。

『この世界』に於いて『裏』では伝説のドラゴンと謂われている、今は魂だけの存在となった。その龍が、俺に教えてくれた。

悪魔…と云つても、この世界で。それは、決して人に害為す邪悪な存在と言う訳ではなく、寧ろ人間に対し、『契約』と『対価』と云った形で依存している面の方が。やや強

いらしい。

生まれ変わって15年、確かに生まれ育ったこの街で、その類の者の気配を何度か感じた事は有った。

ドライグから そういう『種族』だと教えられていたのも有り、敢えてスルーしていたが、実際に『本物』を目の前にするのは初めてだった。

『(ふっ…相棒よ、この小僧だけでないぞ?)

教室全体を霊視して視ろ。

なかなか面白いクラスだぞ?』

……?

言われた儘にクラス全体を見渡すと…成る程、この木場とやらと同じく、悪魔が女子に2人、そして木場の2つ後ろの席…何やら此方を睨み付けている(何故だか知らんが この時 既に、教室中の男子が、俺と木場を睨んでいるのだが)、目つきの悪い男…コイツは悪魔では無い様だが…

「(ドライグ、ヤツは…?)」

『(気付いたか?あの小僧は相棒と同じくドラゴンを…黒邪龍ヴリトラを宿しているみたいだな。』

「(あいつも『神器』持ちか?)」

『(そうだ。尤も奴は、俺達と違って会話が出来る迄には、至ってない様だが…)』

「(俺の正体に、気付いたりした訳では、無いよな?)」

『(それは無いぞ。俺の、いや、相棒の、俺の気配を消す術は完璧だ。』

自分からチカラを解放したりするなら兎も角、相手が余程な存在でない限りは、バレル事は無いさ。

少なくとも このクラス…いや、この学校で、気付く者は居ないさ。』

「(この学校?)」

『(くくく…なかなか魔窟だぞ?この学び舎は…)』

……………。



「おいおい2人共…」

入学早々、モテモテだな?悪羅あ?!」

「羨ましいんだよ、このヤロー!」

「え?」「はい?」

この金髪の悪魔の少年…木場祐斗と、彼に声を掛けられていた、内に宿るドラゴンと脳内で会話していたシリユーに、後ろ側の席に座っていた2人の男子生徒が、「リア充死すべし!」…な表情で絡んできた。

「何だよ、無感動な奴等だなあ……」

その反応に、草薙がボヤク。

2年生のリアス・グレモリーと姫島朱乃。

この駒王学園高等部にて、『学園3大お姉様』と呼ばれている3人の内の2人。

その容姿から、男子生徒からは勿論、女子生徒からも、莫大な支持を得ている。

この2人……いや、3人目も含めて、確かにスタイルも抜群で美人ではあるのだが……

「悪魔……だしな……」

「神崎?」

「い、いや、何でもない。」

どうも あの2人、好みから少し、ズレてるんだよな?」

「お前、きよぬー好きって言ってたじゃねーか?」

「それだけじゃ、無いんだよ。」

因みに匙は、もう1人の お姉様、2年の支取先輩が、好きなタイプらしい。

尤も本人は口には しないし、自覚も無いのだろうが、あの人が見界に入った時の反

応で、皆にはバレバレだ。

支取蒼那。

ガラ：

「おはよ」「木い場あゝ!!」「」

「え…何、何なの?!」

「うっせー!自分の胸に聞けー!!」

「羨ましいんじや、ボケがあ!」

「テメーの血わ、何色だあゝっ?!」

教室に入った瞬間に、草薙他、クラスの男子数人：「グレモリー&姫島先輩のファンクラブ（本人非公式）」の皆さんに、詰め寄らる木場。

「ちよつと!止めなさよ!」「」

「」「木場きゆんに何かしたら、○すわよ?!」「」

そして その木場を守るが如く、それに割って入る、「木場きゆん親衛隊（やっぱり本人非公式）」の皆さん。

高校生活が始まって まだ1週間程度しか経っていないのだが、既に この教室では、見慣れた光景、定番の遣り取りだ。

…って、親衛隊の数、何だか増えてね?

よく見ると、ウチのクラス以外の女子も居る様だg…って、新羅先輩?

「くつくつく…」

この男子生徒達と直接の面識は無いが、彼等の悪評は既に色々と：女子に対するセクハラ行為等を聞いているシリユー。

故に「どいてくれ」と「捕まえてくれ」：どちらの言葉に従うかと云えば：

「悪いな。この先は、通行止めだ。」

当然、クラスメートの言葉を優先、両手を大きく広げて立ち塞がる。

「甘い！」

しかし、それを、茶髪男は避ける様に身を屈め、腕の下を潜り抜ける様に、校舎内へと逃走を試みるが、

「そっちがな!!」

パタン!

「へぶらっ?!」

最初から、その動作を想定、いや、その動きを誘導していたシリユーが、わざと一歩だけ、自分を越えた男に対して後ろから襟口を掴むと、其の儘、引き倒して床に尻餅を搦かせ、

「わわっ?」「バカッ：イツセ：」

どどん!

後ろの坊主頭とメガネは、この茶髪男に、ぶつかり、倒れ込む。

「天誅……」

バキィッ!

「うぎゃ……」

そして3人の脳天に、ぶち撒けよとばかりに炸裂する、水沢の木刀。

「死ね!死ね!死ね!」

バギッ!デゴッ!ドガッ:

「うわらば!」

「ぬわーっ!」

「うぐペペーっ!」

その後も他の……恐らくは剣道部員と思われる女子生徒達から、竹刀やら木刀やら刺バットやらで、滅多打ちにされる3人。

「み、水沢……因みにコイツ等の罪状は?」

目の前の惨状に、流石に少し殺り過ぎだと思いながら、若干どん引きした顔でシリューが尋ねると、

「覗きよー!」

「……………」

この一言に、桐生の表情が変わる。
「ちよつと待て。」

確かに私はエロい自覚は有るが、変態な覚えは無いわよ。」

俺的には「どう違う?」…なのだが、彼女の的には、かなり大きな違いらしい。

「少なくとも私はアイツ等と違って、特定個人を直接にハラズメントする様な事はしないぞ?」

尤も、望みと有らば…だが?」

「へ〜? 例えば?」

男子の着替えでも、覗くのか?」

この草薙の台詞に桐生は、

「ふっ、ふっ、ふ…」

私の眼鏡は、オトコの『アレ』の戦闘力…即ち、通常くMAXのサイズ、硬度、1回時の持久力にトータルスタミナを測る事が出来るのよ♪」

とんでもない事を、抜かしやがった。

「「ス〇ウターかよっ!?!」」

眼鏡をクイツとしながら、鋭い眼光で笑う桐生に、戦慄する俺達。

「草薙は…ほう…」

サイズB、硬度B、持久力B、総合スタミナB…

「止めれー！ー！(。O。L) ー！ー！つ?!」

「まあ、本っ当に普通だね。

可もなく不可も無く。」

そして勝手に『戦闘力』を計測する桐生に、顔がムンクになって、絶叫する草薙。

「次、匙は…」

「をいつ!?!」

「サイズB、硬度A、持久力…E…どんまい…。スタミナC…

…ん、マジ、どんまい。

…てゆーか、ごめん…」

「ノツ…ノオオオオオオ(。O。L) ー?!」

そして匙も…ん、どんまい…:www

ああ、そうだ俺、急用を思いついたから…

ガシツ…

「…匙?草薙?」

「神崎テつメー!何、逃げようとしてやがる?!」

「お前も晒されやがれ!!」

そして次の餌食になる前に、その場を去ろうとしたら、匙と草薙のヤロー、がつしりと肩と腕をロックしやがった。

「やれ桐生！ やつちまえ!!」

「らじや〜♪」

「や、止めろ〜っ?!」

気付けば一連の会話を聞きつけたのか、クラスの殆どの女子が赤面しながら集まっている中、桐生の眼鏡がキッターッン!…と妖しく光り、

「ふっふっふ…じゃ、いくよ〜?♪」

神崎…:サイズ…:SSSSう!?! 硬度SSS…:って、本当に?…:持久力…:SSS、スタミ

ナSSSえ(ピシィッ!) うぎやつ!!」

計測が完全に終了する前に、そのスカ○ターは罅が入ると同時に砕け散り、(既に殆ど晒された気もするが) それ以上の計測は不可能となった。

「き、桐生? 大丈夫?」

「う…:目が、目があ…:ついでに鼻血が…:って、神崎い! あ…:アンタは化け物か!!?」

……………。

スペアの眼鏡を搔け直し、桐生が俺に問い質すが、そんなの知るかよ…。

周りを見れば、この遣り取りを見ていた匙、草薙をはじめとする男子(ヤロー)共は、

「……………」

しかし これに対して、シリユーは一貫して無言で対応。

「キミ、さつきから黙ってばかりだけだ…」

「貴様、何者だ？」

「……………っ!!?」

シリユーの台詞に、今迄にこやかだった女の顔が、険しく歪む。

「残念だが俺は、お前の様な存在の、内側に隠した気配を読むのは得意なんぞな。

もう一度聞こう、貴様は何者だ？」

この台詞に女は、

「ふふふ…さつきから全然眠らないから おかしいとは思っていたけど、只の人間じゃ

あ、なかった訳だ…」

再び余裕を思わせる笑顔を浮かべながら、喋り出す。

「眠る？ そうか…何やら貴様の眼から、不気味な視線を感じたので、咄嗟に小宇宙（コスモ）のバリアを張っていたのだが、催眠効果の魔力か何かを放っていたのか…」

「…すも…?」

ふん！ 大人しく眠っていたら、恐怖を感じる事無く、死んでいた物を!!」

ズバアッ！

『相棒……。まず、最初に相棒が斃したのは、はぐれ悪魔……。簡単に言えば、主を持たない野良悪魔だ。』

シリユールの左手が鈍く光り、ドライグが話し掛ける。

『恐らくは冥界から逃げ出して、この街に やつてきた はぐれを、あのリアス・グレモリー達が上からの命令で始末しに来た処を……』

「経緯は どうであれ、俺が先に、片付けてしまったって訳か……」

『ま、そういう事だな。』

「……あの はぐれ悪魔とやらは、俺の正体を知って、襲ってきたと思うか?」
 『いや、それは無いと思うぞ。』

只単に、逃げ込んだ公園で偶々出会った、通りすがりの餌くらいとしか、思ってたなかった筈だ。

あの小娘達も、相棒の存在には、微塵も気付いてない様だしな。』

『そうか……。それなら良かったが……』

『ふっ……。しかしドラゴンは、騒動を呼ぶ存在だ。』

今回は上手く行ったが、何時迄も誤魔化しきれるとは限らんで、相棒?』

「巻き込まれるの確定かよ!?!」

シリユールはドライグの台詞に呆れながら突っ込み、

「どうなるのかねえ……？」

約1ヶ月前、原因不明の爆発により、文字通りの三日月の形状となった、夜空に浮かぶ月を見上げながら、眩くのだった。

グレモリー先輩達が、登校してきたみたいで、姫島先輩と木場を連れ立って、前庭を歩いている。

その周囲は勿論、隣や上下の教室からも、歓声が湧きに湧き出した。相変わらぬの人気だ。

「…で、誰だ？あの子。」

「一緒に歩いているから、先輩の友達だとは、思うが…？」

それと、何時ものメンバーに一人、増えている。

小柄な白髪の女子。

確か1年前、はぐれ悪魔を斃した後、やってきた、グレモリー先輩の仲間の一人に居たな。

新入生か。

「木場きゅん」「木場きゅん」「木場きゅん」「木場きゅん」「木場きゅん」「木場きゅん」「木場きゅん」「木場きゅん」

そして、この時点で、さつき迄は「神崎君」「神崎きゅん」と言っていた、周りの女子達の興味が、全部木場に向けられた。

「どんまいwww」

此処で草薙と反町が、凄く嬉しそうな顔で、肩ポンしてきた。いや、マジに悔しいとか思っていないぞ？

愉快的勘違いとかさされるのは、それは其れで困るが、俺は女に全く興味が無いと云う訳じゃない。

寧ろ、結構な女好きな自覚は有る。

しかし、あーゆーミーハーなのは、まじ勘弁なだけだ。

俺の好みは、清楚系で、胸も大きい方が……うゝむ、しかし春麗（まえのよめ）も、どっちかと言えば、慎ましいを通り越して、残念系だったのだが……これは、この世界にて生まれて触れた、芸能界やらサブカルチャーやらの影響か？

その辺り、どう思いますか？

ナ○さん？忍野○らさん？○amuさん？

「う才おゝツス。本当に人気者だよなゝ？あの人達。」

そう言いながら、更に会話に加わってきたのは、やっぱり今年も、同じクラスになった、さ……じ……？

「ん？神崎？どうした？」

「いや……何でも無い……」

「??？」

匙の内側から感じる、人に非ずの気配…

コイツは確かに1年の終わりの時に、2年からは生徒会に入ると（凄く嬉しそうに）言っていたが、そういう事だったか…

しかし、どうやって支取先輩（あくま）と知り合ったかは…まあ、深く考えるのは止めておこう。

ガラ…

「よーし、皆、席に着け〜。

始業式の前に、少し話すぞ〜。」

匙や草薙、反町達と そのまま駄弁っていると教室の扉が開き、入ってきたのは見た目、20代半ばの女性教諭。

「去年、国語を教えてきたから、改めて自己紹介するのもアレだが、今年1年間、君達の担任となる…」

また彩橋先生（25・独身）かよ…

「ん？其処の3人！

神崎！草薙！匙！何だ？その『今年もかよ…』とばかりな、不満そうな顔わ!!？」

「「い、いえ、何でも!?!」

わーい、またさいはしせんせーだ〜、うれしーな〜…」



「1年の教室に行ってみようぜ！」

「WHAT, S?」

新学期2日目の昼休み、草薙、反町の2人から1年生の教室へと誘われるシリユウ。
「滅つ茶可愛いコが居るんだってよ！」

…らしいが、

「ふくん?行つてらっしやーい。」

「リアクション薄いな？」

「付き合い悪いぞ？」

しかしながらシリユウは、其処迄興味を示さず、手を振りながらの見送るポーズ。

「きよぬーっ娘と ろりっ娘と大和撫子なんだってよ。」

「何?大和撫子…だと!？」

「あ…喰い着いたwww」



いや…俺は別に、大和撫子とやらの興味が有ったとか、そういう訳では無いからな?
草薙と反町が、どうしても言うから仕方無く、仕方無く、付き合つてやつてる
だけだからな?

…そんな訳で、「I—E」の教室に行ってみると、ざわざわざわざわざわざわざわざわざわ…

ん、草薙や反町と同じ様な奴等が、沢山居るよ。

1年は勿論、2年3年も、かなり居るね。

流石に他クラスの野次馬勢は教室に入る事は無く、廊下の窓から教室を見入るだけなのだが…

「あつ、あの子達じゃね？」

そう言つて反町が指差した先には、

「……………」。

…反町が指差した先には、昨日、グレモリー先輩と一緒に歩いていたら、白髪頭の小柄な女子と、ポニーテールで…ん、確かに大きいね…な女子。

そして、

「あ、あの子、俺見て手を振ったぞ！」

「バカヤロ！俺だよ！」

「……………」。

何やら此方を見て、にこやかに手を振っている、髪の高い女子。

「おっ？こつち来たぜ？」

そして このストリートな黒髪の下級生は、微笑みを絶やさず、廊下側窓際の俺（達）の目の前まで やつてくると、

「こ・ん・に・ち・は♪

お久し振りね、劉兄・さ・ん？」

「よ♪久し振り。」

「へ？」「劉兄さん？」

にっこりと微笑みながら、挨拶してきた。

「かかか…神崎、劉兄さんて、何だよ？」「もしかして、お前の妹？」

「「「「一体、どーゆー事だよ?!」「「「

「いや、実はな…」

まさかの知り合いでした…なオチに、草薙&反町、そして周辺の その他大勢が驚きふためく。

神崎有希子。

1つ年下の、父方の従妹だ。

「ユキコお前…駒王、受けてたのか…」

「驚いた？叔父さんや叔母さんには、内緒にして貰ってたの。」

ガキイツ!

「あだだだだだだだだだだ!!」

「「「兵藤おうっ?!」」」

クラスメート2人を押しつけ、鼻息を荒げながら、一番自分に迫ってきた他クラスの同級生に、強烈なアイアンクローを炸裂させて、

「貴様等 何なのだ? その巫山戯た単語わ?

次、言ったら死なすぞ?

ついでに言う、ユキコと お付き合いたいと言うならば せめて、この俺を瞬殺出来る程度の強さは、持っていて欲しいのだがな?」

にこやかな…尚且つ、殺気全開な顔で、周囲の男子生徒達（草薙、反町含む）に言い放つ。

「「「イトコンかよ!」」」

そして其の時、男女問わず、その場に居た生徒達の心が1つになる。

「…ねえ、神崎さん?」

そして、誰も気付かない。

「あの人って…」

う内容のメールが届いた。

ホームルーム後の掃除を終わらせ、1年の教室に向かつてみると、其処にはユキコとあの、所謂『きよぬー梓』とされていた、ポニーテールの女子の2人が。

「じゃあね矢田さん、頑張つてね。」

「ううう…うん！」

「じゃね、劉兄さん♪」

「はい？」

そして俺が来たと同時に、につこりと微笑みながら、教室を去って行くユキコ。

教室には、俺と矢田さんの2人きりに。

「あ、あの、かかか…神崎先輩、わた、わた…」

「あゝ、取り敢えず落ち着こか？」

「はい、深呼吸〜？」

「は、はい！スウ…ハア…」

ん。良かった。

此処で、「ひっひっふう〜」とかされたら、どうしようかと思つたよ。

「落ち着いたかい？」

テンパった儘で話そうとしても、それじゃあ伝わる物も、伝わりはしないぞ？」

本気で後悔している、草薙&反町。

「それにしても神崎、今回は あっさりとOKしたんだね？」

「ん、ん。神崎君で、普段から あれだけ女の子にキヤーカー言われてるのに、彼女とかの話、全然だから。」

そして今度は、水沢をはじめ、数人の女子が話し掛けてきた。

「…直接に告られたのは、昨日が生まれて初めてなのだが？」

「「「「ええーっ?!」」」」 …そんなに驚く事か？」

「彼女いない歴イコール、まさかの年齢だったのかよ、お前？」

「煩い、悪かったな。」

「それに あれは アイドルの追っ掛けみたいなもので、恋愛なんかとは別枠だろ？」

「悪いが俺は、そういうのは対象の外だったただけだ。」

「あく、確かに言われてみたら、神崎は あーゆーのは苦手っぽいからね。」

「何なの？この手遅れな失敗した感…」

「でも、少し安心した。」

神崎君で、『あっち』側の人かも…って噂も有ったから…」

「ちよつと待て！それは俺、初耳だぞ?!」

「え？女子の中じゃ、結構な話題だよ？」

リアス・グレモリー（3年）

矢田桃花（1年）

【学園大和撫子】

姫島朱乃（3年）

新羅椿姫（3年）

神崎有希子（1年）

【学園マスコット】

塔城小猫（1年）

【学園2大イケメン】

木場祐斗（2年）

神崎孜劉（2年）

【変態3人衆】

兵藤一誠（2年）

松田才蔵（2年）

元浜幹親（2年）

…等々。

……………。

いや、ちよつと待てw w w

ユキコが大和撫子つてのは、どう考えても おかしい。

皆、騙されているぞ？（笑）

それから、マスコットとやらの塔城小猫：確か、桃花と同じクラスに居た：

あの、グレモリー先輩と一緒に登校していた子だったな。

あの時、内側の気配を探らせて貰ったが（ハラスメントな意味に非ず）、やはり人間では無かったが…

尚、そういう事を考えている中、何故か号泣しながら襲撃してきた変態3人衆を軽く
返り討ちにしたのは、別の話だ。



first contact ③

シリユーは所謂 帰宅部である。

学園入学早々、体育の授業にて、その常識外れな運動神経を披露（当人は自重した心算だった）、それは直ぐに学園内に広まる事となった。

数年前に男女共学となつたばかりで まだ実績の無い この学園の各運動部からすれば、それは是が非でも欲しい逸材。

「一緒に甲子園を目指そう！」

「いや、国立を！」

「いやいや、花園を！」

「…すいません。」

しかし此等の誘いを、シリユーは悉く断つてきた。

前世の能力（チカラ）を殆ど引き継いだ儘、今の世に生まれたシリユー。

その前世で培われてきた、聖闘士としての運動能力をフル活用すれば、個人集団問わず、如何な競技でも（自分と同類が居ない限りは）頂点に立つ自信が在る。

…が、それは『自分は生まれた時、既に他者よりも多くの（鍛錬の）時間を過ごして

きた。故に自分には、如何なる競技にも出場する資格は無い』と考える程に、この男は堅物過ぎた。

ならば、その力を多少なり抑えてのプレイをすれば？

それは、チームメイトや対戦相手への不敬不遜へと繋がるという理由で、尚の事アウトという考えに至る程に、この男は超堅物過ぎていた。

…かと云つて、文系の部活に所属する心算も無く。

「ちよつと神崎く、あんたの彼女、凄いらしいじゃん？」

バレー部、入部早々にレギュラー確定だとか。ねえ、こずえ？」

「うん…全く運動神経の塊だったわ。」

チツ…あんな重そうな脂肪の塊 持っていて、何で あんなにも動けるのよ？」

「泣くな泣くな。どうせなら、レギュラー奪われた方で泣け（笑）」

それから神崎は あの子のオトコなんだから、当人の前で、脂肪の塊とか言うのも止めときなさい。」

「ううう…神崎君、ごめん。」

…つて、私も一応はレギュラーだからね！

それから笑うな！（怒）」

「……………」

「お前の魔力は目立ち過ぎるからな…」

わざわざ存在を示す必要は無いだろう？」

しかしシリューは、それを自分の内側に宿す赤い龍の能力を使う事無く、難無く退ける。

「さて、と…。またグレモリー先輩達が来る前に、退散するか…」

そしてシリューは、恐らくは間も無く、この場に駆けつけて来るであろう、この街を管理する悪魔との接触を避けたいが為、早々に此の場を立ち去った。

しかし…

「へく？アイツ、神器も使わずに、膝蹴りとチョーップ！だけで、あの悪魔を斃したつすよっ。」

「いや、只の人間が、仮にも低級の はぐれ相手だとしても、単なる素手で どうか出来る訳が無いぞ？」

「でも、魔力は感じられなかったわ？」

「ん…しかし、何かの神器を使ったのは、間違い無いと思うわ。

只の素手の手刀で、それこそ刀を使ったみたいに真つ二つに出来る訳が無い。」

その戦いは、シリューが その気配や視線に気付く事も無い遥か離れた場所から、数

人の男女に一部始終を目撃されていた。

「あつ、悪魔達が やつて来たつす。」

「あの紅い髪…グレモリー家の者ね。」

「きやははは！見て見て！」

アイツ等、『え？自分達が倒しに来た筈の はぐれが、もう死んでるし？』…つて顔してゐるつすよ〜！wwww」

「成る程…つまりは あの人間は、悪魔とは関係を持っていない事になるな。」

何らかの繋がりがあるのなら、報せるだろうからな。」

「そうね…。先程も、あの場を何から逃げる様に急いで去つて行つたし…」

どうやら奴は自分と云う存在を、我々や悪魔共の様な、人に非ずな者に知られたくは無かったのでしよう。」

「きやはは♪ウチ達にもう、バレバレつすけどね。ww」

「何れにしても、あの人間が神器持ちならば、放つては置けないわね。」

「とりあえずは あの人間の身元を割り出して…それからよ。」

「それにしても、これは思わぬ拾い物かも知れませぬな。」

「ええ…。あの女を招く為に遣つて来た この街に、まさか それとは別に、神器持ちが

1人、居たなんてね…」

「いや、神崎君？」

どうして君だけ、あんなにもモテモテなんですかね？」

「モテ期か？モテ期なのか？固羅あ!!」

「羨ま死ね！このヤロー！（泣）」

「いや、俺に言われても、本当に知らんのだが…」

…あれから数日後の金曜日の朝、シリユーはクラスメートの男子一同から、あたかも尋問の如く、問い詰められていた。

「お前には矢田さんが居るつてのに…」

「付き合い始めたばかりで、浮気はどうかと思うぞ？」

「だ・か・ら！丁重に断つたと言っているだろうが！」

3日前、放課後の帰りの校門にて、他校の制服を着た少女から告白&交際の申し込みを、そして昨日は大学生風な女から所謂「逆ナン」的な誘いを受けていたシリユー。

当然だがシリユーは孰れも「彼女が居る」の一言で…それと もう一つの、別の要因で断っていたが、其れ等は下校中、多くの一般生徒達が見ている前での出来事。

クラス内に その話が届くのも早く、級友達もシリユーの人柄（まじめっぷり）は既に或る程度は理解しているので、初めは半分位は、冗談混じりな問い詰めだった。

…が、流石に其れが連続となると、例え本人に その気が無かつたにしても赦せる状況では無いらしく、その瞳に紅蓮に燃える嫉妬の炎を宿した集団に、かなりマジな取り調べを受けていた。

「…で神崎？彼女には それ、きちんと言ったりしてるの？」

その途中、会話に参加し、質問してきたのは水沢。

「ああ。言ったら言ったで、面白くない顔をするだろうが、黙っていたら それで知られた時に、もつと面倒な事に なるだろうからな。

その日の夜に、電話で話したよ。

流石に2回目となると、ぶーぶー言われたが…」

「「「「「ざまあwww」」」」」

「尤も最後は、『モテるのは分かってるから仕方無いし、信じてる』って言って貰えたがな。」

「「「「「ちつくしよーっ!!」」」」」

爆死しやがれ!! (号泣)「「「「「」」」」」

それに対してシリューは、最終的には然気無い(?) 惚気で切り返し、結果、教室内は嫉妬の炎で大炎上するのだった。



「…そんな訳で水沢。」

明日、午後から桃花とデートなのだが…」

「はあ!?…あんた、私にリア充自慢して、どーすんのよ?」

昼休み、水沢に明日はデートだと、パンを食べながら話し掛けるシリユー。

それに対して弁当を食べながらの水沢は、「何言ってるの? コイツ?」…な顔で、シリユーを見ている。

「いや、別に そんな心算は無くても、俺自身、こういうのは初めてだからな…」

「成る程…それで、彼氏持ちの私に、アドバイスを求めると…」

「いぐざくといい。」

「仕方無いわね。」

まあ、あんたの周りの男に そーゆーの相談出来る奴って、確かに居ないからね?」

「悪かったな!」

悪戯っぽい視線を向けられ、匙、草薙、反町がハモらせて突っ込みを入れた。

「とりあえず、午後からって…それで、お昼御飯は どうするの?」

「午前中は部活の練習が有るらしくてな、その後には駅前まで待ち合わせなのだが…」

まさか初めてのデートの食事で、小西屋の うどんトッピング全部盛り…な訳も往かないだろうし…」

「「「「当つたり前だ！」「」」」」

一斉に突つ込みを受けるシリユー。

「…かと云つて、俺は外での食事は疎くてな…中華料理の店なら、多少は知っているのだが…」

「そ…それも、高校生がデートで食事するには微妙だわね…」

「だから、水沢！（パシイン！）」

お前の基準で良いから、食事する店込みな、コースのアドバイス、よろしく頼む！」

両手を合わせて お願いするシリユーに、水沢も やれやれと息を吐きながら、

「これで安心！香純ちゃんのお、絶つ対にスベらない、デート講座あ!!」

「「「「おおく！（パチパチパチパチ）」」」」

自身のデートの体験を元に、少しだけ嬉しそうに、そしてノリノリでアドバイスを始める。

そして それを何故か、一緒に聞き入る男が数名程。

「…でも、食事も良いけど神崎？」

あんたの彼女ちゃん、それまで、バレエ部の練習で汗だくなんじゃないの？」

「いや、それは普通に学校のシャワールーム使うだろ？」

「ちつちつち…これだから素人は…」

其処は敢えて、『とりあえずは汗、流そうか』って言つてホテルに入り、2人で汗流した後、思いつき汗を搔くのが王道でしように？

その後、『ついでだから もう少し休んでいこうか?』って言いながら、全然休まないみたいn(スコーン!)にゆわつ?!」

「ええい、阿呆か?!」

…つてゆーか桐生、貴様は何時の間に、会話に参加していたのだ?!」

何時の間にか、隣の教室から入り込み、会話に参加していた桐生の頭に、丸めたノートによる一撃が炸裂した。

因みに何時の間に…と謂えば、『小西屋の うどん』の件辺りからである。

「あ痛たたたたた…」

こ、この男は乙女の頭を躊躇無く…」

「喧しいわ!誰が乙女だ!!」

あ、思い出したぞ桐生!

貴様、俺と木場との、洒落にならない噂をバラ撒いてくれたそうだな!」

「あ…」

両手で頭を抑えて抗議する桐生に、シリユーはパンパンと その丸めたノートを手で叩きながら、更なる追撃の構えを見せる。

「いや〜でもアレ、皆にも好評だったしい〜、じゃあ私、そろそろ自分の教室に戻るわ〜!」

びゅーん…

「あ、待て!!」

この冗談が通じない堅物の結構マジな顔に、貞操的…でなく、生命的な危険を結構マジき感じた桐生は、乾いた笑いを見せながら退散。

そして教室を出る その去り際、扉の前で

「神崎か〜、避妊具（ゴム）は ちゃ〜んと使えよ〜!」

「!!!!!!」

「喧しいわっ!!?」

教室内全体に、特大の爆弾を落としていった。

ざわざわざわざわざわざわざわざわ…

「「「かかか、神崎君?」」」

「「「神崎い!?! 貴様あつ!!」」」

「ち、違う、誤解だ!

クツソ! 桐生う〜〜〜〜〜!

覚えてろ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜つ!!」

草薙、反町と共に、ボーリングやビリヤードに興じた後の帰り道。

時刻は既に日付が変わろうとしていた頃、距離にして約20数km先にて、強烈な魔力のぶつかり合う波動を感じたシリユー。

「これは…何者かが戦っているのか？」

…だとしたら、一体 誰が？」

『大方、グレモリーかシトリーの小娘と その眷属共が、はぐれ悪魔とでも戦り合っているのだろう。』

シリユーの台詞にドライグが解説するかの様に応える。

「……………」

『どうするんだ？』

今回は いきなり自分が襲われた訳でも無ければ、既に管理者（あくま）が出張っているから無視しておくか？」

またも、はぐれ悪魔が街に現れたかも知れない。

但し今回は、この街の管理者の悪魔が既に、その処理に動いていると云うドライグの言葉に、干渉するかを考え込むシリユー。

『…どちらを選択するにしても、俺は相棒、お前の考えや行動を支持するが？』

「……………」

その遣り取りは、実質には数秒足らずの時間だが、その間に様々な事を思案したシリューは、

「…よしー！」

何やら決意をした顔で、周りに自分への視線が無いのを確認すると、その身を一筋の光と変え、先程から感じていた魔力が沸き出てる場所へと飛び立って行くのだった。



其処は、町外れの廃工場の内部。

「雷よおッ!!」

カアッ!!

白襟緋袴の御子服を着た、ポニーテールの黒髪の少女が、掲げた手の先から、雷撃を迸った。

「うげやあつ!?!」

それが、絡んだ荊が羽を持つ蛇の形を成したかのような、異形の者に直撃。

この一撃で、荊の蛇は、消し炭となった。

「せえいやあつ!」

ガキイン!

金髪の少年が振り翳した、燃える刀身の剣を、鉄兜に鉄の鎧、そして左腕を鉄の盾で身を固めた男が、右手に持っていた鉄製の銛で受け止める。

その装備から、中世西洋の戦士を想わせる男。

しかしながら、それは人間に非ず。

背中からは蝙蝠の様な羽を生やし、鉄製で固めた上半身とは裏腹に、下半身は赤い8本の触手が、海洋の軟体動物の如く蠢いている。

「カカカ！」

ドスツ

「う…?!」

燃える斬撃を捌いた鎧の男は、不気味な嗤い声と笑顔を見せると、反撃とばかりに少年の腹に銛を突き衝けた。

「…えいつ！」

ドスツ！

小柄な白髪の少女が、頭頂の深緑な部位を除けば全身が黄色い肌の、獣顔な鬼と形容すべきな生物の腹部に、小さな掛け声と共に正拳突きを炸裂させた。

「ぐへへ…」

「…!?」

しかし その攻撃は脂肪と云う名の壁に阻まれ、肥満体の鬼の体の芯までは伝わらず
「ぎやおらっ!」

バキイツ!

「きやあっ!」

反撃とばかりに振り払われた、段平と呼ばれる幅広な刀の一撃をまともに受けて、少
女は吹き飛ばされる。

「こっの…滅びなさい!レオネツサ!!」

ボウワツ!!

長い紅髪の少女が、掌に黒い魔力の弾を生成して撃ち放つ。

「あはは♪流石の私も、それだけは喰う訳には往かないからねえ!」

「くっ…!」

そう言いながら それを躲すのは、巨大な雌ライオンの身体、その首が在るべき部分
から人間の…裸女の上半身を有し、その背中には蝙蝠の羽を生やしている、半獣半人の
悪魔レオネツサ。

「リアス!」

当主とかで無く、次男三男だったとしても、その『家』は もう お終いだらうよ。』
ドライグが俺の疑問に、補足込みで説明。

『…で、俺も もう一度聞くが、相棒は見てるだけなのか？』
「そうだな…」

偶々グレモリー先輩達と、はぐれ悪魔の数が同じだったからか、1vs1が4組の形で戦闘が行われていたみたいだが…

木場は…アイツはスピードは まあ、それなりに大した感が有るが、スピード特化のスタイルのせいとか、攻撃が軽い。

ましてや あの鎧蝮とでも呼べば良いのか？

戦士としての資質は、あっちの方が上だ。

次に あの桃花と同じクラスの子ビっ娘。

確か、塔城子猫…だったか？

あの子は素手の接近戦を得意としている様だが、アレは あの敵とは、相性が悪い。単なる殴打主体の戦法では、あの分厚い脂肪の体には、ダメージが通らないだろう。

あの拳に、プラスαの要素が入れば、また話は変わってくるが、基本的に あのタイプに有効なのは斬撃。

アイツは、木場が相手をすべきだった。

捨て、人の形を成していた両腕を無数の蛸脚の様な触手に変形させた。

そしてリアス達に視線を向けると、その無数の触手を鋭く速く延ばし、

「「きやあああああつ?!」」

リアス、朱乃、小猫の体を縛り付けと同時に、宙に持ち上げ、身動きを封じたのだつた。

うねうねうねうねうねうねうねうね…

「きやああ?!とどと、どこに触手(て)を突っ込んでるのよ?」

「は、はしたないですわあ…」

「え…えつちいです…」

そして その触手は、リアス達の体を引き千切ろうと締め付けると同時に、制服の内側に入り込み、身体を弄り始める。

それによつて、苦悶に喘ぐリアス達。

「きやはは!良いぞ、スフイーロッド!

其の儘、殺つちやいな!」

「カカカカ…承知!」

レオネツサが煽り、スフイーロッドと呼ばれた蛸型の悪魔が、それに応える様に、下卑た嗟い声と共に、更に締める力を強めていく。

「きゃあああああつ!!」

「ああああ…」

「く…つううう…」

「部長! 朱乃先輩! 小猫ちゃん!」

ダツ…

それを見た木場が体勢を立て直し、救出に向かおうとするが、

「ぐへへ…」

「!!」

先程迄、小猫と戦っていた はぐれ悪魔が立ち塞がった。

「邪魔するなあ!!」

これに対し、木場が炎の魔剣で斬り掛かるが、獣魔は手に持っていた刀で、それを受け止め、その勢いの儘に吹き飛ばし、

ガン!

「くあつ!!」

再び壁に、体を痛打する木場。

「きゃは! ギエロ、ソイツは任せたよ!」「レオネツサよ…何時から お前が仕切る様になつた? ふん…まあ良い…」

ザツ…

「!!?」

ザツ…

「!!?」

腰を抑えながら跪いている木場の前に、レオネッサの指示に従う様に、はぐれ悪魔ギエロが立ちはだかる。

「ぐへへ…とりあえず、死ねや。」

「くっ…！此処迄か…?!」

刀を両手持ちにして、頭上に大きく振り上げた構えに、未だ立ち上がれない木場は、無念ながら覚悟を決めた表情を浮かべる。

「先ずは、一人目えーえい!!」

「ゆ、祐斗お！」

「祐斗君？」

「祐斗先輩！」

ぶうん…

「……………!!」

拘束された儘のリアス達が叫ぶ中、勢い良く、ギエロの刀は木場の脳天目掛け、一刀

両断するが如く振り降ろされた。

ガキイ…

「な…?」

「え…? えええつ?」

しかし その刃は木場に届く事は無く、

「間一髪だったな!」(Boost!!)

「か…神崎…君?」

その場に飛び出した、シリユウの左腕の赤い籠手によつて止められたのだった。

「え…だ、誰?」

「あの人 確か、ウチの2年生の…」

「…トーチカちゃんの、彼氏さん?」

その いきなりの乱入者に、仲間が助かったと云う安堵以上に驚くりアス達。

「…つて、あれ、もしかして【赤龍帝の籠手(ブーステッド・ギア)】じゃないのよ!?

…て事は、あのコ、今代の赤龍帝?」

そしてシリユウの左腕の籠手を見て、更に驚くりアス。

「神崎君…キミは…?」

「話は後だ!…でえいつ!」

ドゴツ

そして現状に理解が追い付かない木場の前に立ち、ギエロのどてっ腹に前蹴りを浴びせて吹き飛ばし、

「覇あつ!!」

今度は右の手刀で、空を斬る様なアクションを見せると、

斬!

「ひえっ?」「あら…」「…む」

それによつて生じた衝撃波の刃がリアス達を捉えていたスフィードの触手を断ち切り、その呪縛から解放。

「グレモリー先輩、こっちへ!」

「え…ええ!朱乃、小猫!」

タタツ…

シリユートの呼び声に応え、その下にリアス達が駆け寄る。

「あ、ありがとう…なのよね?」

「貴方は…一体?」

「木場にも言つたが、その話は後で!」

今は、目の前の敵を斃す事が先です!」

そう言つて、シリユーに頭を下げ、礼を言うリアス。

「それにしても…神崎君が赤龍帝だったなんて…全然、気が付かなかつたよ…」

「そういう風に　してきたからな。」

因みに俺は、木場や先輩達が悪魔だと云う事は最初から…駒王に入学した時から気付いていたぜ。

支取先輩達、生徒会の皆を含めてな。」

「「嘘っ!?!」」

まさかの『バレてました』発言に、またまた驚くリアス達。

「ま…まあ　それは、貴方も自分が赤龍帝つて事を知られたくないから、余り触れずにいたのよね…」

額の汗を拭きながら、引き攣つた笑顔を誤魔化す様に、リアスが話す。

「…ところで少し、それとは別に、貴方に聞きたい事が出来ただけど…」

「はい?…」

その直後、凜とした顔で、リアスがシリユーに改めて話し掛けた。

「先日の住宅街の路地裏で、はぐれ悪魔を斃したのは貴方ね?…」

「……………」

「そして約1年前、学園の近くの公園で、やはり　はぐれを斃したのも…貴方で間違い無

いわね？」

「……………」

「ハア…やっぱり そうなのね？」

この場合の沈黙は、『肯』と受け取るわよ？

…大丈夫。今更その事について、あれこれ言ったりする心算は無いわ。

寧ろ、これも お礼を言うべき事だもの。

…それよりも、貴方…」

やれやれと溜め息を一つ吐いた後、リアスは微笑みながら、シリユーに最後の問い掛けをした。

「ねえ、貴方…悪魔になつてみない？」
「…はい？」

∴
T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
『
神
崎
孜
劉
』

＜br＞嗚呼 夏休み

冥界に逝こう!!

「冥界?」

「そう、冥界。」

夏休みの2日目、あの熾烈な戦いの翌々日の正午、オカ研一同（withミルたん）は部室に集合していた。

「部長の眷属の皆は解るが、俺やアジアも行くんですか?」

「一応は、部活の合宿って名目なのよ。」

「いくら部活の合宿と言っても、そんなに長い間、家を空けられないでしょう。」

特にアジアは、ホームステイ先を何日も空けるのは…」

「私は、白音と一緒に居られるなら、そっちの方が良いにや♪」

夏休み、冥界に里帰りするリアス。

朱乃達眷属は、当然同行する形になるが、部には所属しているも、リアスの下僕でも無いシリユーも、夏休みの殆どを冥界で過ごすと言う日程に、少し難色を示す。

「アジアについては、合宿のついでに、里帰りして事におけば大丈夫よ。」

それを想定して、合宿先はイタリアって『設定』にしてるから。」

「え?」

「実際に初日は、アリバイ作成の為のイタリア観光を、予定しているしね。」

「転移を繰り返して、イタリア各地の心霊スポットを巡ったりとかして、如何にも数日間、イタリアに滞在した様に見せかけるんですの。」

「何故、心霊スポット?」

「オカルト研究部だからよ!」

それにシリユー?

貴方は魔王様から、絶対に連れて来いって言われてるの。

赤龍帝として、魔王様をはじめとする、冥界のトップ達が集う話し合いの席に、出て欲しいらしいわ。」

「マジに面倒臭いな!!」

本当に、凄く嫌そうな顔をするシリユー。

「こつちも夏休みの予定、色々と起っていたのに:」

「へえく: :? 例えば?」

「どんな予定なんだ、赤龍帝?」

「トーカと海でデートとか、それと、ユキコの彼氏くんが甲子園に出るとかで、それに皆

で応援に行く事になってるし…

…つて、アザゼル!？」

「「「「「え…?」」」」」

「よっ♪」

「「「「「なあっ?!」」」」」

部室には、何時かのサーゼクスの様に何時の間にか、墮天使の総督が居た。

「あ、貴方、一体 何時の間に?」

「ん、『冥界? そう、冥界。』…の辺りからか?」

「殆ど最初からだによ…」

「何故、墮天使総督殿が…」

「サーゼクスからの要請で、リアス・グレモリーの里帰りに、俺も同行して冥界入りする

事に なったんだ、よろしくな。」

「「「「「はああっ?!」」」」」

「俺も、お話し合いつてヤツに、参加するんだとよ。

ミカエルや、他の神話勢力からも、誰か来るらしいぜ?」



7月2X日(木) PM6:00

旧校舎オカルト研究部部室。

「皆、揃ってるかしら?」

「黒歌、居るか?」

「来てるにや。」

「よし部長、全員揃ってますよ。」

「どーゆー意味にや!?!」

「それじゃあ部長、転移の用意、よろしくお願いします。」

「だから、私に来てたら全員揃ってるって、どーゆー意味にや〜っ?!?!」

「二よーし、出発!!」

「む、無視すんにや! 答えろにや〜っ!!」

……こうしてオカルト研究部+αの面々は、イタリアの名所や心霊スポットにて、記念撮影やお土産購入の後、再び部室へ戻ってきた。

「まさか本当に、日帰りでイタリア旅行するとは思わなかったぜ……」

「さあ、次が里帰りとか宿の本番よ。」

皆、駅に向かうわよ!

「「駅……?」」



何やら巫山戯た事を言う この男に、結構マジなヘッドバットを喰らわしても、俺は悪くない。

「まだ、してはいない!」

「え? シリユー先輩、まだなんですか?」

小猫、お前もか?

「でもトーカちゃん、この前シリユー先輩に、”また”スカートの中に頭を突っ込まれたって言っていました。」

「あ、それ、私も聞きましたわ。」

「あらあらあら?」

「いや待て、あれは事故なんだ!」

…って、トーカあ!

お前は何故、一番喋っては駄目な奴に話している?!

それから朱乃先輩、嬉しそうに顔を赤くしないで下さい。

「…否定はしないのね…。」

「それと少なくとも ぱふぱふと、お姫様抱っこは かなりの回数、しています。」

「ま、っ!!」

「まだ ぱふぱふは、やってはいない!!」

すばかーん！

「ひにやあつ?! (〽〽)」

えーい、その話を蒸し返すのも止めろ！

それとリアス部長？顔、赤くし過ぎです。

「シリユー先輩…お姫様抱っこの方は、否定されないのですね…」

「うゝ…」

涙目になり、脳天を押さえるを小猫が、コッチを恨めしく見ながら、

「…ボソ…温泉旅行…」

「え、…？」

この御猫さんは今、何と仰られた？

「夏休みの最後の週末、トーカちゃんと お泊まりの温泉旅行に行くんですよ？」

…2人つきりです。」

「ちよ…ちよと待ていつ？」

何故、お前が知っている？」

「トーカちゃん、家族には女の子の友達と行くと話してるみたいで、私とレイヴエルさんとカンちゃんに、口裏合わせの協力を頼んでいます。」

「そういう事ですわ♪」

と…トーカーあつ!!

だから何故に お前は、一番話しては駄目な奴に、協力を求めている!?

…って、ユキコも知ってるのか?!

「はわわわ…シリユーさん…」

「あくらあらあらあら?」

「エロエロおっぱいドラゴンだにゃ!」

「し、シリユー先輩い…」

「によ…」

「ししし、シリユー?こ、高校生で そーゆーのは まだ、良くないと思ふ☆▽◎ψδπ

φ@WA ♂⇄♀ (∴∴) ヽ≡?ゑΦ全と…」

「あはは…」

「ぎゃーっはっはっはっは!」

赤D帝も、この夏、遂に卒業か!!」

これを聞いた皆が、様々な反応。

どうやらアーシアは、知らされてなかったみたいだな。…バレてしまったが。

それとリアス部長? テンパリ過ぎです。

グレモリー家の人々

『お帰りなさいませ、リアスお嬢様。』

リアス、シリユー達を乗せて、グレモリー領上空を滑走していた冥界列車は やがて、地上に敷かれた線路に着き、其の儘グレモリー邸内に設けられている、プラットホームに到着した。

そして車輛から降りたリアス達を待っていたのは、凄まじい人数の、邸に仕える執事にメイド達、更には

『~~~~~』

「わあ〜！」

「派手だなあ〜？」

「によ〜…」

やはり邸仕えの、豪華オーケストラの一団だった。

余りにも大人数過ぎる その出迎えに、初見のシリユー、アーシア、ミルたんは驚きの表情を隠せない。

「も、もしかして この人達って、帰郷された御家族の方や お客様を迎える為だけに、

おり、所謂ばふぶの一步手前状態なのだが、少年には無垢さは在っても邪な気が感じられないせいか、不思議とエロさは無い。

だがしかし、これが羨まけしやらん画には変わり無く。

…つまりは何が言いたいかと云えば、おい少年、そのポジション、この俺と代われs (すばかーん!) ふに、やああつ!!?

…己は何を勝手に人のナレーションに入り込んで、心情を捏造(かた)っている!?(怒)

「…この子は?」

「はい!赤龍帝様、初めまして!」

「ミリキヤス・グレモリーです!」

白髪の ちんちくりんに教育的指導(物理)を施しながらの俺の質問に対し、元気に応えるミリキヤス少年。

「ミリキヤスはね、お兄様の子供なのよ。」

「つまりは私の甥っ子ね。」

「ああ、サーゼクスさんの御子息かあ。」

「更にはリアス部長が補足。」

成る程、言われてみれば、サーゼクスさんを幼くした感じが有る。

…ん。サーゼクスさん（&グレイフィアさん）の息子と云う事は即ち、本人は『お姉様』と呼ばせてはいるが、リアス部長は このミリキヤス君のオバチャム…すいません、何でも無いです。

何でも無いですから部長、そんな夜叉みたいな形相で睨まないで下さい…。 m

「」 m

…つて、何で考えてる事、判つたのだ!?

「あ、あの…赤龍帝様…」

「ああ、シリユウで良いよ。」

何やら顔を少し赤くして、もじもじしているミリキヤス。

何事だ?…と思つていたら、

「さ、サイン、貰つても良いですか?」

「え、!?!」

いきなり色紙と油性マジックを、俺の前に差し出したよ?この少年。

「クス…ミリキヤスは神崎様の、大ファンですから。」

そう言いながら現れたのは、銀髪のメイドさん。

「お帰りなさいませ、リアスお嬢様。」

そして ようこそグレモリー城へ。

眷属の皆様。

そして赤龍帝様と、その御付きの皆様。」

グレイフィアさんだ。

…て、ファン？

「はい、実は…（中略）…な訳です。」

…要約すれば、あのライザー・フェニックスとのレーティングゲーム。

グレモリーとフェニックスの両親と魔王、それと冥界の一部の偉いさん等の関係者だけが観戦していた筈の非公式ゲームだった画像が、何故か冥界全土に流出。

そして その戦いを観た冥界中の ちびっ子の多くが、俺のファンになったとか。

「伝説のドラゴンと云うだけで、小さな子供からすれば十分に憧れの対象になるのですが、それに加え、あのライザー様を倒したのが、大きな要因かと。」

…らしい。

ついでに言えば、そのライザーとのバトル内容で、何やら一部の『マニアックな趣味』を持つ悪魔女性にも…それこそ まだ幼い少女から貴婦人（マダム）迄幅広く、俺のファンが出来ているとか。

む…少し解せんか？

女性限定で受けの良い…そんな、特別な戦闘スタイルを執った心算は無いのだが？

…つて、出迎えのメイドさん数人が、俺と目線を合わせた時に、顔を赤くしていたのが、もしかして それだったのか？

更に ついでに言えば あのゲームにより、ミルたんにも、それなりの数のファンが既に出来ているとか。

「この子が『魔王様より赤龍帝の方が断然カッコイイ』と言った時には、サーゼクス様は血の涙を流しながら、神崎様に決闘を仕掛けようと、業務を投げ出して、人間界に乗り込もうとした位ですから。」

サーゼクスさん…アナタわ…

「あ、御安心を。その時は当然、この私が全力を以てして、めて止めましたので。」
怖いわ!!

「それは兎も角だな。…俺、サインなんて、した事は無いのだが？」

話はサインの件に戻る。

如何せん初めてな事なので、多少 戸惑っていると、

「あら、良かったわね〜？ ミリキヤス。

赤龍帝（シリユー）のサイン、貴方が一番最初に貰える事になるわよ〜。」

「は、い、い。」

……………。

部長、凄く嬉しそうですね？

くミリキャス君へ 赤龍帝 神崎孜劉く

結局は、以前に貰ったグラビアアイドルのサインの字形に習って、それらしく書いてみたのだが、それで当人は喜んでくれた様で、何よりだ。

…そのサイン色紙を嬉しそうに抱きしめているミリキャスを、廊下で整列している、数人のメイドさんが羨ましそうな顔をしているのは、気のせいだと思いたい。

「よしシリユー、今からサイン会にや！」

1枚1・500円（税込）で売りに出すにや！」

「はい皆さん、裸ドラゴン先輩のサインが欲しい人は、一列に並んで下さい。」

そろそろそろそろそろそろ…

「商売するな（怒）！」

こっの、バカ猫姉妹がああつ!!」

すばかーん!! x2

「う、にやあ、ああつ!!」

…って、（二部の）メイドさん達、リアルに並ぼうと、しないで下さい…。



「そう言えば、アザゼルさんの姿が見られませんが、何処かに行かれたのでしょうか？」
 「アザゼル様は会談の為に、既に魔王領へ向かわれております。」

グレモリー邸内を歩いている中、アーシアの疑問に応えたのはグレイフィアさん。
 まあ、アザゼルも一応は、墮天使の総督だからな。一応は。

それなりに多忙なんだろう。

「明日は俺も赤龍帝として、数軒、貴族の館を巡る予定だからな。」

アーシア、黒歌。

お前達も形上は、俺の部下の体になっているのだから、明日は同行して貰うぞ。」

「は、はい!」「うに、やく…」



「あらリアス、帰ってきたのね。」

「…!」

ミリキヤス、グレイフィアさんと合流して邸内を進んでいくと、次に迎えてくれたのは、亜麻色の髪の毛の…分かり易く一言で説明してみれば、所謂『ちびリアス』。

髪の色以外は、まるつきりリアス部長を幼くした感じの、ミリキヤスと同年代位の少

女だ。

「えくと、部長の妹さん？」

「可愛い女の子ですね。」

「……………」

彼女を見た俺とアーシアの言葉に、微妙な表情をするリアス部長。

「あらあら、妹とか女の子だなんて、赤龍帝さんと そちらの お嬢さんは、嬉しい事を仰いますのね。」

そして こちらの少女は嬉しそうに、少し頬を赤くして喜んでいるけど、妹…じゃないのか？

「…ボソ…お…あ様よ…」

はい？ 口の中で小声で もごもご言われても、よく聞き取れないのですが？

「…だ・か・ら…この人は、私のお母様なのよ!!」

…はいい？

「お…お母様？」

「お母様？」

「お母様にや？」

「お母様によ？」

部長の台詞に、初対面である、俺、アーシア、黒歌、ミルたんが鸚鵡返しのように『お

ラナ様の一言と一睨みで、その言葉を途中で途絶え、縮こまってしまいました。

「…ボソ…し、シリユーさん…様、ヴェネラ様、怖いですう…」

「…ボソ…お、応、グレモリー卿、完全に敷かれてるな…」

何だかシリユーさん…いえ、シリユー様も、その迫力に気圧されている感じでした。こうして、オカルト研究部の合宿…冥界の一日目は、終わるのでした。

レーティングゲーム後の誘拐未遂事件の件で、その加害者である『家』の当主に、被害者として改めてO H A N A S H I する為に、直々に来邸する事にやのだ。

因みに昨日のリアスママの、リアスや白音達眷属、更にはリアスパパに向けたあの睨みが怖かったのか、シリユー自身も、この冥界では赤龍帝として：普段の『部長』呼びなんかでなく、『リアス嬢』と、あくまでも冥界の客：魔王と同格の者として接すると、決めてるみたいじゃ。

ん：：気持ちは、凄く解るにや。

あの時のリアスママの顔、凄く怖かったにや〜！（。O。L）

：そんな訳で、グレモリー邸の中庭にセットされているテーブル席に着いて、メイドが淹れた紅茶を飲んでいと、

ぶおんう おんおんおんおん：：

ぶるおおおおおお：：キツキキイツ！！

「!!？」

けたたましいエンジン音を鳴り響かせながら、真つ赤な自動車が庭内に突入、ドリフトかましながら、私達の目の前で停まったにや!?

「カウンタックのリムジン：：だど？」

そして それを見たシリユーの目が、何かの琴線に触れたのか、一気にキラキラと輝

シリユーも何、一緒になって、楽しんでるにやあ〜!!」
はわわわ…サージェクス様、スピード出し過ぎです!

お城を出た後の市街地は、それなりなスピードで走られていたのですが、その市街地を抜け、広い平野に入った瞬間に この悪魔（ひと）、いきなりアクセル全開です!

「大丈夫だよ、アーシアさん。」

城（いえ）をでる前、きちんと『頭○字D』を読んできたから♪」

「い、いやあああああ〜?!」

「コイツの頭はDQNだにや!!」

だ、駄目です、この悪魔（ひと）!

走り屋さん系のマンガを読んで、その気分に入り浸ってハンドルを握っている人の車に乗るなんて、罰ゲーム以外の何物でもないですよ!?

グ、グレイフィアさんは何処ですかっ?

こういう時には、颯爽と現れて この方をめるのが、あの人の役割（ポジション）じゃ、なかったのですか?!

~~~~~

「はあ…ハア…」

やがて この暴走車は、関所を通り抜けて、ジオティクス様が管理しているのは、別



属悪魔を遣つてシリユーの家族を質に捕ろうとした罪により、魔王の名の下に処刑されていた。

「せ…先日は赤龍帝殿に至つては、当家の愚息が、その、大変な ぐ、御迷惑を…」  
顔（おもて）にこそ出してはいないが、正直な処、この当主の胸中は穏やかでは無かつた。

何しろ『家』とは関係無い、本人の自業自得な独断行動とは云え、自分の息子が裁かれた元凶な男に…駒による転生すらしていない、人間如きに…頭を下げないとならないのだから。

それは、本人からすれば、屈辱以外の何物でも無く。

しかし、「そんなに『人間如き』とか言うなら、シリユー君と直接に、遣り取りしてみるか？ セラフォルも言つてたけど、其処迄『人間如き』と言うなら、無理矢理に力で どうこうする事だつて出来ると云う事だろう？ それならそれで僕達は、別に止めたりはしないよ。どうするんだい？ 相手は『人間如き』だよ？」…と言うサーゼクス言葉に従える筈も無く。

リアスが…最終判断はサーゼクスが推した事だが、赤龍帝を悪魔サイドに引き入れたのは、確かに戦力増強的な意味ではフラインプレーだった。

しかし結果から見れば、その赤龍帝を『人間』の儘に招いたのは、普段から人間を見

下している高慢な悪魔貴族達からすれば、今後は下手に人間に手出しする事が出来ない、『余計な事』でも有ったのだ。

「……………」。

苦虫を噛み潰した様な顔…を我慢して、シリユーを見るカミジン家当主。

「……………♪ (♩A♩)」

それに対し、その心境を察したシリユーは口には発さずも その表情は正に、「ねえ？ 今、どんな気持ち？ w w w」と語っている。

学生である身故に学業を優先させ、夏休みに入り、漸く誘拐未遂を起こした者の『家』へと訪れ、その当主に対して赤龍帝として、「今後、この様な事は絶対に無い様に」と、『被害者』として改めて直接に釘を刺すシリユー。

その背後に控える、実は借りる必要性の全く無い、魔王の威を借るドラゴンに、カミジン家当主は何も反論出来ずに肯の意を示し、頷く事しか出来なかった。

その後も、伝説のドラゴンと魔王ルシファーによる口撃は暫く続き、

「兎に角だ、君の『家』に限った訳じゃないけど、迂闊な真似は控える様にね。

公個人は兎も角、『家』としては、既に前科持ちに なっているのだから。」

「…肝に命じて於きます…。」

サーゼクスの この一言で漸く、カミジン家に対するO☆HA☆NA☆SHI☆は締







ナベリウス邸に到着、カウンタック・リモから降りた俺達を迎えたのは、四大魔王が1人、セラフオール・レヴィアタンだった。

「既にツヲネちゃんには、会談室で待つて貰つてるよ☆」

成る程。当主である、ツヲネ・ナベリウスとやらは既に待機か。

そして、その当主の代わりに、メイドさんや執事さん達やらが恐縮しながら出迎えてくれる中、1人だけ、他のメイドさんとはデザインの違う衣装の、銀髪のメイドさんが俺達の前に現れた。

「お待ちしておりました、神崎様。」

グレイフィアさんだ。

「…さ・て、サーゼクス様？」

何故、この私が、この場に居るか、理由は解りますね？」

「い、いや…全然…どうしてかな？」

あ、もしかして、寂しくなつて僕に会いたくn（バキッ！）とんぬらっつ！」

グレイフィアさんの問い掛けに、思いつきり口を引き攣らせながら、惚けた口調で応えるサーゼクスさんの顔面に、グーパンが炸裂した。

「…其方のアーシア様と黒歌様から、メールで『運転怖いですう』『死ぬるう！』と助けを求められたからなのです？」

「え……？」

「普段から在れ程、魔王として、馬鹿な行動は控える様にと言っていました。が、判らない様ですね？」

「ま、待つてくれグレイファイア！」

「ん☆サーゼクスちゃんは、スピード狂だからね☆！」

そしてグレイファイアさんの言葉に、顔を青くして逝くサーゼクスさん。

……つて言うか、アーシアと黒歌、グレイファイアさんに助けを求めていたのか……。

「ちよ……グレイファイア、話し合おう！」

「本より、その心算です。」

神崎様……サーゼクス様は、私と少しだけ、O☆HA☆NA☆SHI☆致しますので、この邸の当主様との会談は、セラフォル様と御一緒宜しく御願ひします。

あ、この男が居なくとも、大丈夫ですよ。

このセラフォル様は、サーゼクス様以上のO☆HA☆NA☆SHI☆の達人ですから。」

「任せて☆！」

「は、はあ……」

「ひ……ひいっ!?ちよ……待……」





直ぐに その時、現場に居た者全員を、この部屋に呼び出して貰おうか。」

「そ…それが…当時の者達は既に、この邸から…」

当時の者達は既に、この邸から出て行つた…と、当主が言おうとした時、

「女王だったジオカと騎士のミユラなら、メイドと執事の服を着て、廊下で控えていたにや〜。」

「……!?!」

黒歌が余計（ナイス）な一言を。

「ふ〜ん☆？ ツヲネちゃんてば、この期に及んで、まくたまた私達に嘘を憑こうとしたんだ〜☆？」

「い、いえ?! そんな心算でわっ!!」

「良いから さっさと呼べ!!」

「ひいいつ!!」



「皆、久し振りだにや〜♪?」

「「「「「「「………。」」」」」」」

…結果から言えば、誰も居ない処か、約半数の、黒歌の当時の仲間が この応接間に集まった。

この時点で、魔王に虚偽を働いた罪で、万死に成るのではないかと思いながら、  
「さて、貴様達に質問する。」

黒歌の主殺害の経緯について、どのように、此方の当主殿に説明したのかな？」

「……………」

「……………」

俺の問い質しに、ナベリウス家当主が眷属悪魔達に「余計な事は喋るな」と言いた気なアイコンタクトをするが、

「皆、正しく直に、話してよね？☆」

「……………」

それ以上の威圧的魔力を、俺の隣に座っている魔王少女様が身体中から漲らせ、部屋中に緊張感を走らせる。

そして結果、嘗ての黒歌の仲間達は、現在の主よりも、魔王の圧力に屈した。

「誠に申し訳有りませんでしたあっ!!」

ガンツ!!

ソファアールから立ち上げると床に平伏して、DOGENZAするナベリウス家当主。

やはり俺の最初の読み通り、真実其の儘に伝えるのは『家』の恥として、尚且つ、当人不在を善い事に、更には当時は、はぐれ悪魔は問答無用で即処分とされる事から、自

分達に都合良く歪曲して、上層部に報告した…と云うのが真相だった。

「…それで、私一人を悪い風に仕立て上げるだけなら兎も角、何の暴走の危険の無い白音を、対面の為に如何にも危険視して、全ての責任を押し付けて、処分しようとしたにや!!?」

「ひえっ!!」

そして今度は それを聞いた黒歌が大激怒。

その身体から迸る魔力を直に感じ、完全に腰が引けてしまう貴族悪魔。

「確かに あの時、白音を一緒に連れて逃げなかった自分にも落ち度が在った自覚は有るにや。」

それでも…幸いにも、その時にサーゼクスが割って入り、グレモリー家に迎え招かれ  
たから、結果、白音は無事だったけど…」

「く、黒歌ちゃん、落ち着いて!」

「黒歌!」

これは流石にヤバいと判断し、俺が黒歌を止めに入ろうとした時、セラフオールが先に慌て宥めに入った。

「…でも、黒歌ちゃんの気持ちも解るし、何よりも魔王(わたし)達に嘘を憑き続けてきた事は、赦される事では無いよね?」

普段の台詞の途中や語尾に『☆』が附く様な口調で無く、完全に魔法少女なんかでは無い、魔王然とした口調なセラフオール。

「人間の1人2人…下級妖怪の1匹や2匹、不当な扱いをしても、何の問題も無いと思っ  
ているのか？」

上級悪魔の貴族様は？

その傲慢不遜な思考が、要らぬ火種を招くという発想は無いのか??！」

「ひえっ?!」

も、申し訳有りません魔王様！赤龍帝殿!!

何卒、何卒 御慈悲をおっ!!」

胼胝が出来てしまわないかとばかりに額を床に擦り浸けるナベリウス家の当主だが、その懇願は俺やセラフオールには届かず、

「…少し、頭 冷やそうか？」

「ひえっ?!」

ピッキイイン…

その台詞と共に、室内温度は氷点下に下降、応接間は完全に凍り付き、その部屋中央には1体の土下座悪魔の氷像が出来上がった。

威力は格段に抑えているが、夏休み前の会談時、カテレア・レヴィアタン相手に放つ





「皆様、次の…本日最後の訪問予定先の、アバドン家には、私が運転しますので。」

ほっ…x2

グレイフィアちゃんの言葉に、安堵な溜め息をアーシアちゃんと黒歌ちゃんが零す横で、シリユーちゃんは何だか物足りなさ気な表情を浮かべている。

「セラフォル様は、助手席で宜しいですか?」

そう言うのとグレイフィアちゃんは、私の返事も聞かずに後部トランクのハッチを開けて、その中に簞巻きのサーゼクスちゃんを放り込み、シリユーちゃん達を後部座席に通すと、

「さあ、出発します。」

私が助手席に座ってドアを閉めたと同時に、普段より少し大きめの魔法陣を展開、カウンタツク毎、アバドン邸へと「あっ!」と言う間に転位移動完了。

アーシアちゃんと黒歌ちゃんが、凄く嬉しそうな顔をしてる中、「何かが違う」…と、『コレじゃない感』全開な顔をしているシリユーちゃん。

…ねえ、シリユーちゃん?

サーゼクスちゃんの運転って、そんなに酷かったの?

「ん?確かに少し、スピードは出していた様だが?」

「多少処じゃ無い!!」



「絶対に二度と、サーゼクスの運転する車には乗らないにや!!」

## 若手悪魔集結！

冥界3日目。

リアス眷属並びにシリユー達はグレモリー邸から転移魔法で、冥界の旧王都ルシファード…の中心地に聳え建つ巨大且つ強固な城、ルシファアー城に来ていた。

その名で察せる通り、四大魔王が1人、サーゼクス・ルシファアーの居城である。ぞろぞろぞろ…

「皆、これから若手悪魔との顔合わせよ。

良くい？何が起きても平常心で居るのよ。

この先に居るのは、将来の私達のライバル達。

無様な姿は見せられないわ！」

リアスを先頭に、駒王の制服、そしてメイド服…否、滅威弩服を着た眷属達、その後ろに着崩した黒い和服を、青基調のシスター服を、そして薄紫の中国衣を着た若い男女が廊下を進む。

この日、この城では、次代を代表する若手悪魔達と、魔王や元老院の歴々との顔合わせが予定されていた。



を掛けてきた。

「久し振りね、サイラオーグ。」

「変わらず元気そうだな。」

挨拶を交わしながら握手する2人。

「皆、彼はサイラオーグ・バアル。」

私達の母方の従兄なの。」

リアスがサイラオーグを紹介。

「其方は…赤龍帝殿か！」

リアスの従兄になる、サイラオーグ・バアルだ。

貴方とライザー・フェニックスのゲームは拝見させて頂いた。

お会い出来て、光栄だ。」

「赤龍帝…神崎孜劉だ。」

そして赤龍帝（シリユー）の存在にも気付き、互いに名乗りながら、握手を交わす。

「御機嫌よう、リアス。赤龍帝様。」

「あら、ソーナ。」

「すみません支取先輩…頼みますから、普段通りでお願いします。」

そして、やはり、廊下に居合わせていたソーナが、リアス達に挨拶。

「…で、匙? お前等 部屋の外で、何やってんだ?」

「いや、それがな…」

若手悪魔達が集う予定の部屋: その部屋に入らず、その入り口前の廊下に屯していたサイラオーグとソーナ: と、その2人の眷属達。

何やら不思議に思ったシリユーが匙に尋ねてみると、

「俺もソーナ・シトリーも、余りにも下らんから、出てきただけですよ。」

その質問に応えたのはサイラオーグ。

「下らない?」

それにリアスとシリユーが声をハモらせ、鸚鵡返しのように受け答えた時、

ドツガツ!!

「『おわ〜っ?!』」

「『『?』?』」

目の前の大扉、そして数名の悪魔が、眩い閃光、爆音爆発と共に、部屋の内側から吹き飛ばされた。

「ケホ…ななな…何なのよ、これ?!」

立ち込める煙の中、不意の出来事に たじろぐリアス。

「実は着いた早々、コイツ等の主である、ゼファードルがな…」



「…あの、グラシヤラボラスの問題児が？」

今度は一体、何を…」

サイラオーグから、ゼファードル・グラシヤラボラスなる人物の名を聞いた途端、「またか…」とばかりに呆れかえる表情を浮かべるリアス。

そして、その直後に、

「ゼファードル、アナタ死にたいの？てゆうか死ぬ？いえ寧ろ、今直ぐ、この場で腹かつ捌いて死んで頂戴。」

「ケツ・せっかく、この俺様が、男が全く近寄らない、処女姫様の開通式やってやるつてんだから、素直に喜んで受け入れろや、瓶底お!!」

「ちよ…シーグヴァイラもゼファードルも、少し落ち着いて！」

此処は穩便に…ね？ね？」

部屋の中から聞こえたのは、何やら言い争っている男女の声。

そして煙が晴れてきた中で、確認出来たのは、互いの眷属を引き連れ、睨み合っている男女と、それを止めようとしている一人の男。

一人は褐色肌の顔に白い稲妻ラインのタトウを施している、青髪のチンピラ風、且つ、その風貌に似合う下品な台詞を飛ばす若い男。

一人は、そのチンピラ風な男と言い争っている、かなり度のキツそうな…所謂『瓶底

眼鏡』を搔け、その口調から察するに、性格もかなりキツそうな、長いプラチナブロンドの少女。

1人は その2人の諍いをおろおろとしながら止めようと努めている、目の細い…と  
言うより糸目と云う表現が似合う、黒髪の少年。

「下品なヤツだ…」

「ヤンキーだよ。」

「うわ…気の強そうな女だなあ…」

「あら?あの悪魔(ひと)、何処かで…?」

その3人を見て、様々な印象を持つシリユー達。

「…一応、教えておくれ。」

あのチンピラっぽいのが、ゼファードル・グラシャラボラス。

眼鏡の娘が、シーグヴァイラ・アガレス。

そして、その2人の間で おろおろしてるのが、ディオドラ・アスタロトよ。」

そんな彼等に初めて会うシリユー達に、リアスが説明。

「ふん!そもそも お前の様な祖※※が、この私の御相手する等、ギャグにも成らないわよ(笑)」

「…つんだと、ゴラ、アっ!!」

「だだだ、誰が祖※んだ、テメー?!」

「見た事無い癖に、テキトー言ってるな?!」

「そんなリアス達を後目に、言い合いを終わらせる気配の無い、ゼファードルとシーグヴァイラ。」

「ふっ…其処迄言うなら、望み通り、見定めてやろう。」クイ…

「シーグヴァイラは、そう言うと、眼鏡のズレを戻し、その眼鏡をキツラーン…と妖しく光らせ、ゼファードルの下半身を刮目。」

「ふむふむ…サイズD 硬度C 持久力E 総合スタミナD…」

「やっ、止めろー…!!?!」

「桐生かよっ?!」

「まさかの戦闘力(笑) 測定に驚愕する、ゼファードル…と、シリユーと匙。」

「退いてろ、ディオドラ。」

「おい、ゼファードル、シーグヴァイラ…」

「2人共、其処迄だ。」

「わわっ?!」

「そんな中、2人の諍いの仲裁に入っていたディオドラを押し退け、サイラオーグが割って入る。」

「全く血の気の多い連中だ。」

…チィ…だから俺は、デビニュー前の会合等、不要だと進言したのだが…」

サイラオーグは、この度の若手悪魔の集まりに、消極的だと窺わせる発言を舌打ち混じりに吐き捨てると、

「ゼファードル、シーグヴァイラ…。」

まだ続ける心算なら、この俺も混ぜさせて貰うが?」

要約するならば「力づくで止めさせて貰う」と、2人に言い放つ。

「あ?」

しかし、その言葉に聞く耳持たぬ者が、約1名。

「テメー、何言ってやがるんだ?!

このバアル家の出来損ないg(バキィツ!)ばるざつく?!」

そう言いながら、拳を振り翳すが、それは躲され、逆に顔面に強烈な右の拳を浴び、ゼファードルは部屋の入り口、リアス達の前迄、吹き飛ばされてしまった。

「忠告は、した。」

そしてチンピラ悪魔を吹き飛ばした本人は、やれやれと云う表現で呟くと、

「…それで、お前は どうする?」

争っていた もう1人の瓶底眼鏡の少女に怒気を孕んだ顔を向け、問い質す。

ふるふるふる…

それに対して、シーグヴァイラは顔に無数の青い縦線を浮かべると、無言で両掌を前に差し出し、首を何度も横に振りながら、降参の構え：戦る気が無い事を必死にアピール。



「う…が…」

リアス達の前で、殴られた顔を抑えた儘、まだ起き上がれないゼファードル。

「……………」

それを、何だか可哀想な物を見る目で居る、駒王学園の皆さんだが、

「何、見てやがるんだ、テメー等あ?!」

その視線に気付いたゼファードルが、顔を真っ赤、怒りの形相で起き上がり、

「あ!?何だ?オメー?」

その中の一人にターゲットを絞り、八つ当たり気味に因縁を振っ掛けてきた。

「テメー…悪魔じゃねえな、人間か?」

何で人間如きが、冥界に居んだ、コラ?」

サササササッ…

この時点で其の場に居合わせていた、絡まれた当人を除く、オカ研&生徒会の皆さん

は、要らぬ巻き添えを恐れ、距離を置く様に離れるのだが、

「何 黙ってんだ? お前わっ!!」

その殺伐とした空気を察せないゼファードルは、構わずに目の前の男の顔面目掛け、拳を撃ち込むが、

ずん!

「かつ…ほ…?」

それは標的には届かず、代わりに自らの鳩尾に、痛烈な一撃を赦してしまう。

「くはっ…ゲホッ…」

顔面蒼白、息を詰まらせ、拳を埋められた腹を抑えながら、両膝を床に着くゼファードル。

「て…テツメエ…!」

そして その姿勢その儘で、自分の 土手っ腹に一撃を喰らわせた男…シリユーを睨み付けると、

「テメエ、解っているのか?

俺はグラシヤラボラスの、次期当主だぞ!?

高が人間の分際で、こんな巫山戯た真似しやがって、只で済むと思っっているのか?」

自分の『家』を名乗り上げ、優位に立とうとするが、

「成る程、つまり先の行動は、貴様個人で無く、グラシヤラボラス家として、この俺に引いた…：そう解釈して良い訳だな？」

その程度の脅しが、この男に通じる筈も無く。

「お、おい お前等！何、ぼおくと見てやがるんだ？！

お前等全員で、この生意気な人間、殺つちまえ!!」

『家』の権威で圧してみても、動じる様子の無いシリユーに、今度は自分の眷属達を使い、数の暴力で、斃そうとするゼファードル。

「……………」

ザザツ…

その言葉に従う様に彼の眷属達が、事の最初、シーグヴァイラの一撃で部屋の大扉毎吹き飛ばされた者も一緒になり、シリユーの前に揃い立つ。

そして…

かばあつ！

「……………すすす…すいませんでしたああつ!!」

「…はい？」

「来るなら来い！」とばかり、戦闘姿勢を構えるシリユーに、全員で土下座。

これにはシリユーも、少し拍子抜け。

「申し訳有りません!」

「ウチの大将、凄く頭が悪いんです!」

「情弱なんです!」

「根っからの『俺様E R E E E!』なんです!」

「我々から、よく言っただけで教えますので、御家取り壊しだけは、どうか御堪忍を!!」

「何卒、何卒、怒りをお鎮め下さい!」

更には次々と、謝罪の言葉を繋げるゼファードル眷属達。

「な…お前等、一体…?」

「ふっ…頭が無能な分、下の眷属達は、しっかりと、しているみたいね。」

「はあ!?!」

何が起きているのか、理解が追いつかないゼファードルに、シーグヴァイラが話し掛ける。

「ゼファードル、お前は、まだ、あの方が誰なのか、気付けないのか?」

お前の言っている只の人間とやらが、冥界に…ましてや、まかり間違っても魔王様の居城に、このこと足を踏み入れられる訳が在るまい。

その時点で、普通の者ならば、此方の御方が只の人間では無い事程度は、容易に想像が点く。



そして その人間が、リアスと…グレモリー家の者と一緒に居るとなると、自ずと答えは1つに絞られる。」

「ふっ…大公家の令嬢は、なかなか聡明だな。」

このシーグヴァイラの解説に、シリューは称賛の意。

「ま、まさか…」

そして この時点で漸く、自分が絡んだ人間が何者たのか察したゼファードルに対し、

「【赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）！】

（Boost!!）

シリューも神器を発動させ、

「…これなら、貴様も この俺が何者なのか、理解出来るだろう？」

それを名刺代わりに、自分が何者かをアピール。

「せ…せ…せ…（ガクッ）」

「た、大将お？」

「若あ?!」

そして、それを見て、完全に理解したゼファードルは、その後 結局立ち上がる事は無く、自分が喧嘩を売った男の正体に恐れ慄き、ズボンと床を濡らすと同時に気を失っ





あの後、何故だか気不味い顔をしたシーグヴアイラは眷属達を連れ、サイラオーグの下へ。

シリユーも何やら色々と話していたリアスやソーナ達と合流して、彼女達の会話に混ざっていた時に話し掛けてきたのは、ディオドラ・アスタロト。

「も、もしかしたら 其方の女性は、アーシア・アルジエントさんでは、ないでしょうか？」

「はい?」

「や、やっぱり そうだ!

ライザー・フェニックスとのゲーム、チラツと画面に写った時に、もしかして…と思っていたんです!!」

「え…えと…」

どうやらアーシアの方は心当たりが無いのだが、ディオドラはアーシアを知っているらしい。

「アーシアさん、僕ですよ!

忘れたのですか?

ほら、貴女に怪我を治してもらった!」

バサツ…

「ひえっ!？」

そう言うのとディオドラは、羽織っていたマントを脱ぎ捨て、その下に着ていた上着のボタンを上から順に外していき、赤面するアジアに胸元を晒したと同時に、

「何をやっているのだ？ 貴様わっ!？」

すばかーん!!

「ごんぎえふ?!」

赤龍帝の張扇による一撃を、後頭部に まともに貰ってしまふ。

「あ痛たたた…」

い、いきなり何をするんですか？

如何に貴方と云えど、不条理な暴力は控えて戴きたいのですが?!」

涙目で後頭部を押さええながら、シリユーに物申すディオドラだか、

「喧しいわ!」

いきなり女子の前で衣服をはだけるとは、貴様は一体、何を考えているのだ?!」

「ううっ!？」

逆に、正論な…至極尤もな、正論で斬り返される。

「……………」

尚、その言葉を聞いたリアス達が、何やら突っ込みたいのを必死に我慢していたのは、

謂う迄も無く。



セラフオルー。

そして実年齢は定かではないが、見た目はサーゼクスやセラフオルーと変わらぬ年代に見える男。

そして もう一人、間の抜けた挨拶をしてきたのは、スキンヘッドに髭を貯えた風貌をした、壮年の男。

セラフオルー・レヴィアタン、そしてサーゼクス・ルシファーと並ぶ四大魔王の一員である、アジュカ・ベルゼブブとファビウム・アスモデウスである。

「やあ。初めまして、魔王殿。

赤龍帝、神崎孜劉だ。

それとセラフオルー…は、昨日振りか。

…で、サーゼクスさんは？」

「サーゼクスちゃんなら今、元老院（おじーちゃん）達のお守りしてるよ☆」

「お守り…ね…（笑）」

セラフオルーの解説に、思わずシリユーは苦笑する。

「それから赤龍帝…神崎殿にも伝えておきますが…」

アジュカが前日、この城にて行われた、魔王と墮天使総督アザゼルとの、会談内容の報告を始めた。





「…成る程、でも それは、最初から或る程度は想定された事だったのでは？」

「確かに、そうですね…」

アジユカの説明によると、悪魔、天使、堕天使の3勢力が和平協定を結び、一見3者の中では平穏が訪れたかに見えたが、それは別の問題を起す種でもあった。

和平…即ち、悪魔、天使、堕天使が手を取り合う事を、それを好しとせず不満とする者が、各勢力に多かれ少なかれ存在するらしいのだ。

悪魔側には現時点で明らか様に その様な意思を見せる者の確認は出来ては いないが、天使、堕天使の側では それぞれの組織を出て行く者が存在していた。

尤も今の処、敵対行動を示してきた者は居ないのだが…

「アザゼルは『そんな時や構わねー。遠慮無く殺ってくれ。』と、言っています…」

「ミカエルは何と？」

「アザゼルちゃんから聞いた話だけどね、ミカエルちゃんも、似た様な事を言ってるらしいよ☆」

「…出奔者の受け皿に成りかねない、あのテロ集団を白龍皇達が潰してくれたのは、本当にフアインプレイだったな。」

…近い内に もう一度 改めて、トップを集めて話し合う必要性が有りますね。」



ぞろ…

6人の次代を担う若手悪魔が入室、魔王達の前に整列した。



「この度は よくぞ集まってくれた。」

冥界の次代を担う者達よ。

今回の会合は、貴殿等を見定める為に開いたのだが…」

「早速、やってくれた様だな…」

横一列に並んだリアス達若手悪魔に、元老院の老悪魔達が話し掛ける。

「…チイツー!」

その言葉に正面から見て右端、未だ左頬の腫れが引いていないゼファードルが、小さく舌打ち。

「君達6名は、家柄、実力共に申し分無い、次代の悪魔だ。」

だからこそ、デビュー前に競い合い、互いに力を高めて貰おうと思っている。」

「それは、私達若手で、レーティングゲーム…と云う事ですか?」

サーゼクスの言葉に察したかの様に、眼鏡を鋭く光らせ、質問を投げかけたのはシーグヴァイラ。

「…そうだ。」

エキシビジョン形式で予定している。

これには天界や「神の子を見張る者（グリゴリ）」、そして それ以外の神話勢力からも、何名か識者を招き、観戦して貰う事でレーティングゲームの有効性をアピールするという側面も有る。」

「それ以外の神話勢力…ですか？」

「…そうだ。」

北欧のアスガルド、そして此方の赤龍帝殿の繋がりで、ギリシャのオリンポスからは、既に招聘が決まっている。」

『それ以外の神話勢力』という言葉に反応したディオドラに、アジュカ・ベルゼブブが具体的に説明。

「各界が手を取り合い、敵となる勢力に対抗する力を得る為の、足掛かりとなるだろう。」

「敵…？あの「禍の団（カオス・ブリグード）」の、残党の事を言っているのですか？」

「それも含めて…だね。」

続く『敵』という言葉に、過敏に反応をしめたのはサイラオーグ。

「我々も、テロリスト達との戦に加わるのですね？」

「いや、敢えて断言は しないが、可能な限り、若い悪魔達は戦場には投入したくないと云うのが、此の場に居る者達全員の考えだ。」

「な、何故ですか？

我々が まだ若い未熟者だから……とでも、言いたいのですか？

確かに若いとは云え、我等とて悪魔の一端を担います。

十分に戦えます！」

魔王と元老院の総意に、臆する事無く納得往かずの姿勢を見せるサイラオーグだが、

「その勇氣は認めよう。

しかし、もしも成長途中の君達を喪う事になれば、それは悪魔界にとって損失は計り知れない。

それだけ君達は、我々にとって大事な宝なのだよ。

その事は、理解して欲しい。」

「……解りました。」

サーゼクスの言葉に、理解はしたが、納得は出来ないと聞いた気な顔のサイラオーグは、とりあえず言葉の矛を取めた。

「さ……それじゃあ次は、君達の今後の目標を聞かせて貰いたい。」

「先ずは、一番左端（コッチ）の、サイラオーグちゃんからだね☆」

「……はい。」

セラフオルーの指名に、サイラオーグは頷き、口を開く。

「俺は…魔王になるのが夢です。」

「ほう…」

「大王家から魔王が選ばれるとしたら、それは前代未聞だな。」

その発言は想定外だったのか、元老院達は多少の戸惑いを見せながらも、感心の表情を浮かべる。

「俺しか居ない…冥界の民が感じれば、そうなるでしょう。」

それに…」

「それに？」

「今、俺は、バアル家次期当主として此の場に居ますが、恐らく現当主である俺の父上は、俺に『家』を継がせる気は無いでしょう。」

何しろ俺は、古き伝統を重んじるバアル家では、出来損ないなのですから。」

「「「「「「……………」」」」」」」

サイラオグの言う『出来損ない』の意味を理解している元老院達は、思わず沈黙。

「(ボソ…) セラフオール？ そう云えば さつき、あのゼファードルとやらも、彼の事を出来損ない呼ばわりして殴り飛ばされたのだが…？」

「(ボソ…) 後で教えてあげるよ…」

シリユーとセラフオールがヒソヒソと会話する中、次はリアスが、

「私はグレモリーの当主として生き、レーティングゲームの各大会で優勝を重ねて行く事が、現在の目標ですわ。」

「ふむ！」

「ほお☆流石はリアスちゃん☆

次はソーたんの番だね☆」

自身の語る目標に、2人のシスコンが満足気に感心する中、ソーナの番となる。

「冥界にレーティングゲームの学校を建てる事です。」

「む？」「は？」「んん？」

このソーナの発言に、疑問符を浮かべる元老院達。

「…レーティングゲームを学ぶ場所ならば、既に在る筈だが？」

「それは上級悪魔と一部の特権階級の悪魔のみにしか、通う事が許されていません。」

私が建てたいのは、下級悪魔、転生悪魔も通う事の出来る、分け隔ての無い学び舎です。」

「うん、うん！☆」

「ほう…」

初老の悪魔の男が発した質問に、毅然と応じるソーナに、感心、或いは誇らし気な表情を浮かべる、2人のシスコン魔王。









シリユーである。

今迄座っているだけで、ずっと（ヒソヒソ話を除けば）沈黙していた男の発言に、場内は再び、より静寂に包まれた。

「ふ……ふん！どうだ、ソーナ殿？」

赤龍帝殿も、そなたの夢とやらを、下らないと申されておるぞ？」

「流石は赤龍帝殿！現実と謂う物を、解っている！」

「ソーナ殿も……そしてレヴィアタン殿も、もつと現実をだな……」

「し……シリユーちゃん？ど……どうして？」

しかし直後、老いた悪魔の男達が、確かに気に入らない存在では有るが、一応は強力な賛同者を得たとばかり、したり顔で更に捲くし立てる。

そして まさかの『あちら側』とも受け取れる発言に、涙ぐむセラフォル。

「はあ？何か勘違いしてないか？」

今程、『下らん』と言ったのは御老体、貴方達に対しての発言なのだが？」

「「「な……何と!?!」」」

しかし、シリユーの口から発せられていたのは、ソーナに対してではなく、

「下らん！そんなに自分が実現不能な事柄は、他人にも不可だと思ひ込んでいる、その目出度くも古い脳味噌から成る思考が下らなき過ぎると、俺は言っているのだ!!」

「シリユーちゃんー！」

元老院の者達に対しての言葉だった。

「前世（むかし）の友の言葉を借りる事になるが…御老体方、まさか夢とは不可能と同じ意味だと思っているのでは あるまいな？」

夢、イコール不可能だと考えるのは、それは もはや、人生を諦めた…正しく貴方が今の容姿な如くの老人に等しい。」

「…な…?!」

「支取s…コホン、ソーナ嬢の語る、何人でも通える、レーティングゲームの学び舎。

良いではないか。俺は、素晴らしい夢だと思うが？」

「神崎…君…」

「シリユー…」

ソーナが、そしてリアスが、自分の夢、自分の親友の夢を非と思わせていて一転、シリユーの肯とする言葉に顔を綻ばせる。

「ふん…！そもそも俺には、上級悪魔とやらが、そんなにも優れた存在とは思えぬのだがな！」

高が、偶々に貴族の家に生まれたと云うだけで、自分自身は見合った実力も、何の功績さえも持たず、己の祖の偉業をまるで、自分の実績と勘違いして偉そうに振る舞う…

それが今の、冥界：悪魔社会の貴族ではないのか？」

「え？」「は？」「な？」「へ？」

そして、シリユートの口撃は終わらない。

「な…せ、赤龍帝殿！」

それは聊か言葉が過ぎぬのでは、なさらぬか？」

1人の老悪魔が、シリユートのマシンガントークを窘める様に止めに入るが、

「ふっ…：貴方達の、ソーナ嬢に対する発言を聞くに、古き伝統に縛られ、新たな可能性を見出そうとしない姿勢を見て、そう改めて感じたのだが？」

それでも赤龍帝の舌は、止まる事を知らない。

「それとも何か？」

ソーナ嬢が提唱する学び舎を建てた結果、其処より自分達より身分の低い者が才能を發揮して、台頭するのを恐れている故の、否定的発言か？

何しろ、上級悪魔と云っても…」

「?!」

ここでシリユートは一瞬、ゼファードルに目を向けると、

「自らが『出来損ない』呼ばわりした者には圧倒され、更には目の前の相手が人間と云う『種族』だけで、其の力量を見切る事すら出来ず、考え無しに牙を向ける…：敢えて謂うな

ら『無能』な者が、未来を背負う立場として、この場に居るのだからな！」

「うっ……」

「加えて言えば、聞くに其の事の起こりは、そのゼファードル殿が、其方のアガレス家の令嬢に、貴族に在るまじきな下卑た話を持ち掛けた事らしいが？」

「いや、それは、その……」

「(ボソ……な……何だか、ゼファードルの公開処刑になつてきてるわね……)」

「(ボソ……因縁吹っ掛けられたの、地味に引き摺っていますね。)」

「そもそもだな……」

リアスの言葉通り、先程のゼファードルの貴族らしからぬ言動を引き合いに、更に言葉繋げて往く。

「な……な……」

赤龍帝殿！いい加減に為され！」

このシリユーの一連の発言に、ゼファードル云々は兎も角、その前の下位の悪魔達の台頭を恐れている云々に対して、完全に頭に血を登らせて顔を真っ赤にした老いた悪魔が怒鳴り散らした。

「貴公は我々悪魔と、同盟を結んだのであろう？」

余りにも貶め過ぎる発言は、控えるべきでは？」

「俺は別に、貶めている訳では無い！戒めているのだ！」

それとも何か？

貴方は、所謂イエスマンの発言しか、受け入れられないとでも言う心算か？」

『……………』

本来ならば若手悪魔達と魔王、元老院の面々が顔を合わせ、語らう筈の此の場が、何時の間にか、赤龍帝と元老院の歴々が言い争う場に変化。

しかし、古きからの現状を良しとする老人と、新たな可能性を唱える若者？の話は交わる事は無い。

その状況を、或る者は内心で溜め息混じりに、また或る者は興味深く。

そして また或る者は、自分に話が飛び火して来ないか恐れ、更に また或る者は、大笑いしたいのを我慢しながら、それぞれが それぞれの感情、思惑を秘め、無言で見守っている。

「ま、魔王様方も、何時迄黙って見ておられるのですか？」

赤龍帝殿……いや、この人間、此処迄 我々悪魔を貶めているのですぞ!!」

「そ、そうじゃ！魔王様の手で、この痴れ者に裁きの鉄槌を！」

「さあ、魔王様！」

「はい？」「へ？」「え？」「ふあ？」

口では…当然ながら、あのコカビエルを一蹴した者に、力でも…勝てないと思ったか、今度は老人は、ずっと傍観者となっていた魔王達に、シリユーをどうにかするよう呼び掛けるが、

「…僕は、別に彼は、其処迄悪魔を貶めている様には見えないんだけど…?」  
「え…?!」

「同じく。外様として、我々とは別の視点から、遠慮無く上の立場の者に意見してくれるのは、非常に有り難い存在である…と、私は感じている。

確かに多少、耳が痛いのも事実だが…」

「…でしたら、尚の事!」

「…いや、だから それを力で黙らせると云うのは、それは彼…赤龍帝殿の言葉を全肯定するのと同じだよ?」

「なっ…?」

「ふあ…面倒いし…」

「そんなに無理矢理に黙らせたいのなら、自分達で やれば?」

「うっ…!」

「私はソーさんの味方になってくれた、シリユーちゃんの味方だよ? ☆

シリユーちゃんを相手にするなら、レヴィアさんも相手になっちゃうよ? ☆」



「ううっ?!」

しかし魔王達は、様々な理由で その気は無く。

「まあ、此の場の主役は、君達でなく、彼等若手なのだから、何時迄も言い争うのも好ろしくないだろう。」

ほら、彼等も どうしたら良いのか判らない…そんな表情になっているからね?」

「「「「「……………」」」」」」

尤もアジユカには、この諍いを終わらせる気は有つたらしく、リアス達の存在を呼び水に、それを終わらせる様に努める。

「「うう…アジユカ様…?」」

「…確かに。」

アジユカ殿の言う通りだな。

それなら、最後に一言だけ…」

カタツ…

アジユカの言葉に、黙り込む老人達。

それに対してシリユウは席を立つと、

「…事の始まりとなった、貴方が啖い飛ばしたソーナ嬢の夢の件だが、自分達が出来ない、やろうともしない事を、それをイコール基準として、誰にも不可能であると決めつ

ける様な発想は改めるべきだ。」

タンタンタン…

ゆっくりと階段を降りながら話していく。

「何よりも、ソーナ嬢には…」

「？」

そして若手達…ソーナの横を通り過ぎると、この会合の間の正面入口である大扉の前に立ち、

「彼女の夢を実現すべくアシストしてくれる、立派な眷属達が居る！」

カチャ…

その扉を開くと、

「わわわっ!？」

「「きゃあっ?!」「」

「「ひええっ?!」「」

廊下側から聞き耳を立てる様に扉にへばり付いていたのか、匙、椿姫を基とした、ソーナの眷属達が倒れ込む様に入ってきたのだった。

「あ、アナタ達…?!」

「ど、ども会ちょ…ソーナ様…魔王様方…」

それを見て、目を丸くして驚くソーナ。

そして何だか、気拙い雰囲気や誤魔化す様に、硬い笑顔で挨拶する匙達。

「全く…立ち聞きは芳しく無いぞ? 匙?」

「う…モウシワケ…アリマセン…」

対面的に『赤龍帝』として、呆れ顔で、尚且つ笑いたいのを我慢している様な顔で話すシリユーに対して、匙も普段のクラスメイトとしてで無く、下の立場の者として、馴れない敬語で受け答え。

「(ボソ…どうせなら、先輩が啜われてる時に、怒鳴り込んで来いよ?)」

そしたら少なくとも、俺とセラフォルは、此の場は兎も角、後で『よくやった!』って、内緒で誉めてやったぜ?

ついでに支取先輩も感動の余り、『ありがとう、匙?』って頬ちゅー位は、してくれたかもぜ? www」

「(ボソ…バ、バツカヤロ!!)」

そして小声で、普段の遣り取り。

~~~~~

その後、匙達も退場し、刺々しい空気の中、魔王達と若手悪魔の対面は漸く再開され、残る3人の若手達も現状の目標を語り、その後の『魔王様方と元老院の皆さんの有り難

い御言葉（笑）』を経て、今回のイベントは無事に？終了した。
「それじゃあ お疲れさん。」

ああ、ゲームの組み合わせだけど、明日のパーティーの締めめに、来賓の皆さんの前で発表するから、皆、楽しみにしててね。」

Dの悲劇（仮）

「はああ〜……」

ルシファー城の一室。

若手悪魔と若くない悪魔との顔合わせが終わった後、宛行われた部屋にてデイオドラ・アスタロトは、思いつ切りの溜め息を零しながら凹んでいた。

「まさか…彼女を保護する前に、寄りによって赤龍帝に拾われるなんて…」

…そうなのである。

実は、アーシアが教会を追われる原因となった、彼女に癒やしを受けたと云う負傷していた悪魔…

何を隠そう、コイツである。

しかも その傷は、自分の指示で、己の眷属達に、傷付けさせた物。

…かと言って、別に彼は真性の『M』な訳では無い。

彼は、とある計画を練っていたのだ。

〈〈

眷属達に頼んで、ある程度なダメージに負傷させて貰う。

← その状態で、聖女・アーシアたんの前に姿を見せる。

← すると心優しい、『天使マジ天使』なアーシアたんは、自分が何者であろうが、神器によつて、傷を治してくれる。

← しかし、その現場を見た教会関係者は、そんなアーシアたんを異端だの魔女だの言つて追放するに決まつてる。

← 路頭に迷うアーシアたん。

← 其処に僕が、偶然を装い声を掛けて事情を聞き、「行く場所が無いなら、僕の処に来ないかい？…：そうなってしまったのも、僕が原因みたいだし、責任を取らせてくれないかい？」

← その台詞に、大粒の涙を流しながら、無言で笑顔で頷くアーシアたん。

晴れてアーシアさんは、僕の眷属に！

←

目出度し目出度し。

〈〈

「…な、筈だったのに…ハア…」

「ちよつと！何を黄昏てんのよ?!

早く紅茶！全く、気が利かないわね！」

「あ、ボクも〜！」

「うむ。私も貰おうか。」

「は…はい！た、只今!!」

アーシアさんは私の母に…もとい、眷属となる女性だった…とか思いながら またも

溜め息を吐く中、自身の眷属達へ給仕をするディオドラ。

「…どうして、こんな…orz」

しかし現実には…

〈〈

眷属達に、ある程度処か、尋常でわ無い大ダメージを負わされた。

←

← アーシアたんの前に、姿を見せてみた。

← 余りなスプラッターに、どん引いてしまうアーシアたん。

← それでも必死に、今にも死にそうな演技（半分はマジ）で、神器による癒やしを施して貰った。

← タイミング良く、教会関係者に その現場を抑えられた。

← 『悪魔を癒やす異端の魔女』として、教会を追放され、路頭に迷うアーシアたん。

← そして いざ、彼女に声を掛けようとして人間界へ向かおうとした その時、

「ちよつと！何処に行こうとしてるの？」

「今日はグレモリー領で新しくオープンしたスイーツの店へ、皆で行くわよって言ったでしょ？」

「え…？いや、今日は、その…」

「…「あ つあん!？」返事は『はい!』…でしょ?」「」

「『「それとも『Yes』?』」」

「よ…喜んで…(T T)」

←

この間に、堕天使一派に接触されてしまうアーシアたん。

←

そして最終的には、赤龍帝（いちばんアカンやつ）の保護の下に、落ち着きましたと
 さい。

←

B A D E N D

〈〈

「はあああああ~~~~~……」

宿主の決まっていない、兵士の駒を見ながら再び、深い溜め息を零すデイオドラ。

「今度こそは、アーシアさんみたいな、大人しい眷属が欲しかったのに……」

そうなのである。

この男、巷で聖女とか清楚とか可憐等と噂される、或いは一国の姫君で且つ、眷属足るに相応しい実力を併せ持つ美少女達に言葉巧みに声を掛けては眷属としてきたが、噂と現実は大間違い。

「ケーキ！」

「アイスクリーム！」

「焼きそばパン！」

「は…はいいい！ちよつと待つて！」

その実態は、美少女なのは確かに間違いないのだが、清楚や可憐とは程遠い、あらゆる意味で、強かな お嬢様達だった。

あのライザー・フェニックス同様に、美少女だけで固めた眷属だが、そのヒエラルキーは王（キング）な筈のディオドラが、最下層に位置しているかの様だった。



「それにしても、さっきは本当にウケたわよね〜！♪」

「あのコ、ディオドラ様の事、全然覚えてなかったし。www」

「うっ…うるさいな！もう!!」

その話は、止めてよ！」

「大体、女の子の前で、いきなり服を脱ごうとした時点でアウトだわ〜。」

「それで、赤龍帝さんに注意されるし。」

「いや、だから あれは、あの時の傷を見せようと…」

「…で、その傷を見せたら、今度はリアス様やソーナ様の眷属君達から、一子相伝の暗殺

者?みたいな目で見られたしく♪」

「それは あの時、君達が面白がって僕の胸に、○斗七星みたいな傷を付けたのが、一番の原因じゃないか!!」

傷が深過ぎた上に、アーシアさんの治療が完全に終わる前に、武装した神父に見つかったもんだから、慌てて逃げた結果、中途半端に傷痕が残ったんだからな!!」

「♪ゆわっしょーっく!! w w w」

若手悪魔と魔王、元老院の対面前の控え室にて、アーシアを見つけたディオドラは、眷属にする計画は失敗したが、それでも恋人…も無理として、せめて友達でも…と、少しでも お近づきになろうかと、とりあえずは あの時のお礼を言おうかと声を掛けてみた。

…が、肝心のアーシアはディオドラの事を覚えておらず、思い出して貰おうと胸元の傷を見せようと服を脱ごうとした途端、傍らに居た赤龍帝から、「貴様は露出狂の変態か!？」と、張扇(ぶつり)込みの注意を受けてしまう。

その件で自分の眷属達に、容赦無く弄られるディオドラ。

そう、彼女達の殆どは、清楚や可憐な要素は欠片も無い、所謂『弩S』だった。

今も、自分達に それぞれに用意された部屋にて控える事も無く、ディオドラの部屋を、まるでヤン○ーの溜まり場とするかの如く、屯っていた。

「…で、どーするの?」

あの聖女ちゃん、諦めるの?」

「うう…だって、仕方無いだろ?」

アーシアさんは あの、赤龍帝の女（モノ）になっただから…

いくら僕でも、伝説のドラゴンに喧嘩をする様な、そんな真似はしないよ…」

「…ヘタレ王（キング）www。」

「五月蠅い！ウルサイ！煩い！」

もう、僕の事は放つといってくれよお!!」

眼鏡を掛けた瞳は鋭く、銀の髪はアップに纏め、その躰はリアス・グレモリーの女王（クイーン）である、姫島朱乃にも勝るとも劣らない、グラマラスな肉体を誇る少女。

このディオドラの女王（クイーン）の一言で、赤龍帝と聖女の関係を少し勘違いしているヘタレ王（キング）は、涙目で部屋の角に駆け出し、眷属達に背を向けて、体育座りしてしまった。

「あくらら?」

「もしかして、完璧に凹んじやった?」

「…ちよつと、弄り過ぎたかしら?」

ずずずん…

何だか背中に、ブラックホールの様な物を背負い（イメージ）、指先で床に『の』の字を書く、ディオドラを見て、若干 気拙くなる眷属の少女達。

「ちよつとメイコ、何とかしなさい！」

「へ？私？何で？」

「……あんたがトドメ、刺したんでしようが！」

「仕方無いわねえ……」

皆に責め立てられ、そう言いながらディオドラに近付くのは、先程、トドメな一言を放った女王（クイーン）。

「……ディオドラ様？」

私達が悪かったから、機嫌直して、皆で お茶飲みましょ？ね？」

「……ディオドラ様♪」

「……ちよつちよつ！」

「……美味しいよ？」

「……」

背中から優しく抱き付き、耳元で話し掛ける女王（クイーン）に続き、他の眷属達も声を掛けるが、完全に塞ぎ込んでいる彼女等の主は、只の屍の様に返事が無い。

…本当に仕方無い。最終手段ね。

フウ…♪

「ひゃい!？」

不意に、耳元に艶めかしく息を吹きかけられ、思わず声を上げてしまうディオドラに、女王（クイーン）が追撃の一言を囁く。

ぐい…

「…何時迄も そんなだと、もう おっぱい、触らせてあげないぞ?」

「（ビクウツ!）……………っ!?」

背中に胸を強く押し当てると同時に発した その言葉に反応、思わず肩を大きく飛び上らせるディオドラ。

「うむ、私もだな!」

「ちゅーも、ダメだからね!」

「もう一緒に お風呂、入ってやんないし〜♪」

「吸わせないぞ〜?」

「挟んでもあげないからね〜♪」

「当然、XXXXXXXXも無し!!」

そして その反応に脈有りと見て、煽る様に、言葉を繋げる眷属達。
「……………」。

スク…

彼女達の呼び声に、遂にディオドラは無言で立ち上がる。

そして眷属の少女達の輪に加わると、

「はい、どーぞ♪」

「ア…アリガト…」

パリ…

渡されたカップの中のハーブティーを啜りながら、テーブルの上、目の前に有った煎餅を口にするのだった。

「……………」あ、あの…」

「ん？何？」

「お、お風呂…は…？」

「はいはい、また お互いに身体、洗いつこしよーね？」

「ん…。」

端から見れば、戦闘力は兎も角、精神面（メンタル）は王（キング）として、その器には疑問符が付きかねないディオドラ。

パーティー（仮）

冥界4日目。

◇シリユースィde◇

「しかし、アンタ達も来てたとはな…」

「はい。我々もこの度、正式に…ではなく、あくまでもアザゼル殿の私設になります
が、【神の子を見張る者】に加入致しましたので。」

それで今回はアザゼル殿の護衛という形で、冥界入りという訳です。」

「成る程…ね。」

ルシファアー城で催されているパーティー。

あの会合に出席した若手悪魔に元老院ろうがいの皆さんと その眷属や、その他グレモリー卿
を基とする、悪魔の貴族さん達に その眷属。その眷属や、その他グレモリー卿

更には件の和平交渉の関係で、天界からはミカエルが、【神の子を見張る者】からも、
アザゼルと墮天使No.2の、シエムハザ殿が。

そして、他の神話勢力からも、数名のビッグネームが お供を連れて、この広い…本
当に無駄に広過ぎる大広間での、立食バイキング形式のパーティーに参加していた。

「…で、アンタは、その護衛とやらは、しなくても良いのか？」

「はい。今はアザゼル殿とシエムハザ殿には、ヴァーリと美猴の2人が付いていますから。」

その会場の片隅にて、片やソフトドリンク、片やワインを手にして、俺はアーサー・ペンドラゴンと話していた。

アーサーが言うには、あの和平調停の後、ヴァーリのグループは、【神の子を見張る者】に取り込まれたようだ。

主だった理由としてアザゼル曰わく、前回みたいに、あの白龍皇ヴァーリ・ルシファアの馬鹿馬鹿しい暴走行為の類を、『親』として監視する必要を感じたとか何とか。他のメンバーも、良い迷惑だよな。

「まあ、悪い話では無かったですよ？」

アザゼル殿のポケットマネーからですが、メンバー全員に、きちんと給与が支払われる事に…謂わば、きちんとした職に就けた様な物ですから。

其れ迄は日雇いのバイトや、所謂『裏』の武術大会等で、生活費を稼いでいましたからね。」

「地味にリアルだな、それ!？」

「それに、監視されているのは実質、前回色々やってくれたヴァーリだけ…みたいな物

ですから。」

それは とても良い事で。 w w w

「処で、貴方は飲まないのですか？」

「俺は、学生の身だ。」

此処でアーサーが、俺に『酒は飲まないのか？』…と話を振ってきた。

学生…というのものもあるが、俺は前世むかしから下戸…老酒は何とかイケるが、ビールやワインなんかは本当にダメダメなんだよ。

それと…

「ついでに言えば、俺達 駒王勢がくえんは、怖い恐い生徒会長せい様が、目を光らせてるのでね。…

あれ、見てみ？」

「ふむ？ 黒歌…と、グレモリー家の令嬢殿が正座して、ハリセンを持ったシトリー家の令嬢殿に、何やら説教されている様に見受けられますが？」

まあ、そういう事だよ。(笑)

◇小猫 side ◇

「パクパク…ん、美味しい…。」

「「っですね〜♪」」

「はい〜！」

「によー！」

今、私はアーシア先輩、レイヴエルさん、ギャー君、ミルたん、それとルフエイちゃんとおーちゃんと一緒に、ケーキにアイスクリームにシュークリームにプリン……スイーツのハシゴです。

はむ……この餡蜜杏仁豆腐、最強です。

このスイーツのブースには、私達だけでなく、沢山の女性が……。と言うか、この一角、女性で占領しています。

会場にはスイーツ大好きな男性も居るでしょうが、とてもじゃないですが、近寄れる雰囲気では無いですね。

「レイヴエル様〜！」

「聖女さんも居るし〜！」

「リアス様ん処の戦車さんだ〜！」

「ミ〜ルた〜ん♪」

おや？ 私達に誰か、声を掛けてきました。

誰かと思えば……

「あら、お久し振りですわ♪」

「お久し振りです〜。」

「によろ♪」

「ひいいつ?!知らない人が沢山っ?!」

おお、ライザー様の眷属の…

ええ〜つと、この前、私が吹っ飛ばした双子さんと…それと、モブ子さん1号2号3号ですね。

「誰がモブ子さんだ!誰が!」

「イルよ!」「ネルだよ!!」

…そうでした。

ライザー様眷属の、戦車のイザベラさんと雪欄さん、それと、兵士のイルネルミラ…
でしたっけ?

「何か、その一纏めした様な呼び方、止めてくれる?」

…我が儘ですね。

》》》

「…で、赤龍帝さんて、何処に居るか知らない?」

はい?

ケーキを食べながら、皆さんで少しガールズトークしてる途中、双子さんがハモリながら、シリユー先輩の居場所を聞いてきました。

「ライザー様の眷属の半分は、シリユーさんのファンだよ。」

ミルたん、解説ありがとうございます。

シリユー先輩、何気にモテモテですね？

トーカちゃんにチクリますよ？

「あ、シリユーさんなら、あの隅で…」

ここでアーシア先輩が、会場の隅っこ、ルフエイちゃんの お兄さんである、アーサーさんと何やら話しているシリユー先輩を指差すと、

「よし！行くわよー！」

「「おーっ!!」」

…雪欄さん、イルちゃんネルちゃんミラちゃんは、意気揚々と沢山盛られたプリンやアイスの皿を持った儘、シリユー先輩の下へと向かって行きました。

「実は あの子達、あの時のゲームの…その…シリユー先輩のアレ…を見て…それで…です…ね…」

はい、お顔が真っ赤になってるレイヴェルさん、無理しなくても良いですよ？

もう解りましたから。

本っ当にモテモテですね！

あの、裸ドラゴン先輩わ!!

これは もう、絶対にトーカーちゃんにチクってあげるしかないでしょう。

「…お…おい、ちよつと、良いかな?」

「はい?」

そして、1人残ったイザベラさん。

「あ、あの赤龍帝殿と話している、眼鏡の殿方は…」

「あ、私の お兄ちゃんです。」

「っ…何…だどっ!!?」

イザベラさんの質問に応えたのは、ルフエイちゃん。

…つて、イザベラさん?

ガシッ…

「そ、そうか!こ、これからは私の事を、お義姉さんと呼んでも、構わんぞ!」

「は…はひ?!」

スタスタスタ…

そして、イザベラさんも…ルフエイちゃんの両肩を掴んで そう言った後…最終的にはフェニックスの皆さん、皆、シリユー先輩の方に行ってしまった。

だからギャー君?

もう、ミルたんの後ろに隠れてなくても大丈夫ですよ?

絶賛引き籠もり中だとか。

…って、あれから既に2ヶ月経っているのだが？

尚、彼女達ライザー眷属は今回、フェニックス卿夫妻に付き添って、この会場にやって来たらしい。

》》》

「くつくつくつく…」

「ふっ…」

「ほっほっほっほ…」

「……………」

「……。」

「ぎゃーっはっはっはっ(すばかーん!) あじゃばあーっはっはっ!?!」

…この後、本当にVIP達が、こっちにやってきた。

墮天使総督と、そのガードである、銀髪の若い男。

神々しいローブを纏い、長い髭を生やした隻眼の老人と、その護衛であろう、グレーのスーツを着込んだ、長い銀髪の女性。

猫耳を模した様な青いニット帽を被り、白いブラウスの上にクリーム色のベスト、紺色スカートな制服に銀髪の、小猫より背が少しだけ高い少女。

その後ろには、ダークシルバーのスーツにダークブルーのカッター、ゴールドのネクタイを締めた、目つきの悪：鋭い、白髪混じりの金髪の初老の男。

先程迄のライザー眷属との遣り取りを遠目で見ていたのか、数名程 顔がニヤついている：と云うか、普通に笑ってやがる。

少しだけイラついたので、一番遠慮無く大笑いしていた、この男を張り斃したとしても、俺は全然、悪くないと思う。

「ひ、非道くない?! (T | T)」

「「……………」」

バルコニーに佇む、3人の男女。

1人はシリユー。

1人は白髪混じりの金髪、鋭い目付きの初老の男。

今はベツロ・カンクロと名乗っている、元・蟹座（キャンサー）の黄金聖闘士デスマスク。

そして もう1人。

猫耳ニツトを被った銀髪の少女。

今のデスマスクの主であり、ギリシャ、オリンポスからの代表として このルシファール城に来訪した、戦いの女神……『この世界』のアテナである。

「…それでアテナ…殿？話というのは？」「妾の事はアテナ…呼び捨てで良い。」

アザゼルに連れられて、北欧神話勢の主神、オーディンと共にシリユーの前に現れたアテナ。

シリユーは この2柱に挨拶、そして一通りの話を済ませた後、アテナから「個人的に話がある」と、パーティー会場の外に喚ばれていた。

「先ずは赤龍帝…カンザキシリユウ…だったか…。

ベツロ・カンクロを介しての、妾との同盟承諾、改めて感謝する。」

ペコリ…

そう言つて、御辞儀するアテナ。

「…氣にする必要は無い。」

貴女との同盟…有事には冥界（あくま）側を優先する、…という前提であるし。

それに、此方こそ先日、同盟を交わした矢先のコカビエルとの戦い、ベツロ…デスマスクの協力は、非常に助かった。

今回の件、頭を下げるのは、冥界側（おれたち）の方だ。」

「…それでも…だ。」

シリユウの「氣にするな」の言葉に対しても、再度、アテナは改めて頭を下げた。

「参つたな…」

「ああ、前回のバトルなら、マジに氣にする必要は余り無いぞ？

先程も、魔王達から正式に謝礼を受け取ったからな。」

それに、どうリアクションしたら良いのか、やれやれ顔なシリユウに、デスマスクがフオローするかの様な台詞を投げ掛ける。

「それで…本題に入ろう。」

此の場に貴方を喚んだのは、ベツロ・カンクロから聴いた話や報告資料だけでなく、実際に貴方の力を見たくなったから。

此の場で、伝説のドラゴンの力を妾に見せて貰えないか？」

「はい？」

いきなりのアテナの「力を見せろ」の台詞に、目を点にするシリユー。

気付けばデスマスクの仕業なのか、バルコニーには認識阻害の結界が張られている。

「まさか貴女は、この場でデスマスクと戦り合え…とでも言う心算なのか？」

「いや…。噂に聞く、貴方に宿っている神滅具を見せて貰えば、それで良い。」

自分の眷属との模擬戦…嘗ての十二宮、そして黄泉比良坂での再戦を強要されると思

えば、単に「赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）」を見たら満足だと言うアテナ。

「ふっ…俺は別に、バトつても構わねーんだけどな？」

「……………」

【赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）】!!」

(Boost!!)

やや黒く、不敵な微笑を浮かべるデスマスクを余所に、シリユーは自身の神器を左腕に具現化させ、更には

(Welsh Dragon over booster!!)

B a l a n c e b r e a k e r :

B o o s t e d g e a r ・ S c a l e M a i l !!)

その神器を禁手化、龍を象った赤い全身鎧を纏い、

「覇ああああつ!!」

身体全身から、魔力、そして小宇宙（コスモ）を漲らせる。

「ひゅー♪」

迸る その力に、思わず感嘆の意味を込めた口笛を鳴らすデスマスク。

「…脱ぐなよ?」

「脱ぐかつ!」

貴様は俺の事を、一体何だと思ってい r

「露出狂おっぱいドラゴンwwww」

「…デスマスク、後で少し話そうか。」

そして、既知と成りつつある様式美（おやくそく）を、真剣に止めに入ったり。

.....チツ.....

尚、その遣り取りの際に誰にも聞き取れない程の、小さな舌打ちをした少女が居たの

は、別の話である。

「…でも、それで終わりじゃねえ。

その先に、もう一つ、在るんだろ？」

「……………」

赤龍帝の鎧を纏ったシリユー。

アテナのリクエストである、己に宿る、赤き龍帝の“力”を見せたシリユーに、デスマスクの更なる一言。

「本当に参ったね…」

アザゼルからの情報だと云う、本来ならば在り得ない筈の、禁手化（バランス・ブレイク）の更に一歩先。

それを示してみろと言わんばかりのデスマスク、そして夢見る幼子の様に瞳を輝かせ、じい…つと期待大な表情を浮かべているアテナに苦笑しながら、シリユーは更に小宇宙（コスモ）を高める。

「…紅珠黄金龍（ルビーゴールドドライブ）!!」

この掛け声と共に、赤龍帝の鎧はその色を赤からより鮮やかな紅へ、額には龍の頭を、両肩には龍の爪を思わせる造形の装飾が、左腕には円盾が加わり、そして全身からは眩い黄金の光を放つ。

「おおおっ!!」

「…凄い。」

神器の『核』である左手甲の宝珠に、小宇宙（コスモ）を高めた黄金聖闘士としての血を与えた事により、更なる進化を遂げた神滅具【赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）】。その話に聞いた、現状の最終形態を実際に目の当たりにしたオリンポス勢の2人は、1人はストレートに大きく、そして もう1人は静かに、それぞれが驚きと感心のリアクション。

「これで、満足かい?」

——コクン

フルフェイスの兜の影響か、やや低く響いて聞こえるシリユウの言葉に、アテナは無言で小さく頷く。

そして満足気な顔を浮かべたアテナは、
「噂に違わぬ凄まじき力よ…。」

それでは改めて赤龍帝よ…

これが、妾と貴方との、同盟の証だ…。」

そう言つて一瞬、微かに笑顔を見せると、懐から黄金の短剣を取り出し…

「おい?! あんた…っ!?!」



「…どうだ？」

悪魔ではない、人間に師事を仰ぐのが不満と言うなれば、強要はしないが…」

「いえ！赤龍帝殿の紹介の時点で、十分に信用信頼に値する！」

是非とも、お願いしたい!!」

…あの後、今度は紫龍が、俺に会わせたい人物が居ると言うから付いて行ってみると、それは勇ましい面構えをした、黒髪短髪の若い悪魔の男だった。

紫龍曰わく、冥界の名門出身でありながら、悪魔としてのステータスの一つである、魔力を殆ど持ち合わせずに生を受け、数年前前迄は『家』の内外問わず散々と、出来損ない扱いされていたとか。

しかし、その境遇に腐らず、魔力が無いなら…と、悪魔としては比較的発想の外である、肉体強化に努めた結果の末、今の立ち位置を築いたとか。

確かに魔力は申し訳程度にししか感知出来ないが、それを補うかの様な闘気は半端じゃねえ。

それに、僅かに感じさせる…

…成る程、紫龍が俺に、この男を会わせしたのは、そういう事か。

単純な肉体の強さは、既に前世（むかし）、五老峰で初めて会った時の紫龍と同等か、やや下か…

紫龍は俺に　この…リアスちゃんの従兄である、サイラオーグ・バアルなる男を、鍛えて欲しいと言ってきた。

「おい小僧、念の為に先に言っておくが、俺は頗る厳しいぞ？」

「承知!!」

ふっ…：良い返事じゃねーか！気に入った!!

しっかし　この俺様が、悪魔を弟子にする事になるとはねえ…

だが　この、才能の塊の様な男を見せられたら、確かに放置して選択肢は無えわな。

「済まんな、デスマスク…。」

本当は俺が師事したかったのだが…」

「気にすんな。お前は一応、グレモリー優先なんだから？」

まあ、月の終わり頃に行われる、若手同士のゲーム？…とやら迄には、ある程度には仕上げてみせるぜ。

基本、人間より体は頑丈そうだしな。

人間基準の多少の無茶振りも、まあ大丈夫だろ？」

「何だか心配に　なってきたな…」

がやがやと話してる輪に加わり、
すばかーん!!

「痛あいいっ!?!」

「「「え、ええーっ!??!?!」」」」

その中心で何やら喋っていた、赤髪のホルスタインに、かーなり、キツツイ一撃を
くれてやった。

「ななな…し、シリユー?」

「何を、いきなり…?」

「先程、デスマスク…ベッコ・カンク口と話している中、ヤツが俺の事を、『おっぱいド
ラゴン』とか呼んでくれたので、誰情報だと訪ねてみたら…」

「あ…」

「部長?」

「はい?」

「とりあえず、正座。」

「は…はい…(T|T)」

さあ、O☆H☆A☆N☆A☆S☆H☆I☆の、時間だ。



「うわああああ〜〜〜〜〜ん!!」「二二二?」「二二二」

リアス部長にO☆H A☆N A☆S H I☆☆している途中、あのオーデインと同行していた、銀髪スーツの女性が、いきなり大声で大泣きしながら俺達の横を素通り、パーティー会場から出て行つたのだが：一体、何が有った？

彼女が走ってきた先に目をやると、オーデイン、アザゼル、ヴァーリ、そしてデスマスクの4人が揃って、如何にも「やっちまったなあ：」な顔をしている。

恐らくは、あの乳練り総督辺りが、ハラスメントな発言や行為に及んだのだろう。後でヴァーリに何が起きたのか、話を聞いてみよう。

『おお〜い! ☆若い悪魔（ひと）達、隣の部屋に、集合だよ☆!!』

「二二二…?」「二二二」

そして更に、そのO☆H A☆N A☆S H I☆☆の最中、今度は魔王少女が拡声器を使って、若手悪魔達に呼び掛けてきた。

「さあ☆、シリユーちゃんも、だよ☆!

こつちこつち! ☆」

お、俺も? 一体、何事だ!?

魔王遊戯

どん!!

追い詰められたかのように、壁を背にするシーグヴァイラ・アガレス。

そこに迫り寄るはシリユウ。

殆ど0（ゼロ）距離となるまで間合いを詰めると逃げ道を塞ぐかの様に、彼女の右肩の上、顔の真横の壁に勢い良く手を突き、派手な音を打ち鳴らした。

「……………」

そして2人は、その後10数秒、無言で見つめ合う。

「はい☆、15秒経過☆」

「ふう〜…思ってた以上に、これは照れるもんだな…」

「…ドキドキしました。」

そしてセラフォルの一言で、両者は、その状態を解き、

「[[[[[[ひゅーひゅー]]]]]]」

「[[[[[[ぴーぴー]]]]]]」

同時に煽り囃すかの様な、多人数の口笛の合奏が、部屋に鳴り渡る。

「じゃ、次の”魔王様”は誰かな☆？」

「…俺です。」

その沸きが静まった後、魔王少女の呼び掛けに名乗りを上げたのは、サイラオーグ・バルである。

パーティー会場に居た若い世代の者達は、魔王セラフオール・レヴィアタンの一言で会場隣の大広間に集結。

この魔王少女の『若手同士、もつと親睦を深めよう☆！』という考えの基、冥界の若者世代にて、それなりに浸透している、”魔王様ゲーム”なる遊戯に興じていた。

最初は殆どの者達が『魔王様の誘いだから仕方無く』な考えで参加していたのだが、気付けば、その場の殆どがノリノリとなっていた。

【魔王様ゲームの基本ルール】

複数名の男女が集まり、各々に番号を振り当てると、基本は1番と なった者から順番に”魔王様”となり、「甲が乙に○○○○をする」等と宣言した後、ダイスを2回振る。

そしてダイスの示した数字に予め振り当てられていた者達が、その魔王様の命令を実行する…。

…温泉旅行の報告と一緒に!!」

はい。レイヴェルさんの言う通り、これは是非とも、温泉旅行の件共々に、トーカーちゃんに聞き出す必要が有ります。

これは家族に対するアリバイ協力してあげるのですから、当然の権利です。

だから、決して文句は言わせませんよ？

分かつてますか？おっぱいドラゴン先輩？

「どうですか？きちんと撮れてますか？」

「はい！バッチリです!!」

「御苦労様です！」

尚、シーグヴァイラ様は その壁どんのシーン、自身の眷属の方に自分のスマホを渡して、撮影をお願いしていた模様。

確認なのか、早速 動画再生しています。

「おおぅう…今夜は これだけで、10回はイケます！」

.....。

…ナニがイケると言うのでしょうか？



「2人で膝枕、して貰おうかな♪」

王様の順番が回ってきた。

魔王・赤龍帝が出した御題。

この男を知る者達からしたら想定通り、或いはその斜め上を逝く御題に、場内は騒然となる。

「それじゃ、振るぜ〜?」

そう言つて、ダイスを振るシリユウ。

先程も説明したが、このダイスはイカサマ防止の為、あらゆる魔力の干渉を弾く仕様となっている。

…そう、あらゆる『魔力』の干渉は…。

そして、

「によー……………つ!!!」

ばきいっ!!

「ぎゃぴり……………ん?!?」

ウサ耳カチューシャを頭に嵌め、滅威弩服を着た乙漢の豪快な背骨折りが、何故だか坊主頭になっている、ゼファードル・グラシヤラボラスに炸裂した。

「……………わああ……………」

S H I していた最中、泣きながらパーティー会場から飛び出して行った、北歐神オーディンの御付きの戦乙女（ヴァルキリー）についてだ。

あの泣き様は結構 尋常ではなかったもので、少しだけ気になっていたのだ。まあどうせアザゼルが、セクハラな発言や行動をやらかしたのだろうが。

~~~~~

「…お前が悪いのかよ?」

「何故、そうなる?!」

…要約すれば、事の始まりはオーディンの、今回、護衛に就いている戦乙女（ヴァルキリー）のロスヴァイセ女史。

器量良しな筈な彼女なのだが、何時迄経っても英雄（カレシ）が付かない等と、オーディンがアザゼルに何気に話してみると、その墮天使総督は早速に「コイツなんか、どーだ?」…と隣に居たヴァーリを紹介。

すると彼女は、ヴァーリの顔を見て満更でも無さ気に少し顔を赤くする。

…が、この男が

「…申し訳無いが、俺は どちらかと言えば、同い年か年下のが好みなんだ。」

…等と口走り、それを聞いた彼女は

「うわああああああん!!」







ゼファードル・グラシヤラボラス

8月28日 PM0:00〜

リアス・グレモリー

v s

デイオドラ・アスタロト

8月29日 PM0:00〜

ソーナ・シトリ

v s

シーグヴァイラ・アガレス



サイラオーグの地元（ホーム）であるバアル領にて、やはり魔王から要請を受けたミカエルと、「面白そうだから」と、何故だかオーディンが、特訓を受け負っているらしい。そして更にはサイラオーグと その眷属達には、それとは別口で、デスマスクが指導する事になっている。

和平調停により、今回は墮天使であるアザゼルがトレーナー役として、此の場に居る訳だが、やはり過去からの種族としての確執は、簡単に消える物では無い。

ましてや今は まだ、あの調停から一ヶ月も経っていないのだ。

だからこそ、墮天使総督や、転生悪魔でもない『人間』である俺に教えを乞うのが不服だと思う者が居ても、それは不思議ではない。

だからこそ、「やる気の無い者は去れ」と、先に言ってみたが、とりあえずは本当にそれで立ち去る者は、居なかった。

…が、

「二応、君達的能力等は、この資料（レポート）で把握した心算だ。

それを踏まえた、特訓メニューを作らせて貰った。」

「……………!!?」

そう言つて、ゼファードルと その眷属達に、プログラムを書き込んだ用紙を渡すと、

此奴等の顔付きが豹変。

「ふっふふ…巫山戯てるのか？これわ？」

「何なんスカ？この、悪魔でさえも思い浮かばない様な、鬼畜プログラムわ?!」

「…無一理！無理無理無理無理無理無理 絶対無一理!!」

…鬼畜とは失礼な。

単純に、人間と悪魔の体の頑丈さの違いを考慮した上で、俺が前世（いぜん）、五老峰にて修行した内容を少し…ほんの少しだけハードル上げたけなのに。

恐らくはデスマスクも、このゼファードルの今回の対戦相手であるサイラオーグ達に、同レベルか それ以上の、コイツ等の言う鬼畜メニユーを施すであろうと云うのに。

この前の乱闘から察するに、現状で間違い無く劣っていると云うのに…

良いのか？ 此の儘じゃ絶対に勝てないぞ？

「まじで無理ですって!」

「ゲームの前に、潰れるっスよ!!」

「大体 俺は、其処のメイド服から昨日 受けたダメージが、まだ抜けてないんだからな !!」

「もしかして この前、若が喧嘩売ってきたの、まだ根に持っているんですか?!」

あゝ、煩い。

やってもないのに、無理とか決めつけるんじゃない。

まあ、ミルトんの肉体言語のダメージが消えてないと云うのは、解らんでもないが…  
まあ、とりあえず…

燃えろ！我が小宇宙（コスモ）よ！！

「Brats—Don, t—Get—Flurried!!」

バシィツ!!

「「「うつぎやあぁーっ!?」」」

聖域（サンクチュアリ）にて代々、教皇のみに伝えられる奥義で この、狼狽している小僧共を天高く迄吹き飛ばし、黙らせる事にした。

因みに俺も この技は、過去に一度だけ、シオン教皇から喰らった事がある。

仮に「もう二度と貰いたくない技」のランク付けをするなら文句無く、ぶつちぎりでトップ1に入る荒技だ。閑話休題。

ドシヤアツ!!

「「「ぐぺらあっ!?」」」

そして吹っ飛ばされたゼファードル達は、万有引力に逆らう事無く、地面に（顔面から垂直に）落下激突。

「「「うぐぐぐ…」」」



ムの戦力は、大きく変わるからな。

ゲーム迄の1ヶ月で、禁手化（バランス・ブレイク）に至れるか…それが鍵だな。」

「…はいー」

シリユーがゼファードル達を指導している頃、アザゼルは生徒会…即ちソーナ・シトリーと其の眷属達に、各自の訓練内容をレクチャーしていた。

「それから何人かは、この訓練の成果次第で、俺の開発した特製・人工神器を渡そうと思う。」

これはサーゼクス達から、きちんと許可を得てるから、余計な心配はしなくても良いぞ?」

「何?アザゼル、まさか あの、【閃光と暗黒の龍絶剣（ブレイザー・シャイニング・オア・ダークネス・ブレード）】を遂に完成させたのか?」

「むっ殺すぞ、テメー!!」

そこに話し掛けてきたのはシリユー。

それは丁度、ゼファードル達の訓練を粗方見た後、今後のトレーニング内容を話し合おうかと、アザゼルの下に足を運んだタイミングだった。

「と、処で…オメー、『アレ』について、どれくらい聞いた?」

若干引き攣り顔のアザゼルが、先程シリユーが口にした【閃光と暗（…以下略）】につ





ら、その数値・だ・け・ならば、既に戦力として申し分無い。

問題は、王（キング）でありながら、真つ先に敵に特攻（ぶっこみ）仕掛ける脳筋っぷり。

この頭に届くべき養分が、全てバストに行き渡ってしまっている駄肉姫には、過去のレーティングゲームの記録等を参考として、戦略術を鍛えて貰う事に。

たればでは有るが、部長の火力に、支取先輩の頭脳がミックスされたら、本当に最強だと思う。

ん。支取先輩は、部長と真逆で、多少なり胸に届けるべき栄養分でさえ、脳味噌に取り込んでしまったんだろうな。

ミルたんとレイヴェルは戦闘思考に至っては、自分の能力と併せて、その駒の特製をほぼ理解しており、己に合った戦闘スタイルをに既に確立させている。

だから部長とは逆に、少しアドバイスした後は、所謂ステータスの数値をアップさせるのをメインの目的とした、訓練メニューを作成。

木場は、神器の禁手化状態である、聖魔剣を十全に使いこなすと云うテーマがある。

その辺りも含め、サーゼクスさんの騎士であり、自身の剣の師匠であると云う人物に、鍛え直して貰うとか。

しかし、その剣の師匠ってのが、まさか『あの人』だったとは…

サイン、貰えないだろうか？

小猫は夏休み前から変わらず引き続き、黒歌から仙術の手解きを受ける方向。

ギヤスパーは：とりあえずは引き籠もりの対人恐怖症を治す処から、始める事に。

そして最後：アザゼルの指示に、元気良くでもなく、テンパるでもなく、只単に、活気の無い返事をした朱乃先輩。

朱乃先輩の訓練のテーマは、小猫同様に、自分の中に流れる、『血（チカラ）』から逃げず、それを受け入れる事。

アザゼルが普段、ぶっ放している『雷』でなく、それに『光』を加えた『雷光』の修得を奨める。

確かに『光』を組み合わせた攻撃なら、木場の聖魔剣と並び、対『悪魔』：少なくともレーティングゲームでは、大きなアドバンテージと成り得る。

リアス・グレモリーのチームは現状、他の若手チームと比べても、1歩2歩、前に抜き出る事になるだろう。

「…そんな力に頼らなくとも!!」

それに少なくとも、墮天使の貴方にだけは、言われなくない！」

しかし、朱乃先輩は、それを受け入れようとせず、

バツ…

右手、人差し指を高々と空に向けてると、

「…雷光よおっ!!」

カツ…ドツゴオオー…ッン!!

「!?!」

普段、戦闘等で ぶっ放している『雷』でなく、正しく それに『光』を乗せた、『雷光』を俺達の目の前に落とし、巨大なクレーターを作り上げた。

「この程度、やろうと思えば!」

俺とアザゼルを睨みながら叫び、その後 直ぐ、寂しそうな笑みを浮かべ、

「…私みたいな勝手な者が場に居ると、他の皆さんの訓練の邪魔になりますね。

シリユー君…赤龍帝様の謂われる通り、私は此の場から立ち去ります…」

「ちよ…朱乃!! 待ちなさい!」

勝手は許さないわよ!!」

立ち去ろうと背中を向ける朱乃先輩に、リアス部長が呼び止めるが、

「大丈夫、鍛錬は私なりに、きちんとやっていきますから。

ゲーム前日には、邸に戻りますわ。」

「朱…乃…」

その言葉は朱乃先輩には届かず、本当に此の場から去って行ってしまった。

「朱乃…どうして…」

「…部長、とりあえず、ゲーム前日には戻ると云う言葉を信じましょう。」

「シリユー…」

~~~~~

「さ…て…最後に…アジア・アルジエント。」

「は、はい！」

若手悪魔達に一通りの指示指導した後、アザゼルは半分近くは自分の趣味全開で、アジアに神器【聖母の微笑み（トワイライト・ヒーリング）】の活用アドバイスを始めた。

半分趣味と云えども、その内容自体は至って真面目。

昨日の訓練メニュー作成の話し合いの時も そうだったが、サーゼクスさんをして、あの、いい加減に手足が生えた堕天使と同一とは思えない程だ。

「回復を飛ばす…ですか？」

「そうだ。」

アザゼル曰わく、アジアの治療能力自体は完成されていると言っても過言では無い

そうだが、それを行使するには、その対象…負傷者の下に赴く必要が有り、しかも回復中は無防備になってしまおうと云う問題が有る…らしい。

成る程…言われてみれば、その通りだな。

「だから俺も、最初は範囲回復…」

本人を中心に、回復の力をサークル状に展開して離れた相手、しかも その範囲内なら、複数人同時回復も可能となる。

まあ、卓上の理論だがな。」

ベホ○ラー、或いは○者の石だな。

「だが、それも問題が有る。」

「範囲回復は、敵味方の区別が利かない…か。」

「ああ。その通りだ。」

しかもアーシアは性格的に、間違い無く そうなるだろうな。

仮に戦場で負傷者を認識したら、そいつが敵であろうが、回復してあげたい等と心の奥では思ってしまうだろうからな。

只でさえSLGのマップ兵器な如く、敵味方を完璧に判別するのも難しい技術なのに

…な。」

「確かに敵も一緒に回復して、振り出しに戻る…じゃ、意味が無いか。」

最初から この2人、俺の特訓は、この龍王に任せると決めていたらしい。

…って、巫山戯るな(怒)!!

「ドラゴンの修行は、昔からドラゴンとの実戦と、相場が決まっているからな。」

「本当は俺が、直撃に鍛えてやっても良かったが、お前、同級生(オレ)の言う事は、素直に聞かんだろ?」

それに俺とアーシアは、明日の夜には一度、人間界に戻るからな。」

「ヴァーリも既に、人間界(アツチ)行ってるしな。」

「まあな…って、神崎お前、あつちに帰るのかよ?」

「ふ…昨夜、ドライブから いきなり、念話(テレパシー)が来た時は驚いたわい。」

「いきなりのオフアアって、大丈夫だったのですか?」

「うむ、面白そうだったので、二つ返事で承諾したぞ。」

面白そう…基準、それですか?!

「大体、会長とかって この事、知ってるのかよ?」

「勿論。」

はい?」

「当然、支取先輩…と、魔王、セラフオルーの許可は取っているぞ。」

「ソーナ嬢からも、『是非ともガンガンやって下さい』と言われてるぜ。」

「食事中、そしてテントの中、一晩中散々と文句言われたぜ。

「今日は……………（中略）……………、こんな感じかな？」

そして今は、昨日の残りのカレーを食べながら、今日以降の修行内容の確認を、タンニーンを交えて話している。

「いやいやいや！死ぬって！

それ、普通に死ぬるって!!」

「ヴリトラの小僧よ、心配せんでも、手加減はしてやるぞ？」

「いえ！アナタのは、手加減になっていませんから!!」

だが匙は、その内容が大いに不満らしい。

何を緩い事を。

昨夜、デツちゃんとも念話（テレパシー）で話してみたが、あの男、俺の予測通り、結構な鬼畜プログラムを組んでいるみたいだ。

…それにしても、いきなり強制幽体離脱↓あの世逝き↓自力生還強要は、流石に殺り過ぎかと思うぞ？

だが、もつと驚愕なのは、サイラオーグや、その眷属達は、それ等に不平不満を言わず、黙々とこなしていたとか。

若手実力No.1の呼び声は、伊達ではない様だ。

そんな彼等に向け、シリユーは軽く微笑むと、

「よし！全員、滝に打たれての精神集中2時間、逝ってみよう!!」

「「「「でつすよねー!」「」」」」

どうやら予感的中だった様だ。

「…って、出来るかー!ー!ー!ー!っ!?!」

「てゆーか、字が何か違つてなかつたですか?!」

「「「「無ー理!無理無理無理無理無理無理無理 絶対無ー理!!」「」」」」

非難囂々なゼファードル達。

「……………。」

「「「「ひいっ!」「」」」」

そんな彼等にシリユーは、無言で殺気を込めた微笑みを向けて黙らせると、

バサア…

着ていた中国衣の上着を脱ぎ捨てると滝の下に立ち、

「…廬山!昇龍覇!ー!ー!ー!ー!ー!ー!あ!!!」

ドガガアアアツ!!!

滝に向けて、小宇宙（コスモ）を燃やした拳でのアップパーカット一閃。

瞬間、その何トンもの落ちてくる水は逆流し、正しく龍を象ったかの様な渦を巻く水

「それじゃ、俺は もう人間界へ帰るが、修行は きちんと やっていく様に。」

太陽が1日の内で最も高く登った頃に滝業も終わり、近場で捕らえた も○○け姫に出てきそうな巨大な猪の丸焼きを集団で口にしながら、明日以降の修行メニューが書かれたメモ用紙を、ゼファードルに渡すシリユー。

「……っす♪」

『もう帰る』……この言葉を聞いて、この数日中で最も会心の笑顔を見せ、そのメモをゼファードルは受け取る。

「…分かってると思うが…サボるなよ?」

「ととと…当然すよ!」

シリユーの言葉に、多少上擦った口調でゼファードルは応える。

「……………それじゃあな。」

シユン…

ゼファードルの返事に応えると、シリユーは魔法陣転移…でなく、光速のテレポートで、此の場から姿を消した。

「……………。」

「……………」。

「……………」。

「…おい？」

「はい。」

「アイツ、本当に居なくなっただか？」

「はい！あの赤龍帝の魔力、微塵も感じられないっす！！」

「…そうか。くつくくくくくく…」

シリューが姿を消して数分、自分の下僕の言葉に、会心の笑みをゼファードルは浮かべると、

「……………」ひやあつはああ~~~~っあい！！……………」

「けっ！！誰が、んなキツイトレーニングなんか、するかっつの！」

「……………」でっすよね〜！……………」

「…成る程、貴様等の心根は、充々分に、良く解った。」

「「「「の、ノオオオオオ〜〜〜〜〜」」」」」 O。L「「「」」 其処には紛れも無く、赤龍帝（いま、いちばんあいたくないやつ）が、最高に黒（あかる）い笑顔で、立っていたのだった。

「ななな…何で…?」

「気配も魔力も、全然だったのに…」

あわてふためくゼファードル達。

そんな彼等にシリユーは、

「言いたい事は多々有るが、トリアエズ オマエラ、アタマ、スコシ ヒヤソウカ?」

「ひ…ちよ…待…タンマタンマタンマ!」

とある魔王少女の口振りを真似すると、

バシィツ!

「「「「げっふわあ〜!!」」」」

…キツラーン!!

前日同様に、狼狽えるゼファードル達を天高く放り上げ、昼空に煌めく星にしたかと思えば、

バツシャーツァン!!!

1年生でありながら、1軍の控えピッチャーだとか。

因みに駒王（ウチ）の野球部は、この彼氏君の学校に初戦コールド、フルボッコ敗退させられている。

元々ユキコやトーカは、友人達と応援に行くのが確定しており、俺もそれに、半ば無理矢理に付き合わされるのも、夏休み前には決定していた。

更には日本に戻ったは良いが、未だオカ研の皆は冥界に居て、部活も休止中だという事で、暇を持て余しているアーシアも、一緒に行く事に。

因みにアーシアの交通費は、トーカの家族の方が出してくれたそうだ。

ここで今回同行の、トーカ&ユキコの、中学時代クラスメートの皆さん紹介。

・長身で頭頂部に触角みたいな癖つ毛のある：認めたくはないが、爽やか系のイケメン君。

・そのイケメン君に釣り合う様に背の高い、凜とした顔な女子。

多分、このイケメン君と付き合っている。

・チャラ男。

・以前、トーカの弟の全快祝いにも来ていた、ショートカットなスポーツ系女子。

アーシアを見て、やたらと話し掛けてきたチャラ男に、ドロップキックやらハイキッ

クやら炸裂させてシバいてたけど、そういう技はミニスカートを履いている時は、控えた方が好いと思うよ、縞々さん?…な発言は、俺も一緒にシバかれる映像(ビジョン)が脳裏に浮かんだので、止めておいた。

・高そうなプロ仕様なカメラを持った、短髪の男。

…この顔、何となく、殴りたくなる衝動に駆られるのは、何故だろうか?

ああ、身に纏う雰囲気、松田と同じだからだな。

・以前、ミカエルとのOHANASHIが原因で、怒(おこ)になったアーシアを宥める為に甘味屋に連れて行った際、店内で鉢合わせしたトーカ達にスイーツを御馳走した時に一緒に居た、小柄で緑髪のツインテ女子。

・小柄。水色の髪を後ろ側で結っている、ボーイッシュな服装なツインテ女子。

緑髪のコと、何か雰囲気か…

もしかして貴女達、百合百合さんですか?

…後で、トーカに聞いてみるか…。

…以上、7名。

これに、俺、アーシア、トーカ、ユキコを加えた11人の団体さん…ん、何気に大人数だな。

因みに彼等彼女等、トーカやユキコの中学クラスメートだと云う事は、中高一貫の学

校に通つてたと云う事だが、トーカ同様に やはり色々と有つて、全員エスカレーター進学はせず、殆どが別々の学校だとか。



レフト側の席に座る俺達。

「しかし、クジ運無いって云うか…」

「初戦から…ねえ…」

ユキコ彼氏君の学校の初戦の相手は、XX県代表、県立瓦崎工業高校。

結構な不良高校だ、そうだ。

しかし、野球部としては過去、春と夏、通算で4度の全国制覇の実績を持つ強豪校。

その容赦無い打撃は”恐竜打線”と呼ばれ、恐れられていたとか。

ここ数年は、全国では話題に昇らず、地元県で それなりの成績を収める程度のチームだったのだが、去年の秋、このチームの初代主将だった男が監督に就任。

その指導力統率力カリスマで、チームを新生させたとか。

「因みに地元の予選は、全てコールドゲームらしいです。」

「はい、詰んだー！（バキッ！）ほげえっ!？」

その情報に、試合開始前から、諦めて試合終了な発言をしたチャラ男が、スポーツ女子にめられた。

「因みに、コッチは？」

「ああ……」

松田擬きの問いに、イケメン君が解説してくれた。

曰わく……

少し昔に、秋期大会？の予選？で、ピンボールにブチ切れた部員が、その怒りの儘に、相手キャッチャーに金属バットを振り下ろし、それが引き金になり、ベンチの選手達も「ひやつはー！」と雪崩れ込み、新聞に載る程の大乱闘を繰り広げた事が有るとか。その後、半分廃部状態となった。その野球部の監督に就任した新人教師が、その乱闘に関わった部員の1人1人を説得して立ち直らせ、当時1年だった部員が3年生になった夏に、全国へ導いたと云う、マンガの様なドラマが有るとか。

今年の都の予選決勝では、トーカ達の中学母校の高等部との試合。

恵まれた体躯と力量で、1年ながらエースとなった男……つまりは彼等の同級生相手に対して初回、相手の失策（エラー）で出塁したチャンスを活かし、見事に先制。

その後は両チーム共に得点出来ず、終盤の8回9回、抑えとしてマウンドに立ったのはユキコ彼氏。

得点圏にランナーを進ませながらも、ホームベースだけは絶対に踏ませない好投で、その初回に奪った1点を、最後迄守りきつての……ユキコ達からしたら、これまたドラマ

気だと、振る舞うユキコ。

「で、でもさ、杉野、先発ピッチャーと比べたら、よく抑えてたじゃん！」

仮にアイツが最初から出ていたと仮定して、5回からの点の入りを単純に計算してみると…」

ここでフォローする様に、チャラ男が話し出した。

只のチャラ男と思っていたけど、良い心配り、出来ているじゃないか。

何気にユキコ、友人に恵まれているな。

「あ…6対5…」

…って、結局スギノクン、負けてるじゃないか!!?

空気が微妙になったぞ!?

「お前…後でやる！」

「ひいっ!?!」

チャラ男君、後でべられるの決定。 w w w

「…で、神崎先輩？」

杉野は 結局、神崎先輩から見ても、どうだったんですか？」

そして このタイミングで、今度は緑髪のツインテ少女が話し掛けてきた。

「ん、努力家と云うのは伺えるが、やはり…」

やはり、直接会ってみて話さないと、何とも言えないな。

それよりも…

「ねえキミ、この前プリン奢った時以前にも、何処かで会った事無い？」

いや、別にナンパとかじゃないよ？

俺にはトーカーが居るし。」

「え、えっ!?…いい、いや、気のせいじゃないですか?アハ…アハハハハ…」

そ、そうか?

いや、何だか見覚えのある顔なんだよな?

ん、思い出せない…

「杉野も、凹んでいるだろうな?」

「そうだね…」

でも、大丈夫…杉野君は私が直接、慰めてあげる…から…!!」

「「おっ…おお…」」

ユキコの言葉に、女子達が何かを察したのか、顔を赤くして、少しだけ上擦った歓声を上げるが、

「…ちよつと待てい!!」

それで何も察せない程、この劉兄さんは、鈍感じゃないぞ!!

そうゆう【びー!!】な行為は まだ、断じて この俺が認め…おい、今「このイトコ
ンめ!!」…とか思ったヤツ、前に出ろ。

「劉…兄…さ…ん?」

ん?

ここでユキコが、静かに微笑みながら話してきた。

「劉兄さんは、そういうの、言える権利つて、無いと思うの。」

今月の終わり、トーカさんと温泉旅行に、行く…ん…だ…よ…ね…2人つきりで?」

「…な、何だつて…っ!!」

この発言に、数名が喰い憑き、大声を上げて驚く。

「ややや…矢田さん、本当なの?」

「矢田つち、ヤツるう〜!」

「いや…だからね…」

そして、トーカに群がる女子達。

「ここら、車輦内では静かにしないと…つとか言っている場合でわない!!」

「…このタイミングで それを言うのか? お前わ!」

「そ…そうよ、有希子お…」

動揺しまくりな俺とトーカ。

「……………ぶふああっ!!」

「おい、しつかりしろ!」

そして何を妄想したのか、松田弟（※違います）がいきなり鼻血を出してダウンした。

…コイツは何を脳内に妄想（イメージ）したのか、後できつちりOHANASHIして問い詰める必要性があるな。

「兎に角、私と杉野君の事は、下手な干渉はしないで欲しいの…

解るでしょ? 劉…兄さん?」

そして笑顔で、俺に話し掛けるユキコ。

それは正に、有“鬼”子さんの、殺気を孕んだ黒い笑み。

イカン…小さい頃から、この笑顔の時は、逆らわぬが吉なのが、様式美（おやくそく）となっている。

「「「「「……………。」」」」」

それは既に周知なのか、元クラスメートさん達も多少、引いていらっしやる。

「うう…分かった…まあ、アレだ…節度を持ってだな…お互いに…」

「はっ、♪」

結局は、無理矢理に丸く納められてしまった。

クツソーツ！

今度 月末に冥界に行った時、小猫にチクってやる!!
新学期早々、事情聴取受けやがれ！

「あ……どうも……初めまして……」

どうやら このスギノクンも、俺の事はユキコから、何かしら聞かされてはいた様で、ぎこちない挨拶をしてきた。

「ゆ……有希子さんと、お付き合いさせて貰っている、杉野と言います。」

「……知ってるよ。」

この前は、残念だったな。」

「は……はい、どうも……」

俺の事をユキコから どの様に聞いているのか、かなり緊張しているスギノクン。

そして この時点で、ユキコに彼氏が居るのを知ったのか、反町草薙が何だか or ズっているが、それは知った事では無い。

「付き合っている……ねえ……?」

「?!」

仮に この世界がギャグマンガのそれならば、それこそ背中からリアス部長達の様
な、羽を生やした様な、若干、殺気を込めた笑顔で微笑む俺。

「は、はいっ!!……年相応に、健全な……」

ほう? スギノクン、もしかして この俺の今の殺気を感じ取れたのか?

「……………!?!」

…つて、ユキコも？

基本的、『殺気』てのは、ある程度の力量（レベル）な者でないと、素人では微塵も感じ取れない代物なのだが？

「……………」。

『健全に…』：その言葉に何か陰を感じた俺は、更に少し殺気を強め、睨むでも微笑むでもなく、無言無表情でスギノクンの目を確と刮目、『圧』を掛ける。

すると、

ガバツ！

スギノクン、いきなりのDOGGEZA、

「すすす、すいません！実は一昨日、最後迄（えっち）してしまいましたあっ!!」

プレッシャーに屈したのか、正直に白状してしまいましたあっ!!

すばかーん！

「OUCH!?!」

「劉兄さん！虐めたりしないのっ!!」

そして次の瞬間、俺の後頭部に、顔を真っ赤にしたユキコ…否、有、鬼、子さんのハ
リセンが炸裂、思いつきり睨まれました。

「嗚呼…何という事だ…」

小猫レイヴェルだけでなく、何時の間にか、話の輪に加わっていた、リアス部長に黒歌も、俺に追究の構え。

「…敢えて、何事も無かったとは敢えて言わんが、ノーコメントだ!!」

「ま、っ!？」

「そう逃げますか…まあ良いでしょう。」

新学期、トーカちゃんに直接、聞いてあげましょう。」

……………。

い、言えねー…。

まさか、宿に着いて一緒に温泉入って、料理堪能した夜…さあ! いぎ これから! この孜劉のドラゴンが、廬山昇龍覇!!…なタイミングで、トーカに所謂『女の子の日』が発動してしまいました…なんて、とても言えねー。

トーカ曰わく、予定より遅れてるから、もしかして そろそろ…とは思っていたらしいが、まさか本当に、このタイミングで やって来られるとわ…orz

トーカが凄く、泣きそうな顔で申し訳無さそうにしていたが、これだけは仕方が無いし、俺も それでキレルなんて事は無い。

かなり、凹みはしたのも事実だが。

…こんなの俺が正直に話した日には、この場の皆(特に馬鹿猫姉妹と駄肉姫)が、腹

その部屋の中央の円卓、2つ空いた席の内の1つに、俺は着いた。

「ん？デスマスク？」

「アテナは今日は、来てないのか？」

「応。今回の話し合い、元々ギリシャ勢は参加する予定じゃなかったからな。

俺は偶々、お前に頼まれて小僧共を鍛える為に冥界に居た処を、其方の魔王さんに誘われたんだよ。」

「誘ったんだよ☆！」

そして、とりあえず、隣に座っていた、この男や魔王少女と話していると、

「お〜い、神崎〜い?！」

墮天使総督アザゼルが、手招きしながら、こつちを呼んできた。

「どーも。」

「……………」

今回の墮天使総督の付き添いなのか、髭を蓄え武人然とした、厳つい顔の墮天使に一声掛けた後、

「まあ、オメーは途中で、人間界に戻ったからなく？」

実質、俺一人で、あの餓鬼んちょ共を、見て回ったんだからなく？」

「言うなよ……仕方ないだろ。」

それに俺も、エックスの眼を通して、細目にチエックは入れていたぞ？」

アザゼルの脇に付き、自分達が修行担当した若手達の成長具合を話す。

「ま、お前は、人生初めての大勝負に出たんだからな！」

確かに仕方無い!!がっはっはっはっはっは！」

バンバン！

そう言つて笑いながら、俺の背中を叩くアザゼル。…つて、痛いんだよ！

「…で、どーだったんだ？」

あの、乳のデツカい、ポニーテールの姉ちゃんとの温泉旅行、きつちりと決められたのか？

”男”に成れたか？ん？」

お、大声で言うな!!

「はわわわ…若い男女が温泉…混浴？お泊まりいい?！」

「き、キミ！気を確かに持つて!!」

ほら見ろ！またミカエルの付き添いの秘書天使さん、何を妄想したのか、翼が白黒に点滅して、墮天しかかかってるぞ?!

…つて、殺気!!!?

「せ…赤龍帝殿…その、一緒に温泉に行つたと云う、乳の大きい、ポニーテールの娘とは

「一体、だ、誰の事なのかな？」

「…はい？」

見れば、アザゼルの護衛として出張っていた墮天使の男が、凄まじい程の殺気を身体全身から迸らせ、俺に向けて放っている。

「ちよ…待…バラキエル？」

「お前、ちよつと勘違いしてるからな？」

何が起こったのか悟ったアザゼルが、この墮天使幹部…バラキエルを必死に宥めようと
するが、

「ん…？ おくい紫龍？ 胸の大つきいポニテってーと、あの巫女さんか？」

あれ、お前の彼女だったんか？」

「ええーっ!! ぞ、そーなの？」

シリユーちゃん、朱乃ちゃんと付き合ってた、もう そーゆー関係になつてたの？
違ー…

しかし、このデスマスクとセラフホルーの台詞で、この墮天使…バラキエルが何を
思ったのか漸く理解。

「ええ…い！」

3 大勢力の和平が崩れようが構わん！

この男だけは絶対に赦さん!!

この儂が、この儂があつ!!」

「いや…だくかくら! 落っ着けつて!」

「そりゃ、娘と温泉に行つたつて男が目の前に現れたら、普通はキレるよな。

俺だつて、孫娘に そんな男が現れたら、迷う事無く、積尸気だぜ。」

黙れ孫バカ!!

カチャ…

「いや、遅れてしまつて申し訳無い。

少し身内で、ゴタゴタが…つて…

ん? お取り込み中かろう?」

…この後、親父（ギヤグ）補正が憑いて攻撃力が大幅アップした、朱乃先輩の父親である、墮天使幹部・バラキエルの誤解を解くのに結構な時間を費やした。

悪神ロキ！北欧のトリックスター！！

「珍しいな爺さん？今日は1人なのか？」

「ほえ？」

それはリアス達、次代の若手悪魔によるレーティングゲームを翌日に控えての、3大勢力首脳+αの話し合いの会場。

墮天使総督アザゼルの護衛として出向いていた、「神の子を見張る者（グリゴリ）」の幹部の1人：朱乃の父親でもあるバラキエルによる、愉快な（シリユーからすれば洒落にならない）勘違いからなる漸く騒動も収まり、改めて出席予定の者が全員席に着いた時、アザゼルが護衛も連れずに1人で来訪したオーデインに投げ掛けた台詞。

「ん、ん~~~~~?」

その言葉に、長い髭を撫でながら、何かを思い出そうとする様に、天井を見上げる北欧の最高神。

ほんっ！

「お〜！ロスヴァイセ、連れて来るのを忘れおったわい。ほっほっほっほ……」

ガツタガタガタガタっ!!!

3 大勢力＋αの会談。

先ずは半ば飛び入りの形で、オリンポスの代表的な位置で参加したベッコ・カンクロ
…デスマスクが、アテナより聞いた、現状のオリンポスの見解を話した。

オリンポスからすれば、天使・墮天使・悪魔の争いは、所詮は『聖書』という枠の中
での内輪揉めとしか見ていなかった様で、今の処は互いに不可侵不干涉のスタンスを取
りたいとの事。

但し、アテナ個人（個神）は、赤龍帝であるシリユーにのみ、互いに有事には協力し
合う姿勢でいたいとか。

「…では、次は墮天使総督、アザゼル…」

「あく、サーゼクスには既に話してるが、実は昨日つてか今日な…」

ルシファー城で行われている会談故、必然的に議長役となっているサーゼクスの呼び
掛けに、アザゼルが凄く、ばつの悪そうな顔で話し出した。

その内容は、以前、3大勢力和平に不満を抱き、「神の子を見張る者（グリゴリ）」を
抜けた者達が、遂に明から様に敵対と受け取れる行動を起こしたという事。

今迄 敵対者、或いは反逆者として捕らえていた者達の収容施設を本日の深夜に強
襲、その者達を解放、または懐柔したとか

そして、その中には、あのフリード・セルデンも入っているらしい。

た者達こそが異端だ…と主張しているそうだ。

そして死んだとは云え、その信仰は棄てていない…熾天使でなく…あくまでも『神』への忠誠は不変故に、天界の…神が作った『システム』にチエツクされる事無く、墮天使にならない。

「…彼等の、”神”に対する信仰、忠誠は本物です。

出来れば、話し合いで解決したい…。」

「でもよ、彼方さんは、話す心算なんて無いんだろ？」

「…その時は、私達が、前に立ちます。」

「だーかーらー！ー人（じぶんたち）だけで背負うなつての！

気持ちには解らんでもないが、その為の同盟だろうがよ！」

「…ありがとう…アザゼル…」

自分達の処から出た反乱分子に、複雑な感情を持つミカエルを気遣う様に、アザゼルが話す。

3 トップの中で、あくまでも見かけは最年長に見えるアザゼル。

この辺りは、訓練開始時からのオカ研や生徒会（ついでにゼファードル達）への対応からも窺えたが、一応は組織のトップに相応しい、面倒見の良さは持ち合わせている様だ。

「因みに その賊、天使でなく、人間は どの様な構成なんだ？」

「……!!」

アザゼルのフォローで、若干和らいだミカエルの顔が、この俺の質問で またもや硬くなる。

「その様な質問をしている時点で、既に赤龍帝殿は察していると思いますが…」

「聖剣計画の関係者か。」

「…はい。」

…そんな気は、していた。

確かに…特に天使達の中には、悪魔や堕天使と組むを好しとせず、それこそ上役である熾天使を異端視して、己の信念、正義の下に天界を離叛しようとする、頭の硬い者が居たとしても、それは不思議では無い。

そして、その下の人間の信徒。

天使や悪魔等の”人に非ざる者”の存在を知っている、所謂『裏』に…3大勢力の事情に精通している者達だ。

確かに天使同様な石頭も居るだろうが、中には現状に不満を持ち、此幸いとばかりに便乗しての出奔者も居る事だろう。

俺の頭に浮かんだ その最たるが、聖剣計画の関係者。

コカビエルが起こした聖剣騒ぎが発端で、最終的には、人工的に聖剣の遣い手を生み出すと云う、この計画は凍結。

バルパー・ガレイの所業と比べたら、幾分マシでは在るが、それでも非・人道的に値する実験が明らかになり、関わった計画技術者達は、計画内の立ち位置に関係無く組織内の地位最降格。

被験者である戦士達も全員、与えられた、聖剣を使いこなす為の要素…『因子』を体内から取り除かれ、聖戦士から単なる教会戦士の座に戻った。

確かに これでは、不満の有る者が続出したとしても、仕方が無い。

そして この時点で、俺が気に掛かった事が2つ。

1つは

「ミカエル、聞きたいのだが、今後は そうだな、”はぐれ天使” …とでも言うべきか…が襲撃を仕掛けたと云う、天界の施設というのは…」

「はい、察しの通り、紫藤イリナとゼノヴィア・クアルタが居た尼寺も、含まれています…。」

やはり…か。

”はぐれ墮天使”の施設襲撃によって、其処に收容されていたフリードが脱走したと聞かされ、その後、天使の施設襲撃と聞いたから、もしかしたら…とは思っていた。

「それで やっぱり其の儘、奴等と共に去って行った…か。」

「…はい。申し訳無い…。」

「し、シリユーちゃん？これは、ミカエルちゃんだけが、悪い訳じゃ…」

「解ってるよ。」

ミカエルにとって紫藤イリナとゼノヴィア・クアルタについては、俺に対して余程身を縮ませる事柄なのか、必要以上に恐縮気味になるが、今回の逃走は、セラフォルのフォロー通り、ミカエルだけの責任な訳では無いし、今更蒸し返す様に あの時の事を責める心算も無い。

「じとー…(？|?)」

「いや、本当だから！」

訴え掛ける様なジト目のセラフォルを宥め、俺は もう1つの気になった事について話し出す。

「サーゼクスさんはアザゼルとミカエルの2人から報告を受けた時に、そして他の皆も、今迄の話を聞いて、既に感じているんじゃないか？」

同じ日、ほぼ同じ時刻に、襲撃されたと云う不自然さを？」

コクン…

この俺の台詞に、その場の皆が、無言で頷いた。



「まさか、両陣営が共謀して…」

「いや、それは有り得ないよ。」

「…だな。それは はぐれ天使からすれば、それこそ今の3大勢力（おれたち）の同盟と同じ、異端行為だ。」

「明確な意図は測りかねますが、どちらかが偶々、もう一方の襲撃計画を知って、タイミングを合わせて自分達も動いた…と考えるのが、自然ですね。」

「…だとしてもよ、その どっちかとやらは、どうやって その情報を得たんだ？」
シリューの…皆が抱いていた疑問に、話している中、

「ふむ…心当たりが有るのう…」

「爺さん？」

「オーデイン殿？」

オーデインが、何かを知っている様な発言、その場の全員が注目する。

「この部屋に入った時に言ったじやろ？」

『身内のゴタゴタで遅れた』…と。

「あく☆、そう言えば、言ってたね。」

「ま、あん時は、それ処じゃ無かったからなあ。なあ？バラキー？w w w」

「うぐ…その呼び方は止めろ!」

「ほっほっほ…雷光が飛び交っておったのう…」

墮天使総督が、自分の護衛として此の場に居る男を茶化す中、オーデインは話し始めた。

「簡単に言えば、貴奴等同様に、儂等北歐の中にも、3大勢力（おぬし）等と仲良くすのを快く思っていない者が、僅かながら居るのじやよ。」

「ロキ…か……………ああ???」

オーデインの言葉に、シリユーとデスマスクが声を重ねて呟き、

「な…真似してんなよ、オメー!」

「そっちこそハモンな!この孫バカ!!」

「はあ!」「あ?!」

「ちよ…もくう☆、シリユーちゃんもベツちゃんも、そんな事で喧嘩しないの!」

「ふん!」「ケツ!!」

それが互いに何となく嫌だったのか、軽く諍う2人を、セラフオルーが間に入る。

…御明察だよ。

しかし
まさか、
この世界でも
また悪神ロキと、
対峙する事になるなんてなあ…

黄金の獅子!!

8月27日。

先日のロキの布告は、その名前を伏せた上でテロリストとして、はぐれ天使、はぐれ墮天使による人間界の寺院襲撃と合わせて、冥界中に発表された。

冥界に緊張感が走る中、若手悪魔によるレーティングゲーム…サーゼクスによって【Next Generation Cup】と銘打たれた第1戦が、開始されようとしていた。

「いよいよ…だね。」

「そうですね。」

VIPルームでは、4人の魔王、ミカエル、アザゼル、シリユウ、オーデイン、デスマスクの面々。

「ね☆、グレイフィアちゃんもバラキーちゃんも、立ってないで こつち座つたら〜?

☆

「そっだよグレイフィア〜?

こつちこつち〜♪」

「……………」

それにグレイフィアにバラキエルと云った、自分の主の護衛として参じている者達
が、もう直ぐゲームが中継されるであろう、巨大なモニター画面に注目していた。

「痛い痛い！グレイフィア、痛いよ!？」

肩胛骨固め（オモプラッタ）はマジに止めて!!」

その際、自分の腿をぱんぱんと叩き、まるで その上に座れとアピールしていた様な
赤髪の優男が、メイド服姿の銀髪の美女にシバかれていたのは、御愛嬌。

「なあ紫龍よ、どう思う?」

「そうだな…俺がロキだとしたら…」

その光景を茶請けにしながら話しているのは、シリューとデスマスク。

その内容は言わずもがな、昨日、宣戦布告してきたロキが、何時のタイミングで攻め
てくるかな件。

「…しかし、その裏を搔いて……なパターンも有り得ないか?」

「トリックスターだからなあ…」

あの時にロキの言った、『近日中』とは一体 何時の事なのか?

昨日の今日で、いきなり攻めて来る可能性も有れば、先日襲撃を仕掛けたという、は
ぐれの天使墮天使が再び行動を起こした時に便乗して来る可能性も。

兎に角、予測不可能な相手で、あらゆる想定をしておく必要性が有った。

「一番ムカつくのは、昨日のアレは実はハツタリで、厳戒態勢を敷かせるだけ敷かせてを、緊張している俺達を見て嗤ってるだけの…」

「止めるデスマスク！本当に そんな気がしてきたぞー！」

トントン…

そんな会話をしている時、部屋の扉がノックされた。

カチャ…

「し…失礼しますう…」

入って来たのは、シスター服を着た、金髪の美少女と、

「お、おおお…オーディン様あ〜っ!!」

スーツ姿の銀髪の美少女。

「オーディン様！昨日は、朝の7:00に宮殿の正面門で待ち合わせじやなかったのですかあ〜?!」

聞けば、いきなり自室から転移した…って、貴方はアホですかあ〜〜〜あつ?!」

「いや〜、すまんすまん。

儂も、何か忘れとるな〜?…とは、思っておったんじやよ〜。ほっほっほ…」

「あ〜、あれは…?」

あの城壁を参考にしたかの様な造り。

全長約5^キ、道幅約3^ミ、高さ約20^ミの石煉瓦の城壁の両端には、それぞれの陣營の拠点となる砦を配置し、城壁通路の中央部には、約10^ミ四方の広い空間が。

「ほほう……敵の王（キング）を討つか、相手側の拠点を制圧したら、勝ち……か。」

「へ〜？完全に一本道、基本 策も何も無い、単純な数と力での ぶつかり合いか。

スタートと同時に進軍させて、中央の広間をどちらが先に防衛拠点として抑えるかが、勝負の分かれ目ってか？」

「頭の良さそうじゃないゼファードルには、助かるステージだな。」

「ん〜、それならサイラオーグも、結構 脳筋な部分が有ったからなく。」

「ルールによると、城壁の上方の制限は無いみたいですが、横方向と下方は、所謂リングアウトとでも言うべきですか？

ある程度 城壁外側に出たり降りたりすると、即失格（リタイア）になる仕組み……ですか。」

「城壁の下から、こっそりと進むってゆうのは、出来ないって事だね☆。」

「それ、るーる説明の為の、めた台詞？」

「……………」

「オーフィスちゃん？頭で思っても、口に出しちゃいけない事って有るんだよ？」

俺とアザゼルとで組んだプログラムを、エックスやアザゼルの監視付きとは云え、一応は こなして来たのだ。

しかし それは、嫌々、渋々に取り組んで来たからか、表面的な肉体強化はされているが、身体の内側…内面的な その成果は、殆ど無い様だ。

「……………」

ドヤ顔なデスマスクとは対照的に、アザゼルも複雑な表情を浮かべている。

ドゴンツ!

「ぢゅわっ!?!」

『ゼファードル様の兵士（ポーン） 1名、戦車（ルーク） 1名…リタイアです。』

…そんな中、ゲーム最初の離脱者が。

サイラオグの兵士である、仮面を着けた少年が、その背格好に不釣り合いな戦斧での一撃を放ち、2人同時に仕留めたのだ。

「…っしー!」

自分が教えた者の戦果に、デスマスクが思わず拳を握り締め、小さくガッツポーズ。

~~~~~

「でえいやっ!!」

「せいっ!」

「おわっ!!」

「ぐふ…!!」

その後も広間での乱戦は続き、

「覇あああああつ!!」

「「なっ…なな…!?!」」

先程の兵士の少年が、その身を巨大なライオンに変化させ、

「グワガアアオオオオオオツ!!」

ドシヤアツ!!

「「「ぐげえっ!!」」」

『ゼファードル様の兵士（ポーン）2人、騎士（ナイト）1人、リタイアです。』

その爪と牙で、今度は3人の悪魔を戦闘不能（リタイア）させ、この中央部の制圧に成功した。

この時点で、サイラオーグ側脱落者2名、ゼファードル側脱落者11名。



「チツクシヨウオオウ!

ちい、お前等、全員、前に出るぞ!

あの広場、逆に奪い返してやる!!」



して気絶。

更に　その後、貴族…その自分の『家』を継ぐ次期当主としての資質を魔王達の前で、公開処刑の如く問い質された。

中でも一番の問題は、シリユーに絡んだ際、『家』の名前…『グラシヤラボラス』の名を持ち出し、グラシヤラボラス次期当主として、喧嘩を売った事。

これにより赤龍帝はグラシヤラボラス家を己の敵と公言。

その後、ゼファードルは必死に謝るも、

「愚か者！以前、教会の遣いにも言った台詞だが、俺が赤龍帝と知らなかったから…が、通用すると思ったか!?

貴様も貴族ならば、自分の『貴族』としての発言に責任を持って!」

…と一蹴し、歯牙にも掛けず。

そして翌日のパーティー、ゼファードルの眷属からの報告を聞いた、現グラシヤラボラスの当主である彼の父親は、反省の証として自分の息子の頭を無理矢理に丸めさせた上で、共に改めて必死にDOG EZA謝罪。

それで漸く、シリユーから　その前の日の愚行は水に流して貰った。

しかし、それで彼にとっては　それで終わる事は無かった。

息子に次期当主としての資格に、改めて疑問視した父親が、次期当主の座を、自分の







…居たああっ?!!?

「阿呆か? 阿呆うなのか? あの男わっ?!

リアス部長に負けず劣らずな脳筋か!」

「紫龍、落ち着け! w w w」

ついつい大声で叫んでしまった俺に、デスマスクが笑いながら宥める。

「アイツに出し惜しみするなって言ったのは、この俺だ。

まあ、黙って見てろって。

面白いモンが見られるぜ?」

……………?



「レグルス!」

「ガウ…」

サイラオーグの呼び掛けに、彼の女王と共に、彼の傍らに居たライオンが小さく返事したかと思えば、その身を今度は、ゲーム開始時の人型の時に、その手に持っていたそれと同じ形状…しかし、それ以上の大きさの、巨大な戦斧に変化した。

ガシイ…

それを、自らの得物とすべく、サイラオーグは手に取り、戦闘の構えを見せる。

神滅具（ロンギヌス）が1つ、【獅子王の戦斧（レグルス・ネメア）】。

それこそが、この兵士の少年の正体であった。

嘗ての所有者が斃れた時も、その神器、魂は無に還る事無く暴走、その仇を討った後、最終的には生きた神器の儘、サイラオーグの眷属となる。

つまり彼は、サイラオーグの兵士であると同時に、サイラオーグの所有する神器でもあったのだ。

「…つの出来損ないがあー！」

得物がデカけりや、良いってモンじゃ無えぞお、悪う羅ア!!」

ドツドツドツド…

ゼファードルが両掌から、無数の高密度の魔力弾を放つ。

その1つは一直線に正面から、その1つは変化球の様に弧を描き背後から、様々な軌道で前後左右 全ての方向から、サイラオーグ目掛けて魔力の弾が襲い迫る。

「覇ああっつ!!」

バシユウツ!!

「なっ…?」

しかし それを、サイラオーグが魔力ではなく、生まれながらに僅かな魔力しか持ち



サイラオーグの禁手化（バランス・ブレイク）。

それにより、この男の手にしていた巨大戦斧は、胸部に獅子の顔の造りを施した、黄金の全身鎧へと形を変えた。

それは正に、獅子座の黄金聖衣を連想させる。

「驚いたか？紫龍よ。」

俺の心を見透かした様なデスマスクが、ニヤニヤしながら話し掛ける。

「…だが、本当に面白いのは、この後だけ？」

「……??？」

~~~~~

「うおおおおお~~~~~~~~っ!!」

黄金の獅子の鎧を装着した後も、更に闘氣を高めて放出するサイラオーグ。

…?!

いや、これは、闘気では無く…?!

「くっくっく…気付いたか？」

あれは正しく、今お前が頭で考えている、『それ』だよ。」

……………!!

やはり、そうか!

そもそも俺が、サイラオーグにデスマスクを紹介したのは、あの対面の儀の時の乱闘劇、その時に魔力は まるで駄目だと云われている。あの漢の中から、その力の欠片を感じたからだ。

それから約1ヶ月、デスマスクの下による修行の末、サイラオーグは己の内側に宿る力を開花させる事が出来た。

そのサイラオーグが吼える。

「燃え上がれ！我が小宇宙（コスモ）よ!!」



小宇宙（コスモ）の解放。

それが完全に成された時、サイラオーグの黄金の鎧は先程以上に：それこそ彼の小宇宙（コスモ）に呼応するが如く、煌めく黄金の光を放つ。

「デスマスク：お前、自分の血を、あの鎧に与えたな?！」

「ああ。お前が自分の神器にテメーの血を与えたって話を、参考にさせて貰ったぜ。

そうだ：アレは この俺の黄金の血により、限り無く黄金聖衣（ゴールドクロス）に近い、神器（セイクリッド・ギア）となった！」

「ライトニング・プラズマ!!」

カツ：

「うっぎゃあああああゝゝゝっ?!」

その全てを受けたゼファードルは、天高く撃ち飛ばされるのだった。

この広い部屋で、サイラオーグ様とゼファードル様とのゲームを観ていたソーナ会長、グレモリー先輩、ディオドラ様、シークヴァイラ様と、その眷属達。

決着打となったサイラオーグ様の技を見て：その強さ以上に、普通に考えて（多少の例外は有るが）、『悪魔』には成し得ない筈の、『光』の拳を繰り出した事に驚愕する。

「ちいつ！あの裸ドラゴン先輩、本当に余計な事をしてくれてやりました。」

「小猫ちゃん？サイラオーグ様が師事したのは、ベツロさんだよ？」

「いや、聞いた話では、あの鬼畜おっぱいドラゴンが、サイラオーグとベツロ爺ちゃんを会わせたらしいにや。」

「確かに その時点で、余計な真似には変わりありませんわ!!あの乳龍帝様は！」

「おおい、神崎く？」

「お前、本人が居ないの良い事に、身内から好き放題言われてるぞお：？www



「シリユー君？ベツロ殿？今の技は：？」

「はい、説明だよ☆！」

サイラオーグの光る拳に驚きを隠せないのは、魔王達も同様だった。

「いや、別に大した事じゃない。」

それに対して、やれやれ顔で口を開いたのはデスマスクこと、ベツロ・カンクロ。

「シイリユウ~~~~っ!!」

「貴方は、貴方わあ~~~~っ!!?」

「あわわ…部長、ちよ…落っ着いて?」

「かっくんかっくん…」

…今日のゲームが終わり、また魔王達と少しミーティングを行った後、俺とアーシアは、一足先にグレモリー邸へと戻ったりアス部長の処へ遊びに…コホン…明日のゲームの激励に、アーシアと一緒に足を運んだのだが、其処で俺を待っていたのは、

「あ、丁度 良かったわ、シリユウ。」

「貴方と、OHANASHIしたい事が有ったの。」

「…何だか字が、違くないですか?」

「リアス部長の尋問だった。」

「誰が彼処迄、サイラオーグを強くしろと言ったのよっ!!?」

「違…俺じゃない! デスマスクだ!!」

「貴方が あの人を、サイラオーグに紹介したのでしょ?! 同じ事よ!!」

「かっくんかっくん…」

両肩をホールドして前後に揺さぶりながら、夜叉の如くな形相で問い詰める駄肉姫。

ライバルであるサイラオーグの度を過ぎる程な強化に、『己は一体、誰の味方だ？』的な理由で御立腹の様子だ。

見れば小猫やレイヴェルも、ジト目で こつちを睨んでいるぜ。

：確かに、サイラオーグの内側（なか）に、小宇宙（コスモ）を見出したのは俺。

だからこそ、本当は俺が指導したかったのだが、公用私事諸々で手が足りなかったの
で、デスマスクを逢わせてみると、ヤツもサイラオーグに才能を感じたのか、師事にノ
リノリとなったのだ。

しかし まさか俺も、1ヶ月其処等で あの漢の小宇宙（コスモ）を、第七感（セブ
ンセンス）：黄金聖闘士（ゴールドセイント）の域迄引き上げたのは、流星に想定外。
せいぜい白銀（シルバー） 止まり程度だと思っていた。

確かに修行初日に眷属諸共、積尸気送りしての自力生還を強要したと云う鬼畜っ振り
を聞いた時、そして眷属全員が其れをクリアしたと聞いた時には、或いは…とは思っ
りしたが。

サイラオーグ以外の眷属達が、小宇宙（コスモ）に目覚めなかった分、リアス部長達
（支取先輩や匙達も そうだが）はラッキーと思わなければ。

尤も、その修行の甲斐有って、魔力や精神力は大幅にアップしたらしいが。

デスマスク曰わく、

「お前に解り易く言えば、アテナが聖域（サンクチュアリ）に降臨された頃の俺と同等の実力を、既にアイツは持つてるぜ。」

…だとか。

つまりは、黄金聖闘士（ゴールドセイント）としては、まだまだ なりたての ひよっこだと言いたいらしい。

それでも完成された、白銀聖闘士を相手に無双する実力は充分に有る。 閑話休題。

「分かった！分かったから!!」

新学期が始まったら、オカ研の皆、俺が鍛えるから!!」

「よおーっし、言質は録ったわよ!」

ふう…漸く解放されたぜ。

しかしながら俺の見立てじゃ、オカ研メンバーで小宇宙（コスモ）に目覚めそうな者は、残念だが居ない。

リアス部長や朱乃先輩、レイヴェルにギヤスパーは完全な魔力特化。

木場とミルたんは一見、それぞれスピードとパワーに特化した近接戦闘タイプだが、実は其れも、魔力補正による物だ。

俺の質問に、黙りになるリアス部長。
そうなのである。

この部屋、グレモリー眷属が屯ってる中に、朱乃先輩の姿が見当たらない。

夏休み、冥界での修行開始初日に、俺とアザゼルとで組んだ課題に云わば逆ギレした朱乃先輩。

あの時、その感情其の儘に、『修行はする。ゲーム前日には戻る』と言って、皆の前から去って行った朱乃先輩が、未だ戻っていない様なのだ。

「……」

そして連鎖する様に、他のメンバー達も黙り込む。

「それ今、地雷だにや。」

シリユー、デリカシー無やいにや。」

「う……」

黒歌に まさか、デリカシー云々を言われるとは、尚更ショック……って、言っている場合では無い。



翌日―8月28日の朝。

所変わって、アスタロト城内の、デイオドラの寝室。

30畳の大部屋の床一面が全て、ベッドとなっている、正に寢室。

「う……うわあああああつ?!」

目を覚ますと同時に、比較的寝付きの良いディオドラは絶叫する。

「「「すやすや……」」」

何故なら自分の両腕両脚に、全裸の美女美少女美幼女、総勢4人が、がっしりとしがみついていたのだから。

更には自分の周りを見れば、やはり生まれた儘の姿の美女美少女美幼女達が、静かに寝息を立てている。

いや、これは別に、驚く事では無い。

心当たりが有り過ぎるのだから。

「はあ……」

王である自分自身。

女王。

戦車2人。

騎士2人。

僧侶2人。

兵士5人。

「いやー」

AM 11:35

昨日と同じく、ルシファー城のVIPルームに入ったシリユー達。

「やっほ☆」

「やあ〜」

「こんにちは。」

「よっ♪」「……………」

「どうも。」「……………(ペコリ)」

既に部屋にはセラフォル、アジユカ、ファビウムの魔王。

更にはデスマスクにアザゼルとバラキエル、ミカエルと その秘書天使、そして、

「…神崎様、お疲れ様です。」

「やあ、シリユー君…って痛い痛い痛い！」

「ごめんグレイフィア、謝るから！」

「……………」

一体 何が有ったのか…

サーゼクスと、この紅髪の魔王にSTFを仕掛けている、グレイフィアが居た。

「……………」

り、今日のゲームのステージとルールの説明が始まった。

リアス部長と、あの露出男（ディオドラ・アスタロト）のゲームのステージは城の中。大きくエリア分けすると、リアス部長達の拠点と云うか、スタート地点がある北エリア。

ディオドラの拠点がある南エリア。

南北のエリアの間の中央エリア。

そして中央エリアの地下に位置する迷宮エリア。

勝利条件は、

・ 敵の王（キング）の撃破

・ 敵拠点の制圧

・ 中央エリア最上階の”王の間”の制圧

…の、何れかである。

さしあたって、互いが、どの勝利条件を選択して動くかで、戦況が違ってくる…って
処か。



ルール説明の後、画面は2分割され、リアス部長とディオドラ、スタート地点で待機している、それぞれの様子が映し出された。

画面左側は、駒王の制服を着ている男女が5人、メイド：滅威弩服を着た漢の娘が1人、そして巫女さんが1人。

…朱乃先輩、戻ってきたんだな。

「……………朱乃！」

朱乃先輩が画面にアップで映し出された瞬間、熊男みたいな堕天使が、画面に喰い憑いた。

そして画面右側。

「ライザー・フェニックスか!？」

「し、シリューちゃん?」

つい、突っ込むが如く叫んでしまったが、仕方有るまい。

ディオドラ・アスタロトの眷属悪魔、全員が恐らくは女性で構成されているのだ。

1人、禍々しい造形のガスマスクを被った、傍目には性別認識不可な小柄な人物が居るが、どうせ女だろう。

正に あの、ライザー・フェニックスの如くなハーレム構成。

この前の魔王様ゲームの時、確かに女性眷属が多いとは感じていたが、まさか全員が女だったとわ…



その大扉を開け、全員が中央エリアに足を踏み入れた時、
バタン！

「……………!!?」

大扉はいきなり、大きな音を起て勝手に閉まり、

カチャカチャ…

「あ…開かないによ?!」

ガシヤガシヤガシヤ…

「む…」「きやあつ！」「ひえ?!」

直後、長い廊下の左右の壁に並べ配置されていた甲冑の全てが突然、まるで意思を得たかの様に襲い掛かってきた。

「こ…これは…敵の仕掛けた罠（トラップ）ですか?」

「いいえ、ゲーム開始迄、中央エリアへの出入りは出来なかった筈ですわ!」

「つまり、これはゲーム制作スタッフの作った、プログラムの1つって訳だね!」

ズバアツ!

そう言いながら、鋼造りの鎧を、まるで紙の様に斬り裂いた木場が推論。

ドガアツ!!

「つまり、コイツ等を全滅させないと、前進も後退も出来ない…と?」

夫でしよう。

城内を4人で進んでいると、別れ道に。

ここで祐斗先輩とレイヴェルさん、私とミルさんの組みに別れて進む事に。

その途中、ミルたんもギャー君同様に、転移魔法陣の罠（トラップ）に引つ掛かり、仕方無く私1人で立ち足はだかるモンスターを蹴散らしながら、最上階を目指していましたが…

「こんにちは♪」「どどどど…どうも…」

ちい、遂に運営サイドが用意したモンスターでなく、ディオドラ様の眷属悪魔…敵さんと鉢合わせです。

しかも、2人。

1人は私と大して…いえ、多分 私より背が低いですね、

凶悪なデザインのガスマスクをしています、声からして女の子。

そして もう1人は

「あなたって確か、リアス・グレモリー様の戦車だった子ね！

同じ戦車同士、あなたは私が相手するわ！

ハナカちゃん、手出しは無用よ!!」

「は…は…は…」

右手に3本爪の鉄甲を装着、独特な形状の三角帽子を被り、赤茶色いセミロングな後髪をカールに巻いた女の子。

……って貴女、登場する小説を間違えてないですか？

ギャスパー（15）、人生最大の危機！

スライム（大）が現れた！

ギャスパーは逃げ出した！

しかし回り込まれてしまった!!

『うわああああん!!先輩い〜!』

「何やってんだギャスパー!」

逃げてないで攻撃しろ!!」

「シリュウ、落ち着くにゃ!」

今回のリアスvsディオドラのゲームのステージには、中継用のカメラが各所に配備され、戦闘開始が確認されると、観戦モニターは、その場所に画面が切り替わる仕様になつていた。

それは地下の迷宮エリアも同様。

JAPAN国籍を得て、現地企業で勉強したスタッフ達が作り出した最新技術搭載のカメラにより、光が全く差し込まない地下迷宮でも、鮮明な画像を映し出す事が出来て

リアス部長、役立たずで ごめんなさい〜！

小猫ちゃん、いじめないで〜！

シリユー先輩、お願いだから、怒ったりしないで〜！！

泣き顔で、心の中で叫びながら、ギャスパーは視認する。

「え？何…あれ…？」

半透明のスライムの背後に見えるのは、確かに1点の青い灯り。

そして よく視ると、その灯りの傍には人影が1つ。

灯りと人影は、ゆっくりとスライム…そしてギャスパーに歩み寄り、

シュシュツ…

其の方向に向かって、何かを投げつけた。

ドストドストドス！！

シュワアアアアアア…

「ひいっ!!」

そして其の何かがスライムに突き刺さったと思えば、スライムは泡立ち煙を発てながら、蒸発する様に消えていった。

カラン…

木場と共に進む途中、再び道が分かれていた為、その場で各々、別ルートを進む事になったレイヴェル。

更に暫く進んだ先の一室で、彼女はディオドラ眷属である、セミロングの赤毛の少女と対峙した。

「一応伺いますが、素直に『まいった』する心算は…」

「そんなの、有る訳が無いだろ!!」

余裕の笑みを零しながらのレイヴェルの問いに、赤毛の少女は顔を真っ赤にして怒りながら応える。

「クス…：そうですか…：ならば…」

レイヴェル自身も、素直に降参するとは微塵も思っただけはなかったが、余りの怒り振りに苦笑すると、両手を頭上に掲げ魔力を集中、その上に巨大な炎の玉を作り出し、

「…ならば、リタイアしなさい!」

ブオワワアアアアツ!!

それを、巨大な火の鳥に形を整える。

「クス…」

しかし、その攻撃を予測していた少女は、その時既に、魔力を集中させており、

「エレエ・レ・ナムメ・イリン! 聖霊よ、我が盾と成り賜え!!」

それを防ぐ為の呪文を詠唱していた。

「行っけー！ーっ！皇炎嵐!!」

「【覇邪霊陣（ストライバー）!!」

バシイッ!!

「うっそっ?!」

結果、レイヴェルが撃ち放った炎の鳳は、少女の創り出した聖盾の結界に阻まれる。

「ななな…何ですの、それわ?!」

それ、神聖魔術では、ないですか？

貴女、いくら僧侶（ビショップ）だからって、僧侶（クレリック）の魔法を使えるっ

て…?!」

「ウフフ…ボクはね、でいおどらクンの眷属になる前は、とある国の城属の大神官の娘だったんだ。

その時に一通りの神聖魔術は、父様から習っていた。

だから悪魔に転生しても、それ以前に習得していた魔法なら、例えそれが悪魔にとってマイナスな聖なる魔法でも、平気で使えるのさ!」

「な、何ですって…?!」

自信満々に応えるディオドラの僧侶の少女に、狼狽えるレイヴェル。

だが、直ぐに落ち着きを取り戻し、

「…でも、知っていますのよ！」

その魔法は結界が強力過ぎて、この先、貴女の繰り出す魔法迄も、一緒に打ち消してしまう事を！」

その魔法の欠点を指摘する。

「それくらい、解っているよ。だから…」

破アアアッ！」

「…!?」

しかし赤毛の少女は、それは承知だとばかり、更に魔力を集中させ、その結果、この結界魔法は部屋全体に包み込んだ。

「あはは♪これで お互い、魔法は…魔力を使う術や技は、使えない。

…つまり それは、解るかい？

フェニックスであるキミの最大の特性である、”不死” さえも封じられた。

つまりは肉弾戦しかないんだけど…

実はボクは僧侶（クレリック）であり、それと同時に、武闘家でもあるんだ。」

「…修道僧（モンク）!!」

「正解♪それで…それでもボクに、勝てる気にいる心算なのかな？」

「…くっ!!」

拳法のような構えを取る赤毛の少女に対し、金髪の少女も不慣れそうに格闘の構えを取る。

まさか…こんな不死（フェニックス）の攻略法が在ったなんて…シリユー先輩も吃驚ですわ！

シリユーがライザーを倒した時に、それ以前から感じてはいたが、改めてフェニックスと云えど、絶対ではないと云う事を確信していたレイヴェル。

少し前、それについてシリユーと話した事を思い出していた。

《《《

「ああ、俺以外にも、フェニックス攻略出来そうな奴は居るさ。

例えばデスマスク。

アイツなら、魂を身体から引き剥がし、その魂を其の儘、黄泉比良坂（あの世）に送ったり、その場で燃やし尽くしたり、爆裂させたりも出来る。

セラフォルが あの水の匣の魔法を本気で繰り出したら、『相手は死ぬ！』らしいし

…

んに向けて撃ち放った。

…しかし、

「…今、何かしたによ？」

「嘘…嘘でしょ?!」

それは前側に差し出されたミルたんの掌の前に、簡単に受け止められる。

「今のがアナタの最大必殺なら、ミルたんには勝てないによ。」

さあ、素直に『参った』して、道を開けるによ。」

「う…うるさいうるさいうるさあーい!!」

ミルたんからすれば、何の悪意の無い、降参の勧めだったのだが、この小柄な少女は顔を真っ赤にして怒り出し、再び先程と同じ、爆発魔法を仕掛けようとするが、

「仕方無い…によ…」

一瞬…少しだけ、哀しそうな表情を浮かべたミルたんは、次の瞬間には厳しい顔で、両足を やや広く開き、右足を一步、前に踏み出し、左脇を引き締め、肘を曲げて前に向けた左拳に右掌を重ねる構えを取る。

そして魔力を集中させ、左拳を被せていた右手を左手首に掴み直し、左拳を思いつきり、前に突き出した。

それはシリユーと小猫、そしてミルたんも お気に入りである、『ドラグ・ソボール』

なるコミックの主人公の必殺技の構え。

シリユーも同じ構えから、小宇宙（コスモ）と魔力を融合させた破壊のエネルギー波を放つ技に、「廬山漆星龍珠」と銘打っているが、ミルたんのそれは、魔力100割のエネルギー弾。

そして その魔力の弾が、ミルたんの拳から、撃ち放たれる。

「ビッグバン・ミルたん波ーっによ！」

ドオツゴオオオツ!!

「ぎゃあああああっ!?!」



「てええいやあっ！」

バキイツ!

「くっ…」

こ、この三角帽子の武闘家女子、本当に強いです。

繰り出てくる一撃一撃が速いし、重い!

黒歌姉様から受けている仙術の施し…

練った『氣』を体内に循環させて、身体を硬化させてなかったら、もう5回は斃され

ています！

…悔しいですが、仙術体得を勧めた裸ドラゴン先輩には感謝ですね。そして当然、黒歌姉様にも。

『ディオドラ・アスタロト様の兵士（ポーン）1名、リタイヤです。』

「!!？」

また敵（あちら）さんから、リタイヤが出たアナウンズが流れました。

倒したのは、祐斗先輩カミルたんでしょうか？

これで向こうは、3人リタイヤですね。

「もう、何やってんのよ!？」

ぶうん…

身内の連続リタイヤで、少し苛立ったのでしょうか、今迄の攻撃と違う、”らしくない”隙だらけの大振りな攻撃。

それを見逃す程、私は甘くは有りません。

「えいつ…」

バギイツ…

「か…っ!？」

ぶい！狙いました、『氣』で強化された拳によるリバブローが、見事にヒットしました!!（どやあ！）

「くっ…」

あ…この人、まだ起き上がりますか？

肋骨、何本か折った手応えが有ったのですが…

まあ、苦しそうな顔で脇腹を押さえていますし、膝がつくがく言わせてますから、かなり効いているのでしょうか…

「ま…まだよ…!」

勝負は、これ、か…ら…?」

パタン…

「???」

「スウースウー…」

え…? 此方を睨みながら、戦闘続行の構えを見せたと思つたら、いきなり倒れ込んで寝ちゃいましたよ? この女（ひと）?」

ザツ…

「て、手出し無用と言われていましたが、やつぱり お友達が倒されるのを、だ…黙って見ていられないです!」

つ、次は、私が お相手します!!」

そして代わりに前に出てきたのはガスマスクさん（仮名）。

ん〜…何だかシリユー先輩が普段から言っている、ベツロさんの呼び名と紛らわしいですね。

まあ今は、そんなのは どーでも良い話ですけどね！

どん！

「う…???ど…どうして、動けるの…?」

とりあえず、鳩尾に きつつい一撃を。

「…もしかして、睡眠か麻痺系のガスを撒いていたのですか?」

「……!!」

ガク…

気絶しましたが、凶星だった様ですね。

まさかそんな、これ見よがしに妖しいガスマスクみたいな被り物をしている人に対して、その類の攻撃を警戒しないとでも思っていたのですか？

最初から、仙術による『氣（オーラ）』で、身体全体をガードしていましたよ。

『リアス・グレモリー様の僧侶（ビショップ）1名、リタイアです。』

「ハーフ・ヴァンパイア……コイツは本当に、興味深い研究素材（オモチャ）だぜ……♪」
「いい、嫌あ、止めてえ!」

「……この人、アザゼル先生と、同じ目をしてますううっ?!」



「(怒) 失礼なヤツだな? おいつ?!」

「いや、間違つてないから! w w w」

「何お………っ?!」



「ふうんんん……! ふぬふぬふむむ……?!」

「ふ……漸く大人しくなつたぜ♪」

頭の上で手首を交差して縛られ、それを床に固定。

更に口は猿轡され、身動きを封じられたギャスパー。

「うむうんうん………!!」

瞳に涙を溜めた その顔は、賊に浚われた乙女の如く。

「とりあえず……は、血液採取……」

!!!

そう言つて、邪悪な笑みを零しながら注射器を取り出す姿は、アザゼルが狂科学省な

「んんんんんん！んんんんんん！！」

その容姿からか、ホエイルはギャスパーについて、少し勘違いしている様だった。

「それに心配しなくても、此の場は俺達2人だけだ。

他に誰も見ちゃいねーから、安心しろ。」

「んんんんんん！んんんんんん！！」

…更には2人共、中継カメラの存在には、気付いてない様だ。

続く。

バサアツ!

「んぬむ~~~~~つ!」

頭に浮かんだ疑念を確認するべく、ギヤスパアの履いていたスカート、更に その内側の布一枚を、ホエイルは瞬時に剥ぎ取り、

「……………」

…そして数秒間、その場の『時』が、凍り停まった。

「い、いや、流石にコレは、俺が悪かったか？」

いや、悪い悪い…アハハ…(≡▽≡)ゝ」

「……………」

悪代官に拐かされた町娘の如く、大量の涙を流すギヤスパアに対し、流石に罪悪感が沸いたのか、ギヤスパアに附いている、自分が持たぬモノを刮目しつつ、笑って誤魔化す様に、ホエイルは謝る。

「い、いや、でも お前…結構なサイズじゃないか？」

今、ノーマル状態なんだろう？

既にデイトドラのMAXよりも、デツカいぞ？」

「……………」

大泣きのギヤスパアに対して、必死にフォローな心算のホエイル。

サイズD 硬度C 持久力A 総合スタミナB：
今夜は一晩中：朝までイケそうです!!」

：んで、この鼻血と涎垂れ流しで瓶底眼鏡（ス○ウター）起動させてるシーグヴァイラ様は、何を朝までイコウとしてるんだよ!!

「「「いやあぁ〜っ！ギヤスパークいん、可や愛ゆう〜い!!」」」
お前等もだよ!

それ、絶対に本人の前で言つてやるなよ！
アイツ、本当に自殺するぞ!!



「お☆…おぉおおおおおお〜☆☆!!」

「はわわわ…み、見ちゃいました…」

「にゃ〜♪」

ギヤスパークとホエイルの一連の遣り取りは若手控え室だけでなく、当然だが魔王に天使長、墮天使総督に赤龍帝、更には北欧主神：VIP達が観戦しているモニターにも映し出されており、

「は…は、初めて見た初めて見た初めて見た初めて見た初めて見た初めて見た初めて見た初めて見た初めて見た初めて見た初めて見た…」

自らの眷属・ホエイルにより、ギヤスパーを基準に己の『ピー』の大きさを公開処刑の如く公言された同然のディオドラが、近日中で最高にorzっており、彼と共に、此の拠点の部屋に残っていた彼の女王（クイーン）が、必死に慰めていた。

「……………」

普段から他の眷属達と一緒に、ディオドラを『へたれ』とか『小さい』とか『速い』とか言つて、弄っている女王。

しかし、今回のアレは流石に酷過ぎると感じたか、普段とは打って変わつてかなり真剣な面持ちでフォローしているが、部屋の隅ついで体育座りをしているディオドラは、自らの作つた殻から出ようとしなない。

「あ〜！もう、仕方無いわね！」

「わわわっ!?!」

業を煮やした女王はディオドラの首根つこを掴み、無理矢理に引き起こすと文字通り、物理的に一肌二肌脱ぎ、

「うぷぷぷっ?!」

朱乃にも匹敵する胸を直に、凹み王（キング）の顔面に押し付ける。



「……………」

「あう……！」

「……ど、どうですか？元氣、出ましたか？」

「ん……。心配掛けて、ごめんね……」

顔を埋めてるだけな筈が、何時の間にか赤ん坊の様に『吸っている』ディオドラに対し、女王が顔を少し赤くしての問いに、このヘタレ王（キング）は弱々しくも、ハッキリと大丈夫だと答える。

「（ディオドラちゃま、可愛い〜〜！）」

その大型肉食獣に追われている、小型の草食動物の様な顔に、ディオドラ眷属特有の『ヘタレ萌え』を拗らせる女王だが、決してそれを表には出さず、まだ少し不安ではあるが、とりあえず一安心と小さく、安堵の溜め息を一つ零した。

そして脱いだ衣服を着直している時、この部屋に設置されている、ゲーム状況を映しているモニターが、新たな戦局を映す。

画面には朱乃と、ディオドラ眷属の騎士：日本刀の様な武器を手に、サイズがキツいか意図的に強調しているのか、胸元をやや大きく開けた黒装束を着込んだ、金髪美女の対峙している場面が映されていた。

「……………」

あれは確か、リアス・グレモリーの女王（クイーン）！

向こうも、勝負に出たみたいですね！」

そう言うのと、女王は魔法陣を展開。

「ぬぼお~~~~~」

そして其処から、身の丈2倍越え、やや でっぷりした体型の男：使い魔を召喚。

「おい、お前！ この部屋で、ディオドラ様をお守りしろ!!」

「……………」

「…返事わああつ?!」

ビシィツ!!

自分の命令に対し、無言の使い魔を怒鳴りつけ、その手に持っていた指示棒で”躡”とばかりに叩きつける女王。

「ひえっ?!」

「うおっ! うおっ!」

その様に、どん引きするディオドラを余所に、上下、白と黒のストライプの服装の大男は満面の笑みと共に首を上下に振り、女王の命令に承諾の意を示す。

「フン…」

パタン…

それを確認した女王は、このディオドラ拠点である部屋を出て行った。



「んん？んむぬぬんんんんんん！」

「……?? 可つ笑しいなあ……？」

まだ出ないのか？ディオドラは何つ時も、5秒程度で……」

人間とのハーフ、そして悪魔に転生しているとは云え、ヴァンパイアであるギヤスパー。

研究サンプルとして、そのギヤスパーのDNAを採取すべく、剥き出しとなっている『ピー』を自ずの手でXXXXXしている狂生物学者・ホエイル。

なかなか”至らない”……大粒の涙を多量に零している……ギヤスパーに対して疑問を持ち、またもや然り気無く、ディオドラの公開処刑的発言をしてしまう。

すばかーん!!

「……?! な……ん……だ……と……!?!」

そして次の瞬間、そんな彼女の後頭部に、重い衝撃が走った。

「……ギャー君に何をしているのですか？」

アナタわ?」

其処にはジト目な呆れ顔で、ハリセンを持っている小猫が。

「うう…お、お前…?」

そんな…ハリセンで、俺を…?」

「…少し前、シリュー先輩が言いました。

『達人は、只の布の鉢巻きに己の“氣”を通す事により、鋼の刃の如く扱う』…と。

その言葉を参考に、仙術で練った『氣』を、ハリセンに通わせてみたのですが、思いの外 上手くいったみたいですね。」

「ふ…巫山戯…る…な…」

ガク…

それは余程 強力な一撃だったのか、ホエイルは小猫の顔を一瞬だけ睨み付けた後、意識を失い、その場に倒れ込んだ。

『ディオドラ・アスタロト様の兵士（ポーン） 1名、リタイアです。』

「…ギヤー君、大丈夫ですか?」

ギヤスパーの手首の拘束と猿轡を外しながら、小猫は少年マンガにてヒロインを救い出すヒーローの如く、囚われの身になっていた仲間である男の娘を気遣い、声を掛ける。

「…プハアツ、あ、ありがとう、小猫ちゃ…って、嫌あ!み、見ないでええっ!!?」

「ふむ…可愛い?…ですね?♪」

「うぐつ…」

「くう…ううん…クハアハア…」

ディオドラの眷属であろう、金髪の美少女2人が、1匹の巨大な蛇型のモンスターに、その身を縛られ締め付けられている光景だった。

「…ゲーム的には、この儘 斃れて消えて貰う、或いは もう少し消耗するのを待つのが 定石だろうけど…」

そう言つて木場は聖魔剣を構え、

「やはり騎士として、目の前の光景を見過ごす訳には往かない!!」

ズバアッ!

『キシャー…つ!!?』

この大蛇を一閃の下に斬り棄てた。

「ちいいつ!」「………つ!!」

これにより、大蛇の拘束から逃れた少女2人が、改めて木場と対峙する。

「だ、大丈夫かい?」

「ありがとう、グレモリーの騎士よ。」

今の件に関してだけは、純粹に礼を言わせて貰おう。」

軽装鎧を纏った、長い金髪を三つ編みに結った美少女が、武器である細剣を一度 鞆に納め、木場に一礼。

そして もう一人、やはり長い金髪をポニーテールに結った、重厚な鎧を着込んだ美少女も、木場に向かって口を開く。

「き、貴様あ…何て余計な真似を…」

あの様なキツイ締め付け、そう頻繁に味わえる様なモノでは無いのだぞ!？」

「え、…?」

続く

「あわ?こ、小猫ちゃん?急に止まったりしないですよ!」

全力疾走中の いきなりの停止。

これに要らぬ質問をしてきた、ミニマムヴァンパイアがクレームみたいですが、そんなのシカトです。スルーです。

「…隠れてないで、出てきたらどうですか?」

「え?!」

「……………」

スウ…

私の呼び掛けに、柱の影から姿を現したのは、大きなリュックを背負った、小柄な犬耳の女の子。

背丈は私と そう大して変わらないのに、この娘は…敵です! エネミーです!!

普段から一体、何を食べてたら そんなになるんですか?

「参ったなあ…リリ、完全に気配を消していた心算だったのに…」

”完全に気配を消した” から…ですよ。」

「ええっ?」

この、リリさん…ですか?の疑問に応えてあげたら、尚更 頭の上に、大量のクエスチョンマークを浮かばせましたよ、この人…って、ギャー君もですか?

「恐らくは私達の接近に気付いて、隠れ忍んだのでしようが、それは此方も同じ事。

今迄感じていた気配が、其処から動きを見せずに、いきなり消えたのです。

それは、其の場所で気配を消しました”って、言っているのと同じですよ。」

「(ポン!) 成る程…お勉強になりました!」

ペコリ…

凄く納得した様に掌を叩き、頭を下げるリリさん。

「じゃ、そろそろ戦りますか!」

そう言うのと、此方が構える前に この ろりきよぬー(怒)、背負っている巨大リュックの中から、沢山のミサイル弾やらロボットアームやらファン〇ルっぽいのやらが飛び出して、私達に攻撃を仕掛けて来やがりました!!

ちゅつどおおんつ!!

「うつわあああつ!?!」

「…くうつ!!」

いきなりの奇襲…それを卑怯とは言いませんが、屋内戦闘で銃撃飛び越えて爆撃で、この攻撃は少し洒落に なっていません。

…にしても あのリュック、確かにビッグサイズですが、どう見ても それ以上の容量な武装が ばんばん出て来ます。

もしかして それ、神器ですか？

四次○○。ケットの親戚ですか？

「ええいやあああつ!!」

びた…

「びた？」

おお！ナイスです。

ここでギヤー君が、自らの神器である…ふおーびと…えーと…

…あの、狙った対象の”刻”を停める神器を発動！

ミサイルからロケットアームからファ○ネル迄、全てを停めてしまいました。

ついでに その光景を見たりりさんも、何が起きたのか、理解出来て無い様で、思考が停止しています。

…(ゆ・え・に)！今がつ、チャーンズ!!

すばかーん！

「あ痛ああい!？」

きつつい一撃、お見舞いです。

「あ痛たたたた…何なのですかあ…？」

「こ、小猫ちゃん…？」

涙目になって、頭を抑えるリリさん。

そして何故か、ギヤー君も、目が点に。

「何、それえ!?!」

そして2人揃って、私が手に持つ武器（エモノ）を指差しての質問です。

「…見ての通りの、ハリセンですが?」

「嘘仰い! 只のハリセンが、こんな痛い筈が有りません!!」

ちい…気が付きましたか。

さっきの包帯女は、単に”氣”を通した故の殺傷力で一応、納得したみたいでしたが

…

流石に”素”の一撃じゃ、まだまだ必『殺』とは往かない様ですね。

「ならば、教えてあげましょう。」

これぞアザゼル先生から、モニター協力依頼として借り受けた人工神器・『張扇・挫・

愚零斗』!」

「じ…人工神器い?」

驚くギヤー君とリリさん。

ああ、これ知ってるの、部長だけでしたからね。

どっどっどっど…どっこーん!!

れーと』が…

「な…何なのですか、それえ!!？」

「ふっ…これぞ『張扇・挫・愚零斗』の禁手状態、【墮天使乃撲殺棍棒（エクスカリボルグ）】……です!!」

何て言うか邪悪さ満載な…刺々しい針みたいなのが沢山付いた、真つ黒な金属バットに変化しちゃいましたあ!!

「喜んで下さいりりさん。」

貴女が この、【墮天使乃撲殺棍棒（エクスカリボルグ）】の餌食…栄えある第1号です。」

「ちよ…ちよい待ち！」

そ…そんなバットで殴られりしたら、りり、死んじやいますよお!!？」

「大丈夫です！」

ダッ…

あのバットに どん引きしてか、半泣きのりりさんに、容赦無くダッシュして間合いを詰める小猫ちゃん。

「アザゼル先生曰わく、このバットは『確殺』と『蘇生』の効果を同時に発動させる、『不殺（ころさず）』の武器らしいですから！」

「い……いやああっ！ギブギブ！リリ、降参します!!」

「問答無用です！巨乳、死すべし!!」



「ん……ん……」

「あ、ギャー君、目が覚めましたか？」

「ん……小猫ちゃん……って、な、何で僕、小猫ちゃんに お姫様抱っこされてるの？」

あの後、リリさんは私の「墮天使乃撲殺棍棒（エクスカリボルグ）」の一撃でリタイア。

しかし その時のスプラッターを見て、ギャー君も気を失ってしまいました。

敵の攻撃による物でなかったからか、リタイア扱いはされず、こうやって運んでいたのですが、目を覚ましたなら、もう自分で走れますよね？



「ところで……此処って どの辺りなの？」

「……………」

「言えませせん。」

只でさえ、この中央エリアはRPGのラスダンみたいに入り組んだ創りなのに、またもや転移トランプに引つ掛かってしまい…しかも、ギャー君が気絶してる間に2回も…なんて、とても言えません。

「そ…そうかあ…僕達 今、迷子なんだ（ガンツ！）うわああああん!!」

しゃあらつぶです!!

「ううう…」

それにしても、小猫ちゃんて凄いやね？

貰ったばかりの神器で、もう禁手状態（バランス・ブレイカー）に至ってるんだから

…

僕なんて、まだまだだよお…。」

「さささ…才能ですから!」

う…これ、言えませんか…。

まさか、さつきの地下迷宮でギャー君の”ギャー君”を見た時に、私の内側（なか）の何かが大きく弾けて、それで禁手化（バランス・ブレイク）に至ってしまったなんて…

こんな話したら、また この”先っぽだけコンニチワ”ヴァンパイア、大泣き必至ですよ。

だ、だからギャー君、そんな尊敬の眼差しで、こつちを見ないで下さい!



『ディオドラ・アスタロト様の騎士（ナイト）1名、リタイアです。』

「「???」」

ゲーム離脱者を告げる城内アナウンスに、僕、小猫ちゃん、そして今、小猫ちゃんと戦っている赤毛の女の子が一瞬、動きが止まりました。

「何なんだよ！」

ゲーム開始から ずっと、こっちばかりリタイアじゃないか！」

ブオンブオンブオン…

そう言いながら、この女の子が小刻みな連続蹴りを放ちますが、小猫ちゃんは冷静に対処。

そして、カウンター気味に正拳突き！

ガシッ

しかし、これはブロックされてしまい、

バツ x 2！

「……………」

同時に2人がバックステップで後退し、距離を開けての睨み合い。

……あの後、城内で迷子状態だった僕達は、僕の（蝙蝠変化での）超音波で城内フロアを探索、上に登る階段を確認して、その場に向かう途中、あの子と遭遇。

しかし小猫ちゃん曰わく、さっきのリリさんは気配を消してたけど、彼女は僕達の存在に遠くから気付いたか、気配を消す処か馬鹿正直な殺気：闘気を発散して、自分の存在を誘う様にアピールしていたとか。

そして それは偶々か狙っていたのか、彼女は僕達が目指すルートで待ち構えていて、結果的には僕達は彼女に釣られてしまった体だとか。

必然的に戦闘開始となりましたが、その早々に あの子、”絶対魔法無効空間”みたいな魔法を使つて、お互いに魔法や魔力を使う技が使えない状態、純粋な肉弾戦しか使えない状態となり、神器が使えなくなった僕は全くの役立たずに。

小猫ちゃんに退がるように言われて、今は通路の端っこ、壁際に退避しています。

「でえいやああつ!!」

「やあー!」

バキィツ!

小猫ちゃんが有利と思っていた格闘戦、純粋に互角?です。

レイヴェルさんをやつつけたという あの女の子、本当に強いです!

きの戦車の女の子のが、やはり接近戦では強かったですよ？

あと、もう一つ：

この子、さつき私の事を頑丈って言ったけど、”素”の状態ならあの鬪氣を纏った拳一撃で、斃されていたでしょう。

そう、絶対魔法無効空間で使えないのは”魔力”だけ。

自分が”鬪氣”を使っているというのに、私が今使ってる”これ”に、気付いていないのですか？

「えいつ!!」

どん!

「きゃつ!?!」

今の掌打は牽制…本命は!!

バツ…

…先ずは両足を やや広く開き、右足を一步 前に踏み出す。

左脇を引き締め、肘を曲げて前に向けた左拳に右掌を添える構えを取り、そして…シリユー先輩は “ここで” 魔力”と”こすも”、ミルたんは魔力を集中させていましたが…私は”仙術”で練った”氣”を…”精神エネルギー”を左拳に集中!

そして添えていた右手を左手首に掴み直し、左拳を思いきり前に突き出すと同時に、

溜めていた この”精神エネルギー”を一気に撃ち放つ!!

其れ、即ち…

「ファイナル・にやんにやん波あつ!!!」

「なっ…!?!」



『デオドラ・アスタロト様の僧侶（ビシヨップ）1名、リタイアです。』

ふう…ぶつつけ本番、自信は有りましたが、予想以上に上手くいきました。

「小猫ちゃくん!」

パチイン…

「いえい!」

安全を確認してか、飛び出てきたギャー君とハイタッチ。

「やったね!」

「当然です。」

これで、デオドラ様の眷属は、王自身を含めて4人の筈。

それに対して此方は6人。

まだまだ決して、油断出来きる人数差では無いですね。

「さあギャー君、上に向かいますよ。」

「うんー」

私達は再び、最上階の王の間を目指し、走り出します。

シリユー先輩の”廬山漆屋龍珠”、ミルたんの”ビッグバン・ミルたん波”に続く、私流のオリジナル・ドラゴン波である。”ファイナル・にやんにやん波”。

今迄 接近戦オンリーだった私にとっては、此処一番で頼れる技になりそうです。

何時かシリユー先輩とミルたんの3人で並んで、『トリプル・ドラゴン波(仮名)』とかをやってみたいですね。

あの2人なら、話を切り出したらノリノリで応じてくれそうですから、それまでに正式名称を考えておかないと。

あ…その時のセンターは勿論、私ですよ？

衝突! 聖剣 v s 聖魔剣!!



…時は少し、巻き戻る。

「き、貴様あ…何て余計な真似を…」

あの様なキツイ締め付け、そう頻繁に味わえる様なモノでは無いのだぞ!」

「え、…?」

木場が中央エリア3Fに辿り着いた時、其処ではデイオドラ眷属の少女2人が、巨大な蛇型のモンスターと戦闘中。

2人纏めて、身体を縛られ締め付けられ苦しめられている光景だった。

ゲームの定石からすれば、此の儘モンスターに倒され、リタイアしてもらうのを待つも良かったのだが、己の騎士道精神が それを許さず、木場は この大蛇を聖魔剣で斬り棄て、少女達を救出した。が…

「何の心算なのだ?嫌がらせか?!」

「え…いや、その…スイマセン?」

助けた少女、2人の内の1人からは、素直な礼を言われたが、もう1人、重厚な鎧を着込んだ、金髪ポニーテールの少女からは、斜め上の対応を受けていた。

「ふん、まあ良い…。」

この無粋、貴様の その剣で償って貰う!

おいジャンヌ! 出だしするなよ!!」

「はいはい…ハア…」

金髪ポニーテ美少女の台詞に、ジャンヌと呼ばれた金髪三つ編み美少女は呆れながらの返事で、小さな溜め息1つ。

「そんな訳で、早速 戦り合おうとしようではないか! グレモリーの騎士よ!!」

そう言いながら、木場に大剣の切っ先を向けるポニーテールの少女。

「退く事は出来ないかい?」

僕は出来れば、如何にゲームと云えど、女性を斬りたくはないんだ…」

それに対して、木場は『女に向ける剣は持つてない(但し聖剣使いは別)』とばかりに、バトルを避けたい旨を伝えるが…

「そんなの私達は、寧ろ望む処だ!!」

ガンガン斬りつけて来い!」

は既に見切つているとばかり、悉く躲している。

戦闘中に何を妄想しているのか、興奮して呼吸（いき）を荒ぶらせ、顔を艶やかに赤くした狂気を帯びた笑顔、まるで斬られるのを望むかの様なその言動に、木場は軽く引いてしまう。

…嗚呼、何となく解つたよ。

この女（ひと）、こーゆー女（ひと）なんだ…

何となく察してしまった木場。

「もう良いでしよう?」

既に、貴女の剣筋は見切つています!

そもそも先の大蛇、あれに苦戦していた貴女では、僕には勝てない!

反撃を待つかの様に、嬉々として、当たる気配の無い剣を振るう残念美少女に、先程の蛇型モンスターを引き合いにして自力の差を唱え、降参を呼び掛ける。

「苦戦だど? 馬鹿を言え!!」

あの蛇の締め付け、外そうと思えば、あの蛇の体を内側から引き千切る等して、何時

でも外せたわ!!」

「はあ!? だったらアンタ何故、それ直ぐに やらなかつたのよ?!」

しかし、それに返ってきたのは、木場からすれば、想定外の答え。

それには身内の、三つ編みの少女からも、非難の声が上がる。

「何を言うか、ジャンヌよ。」

私は先程も言ったではないか。

あれ程の きつつい締め付け、そう頻繁に味わえるモノでは無いと…

それを この男は、まだ充分に堪能しきれしていない時にい、だなあ…!!」

「ららら…ララティーナああーっ!!」

お前の変態趣味に、この私を巻き込むなあーっ!!!

この、弩M戦車がああああっ!!!」

まさかの真実に、ジャンヌは顔を真っ赤にした怒り顔で、声を張り上げて味方である

戦車…ララティーナに向かって怒鳴りつけるが、

「また…変態と、言つたな?」

…… (/ / / / / / / / / /) …くうくう…

このポニーテールの少女は、『変態』という単語(ワード)に過剰反応し、顔を赤らめて悶えるだけで、何も堪えていない様子。

カキイン…

「くっ…!!」

しかし そんな お馬鹿な内輪揉めをしながらも、口だけでなく、身体も ちゃんと動かしているララテイナー。

次第に その攻撃は精度を増し…たりはせずに、未だ木場にクリーンヒットする事は無いが、反撃する隙も見せたりはしない。

「こうなったら…」

【双覇の聖魔剣（ソード・オブ・ビトレイヤー）！

…ver. ムラマサ!!」

今迄防御だけだった木場の掛け声で、聖魔剣が両刃の西洋剣でなく、片刃の日本刀の形状…聖魔刀へと姿を変えた。

そもそも木場の剣術の師匠でもあるサーゼクスの騎士は、元は とある結構有名な日本剣士。

その彼から指南を受けたのは、今は喪われた日本の古流剣術。

それ故、木場のスタイルは、実はカタナで振るう方が、相性が良かった。

「でえいやあっ!!」

バキッ!

「うがつ!？」

正眼の構えから、騎士の特性を存分に活かした、高速の踏み込みから放たれた横薙の
胴一閃。

剣の形状が変わった際に生じた、その刀に注意が注がれた僅かな隙を見逃さない、木
場の一撃が決まった。

「安心して下さい…峰打ちですから。」

倒れ込んだ少女に、木場は一声だけ投げ掛けると、

「どうせ貴女も…此処で退いてはくれないん…ですよね？」

「ああ。当然だ。」

しかし…

その質問、少しだけ早すぎは しないか？」

「??？」

もう1人の敵である、ディオドラの騎士の少女に、戦意の確認を問う。

しかし返って来たのは、質問の内容に対しては肯だが、質問そのものには否と云う応
え。

「痛たたた…」

「ええつ!？」

そして その直後、ララティーナは死体が蘇るが如くに立ち上がった。
「馬鹿なっ?!

確実に気絶させた心算だったのに!？」

「あはははは!良い、良いぞ!

今のは かーなーり、好い一撃だったぞ!!」

「ふっ…そのララティーナの防御力、硬さは我等ディオドラ様の眷属の中でも随一!

今な一撃程度で、簡単に落ちるとでも思ったか?」

驚く木場に対し、何だか凄く嬉しそうに その攻撃を誉めるララティーナと、そして
どや顔で、身内の頑丈さを誇らし気に解説するジャンヌ。

「ハアハア…さあ!もつと打ってきてみる!!

今度は峰でなく、刃の方でな!!」

「うう…」

余程 気に入ったのか余程 好い一撃だったのか…薬物中毒者の様な血走ったイッ
た眼と荒々しい息遣いで、次なる攻撃をララティーナが要求してくる。

「さあ!早く!早く!」

「う…うわあああゝゝゝゝゝっ!!」

そして我慢の限界が天突したのか、木場に特攻を仕掛けるララティーナ。

それに対して多少 引き顔の木場は、まだ得物の間合いの外で在るにも拘わらず、聖魔刀を振り翳し、

ズシヤアアツ!

「あ……が……?!」

迫り寄るララティーナの足元、床から幾本もの聖魔刀の刃を召喚。

その何本かが、この金髪ポニーテールの少女の身体に突き刺さった。

以前、教会から派遣された聖劍使いとの私闘の際に、シリユウの支援を受けて放った技を、今回は自力単独で放った形である。

「ぐ……ぐ……ぐ……ぐ……ぐ……」

「だ……大丈夫……かい?」

急所は、外した筈だけど……」

ゲームとは云えども、一応は戦闘中、倒すべき相手、ましてや自身がダメージを与えた相手を気遣う様に、木場は声を掛けるが、その当人は不気味に笑いながら、

「み、見事だ……グレモリーの騎士よ……」

致命傷を与えず戦線離脱（リタイア）させない上で、こつこつと動けぬよう、身体のみ自由だけは奪い、無抵抗の私を弄び蹂躪し、辱ようとするとはな……」

「嘘!そんなの、嘘よ!!」

「それって、兵藤と変わらないよお?!」

「駄目よ!木場きゅん!

そんなの、絶対に駄目なおつ!!」

「そうよ木場君!そーゆーのは、私に…」

「副会長お!!」

「あの男は、ああいうヤツだったのか…」

「イケメンは何をやっても許されると、勘違いしている輩の典型ですね…」

「サイテー。」

ぎゃあー!ー!ー!っはっはっはあい!!

木場（イケメン）、ざまあwww

モニターの中の会話で、生徒会（ウチ）の腐女子共やサイラオグ様、そしてシーグヴァイラ様の女性眷属の皆さん、只今大絶賛どん引き中。www

いや、俺は木場（アイツ）が、そーゆーキャラじゃないのは分かってるが、面白いからフォロワーや弁護は、しないでおくwww。

多分、今頃、VIP（アッチ）の部屋の神崎も、腹筋全開で大笑いしてるんじゃないかな?



「と、兎に角、彼女は暫くは動けないし、どうせ貴女も、退く気は無いのでしょうか？」

「…だつたら！」

「シャキィ…」

この周辺を取り巻く気味気味い雰囲気や誤魔化すが如く、木場はこの場に居るもう一人の敵である、ディオドラ・アスタロト様の騎士の金髪三つ編みの少女に、既に此の場では『女は斬らない』の信条も通らないと観念したのか、刃先を向ける。

「ふっ…良かろう。」

噂に聞いた、リアス・グレモリーの聖魔剣遣い…相手に不足無し！

このディオドラ・アスタロト様が騎士、ジャンヌ・ダルクが相手となろう！」

「じゃ…ジャンヌ・ダルク?!」

細剣を構えての彼女の名乗り、そのフルネームに、木場は驚きの顔を見せる。

「ふっ…察したか…。」

如何にも私は、15世紀のフランスで…（中略）…の、あのジャンヌ・ダルクの魂をその記憶の儘に受け継ぎ、今に生まれし者だ！」

「そういう設定？」

「いや、違うから！」

レイフィアさん、セラフォルーに、必死に止められたり。

「しつかし…何で、その聖女様の転生者とやらが、天界でなくて悪魔側に居んだ？」

「う…」

このデスマスクの疑問に、ミカエルが言葉を詰まらせた。

「一応は、彼女の存在を確認した時点で、我々の側へとオファアを持ち掛けたのですが…」

「あゝ、もしかしてアレか？」

悪魔になった経緯は知らんが、少なくとも国の為 神（笑）の為に戦ったにも拘わらず、テメーの名誉欲（メンツ）の為に自分を裏切り、異端として始末した教会や、その時に救いの手を差し出さなかった天界は、もう信用出来ないから お断りとか言われて、拒否られたってか？」

「カツハアツ!？」

「み、ミカエル様あ!？」

このアザゼルの推論がジャストミートだったのか、ミカエルがダウン。

これに、先程のポニーテール戦車の発言で、また墮天しかけた お付きの秘書天使サァンが慌てて介抱に付いた。

「んゝ。確かに それで、その20数年後かに、『 m (| |) m スイマセン、やつ

「ぱし異端じゃなかったです」とか言っても…ねえ?」

「確かにね☆」

「ゲボフアアツ!」

「み、ミカエル様ぁーっ?!」

そして この天使長にトドメを刺したのは、2人の魔王（シスコン）だ。



カイン…!!

「こ、これは…?!」「ふっ…!」

ジャンヌ・ダルクが縦一文字に振り下ろした剣を、木場は聖魔刀を横にして受け止め、金属がぶつかり合う、かん高い音がフロア内に響き渡った。

そして、その手応えに、木場は驚愕する。

「君の その剣…まさか?!」

「ふっ…: 気付いたか。御名答だよ!」

その太刀合い、その時の手応えにて浮かんだ木場の疑問に、ジャンヌは不敵な笑みを浮かべて応えた。

「私の神器は【聖劍創造（ブレード・ブラックスマイス）】!

縦から横へと太刀筋を変える、フェイントを混ぜたジャンヌの大振りな横薙を、木場がバックステップで躲すと同時に、ジャンヌ自身もバックステップで間合いを大きく開ける。

「ふん…可能ならば、純粋に剣術の優劣で勝負を決めたかったが、腕は互角…」

いや、認めたくは無いが、僅かに貴様の方が優れている様だ…。」

少女は若干、悔しさを浮かべた表情で、そう言うのと、聖劍を横に向けた構えで呟いた。

「禁手化（バランス・ブレイク）…!!」

バアアアツ!!

「な…これは?!」

ジャンヌの禁手化の声に神器が反応して、彼女の周りに、彼女を護るかの様に、無数の聖劍が…持ち柄の無い、純粋な刃だけの聖劍が召喚される。

パリイン…

そして其れ等は直後に粉々に砕け、更なる無数となった刃の破片は1ヶ所に集中して固まるかの様に纏まり、

「ハ、これは…?」

身の丈3尺程の、聖銀の刃を鎧の如く、全身に被ったドラゴンに変化したのだった。

「さあ、殺つてしまえ、ガーラント!!」

『グオオオン!!』

ジャンヌの声に反応し、このガーラントと呼ばれた白銀の竜が、木場に襲い掛かる。「そのガーラント、爪や牙は当然　聖劍その物、口から吐くブレスも聖劍の粒子から成っている!」

如何に聖魔劍遣いの貴様でも、自分が創り出す以外の”聖”属性の攻撃は耐え凌ぐ事は出来まい!!」

ダツ…

そして　それと同時にジャンヌ自身も、最初から　その手に持っていた、細劍型の聖劍で木場に斬りつけてきた。

「この私とガーラントの同時攻撃…

実質2対1となった今、貴様に勝ち目は無くなったぞ!

さあ、観念しろ!

リアス・グレモリーの騎士よ!!」



一方その頃…

「ふふふ…おチビちゃん達、覚悟は宜しいかしら?」

「あわわ…この女（ひと）、怖いですう…」

「ギャー君。ギャー君は後ろに、下がっていて下さい。」

小猫とギヤスパーは、中央エリア2Fでディオドラの女王（クイーン）と対峙、

「…雷よお!!」

ドツゴォーン!!

「く…キリが無いですわあ…」

転位魔法陣で飛ばされた朱乃は、地下迷宮エリアでモンスターの群れと戦闘中、

「うゝ うゝ…一体此処、何処なのよ〜?」

「完全に迷ってしまったによ。」

そして偶々に合流した後、朱乃と同様に転位魔法陣の罠に揃って仲良く引っ掛かった、滅威弩服の乙漢と紅髪の駄肉姫は、南エリアで迷子になっていた。

続く

女王（クイーン） vs 女王（クイーン）！！

斬！！

『ぐるあああああつ！！』

木場の聖魔刀での一閃が、聖銀のドラゴンの首を斬り落とした。

その一撃で、ドラゴンは その身が無数の刃の欠片と成り崩れ、そして その破片は無に帰して逝った。

「ちいっ！！」

それを見て盛大な舌打ちをするのは、下半身にナイフサイズの聖なる刃を幾重にも重ね合わせ、蛇の如き形状…まるでRPGに登場する怪物“ラミア”を連想させる姿となっているジャンヌ。

そのジャンヌが、次は自分のターンとばかり、両手に持った曲刀型の聖剣と、やはり聖剣その物な蛇身の尻尾を鞭の如く撓らせ、木場に斬り付ける。

「くっ…！！」

ドガアッ！

しかし その連続攻撃を、木場は全て紙一重で躲していく。

「リアス様、こつちも片付いたによ。」

「あ…ありがと…」

あゝ、本当に（転位魔法陣で飛ばされての偶然だけど）ミルたんとか流出来て、良かったわ〜…って、此処って何処なのよ?!

「迷子になったによ。」



「せいやああつ!!」

カキイイン…!

「…っ!!」

新たに創造した聖魔刀を用いた二刀流のスタイルで、木場がジャンヌの持つ二振りの曲刀の内の一本を弾き飛ばした。

「貴女は言った!」

『如何に聖魔剣遣いの貴様でも、自分が創り出す以外の”聖”属性の攻撃は耐え凌ぐ事は出来まい!!』…と!!

…しかし其れは、貴女も同じ事!」

「!!?」

蛇状の尾の猛攻を掻い潜り、ジャンヌの正面、漸く自分の間合いを位置取る事が出来

た木場が、二刀流聖魔刀を構える。

斬 x 2 !!

「きゃあああつ?!」

木場の斬撃の軌跡は十字架となり、ジャンヌの鎧の胸元に刻まれた。

「僕の聖魔刀も一応は、” 聖 ” 属性も持ち併せていますから…」

それを…十字架の形で打ち込んだから、ダメージ倍増でっ…しよ・う…うつ!!」

「ふっ…また峰打ちで よく言う…」

まあ、決着を着けるには、十分だったが…

うう…しかし その斬撃を十字架…に、放つ行為が、自分にも多少なりダメージが来

るのは、想定外…だったか？」

「ええ…そうですね…」

金輪際 封印ですよ、これ。

でも大丈夫、貴女程のダメージは、受けていませんから…」

「そりゃ…そうd…」

会話の途中、ジャンヌは其の場から姿を消す。

『ディオドラ・アスタロト様の騎士（ナイト） 1名、リタイアです。』

そして城内に、彼女の戦線離脱（リタイア）を告げるアナウンスが流れた。

「さて……と……」

そう言つて、木場はフロアの天井を見据えると、この中央エリア最上階の”王の間”を指し、歩み始めた。

「…待て!!」

「??」

しかし、そんな木場を呼び止める声。

「き、貴様あ…この私を、此の儘に しておく心算かあ!?!」

「……………」

急所を外されて致命傷は避けられ、強制リタイアは避けられているが、未だに身動きが出来ないララティーナである。

「…すいません、急ぎますので!」

タタタツ…

しかし木場は、振り向く事無く彼女に一声だけ掛けると、其の場を走り去つて行くのだった。

「くう?!ほ、放置プレイとは、とことん鬼畜な男だ…」

私が もし、ディオドラの眷属でなければ、惚れていた…かもな…」

そして その後ろ姿を見て頬を朱に染め、恍惚な表情を浮かべる変態が1人。

「さあ、覚悟なさい！」

ほ、滅ぼしてあげるから!!

ミルたん、行くわよ!!」

「ごよー」

大見栄を切ったオーバーアクションを取り、戦闘の構えを見せる。

「な、何をやってるんだよ お前！」

メイコにアイツ等から、僕を護るように言われてたんじやなかったのか？」

『……………』

戦闘態勢の2人に対して、この大男…デイオドラの女王（クイーン）・メイコの使い魔の男は、それに何する事無く、ぼおくと見て立っているだけ。

「(ボソ…) 油断を誘っているのかしら？」

「(ボソ…) …だと、思うによ。」

そんな使い魔に、リアス達は尚の事 警戒、慎重に様子を窺う。

「だから、さっさとアイツ等、片付けろって！」

お前、後でメイコに お仕置きされても知らないからな?！」

『(ニマ…) …………… (／＼／＼／)』

デイオドラは この使い魔に、リアス達を攻撃するように囁けるが、使い魔の男は”

お仕置き” という単語に反応、何を頭の中でイメージしたのか、満面の笑みを浮かべ、尚更動く様子を見せなくなった。

「(ボソ…) ねえ、ミルたん？」

デイドラの あれ焦り具合… って… ?」

「(ボソ…) 絶対に、演技によ。」

「(ボソ…) や… やっぱし？」

デイドラは全く動こうとしないボディガードに、かなり真剣（マジ）に焦っているのだが、その真剣（マジ）っぷりが却って、迫真の演技だと錯覚しているグレモリーの2人は、なかなか踏み込めない。

『リアス・グレモリー様の騎士（ナイト）1名、リタイアです。』

!!?」「ゆ、祐斗!!」

そんな空気の中、 またも流れる戦線離脱者（リタイア）報告のアナウンス。

リアス達、そしてデイドラが室内のモニター画面に目をやる。

其処にはダークオレンジのブレザーに、膝上1.5位のRed & Blackのチエツクのスカート、ブラウスは胸元の敢えてボタンを外した その豊満な胸を強調しているかの様な着付け、銀髪をアップで纏め、鋭角的ラインの眼鏡を掛けた少女が、競馬鞭を手に持ち、カメラ視線で妖艶に嗤っている姿が映っていた。

「ほ、ほら見ろよ！」

メイコだつて仕事してるんだぞ？

お前も きちんと言われた命令をこなせば、後からメイコに御褒美…!!

いや、GO★HO★U★BI★…が、貰えるかも知れないぞ!!」

『…!!?』

リアス達が木場退場のアナウンスを聞いて動揺してる中も、何とか この使い魔の大男に動いて貰おうと、必死なデイドラ。

先程の”お仕置き”という言葉に対する反応を思い出し何か閃いたのか、今度は”御褒美”…それを少し違うイントネーションで発した時、この男の元から小さかった目が、本の僅かだが鋭く見開き、眼光が宿る。

「むん！」

「うわっ？」

どん！

「ええ？」

そしてデイドラの胸元を強く押し叩き、部屋の隅まで飛ばす。

この仲間割れにしか見えない流れに、リアスも困惑。

「痛たた…何、するんだよ?!お前!!」

壁に痛打した腰を抑えながら、デイオドラも、その一見、只の線にしか見えない糸目を少しだけ涙を浮かべながら見開き、文句を言うが、

ニヤリ：

この部屋に召喚されてから、ずっと、ぼおつとした無表情だった人物と同一とは思えない程の悪い笑みを浮かべると、左掌をデイオドラに向け、

「ふんむー！」

どつどつどつど…!!

デイオドラの足元手前、床から突き出る様に、無数の黒い鉄の棒を出現させ、それらは全て、天井まで突き刺さった。

「ん…これは、もしかして、僕を守ってくれてる…のかな？」

それは端から見れば、デイオドラが鉄格子の檻に閉じ込められた囚人にしか見えないが、魔力に通じている者だからこそ、これが強力な防御結界だと理解も出来る。

ニヤ：

大男は再び、黒い笑みを己の主の主に向けると、今度はリアス達を凝視、

「うがー…」

狙いを定めての突撃を仕掛ける。

「ひえっ?!」

その余りの迫力に、リアスは一瞬怯んでしまうが、

「リアス様!!」

ガシィッ!

彼女を守るべく、一步前に踏み出たミルたんが、この猛追を体全体で受け止め、

「み…ミルたん?」

「によによによによ!」

「むー…むー…むー…むー…むー…むー!!」

この使い魔の男とロックアップの体勢、その儘 力比べが始まった。



「ふん…雷の巫女…か…」

「あらあらあら?」

そういう貴女は、【監獄女王（プリズン・クイーン）】さん…です…ね?」

場所（カメラ）は移り、中央エリアの最上階。

王の間の入り口にて、リアスとディオドラ、2人の女王（クイーン）が対峙していた。

「部屋の前で立ちんぼって、何か有ったのですの?」

朱乃が自分より先に最上階に辿り着いた、ディオドラの女王であるメイコが、王の間に入らず、その扉の前で立っていた事を尋ね、

『グエエエエツ?!』

しかし、これを、メイコが手にしていた競馬鞭型の神器から放たれた真空の刃と、朱乃の召雷で瞬殺。

「確か…今回のゲームの勝利条件の1つ、王の間の制圧条件は…」

「…その部屋の”守護者（ガーディアン）”を斃した、その上で…」

2人の女王は、確かめ合う様に眩き合い、互いに戦闘姿勢を取る。

「其の場に居合わせる、室内の敵を殲滅する事！」

ズガアツ!!

そして言葉を重ねたと同時に互いが放った、真空刃と雷撃が衝突、距離を取っていた2人の中間位置で相殺された。

「やるな雷の巫女！」

ならば私も、本気を出さねばなるまい!!」

そう言ううとメイコは、右手に持っていた神器を顔の高さ、真横に構えると、

「…禁手化（バランス・ブレイク）！」

カッ

「ううっ?!」

手にしていた競馬鞭型の神器を、一瞬眩く輝かせると、

「だ、黙れ！朱乃の肌は、誰にも晒させんぞおおお!!」

あのディオドラの女王の攻撃で、朱乃先輩の胸が露わになった瞬間、バラキエルがマジギレ。

画面に向けて極大な雷光を放ち、モニター半壊。

画像が不鮮明に乱れ、今度は、これにアザゼルがマジギレ。

因みに現在、

「こ、これロスヴァイセ、この手を離さぬか？」

先の短い老人の楽しみを奪うでない。」

「お黙りなさい！このスケベ爺い!!」

貴方は北欧の主神ですよ！

他勢力トップの皆様方の前で、あんな『ひやつはー！有り難や有り難や（一人ー）』：

みないな、破廉恥なアクションは慎んで下さい!!」

オーデインは介護付き添いの戦乙女（ヴァルキリー）に背後から目隠しされ、

「痛い痛い痛い痛い！」

た：確かに大きさでは負けてるけど、グレイファイアの方が、形も整っていて綺麗で可愛かったかr：痛い痛い痛い痛い！ご、ごめんなさい!!ギブギブギブギブ！」

サーゼクスさんがグレイファイアさんに、超人圧搾機を仕掛けられている。

参考迄にミカエルは、立場的に墮天を怖れてか、自主的に画面に背中を向け、デスマスクも意外に？紳士なのか、天使長と同じアクションを取っている。

…で、セラフォル？

貴女は何時迄、俺の目を塞いでいるんだ？

「は☆い☆、シリユーちゃんは、見ちゃあダメだよ☆？☆」

「…トーカーさんに、チクリますよ？」

「ごめんなさい。 m () m

「ぬおおおっ!!朱乃お~~~~~!!」

「ちい!とりあえず このバカ、抑え付けるぞ!!」

おい、サーゼクス!神崎!デツちゃん!

ちよつと手伝ってくれ!!」

それに答えたのは、黒歌さんと神崎君。

「…で、アツチのアレは、何なんだ？」

「「「「んうう！んうんうん！！」」」」

次にアザゼル…先生が、部屋の隅で縛り付けられ猿轡され畳まれている、匙やサイラオーグ様達、この部屋に居た男性陣全員を指差して、説明を求めてきました。

「…簡単に言えば、リアスの女王の ぼろりに、感涙しながら馬鹿騒ぎしていた大馬鹿者共（おんなのこのてき）に、修正（物理）を加えただけです。」

それに答えたのは、シーグヴァイラ様。

「じゃ、あれは？」

…支取先輩、何が有ったんですか？」

「…象ウくサン、象オくサン、オラわ人気者♪」

そして神崎君が未だソファアの上で魔されてる？我が主を見て、聞いてきましたから、ギヤスパー君の お、おち…ん……………ん…を見て、意識を刈り取られたと有り
の儘を伝えると、

「新羅先輩、無理して言わなくても良いですから。」

神崎君、苦笑です。

…って、だ、だったら、言い切る前に止めて下さいよ!!

な…成る程…

拳に爆裂系の魔法を附加させての、2人掛かり?の剛拳打か。

殴ったと同時に爆発させる この技で、吹っ飛ばされる巨漢。

「決まったか!？」

「あれは、立てないでしょう…」

紫龍や魔王が呟くが、その台詞を様式美とするが如く、あのデカ男は立ち上がり、

「ぐふふふへ…」

脚をガクガクと震わせながらも、あのデカイ顔に比べて小さ過ぎる目を三角形に吊り上げギラつかせ、不気味に嗤う。

「あははははー！良いぞ お前！

もつと根性見せろ！殺ってしまえ!!」

部屋の隅で、まるで囚人の様に格子に捕らわれている感じな糸目の小僧が煽っているが、ありやあ それこそ あの餓鬼の言う、根性で立ち上がったみたいなものだ。

只、それだけだ。

「さあ、行つくによ!!」

あの滅威弩サンも、いよいよ勝負所と判断したのか、目の前の敵にダッシュで間合いを詰める。

「によー！」

パシイツ…ドン！

まずはスライディングで足を刈り、バランスを崩した処でジャンプ、相手の頭を足で捉えてのフランケンシュタイナー！

間髪入れずに後頭部を掴み、無理矢理に起こすと、背後に回り込んで

「せーによー!!」

ズガン！

投げっぱなしジャーマンを炸裂させた！

しかし、まだ、この滅威弩サンの猛攻は終わる事は無い。

ダウンしているデカ男の両足をがつつり掴むと

「によー……………つ!!」

ぶんぶんぶんぶん…

ジャイアントスイングで何回も、ぶん回し、最後は天井高く放り投げる。

パサ…

そして自らも、悪魔の羽を広げて飛躍。

空中で敵を捕らえると、その頭部を脇の下に挟み込み、旋回しながらの急降下…スイング式DDT!!…で、脳天を大理石（…か、もつと硬くて高そうな、冥界の鉱物製）の

家の御嬢様は、残念ながら身内以外には慈愛の『じ』の字も持ち合わせてはいない様で、特大サイズの滅びの魔弾を掌に精製すると、情け容赦無く撃ち放った。

ガインツ！

「嘘っ?!」

しかし、その滅びの魔弾は、デイオドラの前の鉄格子に阻まれる。

デイオドラの女王、メイコの使い魔が作った魔法障壁の防御結界は、それ程の能力を秘めていた。

「あは…あははははは！

ど…どうだりアス！

この結界の前では、キミの自慢の”滅びの魔力”すら、通じないみたいだね！」

その防御力を目の当たりにし、先程とは打って変わり、強気な発言のデイオドラ。

「はあ？何、偉っそうに言ってるのよ?!」

アナタだって、その結界で、こっちには攻撃出来ないでしょうが！

…って言ーか、大体それ、其処から どうやって出る心算なのよ!?

後ろ側、壁だけでなく、床や天井にも魔法障壁が張られているから、壁床破壊して脱出なんて、無理そうじゃない?」

「え…?」

それに対して、リアスは怒り半分呆れ半分での指摘（ツツコミ）。

つまりディオドラは、その結界の防御力以上の火力でない限り、あらゆる攻撃を受け付けないが、同時にあらゆる攻撃を仕掛ける事が出来ない事になる。

ディオドラ自身もリアスの指摘で初めて それに気付き、間抜け面となった。

「はあ…つまり、敵の王（キング）撃破と、敵拠点制圧は無理ね…」

…と、なると、後は頼んだわよ、朱乃…」

そう呟くとリアスは、この部屋のモニターに映っている、ディオドラの女王と一騎打ちの様相を成している自身の女王に目を向けるのだった。

覚悟と決意

ビィシバアツシ!!

「あははは！平伏しなさい！この雌豚!!」

「……くっ!!」

防御結界により、現状ではディオドラを討てない（ディオドラ自身も攻撃不可）状況な南エリアのディオドラ拠点、リアスは部屋に設置されているモニターに目を向けると、其処には正しく、T H E・女王様な出で立ちのディオドラ・アスタロトの女王（クイーン）が、自身の女王（クイーン）の朱乃を鞭で責め立てている場面だった。

朱乃自身は、その一撃は躲しているが、鞭で叩きつけらる事により、その部分が破損。壁床天井、部屋中に立派な装飾が為されていた、この“王の間”は、見るも無惨に破壊し尽くされた姿と変わっている。

「……此処に居ても、仕方が無いわ！」

ミルたん！朱乃の加勢に向かうわよ!!」

「はいにょー！」

ディオドラには手出し不可能……即ち今回の勝利条件の内の、『敵拠点制圧』及び『王（キ

「…アーシア？ 朱乃先輩が肌ける度に、目隠しするのは止めてくれないか？」

「シリユーさんは、見ちゃ駄目ですう！」

「は☆い☆ アザゼルちゃんも、あっち向いてようね☆!! ☆」

「な…放せ、セラフオール!!」

流石に俺も、親友の娘の乳を見て、はしやいだりは せんぞ！

大体そんなのしたら、アイツに確実に殺されるぜ!!」

「ぬう？ ロスヴァイセイ！ お主、儂に何か怨みでも有るのか？」

何故、老人の楽しみの、邪魔をする?!」

「お黙りなさい！ このエロジジイ!!」

「痛い痛い！ ぐ、グレイフィア、心配しなくても僕は、キミ以外の女性の裸には、興味が無いから痛たたた!!」

き、厳しいなあ…昨夜は あんなにも、素直で甘えん坊で おねだりさんで、凄く可愛かったのに…」

「…明道流…”極” 駱駝固め!!」

「ぎよえー…??」

そして この時、その様子がモニターに映し出された時、それを観戦していた殆どの

男性陣は、女性陣に様々な形で、その視覚を封じられる。

「ベツロ氏？ 先程もでしたが、貴方は画面に喰い付いたりしないのですね？」

「応けう、そりや俺も、若い娘さんの肌に興味が無いと言えば嘘になるが、万が一にも
そういう様を孫娘に知られて、『えつちな じいじ嫌い』とか言われた日にや、シヨツ
クで自殺する自信が有るからな。」

「くっ…」

観戦の部屋にて その様な遣り取りの中、天井間近迄浮遊した儘、破られた巫女服を、
換装により着替え直す朱乃。

「雷よおっ!!」

カッ…

両手を手首の部分で交差させる様に頭上で掲げ、特大の雷撃をメイコに向けて落とす
が、

「ふっ…」

「な…う？」

ディオドラの女王は それに向けて、手にした鞭を放つ。

すると朱乃の撃った雷は、其れに吸収される様に消えて逝った。

「あははは!! 驚いた？」

この鞭、そして この衣装は、貴女への対抗手段……と云う訳では無いが、偶々に雷撃耐性を備えている！

解る？ 雷の巫女？

つまり貴女は、この私を斃す手段を持ち合わせていないのよ！

あははは！ そら！ そら！ そら！ そら！！

ビシバシ！ ポオワツ！

「……くう！！」

ドヤ顔で自身の得物の解説をした女王様は、更に鞭での打撃と、それに伴って生じる真空刃で追撃に入る。

「くっ……い雷よおオっ！！」

バシイ！

それを躲した朱乃が、反撃とばかりに雷撃を放つが、

「あはははは！ 無駄無駄無駄あ！！」

雷撃耐性を備えたメイコの神器の前に、それは無意味。

「この私に雷撃は通用しない！」

それしか攻撃の術が無いならば、最早 貴女には勝ち目は無い！

さあ、覚悟を決めなさい！

リアス・グレモリーの女王（クイーン）!!」

トドメとして振り放った鞭が、まるで蛇の様にくねりながら朱乃を襲うが、バチイッ!

「な…!?!」

その攻撃は、魔力で創られた防御シールドによって弾き返される。

「…覚悟、ですか。」

小猫ちゃんも既に、自分の中の血（チカラ）を受け入れている…

確かに私自身も、覚悟を決めなければならない時が、来た様ですわね。」

「はあ? な、何を、訳の解らぬ事を?!」

ボタン…

「朱乃!」 「朱乃たん!」

「リアス? ミルたん?」

「リアス・グレモリー?!」

その時 扉が開かれ、王の間に新たな客が。

リアスとミルたんである。

「くっ!!」

この時 一瞬だがメイコの顔が、若干歪む。

それも仕方の無い話。

自身：ディオドラ眷属としての、ゲームの勝利条件：朱乃1人を倒せば良かった筈のハードルが、一気に上がったのだから。

見方を変えれば、この部屋に のこのこと やってきた王（キング）を討ちさえすれば、例え朱乃とミルたんが生き残っていようと、自分達の勝利となる。

「悪いけど、一気に決めさせて貰うわよ。」

朱乃！ミルたん！行くわよ！！

しかし現状は3vs1と、どう見ても不利なのは明らか。

「待って！」

あの女（ひと）は、私1人で倒してみせる！

リアス！ミルたん！

手出しは無用ですわ！！

「朱乃？」

だが、朱乃自身が援護を拒絶。

ホッ：

朱乃の発言に、一先ずは小さく、安堵の溜め息を零すメイコ。

先ずは何故だか1vs1に拘る朱乃の趣旨に甘え、その雷の巫女を見据え、改めて鞭

を構える。



らあつきく〜い♪

何故だか分からないけど、一騎打ちなのは有り難いわ。

流石に3人掛かりで来られたら、堪ったもんじやないしい。

聞けばグレモリーは、正統派な戦いを好むって云うし、まさか　これで油断させとい
て、総攻撃仕掛けるなんて無いわよね？

…って、それって寧ろ、アタシ等の得意技だし（笑）

とりあえず、コイツには、た・だ・の・雷・撃・し・か・無い筈！

そして今の私には、その雷撃は通用しないし、魔力を使わない肉弾戦なら尚更、私の
方が有利!!

とりあえずは　この雷の巫女をさくつと片付けて、あの　ごっついメイドは…この前
の魔王様ゲームで見え限り、近接格闘は不利っぽいやから、遠距離からの魔法戦で…

そして最後に、リアス・グレモリーを…!

…な、高速思考を終え、遠距離からの鞭の連打と無数の真空刃を朱乃に向けてメイコ
は放つ。

バシイっ!!

「な…」

しかし、それは、朱乃の正面に現れた紫の魔法陣…魔力障壁（シールド）によって、悉く跳ね返された。

「ウフフフ…貴女の神器が私の雷撃を無効化する様に、私の魔力障壁（シールド）も、その程度の攻撃では、破る事は出来ないみたいですよわね！」

それは、互いが攻撃手段が通じない、泥沼試合の展開をスタートさせる様相だが、「抜かせ！確かに一見、防御は互角に見えるが、貴女の魔力障壁（シールド）は、その防御力以上の力をぶつけければ破壊出来る！」

メイコは自信な発言。

「引き換え私の神器は、貴女の攻撃手段が、雷撃で在る限り、この私には通用s…」

バサアツ…

「なあ?!」「あ、朱乃…!!」「によ…?」

しかし、その自信に満ちた口上の途中、朱乃は背中に羽を広げる。

そして、その姿に、その場の者達は、それぞれが、それぞれの意味での驚きの声と顔を見せた。

「ななな…何なのですか?その羽わ?!」

一番驚いているのはメイコ。

何故なら朱乃の背から生えている羽……

右の其れは、一般的な悪魔が持つ、蝙蝠を象った羽だが、左は黒き鳥の羽根から成る漆黒の翼……正しく墮天使を連想させるに他ならなかったのだから。

「朱乃……その姿……」

「……………」

バサア……

驚くりアス達を余所に、朱乃は天井間近迄飛翔すると敵の女王（クイーン）を刮目、

「はあああああ……っ!!」

バチバチバチバチ……

掌をその敵に向けて、今迄以上の雷を漲らせる。

「あは……あははは……」

何をするかと思えば！

まだ理解出来ないのですか？雷の巫女！

今の私に雷は効かないと、何度言えば分かるのです！」

確かに悪魔の其れとは違う、黒い翼に面食いはしたが、結局は雷による攻撃。

それを見たメイコは、余裕と自信の発言と表情から、

「それ！」

ヒュン！

この勝負を終わらせるべく、今迄に放った、数倍の大きさの真空刃を放つがバシイッ！

「くっ……これでも……なのか……？」

朱乃の張っていた防御シールドを破壊するには至らず。

「ええい!!」

カツ！

そして次の瞬間、朱乃が自らの掌に溜めていた、雷を撃ち放つ。

「はあ？あ、貴女は本当に、雷（それ）しか能が無いのですか？」

そして その雷は、先程迄同様に、半ば呆れ顔なメイコの神器の衣に無効化され

「うぎゃあああぁっ!!」

…される事は無く、ダメージを与える。

いや、正確に言えば、放たれ”雷”自体は確かに無効化されたが、同時に放たれていた…雷の中に組み込まれていた別の要因…”別の属性” エネルギーは無効化される事が無く、そのエネルギーが被弾したのだった。

「クツハア…ば…馬鹿な…？ 今のは…」

対雷仕様だけでなく、禁手（バランス・ブレイカー）状態の神器の衣の防御能力自体が高かったのか、何とか致命傷は避けられたメイコ。

しかし、その一撃だけで、女王様の衣はズタズタ、撓わな果実が露わとなり、

「…だから、一々目隠ししなくても良いから！」

「黙れにや！この おっぱいドラゴン！」

「サイラオーグ様！不潔です!!」

「はい、元ちゃんもアツチ向いてる！」

「アザゼルちゃんもだよ！☆」

「レグ君は まだ早いの！」

「こ…の・スケベ爺!!」

モニタールームで、それを観戦、紳士対応な約2名を除き、ひやつはーしていた男性陣が、メイコが普段の某・名門校を想わせる制服に換装し直す迄、女性陣によつて視覚を封じられた。

「目が、目があゝ?!?」

因みに愛&恐妻家な紅髪シスコン魔王は、銀髪の美女から、結構ガチなサミングを喰らっていたりした。

フツ…墮天使の血を引く人間（ハーフ）が、転生悪魔になっていると云う噂は聞いた事が有った…。

しかし、それが まさか貴女…しかも、墮天使幹部（バラキエル）の血族（むすめ）だったとはなあ！」

バシユツ！

バラキエルの娘…

その朱乃のカミングアウトに、若干の驚きを見せつつも、メイコは通常形態に戻った、指示鞭型の神器から無数の真空の刃を放つが、

バスイツ！

「なっ？」

それ等は全て、朱乃の展開したシールドに阻まれてしまう。

「そう…あの忌まわしき墮天使（おとこ）の血（チカラ）を継いだからこそ、雷に”光”を織り交ぜ、本来ならば雷撃が通用しない貴女にも、ダメージを通す事が出来た！」

…この様に!!」

そして朱乃のターン。

自らに流れる血（チカラ）を受け入れる覚悟を決めた女王（クイーン）が、その力、その魔力を躊躇う事無く全開し、頭上…天井一面に大きく展開させた、稲光が迸る魔法陣

に張り巡らせる。

「ひえっ!!」

それを見たメイコは危険と判断、自身を何重もの魔法障壁（シールド）で身を包んで、防御を固めるが、

「雷光よおおっ!!」

カッ…!!

其処から撃ち放たれるは、従来の雷撃に、墮天使の血を引いているからこそ組み合わせる事が出来る、悪魔にとっては天敵となる”光”の属性。

則ち、雷光。

「きゃああああああああああっ!!?」

それは防御障壁（シールド）等 始めから無いに等しいとばかりに容易く粉碎して、メイコを直撃。

既に雷を封じる術も失っていた彼女は、その威力を十全に喰らってしまった。

「朱乃…」

やっと、やっと前に進めたのね…」

その光景を見て、事情を知っているリアスが喜びの涙を零す。

『ディオドラ・アスタロト様の女王（クイーン）、戦闘不能（リタイア）です。

此により、リアス・グレモリー様眷属の”王間”制圧の条件が、クリアされました。
よって此の度のゲーム、リアス・グレモリー様の勝利とします！』

「あの時の部長の『きゃー!?!』、皆に評判良かったぜ。

サイラオグも、『リアスって、あんな乙女な悲鳴も出せるんだな?』って大笑いしてたし。」

「うう…言わないでよお…」

…って、サイラオグ、今後逢ったら殺す…!!」

ギャー君を大泣きさせた極悪ドラゴン先輩は、次にミルたんにも、部長の順番で、少の駄目だしを…

何時かの、はぐれ悪魔討伐の時の反省会と比べたら、かなりソフトな内容ですが。

反省会と言いつつ、結構 誉めてくれたり、最後はオチを付けて、笑いを誘ってくれたり。

…それで部長は、”G”型のモンスターと戦ってたりしたのですか…。

”G”のモンスター…

恐らくは巨大な”G”な姿のモンスターだと思いますが…まさか、人型が混じって、Georgeとか言ったりは しませんよね?

それから”G”が相手なら、女の子だったら悲鳴を上げても仕方ありません。

あんなの、絶滅してしまえば良いんです。

「木場は…セクハラは程々にな。」

「ちよ…神崎君？」

「ま、!?」「え、?!」「に、よ？」

そして次は、祐斗先輩の番ですが…ゆ、祐斗先輩?!

「ゆゆゆ…祐斗? あ、貴方…?!」

「エロエロ騎士だにゃ!」

「く、黒歌さん、何言ってるんですか?!

いや、部長! 誤解ですから! 皆も!!

ほら、黒歌さんも神崎君も、目が嗟ってるでしょ!」

ふむ…恐らくは あっちの女性眷属との戦闘中、らつきーすけべ的なイベントが起きたのでしよう、シリユー先輩と黒歌姉様に弄られて、真つ赤な顔で、何だか必死に慌てふためく祐斗先輩。

凄くレアです。

「そして最後に、朱乃先輩…」

「……………!!」

その後、祐斗先輩に二言三言の真面目な駄目だしと助言をしたシリユー先輩は、朱乃先輩に話し掛けました。

表情（かお）が一気に強張る朱乃先輩。

「朱乃先輩は……まあ、突っ込み処も多々有るのは有りますが、とりあえずはよくできました、はなまる……ですか？」

「え？」

そんな緊張しまくりな朱乃先輩に、凄く優しい笑みを浮かべて誉めるシリユー先輩。これには朱乃先輩も、驚いています。

ぼん……

「小猫もそうだけど、己の殻を破った、破れたのは大きいからね。

自分の血（チカラ）を忌みず、或いは恐れずに受け入れた……

それを証明出来ただけでも、今回のゲームは意味が有ったと思う。」

ふにゃ!?!

ちよ……誉めてくれるのは良いですが、どさまぎで人の頭をぼんぼんしないでくれますか? セクハラドラゴン先輩?

わわわ、私は撫でポで堕ちたりなんかしませんよ?

トーカちゃんにチクリますよ?

……って、部長も「うん、うん!」って、嬉しそうに頷いてます。

「……………」

シリユー君に　そう言って貰えると、凄く嬉しいでs……………って、え?」

そして朱乃先輩。

まさかの優しい発言、それも殆ど不意打ちだったからでしょう。

その決意と覚悟を認められて余程嬉しかったのでしょうか、目から一筋の涙が。無自覚だったのでしょうか、本人もそれに気付いて驚いていますか…

「あ、シリユー先輩、朱乃先輩、泣かしました。」

「え…?」

朱乃先輩には申し訳有りませんが、これは またとないチャンスです。

「あ、いけないんだ、女の子泣かした。」

「え?」

「パワハラドラゴンだにや!!」

「…ですわ!」

「え? え、えっ!」

これにリアス部長、黒歌姉様、レイヴエルさんも乗っかってきました。

先程の…並びに日頃の鬼畜っぷりの お返しとばかり、今がっチャンス!!…とばかりに弄り倒します。

「シリユーさん…」「シリユー先輩い…」

「神崎君…早く、謝った方が良いと思う…よ?」

全部、黒歌姉様が はっちやけ過ぎたのが悪いです。

コンコン…

「…！ 誰？」

そんな時、外から誰かが扉をノック。

部長が誰かを尋ねます。

「…ディオドラ・アスタロトです。

リアス、入っても良いかい？」

「ディオドラ？…ん、良いわよ…。」

ガチャ…

「失礼するよ…。」

入ってきたのはディオドラ様。

そして、護衛として附いて来たのでしょうか、女王のホルスタインメガネ（怒）です。

全く…何処かの痴女猫といい、どうして そんなに胸元大きく開ける着こなしが出来るんですか？

恥ずかしくないのですか？

あー、そう言えば、ディオドラ様の眷属には もう一人、似たような着付けをしている女（おっぱい）が居ましたね？

「え？私…と、ですか？」

.....。

大丈夫なのか、この男。

あの初対面の日…若手悪魔と魔王と老害の対面の儀があった日の夜、思い出した様にアーシアは才力研の皆に教えてくれたのだが、実はこの男こそ、アーシアが魔女の烙印と共に、教会を追放される原因を作った元凶だったとか。

…深読みかも知れないが、もしかしたらディオドラは、最初からアーシアが教会…延いては天界から追放されるのが狙いで、わざと瀕死を装い、彼女の前に現れた。

その後、悪魔すら癒やす魔女として露頭に迷った処に再び姿を見せ、口説き落として自が眷属にしようとした…

うむ、あの焼鳥男（ライザー・フェニックス）に負けず劣らずな、美女美少女美幼女コレクターならば十分に考えられる話だ。

まあ、それが全て悪いとは、俺は思っていない。

寧ろ、アーシアが天界から飛び出すきっかけを作ったのだ。

その件だけは、ファインプレーだ！

俺の読みが当たっていたならば、この男より先に墮天使や…そして俺が、彼女に近付いたのは計算違いだったのだろう。

そんな中、

「ああ、アーシア・アルジエントさん！」

「ひゃ、ひゃい！」

あ、余りにも思い詰めた表情で話し掛けられたので、つい囁んじやいみやひゆた…。

ガバツ…

「も、申し訳有りませんでしたあー！！」

「え？えええつ?!」

は、はいいい？

い、いきなりDOGGEZAしてきました、この悪魔（ひと）お？

「あ、アーシアさんは覚えてないみたいですが、貴女が教会を追放された原因となった、貴女が癒した悪魔…

実は、この僕なんd

「ディオドラさん…？」

顔を、上げてください。」

あ、そういう事でしたか。

「アー…シアさん？」

「…私は あの時の事を、一度も後悔したことは有りませんし、貴男の事を一度たりとも

恨めしく思った事も、有りません。

寧ろ今は、シリユーさんやリアス部長、オカ研や生徒会の皆さん…トーカーさんや桐生さんに村瀬さん片山さん…駒王学園の皆さんと出逢え知り合えた きっかけ…

今の私の始まりですから…今は、貴男が あの時、私の前に現れてくれた事に、凄く感謝しています。

お礼を言わせて下さい、ありがとうございます、ディオドラさん。(ベコリ)

そう、それは、紛う事無き本心。

「あ…ありがとう、アーシアさん。」

そう言ってくれて、僕も、救われた気がします。」

ディオドラさん、さつき迄の申し訳無さ全開な暗い表情が消え、何だか憑き物が取れた様な、スツキリとした顔になりました。

「そ、それから、アーシアさん？」

「はい？」

あ、まだ何か、お話が有るのでしょうか？

「…の前に、赤龍帝殿…？」

「ん？」

「……………？(ボソボソ)」

「……………(ボソボソ)」

「……………?!(ボソボソ)」

「……………!!(ボソボソ)」

ん?

何やらシリユーさんと、小声で話しています。…つて、また私に顔を向けました。

「あ…あの、今この時の ついでと言ったら何ですが、よ、宜しければ、僕と、友達になつてくれませんか?」

「ほえ?」

え?ええー……つ!!?

と、ととと…友達…ですかあ?

「……………(チラツ)」

「……………(ニツコリ)」

お友達つて…急に言われても…私なんかが良いのでしょうか?…と、デイオドラさんの隣に立っている…多分、彼女さんなのでしょう、女王(クイーン)さんに、遠慮がちに上目遣いで様子を窺ってみると、ニツコリと他意を感じさせない笑顔を返して下さいました。…なので、

「はい!私なんかで良ろしければ、ずっと”オトモダチ”で居てください!」

うぷぷぷ…ｗｗｗ」

リアス部長に小猫、レイヴエルも、それを察知して笑いを堪えきれないのか、腹を押さえて蹲つていり、

「にゃっはっはっはーっ!!」

黒歌に至つては、普通に床に寝転がり、のた打ち回る様に大笑いしている。

他の面々も、口元を引き攣らせた、乾いた笑みを浮かべていらつしやいる。

…つて、あつちの女王（クイーン）も、笑うのを我慢してね？

「シリューさくん、お友達が増えましたあ♪」

「応、良かったな、アーシア！」

「えへ♪」

そして早速、嬉しそうに交換したアドレスの表示画面（ガラケー）を俺に見せるアーシア。

ぐい…

「…?!」

そして俺は、若干orzつてるディオドラの肩に腕を回し、

「どんまいｗｗｗｗ！」

「うう…」

一声、掛けてやった。

まあ、どうせアーシアの真面目っぷりからすれば、仮に最初から…

アーシアが俺達と会う前に、このディオドラが接触していたとしても…どう転んでもハーレムルートは無かったと思うけど？

そして、更に耳元、小声で

「(ボソ…) まあ、これは言わなくても分かると思うが、アーシア泣かしたりしたら、楽には死なさんからね？」

例えば…羽と手足引き千切って真っ裸(パ)にした上で、牝の猪獣人(オーク)の群れのど真ん中に放り投げるとか…面白くね？ w w w」

「ひ、ひいっ?!」「。O。L」

当然、アフターケアも怠らない。(アーシアの)

そして、

「今日の…素晴らしい出逢いが出来た この日を、今は亡き主に感謝します… a m e n

…」

「「「きやあつ?!」」」

「ひいえっ?!」「ふにゃ?!」

「「うわわっ?!」「」によによっつ?!」

「はわわわ……ご、ごめんなさいい〜!!」

聖女さんのお祈りで、悪魔な皆さん達の頭痛が痛くなったのは、御愛嬌。

いいぞ、もつとやれ♪www

「「「(怒) 笑い事じゃ、無あ〜い!

こ・の、鬼畜ドラゴン〜っ!! (怒)「「「

すばか〜ん!!

「あじゃは〜〜〜〜っ!!」

双方、支取先輩を除く女性陣が、如何にも「私、寝不足ですう」…な、覇気の無い顔構え（肌は何故か艶つてましたけど！）。

まさか本当に一晩中、昨日のゲームのギヤスパアのあの画像を観ながら〇〇〇〇してたんじやあないだろうな!?!?

シーグヴァイラ眷属は　そう面識無いから分らんが、生徒会腐女子は然も有りながら怖いわ！

特に、新羅先輩!!



「こ、これは、昨日のゲームとは別の意味合いで、放送は中止だねえ…」

「こんなの、将来を担う若手の試合として公開する訳には行きませんかからね…」

「う☆☆、折角のソーたんのデビュー戦だったのにい☆!!」

そう呟くのは、「3」人のシスコン。

昨日のリアスとディオドラのゲームは既に、双方の露出が放送倫理的に烈し過ぎると云う理由で、放映は中止が決定。

更には　その記録映像の媒体も　その夜の内に、銀髪のメイドさんと熊みたいな墮天使の男が、それ等を管理保管している放送局に特攻を仕掛け、マスターを含む　その全て灰燼と化していた。

結果、これから先、リアス・グレモリーvsデイオドラ・アスタロトのゲームの内容は、紙面か口伝でしか、語られる術が無くなった。

：そんな互いに動きが散漫な潰し合いの中、一番の活躍を見せたのは匙だった。

修行の際、アザゼルが所持していた籠手や具足、邪眼等の黒邪龍系神器ヴリトラを全て受け取った匙は、結局は禁手バラン、ブレイカーには至らなかつたが、現状の神器を十全に使いこなすレベルには達していた。

左手の籠手から延びる、蜥蜴の舌の様なパーツ、ライン。

聖剣でも簡単に断ち斬れない程の耐久力を持つ このラインは、対象に巻き付くと、其処からパワーを吸い取り、自身をパワーアップさせる能力を持つ。

此処で言う”自身”とは、神器の遣い手でなく、神器その物を差す。

そのラインを：匙は自らの体に巻き付け、自らの生命力を”餌”にして、神器をパワーアップする戦法を選択。

この捨て身で無双を重ねた匙は、最後にはシーグヴァイラの女王クイーンを討ち取った直後、その場で力尽きて退場リタイア。

残るはソーナと彼女の戦車の人狼、そしてシーグヴァイラの3人となったが、昨日のギヤスパーショングア（笑）から立ち直つてのコンデイション抜群なソーナと、朝迄ナニをやっていたのか、体力や精力が欠片程度しか残っていない瓶底眼鏡の令嬢では、既に

勝敗は決していたのだった。



「…メガネ対決は、ソーナの勝ちだにゃ〜!!」

ヴォオン…

「「「「「!!」」」」」

それは、黒歌がゲームの感想をポツリと呟いた時。

V I P ルームの天井付近に突如、青銀の魔法陣が出現したと思えば、その中から魔法陣と同じ色の長い髪、白のローブを纏った男が姿を見せた。

「ごきげんよう。我が主神に魔王殿。

天使長殿、墮天使総督。そして赤龍帝。」

「「「ロキ!!」」」

現れたのは、北欧の悪神、ロキ。

その場の全員が即座に身構え、シリューはアールシアと黒歌を、サーゼクスはグレイファイアを庇う様に後ろに下げ、オーデインの御付き戦乙女ヴァルキリーのロスヴァイセとアザゼルの護衛として此の場に居る、バラキエルが前面に立つ。

「一応、聞くぞ…

何用じゃ、ロキ?

此処は、如何にお主と云えど、易々と勝手に顔を出して良い場所では無いぞ?」

「愚問だな、オーディンよ。」

知れた事よ。前回の宣言通り、改めて宣戦布告を…ラグナロクの開幕を、告げに来た」

バシィツ!!

!!?」

◇アザゼル side ◇

北のジジイの問い掛けに、両手を大きく広げてのオーバーアクションで、宣戦布告を告げようとしたロキを、その口上の途中、金色に輝く結界が捕らえ、

「ぐぬぬ…小癩な真似を!

墮天使!これは貴様の仕業だn」

フウ…ツ…

更に俺に、何やら冤罪を吹っ掛ける様な台詞の途中、その結界毎 何処かに転移され、この部屋から姿を消した。

「いつえーい!!」

パチン!

…因みに、この結界は其処でハイタッチをかましてる、神崎とベツロ。

転移は、サーゼクスの術式に拠る物だ。

断じて俺じゃねーからな!? 悪神!!

ドタドタドタドタ…パタン!!

「な、何が有ったのです、魔王様!？」

「此方の部屋から、尋常でない魔力を感じました!!」

「お兄様?!？」

お? お客さんだぜ。

◇デスマスクside◇

騒々しい足音と一緒に やってきたのは、リアスちゃんとサイラオーグ、それから…えーつと……………糸目の小僧だ。

リアスちゃん達も若手部屋で、ロキの魔力の波動を感じ、只事では無いと思ったららしい。

》》》》

「そ、そんな…?!」

「ロキ…が…?」

「本当なのですか、師匠!？」

とりあえず隠しても仕方無しとして、魔王が有りの儘を話すと、まあ、当然だよな…と、ばかりに驚く若手の3人。

「ヤツは今、俺と紫龍の張っていたトラップで封じ込め、魔王殿の転移魔法で、吹っ飛ばした。」

あと、3時間は、出てこれねえさ。

この3時間が長いか短いかは、そっちが勝手に解釈してくれ。」

俺と紫龍は、先日のロキの襲来から、次は何時、何処に やつてくる?…と、ヤマを張っていた。

ヤツは あの時、「近日中に…」と言っていたので、そう遠くは無い未来、早けりやそれこそ、その日の明日での可能性も視野に入れていた。

北欧が他の神話勢力と協力体制を取るのを快く思っていないロキ。

如何にアイツが、他人の裏を掻くのが得意な、トリックスターと云えども、忘れた頃に…みたいな、じつくりと日を置いて攻撃を仕掛ける可能性は低いと思っていた。

それで、一番警戒していたのが今日つか正に今、ガキンちよ達のゲームが一通り終わった直後なタイミングだ。

場所に到っては、オーデインの爺さん曰わく、ヤツは多少、かまっちゃんを拗らせてるってゆうから、とりあえずは御偉方に嫌がらせな如く わざわざ宣言しに来るだろと言っていたので、俺達 嘗ての黄金聖闘士2人掛かりの捕獲結界に魔王の転移術式を組み合わせたトラップをこの部屋に…一応、この城の各所や冥界の主要地に仕込んでい

たが、ドンピシャりだったぜ。

魔王によるとヤツは今、レーティング・ゲームに使われる様な疑似空間に飛ばしたらしいから、後は俺達や魔王達、今この部屋に居る各勢力のトップで その場に飛んで、結界が解けと同時に迎撃にすれば、それで終わりだ。

へ？結界に閉じ込めている内に、どうにか出来ないか？…だと？

ふっふっふ…言つたでわないか！

あの結界は、ゴールド・セイント黄金聖闘士2人で造つたと！

そんな外からの攻撃で簡単に崩れたり、内側の対象に良し悪し関係無く影響を与える程な、柔い代物等造つた覚えは無い!! (どやあ！)

「いや、デスマスク…これは傲慢するのは、少し違うと思うぞ？」

◇シリユースide◇

「いや、それは駄目じゃ…」

そうなると正しくラグナロク…貴奴の思う壺じゃわい。」

デスマスク案の、魔王、天使長、墮天使総督、更には北欧主神や俺達 聖闘士等の最大戦力一斉投入は、それこそロキの目論む【ラグナロク神々の黄昏】の引き金に成りかねないと、没にされた。

「それならば、私達が迎え撃ちます！」

…と、名乗りを上げたのは、我等がリアス部長。

そして、

「リアスばかりに、良い顔は させんぞ！」

「ぼ、僕だって！」

残る2人の若き王も名乗り出た。

タイムリミットが設けられている今、冥界の軍勢をかき集める時間も無く、件の空間への転移の発動は、最初に術式を施したサーゼクスさんしか不可能だとか。

同時に転移出来る人数も、限られている。

したがって…

俺

デスマスク

リアス部長

朱乃先輩

木場

サイラオグ

レグルス（兵士）

ディオドラ

メイコ（女王）

ジャンヌ（騎士）

そして、

「敵は北歐の神の1柱。

ならば当然、私も出向きます。」

オーデインの介護…失礼、護衛として冥界入りしていた戦乙女^{ヴァルキリー}、ロスヴァイセ女史。

先日迄着ていたスーツでなく、蒼と銀を基調とした、戦乙女の鎧を身に纏った彼女を含む、この11人となった。

小猫と黒歌も現在、アザゼルが呼び出しているヴァーリ・チームと共に、後から駆け付ける手筈となっている。

ん？ゼファードル？

ああ、アイツは…ゲーム開幕戦でサイラオーグにフルボッコされて、身体は兎も角、心が完全に折れて、既に戦線離脱^{リタイア}しており、昨日からこの場に居ない。

それと、これは今から始まるであろうバトルとは関係無い話だが、その余りにも惨めな負けっぷりに、現在グラシヤラボラス家の党首である父親がブチキレ（これは、相手が悪過ぎたのだが）、次期党首の資格を本当に、自分の甥に渡したとか。

閑話休題。



「済まないね…」

つい この前、若い命を簡単に戦場へと送り込めないなんて、言っただけなのに…」
「本当に悪いな。結局は若いモンに全て…」

いやー人、オツサンが居たか（笑）」

「喧しいわ!!」

ルシファー城の西口玄関にて、サーゼクスさんが俺達に…は兎も角、部長達に本当に
申し訳無さそうな顔をしている中、

「お嬢様…これを。」

「これは…?」

グレイファイアさんが、部長に小さな箱を渡す。

部長が蓋を開けると、中には小さな赤い瓶が3つ。

「フェニックスの涙です。」

緊急な事でしたので、それしか用意出来ませんでした。」

「いえ、ありがとう、グレイファイア。」

フェニックスの涙。

簡単に言えば、エリクサー。

死んでいない限りは、どんなに瀕死な重傷でも…ゲーム的に説明すると、HPとMP、そして状態異常を瞬時に全回復してしまう、反則アイテムだ。

フェニックス家だけが、精製可能な秘薬らしいが、フェニックスの“涙”と察するに、恐らくは高品質な回復系ポーションに、フェニックス家の涙をブレンドした物なのだろう。

よし。今度レイヴェルに、『かけそば』の小説や『子狐へレン』等のDVDを見せてみよう。

「シリュー君…リアスを…皆を、頼む。」

「…頼まれたー！」

サーゼクスさんと一言二言 言葉を交わした後、俺達は転移術式で、ロキが封印された空間へ飛び発った。

》》》》

「そろそろ…なのか？」

「…ああ。」

まるで まだ、CG技術が確立してない頃の特撮ヒーロー番組の戦闘シーンに使われる様な…容赦無く爆薬が使い放題な、掘削現場の様な空間に飛ばされた俺達。

約1時間の遅れで合流した、ヴァーリ達と共に高台から、黄金の光の壁から成る12

角錐の形状の、悪神を封じた結界を見据えていた。

俺達 第1陣のメンバーに、ヴァーリ、美猴、アーサー、ルフエイ、ミルたん、小猫、黒歌。

この総勢、18人のメンバーで、ロキを迎え撃つ事になる。

この人数が多いのか少ないのか…そう考えていると、

『おい、紫龍…』

前世、此処とは別の世界線だが、嘗て北欧の悪神と戦った事が有るといふ男が^{テレバシー}念話で話し掛けてきた。

『…あの時は、^{ゴッド・クロス}神聖衣を纏った^{ゴールド}黄金12人でフクロにして、漸く勝てたって感じだな。』

ま…まじなのか？

『応。しかも、その時のロキは、当時のアスガルドの地上代行者の”人間”の身体を依代にしたヤツだ。』

正確には、マジ物な”神”様じゃねえ。

だが、今回はマジ物だ。

俺達が戦ったロキと、この世界のロキの戦闘力の差は分らんから正直、この人数でも…って、不安はある。』

…つまり そのロキは、嘗て俺達が戦ったポセイドン…即ちジュリアン・ソロやハーデスに身体を乗っ取られた舜、或いは聖^{サンクチュアリ}域にて門外不出の歴史記録書に記されている、アローンという人間の様な存在だった…と。

『詳しくは【黄金魂】を観てくれ!』

貴様は一体、誰に向かって言っている!?



「来るぜ!!」

「!!!!!!!!!!?」

デスマスクの台詞に、その場の全員が顔に緊張感を持ち、悪神を封じた結界を刮目する。

ビシイ…ツ…

結界を形成する光の壁が一瞬一際眩しく輝き、その表面に無数の罅が入ったと思えば、それは粉々に砕け散り消滅。

その場に1つの人影を残した。

「あの墮天使め…薄汚い鳥の分際で、よくも神である この私を…」

それは言わずもがな、悪神ロキ。

自身を封じた（…と思っ込んでいる）、この場には居ない墮天使総督の代わりに、シ

リユー達を忌々し気に睨み付ける。

「ロキ！その結界はアザゼルの仕業では ないぞ！この2人だ!!」

「おい!」

義父に冤罪をなすりつけられるのを快く思わなかったのか、銀髪碧眼の少年が、その真犯人を指差しながら叫んだ。

「ふん……この際、そんな事は どうでも良いわ!」

チツ……オーデインめ……この私を舐めているのか……?

この場に刺客を送るのは分かっていたが、まさか それが、下等な蜥蜴が2匹。後はガキと……老いた、只の人間とはな!!」

「あ……?!」「蜥蜴……だあ!」

「誰が老いてるだ、ゴラァア?!」

俺は まだまだ現役だぞ!!」

「落ち着いて下さい。」

3人共、沸点低過ぎです。」

ガンツ x 3

「びびる!」「びびる!」「びびるびー!!」

そんなロキの挑発に釣れた3人に、小猫が撲パッパル・ダンラン殺に務める。

「ふん……まあ良い……貴様等の血と肉と骨、そして命を、断末魔を！」

ラグナロクの始まりを告げる鐘の音としてくれよう!!

出よ！我が眷属達よ!!」

どつき漫才にしか見えない遣り取りをスルーしたロキは、魔力を解放、周囲に大小の魔法陣を多数展開させると、其処から剣と盾、甲冑で武装した髑髏の大群と巨人の集団、更に招雷と共に姿を見せたのは、灰色の毛皮の巨大な3匹の狼と

「……………」

漆黒の衣を纏う見た目だけは、リアス達と変わらない年代の女。

そして

「「「なっ……!?!」」」

「デカ過ぎだにや?!」「によ!」

全長数キにも及ぶであろう その身で、戦場の外周を何重にも取り囲む、巨大な蛇……否、ドラゴンを召喚した。

「よし、先ずは俺が、あの雑魚の群れを片付けよう。

老いた人間……とやらを舐めたら どうなるか、あの腐れ神に教えてやるぜ。」

その異形の集団を目にして、一歩前に出たのはデスマスク。

「デスマスク!」

「師匠!!」

「ベツロさん?」

そんなデスマスクに、少しか心配そうにシリユー達が声を掛ける。

「ふん…:そこのおチビちゃんにも言われたが、残念だがロートル扱いされて黙ってる程、俺は大人じゃないんでね。」

「確かに精神年齢は、このメンバーの中じゃ一番低そうd

「喧しいわ!!」

「ゴンツ!」

「もきゅっ!?!」

「し、シリユー?!」

年長者に敬意を示さない若者（前世込み、実質的年齢は、遥かに年上）の頭上に、拳骨が落ちる。

「あ痛てて…」

いや、本当に大丈夫なのか?

何の武器…:聖衣クロスも無しに…」

「ふん…」

涙目で頭を押さえながら、改めて心配そうな顔をするシリユーに、デスマスクはど

やな笑みを浮かべ、首に掛けていた、金色のペンダントを取り外し、蟹座：巨蟹宮の紋を象った、そのペンダントを見せ付けた。

「まさか…それは…?」

若干の驚きの顔を見せるシリユーに対し、デスマスクは どや顔を更に強め、ペンダントを頭上、天高く掲げると、小宇宙コスモを燃やしながら叫ぶ。

「キャン…ッサアーーーーーッ!!」

ヴォン…

「嘘おっ!?」

その時、その掲げた手の上の空間に穴が開き、其処から蟹を象った、黄金のオブジェが姿を現すのだった。

開戦!・ラグナロク!!

空間を破り、突如として現れた黄金に輝く蟹型のオブジェ。

カシヤアア…

そのオブジェが複数のパーツに分解され、それ等はデスマスクに向かって飛び立ち、
 ボディ、チェスト、レッグ、ウエスト、アーム、ショルダー、
 腹部、胸部、脚部、腰部、腕部、肩部、そして頭部の順に装着されてゆく。

「デスマスク…お前…」

「し…師匠?」

「…驚いたか?紫龍?サイラオーグ?」

デスマスクの全身を纏う、黄金の鎧。

その造型は正しく、蟹座の黄金聖衣。
キャンサー ゴールド・クロス

この日、最高な どや顔をしているデスマスクが、驚きの余り、あんびりーばぼーな
 間抜け面を晒している男達に説明を始めた。

◇デスマスク side ◇

ぎゃーっはっはっはっは!!

どーだ!驚いたか?紫龍?んんん?♪

ちいつ！不覚にも、スマホは城に置いて来ちまったからな…

この間抜け面を撮れないのは残念だぜ！

さて、説明すると、これは結論からすれば、正確には聖衣じゃあない。

この世界には、ガマニオンとスターダストサンドという物質は存在していないらしく、コイツは100パー、オリハルコンで出来ている。

つまり、素材構成的には海皇ポセイドンの眷属である、海鬪士マリナーナが纏う鱗衣スケイルに近い…つてか鱗衣スケイルと同質だ。

しかし只、オリハルコンを聖衣の造型に仕立て上げただけな訳ではない。

先ずは鉱物の塊でしかなかったオリハルコンを、太陽神アポロンの熱で溶解。

次に俺の、小宇宙コスモを最大限に燃やした状態の黄金の血を、ドロドロになったオリハルコンに混ぜ合わせ、馴染ませる。

そして造型担当は、鍛冶神へパイストス！

この時点で、造型美や単純な物理的防御の面に関してだけは、ムウやシオン様の造つた物以上だぜ!!

そして”型”が出来上がったら、再びアポロンの登場だ。

実は今、俺が聖衣を喚び出すギリギリ迄、太陽神の祝福…黄道の陽の光を浴びせて貰っていたのだ。

結果、コイツは単なる硬い鎧なんかでは無い、俺の宇宙モの燃焼により、より強力な力を発揮する、極めて黄金ゴールド聖衣クロスに近い物となっているのだ。

更には…いや、これは、また後で説明する事にしよう。

…因みにアポロンとヘパイストスは、我が主アテナには何やら諸事情で逆らう事が出来ないらしく、OHANASHIした上で、無償の労働を強いられていたとか。

◇シリユースィde◇

…てな、訳さ。」

ま、まぢかよ…

まあ、兎に角 御老体が丸腰で戦場に立っているとゆう心配は無くn

ガンツ!

あ痛っ?!

「おい お前 今、凄く失礼な事、心ん中で呟いてなかったか?」

「きつ、ききき、気のせいだ!」

「そーかい。そりゃーわるかったなー(棒)」

ちいっ! 何て、勘の鋭いジジイだ!!

「ふん…!」

ザッ…

兎に角その、黄金ゴールド聖衣・クロス（擬き）を纏ったデスマスクが、俺達の先頭に立ち、

「はあああああつ!!!」

小宇宙コスモを燃焼させ、

「おらあつ!」

蠢き迫る、鬪體兵と巨人の集団に向けて、拳を放った。

小宇宙コスモを燐気に変換しての、積戸氣の技でない、只の空拳だ。

どつどつおおおんつ!!!!

「!!!ええつ!!!」

しかし、その只の空拳の衝撃波だけで、敵の ほぼ半数が消し飛び、地面には小さなクレーターが出来上がった。

「ちい〜…やつば、全滅つて訳には往かなかつたか〜!

実践ブランク離れつてな恐ろしいな…」

成る程…”なんちやつて”聖衣と思いきや、オリンポスの神が鍛え造つたのは伊達ではなく、かなり本格的な其れの様だ。

或る意味、本物の聖衣クロスよりも本物だ。

「さ…流石は師匠!素晴らしい!!」

「…伊達に鬼畜指導の権化では、有りませんね。」

「魔術でも仙道でもないにや…」

「はい。…かと言つて、単なる物理とも違います。

シリユー先輩と同じ、こすも。」

「とんでもない爺さんだぜ〜い…」

「はい〜!♪」

「凄いな…」

是非一度、手合わせ願いたい物だ。」

「強い!」

これで もう少し、あの方が若ければ…

いえ、この際、歳の差なんて…!!」

「彼からすれば、仮に あの鎧の補助が無くとも、可能な芸当なのでしょう。

一体、限界」という”壁”を何度超えたら、只人が あの領域に立てるのでしようか

?!」

それが”見えていた”者は、その実力に様々な感想を抱き、

「ななな…何なのよ、今のわ?!」

「あのベツロ・カンクロ氏の右腕が一瞬消えて、ピカつて光ったかと思えば…」

「だ、大爆発が起きた…だと?」

「あれが、赤龍帝殿の盟友で、サイラオーグ様が師事した人間の實力……」

「僕の目でも、見切れなかった……」

「拳圧だけで、クレーターを……」

「ベツロさんがシリユー君と同じ　せいんとつて、本当だったのですね……」

「によ……」

「デスマスクの光速の拳が見えてなかった者は、御覧の通り、只　結果に驚いているだけの反応だ。」

……つて、黒歌は兎も角、小猫も視えていたのに、部長？　貴女が見えてないって……

「ふん！　俺に痺れて憧れるのは後にしろ、ガキンちよ共！」

「追撃を仕掛けるぜ!!」

「「「「は……はい!!」」」」

「バサツ……」

「デスマスクの言葉に、リアス部長達が悪魔の羽を広げ、残りの鬪體兵達が待つ戦場に降り立った。」

……つて、この駄肉姫！

「だから王のアンタが、真つ先に前線キケンに降りて　どうする!!?」

「因みに残る王、サイラオーグとデイオドラは、まだ俺達の隣に要る。」

◆◆◆
「禁手化!」
バランス・ブレイク

デスマスクの一撃が、戦の始まりを告げる鐘となり、遂に戦いの火蓋が切り落とされた。

「まず、クワイーンデイオドラの女王のメイコがバランス・ブレイク禁手化。

「プライズ・フロムクワイーン女王様乃調教鞭」!!

「さあ、謡いなさい!」

「ビシッ!

蝶・最っ高!…な衣装に衣替えした女王様が、鞭を撓らせ一度に数体の髑髏兵を攻撃。

そして その攻撃の余波から生じる真空刃が、更に数体の髑髏兵を蹴散らした。

「ビッグバン・ミルたん波!によーっ!!」

「ごおおおっ!!」

続いてミルたんが、魔力を使った自己流オリジナルドラゴン波で、髑髏兵を粉砕。

「えい…!」「にやっ!!」

「バキッ!　　ズバッ!

「ウガアルル!!」

仙氣を纏った小猫の拳と黒歌の爪が、巨大狼の1匹を殴り飛ばし、斬り裂き、

「でええい！」「覇ああつ!!」

斬!! x 2

『ルガアルルアアツ!!』

木場とジャンヌが、各々の神器から創造した聖魔剣と聖剣で、もう一匹の狼を斬りつける。

「雷光よおつ！」「消し飛びなさい!!」

カッ…

ヴァン…!

朱乃とリアスが、それぞれ雷光と滅びの魔弾を巨人兵へ放ち、

「ひゃっは—————っい!!」

ズバアツ!!

そして召喚した筋斗雲を駆る美猴が、如意棒を振り回しながら死者の集団に特攻、すれ違う全ての敵を斃して行った。

「ふん…!」

雑魚にしては、楽しませてくれる。

…ならば!!」

ズズズズ…

「「「?!」」」

自らの手駒を悉く撃破されるロキだが、余裕の姿勢は崩さず、更に追加と言わんばかり、多量の死者の戦士を召喚した。

》》》

「さて…私達の相手は、お前ですか。」

『ぐるぐる…』

アーサーとルフエイは3匹の巨大な灰色狼…その中でも、一際大きな個体と対峙していた。

「神殺しの魔狼、フェンリル…」

ロキと合間見えると聞いた時、コレも現れるのは、予想はしていましたが…」

「オーデイン様から お借りしていた”これ”が、早速 役に立ちますうー!」

『ぐるうあああああああつ!』

巨狼が牙を剥き、アーサーに飛び掛かる。

「…くっ!!」

ガキイツ!

その鋭く長い剣歯を、携えていた聖王剣・コールブランドで受け止めるアーサー。

「お兄様!」

その瞬間、ルフエイが懐から取り出した、長さ15センチ程の小さな銀の鎖を、フェンリ

ルに投げつける。

カッ：

ルフエイの手から離れた瞬間、鎖は光を放ち、巨大化。

ガシツ!!

『ぐるあああああああつ?!』

込められていた魔術的效果で、巨大に変化した魔法の鎖枷：グレイプニルが、フェンリルの身体に纏わり憑き、遂には全身を拘束した。

「グレイプニル…だと?!

おのれ、オーデイン！何処までも!!」

それを見て、先程迄、鬪闘兵や巨人兵の軍勢を倒されても余裕を崩さなかった北歐の悪神が、忌々し気に表情を歪める。

『ぐおおおおつ!!』

「さて…私は身動きの取れない無抵抗な者を、闘る趣味は持っていません。

…一思いに楽にしてやりましょう。」

スチャ…

吼えるしか抗う術を持ってなくなった魔狼の首元に、聖王剣をアーサーが向けた時、

「待って、お兄様!」

「ルフエイ?」

それにルフエイが”待った”を掛ける。

「どうかしたのですか?」

「お兄様、この子、飼いたい!」

「は?」

ずる…

まさかな発言に眼鏡が ずり落ち、眼が『 3 』になるアーサー。

「る、ルフエイ?」

アナタは こんな時に、何を言っ

「だ・め…?」

明らかに場違いな発言に、クソ真面目が眼鏡を掛けている様な奴(ヴァーリ・談)が、ズレた眼鏡を直しながら、真っ当に自分の妹を諭そうとするが、その妹は上目遣いで瞳を若干潤ませたのONEDARI。

「…ルフエイ、アナタが自分で躡て、きちんと面倒見ますか?」

「はい!!」

「はあ…仕方無いですね…。」

結果、兄は、折れた。

「何となく察しては いたが…

やはり あの男…シスコンだったか…」

「シスコンだな。」

「シスコンですね。」

「カッコイイのに…」

「な、何だか、スマン…」

チラ… コクン…

一応、確認を取る意味で、その遣り取りを伺っていたであろう、ヴァーリに向けてアーサーが目線を向けると、ヴァーリは小さく頷く。

スチャ…

そしてコールブランドを鞘に納めると、左脇に携えていた、もう一本の剣を抜く。

「あ、あれは、まさか…?」

「エクスカリバー…だと?!」

あの男、コールブランドだけでなく……!」

その剣が発する波動に気付き驚いたのは、木場とジャンヌ。

「……………」

そんな2人の騎士の視線を余所に、アーサーは先の大戦で破壊された、エクスカリバーの欠片から復元された7本の聖剣の内の最後の1振り、エクスカリバー【支配の聖剣】の切っ先を、フェンリルに向けると、その儘 眉間に突き刺した。

いや、それは突き刺すと云うよりも、刃が魔狼に吸い込まれると云う表現が正しく、剣を引き抜くと、身の丈数10倍も有った巨大が、みるみる内に縮んでいき、最終的には成人馬程の大きさとなる。

尤も、それでも狼や犬としては、十分に巨大なのだが。

『きゆううくん……』

そしてフェンリルは、今迄剥き出しにしていた殺気を、最初から無かったかの様に引つ込め、アーサーの前に平伏した。

『くうくん……』

「きやははは♪ お座り!」

『ガウッ!』

「お手！」

『ガウツ！』

「おかわり！」

『ガウツ！』

「おちん○ん!!」

『ガウツ!!』

「良し良し、良い子良い子♪」

『をんっ!!』

「いや、ルフェイ？」

その場合、『お』は、要りませんよ？」

大人しくなったフェンリルと魔女っ娘が じゃれあっているのを、やや複雑な表現で

見ているアーサー。

「…巫山戯るなっ!!」

しかしロキは、その光景を好しとせず。

「えらい、ミドガルズオルム・コピーー！」

その人間、その駄犬共々、滅してしまえ!!」

ミドガルズオルム・コピーー…つまり、5大龍王の一角を担い、ロキの息子でもある

【スリーピング・ドラゴン】
【終末の大龍】ミドガルズオルムの複製版とも謂うべき巨大な龍を、アーサー達に喉けた。

複製の龍王は主の命に従い、今迄の傍観の姿勢から一変、鎌首を大きく持ち上げると『キシャー………っ!!』

アーサー達をその周辺地面毎飲み込む心算なのか、大きく口を開けて突撃してきた。
ズシャー!

だが その突進は、突如 地面から生え出でた、無数の巨大な黒と銀の刃によつて阻まれ、その刃の幾本かは、蛇龍の喉元に突き刺さり、

シュツ!

同時に、何処からか出現した、6本の白銀の曲刀が まるで その全て、自らが意思を持つかの様に宙を舞い、蛇龍を斬り刻む。

「シャー………っ!?!」

ミドガルズオルム・コピーが苦痛の雄叫びを上げる中、アーサー達の前に立ったのは、
「私達 騎士^{ナイト}を!」

「忘れてもらつては困る!!」

フェンリルの子供の1匹、スコルを斃したジャンヌと木場。

「あ、ありがとうございます。」

「一つ、借りですな。」

『ラン！』

「いや、それよりも…」

「ああ…。アレの大きさは、尋常じゃあ無いぞ…」

残念だが私や木場の剣では、与えるダメージも、高が知れている。

絶対に斃せなく…は無いが、時間と手間が、掛かり過ぎる。」

「確かに…コピと云えど、相手は龍王。」

この【支配^{エクスカリバー・ルーラー}の聖剣】で御せるかは疑問ですし、コールブランドでも、簡単に斃すのは難しそうですね。

消耗戦の末、何とか斃せるか、どうか…」

基本、生物の体力や耐久力は、その身体の大きさに比例する。

確かに如何に聖剣や聖魔剣を以つてでも、この巨大なドラゴンに決定打を与えるには、多少の無理があつた。

「こうなれば…ルフェイ？」

「はい、お兄様。お任せあれ！」

それならば別の手段を用いると言いた気なアーサーの呼び掛けに、ルフェイは笑顔で応え、魔力を集中しながら手にしていた杖^{ロッド}を回転させながら、

怪獣大激戦!!

ヴオオオン…

ルフエイが発動させた巨人な魔法陣。

書き込まれた文字が光り、その輝きが最高潮に達した時、

ずももも…

「な?!」「へ?!」「をん?!」

その魔法陣から、巨大な腕が伸び出でてきた。

どん!

その腕は掌で大地を押さえ付けると、其処を支点に、身体全身を魔法陣から湧き出る様に徐々に姿を見せ、大地に立つ。

『おお〜つ〜つ〜うん…!!』

それは身の丈推定、50メートルの巨体。

それは全身が削り磨かれた、大理石で出来た巨人…ゴーレムが、壮大な雄叫びと共に現れた。

「な、なな…何なのよ、あれ?」

「ごっつ君です♪」

「はい?」

「だからあ、ゴグマゴグのお、ごっつ君ですう!」

「ご、ゴグマグクう!?」

ルフエイの巨人の紹介、そのゴグマゴクと云う言葉に、ジャンヌと木場は驚きの声を上げる。

ゴグマゴグ：嘗て、太古のイギリスに居たとされる巨人。

そして、その実体は、古代の民が侵略者の侵入を防ぐ為に造った、生命有る人型機動兵器。

ルフエイが喚んだ、この「ごっつ君」と呼ばれる個体は、数年前にヴァーリ・チームがイギリスの地下遺跡で活動停止していた機体を偶然に発見、その場で機動させて仲間として引き入れた、現在唯一、現存する機体である。

「まさか、生き残りが居たなんてね。」

「白龍皇はゴグマゴグ迄も、取り込んでいたとは…」

既に伝承でしか聞かされていない、巨人の登場に、少しだけ啞然とした顔を見せる、騎士の2人。

「さあつ、ごっつ君! 殺っちゃって!!」

『おっく~~~~~~~~うん!!』

それとは対照的に、活喜活喜とした表情で巨人に指示する、魔女な風貌の少女：所謂
”魔女っ娘”。

巨人は それに従い、ノリノリな？返事と共に、眼前の巨龍に向かって行き、
バキイツ!!

挨拶代わりとばかり、その喉元目掛け、強烈なアツパーカットを炸裂させた。

『ギジャアアツ!!』

しかし、ミドガルズオルム・コピーも、即座に反撃に。

パシッ

古の巨人兵器ゴグマゴグ：ごっ君の背後から、尾を叩き付ける様に攻撃、更に その
尾で、身体全体に巻き付け、大理石（：の様な鉱材）で出来たボディを粉碎せんとばかりに締め上げる。

『いっ……』

それに対して、一緒苦しむ様な声を出した ごっ君。

そのボディ：黒とダークグレーを基調とした身体が、瞬く間に灼赤色に変化する。

『シャアアアアツ!!?』

すると今度は、複製版龍王が苦痛の声と共に、巨人の拘束を解いた。

「あれは……？」

「はい！あれは、ごっ君が自分の身体を瞬時に熱したんです。」

あのドラゴンは、その余りの熱さに、つつい縛りを解いたみたいですね。」

「い、言われてみれば……」

「何だか、肉が焦げた様な匂いが……」

『おをくん……』



カチャ……

「……失礼するぞい。」

「オーデイン殿……」

一方その頃の、ルシファー城。

その一室、サーゼクス達がりアス達からの吉報を待つ中、入ってきたのは北欧の主神、オーデイン。

「ふう……い……やつと、あの頑固者を説得出来たわい。」

あやつ、ロキがマジに攻めて来た事で、漸く納得しおったわ。

ま、気持ちは解らんでも無かったがの。」

「それじゃ……！☆」

「ふむ。アツチで転移術式を始めとるよ。

ただ もう少し、時間が掛かりそうじゃがのう。」

対ロキの切り札の1つとして、オーデインが考えていたのが、北欧神が1柱、雷神トールが持っている巨鎚ミヨルニル。

しかし、その持ち主であるトールが、「いくらロキでも、まさか他神話勢力に、正面切つて喧嘩する訳が無い。どうせハツタリ、何時もの悪巫山戯だ。」…と、自分の得物を貸し出すのを渋っていた。

しかし本当に その事態となり、だからと云つて、自らがミヨルニルを持って出陣するとなれば、本当に最終戦争が勃発する恐れが有る為、仕方無く、ミヨルニルを貸し出すのを決意したとか。

参考までに、フェンリル捕獲の際にルフェイが用いた魔法の鎖枷グレイプニルは、前回のロキの襲撃予告の後、直ぐに北欧圏内に住む、鍛冶師の小人に作らせていた。

閑話休題。

「ミヨルニルの破壊力を赤龍帝に倍化譲渡でパワーアップさせた上で、あのゴツツイメイドに持たせたら、さしものロキも、一溜まりも有るまいに。」

「…でもよ、爺さん、敵はロキだけじゃ無えんだろ?」

一安心…と言った顔なオーデインに、アザゼルが尋ねる。

「…ふむ。真つ先に考えらるるのは、ロキの子供じやな。

先ずは、神殺しの牙を持つ巨狼フェンリルと、その子供であるハティとスコル。」

そんなアザゼルの問い掛けに、北歐の主神は顎に蓄えた白く長い髭をなぞりながら、予想出来るロキの手駒を話し出した。

尤も、そのフェンリルは既にアーサーとルフエイによつて手懐かされ、ハティとスコルも、木場とジャンヌ、小猫と黒歌によつて それぞれ斃されている事を知らない。

「次男の巨龍ミドガルズオルム…は、龍王と称される様になった頃に、ロキと袂を別つておるから、今更 貴奴の命令なんぞで、わざわざ出ては来んじやろう。」

「…ん。ミドガルズオルムは、今は世界の果ての地中で眠っている筈。

何年か前、我がティアマットと一緒に遊びに訪ねた時も、お菓子の一つも出さずにガ
ン無視で ずっと寝ていた。

折角、びしょーじよ&びじよが訪ねてきてやったのに、全然起きなかつた あの御無
礼ドラゴンが、如何に自身の父親と云えど、男の呼び掛けに応じる訳が無い(きつぱり
!)。」

「…そ、そう願いたいですね。」

「ん☆ん☆!」

「…つて、遊びにつて、友達かよ?」

巨狼親子の話の次。

ミドガルズオルムは、恐らくは今回は参戦しないと言うオーデインの考えに、オーフィスもフォローしながらの同調。

それに若干の安心を覚える一同だが、今 件の戦場には、その龍王の模倣コピ体ビが出現しているのを、彼等は知らない。

「…それと末娘、冥府の女王ヘル。

後はロキに付き従う巨人族や、ヘルの配下の魔獣や死者の兵士共…と、言った処かの。特に死者の兵士は、あの若者達からすれば、戦闘力は大した事は無いが、数で押しつけてくるじやろうから、ちいと厄介かも知れんかう…」

「…かと言って、我々が大量戦力を投下したら、それこそロキの、思うが儘です。」

ロキの目論むラグナロク勃発を防ぐ為の、少数精鋭の投入。

これが正解か否か、答えが出るのは、もう少し先。



すおおお…

ミドガルズオルム・コピーが大きく息を吸い込み、喉の付け根と両の頬が、風船の様に大きく膨れ上がる。

ポオオウワツ!!

そして そこから吐き出されるのは、業火の吐息。^{ブレス}

『おつくうくくくつん!』

その炎をこつ君は身体全身に浴びてしまいが、まるで その身は『火属性無効お!無駄無駄無駄あ!!』とでも言いたいが如く、炎の中を突き進み、

ガシツ!!

遂にはゼロ距離から巨龍の首根っこを掴み、先程の締め付けの意趣返しの心算なのか、締め技…ヘッドロックに捕らえた。

ずっしいー……ん!!

「うわっ?!」「きゃん?!」「をん?」

そして、立ちから寝スタンド技式グラウンドの それに移行。

落下の際の衝撃も、ダメージに加えたかったのか、勢い良く尻餅を搗くかの様に身を落とした為、周囲に一瞬、小規模な地震の如くな揺れが起き、

「も……ごっ君!!」

もう少し静かに、技に入れないの?!

『おつくううん……(、ω、)』

両膝を地に付け、スミニカートの裾を押しえているルフエイが猛抗議、巨龍の頭部をその巨軀に違わぬパワーで締め上げながら、ごっ君は それに しょぼーんとした口調

で応える。

『キシャー……あつ?!』

そして その締めめに、苦しむかの様な声を上げるのは、龍王複製版。

この戦場となっている大地を壁の如く取り囲んでいるミドガルズオルム・コピーの胴体も、派手に脈打つかの様に、上下に波立てている。

「あの龍王の劣化版は、ごっつ君に任せて大丈夫でしょう。

ルフエイは念の為、彼のアシストとして この場に残って下さい。

私と騎士^{ナイト}の御二方は、リアス嬢達の加勢に行きましょう。」

「はい!」「ええ!」「うむ!!」

『わおん?』

「あ…アナタも、ルフエイと一緒に、この場にて お願いします…。」

◇デスマスク side ◇

現状は、傍目には俺達のが有利に見える。

こっちは俺に2天龍、王様^{キング}が2人と その眷属君が1人、そして戦乙女^{ヴァルキリー}の姉ちゃん

1人、まだ残っている。

それに対して、向こうは…大将のロキに、恐らくは巨人族のリーダー格であろうヤツが1人、神話知識から予想して、多分、ロキの娘であるヘルと思われる女が1人。

そして その傍らに、双頭のワンコが1匹、様子見な如く控えている。

しかしアイツ等、全然余裕な態度を見せていやがる。

特にロキ。

フェニルルの鞍替えに対しても気持ち切り替えたのか、更には あのドラゴンも結構ピンチな筈なのに、冷静に戦局を窺っている様だ。

まあ、雑魚が殆どとは云え、数では向こうが圧倒的に有利だからなく。

…で、その雑魚を相手にしている、リアスちゃん達は…まだ、雑魚の片付けに時間が掛かりそうだな。

「うわっ!?」「くわあああっ?!」

…って、ヤバイぞ!

金髪の小僧と爆乳な方の眼鏡の姉ちゃんが、ヤっバいい撃、貰っちゃったぜ?!

「ディオドラ、頼む!」

「は、はいっ!」

そんな2人には、紫龍の指示で糸目の小僧…ディオドラが、フェニックス家特製の秘薬とやらで、回復させるが如く、現場へ飛んで行った。

「ディオドラ様、なんだかRPGの僧侶プリーストポジションですね。」

そう言ってるのはレグルスだが…

ん。さつきも猫つ子の おチビちゃんのピンチに、紫龍の指示でパシらされたしな。俺も、そう思うぞ。



「でやあつ!!」

ズバアッ!

木場を、そして自分の女王^{クイーン}であるメイコをフェニックスの涙で回復させたディオドラが、その儘その場で魔力を解放、足下の土を石を、矢の様に精製すると、それを巨人に撃ち放った。

「すいません、ディオドラ様…」

「構わないさ。」

それよりも、降り立った ついでだ!

この僕も、攻撃に参加させて貰うよ!」

ズドオツ!

そう言うディオドラは、今度は地面を隆起させて無数の巨大な柱を作り出し、
「僕の大事な眷属を傷付けたんだ、その酬いは受けて貰う!!」

それ等を巨人に向けて突撃させる。

ブシャアアッ!!

これにより、巨人は交通事故さながらの石柱の押し潰しを連続で浴びせられ、肉塊となった。

「ちよつと…スプラッター過ぎたかな？」

◇シリユースィde◇

あのデオドラ…駄肉姫りあせつちんが言うには、世間知らずな お坊ちゃんてな話だが、なかなか やるじやないか!

仲間思いなもの、結構好感持てるぞ!

「おい、神崎孜劉。

フェニックスの涙も尽きたし、そろそろ俺達も、出るべきでは無いか？」
そして白龍皇ヴァーリが話し掛けてきた。

確かにフェニックスの涙は全て使い切ったし、勝負所かも知れない。

但し、ヴァーリは単に、自分が暴れたいだけな発言だろうが。

「…だな。よし、行くぞ！」

「応!」「はい!」「承知!」

》》》

「レグルス!」

「はっ!!」

サイラオーグが自分の兵士の少年に呼び掛けると、少年はそれに応える様に、その身を本来の姿である、巨大戦斧型の神セイクリッド・ギアへと変化させた。

ガシッ

それを確と握り締めるサイラオーグ。

「禁手化!!」
バランス・ブレイク

そして既に、籠手と翼の神セイクリッド・ギア器発動していた俺とヴァーリと声を揃えての禁手化。

「獅子王の剛皮!!」
レグルス・レイ・イザール・レックス

『Welsh Dragon Balance breaker!!』

『Vanishing Dragon Balance breaker!!』

サイラオーグの斧が、獅子の雄叫びと共に鎧に変化。

俺とヴァーリの神器も、電子音の様な声を放ち、同様に禁バランス・ブレイカー手の鎧に変化。

しかし、それで終わりでは、無い。

俺とサイラオーグは、更にもう一段、次なる進化に踏み出す。

「燃える!我が小宇宙よ!!」
コスモ

カッ:

小宇宙に呼応し、サイラオーグの黄金の獅子を象る鎧が、そして俺の真紅のドラゴンを

象る鎧が、金色の光を放つ。

「【一紅珠黄金龍へルビー・ゴールド・ドライブ】!!」
「【真・獅子王乃黄金剛皮】!!」

戦慄の巨人!!



「覇あああつ!!」

ドツドツドツドツ…

飛翔したロスヴァイセが自身の周囲の空間に、無数の魔法陣を展開、その全てから魔力のエネルギー波を放ち、

「積尸氣い! 鬼蒼焰ん~~~~~つ!!」

ボオオツ!!

デスマスクが小宇宙コスモから生成した燐気を蒼い炎に変えて、死者の兵士の集団を焼き払う。

「でや!」

ボウツ!

ヴァーリが差し出した両拳が、連続で魔力の弾を撃ち出し、

「ライトニング・ボルトおつ!!」

轟々ツ!!

サイラオーグの右の拳から繰り出された雷電の球が、巨人に直撃。

巨人は大きく崩れ去った。

「廬山漆星龍珠!!」

そして、シリューの左拳から、小宇宙^{コスモ}と魔力の融合された、破壊のエネルギー波が一直線、その軌道に居合わせていた全ての敵を、討ち滅ぼした。

◇シリュー side◇

「ロキ様! もう これ以上、馬鹿な真似は お止め下さい!」

冥界サイドの総突撃で、漸く隙と言うか、道が出来た処で、ロスヴァイセさんがロキに詰め寄るが、

「ふん! オーデインの御付きか。」

生憎だが私は、貴様如きヴァルキリーの言葉に貸す耳は、持ち合わせていない!!」

悪神は一向に相手にせず。

「殺れい! ベルゲルミル!!」

『あ、あああああ!!』

ロキの言葉に、その傍らに控えていた巨人が…他の巨人と比べても、一際デカい、如何にも この場の巨人を束ねているヤツが、ロスヴァイセさんに殴り掛かってきた。

ばきっ!

「く…」

一瞬 直撃と思われたが、それをロスヴァイセさんは防御系魔法陣のシールドを展開して、ダメージを最低限で抑えた様だ。

「でえいやっ！ 廬山龍尾刃!!」

ドスッ！

其処に俺が、鎧の龍翼を広げて飛翔、巨人に対して小宇宙込みの延髄切りの一撃。

『あ、あっ?!』

ガタツ…

サイズは違えど、人の型で有る限り、人体に於ける急所も同じ。

これが良い感じにピンポイントに極まったのか、この学校の科（化）学実験室に置かれてある、人体模型の半身の様に皮膚が無い、全身筋肉繊維剥き出しの巨人が膝を着いた。

「大丈夫かよ、姉ちゃん？」

「先ずはヤツを倒さないと、ロキとは戦えそうにないな？」

此処にデスマスクとヴァーリが駆け付けてきた。

サイラオーグは…

「でえいやー!」「によーっ!!」「てやあっ!」

あ：ミルたん、木場と一緒に、髑髏兵の大軍に囲まれているか。

流石に あの時でも、あの数は まだ、手こずりそうだな。

「コイツは4人で！一気に片付けよう!!」

「おう！」「はい！」「うむ！」

◇小猫 side ◇

「ほう？私の相手は、其方達かえ？」

「ええ…恥ずかしいけど、そうでもしないと、貴女の相手には、ならないでしょうからね。

悪いけど このメンバーで、挑ませて貰うわ!!」

白と黒のハーフ&ハーフの長い髪の毛に、黒と赤のオッドアイ、要所に黒曜石の装飾と云うか、装甲の付いた、漆黒のドレスを纏った巨乳女てきに、部長が代表して布告です。

「ほっほ…殊勝な心構えじゃ…」

其方達の様な者…嫌いではないぞえ？」

「行くわよ！」

「「「はい！」「」」にや！」

そして この見た目は私達と同年代ですが、喋り方がバ○。アナ この女をリアス部長の号令の下に討ちに出るのは、私、黒歌姉様、朱乃先輩…と、ディオドラ様の眷属ナイトクイーンの、騎士さんと女王のホルスタインメガネの6人です。

「正面の視界は封じた！」

僕とアーサー氏は左右から、美猴君は、真上から攻める！」

「了解です！」「あいよ！金斗雲!!」

成る程。

あの土壁は、単なる押し潰してのダメージ目的な攻撃でなく、目眩ましの意味…寧ろ、そつちのが本命だった訳ね。

それじゃ、サクツと殺りますか！

「伸びろ！如意棒!!」

◇ルフエイ side ◇

『ごっくうごっくん!!』

『ぎじやーーーっ?!』

ごっ君の剛腕ヘッドロックに、ドラゴンが苦しそうな悲鳴を上げていますう！

バシツ！ドスウツ！

抵抗するように、尻尾で ごっ君の身体を叩いたり突いたりしていますが、ごっ君の石の様に硬いボディには、ダメージは有りません。

『ごっくうごっくん!!』

ばっ…

あ、ごっつ君が漸く締め付けを放しました。
 一気に決めるみたいですね。

『キシヤーーーーーっ!!』

それに対してドラゴンは、鎌首を持ち上げ、牙を剥き出しに大口を開けて ごっつ君に突撃を仕掛けてきました。

がしっ…

しかし ごっつ君は それを両手で受け止めると、

『ごおつくう~~~~うっんん!』

ごんっ!!

ドラゴンの おでこ目掛けて、強烈な“ごっつ君ヘッドバッド”を炸裂!

『キシヤ…?』

これにドラゴンが よろけました。

かーなり、効いています。

そして ごっつ君は、いよいよフィニッシュへ。

ばかっ…

右前腕のカバーを開けると、其処から出てきたのは、3門の魔導砲。

ぐぼお…

『キ…?!』

それを拳毎、ドラゴンの大口の中に突っ込む ごっ君。

『(おおおくくくつくうん!!』

カッ：

次の瞬間、ドラゴンの口や目元から、薄いブルーの光が零れたと思ったら、ドラゴンの頭は粉々に吹き飛んでしまいました。

辺りに文字通りな、血の雨が降り注ぎました。

あ、反射的に防御結界を張って、私もフェンリルちゃんも、返り血を浴びるのは免れませんでした？

ずどおん…!!

そして頭を失ったドラゴンは、持ち上げていた首を地面に落とすと、その儘 動かなくなりしました。

ごっ君 vs 巨大ドラゴン…【爆裂ごっ君ブラスター】で、ごっ君の勝利です！ いえ
いっ!!

それじゃあ次は、お兄様達…は、大丈夫そうですね。

それじゃ、リアス様の方へ、加勢に行きますか。

とりあえず、ごっ君は転移で帰して…

「フェンリルちゃん、行くよ！」

『うをんっ!!』

◇デスマスク side ◇

『あ、あっ!』

ぼうわっ!!

あ、危なっ?!

この巨人、いきなり口からビームみないのを吐きやがった!

さつき、白龍皇の小僧が両手から撃っていた、圧縮された魔力弾と似ているが…

「ちいっ!」

その白龍皇は、鎧の龍尾みたいなパーツを外すと、それを鞭の様に繰り出している。

生命力つてのは基本、ガタイのデカさに比例するが、このデカ物は それ相応以上の

物を持ち合わせている。

ヴァルキリーの姉ちゃんや紫龍も、当然 俺も、本気の一撃を放っているが、いまい

ち火力不足な感は、否めねえ。

しかも この巨人、予想に反して、意外と動きが鋭いときてる。

まあ、見切れなくは無えがな。

…!?

「うあ、あ、あ、あああつ?!」

ずっしーん…

本物の黄金聖衣ゴールド・クロスの武器を使った、それよりかは威力は劣るだろうが、それでも効果は絶大な様で、巨人は前のめりに倒れ込んだ。

「あわわわわわ…と、殿方の裸ああつ?!」

……………。

ついでに、このヴァルキリーの、お姉ちゃんも、男ヤローの筋肉はだかに耐性が無いのか、紫龍のカーナリー、鍛え絞られてる胸元や腹筋を直視して、メンタル的に結構なダメージを受けたみたいだ。

NHYUN HYUN HYUN HYUN HYUN HYUN HYUN!!

そして巨人を斃した12の武具は、役目を果たして鎧に再生されるかと思えば、その形状を保った儘、四方に飛散。

「え?」「はい?」

「にゃ?」「お?」

「む?」「これは?」

「……?」「によ?」

剣は騎士ナイトの小僧とお嬢ちゃんに。

円盾はリアスちゃんと滅威弩サンに。

双節棍は猫っ子姉妹それぞれに。

トンファーは2振り共に、サイラオーグの手元に。

槍は巫女さんと、ヴァルキリーの姉ちゃんに。

三節棍は1本は猿に、そして もう1本は、俺の目の前に。

まるで『使え』と言わんばかり、更に赤い煌きを増すのだった。

戦う少女達！

◇デスマスクside◇

「おらー！」

「てえいやあつー！」

「ひやつはあくつい！！」

「でえいー！」

「によー……………つ！！」

あの後には、我ながら壯観だった。

俺を含む、ライブラ天秤座の武器（擬き）を手にした連中が、次々と目の前の敵を葬って行くのだ。

特に孫悟空の小僧が、某・世紀末モヒカンの如くにノリノリだ。

この俺が言うのもなんだが、どう見ても お前のが悪役だぜ？

とりあえず ヴァルキリーこつちも、紫龍の大技を喰らい、それでも虫の息ながらも起き上がった

巨人を、俺と戦乙女の姉ちゃん…紫龍の”ぬーど（笑）”によるシヨックから復活した

ロスヴァイセ女史と共に、それぞれ手にした三節棍と槍で、トドメを刺した。

「おのれえ…小娘共があ…!!」

そして、お嬢ちゃんズとヘルの戦いも、決着が近そうだ？

あつちはリアスちゃん達に任せて、俺等は いよいよ以て、ラスボス様と対峙と逝き
ますか、紫龍よ！



ロキの娘にして、北欧の冥府の女王・ヘル。

それに対峙しているのは、リアス、朱乃、小猫、黒歌、メイコ、ジャンヌ。

そして先刻、新たに戦列に加わったルフエイとフェンリルの7人と1頭。

最初はヘルも、この多人数相手にも拘わらず、優勢に戦闘を進めていたのだが、天秤座ライプラーの…否、赤龍帝の武具とでも呼ぶべきか、その12の武具の内の5つが、自分の相手を
している少女達の手へ渡り、それ等を含む攻撃、散開されての全方位からの集中攻撃を
受け、戦況は徐々に、ひっくり返されそうになっていた。

「舐めるでないわあつ!!」

鬼女の表現が相応しい怒りの形相と共に、白黒ハーフ&ハーフの髪と黒と紅のオッド
アイを赤に変えるヘル。

そして漆黒のドレスの裾の中から、軟体動物の様な触手を無数に：ドレスで隠していた、己の醜く腐食した脚を露わにして、それで今度は、自身が周囲を取り囲んでいる少女達に、全方位攻撃を仕掛けた。

「くっ…!!」「にやっ!」「えいっ!」

ガシッ…

リアスが円盾で触手の刺突を防ぎ、黒歌と小猫が双節棍で叩き落とす。

「はあっ!!」「てえい!」

ザスッ…

朱乃とジャンヌも、それぞれが手に持つ槍と剣で凧払う。

「せい!」「やああっ!!」

疾っ! 燃っ!!

そしてメイコが鞭で、ルフエイも火の弾を撃ち出して、それ等を迎撃。

ドスっ!!

「え、…っ?!」

そんな中、それ等の攻撃は最初から囮と言わんばかり、不意を突く様に地中より勢い良く這い出た1本の触手が、1人の少女の脇腹を貫いた。

「め…メイコさん!」

「あ……危ない!来るな!!」

「きゃっ?!」

血を吐き跳くメイコに、近くに居たルフエイが駆け寄ろうとするが、地中からは更に無数の腐敗した触手が生え出で、今度は彼女に襲いかかる。

それをルフエイは咄嗟に箒に跨がり、空中に回避。

「くくく…先ずは、一匹。」

何処からか取り出した、巨大な双刃の処刑鎌を構えた冥府の女王が、動けなくなっているメイコを最初のターゲットに絞り、突撃を仕掛けてきた。

「めっ…メイコおっ?!」

「王様!気持ちは解るが、こっちは こっちで まだ大変なんだぜい!!」

「ちい…っ! ああ、分かつてるさ!!」

冥府の番犬・ガムルを相手取りながら、その様子を見ていたディオドラが、自分の女王の危機に叫び声を上げるが、美猴に嗜められる。

美猴の言う通り、この双頭の魔犬も、この戦闘に先立って悪神から新たな加護を得ているのか、簡単に斃せる相手では無く。

万能薬であるフェニックスの涙も既に尽きており、残念だが彼女の近くに構える味方

達のフォローに期待するしかなかった。

「くそ……下僕一人、も救えずに……何が、王キングだよつ！」

◇小猫side◇

『先ずは1匹!』

大鎌を構え、ディオドラ様の女王にヘルが突撃しますが、

「させません！」

Bow!

それをルフェイちゃんが、炎を帯の様に放ち、フォロー。

「にゃー！」

Hyun!

そして黒歌姉様も、裸ドラゴン先輩から借り受けた棍を放って援護です。

そして、

「えいつー！」

確かに世の きよぬーは、敵！テキ！敵！皆 敵!!……ですが、ゲームも終わった事ですし、一応あのホルスタインメガネも、今は味方ですからね。

流石に見殺しは出来ません。

ここは一先ず、敵視するのは あのヘルだけにしておきます。

ええ、つい昨日、ギャー君諸共に不意打ちで鞭でシバかれた事なんて、今はもう全く、全然、本当に、これっぽっちも気にしてないですから。

私も同様に、この”赤龍帝の双节棍”とでも銘打ちましょうか、これで追撃です。

因みにアザゼル先生から貰った「墮天使乃撲殺棍棒」ですが、アレは『必ず殺す』と『必ず蘇生』が分離不可のセット能力な武器ですから、今みたいなガチな殺し合いでは意味が無いと言うか、役に立ちません。

「邪魔…するな!」

ドヒュン!!

「二二きやあつ?!」

ディオドラ様の女王に対する、私達のフォローが気に入らなかったのでしょうか、へルは怒り気味に声を荒げ、またも無数の触手による全方位攻撃。

ガードして直撃は免れましたが、パワー負けして吹き飛ばされました。

…戦車である私がパワー負けです。

当然、他の皆さんも同様に吹き飛ばされてしまい、多少のダメージを負っている様です。

「死ね!!」

そして半分位は意地になってるのでしょうか、あくまでも本命なターゲットは、ホル

スタインメガネに定めているとばかり、ヘルは自らが持つ得物の射程に入ると、定石的に狙いは首元でしょうか、その大鎌を一気に振り下ろしますが、

ビュン！

「な…!?!」

彼方から突如、黒い炎を纏ったロープの様な物が飛んできて、ヘルの手首をガツチリと拘束、その動きをストップさせました。

「メイコー！」

「うう…ジャンヌ…済まない…」

その僅かな隙に、デイトドラ様の騎士さんが超スピードを活かし、仲間の女王をヘルの間合いの外に連れ出し、救出に成功。

バアツ…

「な…?!」「う…?!」

そう安心したのも束の間、今度は同じ方角から、翠色の光線ビームが飛んできて、デイトドラ様の女王…めーこさんを直撃い?!

「ええ?」

しかし その光線を受けた めーこさんは、更なるダメージを負う事は無く、寧ろ、致命傷ギリギリだった傷が塞がれて回復しています。

これって、まさか…

ドツドツドツド…

どつごお~~~~~ん!!!

「うえこるあらあつ?!」

…つて、ええ!!?

更に今度は、無数のミサイルが跳んできて、ヘルに集中爆撃です!

「……………。」

ヘルが面白い? 悲鳴を上げる中、改めて それ等が飛んできた方向を、皆で顔を向けると

「リアス、お待ちせしました!」

「へへっ…真打ち登場!!…つてか?」

「ディオドラ様〜!」

「ソーナ?」

「リリ! ララティーナ!!」

其処にはソーナ様と匙先輩、そしてディオドラ様とサイラオーグ様の眷属さんが数名程。

そして、

「癒やしビーム…です!!♪」

凄く嬉しそうな笑顔どやがわで、ドラゴン波のポーズを決めている、アジア先輩でした。

◇ディオドラ side ◇

た…助かったあ〜!

絶対的なメイコの危機に、ナイスなタイミングで増援に駆け付けたのは、ソーナとその眷属の黒邪龍君ツリトラ、サイラオーグの眷属が数名、そして僕の眷属からは、戦車のララティーナと兵士のリリの2人。

そしてそして、アジアさんだ!!

「この場は我等に お任せを！」

サイラオーグ様は赤龍帝殿達の元に!!」

「うむ!!ならば任せたぞ！」

リアスの騎士ナイトよ!

この場の指揮は、君に一任する!!

お前達も それで良いな？」

「はいっ!!」

サイラオーグ眷属は自分の主の下に駆け付けると、サイラオーグ本人は彼等に後を任せ、赤龍帝と合流するべく、髑髏の大軍から抜け出した。

「リアス様、僭越では ありますが…」

「加勢します!」

「ええ! よろしくお願いね!」

そしてリリとソーナは、リアス達と合流。

「皆! この聖女が この場から、回復の光線を放つ!」

そして聖女は、この私が全責任を持って、肉壁となつて護つてみせる!!

だから お前達はダメージを恐れず、心置きなく戦え!」

ララティーナは、回復役として参上したアーシアさんの護衛の位置に。

確かに参戦早々に、あの癒やしの能力を披露したからには、真つ先に狙われる事になるのは当然だ。

だから そういう意味では、ララティーナは護衛には打つてつけの人選。

尤も彼女は、本当は あっちの鬪體兵の大軍に飛び込んで、成すが儘に蹂躪された
いってのが本心なんだろうなあ…

頼むから間違つても、^{デコイ} 囷のスキルを発動させて、わざと敵をおびき寄せる様な真似だ
けは、しないでくれよ?

「加勢、しますよ?」

「ええ。龍王の一人が助つ人とは、心強い限りです!」

そして僕達の処には、黒邪龍^{ヴリトラ}の兵士：確か匙君：だったかな？

シークヴァイラとのゲームで大活躍を魅せてくれた彼が、駆け付けた。

…が、しかし…

「君、ゲームのダメージは、大丈夫なのかい？」

「…俺はゲームでは、怪我なんかは殆ど無い、生命力を消費した上の自爆みたいなモンでしたから。」

アルジエントさんの神器で、体力を回復させて貰ったから十分ですよ！

まあ、その回復に時間掛かり過ぎたのが、実は遅れて来た理由なんすけどね…

…らしい。

…って、彼はアーシアさんに、長時間回復して貰っていたと言うのかい？

な、何て羨ましいんだよ!?



この増援の後、最初に戦いが終了したのは

『『ぎやいーーん?!?!?!』』

魔犬ガムルとディオドラチームのバトルだった。

匙が神器から放つ、黒邪龍^{ヴリトラ}の呪いの炎の拘束が双頭の猛犬を捉え、それによってパ

ワーダウンした処に、アーサーの聖王剣の一閃が、その2つの首を同時に斬り落とした

のだった。

「ひやは！ナイスなアシストだったぜい！」

ドラゴンの兄ちゃん!!」

「ははは…どーも。」

ニカツと笑いながら、肩に腕を回して労う美猴に、匙も照れ笑い。

「まだだ！」「まだです！」

「え？」

しかし その勝利ムードを打ち消す様に、デイトドラとアーサーが声を出す。

その瞬間、

ずももも…

「な…何じやあこりやあく〜?!」

その場周辺の地面から、恐らくは冥府の女王の権能なのであろう、大量の屍…髑髏兵とは違い、所々に内蔵や骨が剥き出しとなっている、腐敗した肉体を纏う死体の群れが地中より湧き出る様に現れ、デイトドラ達に向かい襲い掛かる。

「おらー！」「ちいっ！」

パキッ！ 斬！

その個々の戦闘力は大した事は無かったのだが、

30秒程、私に時間を下さい!!」

「ソーナ? わ…分かった…」

皆、行くわよ!!」

「「「「「はいっ!」」」」」」

勝負所と見たソーナの申し出に、強力な攻撃を仕掛けると確信したりアスが、それに領き、他のメンバーと共に、ヘルの足止めに入る。

「行っけ——————っ!!」

どっどっどっど…

先ずはディオドラの兵士のリリが、その背負った巨大リユックから、その大容量さえも凌ぐ質量保存の法則を無視したかの如くな、大量のミサイル弾を発射、

どっごん!

「ぐああっ?!」

その殆どはヘルの触手と魔術防御壁に阻まれるが、それでも数発はヒットし、決して少なくは無いダメージを与える。

「『:ヴァーナー・ウオルター・ヴァーナー・レイチャ…』」

それを見たソーナは、リアス達の時間稼ぎの成功を確信、強力魔術の詠唱に入った。

「覇ああっ!!」

「にゃん!」

「でえいやあ!!」

続くは黒歌と小猫が、”赤龍帝の双節棍”に各々の仙氣を纏わせての攻撃。
リアスも、”赤龍帝の円盾”の投擲攻撃。

ビシィツ x 3!

「ぎやああつ!」

際限無く延びる鎖に連なる武具の一撃二撃三撃が、冥府の女王に炸裂。

「…水よ! 氣に満ちよ!! 我が敵は…」

この間にも、ソーナの詠唱は続く。

たふん…

彼女の詠唱…魔力に反応し、大氣中に在る水素分子と酸素分子が結合、上空にて巨大なH₂Oの塊が姿を見せた。

「やあつ!」「疾つ!!」

ルフェイが火炎弾を、メイコが真空刃を撃ち出し、

「てええい!」「雷光よお!!」

ドガシヤアアアツ!!

「ぐわああつ!」

そしてジャンヌと朱乃はシリユールから借りた武器でなく、本来の自身の攻撃…悪魔に転生する以前の、生まれながらの能力故に繰り出せる、”聖なる刃と”光”を纏った雷撃の連撃で、更にヘルの動きを封じる。

「…汝が、敵成り!!」

そしてソーナの詠唱も、遂に完結した。

『【皇帝水龍瀑】アーケ、スワイズ ー ー ー!!!』

同時に大質量の水塊は、先程のミドガルムオルズ・コピーを彷彿させる、巨大な蛇龍の形に整い、

『ゴアアアアアアアイアアア!!』

ドンヴァオオオオアオン!!!!

「ぎゃああああつ?!」

上空からヘル目掛けて急降下、超水圧で押し潰す。

「やたつ?!」

「す…凄い魔法…」

「…ですう!」

「ソーナの超必殺だにゃ!!」

その凄まじい威力に決着と確信した少女達が沸き立つが、

「くっ…よ、よぐもオ…ッ」

「「「?!」」」

「し、仕留めきれなかった!?!」

それでも、全身血塗れになりながらも、ヘルは立ち上がる。

決して、効いていない訳では無い。

それでも、仲間のアシストを得なければならぬ程の、長い詠唱を必要とする強大な魔術での一撃を耐えた冥府の女王のタフネス振りに、ソーナは驚きを隠せないが、

「これで最期よ…滅びなさい!!」

即座にリアスが、前面に差し出した掌から黒く光る魔弾…滅びの魔術を撃ち放った。

ヴォン…

紫電を纏った黒い滅びの光弾は、高速回転しながら一直線にヘル向かって飛び立つ。

「ちいっ!」

それに対し、満身創痍な冥府の女王は両手を前に出して、ガードの構え見せ、

ドオン!

「く…!!」

「え?…た…耐えた?!」

両腕を犠牲にする代わりに、自身の完全消滅だけは、何とか回避。

これには先程のソーナに続き、リアスも信じられない様な表情を浮かべる。

「ふ…本当に、潮時だねえ…」

シユウウ…

そして両腕の肘から下を喪ったヘルは、自虐的な笑みを浮かべながら、足元に転移の魔法陣を展開。

「に、逃げる気?!」

「ふん…誰だつて、己の命は惜しいさね。」

それに、これだけ暴れたなら、父との義理も、もう果たしたさ。

元より私は、オーデインが他勢力と手を組もうが、然程興味無いしねえ。」

そう言うのと、髪の色を黒と白の2色に戻したヘルは、魔法陣の放つ光に溶け込む様に、この戦場から姿を消した。

》》》》

「ぬ?」「これは…?」「にょ?」

ヘルが消えたと同時に、木場にミルたん、サイラオーグ眷属が戦っていた鬨聲の兵士達が一斉に倒れ落ち、動かぬ骸と化し、

「へ?」「む…」「何!?!」「え?」

ディオドラ達が相手取っていたゾンビの群れも、同様に その場で倒れ崩れ、物言わ

ぬ屍となる。

「…どうやら、死者の兵を操っていたヘルが この場を去った事により、この者達も只の死体に戻った様ですね。」

「…って事は、残る敵は、漸く あの悪神だけってかい？」

「だつたら俺達も、神崎達の処に！」

◇シリユースide◇

どうやらアンデッドの元締めだつたヘルを撤退させた事により、雑魚の死者の兵士達は片付いたみたいだな。

だつたら…

シューウウ…

「へ?」「お?」「ん?」

「む?」「あら?」「によ?」

「裸ドラゴン先輩の武器が…」

「光の粒になつて、消えてつたにや?」

「いえ、光の粒子が、シリユースの方に…」

「光が神崎君の身体を包んで、鎧に?」

とりあえず鎧の欠片…天秤座ライブラの武具ラ(擬き)は、返して貰うぞ。

『ふう~~~~~』

ん? どうしたドライグ?

その如何にも『一安心』と言いた気な深い溜め息は、一体何なのだ?

》》》

ずらっ!!

「.....」

ロキー柱ひとりを、冥界側こちからのメンバーが誰一人欠ける事無く取り囲んだ。

俺。

リアス部長。

朱乃先輩。

木場。

小猫。

黒歌。

ミルたん。

支取先輩。

匙。

サイラオーグ。

…と、その眷属3人。

いや、正確に言えば、ヤツの鎧となっている兵士も居るから4人か。デイオドラ。

…と、その眷属3人。

ヴァーリ。

アーサー。

美猴。

ルフエイ。

デスマスク。

ロスヴァイセさん。

…総勢、24人で、だ。

更に後方には、回復役のアーシアと、その護衛役であるデイオドラの戦車も控えている。

『…うをん!?! (怒)』

あー、悪かった。

お前も立派な戦力だよな、フェンリル。

》》》》

「ロキ様！もう、十分でしょう？」

馬鹿な真似は止めて、投降して下さい！

冥界に：三大勢力に実質的被害が無い今なら　まだ、オーデイン様もサーゼクス様達に：」

「黙れヴァルキリー！」

もしかして雑魚が多少　頭数を揃えただけで、勝てる心算か？

私が駒を用意したのは、あくまでもラグナロクに相応しい、派手な演出が欲しかっただけの事。

その気になれば、最初から私一人で事は成せてたわ!!」

ロスヴァイセさんが改めて、ロキに降る様に話を持ち掛けるが、当の悪神は　それを受け入れない。

「：話に聞けば、貴様は　かなり優秀な人材な様だが、あの老いぼれの介護に追われ、英雄と結ばれる縁が無いらしいな？

どうだ？

貴様こそ、今からでも遅くはない、オーデインを見限り、私の下に就かぬか？

そうすれば、配下の英雄オトコを幾らでも紹介してやるぞ？」

「：：な、なあ?!」

「……………」
それどころか、逆に此の場で、ロスヴァイセさんに対して引き拔きの勧告だ。

ろろろ…ロキ様!あ、貴方は阿呆ですか?

そ、そんな しよーもない理由で主を裏切るヴァルキリーが一体、何処の世界に居るとゆうのですか??!

.....。

ろ、ロツスヴァイセさあ~~~~ん?

その今の間は一体、何なのですか??

燃えろ小宇宙（コスモ）！ 最強の必殺技!!

◇シリユースィde◇

「ふん…如何に雑魚の寄せ集めとは云え、流星に この数は鬱陶し過ぎる…な!!」

BoUWaA!!

「「なっ!」」

「げっ?」

「「うっ?」」

「ちいっ!!」

最終局面…でも表現すべきか。

ロキを除く全ての敵、特にヤツの娘でもある、冥府の女王・ヘルを退け、それはイコー
 ル、無限に沸き現れていた死者の兵士を片付け、残すは今回の戦いの首謀者のみ。

それを俺達は全方位から集中攻撃すべく、取り囲んだが…

ん? 聖闘士^{セイント}が1人に対してフクロ口して良いのか?…だと?

それは あくまでも、一介の戦士同士で闘う時の話だ!

そもそも俺とデスマスク以外は、聖闘士^{セイント}じゃないし!

しかも、今回は『神』が相手！

だから、セーフなんだよ！！閑話休題！

：それに対してロキは、身体全体から、銀色に光る魔氣を立ち上らせると、それをその儘、全包围している俺達に向けて放ってきた。

それは魔弾の様な“点”の攻撃でなく、魔力の壁とでも言うべき“面”での攻撃。

つまりは回避不可。

防御して耐え凌ぐしか、術が無いのだが：



ドッコオオooooooooooooooooon!!

「「うわあっ!!」」

「「きゃああっ?!?!」」

ロキが全方位に向けて飛ばした、魔力の障壁を浴びたりアス達。

それは全員、ガードを試みるも、半数が その攻撃力破壊力に耐えきれず、吹き飛ばされてしまう。

「うう…」

「ら、ララティーナさん?!」

「わ、私は まだ大丈夫だ！

それよりも、あつちの倒れた連中に!!

「は、はいー!」

その魔力の波動は、回復役として後方に控えていたアーシアの立つ位置にも及んでいたが、彼女の前に、護衛役として控えていたララティーナが、そのダメージを全て、文字通りな肉壁となり肩代わり。

慌てて回復しようとしたアーシアに、弱冠 悦楽な表情を浮かべながら、自分ではなく、現場で倒れた者が先だと指示。

「[[[う…]]」

「[[[ううう…]]」

「ふっ…所詮は雑魚…か…!」

絶大な攻撃を受け、倒れ伏せている者達に、見下す様な冷たい視線を浴びせるロキ。

アーシアが放つ、癒やしのの光は敢えて無視して、未だ自らの両足で立っている者に向けて言い放つ。

「今の攻撃に耐えた者達よ!

貴様等には一応、このロキと戦える権利が在る様だ。

さあ、掛かってくるが良い。」

「今のは篩ふるかよ!」

「巫山戯やがって……！」

◇リアス side ◇

くっ…

何とか耐えてみたけど、とんでもない一撃だったわ。

あのロキは、今の攻撃を自分と戦う権利が有るかを計る、節落としみたいに言ってたけど、それで実際に今、立っているのは…

私。

シリユー。

ミルたん。

ソーナ。

匙君。

サイラオグ。

ディオドラ。

ヴァーリ。

アーサー。

ベツロさん。

ロスヴァイセさん。

猿。

それと、後ろ側に居るアーシアと、デイオドラの戦車…か。

あの攻撃に耐えきれなかった皆も、ダメージが酷過ぎて起き上がれないだけで、死んではいけないみたいだけど…

「くっ…」「ちい…」「うう…」

デイオドラとアーサー、ついでに猿も、何だかギリギリみたい。

私も、もしもミルたんが前面に出てきてくれなかったら、どうなっていたか…

ソーナも匙君が、前に出ていたし。

◇デスマスクside◇

おいおいおいをゐ？

今の攻撃は、ちと洒落にならねーぞ?!

死屍累々(笑)。

いや、マジに笑えねえ。

アーシア嬢ちゃんが、倒れた奴等に向けて回復ビームをガンガン放っているが、あれは本来、連射して、ドーのこーのつて代物じゃないだろ？

以前、紫龍から少し教えて貰ったが、お嬢ちゃんの神器の回復量は、所謂“溜め”に比例する。

回復エネルギーを飛ばすでなく、直接に その対象の者に直に触れて治療する場合でも、何処そのゲームみたく速効性タイプでなく、全快させるには それなりに治療時間を要する…つてな。

あれは本当に、自力で立てる…戦闘の邪魔にならない様、その場から撤退出来る程度の“元氣”つてヤツを与えてるに過ぎない。

残念だが、今倒れている奴等は戦線離脱だリアな。

…にしても、まさか、サイラオーグの眷属3人（戦車2人・騎士1人）も、纏めてリタイヤとはねえ…

アイツのついでとばかり、多少の師事の真似事を施した身としては、少しばかり複雑な心境だぜ。

◇ヴァーリside◇

更なる節…か。

あの貴族の坊ちゃんも兎も角、アーサーと美猴が あれ程のダメージを負ってしまうとは…

ふっ…アイツ等には悪いが、面白い！

ロキ。

流石は北歐神話にて、悪神として名を馳せているだけはある！！

『…嬉しそうだな、ヴァーリ?』

…悪いか? アルビオン?

『いや、それでこそ、お前だ。』

ならば、問題無いだろう! 行くぞ!!



天の理

地の理

有の理

無の理

人の理

魔の理…

ロキが己の周りに多数の魔法陣を展開、その一つ一つが砲門の如く、対峙している者達に向けて幾多の魔弾を撃ち出す中、ヴァーリは自らに魔法障壁シールドを張りながら、魔力を高め集中し、魔術詠唱を始めた。

「あつの野郎!

永いの唱えるなら、先に言え！

フオローが必要だろーが！！」

「報連相は、大切だよ！」

先程のソーナの魔法同様に、やや長い詠唱を必要とする：唱え終える迄、ある程度のフオローを必要とする攻撃を、いきなり開始したヴァーリに対し、匙とミルたんが、多少文句を言いながら前面に出る。

「はあああ……」

「によによおお……」

そして魔力を溜めて、攻撃する2人。

「ミルたん・ギヤラクテイカ・マグナム銀河火弾拳！！によー！！」

ミルたんの力強い踏み込みの一步からの、右ストレートのポーズで振り抜いた拳の先から、噴火した火山の如く、無数の燃え盛る溶岩の弾が撃ち放たれ、

「ヴリトラ・ブラスタ黒邪龍炎殺王穹覇！！」

魔力によって生成された黒炎が匙の左手腕に纏わり憑き、それは瞬く間に蠢く龍の形を成し一閃、ロキに直撃。

「賢しいわっ！下級悪魔共が！！」

神を、嘗めるな！！」

「ぐ?!」「によ?」

それは決定打に至る程のダメージでは無かったにしろ、それを不快とした悪神は、2人に向けて反撃…神罰として、啗う頭蓋を象った魔弾を放つ。

どどん!

「何い?!」

しかし、それは、突如として地面より沸き出でた石の壁により阻まれた。

「勝てるなら、決して主役に なれなくても良い…歯車でも裏方でも、何でも やってやるさー!」

「ディオドラ様!」

それはアーシアの癒やしを受け、僅かながらに回復した、ディオドラのアシスト。

…力の円錐ディマジオの紋を以て、今こそ我、白き三ツ頭の龍皇と成らん!!!

「(フツ…)」

そして、その様子を見て、微かに口元を緩めたヴァーリが詠唱を唱え終えた。

ズズズ…

鎧の両肩のパーツが変形。

大きく口を開けた龍の頭を形成し、その口内に魔力の光が灯る。

そして両腕を前に差し出し、龍の顎の如く組み合わされた両手からも、魔の力による蒼い輝きを放ち、

「滅べ！」

アルティメット・バースト・ストリーム！！

弩つ轟々々々々々々々々々々々々々々々々々々々！！！！

「ぐあああああああああつ?!」

3つのドラゴンの口から飛ばされた、魔力のエネルギー波が、ロキを撃った。

「な…嘗めるなど言っている！」

薄汚いドラゴン風情が!!

バシユツ！

「ぐわあつ?!」

この攻撃は かなり効いたのか、表情を怒りに歪め、魔力を飛ばすでなく、高速移動で間合いを詰めた上での蹴り、魔力を込めた直接の打撃が、ヴァーリの胸元に炸裂。

肉弾戦は想定の外だったのか、反応が遅れて防御が間に合わず、その攻撃をまともに受けたヴァーリは、鎧の破片を撒き散らしながら吹き飛ばされた。

「ヴァーリ!!」

ガシッ

「…すまない。確かに少しばかり、油断し過ぎていた様だ。」

そのヴァーリを受け止めたのは、やはりアーシアの回復の光を僅かながらに受け、最低限の動きは出来る様になった、アーサーと美猴。

2人に一言、礼の言葉を述べると、ヴァーリは砕けた鎧の部位を再生し、再び、悪神に挑み掛かるべく、光る翼を広げた。

◇デスマスク side ◇

傍目には、集団を活かしての大技攻勢だが、実の処、あのロキには大してダメージは届いていない。

あくまでも身体の上っ面、表面的なダメージに過ぎない。

まあ、あのキレっぷりからして、あの白龍皇の小僧の攻撃は、結構効いてるみたいだがな。

「デスマスク！」

紫龍も それに気付いてるみたいだな。

ああ、分かってるよ。

やはりアイツを確実に仕留めるには、今現在、この場に転位の準備を進めていると云う、雷神乃鎚ミヨルニルの一撃か…

「積尸ツクシ気い…冥界波あつ！！」

小宇宙コスモによる一撃しか、無いよな！

貴様の魂、その肉体うづわから引きずり出して、直接キツツイ一撃喰らわせてやるよ！悪神

！！

「ぬうおわああああつ！！」

「く…そつだらがあ！！」

ちい…だが流石に、神の”魂”は重い…！

”神”相手に、身体から魂を引き剥がす この技は…いや、今の俺では、やはり無理が有り過ぎたか？

…いや、過去の聖戦で、当代の蟹座の黄金聖闘士が『死の神』から、この技で肉体の器から魂を引き抜き、アテナの封が施された棺に閉じ込めたつて記録が有る！

だったら俺でも、そしてコイツにも通じない道理は無えつ！

「神を…弄するか、人間！！」

ドゴツ！

「ぐは…!!？」

ぐえ…拙った…油断した…

身体から魂を引き剥がされかけてるつてのに、あのヤロー、抵抗する様に魔弾を放つ

てきやがって…その直撃、貰っちゃった…

「デスマスク!」「師匠!?!」

紫龍とサイラオグが心配そうに駆け寄って来たが、大丈夫だ。

確かに聖衣クロス(モドキ)が無けりやバかったが、俺は可愛い孫娘の花嫁姿を拝む迄、死んでたまるかってんだよ!!

◇シリユースィデ◇

ロキの魂を引つ張り出すのに手こずっているデスマスク。

その最中、抗いの一撃を受けたのは、油断したヤツが悪いとして…

「デスマスク、受け取れ!

ブーステッド・ギア・ギフト
【赤龍帝からの贈り物】!!」

『Transfer!』

ならば俺も、サポートに回ってやる。

「有り難え!ううるあああつ!!」

ずずず…

『二、ニンゲンガアアア!!』

”譲渡”の作用で小宇宙コスモをパワーアップさせたデスマスクが、遂にロキの魂を…所謂

”靈魂”型でなく、神格なのか、人の型を保っているヤツの魂を、肩口からスタ○ドの

如く、上半身だけが引き擦り出すのに成功した。

「積尸気魂葬破ア!!」

BOMB!!

「グギヤアアア?!」

そこに間髪入れず、その魂に直接、デスマスクの爆裂系?の技が炸裂。

「ライトニング・プラズマ!!」

閃ッ!!

続け様にサイラオーグの、光速の拳の連打が、そして、

「廬山百龍覇あー………っ!!!」

弩撃々々々々っ!!

本来は、目の前に立ちはだかる複数の敵を、一気に討ち滅ぼす技。

差し出した両の掌から放たれた、小宇宙で形成される龍を象った100の氣^{オーラ}全てが、
拡散する事無く、剥き出しの魂に集中直撃^{ヒット}した。

「うぐあああああ………!!?」

ズシャッ!

この…ええい、もう面倒だから、サイラオーグも数に入れる!

この…^{ゴールドセイント}黄金聖闘士の攻撃3連発の衝撃により、再び魂が仕舞われたロキの身体は天高

く飛ばされ、それは 最終的には頭部から垂直に地面に激突。

「貴様等…神に対して よくも…」

赦さん…絶対に赦さんぞ…」

起き上がったロキが頭頂から血を流しながら、俺たちを睨み付けるが、魂に直接、小宇宙^{コスモ}を込めて受けた技のダメージは決して小さくは無く、それこそヤツが見下している人間の様に、膝をガクガクさせている。

「があああつ!!!」

バシィッ!

「「ぐわっ!」」

「「きやああつ!」」

「「うげやつ?!」」

しかしながら、その魔力は未だに健在。

全方位に魔力の弾丸を跳ばし、軌道を見切り易い直線的な動きでは無く、不規則に蠢きながら迫る魔弾に俺達は吹き飛ばされ、ダメージを受けてしまう。

「…!! 皆さん、お待たせしました!」

「「「!!」」」

そんな中、ロスヴァイセさんが叫ぶ。

それに呼応する様、皆が上空を見上げると、巨大な魔法陣が現れ、其処から赤い雷を纏った巨大なハンマーが、姿を見せた。

「ちいーミヨルニルだと？」

オーデインめ、何処迄……！」

本来は北歐神が1柱、雷神トールの愛用の武器である、ミヨルニル雷神乃鎚。

この度の戦闘にて、北歐サイドが用意した切り札だ。

ガシ……

そして翼を広げて飛翔、鎚の柄を力強く握り締めたのは、

「さあ、行くによー！」

腕力的に一番使いこなせると判断されたのであろう、オーデインから直々のドドメ役の指名を受けた、ミルたんだ。

「皆、ミルたんをサポートよー！」

「「「「応!!」」」」

リアル部長の号令の下、ミルたんが完璧な一撃を放てる隙を作る為、動けるメンバーが動き出す。

「ライオン！」「Divide！」

「くっ……!?!」

匙の【黒い龍脈】^{アフソフシヨシ・ライン}の黒炎の綱がロキの腕に絡み憑き、力を奪った処で更に、ヴァーリが己の神器の能力の1つ、”半減”の能力を発動。

匙は兎も角、あの戦闘狂が、純粹なサポート役に勤しむとわね：

さっきのディオドラの歯車発言に、何か思い、感じる事でも有ったか？

「覇あー！」「てやつ！」「ええい！」

ドドドドド…

「クソっ！増々以て、小賢しい!!」

更にはリアス部長、支取先輩、ロスヴァイセさんが同時に放つ、魔力の弾幕で悪神の動きを封じ込め、

『Transferrer!』

「せえーつによつ!!」

バキイ!!

「うぐえわああつ!!?」

そして遂に、【赤龍帝からの贈り物】^{ブイ! ステッド・ギア・ギフト}により譲渡された効果により、ミルたんが持つ：

文字通り、物理的に倍々化された：雷神^{ミヨルニル}乃鎚による最高の一撃が、北歐のトリックスターに炸裂した！

ヴァアア…

そして巨大ハンマーの一撃が決まると同時に、予め雷神ミヨルニル乃鎚ニルに術式として仕込まれていたのであろう、北欧式の捕縛型魔法陣が現れ、悲痛な表情を浮かべるロキを拘束し始めた。

恐らくは其の儘、北欧の本拠地であるアースガルズに転位させる仕様なのだろう。

「やっと、終わったのね…」

…それを見ながら、リアス部長が安堵の溜め息を零しながら呟く。

…いや、まだだ。

俺の脳内に、最高にヤバいと、警告音が鳴り響く。

俺の勘…特に悪い予感、よく当たる。

その証拠にロキは今、既に己の敗北が確定したにも拘わらず、最高に邪悪な笑みを浮かべている。

「紫龍…サイラオーグ！」

どうやらデスマスクも、同じ考えに至った様だ。

懐から小さな瓶を取り出すと、その中身の紅い液体を、サイラオーグの鎧に吹っ掛けた。

「し、師匠？」

それに反応したのか、サイラオーグの獅子王の鎧が、更なる黄金の煌めきを放ち出す。

「サイラオーグ！限界迄小宇宙^{コスモ}を燃やせ！」

紫龍、お前もだ！我がアテナからは、事前に許可を得ている!!」

拘束されながらも、最期の抵抗：恐らくは自爆。

この疑似空間毎、自らを含む、此の場の全員を消し飛ばさんとばかり、魔力を高めるロキを見据えながら、デスマスクが叫ぶ。

…承知したよ。

《《《

夏休みの最初の頃に冥界入りした数日後の、ルシファー城でのパーティー。

その時、俺は、デスマスクの仲介で初めて、この世界のアテナと逢った。

あの時、アテナは俺の力量を直に知りたと言ってきたので、当時の赤龍帝の籠手^{ブリステッド・ギア}の最強形態である、【紅珠黄金龍^{ルビー・ゴールド・ドラゴン}】を見せた。

「噂に違わぬ凄まじき力よ…。」

それでは改めて赤龍帝よ…

これが、妾と貴方との、同盟の証だ…。」

「おい?!あんだ…?!?!」

すると見た目は小猫より少し背が高い程度な、猫耳ニットの銀髪少女は満足して微笑

み、懐から黄金の短剣を取り出し…

ザッ…

「!?!」

「……………」

在ろう事か、それを自らの胸元に突き刺した。

アテナの傍らに居たデスマスクは、この展開を予め聞いていたのだろう。

驚く俺とは違い、無言、且つ冷静に事の成り行きを見守っており…

カアアッ…

「……これは……!!?」

その時に噴き出たアテナの血を浴びた赤龍帝^{オレ}の鎧は、黄金の煌めきを更に強め、新たな進化を果たしたのだった。

…尚、アテナの胸元の傷は直後、何事も無かったかの様に癒えていた。

》》》

イーコル
神の血。

先程、デスマスクがサイラオーグに浴びせた液体も、アテナの血液なのだろう。

そしてデスマスクの聖衣も当然、オリンポスで造られた際に、既にその仕込みが成

されていたのは、想像に難しくは無い。

そして、身に纏う鎧に、この神の…アテナの血の祝福を受けた俺達は、

『『『うおおおおおーっ！！』』』

「燃え上がれ！」

「吼えろ！」

「轟け！」

『『『我が、小宇宙よ！！』』』

己の小宇宙を雄叫びと共に、最大限に高めた。

カアアアツ…!!

「うっ…?!」「眩しっ!」「あれは…?」

正しく神々しい光という表現。

俺達3人が小宇宙を極限迄燃焼させる事により発する、その眩い光を部長達が目を眩ませながらも見つめる中、アテナの血の祝福を受けた鎧は、その小宇宙に呼応して、更なる進化を遂げた。

サイラオーグの鎧には、背に巨大な翼の様なパーツを筆頭に、各所にも細かい造形が

施されたパーツが追加されている。

デスマスクの聖衣クロスも、全体的に更に棘々しいデザインとなり、背中からは蟹の脚を連想させる、長く鋭利なパーツが数本、付け加わった。

更に両者の鎧は、今迄は金属として、単に光を反射して輝いていたのが、鎧自体から、黄金の光を放つ様になる。

そして俺の鎧。

デザイン的には【紅珠黄金龍ルビー・ゴールド・ドラゴン】と大して変わらないが、背の龍翼が1対2枚から6対12枚に増し、細部全体に、伝統工芸品を思わせる様なラインの装飾が施され、その色も重い赤から、水晶の様に透き通った、鮮やかな紅となった。

そして やはり、鎧本体から眩い黄金の輝きを放っている。

名付けるなら、【赤龍帝乃神聖衣ゴッド・クロス・ドラゴン】…とでも云った処か。

ザツ：

俺を中心にしてデスマスクとサイラオークが両脇に立ち、手首を重ねた両掌を、今正に俺達を道ずれに自爆しようと、魔力を溜め込み進らせているロキに向けて、更に小宇宙コスモを燃やす。

そして各々が究極に迄高めた小宇宙コスモを破壊のエネルギーに変え、その両の掌から一気に解き放つのだった。

「アテナ・エクスクラメーション!!!」

駒王学園は、アナタを歓迎します!

「おのれ、オーデイン!

おのれ、悪魔共!

おのれ、おのれ、赤龍帝いゝゝゝゝゝゝ!!」

「アテナ・エクスクラメーション」

3人の黄金聖闘士が究極まで小宇宙^{コスモ}を高め、その攻撃的小宇宙^{コスモ}を一点に集中して放つ大技。

破壊力は小規模ながら宇宙創造のビッグバンにも匹敵し、その余りに凄まじい破壊力、そして基本、如何に敵と云えども1人の者を3人で討つのは聖闘士としてあるまじき行為な故、神話の時代よりアテナにより禁じられた影の闘法。

それを行使した者達は完全に聖闘士だった証を剥奪され、死して尚、未来永劫に鬼畜にも劣る賊の烙印を押されてしまう。

◇シリユースサイド◇

俺とデスマスク、そしてサイラオーグによつて繰り出されたこの禁断の秘技はロキに：悪神が自爆目的で放とうとした魔力さえも、封じるかの様に飲み込んで直撃。

流石に神の1柱か、それでも必殺には至らなかつたが、先程の雷神ミヨルニルの一撃により展開された、捕縛魔法陣に抗える力は失われ、俺達に対して怨み事を吐きながら、その身を魔法陣に呑み込まれ、この場から姿を消した。

尚、今回のアテ・エクは、デスマスクが事前に（この世界の）アテナから使用の許可を得ており…ついでに言えば、敵が「リアル」神”だったし、更に言えば、サイラオーグは正式な黄金聖闘士ゴールド・セイントとして訳じやないから、セーフだよ、セーフ！

…で、良いよね？

そうですね？ 沙織さん？（必死）

「…今度こそ…」

「お、終わり…かい…?」

激闘の末、ボロボロな姿となっている部長とデオドラが、不安混じりに呟く。

「ええ。俺達の勝ち…ですよ。」

「…だな。」

「結果、誰1人、欠けてもいない。

完全勝利と言つても良いだろう。」

ホッ…

しかし、俺とデスマスク、サイラオーグの言葉に、2人は…否、その場の全員が、安

「あいすくりーむ…ぷりん…けーき…無いの？」

オーちゃん、気持ちばかりです。

でも、今回は本当に疲れたから、早く お風呂入って寝たいです。

「小猫さんが食い気よりも眠気を優先させるなんて、余程でしたのね…」

「…ですう！」

おい、そのの 作者に存在を忘れられていた 転移の人数制限で今回は出番の無かった焼鳥娘…と、”先つきよだけ「コンニチワ」のミニmam被りヴァンパイア”、少し話そうか。

◇シリユースィde◇

「オーデイン殿達も、同行ですか？」

「うむ。近い内に日本で、日本やインド等の、アジア神話勢力との話し合いが有るで、折角じゃからな。」

それに この冥界の列車、一度乗ってみたかったしの〜♪」

翌日。 俺達は、日本に帰る事に。

グレモリー邸の地下プラットフォームには、オカ研メンバーに生徒会の皆さん、アザゼルにデスマスク、オーデインにロスヴァイセさん。

「……………」

そして3勢力側から、日本でのオーディンの護衛として就く事になった、墮天使幹部・バラキエル。

朱乃先輩との雰囲気、凄く気拙い。

彼女は確かに、自身に流れる血は受け入れたみたいだが、父親との確執は、また別物な様だ。

朱乃先輩、前みたいに、夜叉の様な形相で睨み付ける事は無くなった様だが、まだまだ この2人、時間が必要だな…

「それじゃリアス、元気でね。」

「リアス姉様、眷属の皆さん、シリユーさん、また来て下さいね!」

そして見送りには、ヴェネエラさんにミリキヤス、

「また会おう、リアス。」

そして師匠、赤龍帝殿も お元気で!」

「皆さん、元気でね。」

「次に会うのは、来月のゲームですね。」

更にはサイラオーグ、デオドラ、シーグヴァイラ嬢も、眷属数名を引き連れて来てくれた。

「赤龍帝…神崎孜劉殿！」

「ん？」

「アナタとは何時か、ゲームとは関係無く、一度手合わせしたい物だ。」

「ふ…」

コン…

サイラオーグの突き出した右拳に、俺も拳を軽く重ね、列車に乗り込んだ。

尚、ヴァーリ・チームは、戦いの後に直ぐ、転移で自分達の拠点へと帰っている。

◇木場 side ◇

「うう…ロキ以上の、強敵だにや…」

「う…迂闊でした。」

次元の狭間を進む冥界列車。

その車内で僕達は まったりと…

「ほらほら、修行やゲーム、ロキとの戦いで、宿題出来てませんは、理由にならないわよ！

グレモリー眷属として、そしてオカルト研究部の名誉の為にも、きっちりと やつて もらうからね!!」

「ふにや~~~~~~~~つ!!」

…小猫ちゃんと黒歌さんは、部長の見張りの下、夏休みの宿題をやっています。

「奥様、凄く綺麗な方ですわね。」

「娘さんも、美人ですし。」

「お孫さん、凄く可愛らしいですね。」

「ですう!」

「によ。」

「だろ?だろ?だろ?♪」

副部長、レイヴエルさん、アーシアさん、ギャスパール君、ミルたんは、僕達の車両に遊びに来た、ベッコロさんが持ってきたアルバム…御家族の写真に夢中。

「さつき、生徒会の車両に遊びに行ってみたけど、向こうも匙と…1年の子が、支取先輩と新羅先輩の監視付きで、「うーうー」言いながら、宿題やってたぜ。

…王手!」

…だ、そうです。

因みに僕は宿題は、夏休み前に全て終わらせてますし、神崎君とアーシアさんも、一度人間界に戻った時に、全部終わらせたとか。

…って、神崎君?

その王手、ちよつと待って?!

「待った無し!!」

◇シリユースide◇

「うむ…先程、ヴァルハラから連絡が有ったのじゃが…」

現在、オーデインと対話中。

オーデインが言うには、北欧の拠点に転移されたロキは現在、嚴重な封印術式を施した上で、この拠点最下層に投獄。

この北欧の主神の帰還の後、正式に沙汰を下す予定だったらしいが、それを待たずして自ら、永久水晶にその身を封じたようだ。

「つまり、引き籠もり?」

「お主も なかなか痛烈じゃのう?!

あながち間違つてはないが、もう ちよつと こう…何か別の表現は無いのか?」
引き籠もり否定は、しないのか…

「やれやれ…全く世話の焼ける、愚弟じゃわい…」

》》》》

「う…死にました…」

「ぶにゃあ…」

「自業自得だろ?」

次元の狭間を進む冥界列車。

その中で、ぐったり…と座席に もたれ掛かっているのは、何とか宿題を片付けた、白と黒の猫姉妹。

「おう、邪魔するぜ〜?」

「邪魔するなら失せろ。」

「そんな、酷い?!」

そこに やってきたのは、墮天使総督様だ。

俺の軽いボケ（半分はマジ）に、何処かの お姫様みたいなりアクションで切り返すアザゼル。

意外にノリが良いな。 w w w

「ち…とりあえず、オカ研に伝達だ。」

明日の正午、部室に集合な。」

「「は?」「「へ?」「「え?」「

「ま、詳しい話は、その時にする。」

話は、それだけだ。じゃあな。」

そう言うのと、アザゼルは去って行った。

…何なのだ? 少し、気になるな…

リアス部長も何も知らないのか、『???』な顔をしてるし。

》》》

「皆、お疲れ様。」

今日は、この場で解散するわ。

それじゃ明日、また部室で。」

「「「「「はい！」「「「「「」

駒王駅の地下プラットフォームに到着した俺達。

オカ研の合宿は、リアス部長の締めという言葉で解散となった。

少し間を開けた先では、生徒会の皆さんも、同様に支取先輩が締め括りしているみたいだ。

そして：

「ほっほ~~~~~いい♪」

初めての日本じやのう。

ほれ、アザゼル坊、何をしておる？

さっさとJAPANを案内せぬか!!」

「分あーった分あーった！

落っ着けジジイ！

そんなに焦らなくても、おっぱいは逃げやしねーよ!!」

「ほっほっほ……楽しみじゃのう♪」

「ちよ……オーデイン様？アザゼル殿?」

「貴方達は一体、何処に行こうとしてるのですか?!」

「おっパプ。」

「おっ……おお……オーデイン様あ〜〜っ!!」

「あ、貴方は一体、何の為に日本に來たと思っているのですかあーーーーっ!!」

……。あっちの墮天使総督と北歐の皆さんは、無視しておこう。そうしよう。



そして翌日、8月31日の正午。

「よっし、全員、揃っているな?」

「「「「「「「………」」」」」」」」」」」

オカルト研究部の部室には、オカ研と生徒会の面々が集合。

その全員が、普段はリアスが使っている、豪華な机の前に立つ、したり顔なアザゼルの目を向けていた。

「オカルト研究部の顧問になった、アザゼルだ。よろしくな。」

「「「「「「「「はあああ、っ?」」」」」」」」」

突然の言葉に、驚くりアス達。

「ついでに言えば、明日から2年のクラスの副担任となり、科学の担当教諭として、教鞭を執る事になる。」

2年の連中には、そつちの方でも、よろしく頼むわ。」

「……な、何だつてー?!」

続く台詞に、シリユー達2年生が、更に驚きの声を上げる。

「そんな訳で、今後は改めて、アザゼル先生と呼べ。」

あー、そののヤク〇。みないな輩顔で、凄く嫌つつつそんな顔をしている赤龍帝…神崎孜劉く?

当然、お前もだからなく?

「断る!」

「あ、!? 退学にすつぞ? テメー?」

「そんな、非道い!」

「…で、でも、何で急に…?」

早速に教師の権限?を濫用するアザゼルに、ソーナが尋ねる。

「夏休み前、3勢力で和平が…その流れで、北欧とオリンポスとも、同盟が成立したろ?

今後もアジア圏の神話勢力等とも、連携する方針でな。」

知ってる者も居ると思うが、オーデインの爺さんとセラフオルーが、近日中にその件で日本神話とインド神話連中と、会談する事になっている。」

「対テロリスト…ですか？」

「ああ。その通りだ。」

ヴァーリーの仲間によって、禍カオス・ブリゲードの団は壊滅状態。

何しろアタマのオーフィスが、グリゴリグウチの本部に居候してる状態だしな。

…だが、それでも残りの…逃げ出したって雑魚とやらが、事を起こさないとに限らない。

それで その同盟の地である この学校を正式な対テロの拠点に据え、とりあえずの代表として、墮天使トップである、この俺様が出張ったって訳だ。

それと ついでに、サーゼクスからの依頼で、お前達をガンガン鍛えるって理由もあるがな。」

「代表…」「貴方が…ですか？」

それを聞き、3大勢力の代表者として、そして自分達の師事者として出向いた男に対し、かーなーり、不信感丸出しな顔をする、オカルト研究部の部長と生徒会会長。

尤も、『いい加減』に手足と羽が生えて、服を着ている男』と謂われる男が相手なので、それも仕方無しと言え、仕方無いのだが。

しかし、そんな顔を見ても構わず、アザゼルはニヤリと笑いながら言葉を続ける。

「因みに：お前達が、俺が駄目って言うなら、その時はサーゼクスとセラフオールの2人が揃って、学園こくに来る事になっている。」

そして それ以後のチェンジは、無い！」

「：！！？」

サ！！ゼクスとセラフオール：

それぞれの兄と姉が来る：

それを聞いて、今度は顔を硬直させる、リアスとソーナ。

そして2人は顔を見合わせると、どちらからともなく互いに頷き、今度は少しばかり口元を引き攣らせながらも、ファーストフード店員の営業スマイルな如く、アザゼルに向けて満面な笑みを浮かべる。

新学期を翌日に控えた駒王学園。

雲一つ無い澄み切った青空の下、眩い日差しに照らされる旧校舎に、2人の少女の、元気な声が高らかに響き渡った。

「ようこそアザゼル先生！」

駒王学園は、貴方を歓迎します！！」

T
H
E

E
N
D

【Bonus Episode】

新学期です！

9月1日。

最近是小・中・高問わずに、8月後半から新学期が始まる学校も珍しくはないが、駒王学園では、この9月1日が新学期であり、各教室では久々の学校、久方振りのクラスメート達との、会話が弾んでいた。

⇒⇒⇒

2年C組。

「おはよー神崎。髪の毛、伸ばしたの？」

「神崎君、似合ってるよ。」

「ああ。夏休み前、男子のロン毛も解禁になったろ？」

「だから早速って感じだな。」

着席したと同時に、隣の席の水沢や、他の女子達に、話し掛けられるシリユー。

夏休み前の終業式にて、男子生徒の長髪が正式に認められ、夏休み期間も前髪は兎も角、後ろ髪はカットせずに伸ばし始め、その容姿はより以前の頃と近くなっていた。

「カッコイい…」

「黒髪ロン毛の神崎君×金髪短髪の木場きゅん…」

嗚呼、想像しただけで…

きゃー (〃〃△〃〃) ー!!」

「「きゃー (〃〃△〃〃) ー!!!」」

「(怒) 止 (怒) め (怒) ろ (怒) ー!!」

「受け・責めが、ハッキリした!」

「「きゃー (〃〃△〃〃) ー!!」」

「(怒) いい加減にしろ! (怒) 誰か防腐剤、持って来い (怒) !!」

…それは色々、多方面な意味で、女子生徒達には評判がよろしかった。

「それと匙! 反町! 草薙!

お前等、笑い過ぎだ!!」

すばかーん!! x3

「「ギャー… ツス?!」」

》》》》

「そー言えば知ってる?」

「副担任の先生、代わるんだって。」

「あー…」

シリユウの髪の毛と、木場きゆんとのホ○話も一段落した後の、次の会話の御題は、この2学期より新しくなると云う、C組副担任教諭の話。

水沢曰わく、新学期に向けて新しく赴任してきた外国人の教諭らしいが…

「アンタ達、反応薄いわね…」

事前に「その事を」知らされている、シリユウと匙は、素っ気無いリアクション。「ついでに、転入生も来るんだって。」

「[[[[へー]]]]」

「…美少女らしいけど?」

「[[[[な、何だつてー]]]]!!」

「[[[[反応、凄っ?!]]]]」

転入生…と言っても、大した興味を示さないシリユウ達だったが、続く「美少女」というワードに、匙・反町・草薙の3人及び、クラス内の男子生徒が見事に喰らい憑いた。

一方、同じ頃の、1年E組の教室では…

◇小猫side◇

「…さ・て・と、カンちゃんシリユウ先輩から、ある程度は聴きました…が、トーカちゃ

「ちよ…ユキコ、あなたも？」

「私だけ暴露されるのは、不公平なもの。」

勿論 劉兄さんには、後で きちんとOHANASHIするから。」

ゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさ…

「ひやあああああつ?!」

「さあ！正直に全てを話すのです！

さあさあさあさあ!!」

背後に回つての、鷲掴みからの揺さぶりで、トーカちゃんを尋問。

…つて、本当に大きいですね！この娘も!!

ちいといっ！流石は元・きよぬー四天王だけな事は、ありますよ！

…因みに”元”とゆうのは、黒歌姉様が編入した時に、トーカちゃんは四天王の座を

追われたのです。

尤も、朱乃先輩に次いでN.O. 2とされる、〇〇様は きよぬーは きよぬーでも、

実は”虚”乳ですから、実際には未だ、四天王の一角を担っているのですが。

「も…もう らめえ…」

わ…分きやつた！話すかりや、もう離しゆてええ…!!」

うっし！トーカちゃん、堕ちました。

あ、それから男子達?

これは見せ物じゃないですよ?

ガン見しないで、向こう向いて屈んでいなさい。

はい、其処の人!

スマホで撮影しようとしなさい!

トーカちゃんの彼氏の893ドラゴン先輩にバレたら、リアルに埋められますよ?

とりあえず、スマホ没収↓データ削除!

それからギャー君、どん引いたりしない。

「うゝ、じ、実わ…」

》》》

「「「「「……………。」」」」」

トーカちゃんの自供に、何とも言えない複雑な顔を浮かべる私達。

「わ、笑つっちゃ駄目ですわ…小猫さんも由紀子さんも…w」

そー言っゆレイヴェルさんも、全然笑うのを堪えていません。

曰わく、宿に着いて一緒に温泉入って(この時点でギルティです)ご飯食べて…迄は良かったのですが、夜になり、いざ!就寝前の運動!!…なタイミングで、トーカちゃん

に月一の”女の子の日”が発動したそうで：w w w

成る程、シリユー先輩自身が余り語らなかつた理由が、漸く分かりました。

しつかーし、あのオツパイスキーパー先輩が、その程度で完全に歩みを止める訳が在りません!!

ゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさ…

「ひええっ!？」

「さあ、吐きなさい!」

「わ、分かつた!話すから、もう離やしてえ〜!」

それで、ぐったり…なトーカーちゃんが、話した内容は…

「ほ、本当に”最後迄”は、してないよ。」

孜劉さんも、残念な顔はしてたけど、仕方無しって怒つたりしないで納得してくれたし…」

「ほう?最後迄…て事は、途中迄は、何かしら有つたのですね?」

「さあ、吐け!吐くのです!!」

また揺さぶりますよ!？」

「ん…だから、ぱふぱふしたり…孜劉さんの、おち…あれを、お口や胸で、アレしたり…

は、したけど…」

「「ま、っ!」」

「…それで、最後は孜劉さん、私の体を気遣ってくれて、腰やお尻を優しくマッサージしてくれて…」

「「……………」」

うう…自分達で自供させておいてアレですが、凄く負けた気分です。

トーカちゃんの、赤くした頬を押さえながらの惚気話。

聴くんじゃなかったと、少し後悔です。

既に彼氏君と”最後迄”至しているカンちゃんだけは、にこにここと微笑んでいます

…

「特に お尻のマッサージ、凄く、気持ち良かったあ…(はあと)」

「「……………」」

ちい、最悪ですね!

あの露出先輩、単なる おっぱいドラゴンだけでなく、尻龍帝でもありましたか!!

ゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさ…

「ひいえええ〜っ!?!ちよ…小猫ちゃん?」

…とりあえず何だか凄く悔しいので、トーカちゃんには”揺さぶりの刑”続行です!!

まさか、アーサーも この学校にやってくるとは思っていなかったぜ。

「(ボソ…) てつきり、アザゼル先生かと思ってた。」

「(ボソ…) 俺もだよ。」

「こらー! その2人! 何を喋っている?!」

アーサー先生が話して居るだろうが!!」

「す、すいません!」

匙とボソボソ話していると、才橋先生に怒られた。

…って、才橋先生(25: 独身)、目が『はあと』になつてますけど?!」

「…それと もう一人、今日から この教室の、新しい仲間を紹介する。」

男子? ?期待して良いぞ? ?」

「「「」

既にクラス内では、”美少女”編入生の情報は行き渡っており、今度は男子の殆どが、期待の雄叫び。

「さ、入ってきなさい。」

「O u i .」

ガラ…

そして教室に入ってきたのは…

「Bonjour♪」

今日から皆さんと、この教室で学ぶ事になった、ジャンネット・ダルカシス、でーつす

!

ジャンヌ…つて呼んで下さ〜い♪」

すつてーん!! x2

「神崎? 匙?」

教室に入ってきた編入生を見て、思わずコケる俺と匙。

「「「「「おおおおお〜!」

美少女、キターーーー!!「「「「「

「D組のアルジェントさんに続き、我がクラスにも、金髪美少女、キターーーー!」

「「「「「おおおおお〜!」

そんな俺達そつちのけで、騒ぎ立てる男子共。

「あ、神崎君、匙君、お久〜♪」

…つて、何2人してコケてんのお?」

「「お前の せいだよ!!」

そう、教室に入ってきたのは、あのデイオドラ・アスタロトの眷属、騎士のジャンヌ・

ダルクだった…。

「あら？ジャンヌさんて、神崎や匙と知り合いなの？」

俺達のリアクション、そして遣り取りを見て、水沢が早速、この転入生に質問。

「神崎君のオカルト研究部の合宿、それと匙君の生徒会の海外研修を通して知り合いました♪」

すると、このジャンヌ、クラスの皆には上手い事説明。

「あゝ、転入生への質問は、始業式の後にしろ。

とりあえず、ダルカシスの席は、後r…」

ツカツカツカツカ…

恐らくは才橋先生が、「後ろの空いた席」と言おうとした所、その前にジャンヌは俺の席の隣…水沢の前に立ち、

「…ねえ、貴女？私は転入したてで慣れない学校、延いては慣れない国で、結構不安だらけなの。」

だから最初は少しでも、それを紛らわす意味でも、知り合いの近くに席を置くべきでなくて？」

…つて、一般人に魔力催眠術を掛けるな！

「は…はい…そうよね…」

一応、日独のクォーターです。よろしく。」

…ヴァーリ君です。

日独クォーターそういう設定、ですか…。

「ねえユキコ、あの人って…」

「うん…間違い無い…よね?」

ん? トーカちゃんにカンちゃん、もしかしてヴァーリ君と面識が有るんですか?

◇ジャンヌside◇

「ねーねー、ジャンヌさんてさあ…」

……………。

これがジャパンに於ける、転入生の宿命ってヤツかしら?

クラスの皆が、私に あれこれと質問してくる。

特に、男子の質問責めがウザい!

まあ、私がハイパーな美少女なのは自覚してるけど、もう少し遠慮なさいよ!

「恋人とか居るの?」とか、何を期待してるのかは察するけど、私にはディオドラちゃまが居るの!

だから「故郷くにに婚約者が居る」って、ディオドラちゃまのスマホ写真見せたら、集団でorzって退散して行ったわ。

…で、今度は それで、「どんな人どんな人どんな人？」…って、女の子達が群がってきたのだけど。

写真を見せると、「優しそう」とか、まずまずな反応。

「しっかし、ディオドラloveな あんたが、よく人間界こんなところに1人で やって来たな？」
そう言ってるのは神崎。

人間界こっちで赤龍帝様…の名で呼ぶのは流石にマズいだろうから さつきは「君」付けで呼んでみたけど、「クラスメートなんだから、呼び捨てで構わない」って言ってくれたから、こう呼ぶ事にするわ。

ソーナ様の所の兵士君も、そんな感じみたいだし。

…って、仕方無いじゃないのよ！

リアス様達には報告が遅れる程に急な話な訳だけど、実は人間界の新学期に合わせ、各若手悪魔関係者からも誰か1人、駒王町に派遣する事になったのだ。

…で、私だって、ディオドラちやまと離れるなんて有り得ないけど、それは眷属全員が同じな訳で…

くそ…あそこでチョコキを出していたら…

尤も、週末は冥界へ戻る事にしてるし、昨日も「ディオドラちやま分」を、限界迄搾り獲ったしい…♪

「…ってか、やつぱり目、細いよなあ？」

この一見瞑ってる様にしか見えない糸目が、優しく微笑んでる様に錯覚させてるんだろうな。」

……………。

神崎？それ、間違っても本人の前で言っちゃ、駄目だからね。

ディオドラちやまだって頑張ったら、もう少しだけ眼が開けるんだけど（それでも凄く細い）、でも それやると、優しい雰囲気が一変…表現するなら、『策に溺れる策士っぽい、ヘタレで下種な汚物で小物なディオドラちやま』…略して『下種ドラちやま』みたいな顔になっちゃうの！

前に眷属みんなで それで弄ったら、本人も自覚在ったのか、最高に沈んじやって、立ち直らせるのに大変だったんだから！

◇匙 side ◇

「アザゼルはA組、ロスヴァイセさん…先生がD組か…」

ホームルームの後の始業式。

それが終わり、再び教室に戻った俺と神崎、そしてクラスメートの質問責めから解放されたジャンヌとで、式の中で紹介された、新任の先生達の事を話していた。

てつきり俺達のクラスの副担任になると思っていたアザゼル先生は木場のクラス、そ

して、北歐神話所属のロスヴァイセさん…今後はロスヴァイセ先生か…は、アルジェントさんのクラスの副担任に。

「それと、シークヴァイラ様とコリアナちゃんは、大学部に入ってるわよ。」

「だ…大学って、途中で入れるのかよ？」

「さあ？その辺りは、魔王様達が上手く手を回したんじゃないかしら？」

そしてジャンヌが言うには、アガレス家のお姫様とサイラオーグ様の僧侶さんが、大学部に入ったとの事。

「これで駒王学園に、若手悪魔の関係者が最低1人ずつ、揃った事になるな…」

それを聞いて、神崎が呟く。

更には1年の…塔城さん達のクラスに、あの白龍皇、ヴァーリ・ルシファーも入ったそうだし、中等部にはアーサー…先生の妹な、ルフエイさんも編入してるとか。

「あ、それと神崎？私、オカ研に入るから、放課後に案内してよね。」

◇リアス side ◇

「報告を受けたのが、今日の朝早くで驚いたけど…オカルト研究部は、貴方達を歓迎するわ!!」

放課後の部室には、何時ものメンバーに加え、新しい顔ぶれが沢山。

シリユーが連れてきた、デイオドラの騎士。

小猫達が連れてきた白龍皇。

そして駒王学園に新任教諭として配属された、アザゼル、アーサー、ロスヴァイセさん。

アザゼルには昨日も言われたけど、今後はこの3人、少なくとも学内では先生と呼ばないといけないのか…。

ロスヴァイセさんやアーサーは兎も角、アザゼルは…凄く抵抗が有るって云うか、何か嫌。

ん。シリューも、同じ様な事を考えてる顔してるし。

「よろしくお願ひしますう！」

更には高等部の生徒じゃないので部員（仮）として、アーサー先生の妹のルフエイが。今、この場には不在だが、大学部に入ったシークヴァイラとサイラオーグの僧侶は、外様部員として登録する事に。

「外様部員が増えたによ。」

》》》

「ん、今、気付いたんだけど、天界からは、誰も来てないんだにや？」

「……………」

それは、その、天界大嫌いな、ヤク〇、みたいな顔をしている男が拗れるからじゃ

ないの？

「いや、天界からも、1人派遣する事になってるんだが、どうしてもスケジュールが合わないらしくてな…明後日には、学園に到着出来ると思うんだが…」

…らしいわ。

はい、その人、本職さんも土下座して逃げ出しそうな顔しない。

アーシアとギヤスパーが、脅えてるわよ！

「そう云えば、ロスヴァイセさん…先生って、オーデイン様の護衛は どうなったんですか？

もう直ぐ、アジア圏の神話勢と対談が有るんですよね？」

「くび。」

祐斗の質問に、代わりに応えたのはヤ○ザ屋さん…でなくて、シリユー。

「…な、訳無いでしょうが!？」

この学園に赴任が決まった際に、だったら新学期に合わせた方が良い、護衛はバラキエル様だけで充分だ…って、オーデイン様が仰られて…。

で、でも、それは建て前で、あつのスケベ爺、私が居ないのを良い事に、きつとまた おっパブとか、いかがわしい店に繰り出したいからに決まってるわく!!」

「はっはっは!!違いねえや!」

アザゼル!アナタが言うな!!



◇シリユースide◇

「保健室に行こうぜ!!」

「は?」

新学期が始まって4日目。

休み時間に声を掛けてきたのは、草薙と反町。

何でも、新しく配属された保健室の先生とやらが、超絶美人らしい。

コイツ等は、その先生を姿を拝もうと、俺を誘ってきたのだ。

「俺は良ーよ。」

「そう言うなよ?」

「付き合い悪いな!」

俺は別に、そーゆーのには興味無いから(俺にはトーカが居るしw)パスしようと思っただが、

「いや、行こうぜ、神崎。」

そうやってきたのは匙。

スマホを見せながら、

「会長からの指示だ。

お前も一緒に……だつてさ。」

ほわあつつ？

》》》

がやがやがやがやがやがやがやがやがや……

「マジかよ……？」

「此処迄……とわ、ねえ？」

匙に支取先輩から届いた、「保健室に屯している男子生徒を撤退させよー」な指令メー
ル。

何故だか俺も、同行させる様に指示が有つたらしく付き合つてみると、保健室前の廊下には、本当に件の美人な先生とやらを一目拝見したいのか、予想以上な大勢の男子共ヤローで賑わっていた。

「悪羅悪羅！オメー等!! 解散だ、解散!!」

別に具合が悪いって訳でも無いのに、こんなトコで屯ってんじやねー!」

「二二げっ？生徒会の狂犬?!」

何時の頃からか、問題児の間からは「狂犬」の二つ名が定着している匙。

その匙を見て、半数は舌打ちしながら その場を去るが、

「お、俺は本当に、体の調子が悪くて、だな…本当に本当だぞ!!」

「そーだそーだ!」

「生徒会だからって、横暴だぞ!!」

「!!!「そーだそーだ!!」!!!」

やはり居たか、コイツ等…なる3人が先頭に立ち、残った連中が抗戦姿勢を見せる。

「あ、ああつ?!」

「!!!「ひいっ?!」!!!」

しかし、『ヤ』の付く自営業な方々でさえ、アホの振りして逃げてしまいそうな匙大先生メシテの眼の前に、次々と撤退して行く男子生徒。

そして残るは3人だが…

「体の具合が悪い…ねえ?」

「だったら救急車、呼んでやろうか?」

「若しくは…霊柩車か?」

パキパキ…x2…

「!?!?!」

2人掛かりの拳を鳴らしながらの問いに、この残った3人も、顔を青くして退散して行った。

ガラ：

「失礼しまーす。」

「廊下の男子共、蹴散らしときましたー。」

そして支取先輩の指令曰わく、『ついでに新しい先生に挨拶しておきなさい』と有ったので、保健室の扉を開けてみると其処には、

「はい、御苦労様。」

赤龍帝：神崎君と、ソーナ・シトリーさんの兵士：匙君で良かったわよね？

私は…」

「!!?」

白衣を羽織った：衣服の上からでも分かる、リアス部長や朱乃先輩を凌駕する程な立派な御胸様をお持ちな、少しウエーブの入った長い金髪の：正しく噂通りな超絶おつとり系美女が、頭の上には光る輪冠を、背中からは6対12枚の白い翼を出して、俺達に微笑みながら挨拶してきた。

赤と白、再び!

◇シリユースィde◇

3 勢力和平に基づき、天界から代表として駒王学園に派遣されたのが、天界トップ4の一角、熾天使の1人だったのが分かった、その日の放課後の部室…

「おい、リアス・グレモリー、少し尋ねるのだが…」

「……………」。

「神崎孜劉、少し良いか?」

「……………」。

「なあ、アーシア・アルジェント。ここの部分だが…」

「……………」。

「おい、木場祐t

「ちよつとヴァーリ！」

「ん？」

オカ研に入部はしたが、眷属でない故に、悪魔契約稼業にはタツチしていないヴァーリ。

この日も、出された宿題の分からない箇所を、俺や部長に聞いて…いや、白龍皇が真面目に宿題でwww…な点は、今はスルーしてくれ。

兎に角、分からない問題を、俺達に聞いていたのだが、

「此処は学校であり、部室！」

私にしろシリユー達にしろ、貴方の先輩なのよ！

フルネーム呼び捨てでなく、「先輩」なり、「さん」を付けて呼びなさい！

あ、私は”部長”よ！」

…そうなのである。

この男、クラスメートの小猫、ギヤスパ、レイヴェルはそれぞれ、塔城 ヴラディフェニックスと、名字を呼び捨て…これは同級生相手の話だから、別に問題は無いのだが、俺や部長…残る2年3年のメンバーに対しては、フルネーム呼び捨てだったのである。

黒歌に対しては、『黒歌』だ。

新学期初日のミーティングの時は、”そーゆるーキャラだから”で流していたが、此処迄フルネーム呼び捨てが連発すると、流石に一言、物申したくなつたのだろう。

しかも この男、今は俺達に宿題を……しかも その問題の解き方や調べ方でなく、答え その物を教えて貰っているのだ。

「ヴァーリ君、体育会系の上下関係は絶対ですよ。」

「ええ?! 小猫ちゃん、この部って、体育会系だったの?」

ええ?! ギヤスパー、知らなかつたのか?

まさか お前、この部を文系とも思っていたのか?

赤龍帝である この俺が、グレモリー令嬢に有事は兎も角、学校内で頭が上がらないのも、部長と部員、若しくは先輩と後輩な関係なら成る、その鋼鉄の掟故なのだ。

「オカ研に至っては、鋼鉄通り越して、ロンズデーライトの掟です。」

ま、まちですか? 小猫さん?!

「う……しかし……だな……リアス」

「O・D A・M A・R I!!」

「……!!?」

そして何やら言い訳しようとするヴァーリを、夏休みのグレモリー邸にて、部長の父親であるグレモリー卿の発言を封殺していたグレモリー夫人……あの”

マダム・ザ・エクステインクト
 亜麻髪の絶滅淑女”を彷彿させるオーラを放ち、完全に黙らせる。

「し、しかし…」

それでも やや畏縮しながら、言い返そうとするヴァーリだが、

「外なら まだ、何も言わないけど、学校内は示しを付ける意味でも、学年等から成り立つ礼節等には、従って貰うわよ！」

シリユーだって、学校内ではアザゼル…先生の事を、先生呼びしてるんだから!!」

「ううっ!!」

我等がリアス部長は、それを赦さない。

全くご尤も。

アーサーやロスヴァイセさんなら特に、先生呼びでも抵抗は無いが、あの墮天使総督に対しては…いや、別に怨みが有るとか嫌いとかでなく、あの いい加減男に先生を付けて呼ぶのは、何だか凄く嫌なのだ。

因みに部長も同じらしい。

尚、他のオカ研メンバーや生徒会の皆さんは、夏休みから指導して貰っていた事もあり、既に余り抵抗は無いとか。

》》》》

「おい、神崎孜劉。

そんな訳で、俺と勝負しr(すばかーん!) ヤガガ!?

い、いきなり何をするのだ?

リアス・グレム(ズバガアツ!!) よくろー!?

…あの遣り取りの後、何が そんな訳なのか分からないが、宿題を終え、俺に勝負を仕掛けてきたヴァーリのド頭に、部長のハリセンが炸裂。

更には続けざまに顔面、鼻っ柱目掛け、ハリセンによる”牙突”が決まった。

「何度言えば分かるのよ?!」

シリューは先輩、私は部長と呼びなさい!

…ってゆーか、勝負って何なのよ!?

「ふっ…」

白と赤は、常に戦う宿命に在るのさ。

これには学園内に於ける上下関係とやらも、関与出来n

「あ、っ、ああ、んん?!」

「いや…その、す、すいません…」

それは仮にアニメ風に例えるならば、”画面弩upで本職さん顔負けな迫力で睨み付けるリアス部長に、画面左下隅で小さく狼狽えながら謝るヴァーリ”の図。



「ダニクヒメコワイ、ダニクヒメコワイ…ブツブツ…」

結局は部長の迫力に屈し、部室の隅っこで蹲り、ブツブツと何やらボヤき始めたヴァーリ。

「……………。(?) (?) チラツ…」

そして時折、何かを求め訴える様に、俺の顔を見やがる。 ハア…

「…分かったよヴァーリ、闘ってやるよ。」

ガバツ

「ほ、本当か?」

俺の この一言に、刹那で立ち上がると、先程迄の駄肉姫様の圧力に脅えていた様は何処へやら、瞳をキラキラと輝かせた満面の笑みで応えてきた。

勢い良く振られる尻尾が見えるのは、目の錯覚だと思いたい。

「ちよ…シリユ―?」

「貴方も、何を考えてるのよ!?!」

そして当然な如く、それを問い質す部長。

「いや、こうでもしないと、ずっと部室の隅で体育座りして、”どよくん”て空気、撒き散らされても困るでしょう。」

「ハア…わ、分かったわよ、認めるわよ…」

但し…!!」

「?」

俺の意見に、リアス部長は折れ、そして条件付きで、勝負を認めてくれた。

「シリユーvsヴァーリ・対戦ルール」

・神器の使用禁止

・魔力の使用禁止

・小宇宙^{コズモ}の使用禁止

・決着はK.O、ギブアップ、レフェリーストップによる

・殺しダメ!絶対!!

・勝敗問わず、ヴァーリは今後、学園内では先輩や教諭に対して、相応の態度で接する事

・ヴァーリが敗北した場合、(仮)部員や外様部員を含め、部内のヒエラルキーは一番下となる

・その他その他…

》》》

「ふっ…少し不満も有るが、神崎孜劉と闘れるなら、この際 俺は構わない。」

…このバトルマニアめ!!

そう言いながら、部長がパソコンで打ち出した、この契約書か誓約書とでも云うべきか……な用紙に、サインして血判を押す白龍皇。

「どうやらコイツの戦闘狂癖は、ドラゴン云々でなく、”素”な様だ。」

そして如何にハーフとは云え、悪魔的に何事に於いても、契約は絶対な筈。

結果からすれば、部長は上手い事、ヴァーリの部内での態度を改めさせた事になる？

「ごめんねシリユ。」

「何だかんだで、結局は貴方を利用したみたいで……」

「気にする必要無いですよ。」

生意気な後輩に、キツツイ お灸を据えるのも、先輩の仕事ですから。」

少しだけ後ろめたい気持ちな部長に、無問題と応える俺。

そして勝負の為、皆は部室からグラウンドへ場所を移すのだが、何だか この勝負に未

だ不満が有るのか、ボヤいてるのが約2名……否、2匹。

『いや、赤いのとのバトルは、俺を使わんと意味が無いのだが……』

『全くだ。赤と白の戦いに、ドラゴンの力を使わないとは有り得ない。』

「はああ、っ?! 何か、言った?」

『す、すいません、何でも無いです。』

◇小猫side◇

「ほおく? 何だか、面白い事に、なってるな?」

「そうですね。」

グラランドに出た後、一応は認識障害と防護の結界を張っている中、やって来たのはアザゼル先生とアーサー先生。

「先生、何か有ったのですか?」

「いや、会議の内容が余りにも否・建設的で暇だったのではな…」

「ロスヴァイセ先生に全部押し付けて、抜け出してきました。」

「こ、この人達わ…」

「お? 小猫、このキャラメ○コーン、貰って良いか?」

「ちよ…先生?」

更には私の断りも無く、私のおやつ袋から、キャラ○メルコーンを取り出すと、バリ…

袋の“下”の方を開きました。

「これ、ピーナッツが美味しいんだよな〜♪」

「アーサー、お前も食うか?」

「頂きます。」

……………。

先生：いきなりピーナッツは、邪道ですよ？

》》》

ざわざわざわざわざわざわざわ…

結界を張り終えた頃には、更に沢山のギャラリーが。

「ヴァーリー、殺つても良いぞー！」

俺が許す！寧ろ、殺れ!! w w w

「結界を張る気配を感じたので、何事かと思えば…」

生徒会の皆さんに、大学部からシーグヴァイラ様とコリアナさんにルガールさん、

「ヴァーリーさん、頑張れ〜♪」

「我、お菓子、所望…」

中等部からは、ルフエイちゃん、そして何故か、そして何処からか、オーちゃんもやってきました。

はい、オーちゃん、とんがりオーンですよ。

「どつちも頑張るによ〜。」

ミルたんもバイト先から、転移で駆け付けて来ました。

会議中のロスヴァイセ先生と、業務時間が終わると、直ぐに帰宅したガブリエル先生を除いたら、駒王の関係者勢揃いです。

◇木場 side ◇

スウ…

審判役の部長が、右手を上によびます。

「それじゃ、始め…」

バキイツ!!x2

…つて、えええつ!??

部長が手を振り下ろすと同時の、「始め」の言葉を言い終わる前に、神崎君とヴァーリ君の拳が、互いの頬に突き刺さりました!

「ヴァアーリイイイ!、貴っ様ア!

不意打ちとは、何て卑怯な!」

ん…、神崎君?

思いつきりブーメランだからね?それ。

「ちいっ!」

何か突つ込みたい顔をしながら、ミドルキックを放つヴァーリ君。
ん。何となく分かるよ。

ガシツ…

しかし神崎君は、その蹴り足を両腕でキャッチすると、その儘 自らの身体を捻り、一

回転させての…

ドシユツ!

「ぐわっ?!」

ドラゴンスクリュー!

「まだまだあつ!」

ガチイッ!

「うがああつ…?」

更には其処から、スピニング・トウ・ホールドに繋いでいく!

「あく、やあつぱ、魔力とか抜き、単純な肉弾戦の喧嘩じゃ、神崎に分が有るわな。」

「そうなのですか?」

「ああ。」白龍皇 としてのヴァーリの戦闘スタイルは、殴る蹴るを全く使用しない訳

じゃ無いが、魔力弾ぶつ放す戦法がメインだ。」

「成る程…対してシリュー先輩は、ドラゴン波等の所謂「飛び道具」も使いますが、本当に得意なのは、隣接戦闘…」

「そーゆーこつた。」

ま、それでもプロレス技は…なあ? (笑)

アザゼル先生が、バトルの流れを分析しながら苦笑。

「クソー！」

ガン!

ヴァーリ君がフリーになつた足を蹴り出し、スピニングから脱出。

即座に起き上がり距離を開け、再度 戦闘の構えを見せるけど、よく見たら膝が僅かにカクカク言っている。

「一気に決めてやる！」

それを見逃す筈の無い、神崎君。

バサアツ…!!

「「「「「ぎやーっ!」」」」」

「「「「「ぎやあああっ!?!」」」」」

「なっ…?!?!」

「ああああああららら♪」

「おおっ!」

「によによっ!!」

「はあ…」

「「「「「ぎやーっ!」」」」」

「「「「「はわわわわわ…」」」」」

「…赤龍帝、暑いのか？」

ははははは…

神崎君のアクションに、歓声やら悲鳴やら溜め息やら爆笑やら、その他様々なリアクションが巻き起こる中、ダツシユで間合いを詰めると、

ダブルアームスープレックス↓ローリンググレイドル↓み〇る式パイルドライバーに繋げていき、最後は、

「ぐがあああっ…!!!?」

吊り天井固め…ロメロ・スペシャルをガツチリ極めた！

◇小猫side◇

「うがああ…か、神崎孜劉！

参った！俺の、負け…だ!!」

シリユ先輩のプロレス技オンパレードの前に、ギブアップを宣言するヴァーリ君。

「あゝ？誰…だつて？」

「す、すいません、神崎先輩！ギブっす！

…てか、早く解いて下さい！

いや、マジに！痛てててててててて!!」

ヴァーリ君は、ヤク〇ドラゴン先輩に屈しました。

そして…

》》》》

「おいヴァーリ、ウーロン茶買ってきてくれ。」

「あ、ヴァーリ君、私、焼きそばパンとバナナ・オレ。」

「私はマンゴープリンをお願いします。」

「我、はーげん〇つつのまっちゃんや所望。」

ついでに、お金も払って。」

「じゃ…じゃあ、僕は…」

「は、はい、ただいま…」

バトルの際の契約に基づき、ヴァーリ君はオカ研のパ〇リになりました。

あ、パシらせて お金も払わせる鬼畜所業は、オーちゃんだけですよ?